

はぐれ一誠の非日常

ミスター超合金

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝説のドラゴンである赤龍帝をその左手に宿した青年、兵藤一誠。彼は自身を救ってくれた主の為に尽くすが裏切られてしまう。

レイナーレ、リアス・グレモリー。

二度も信ずる者を失った一誠は「禍の団」へと属し、復讐を誓った。隣に立つ「無限」と共に。



オフィス可愛い(この作品はアンチ三大勢力です。苦手な読者様やリアス派な読者様等はブラウザバックを推奨致します)

目次

Red & Infinity.

life. 1 オフィス① | 1

life. 2 蛇 | 5

life. 3 癒し | 9

life. 4 二天龍① | 13

life. 5 二天龍② | 16

life. 6 聖剣 | 20

life. 7 月下迅龍 | 25

life. 8 赤龍帝派 | 32

life. 9 兵藤一誠① | 37

Resonance.

life. 10 リアス・グレモリー① | 41

life. 11 リアス・グレモリー② | 45

life. 12 魔法使い派 | 49

life. 13 準備 | 53

life. 14 三大勢力会談 | 57

life. 15 ソフィア・ヴァリエール | 61

life. 16 圧倒 | 69

life. 17 会談後 | 75

Assault.

life. 18 密約 | 78

life. 19 オフィス② | 81

life. 20 冥界合宿 | 87

life. 21 魔龍聖 | 91

l i f e .	4 5	包圍網	189
l i f e .	4 4	誘拐⑤	185
l i f e .	4 3	誘拐④	179
l i f e .	4 2	誘拐③	174
l i f e .	4 1	誘拐②	170
l i f e .	4 0	ディオドラ・アスタロト	166
l i f e .	3 9	誘拐①	161
l i f e .	3 8	王	157
l i f e .	3 7	失望	154
l i f e .	3 6	結果	151
l i f e .	3 5	エルシャ	148
l i f e .	3 4	暗躍	145
l i f e .	3 3	フリード・セルゼン	142
l i f e .	3 2	匙元士郎①	138
j u g g e r n a u t .			
l i f e .	3 1	変化	135
l i f e .	3 0	黒歌	130
l i f e .	2 9	強襲④	125
l i f e .	2 8	強襲③	121
l i f e .	2 7	塔城小猫③	116
l i f e .	2 6	塔城小猫②	112
l i f e .	2 5	強襲②	106
l i f e .	2 4	強襲①	102
l i f e .	2 3	若手悪魔達	98
l i f e .	2 2	塔城小猫①	95

l i f e.	6 8	不死鳥狩り③	285
l i f e.	6 7	不死鳥狩り②	280
l i f e.	6 6	不死鳥狩り①	276
l i f e.	6 5	標的	273
l i f e.	6 4	リアス・グレモリー④	269
l i f e.	6 3	襲撃予告	265
P h o e n i x.			
l i f e.	6 2	答え合わせ	261
l i f e.	6 1	目的	256
l i f e.	6 0	Regulus Lost.	251
l i f e.	5 9	捕捉	247
l i f e.	5 8	勧誘	244
l i f e.	5 7	リアス・グレモリー③	241
l i f e.	5 6	第二段階	237
l i f e.	5 5	開戦	234
l i f e.	5 4	前哨戦	228
l i f e.	5 3	戦争準備	225
l i f e.	5 2	兵藤一誠②	222
l i f e.	5 1	旧魔王派	219
G e n o c i d e.			
l i f e.	5 0	余波	212
l i f e.	4 9	ツインダイバー	207
l i f e.	4 8	覇龍	202
l i f e.	4 7	変異	197
l i f e.	4 6	カウントダウン	192

life.	91	グレンデル③	392
life.	90	悪意④	387
life.	89	探り合い	382
A l t e r n a t i v e .			
life.	88	悪意③	379
life.	87	予兆	375
life.	86	ルフエイ・ペンドラゴン	371
life.	85	兵藤一誠③	367
life.	84	グレンデル②	360
life.	83	グレンデル①	354
life.	82	悪意②	347
life.	81	悪意①	342
life.	80	リゼヴィム・リヴァン・ルシファー②	337
life.	79	リゼヴィム・リヴァン・ルシファー①	331
life.	78	ヴァレリー・ツエペシュ	327
life.	77	幽世の聖杯	324
L u c i f e r s .			
life.	76	影響	320
life.	75	内通者②	317
life.	74	オーフェイス③	314
life.	73	内通者①	309
life.	72	戦いの降臨	304
life.	71	不死鳥狩り⑥	300
life.	70	不死鳥狩り⑤	296
life.	69	不死鳥狩り④	290

l i f e .	1 1 5	—	525
l i f e .	1 1 4	Red & .	520
l i f e .	1 1 3	リゼヴィム・リヴァン・ルシファア③	513
l i f e .	1 1 2	兄と妹	506
l i f e .	1 1 1	WEAVING A HISTORY	499
l i f e .	1 1 0	施と侵入	493
l i f e .	1 0 9	軌跡の価値は	487
l i f e .	1 0 8	静止した時の中で	482
l i f e .	1 0 7	むかし愛が死んだ町	476
l i f e .	1 0 6	駒王町の奇蹟	469
l i f e .	1 0 5	癒すオフィス	464
l i f e .	1 0 4	罪と罠	459
l i f e .	1 0 3	亡者のイージス	453
l i f e .	1 0 2	デビルと鴨のコインランドリー	447
l i f e .	1 0 1	限りなく災害に近い再会	442
l i f e .	1 0 0	復讐者Xの標的	436
l i f e .	9 9	熱狂の檻	430
Red & .			
l i f e .	9 8	はぐれ一誠	425
l i f e .	9 7	捕獲計画	421
l i f e .	9 6	スイツチ姫	415
l i f e .	9 5	Alternative	410
l i f e .	9 4	三人目の襲撃者	406
l i f e .	9 3	ヴァーリ・ルシファア①	402
l i f e .	9 2	グレンデル④	396

R e : D .

l i f e .

1 1 6

最初の
一歩

Red & Infinity. Life. 1 オーフイス①

今代の赤龍帝、兵藤一誠は^{カオス・ブリゲード}“禍の団”というテロリスト組織に所属している。“SSS級はぐれ悪魔”の肩書きと共にだ。

▼
彼は元を辿れば魔王サーゼクス・ルシファアの実妹、グレモリー家次期当主であるリアス・グレモリーの眷属だった。

極めれば神をも倒せるという神器。十三しか存在しない^{ロンギヌス}神滅具、“^{ブーステッド・ギア}赤龍帝の籠手”の所有者だった一誠は、神器を危険視した墮天使に殺されたところをリアスに拾われた。

一誠にとつては正しく恩人であり、その恩に報いる為には命も差し出そうと密かに決意する程だった。

温厚な大和撫子、姫島朱乃。

皆の妹分的存在である塔城小猫。

金髪イケメンの木場祐斗。

教会を追放されてしまった優しきシスター、アーシア・アルジェント。

そして恩人であり想い人でもあるリアス・グレモリー。

リアスが立ち上げたオカルト研究部の部室で彼等は笑い合っていた。一誠がスケベな発言をして、小猫が殴り、他のメンバーは微笑ましく眺めている。

平和な一時であり何よりも大切な時間であったが、それも長くは続かなかった。

リアスの婚約者であるライザー・フェニックスが突如部室に現れたのだ。

目的は婚約者であるリアスと共に結婚式場を下見する事であり、その為にリアスを誘いに来た。

しかしリアスは「自由な恋愛がしたい」と婚約を拒否。

その場に居合わせたグレイフィアに、下僕同士を戦わせる遊び、

レーティングゲームの勝敗による決着を提案され両名共に承諾した。リアスとライザーによる婚約破談を賭けたゲームが行われたが結果はリアスの敗北。

魔王サーゼクスは一誠とライザーの一騎討ちによる婚約破談を目論んだが一誠の敗北により失敗してしまい婚約は成立してしまった。

晴れてリアスと一緒にになったライザーだが、彼は一誠を恐れた。

一騎討ちはギリギリで勝利出来たが、それは一誠がまだ神器に目覚めてから日が浅かったからだ。一誠が力をつけた場合のことは考えたくもなかった。そこでライザーは一計を案じた。

一誠をはぐれ悪魔に仕立てようとしたのだ。

名門貴族であるフェニックス家は、一部の上層部と面識がある。そのコネを利用して、ライザーは上層部に一誠の殺害を訴えた。そして上層部もまた敗北した一誠に価値無しと判断した。

加えて彼はサーゼクスの手元にある。魔王派と対立する上層部にしてみれば何時自分達に牙を剥くのか、恐怖の対象でしかなかった。あつさり老人達もライザーに賛同した。

兵藤一誠を殺害し、『赤龍帝の籠手』を抜き取る。害悪でしかない計画が産み出された。

上層部は魔王サーゼクスに一誠の殺害を提案した。許可をするのならリアスに再度チャンスを与えるようフェニックス家に申し出る、と脅しをかけたのだ。

上層部は力のある貴族達で構成されており、その影響力は魔王と互角とも言われる。そんな者達の訴えを無下にする事など出来なかった。

もしもそこで一誠を取れば貴族達が反発するのは必定。そのどれもが純血至上主義を掲げるが故に、敵対してしまえば厄介な事になってしまう。

そして婚約破棄の可能性という餌を見せられたサーゼクスは、悩んだ末に力無き赤龍帝よりも貴族達に重きを置いた。リアスの為という大義名分の下に、兵藤一誠を見捨ててしまったのだ。

サーゼクスが頷くやいなや、上層部の老人達は一誠に腕利きの上級

悪魔達を向かわせた。表向きは捕縛であるが、実際は殺害である。一誠は傷付きながらも何とか逃げおおせたが、結果、SSS級はぐれ悪魔というレッテルを貼られてしまった。

そして血塗れで倒れていたところに彼女が現れたのだ。

——Life. 1 オーフイス①——

「禍の団」は、次元の狭間の一角に結界を展開して、そこに基地を構えている。元々は三大勢力戦争時に悪魔陣営が建築した前線基地である。最終後に放置されていたそれを丸ごと転移させたのだ。

前線基地と銘打っているだけあって基地として機能するのに必要不可欠な指令室・倉庫・兵舎等が揃っており、見つかりにくい場所にあるという事もあって中々に重宝されている。

その一室である会議室に、「禍の団」の各派閥の代表が集結していた。派閥代表だけあって全員が一定以上の実力を持つ。

その中でもずば抜けて他よりも抜きん出ている二人。

白龍皇と英雄の青年達は、その人物をただ注意深く見つめていた。組織の長として玉座に座るオーフェイス。その隣には茶髪の青年が立っている。

見覚えがある顔だが、それもその筈。冥界のみならず各陣営で噂になっっているはぐれの赤龍帝。数少ないSSS級はぐれ悪魔という最高ランクのお尋ね者なのだから。

それが何用あって此処に来たのか。やはりオーフェイスが勧誘したのだろうか。それを見極めるまでは不用意に動けない。

強者が先の先まで読んでいる中で、愚かな旧魔王の一人が叫んだ。

「おい、オーフェイス。何故、そいつがいるんだ？」

それに対してのオーフェイスの返答は、いつも通り抑揚の無い淡々とした声であった。視線こそ一誠に向けているが、それでいて全体を悠然と眺めていた。

「……我、赤龍帝を勧誘した。赤龍帝は了承した。だから連れてきた」質問をした男のみならず全員が驚きに染まる中、一誠は遠い目をしていて。その視線の先には何も無いのか。

否、楽しかった仲間達との思い出が浮かんでいる。もうあの頃には

戻れない。

「復讐をしてやる。俺を捨てた奴等全員に、腐りきった冥界の悪魔共に――」

戻るつもりなどない。

「――絶対に復讐してやる」

その呟きは微かにだがしっかりと強者達に聞こえた。無限は何も言わず、白龍皇と英雄は愉快そうに笑みを深めた。

果たして彼はどのような道を歩むのか。それはまだ誰にも解らないのである。

l i f e . 2 蛇

少しばかり時間が流れた。一誠は何処の派閥にも属さずただオーフィスと共に過ごしていた。今まで一人ポツンと玉座に座っていたオーフィスの隣に、彼は立っていた。

蛇を貰うためなのだろう。

周囲からはそう囁かれているが、一誠自身はそのような事など微塵も考えていない。

“蛇”というのは、オーフィスが作り出す魔力の凝縮体の通称である。見た目が蛇を型どっているのでそう呼ばれる。飲んだ者の力を大幅に引き上げる代物であり、実際に旧魔王派のトップたるシャルバ・ベルゼブブやクルゼレイ・アスモデウス、カテレア・レヴィアタ^ン並びにその他主要な幹部達は全員が蛇を飲んでいる。

蛇の力は対象者を一瞬で前魔王級の実力者にまで上昇させる程だが、急激な変化に身体が耐えられず、やがては塵になってしまいう等の副作用も存在する。

一誠は、そういった事実を周囲の会話から盗み聞いて知っていた。そしてそれ故にオーフィスの隣に居座った。

自分を拾ってくれたオーフィスへの恩義もあつたが、何よりも彼は、オーフィスは近い将来に棄てられるだろう、と悟っていたからだ。

ウロボロス・ドラゴン
“無限の龍神”オーフィスの目的は夢幻を倒し静寂を得る事。純粹にそれだけを望んでいるが、如何せん純粹過ぎたのだ。

彼女の無限の力に目を付けた連中が彼女を騙し、強引に組織を立ち上げてお飾りのトップに添えて、挙げ句に蛇を作らせる。彼等は蛇量産機としかオーフィスを見ていない。

役に立たないと見なされれば、彼女は適当な理由を繕って見棄てられるであろう。仲間^に棄てられた過去を持つ一誠としては何よりも耐え難い苦痛だった。

だからこそ、せめて自分だけは“オーフィス”としての彼女と接する。そんな意味を込めてただ隣に居続けた。そんな彼を彼女は特にどうするでもなく、寧ろ隣に居る事が日常になった。

「赤龍帝、今日も特訓する?」

「ああ、頼むぜ」

オーフェイスが一誠の特訓に付き合う。

いつの頃からか、そんな風景が見られる様になった。

一誠は蛇を拒否した。借り物の力で復讐をしてたまるか、と一蹴した。どんな形であれど自分だけの力で冥界に復讐したかった。

最初は一人だけで筋トレやドライグとの会話を行っていてオーフェイスはぼんやりと見学していたが、次第に彼女も特訓に参加する様になった。あくまで自分の力で復讐を成し遂げようとする一誠に興味を覚えたのだ。

そして今日もまた特訓が始まる。

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!』

トレーニング室の中心で、赤い籠手に埋め込まれた翡翠の宝玉が高らかに謳った。籠手から発せられた紅蓮のオーラが一誠の全身を覆い鎧を形成していく。有機的で全体が鋭く赤い龍の翼を与えられた鎧。

赤龍帝ドライグを体現した全身鎧フルアーマーこそが世界を引っくり返すと恐れられた”禁手”、”赤龍帝の鎧”だ。

オーフェイスとの特訓の末に、一誠はこの領域にまで至る事が出来た。今もなお痛い程の龍のオーラを迸らせているが、彼女はやはり無表情を貫いている。

気が遠くなるような、長い長い時間を生きてきた彼女にとって、赤龍帝の鎧は何度も見た事がある唯の鎧に過ぎない。

それがオーフェイスという存在が規格外であるという事実を改めて再確認させたが、同時に一誠を武者震いさせた。無限との訓練は生半可な物では無く常人では数秒も持たないだろう。それを死にかけながらも乗り越えてきたのは彼の信念の賜物である。

「……来い、赤龍帝」

「言われなくても!!」

一誠は全力で地面を蹴り、一気にオーフェイスの懐に潜り込んだ。そ

のまま乱打を加えていくが上からの重圧に気付き即座に後ろに翔ぶ。直後、オーフィスが轟音と共に拳をコンクリート床にめり込ませた。

かけ声は外見相応に可愛らしいが、その一撃のどれもが魔王クラス。彼女は精一杯力を抜いたつもりだが一誠にとっては致命傷になってしまう威力がある。最初から本気を出すしか生きる術は無い。

「これでも喰らえ!!」

彼の膝蹴りがオーフィスの肩に当たり、ほんの何秒間か宙に放り出される。続けて攻撃を加えんと彼女が落下するであろう地点に駆けるが直後、鎧越しに痛みと衝撃が走った。

オーフィスが空中で体勢を建て直し、そのまま彼の無防備な背中に打撃を加えたのだ。赤龍帝の鎧があるといえ無限の一撃を喰らって耐えられるほど彼は強くない。

コンクリート片と煙が立ち込める中で、全身の感覚を失った一誠は鎧が解除されていく様を内部から見ていた。

「……次は、五分持たせてやるからな」

悔し涙を浮かべながら呟く一誠をオーフィスは少し驚いた表情で見ていた。無限の体現者であるオーフィスと戦って、最終的に敗けはしたものの彼は一分間立派に戦った。それがどれ程の偉業か。

「……やはり、赤龍帝は面白い」

オーフィスは、以前よりも更に一誠に強い興味を覚えた。同時にそれ以外の存在にはより一層興味を失ってしまったが。

騒がしい足音を立てながらトレーニング室にやって来た男、シャルバもその一人だ。

「オーフィス、こんなところにいたのか。そんな下劣なトカゲなど相手にして変な奴だ。まあいい、さっさと蛇をよこせ」

遠慮と無縁の貴族社会で半生を生きてきた彼にとつて蛇は与えられて当然の、望めば自動販売機のように出されるべき物だと思っっている。

だが不運な事に彼はタイミングが悪すぎた。

感動の余韻を邪魔されたオーフィスしかり。蛇という単語に反応した一誠しかり。たかが赤龍帝を宿しているだけの転生悪魔と内心

で見下していた彼は、その時も蔑む様な眼を彼に向けてしまった。それがスイツチとなる事も知らず。

「……………おい、お前。シャルバと言ったか」

「なんだ、汚いトカゲ風情が。真なる魔王である私に何か用でもあるのか？」

不機嫌そうな顔でそう告げたシャルバは、胴体に大穴を空けられて、続けて頭を消し飛ばされて死んだ。一誠が右腕で強引に胴体を貫き、そしてオーフィスが消した。

彼女は瞑目した。自分がシャルバの頭部を消し飛ばした理由は戦鬪の余韻を邪魔されたからだ。

しかし彼が攻撃した理由は何だろう。

蛇、という言葉に反応したのか。それとも他にあるのか。例えオーフィスであろうと他人の心までは解らない。

どちらにしても先ずは体力を使いきって倒れ付した一誠を治療しなければならぬ。

オーフィスは黙々と彼の治療を開始した。

l i f e . 3 癒し

白タイルが周囲に敷き詰められた西洋式の白い噴水。公園のほぼ中心に建てられたそれは目立ちやすい色も相まって遠くからでも解りやすく、また公園というデートに似合う場所柄からカップルの待ち合わせに良く使われている。

しかし、そんな人々の癒しに一役を買っている噴水がまさか殺人の現場になると誰が予想出来たであろうか。その少女は光の槍を片手に、黒い翼をはためかせている。どう見ても人間では無い。

彼女は、“墮天使”と呼ばれる人外だ。神に逆らったから、邪な思いを抱いたから。そうした理由で天界から墮ちた者達は純白に輝いていた翼も卑しい黒に染まり、神の加護を失う。

墮天使が集う組織、“神の子を見張る者”に所属している彼等の主な任務は神器所有者の殺害、並びに保護だ。

聖書の神が作り上げた神器は人間が扱うには過ぎた存在。何かの弾みで暴走し人間界に被害が及ぶ可能性もある。その為に墮天使達は神器を宿した人間を殺害して回っている。

因みに保護と描きはしたが、保護されるのは強力な神器を宿している者のみであり、殆どは戦力にならないとして殺されるのが実態だ。

そして今、レイナーレは任務を果たした。即ち神器所有者の殺害。彼女の目前に倒れているのは槍で腹を貫かれた少年。数日前に偽名を名乗るレイナーレに告白され、そして初デートで殺された。

神器を宿してしまったという理由だけで彼の未来は閉ざされてしまったかに見えた。

レイナーレが居なくなっただ後で紅の魔法陣が鮮血で染められたタイルに描かれる。

浮かび上がるのは魔法陣と同じ色の髪を持つ少女、リアス・グレモリーだ。

しかし、彼女もまた人間では無い。墮天使と長年に渡り敵対している種族の一角。俗に“悪魔”と呼ばれる闇の者達である。彼女は血にまみれた少年を一瞥した。

「面白いことになっているわね。そう、あなたが……」

興味ありげな笑いを彼女は浮かべる。そして懐から紅い駒を取り出した。

チエスで使われる兵士^{ポーン}の駒。ありふれた品である筈のそれは異様な輝きを放っている。一定感覚で、ドクンと脈を打っているその駒はまるで心臓の様に思えた。

それを少年の胸に押し当てると駒は溶け込んで消えていく。

「良いわ、兵藤一誠。私の眷属となって生きなさい……」

身体に入れられた駒が少年本来の心臓を動かしていく。再び全身を血液が駆け巡り同時に傷口を治す。

彼女が入れた駒、^{イヴァイル・ピース}“悪魔の駒”に備えられた能力である。死者に今一度魂を与え、その時の傷を治療したのだ。少年の顔色が土色から赤み掛かったピンクへと回復した。

リアスは彼が息を吹き返した事を確認すると、そっと抱き上げた。その一部始終を見ていた兵藤一誠は、その少年が他ならぬ自分自身である事を理解させられていた。今自分が見ているのは、元主君であるリアス・グレモリーとの出会い。裏の世界に足を踏み込んだ瞬間だ。

「俺は、何で……」

自分はオーフィスと戦っていた筈だ。周りは戦闘の衝撃で荒れ果ててしまったトレーニング室だ。

なのに何故、目を覚ませば、公園にいるのだろうか。全くもって理解が出来ない。そこにやって来た、死んだ筈のレイナーレと兵藤^{自分}一誠。

しかし彼らは一誠に気付く事も無く、見る事すらせずに噴水の前で話し合い、そして自分は殺された。会話の内容も同じ。

他人の幻術かと一瞬考えたが、レイナーレとの会話は二人だけが知る秘密だ。第三者が知っている訳が無い。

そして魔法陣からリアスが現れて、一誠は言葉を失ってしまった。

自分を棄てたりリアスが、かつての想い人であったリアスが。以前と寸分変わらない、優しい笑みで自分を拾った。

「……………部長！ 聞こえますか、部長！！ 部長ツツ！！」

一誠は彼女に駆け寄った。しかし触れようとした瞬間、手がすり抜けてしまう。いくら腕を伸ばしても虚空を揺れるばかりで。それでも叫びながら彼は触れようとした。

「部長、見えてないんですか！！」

あの時から冷静沈着を装っていた一誠は、初めてこんなにも取り乱した。普段の彼からは考えられない程に、だ。それだけ今の状態が異常だった。

リアスもまた一誠を見ず、そのまま魔法陣で転移した。自分を抱き抱えていたことから、恐らくは一誠の家に運ぶのだろう。

「部長……………」

腕ばかりで無く、声も虚空に呑み込まれる。そして一誠は地面を殴った。

「——棄てた筈だろうがッ！！ 今更こんな物は見る必要無いんだよ！！」

なのに、俺は…………ツ！！」

ブツン。そんな音が頭の中で響いて、一誠は崩れ落ちた。

——l i f e . 3 癒し——

ゆつくりと光が入ってくる。最初に視界に映ったのは、黒髪の少女だ。

「……………オーフィス」

確認するように、一誠は言った。オーフィスは無表情のまま言葉を返す。

「……………赤龍帝、目が覚めた？」

「オーフィス、オーフィスオーフィス……………」

未だ力が入らない腕で、彼女の頭を撫でる。彼女の綺麗な黒髪が右手から流れていく。その直後、一誠は自分がオーフィスの膝に頭を預けている事に気付いた。

「ごめん、直ぐに退くよ」

「……………もう、傷は良い？」

オーフィスが治療してくれたのだろう、特訓で負ったダメージは既に無くなっていた。だが失った体力までは取り戻せない様だ。満足

に動こうと思えば、まだ時間が必要になる。

「ありがとうな、オーフェイス」

彼はオーフェイスにすがり付いた。彼女の名を呼び続けながら、彼は泣いた。今度は一誠の腕も声も呑み込まれる事は無かった。

オーフェイスは、やはり何も言わなかった。ただ、黙って一誠の頭を撫でた。

暫く泣き続けた一誠は、感情を吐き出した事により普段の冷静さを取り戻していた。そして酷く赤面した。オフィスが幾ら強いと言えど、今の外観は紛れもない幼女。青年たる自分が泣きつくのは恥ずかしくて仕方無い。

そして、同時に彼女への想いがより深まった。全てを失った彼が今現在頼れるのはオフィスのみ。拾われた恩義故に彼女と共に過ごしていたが、実際は依存に近い。

彼がオフィスの隣に居る理由は、蛇の件以上に、彼女に棄てられたくないという想いが大きかった。

感情というものが存在しないオフィスは、廃棄という言葉を、意味は知っていても実際に行わない。それはオフィスをある程度理解していれば簡単に解る。一誠もそれは何となく解っていたが、それでも棄てられる事を恐れていた。

レイナーレ、リアス。二つの前例があるのだから一誠の内面は酷く臆病になっていたのだ。

そして翌日、一誠はオフィスと一緒に食堂に居た。

一誠に割り当てられた部屋、或いは彼女に与えられた王の間。トレーニング室。大抵この三つの内、何れか一つの部屋で二人は一日を過ごしている。たまに彼が食堂に行こうものなら、オフィスは一誠の膝上に座り、彼の食事を分けてもらっている。

彼女の内心は定かでは無いが、少なくとも一誠の依存心はあの夢を見た時からずっと強くなっていた。

「オフィス、今日は神器に潜り込んでドライグと会話するんだ。歴代所有者を解放しなければならぬからさ」

「……なら、我也行く。無限たる我にとって、神器に潜り込む事は造作も無い」

「そうか。なら、頼むよ」

食堂で展開される会話に周囲、特にオフィスを利用せんと企む旧魔王派は眉をひそめたが何も言えない。相手は無限の名を冠する

ドラゴン
龍神、そして赤龍帝の現所有者。

オーフィスは言わずもがな、彼女の下で急成長を遂げている一誠も今や並の上級悪魔を越える實力を持つに至った。そんな者達を相手に自分が勝てるかと傲る程、旧魔王は馬鹿では無い。

結果的に彼等は黙って見ているしか出来なかった。トップの一人を消し飛ばされた今となっては尚更である。

しかしそれは弱者の話であり強者は違った。赤龍帝と対になる“アルビオン”
白”を宿す男、ヴァーリもその一人だ。

諸事情により墮天使組織にも属している彼は生粋の戦闘狂でもある。その強さは折り紙つき。

そしてより激しい戦闘を求めて、ヴァーリは禍の団に寝返った。カオス・ブリゲード
今は組織の情報を流すスパイとして活動している。

そんな彼にとって、赤を宿す一誠が所属したのは何より嬉しい事だった。

古の時代、大喧嘩を繰り広げたせいで聖書の神に封印されてしまった赤い龍と白い龍の二体は、神器になってからも争い続けている。互いに宿主を代理として競うのだ。長年に渡る殺し合いは現代まで持ち越され、そしてヴァーリと一誠に宿った。

ある意味似た者同士であり、そして反対でもある事を知ったヴァーリは、それでこそ禍の団に入った意味があると笑った。カオス・ブリゲード

ヴァーリは悪魔と人間のハーフであり、先代ルシファアの曾孫に該当する。“白龍皇の光翼”の現所有者だがそれだけに留まらず、ルシファアから受け継いだ莫大な魔力や神器を使いこなす才能等、戦闘の天才と称されるに相応しい力を誇っている。

しかしそれが災いして両親に棄てられ、死にかかっていたところをアザゼルに拾われたという過去を持つ。

戦闘を求めるのは自身の存在価値を示す為であり、一誠に興味を持つのは復讐せんとする姿を自分に重ねたからである。

—— l i f e . 4 二天龍① ——

そんな彼はここ数日、ずっと一誠を観察していた。一誠の強さを見極めるといのが目的だ。

オーフィスとの特訓を行っている一誠の成長率はハッキリ言って異常である。バランスブレイカー 禁 手に至ったばかりと思えない力を持つ彼は、ヴァーリにとって極上の獲物だった。

「やあ、兵藤一誠。少し話せるか？」

「あんだ、会議室に居たな。名前は……？」

「ヴァーリ・ルシファーだ。宜しく頼むよ、今代の赤龍帝」

食堂で昼飯を食べている二人に臆する事無く、彼は声をかけた。警戒の色を見せる一誠にヴァーリは驚き、そしてほくそ笑む。彼が前よりも更に強くなっていたからだ。戦闘狂であるヴァーリにとって、敵は強いほど良い。

「そんなに警戒するな……と言っても無駄か。ならば早速だが本題に入ろうか」

「さっさとしてくれ。俺はオーフィスと飯を食っているんだ」

一拍、間を空けたヴァーリは強い口調で告げた。

「——俺と戦え、兵藤一誠」

空気が震え、周りの野次馬は我先に逃げ出す。赤と白の戦いに巻き込まれてしまえば、五体満足で生きれる保障等存在しない。最悪の場合、戦いの余波で消滅してしまうかもしれない。

全員が退避する中で、一誠はじつとヴァーリを見据えていた。

「……本気か？」

「ああ、そうだよ。俺はお前と戦いたい」

非日常には慣れたつもりだが、まだまだ甘かったらしい。まさか、この場で挑戦状を叩き込まれるとは想像すらしなかった。

しかし、これは好機。

己がどこまで強くなったかを確かめる良い機会だ。それに、オーフィスの前で逃げる事など出来ない。

「——良いぜ。思う存分、戦おうか」

一誠の返事は至極短いものであったが、ヴァーリという戦闘狂を満足させるには充分だった。

一誠 赤龍帝と白龍皇、因縁の対決が勃発しようとしていた。

トレーニング室に防御結界を展開して、そこで一誠とヴァーリは対峙していた。

無限たるオーフィスが張った結界は、相当な事でも無い限り壊れることなど有り得ない。故に二人は全力で戦えるのだ。

機械的な翼を展開しながら、ヴァーリは一誠に告げた。

「俺が自己紹介した時に気付いただろうが、俺はルシファアの血を宿す者だ。旧魔王の孫である父と人間の母との間に生まれた混血児だからこそ、^{アルビオン}白い龍を宿したのさ」

「俺とは正反対だな。俺は両親共に普通の人間だよ」

「その意味では確かに反対だな」

一誠が籠手を装着する。そして宝玉が、二天龍が叫んだ。

「——始めようか」

『Welsh Dragon Balance Breaker』

『Vanishing Dragon Balance Breaker!!!!!!』

音声の直後、二人を龍のオーラが包み込む。そして、一誠とヴァーリは鮮やかな光を放つ全身^{プレート・アーマー}鎧を着込んでいた。

天を名乗るだけの力を持つ禁手^{バランスブレイカー}化が、圧倒的な威圧感をもって周囲全てを凹ませていく。トレーニング室のみならず、基地全体を二人の闘志が覆い尽くしていた。

他の団員達は蹲ったり気を失っている者もいるが、原因である一誠達は弱者の事情など知ったことかと言わんばかりにますますオーラを解放していった。バチバチと辺りに互いの闘志がぶつかり合って生まれたプラズマが走る。

「……心地好い龍の波動だ。二天を宿すだけあつて戦闘を好むようだな」

「そう言うヴァーリこそ、莫大な白いオーラを出しやがって。喜んでるのが解るぞ」

一瞬の沈黙。そして仕掛ける。コンクリート床が軋み、ヴァーリが

一誠の領域に踏み込んだ。

インパクト
衝撃。

次いで両者の絶叫が木霊する。二人の顔に相手の打撃痕が刻まれ、そして殴り合った。血を噴きながら、血を流しながら。それでも彼等は嬉々として向かっていった。

「やるな、兵藤一誠!! 至ったばかりでそこまでやれるのか!!!」

「お前こそ! 想像以上に強いな!!」

一誠とヴァーリが拳をぶつけ合い、前に増して重圧を放出する。翡翠に染まりし宝玉と蒼に染まりし光翼が、自らの意地と主の歓喜を代弁するかのよう倍加と半減の絶叫を重ねる。

既に最上級悪魔同士の戦いにも並んでいるが、龍達にとっては開幕の合図に過ぎない。その身を焦がすレッドゾーンは未だ先だ。ヴァーリも一誠も、今だけは過去を忘れて戦闘の快楽に溺れた。

何処までも泥臭い、不器用な戦い。しかしそれこそが過去数百にもなる歴代所有者達、何よりも赤龍帝ドライグと白龍皇アルピオンの本懐でもあった。

力の塊と称された龍だけに解る、他の種族にはどうあっても理解されたくない代物だ。

ヴァーリが神器の能力である“半減”を発動するが、一誠も即座に“倍加”を使う。相手の力を半分にし、己の糧とする純白。自身の力を倍にする紅蓮。終わりなど見える筈が無い。

笑いながら二人は尚も殴り続ける。

互いの顔を、腹を。

腕で、脚で。

瞬き一つという、ほんの僅かな時間に二人の鎧に痕が描かれている。

二人は限界だった。意地と根性だけで此処まで意識を保ってきたが、もうとうに限界は越えている。

これ以上戦えば死ぬ。しかし止まらない止められない。

ブレーキが壊れた車のよう、一誠とヴァーリは坂道を転がり続ける。最早ブレーキという概念が存在しない。

否、してたまるか。

一誠が殴ればヴァーリも殴る。ヴァーリが蹴りを入れれば返しに一誠も蹴る。理由は無く、単純にやられたからやるだけだ。

さて、オーフィスはそんな狂気の押収をやや焦りながら眺めていた。

彼女が全力で張った結界が歪む程の威力。オーフィス以外ならとうに消滅しているだろう。それだけ馬鹿げた戦いなのだ。現に建物が耐えきれず、メキメキと音を立て始めている。このままでは潰れてしまう。

「……これ以上は、流石に不味い」

是非も無い。中断させるのは惜しいが止めざるを得まい、とオーフィスは考えた。

続けられては基地が崩壊するし、何より彼等の内どちらかが死んでしまう。この戦いで負ければ敗者は死を望む。殺すには忍びない。しかしやめれば相手の想いを踏みにじる事になる。

ならば、ここで割って入ろう。

そう彼女が決意し、しかし動こうとする直前、一誠とヴァーリの間に槍が突き刺さった。槍から聖なる波動を感じ、咄嗟に後ろに退く。

「二人とも戦いを止めろ」

現れたのは制服の上から漢服を纏った青年だ。槍を掴み取ると肩に当てる。何の前触れもなく突如現れた青年をヴァーリが睨んだ。

「何の用件だ。——曹操」

曹操と呼ばれた青年は殺気を受けながらも余裕の笑みを浮かべる。

「二天龍の争いをこれ以上続けさせる訳にいかない。基地が崩壊する」

言われて、彼らはトレーニング室が崩れ落ちそうな事実始めて気付いた。戦いに夢中になって、周りの事を忘れていたのである。そんな二人を尻目に曹操は苦笑した。

「今日はもう終われ。特に赤龍帝、姫君が怒っているが構わないのか？」

「あ……………」

無言で怒気を振り撒くオーフィスに、一誠は慌てて鎧を解除した。

続行は無理と判断したヴァーリも渋々ながら禁手化である「白龍皇の鎧」を解いた。

「なあ、ヴァーリ。俺らって似た者同士なのかもな」

部屋を出る直前に一誠が呟く。暫くキョトンとしていたヴァーリだが、不意に笑いだした。

「……そうかもな。君の言う通り、似ているかもしれない。特に意地の為に戦う辺り」

「負けたくなかったんだよ。だから無我夢中だった」

龍だけに解る代物。他種族にはどうあつても理解出来ない、されない代物。

それは何か？

後にこの質問を受けた時、オーフィスは語った。

絶対の力を持つドラゴンだけが許される「誇り」^{プライド}である、と。

—— l i f e . 5 二天龍② ——

「……赤龍帝、これが怒るといふもの?」

「多分そうだよ。オーフィスが思っているので間違いない」

先程の戦闘の余波を受けて、申し訳程度に基地に備えられている治療室は酷く脆くなっていた。二人の実力は既に最上級にも片足を突っ込んでいて、それを『倍加』と『半減』で上昇させまくったのだから当然の結果と言えよう。

オーフィスの結界があつたからこそ、これだけの被害だけで済んだが一歩間違えれば基地は崩壊、団員は次元の狭間に放り出されていた事だろう。

その元凶の一人である一誠は、オーフィスの前で正座していた。骨折やら内臓破裂やらは治して貰ったが、オーフィスから感じる冷たい視線は変わらない。コンクリートで固められた床が膝を攻撃して痛く、しかし彼女に泣き言が通じる筈も無いのでひたすら黙っていた。

「……赤龍帝、我が怒っている理由、解る?」

全くの無表情に若干怯えながら、一誠は口を開く。

「えーと、基地を壊しかけたから?」

「……違う」

オーフィスに否定されながら、彼の脳内では様々な事象が巡っていた。

ヴァーリとの出会いから戦闘に至るまでの会話。自分がどのような戦闘をしたのか。今日の飯にまで一誠は思考を遡らせたがどうにも解らない。

「一体、何だろう……」

この状況、オーフィスに睨まれている今の時間を少し楽しんでいる一誠は、それでも真剣に考えている。だが所詮は元高校生の元一般人だ。彼女の指導で上級悪魔程度に強くなったが頭の方はそうでもない。

そんな一誠が考え付くのは俗な事、即ち漫画やライトノベルで有りがちな展開しか無い訳で。

「俺がオフィスをほったらかして、戦いに走ったから？」

「……恐らく、正解」

そして大体は当たるのだ。

顔に驚愕を浮かべる一誠を他所に、オフィスは淡々と語っている。

「……我、笑いながら赤龍帝と白龍皇がトレーニング室に入っていた時、何故か胸が痛くなった」

彼女は何でもなないように話しているが、周囲からしてみれば質の悪い冗談にしか思えない。

ウロボロス・ドラゴン
無限の龍神であるオフィスが僅かながら感情を宿しつつあるのだ。都合の良いように利用しようと目論んでいた連中はさぞ頭を痛めるだろう。

「オフィス、もしかして感情を持ったのか？」

「……理由も原因も不明。永久に近い時間を生きてきた我にとって、こんな事は始めて」

「そうか。俺が……」

「……これは何？」

ガジカジと頭を掻く。嬉しい事にならないが切っ掛けが他ならぬ自分自身であったことに驚いた。そしてオフィスの抱いている想いにも予想がつく。

だが説明しようとする時に限って邪魔は入るのだ。

「やあ、兵藤一誠。怪我はどうかかな？」

——l i f e . 6 聖剣——

「ヴァーリか」

ガチャリと扉が開き、ヴァーリが顔を覗かせた。彼も見たところ負ったダメージは治療してもらったようだ。何処か動きがぎこちないのでまだ本領は発揮出来ないだろうが。

立ち上がって茶でも出そうとした一誠だが、ヴァーリは手を横に振った。

「茶は要らないさ。今回は伝えたい事があってね」

「何だよ、伝えたい事って」

「その前に、少し話をしようか。君はエクスカリバーを知っているか？」

ああ、と一誠は肯定した。エクスカリバーはゲームに登場する最強の聖剣。彼ぐらいの年頃なら誰でも知っている有名な剣だ。ヴァーリは頷きながら話を続けた。

「大昔の戦争。三大勢力戦争でエクスカリバーは折れてしまった。その破片を教会が集め新たな剣として錬金した。今は合計七本に別れている。カトリック、プロテスタント、正教会が各二本を保有し、残り一本は行方不明だ」

最強クラスの聖剣と名を馳せたエクスカリバーは、かつての三大勢力戦争時にへし折れた。戦力低下を恐れた天界は下部組織である教会に命じて、破片を核にして新しい聖剣に造り直した。

其々がエクスカリバーの能力を受け継いでおり、別れてしまったとは言えその特筆すべき力を持って、今日に至るまでその名を知られている。

その聖剣エクスカリバーがどうしたのか。

一誠は、早く続きを聞かせろと促した。

「先日、教会に保管されていたエクスカリバー三本が強奪された。御丁寧に各宗派から一本ずつだ」

「不用心だな、おい。それを俺に言いに来たって事は、ヴァーリと何か関係があるんだろう？」

「ああ、そうだ。奪ったとされる犯人は墮天使組織“神の子を見張る者”の幹部、コカビエルだよ」

コカビエル。

旧約聖書偽典『エノク書1』にその名を刻まれる墮天使。星と星座の運行を司る天使であったが、人間の女性に天体の兆を教えたが為に墮天。同じく聖書に名前を記されるアザゼルやシエムハザと共に墮天使組織“神の子を見張る者”を結成し、神に反旗を翻した男だ。

己の実力を現す黒翼は十を数え、三大勢力戦争では開戦から休戦まで絶えず前線で戦い続け生き残った猛者であり、数々の武功をあげたという。

そんな男が聖剣エクスカリバーを奪い何をするのか。一誠は納得が出来なかった。

「ヴァーリが出撃するのか」

「俺は『神の子を見張る者』に潜り込んでいるからな。立場上、こんな任務も転がってくるのさ。そして、コカビエルの目的は三大勢力戦争を再び起こす事だ。エクスカリバーを盗んだのは天界を焼き付けたかったからだろうが、ミカエルは挑発に乗らなかった。そして次の標的にしたのが――」

そこまで言って、ヴァーリは敢えて区切りをつけた。何処か息が荒く、躊躇っている様に見えた。彼は大きく息を吸うと、口を開いた。

「――駒王学園。現魔王の妹、リアス・グレモリーとソーナ・シトリーが通う学舎だ」

一誠はガツンと頭を殴られたような衝撃を感じた。駒王学園やリアスの名前が出たからだ。本人でも解っていないが、兎に角頭が痛んだのだ。心配そうな顔をするオーフィスに一誠は笑いかける。

「大丈夫だ。続けてくれ、ヴァーリ」

「……コカビエルは魔王の妹を殺せば戦争が勃発すると考えたらしい。だからエクスカリバーを持って、リアス・グレモリーが領土である駒王へと逃亡したのさ。アザゼルからコカビエル回収を命じられてね、今から……」

「平気か？」

「大した事無い」

彼はそれだけ告げて部屋を出ていった。後に残された一誠は悩ましげな顔をしている。

頭痛はすっかり治まったが、今も視界が揺れているのだ。治療室に据え付けられた薬棚や洗面所も上下左右に揺れて輪郭を保たない。

ただ辺りに漂う薬品とリネンとが混ざりあった特有の匂い、そして不安げなオーフィスの顔だけが自分が未だこの場所に居る事を教えていた。

「すまない、オーフィス。暫く寝かせてくれ」

「……了解」

糸が斬れた操り人形のように彼はベッドに倒れ伏し、そのまま寝息を立て始めた。

そんな一誠とは対照的に、ヴァーリは「白龍皇の鎧」を纏い空を掛けていた。一直線に駒王に向かう彼は白い彗星に見えた。一日が経つのは早く、気付けば時刻は夜に差し掛かっていた。

戦いのカウントダウンは既に始まっていた。

聖と魔の融合。

目の前で起きたイレギュラーを、コカビエルは欠伸をしながら見ていた。どうやら金髪の少年は禁^{バランスブレイカー}手に至ったようだ。それもとびきり凶悪な聖魔融合の剣。

この時代だから出来たのか、とコカビエルは頭の隅で考えた。尤も、彼にとつては些細な事だ。

敵は、駒王学園を根城にするリアス・グレモリー並びにその眷属。リアスの婿であるライザー・フェニックス。教会から派遣された戦士、ゼノヴィア。

其々が滅び・不死・聖剣デュランダルという厄介極まりない特性或いは聖剣を所有している。

そこにリアスの騎士である木場祐斗が至って見せた^{ソード・オブ・ビストレイヤ}“双覇の聖魔剣”、同じく僧侶のアーシア・アルジエントが所有する^{トワイライト・ヒーリング}“聖母の微笑”、更にリアスと共に駒王町を任されているというソーナ・シトリーの存在も考慮すれば、中々に強力なチームになる。

並の墮天使なら圧倒。組織幹部にして上級墮天使たるコカビエルでも、侮れば痛い目を見る。

数々の修羅場を潜り抜けてきた彼は、決して慢心や油断をしない。先だつてケルベロスや元教会戦士のフリード・セルゼンをけしかけたが、それも敵の力を測る為だ。

ケルベロスは消滅し、フリードは木場に敗北し気絶しているがそれも構わない。そもそも彼等は捨て駒に過ぎず、要らなくなれば捨てるしか無いのだから。

その意味では、エクスカリバーの統合を目論んでいたバルパー・ガレイとは馬が合った。だから仲間引き込んだのだが、そのバルパーすらも必要とあれば殺す。彼にとつては当然の話だった。

「コカビエル！ 貴方の企みもそこまでよ!!」

魔王サーゼクスの実妹、リアスが指を指す。コカビエルは、兄と同じ紅を忌々しく感じた。古の三大勢力戦争時、コカビエルは一度サー

ゼクスに敗北していた。その時は何とか逃げおおせたが、代償として部下は全滅した。自分を逃がして死んだのだ。

彼が戦争続行を願ったのは部下の敵討ちでもあった。柄ではないと自身は決して認めなかったが。

しかし、あれからかなりの年月が経過した今でもその悔しさが胸中にあるのも事実だ。

リアス・グレモリー。矛は彼女に向けられた。

「……やるじゃないか、グレモリー。それにフェニックス。サーゼクスが来るまでの余興にはなるだろうな！」

「コカビエル……！ 聖書に名前を刻んだ程の男、相手にとって不足は無いわ！」

「戦争を経験していないガキ共が!! 俺にとつては不足だ!!」

苛立ちを示すかのように暴風が吹き荒れる。十枚の黒翼で生み出された暴風は容赦なくリアス達を襲う。砂混じりの風が皆の顔に直撃した。

そして怯んだ隙に、コカビエルはライザーに急接近したのだ。

「何だ、見えなかった!？」

「――先ずはお前からだ、フェニックス!!」

骨の軋む音が響く。目視不可能の速度で叩き込まれた蹴りは、不死を持つライザーにもダメージを与えるには充分過ぎた。錐揉み回転しながら吹き飛んでいくライザー。

咄嗟に炎を拵げ体勢を整えたが、様子を確認しようと開けた視界を、空かさず放たれた第二撃が覆う。

速度に比例して破壊力は上昇する。それが音速であればどうなるか。それは地面にライザーが転がっている時点で解るだろう。再生能力に命を救われたが、心は折れたかもしれない。

しかし、それは自業自得。上層部からの評価を得る為に強引に参加したライザーが幾ら悔いても遅い。

そんな彼の無様な姿に、コカビエルはもう特に興味を示すことも無かった。フェニックスの名を冠するというから期待していればこの程度である。落胆の色を隠せなかった。

ゆつくりとコカビエルはグラウンドを見渡した。どいつもこいつも弱すぎる。戦えば十秒も持たないだろう。実に退屈だ。一方的な戦いは好まない。

「エクスカリバー統合時に描いた崩壊魔法陣を解くには、俺を倒すしか無いというのに……弱い、弱すぎるぞー！ 余りにつまらんなあ!!」
「く……ッ！ 勝てなくても何でも、私達は生きて再びこの学園に通うのよ!!」

返答として魔力弾と雷が飛んでくるが大したダメージは無い。どうやら、本当に弱いらしい。ここまで実力差があると怒りを通り越して呆れが出てくるというものだ。ならば、殺そうか。

その時、第六感が反応した。

脳裏で鈴を鳴らして警告してくる。

戦場で何度も命を救ってくれた直感だ。長年の経験から咄嗟に背後に光槍を投げた。見れば剣士二人が顔を悔しさに滲ませながら必死で槍を受け止めている。

魔力弾はカモフラージュ。本命は背後からの不意打ち。

通用しない。彼相手に不意打ち等通用する筈が無い。不意打ちもまた立派な作戦であることは認めよう。しかし真の強者はそんな事をしない。

正面から正々堂々と殴り会うだけ。それだけで強者は力と存在を誇示してきた。小手先の技術で勝てる筈も無い。

「おいおい、嘗められたものだ。その程度の不意打ちが成功すると本気で思っていたのか……?」

重圧が増した。ズズズズ、と全てを飲み込むであろう力が放たれる。リアス達は蛇に睨まれた蛙となってしまった。咎める者は何処にも居ない。自分だって恐いのだ、何故他人にだけ万能を求められよう。

と、コカビエルは不意に笑いだした。可笑しなものを見つけたかのように。

「ククク……。それにしても、お前らは親玉を失ってもよく戦えるな」

「それはどういう事よ！」

怒鳴り付けるリアス。その声に、彼はより笑みを深めながら口を開いた。

「——三大勢力戦争の時、四大魔王のみならず神も死んでいるのさ」
最重要機密、神の不在。

決して外部に漏らされる事の無かった情報をリアス、ゼノヴィア、そして漸く起き上がったライザーはしつかりと聞いた。有り得ない話では無かった。証拠ならそこにある。

「その金髪が至った聖魔剣。あれは神と魔王の死により世界のバランスが崩れたからこそ実現する代物だ。……これ以上の証拠はあるまい」

熱心な信徒であったアジアは崩れ落ちた。小猫が必死に落ち着かせようとしているが暫くはあのままだろう。それを見たコカビエルは更に捲し立てていく。

「人間の信仰心や対価に依存しなければ滅んでしまう程に疲弊した三大勢力。各勢力のトップは不都合な真実を隠蔽する事に決定した。故にもう大きな戦争は起きない。それだけ俺達は泣きを見た。……あのまま戦争を続行すれば、堕天使が勝利したと言うのに!!」

やり場の無い怒りを放出させたような必至の形相。そこから語られた真相は純粋なアジアの心を抉るには足りた。アジアは涙を流しながら、その場に踞った。

「神は、死んでいる……? では、私達に与えられる愛は……?」

「聖書の神が残したシステムを使えば祝福も悪魔祓いもある程度は作動する。尤も、加護を受けられる者は格段に減少してしまっただがな。その聖魔剣を創り出せたのも神と魔王の不在により、バランスが崩れているからだ」

——全ては、天使共が与えた偽りの愛だ。

残酷すぎる現実に彼女の精神は耐えられなかった。全ての制御がシャットダウンされ、スローモーションのように崩れ落ちた。

「戦争だ！ お前達の首を土産に、先ずはサーゼクスに宣戦布告してやる!! そしてミカエルにも——」

全ての翼を解放し、自信満々に叫ぶコカビエル。だがそれはガラスが壊れるような音に遮られた。

ソーナが町を守らんと学園に展開していた結界術式は呆気なく壊され、そして降り注ぐ結界の破片を纏う第三者の声が凜と響く。

「——くだらない」

声の主は白い龍の皇帝、ヴァーリ・ルシファーだった。

——l i f e . 7 月下迅龍——

月を背に浮かぶ彼には一種の美しさがあつた。途端にコカビエルは嫌らしい笑みを消し去つた。

どうして白龍皇ヴァーリが此処に来たのか？

アザゼルの差し金なのか？

警戒しながらコカビエルは訊ねる。

「……アザゼルの指図か。しかし、邪魔立ては——」

「何処を見ている。俺は後ろだ」

背後からの声。そして一撃。完全に無防備なところを突かれたコカビエルは僅か一秒そこらで地にねじ込まれた。慌てて翼を展開するが、もうかつての余裕は無い。

「おのれ、小癩な真似を……ッ!!」

「あんたが俺のスピードを捉えられなかっただけの話さ。……さてと、俺の所有している神器、デイベイン・デイベイディング“白龍皇の光翼”の能力は、あんたも知つているだろうか？」

「確か、触れた者の力を半減……ッ!？」

言い切るよりも早く、死刑宣告に等しい白い龍の声が響く。

『D i v i d e ! ! ! !』

機械的な音声!。次いでコカビエルは高所から猛スピードで落下していく感覚を味わつた。思うように身体が動かない。

それこそが“白龍皇の光翼”の真骨頂。触れた者の力を十秒毎に半減し持ち主の糧にするという凄まじい能力。相手に触れなければならぬ為、一騎討ちでこそ真価を発揮する神器とも言える。

つまり今現在この戦場において、ヴァーリ・ルシファーは無敵という事だ。

!!!
『D i v i d e D i v i d e D i v i d e D i v i d e D i v i d e
』
繰り返される音声。弱者に成り下がるコカビエルに反比例して、
ヴァーリは魔王クラスにも力を上げていた。

最早コカビエルの力は中級墮天使以下。敗北は必至。ヴァーリは
苦笑しつつ、侮蔑の眼差しを向けた。

「あんたを無理矢理にでも連れて帰るようアザゼルに言われたんだ。
——さっさと終わらせて、彼ともう一度戦いたい」

「畜生!! この俺が!! アザゼルウウウウ!! お、俺はああああ
!!」

ヴァーリがコカビエルの顔面を力の限り殴った。抵抗も何も出来
ずに彼は気絶し、それによりグラウンドに描かれていた魔法陣も消滅
したのだった。

▼
ボロボロになったコカビエルの首根っこを掴みながら、ヴァーリは
嘆息した。

顔面が腫れ上がり見るも無惨な姿になってしまった彼を今から本
部まで連れ帰らなければならぬ。そう思うと気が滅入る。

「フリードも回収しなければ。コカビエル同様に聞き出さなければな
らない事があると言っていたしな」

いそいそとフリードを探すヴァーリに、リアスが怒鳴った。
「待ちなさい! 貴方は何者なの!!」

納得できないという目を向けられたヴァーリは苛つく。本部に
帰って面倒な書類を山ほど書かされてやっと自由時間が手に入ると
いうのに、小娘にそれを奪われてたまるか。

ヴァーリはリアスに目もくれなかった。ただ、帰り際に一言告げ
た。

「俺の事より、赤龍帝を気にしたらどうだ?」

「……ッ!!」

リアスは目を見開いて言い返そうとした。しかし、ヴァーリは既に
夜空に軌跡を描いた後だった。

こうして墮天使幹部が引き起こした一夜の抗争は、白い龍の乱入によつて終わりを迎えたのであつた。

コカビエルの起こしたエクスカリバー騒動から一夜明けた。
”カオス・ブリゲード禍の団”本部、会議室では重苦しい空気が漂っている。

未だ目を覚まさない一誠と、それに付き添うオーフィスを除いて、室内には各派閥のリーダーが集合していた。そして長机の中央に浮かんでいる画面は昨夜の記録映像であった。こっそりとヴァーリが魔法陣を仕組んだのだ。

映像を見終わった曹操は興味が無いという顔をしていた。

「たかが墮天使幹部と、その彼にすら勝てない雑魚を記録して何になるんだ？」

「そんな事を言うな。後で何かの役に立つかもしれないだろう。リアス、ライザー並びにその眷属達の戦力とかな」

ヴァーリは画面に映るリアス達を眺めていた。リアスやライザーは別にどうでも良いが、その眷属は若手悪魔の中でも何かと注目している。

”ソード・オブ・ビトレイヤ双覇の聖魔剣”の木場祐斗を始め、ハーフ墮天使の姫島朱乃、猫又である塔城小猫と面白いメンツが揃っている。

今は封印されているが、ギヤスパーという元吸血鬼も時間停止の神器を持っていると聞く。

順調に成長すれば上級の上、何れは最上級にも届くかもしれない才能が眷属達にあった。

戦闘狂を認めるヴァーリは、何時か彼らと対峙する事になるだろうと予想していた。だからこそ雑魚と侮る曹操に注意を促した。そして曹操にはそれを聞けるだけの強さがあった。

「ふむ、すまない。訂正しよう。将来の敵と言った方が良いのか。それなら今のうちに芽を摘むのか？」

「止めておけ。あれは兵藤一誠の獲物だ。——手を出せば、死ぬぞ」
「そうか、それもそうだな」

曹操は深くは追求しなかった。それを確認したヴァーリは映像を切り替える。

次に映し出されていたのは、一誠の写真と幾つかのグラフだった。

「これは兵藤一誠の身体能力を数値化したグラフだ。見て解ると思うが、ここ最近の成長率は目を見張るものがある」

それでこそ二天龍だ、とヴァーリは含み笑いを付け加えたが、集まった一同は提示されたグラフに戦慄すらしていた。

折れ線グラフは、“禍の団”に入った直後の一誠とつい最近の一誠、其々の身体能力おそこから割り出された客観的な戦闘力を表している。言わずもがな入った直後の軽く倍は越えていた。

オーフィスとの特訓、“禁手”、ヴァーリとの死闘。それら全てが彼の強さを構成する元となったのだ。あれほど叫んでいた煩惱を消し去り、特訓と復讐のみに生きる。言うのは楽だが実践するには余程の覚悟がいる。

ヴァーリと曹操は目を輝かせた。彼はあの眩きを現実にするつもりだと今更ながら気付いた。信用しなかった訳ではないのだ。単に明確な証拠が無かったからであり、こうして証拠たるグラフを突きつけられれば認めるしか無い。

「確かに強いですね。恐らくは真なる魔王である私達よりも」

「……珍しいな。カテレアがそんな発言をするとは」

齒軋りをしながら言う旧魔王派のトップ、カテレア・レヴィアタンに、二人は少し驚いた。

真魔王を自称する彼らは他の種族や転生悪魔を頑なに認めようとしない。それをトップ自らが認める趣旨の発言をしたのだから驚くのも当たり前だ。それは彼女の部下も同じだったらしく戸惑いを顕にするが、カテレアが一喝する。

「目を背けるな。彼の強さは事実。否定したところでそれは変わらない。"蛇"を呑んだ私達とは違うのよ」

曹操が笑いながらカテレアに視線を向けた。可笑しな物を見たといった様子で顔は少し笑っていた。

「カテレア、どういう風の吹き回しだ。レヴィアタンらしく終アルマゲドン末でも呼ぶつもりか？」

「失礼な、あんなに莫大な魔力を放出されれば認めざるをえないで

しよう。戦争中を思い出したわ」

「そうだろうな、と今度はヴァーリが話を続ける。彼もまだ笑っているがそれだけ彼女の言葉がツボにはまったのだ。」

「兵藤一誠は二天龍が一角、赤い龍を宿しているんだ。あの程度は当然。誰よりも強く、誰よりも誇り高いのがドラゴンだからな。……さて、ここで諸君に提案がある」

ヴァーリはぐるりと会議室を見渡した。先程のカテレアの発言に感化されたのか、一誠を侮る者は居ない。ざわついていた旧魔王派の者達も緊張した顔付きで立っている。話を切り出すには好都合な雰囲気だ。

今を逃してはなるまい、とヴァーリは決意した。

「ヴァーリ・ルシファアは、兵藤一誠を新たな派閥のリーダーに推薦する」

騒ぐ者は誰も居なかった。この間の一誠とヴァーリの戦闘は団員全てが知っている。白龍皇であるヴァーリと互角の戦いを繰り広げた一誠の実力を皆が思い知らされた。余波で殆どの者を卒倒させた男なら異論はあるまい。チラリとカテレアを見るが、首を横に振る事は無かった。

今のところメンバーはたったの一人。しかし一誠だけで過剰戦力。今後彼は幹部の一人に名を連ね、組織の中枢を担うだろう。その影響力は最大と言われる旧魔王を抜き去り、英雄派やヴァーリチームと同格。

最小にして最強の派閥、赤龍帝派が誕生した瞬間である。

—— l i f e . 8 赤龍帝派 ——

冥界、首都リリス。冥界有数の巨大都市である。その中心には魔王城が聳え立っており、絶えず屈強な衛兵達が監視している。

その最上階に設けられた執務室に魔王サーゼクス・ルシファアは居た。先の戦争で戦死した先代魔王からルシファアの名前を受け継いだサーゼクスは、今日も大量の書類と睨み合っている。

何時もは眷属に押し付けて実妹のところへ転がり込むが、今回ばかりはそうもいかなかった。コカビエルの件があったからだ。

珈琲を飲み一息つこうとした矢先に連絡用魔法陣が浮かび上がった。少々不機嫌になりながら確認すると、相手はアザゼルであった。「何かな、アザゼル。今は忙しいんだけどね」

魔法陣の向こうから気の抜けた声が聞こえる。

『ああ、すまん。最重要機密だから、二人だけで話したかったんだよ』

「——予定されている件かな？」

『そうだ。今が良いタイミングだから。不満もあるだろうが、ここいらで行っておきたい』

サーゼクスは珈琲を一口啜ると、またアザゼルに再び意識を戻した。

「ミカエルに話は通っているのだろうか」

『無論だ、奴さんも参加するってよ。……ところで、赤龍帝を“SSS級はぐれ悪魔”にしたんだってな？』

暫く無音になり、サーゼクスは絞り出すように告げた。

「……そうだ。彼の事は仕方無かった。そうするしか他に無かったんだ」

仕方無かった——。

彼から吐き出されたその言葉に、アザゼルは違和感を覚えた。はつきりと言えないが、何処か嘘偽りのように思えたのだ。

だが彼は事情を知らない。

その為に偽りだとは断言出来なかったが、サーゼクスと自分との間に線が引かれた気がした。

『俺も人に言えた立場では無いけどな。友として警告するぞ、サーゼクス。——その赤龍帝は恐らく復讐を考えている』

「その時は、話し合おうと思っている」

『それだけで済んだら良いけどな』

そして魔法陣の点滅は終わった。サーゼクスは魔法陣を消すと珈琲をまた一口啜った。窓に映る自分の背後に赤龍帝が立っている気がした。

憎悪に燃える眼が自分を貫く。

その時は近くまで来ているだろうと、サーゼクスは何となく思っていた。

l i f e . 9 兵藤一誠①

—— l i f e . 9 兵藤一誠① ——

兵藤一誠は上体を起こした。辺りを見て、此処が治療室であり、今までベッドに寝かされていた事を悟った。ふと手の感覚を確かめてみるが別段おかしいなところは無い。

リアスの名前が、駒王学園という単語が、一誠を激しい頭痛に誘ったのだろう。吐き出したように見えたが、実際には何も変わっていないことを一誠は教えられた。

と、手に何か触れた。サラサラした美しい黒髪は見間違える筈も無かった。ベッドにもたれ掛かったオーフィスが静かに一誠を見ていた。

「……赤龍帝、おはよう」

「おはよう、オーフィス。俺は何時間寝てた？」

「……約二十四時間」

それだけの間寝ていたのか、と彼は溜め息を吐いた。何か長い夢を見ていた気もするが思い出せない。まるで深い霧の中に迷い込んだ気分だった。

一誠はそつと彼女の頭を撫でた。ずっと寝ていてオーフィスの姿を見なかったせいも、自然と力が込められる。

彼女は特に嫌がる素振りを見せなかった。それでますます力が入った。

「……赤龍帝。何故、私の頭を撫でる？」

「撫でてると気持ちいいからだよ。嫌かな？」

「……嫌、じゃない」

不思議と彼女は温かくなった。彼の傷だらけの手が自分の頭を往復すればする程、比例して温かくなっていった。

永久に近い年月を一人きりで過ごしてきたオーフィスにとって、頭を撫でられるのは初めての事だ。知識としては知っていても、それを誰かにされた前例は無かった。

最強の名を冠するオーフィスに近づく輩は居ないし、彼女自身も気

にせずに生きていた。

文明の移り変わりを目にして、武器の発達と共に変化していく戦争を眺め、人の生と死を見る。ただ世界を傍観するだけの命。

そんな凍りついた時間は一誠によつて溶かされたつあった。

自分を恐れず、隣に立つ選択をした一誠に興味を持った。

だから、“蛇”に頼らずに危険な特訓を続ける一誠に協力した。一誠の事を侮辱したシャルバを構わず消滅させたし、ヴァーリとの戦闘時には結界も張った。どれも以前までのオーフィスでは考えられない事実だ。

そして今、彼女は一誠に黙って頭を撫でられている。

「オーフィスの髪って、綺麗だよな」

「……私の髪、綺麗？ 気にした事無いから、解らない」

自分の黒い髪とそれを見つめている一誠の笑顔を視界に入れながら、彼女はぼんやりと考えた。

この温かさは一体何処から来たのか、ずっと疑問だった。一誠は前に知っていると言っていたが、この幸せな時間を中断してまで訊ねようとは思えなかった。

幸せ。

一誠に頭を撫でられている、ゆっくりとした一時が幸せだ。急に彼女を眠気が襲った。目の前に居る彼がボンヤリと歪んでいく。

「眠くなったのか、オーフィス」

「……我、眠い？」

“無限の龍神”であるオーフィスは睡眠を必要としない。だが瞼が重たい。

やがてオーフィスは安らかな寝息を立て始めた。一誠が起きたので、緊張が解けたからでもあった。

一誠は、眠っている彼女の頬に触れる。真っ白い肌に自分の指が沈んでいく。然り気無くつついてみるがオーフィスは尚も寝ている。どうやらよっぽど緊張していたらしい。

彼女の寝顔をもう少し見ていたい、と彼は思った。だから入ってきた曹操にも、口に人差し指を当ててジェスチャーで伝えたのだ。突然

の事に驚きながらも曹操は音を殺して歩く。

「オーフィスは寝ているのか……？」

小声で彼は言った。起きないように配慮している辺り、オーフィスを憎からず思っているようだ。

「寝かしておいてくれ。ところで、何か用なのか。ヴァーリと同じ顔をしているぞ？」

「いや、単純に伝言に来たのさ」

そんなところまでヴァーリと同じなのか、と一誠は思わず顔をしかめた。そして恐らくは重要な伝言である事も、先のヴァーリの一件から学んでいた。

「コカビエルのエクスカリバー騒動が切っ掛けで、三大勢力は会談を行おうらしい。ゲオルクが察知してくれたよ」

「……戦争開始か？」

「それは無い。どの勢力も先の三大勢力戦争で消耗し過ぎた。今度戦えば種が滅ぶ。それぐらいは無能なトップでも理解しているさ」

曹操の予測は的を射ていた。

悪魔、天使、堕天使。三種族は戦争で大量の犠牲者を出した。悪魔と天使は主たる神と魔王を失うという大打撃を受け、一番被害が少なかった堕天使さえも半数以上の人員を失う事となった。

三大勢力戦争はそれだけ大規模な傷跡を残したのだ。それを再び行えば間違いなく神話自体が滅ぶだろう。

それだけは避けねばならなかった。

「その会談を旧魔王派と魔法使い派が襲撃する予定だ。頃合いを見計らってヴァーリも加わる。彼は堕天使総督たるアザゼルの護衛として会談に参加するからな。君にはヴァーリを迎えに行行って欲しいんだ」

ここで初めて、一誠はオーフィスから彼に視線を移した。

「……解った、迎えに行こう。俺もそろそろ宣戦布告するべきだろう。水面下で動き回っても何時かはバレる。それならば、自分から動いて先手を打ったほうが良いだろうからな」

「そう言ってくれると思っていたよ。会談の日は後で伝える」

言い終わると曹操は部屋を出た。そして一誠はまたオフィスの頭を撫でた。

彼女の寝息を子守唄として聞きながら、彼もまた欠伸した。

Resonance.

life. 10 リアス・グレモリー①

あの日から、リアス・グレモリーを憂鬱が蝕んだ。自慢の眷属である一誠を救えなかったことが原因だった。

婚約発表終了後のある時、リアスは実家に呼び出された。行ってみれば深刻な表情をした実兄と上層部の悪魔達が待ち受けていた。

話によると、上層部は一誠の殺害をサーゼクスに迫ったらしい。上層部が相当に面倒な存在だというのは若いリアスも理解していたが、こんな強引な手を使うと予想していなかった。

サーゼクスがそれを許可したことも、だ。

直後、上層部の連中は黒い笑みを浮かべながら去っていった。リアスはサーゼクスを問い詰めるも仕方無かったの一点張り。

嫌な予感がした彼女は急遽部室に転移するが時既に遅く、部室は血塗れになっていた。

腕やら足やらが散乱した部室。細かく解体された悪魔の死体。

無惨な光景を見慣れた彼女でも吐き気を覚えたその場所に、赤龍の双腕を持った一誠が立っていた。おぼろげに天井を見ていた彼だったが、リアスに気付くと眼だけを動かす。

『――部長も俺を狙うのか？』

違う、とリアスはハッキリ言いたかった。だが、言えなかった。

恐かったからだ。

酷く透き通っている眼差しをした彼が、どうしようもなく恐ろしかったからだ。知らず知らず、一歩後ろに下がってしまった事を知ってリアスは自分が情けなくなった。

さんざん可愛い眷属と言っておきながら今は彼に恐怖している。リアスはこの状況になって始めて自分の醜さを見せ付けられた。

『……襲ってきた奴が言ってたよ。負けた俺は役立たずだから、ドライヴ赤龍帝を引っこ抜いて殺すんだとき。魔王サーゼクスや偉い連中の許可を得て、な。部長も賛同したんだろ？』

『違う、違うわ……!!』

『——その割には後退りしてるよな？ やっぱり後ろめたいことがあるからだろ?』

靴裏のゴムと床が擦れる音が脳裏に入った。言い訳しようのない証拠を突き付けられて、それでもリアスは抗う。

認めたく無いのだ。

情愛に深いグレモリーの次期当主が可愛がっていた眷属に恐怖を抱いたなどと、結局は上辺だけの愛であったなどと、所詮上級悪魔であるリアス・グレモリーは認めたく無かったのだ。

一誠は興味を完全に失った眼でリアスを刺し貫いた。どこまでも黒い眼球が、逃げようとする彼女を直視した。

『認めるよ、情愛は嘘だったと。リアス・グレモリーは、魔王サーゼクスは、お前ら悪魔は——俺を見捨てたと認めちまえよッ!!』

『違う……ッ!! お願いだから、放して!! 話を、聞いて……ッ!』

リアスは飛び起きた。ベッド近くに置かれた時計は丑三つ時を指していた。何時も見ると、あの日の夢だ。

この後の展開も同じ。サーゼクスや朱乃達が間一髪で駆け付けて、一誠は逃走する。そして“SSS級はぐれ悪魔”に指定されるという夢だ。

リアスは水を飲みに一階に降りた。そしてリビングの片隅にポツンと置かれている仏壇が目に入った。遺影は一誠のものだ。

一誠と関わった者の記憶は操作され、ライザー戦の後に事故で死んだ事になった。リアスやアーシアが今も居候している兵藤家も例外では無い。

一誠の両親も普段は無理して作り笑いをしているが、仏壇の前で泣いている事を二人は知っている。そしてその度に罪悪感が襲い掛かるのだ。

あの時、本当に助けられなかったのか。いや、無理してでも助けろべきだった筈だとリアスは苦しむ。それが主君たる者の責務なのだから。

そして今夜も泣き声が聞こえる。悲痛な声を聞いているとますます

す眠れなくなる、とリアスは逃げるように部屋に閉じ籠った。布団を頭から被ったが、しかし、視界は隠せても泣き声は消せない。

罪とはそういうものなのだ。

——l i f e . 1 0 リアス・グレモリー①——

リアスは朝になると起床し、支度をして、アーシアや一誠の両親と共に朝食を食べて学校に向かう。食事も通学も彼という存在が足りなかった。

それでも学校生活に支障をきたす訳には行かない。折角ライザーや実父に無理を言って学校に通学させてもらっているのだから。だから部活も行わなければならぬ。

尤も、今日の部活は騒動から始まったが。

「墮天使総督が私の縄張りに侵入し、あげく私の眷属に接触していたなんて……!! 冗談じゃないわ!!」

騎士^{ナイト}、木場祐斗の報告にリアスは激昂した。悪魔と敵対関係にある墮天使、そのトップが無断で眷属に接触したのだ。どうしたものかと思案していると部屋に魔法陣が浮かび上がった。

現れたのはサーゼクスとその妻、グレイフィア。すかさず跪く一同だが、サーゼクスは手を振って制する。

「ああ、今日はプライベートだから。楽にしてくれたまえ」

スーツ姿で余裕のある表情を見せるサーゼクスに、リアスは態ときつく言っただけだ。

「……お兄様はどうしてここへ？」

「授業参観に参加しようと思っただけ。妹の勉強姿を間近で見たいのさ」

「……魔王たる者がいち悪魔を特別視されてはいけませんわ」

リアスの棘のある言い方にもサーゼクスは動じず、平然と言葉を続けた。

「いやいや、これは仕事でもあるんだよ。三大勢力の会談をこの学園で行おうと思っただけ。その下見に来たのさ」

サーゼクスは上着のポケットから綺麗に折り畳まれた書類を取り出した。そこにはハッキリと「三大勢力会談」と記されており、リアス

達を驚かせるには充分だった。

life. 11 リアス・グレモリー②

駒王学園で三大勢力会談を行う。

魔王サーゼクスにより突如もたらされたその情報は、部室内を騒然とさせた。リアスは書類に目を通しながら呟く。

「長年敵対する天使や墮天使と会談するですって。結果によっては戦争が起きるのかしら」

「いや、先のコカビエルの一件についてだよ。あれは三勢力全てが関わったからね。これを機会に、トップ同士が話し合いをする事になった」

コカビエルの一件——後の裏社会において“エクスカリバー強奪事件”の名で語り継がれることとなった例の騒動は、歴史の重要な節目の一つである。

そして、リアスにとっては圧倒的な格の差と、“白龍皇”の強さを見せ付けられた事件でもあった。

墮天使組織随一の武闘派幹部として知られるコカビエルの実力は戦争当時より決して劣っておらず、若きリアス達が相手にするには早すぎた。それは彼女も充分過ぎるほど身体に叩き込まれたし、だからこそ今代の“白龍皇”の強さが異次元である事も解った。

ヴァーリが現れなければ、今頃は全滅していただろう。リアス達にとっては嫌な思い出でしか無い。

彼女達が若干震えている事を察したサーゼクスは話題を変えるために、リアスの背後に控えているゼノヴィアに向き直った。

「やあ、君がゼノヴィアだね。デユランダルの使い手が眷属になったと聞いた時は驚いたよ。妹の助けになってほしい」

「……解りました、魔王サーゼクス様」

ゼノヴィア。コカビエル事件の折にエクスカリバー奪回の名目で送り込まれた教会戦士にしてデユランダルの使いだ。

神の不在を知らされてしまったが為に追放されてしまった彼女は自暴自棄でリアスの勧誘に乗り、現在は彼女のコネで駒王学園第二学年に所属している身であった。

不本意な形で悪魔になってしまった為に主であるリアスやクラスメイトにも心を開かず、ひたすらに鍛練を行っている。

そんな彼女だが戦闘においては頼りになる存在であり、サーゼクスもその腕を見込んでいた。だからこそ根回しも含めて彼直々に、今や一介の下級悪魔に過ぎない彼女を見に来たのだ。

「……これで用件は終わりだ。確か、公務がまだ残っていたね」

「はい。書類が山ほど残っております。少なくとも二日間は徹夜です」

予定がぎつしりと書き込まれた手帳を捲りながらグレイフィアは肯定し、冥界へと繋がる転移術式を展開する。

術式に呑み込まれながら、サーゼクスはリアスを視界に入れた。

「早く帰ってくると良い。父上が心配している」

「……私はもう帰りません。高校卒業までは兵藤家で生活します」

転移していった実兄を見送ったリアスはソファに座り込んだ。立場を考えての事だった。

リアスは今現在、兵藤家に居候している。崩壊しつつあるアーシアの精神をケアする名目だった。

彼女はエクスカリバー強奪事件にて“神の死亡”を知ってしまった。悪魔に転生してからも信徒として神を敬っていたアーシアは絶望に墮ち、口数が極端に少なくなり笑顔も見せなくなった。

このままでは日常生活に支障が出る恐れもある為、主であるリアスが付き添う事となったのだ。

そしてリアスにはもう一つ、居候の理由があった。それは冥界にいたく無かったという事だ。

勝手に婚約を進めた両親に実兄。

兵藤一誠の殺害を計画した上層部の老害。

彼等と同じ空気すら吸いたくなかったから、兵藤家に転がり込んだのだ。

しかし、本人は頑なに認めない。一誠の仏壇に手を当てては涙を流す日々が単なる言い訳だと認めない。心の片隅で一誠の報復を恐れているなどと言えない。

リアス・グレモリーも貴族の多分に漏れない立派な悪魔だったのだ。幼い頃から上級貴族の令嬢として育てられ何不自由無い生活と未来を約束された彼女は、表向きは情愛を語りながらも内側はやはり悪魔なのだ。

普段から嫌っている醜い上層部と根は同じ。

何処までも醜く、何処までも利己主義で、何処までも他種族を忌み嫌う集団。それが悪魔。

ソファに身体を沈ませながら、リアスは泣いた。とことん同じであつた事実を許せないでいた。悪魔という種の根本と、それに気付いてしまった自分を嫌悪するしか無かつた。

「あらあら、お疲れなのかしら。お茶を持ってきますわね」

腹心であり女王でもある朱乃が簡易キツチンに姿を消す。後に残つた眷属は心配そうに自分を見てくる。その目が痛くてたまらない。

吐き出したい。眷属に一誠が恐いと吐き出してやりたいのだが、それもまた恐ろしくて仕方がない。

自分の眷属は全員が過去を抱えている。一誠も殺された過去を抱えていた。

もし自分の想いを知られたら離反されるかもしれない。軽蔑されるかもしれない。長い付き合いである朱乃でさえ、その優しい笑顔から一転して険しい表情になるかもしれない。

勿論そんな事はリアスの思い込みだ。だがあり得るかもしれないと執拗に信じた。そしてまた新たなジレンマ。自分は眷属を信じていないのではないかという妄想に取り付かれる。

「部長、震えていますよ？」

「風邪でしょうか……？」

木場や小猫が話し掛けてくるが聞こえない。そんな状況では無い。それすらも恐いと感じる彼女にとって心配という好意は逆効果をもたらす。

何という皮肉なのだろう。

追い出された兵藤一誠は今の生活に多少なりとも幸福と安心を感じ

じているのに、リアスにはジレンマと恐怖しか残らない。これほど滑稽な話があるだろうか。いや、存在しない。

今のリアスは一人だった。

——l i f e . 1 1 リアス・グレモリー②——

l i f e . 1 2 魔法使い派

その光景に、一誠としては珍しく溜め息を吐いた。一誠の代名詞とも言えるトレーニング室に多くの者達が修業に来たのだ。しかも旧魔王や英雄、その他小数の派閥等メンバーも様々だ。何れも一誠に刺激を受けた者達である。

修業する場所が無いということで、彼は不機嫌だった。与えられた部屋にもトレーニング機材を置いてあるので簡単な運動程度であればこなせるが、如何せんスペースが圧倒的に無い。満足に動き回れない様では本格的な特訓は到底出来ないだろう。

そんな訳で、一誠はトレーニング室の前で部屋が空くのを待っていた。傍らにはオフィスがチョココンと座っている。暇潰しと癒しを兼ねて彼女の頭を撫でているが、それも限界だ。何せ二時間も待っていれば疲れるより先に飽きてくる。

「暇だ、早く空いてくれ」

「……無理。寧ろ、人が増えている」

一誠の何気無い呟きに律儀に返すオフィス。一誠はまたもや溜め息をついた。二人の特訓はレベルが高過ぎて他の者では即効で灰になってしまう。だから二人きりで特訓を行っているのだが、この様子だと何時になるのやら解らない。

仕方無しに踵を返した直後、背後から不意に声を掛けられた。赤い眼球が描かれた黒のローブに身を包んだ、銀髪の少女だ。

彼は記憶をまさぐり、その少女が組織の会議に出席していた事を思い出した。

自分に何のようだ。

一誠は警戒しながら会話を続けた。

「あんたは誰だ？」

「申し遅れました。私はソフィア・ヴァリエールと申します。魔法使い派の暫定リーダーを務めています」

「魔法使い派か、今度の三大勢力会談を襲撃する予定だよな。それがどうして俺に接触を？」

疑問に対して、彼女は頭を下げながら答える。

「今回こうして貴方の元に伺ったのは、私達についてのお話を聞いてもらいたいからです」

——Life. 12 魔法使い派——

はぐれ魔法使いの集団、魔法使い派。

一般的なはぐれ魔法使いのカテゴリーは大まかに分けると二つ存在しており、一つは魔法使い協会から異端と見なされ追放された者達。死者蘇生等の黒魔術を研究して危険視されたのだ。最もポピュラーな理由だが近年は別の理由ではぐれ魔法使いになってしまった者達も多い。

自己紹介を行ったソフィアが率いる魔法使い派は不運な事に別の理由によつてはぐれ魔法使いになってしまった者だけが属する派閥だった。

ソフィアの言葉に、一誠は首を傾げたがそれも仕方無い。彼自身はソフィアと接点が全く無い。強いて言えば同じ組織に所属している程度だがそれが話をされる理由とは思えなかった。

無意識に構える一誠にソフィアは慌てて言葉を入れた。

「ま、待つてください！ 私が貴方にお話をしようと思したのは、兵藤一誠さんが“はぐれ悪魔”だからです！ 少なくとも一誠さんなら私達の話聞いてくれるだろうと思ってます!!」

「……取り敢えず、早く話せよ。オーフィスが不機嫌になっている」

一誠はオーフィスを撫でながらぶつきらぼうに告げた。

「では……魔法使い派の構成員は全員がはぐれ、つまり何らかの理由で追放された魔法使いなんですよ。一般的には禁術研究が理由なんです。……中には理不尽な理由ではぐれになってしまった者も居るんです。魔法使い派は全員が後者です」

「……」

「私達の以前の所属、教えてくださいよ。……もう既に気付いているでしょうけど」

一誠は咄嗟に、言うな、と叫びかけた。態々言われなくても今の話と彼女の魔力で大体は察する事が出来る。しかし無情にも、ソフィア

の方が一歩だけ早かった。続きが投げられた。

「——私達は皆、はぐれ悪魔。後から魔法を覚えた歪な存在なんです」
「……ッ!!」

彼は絶句した。彼にとって絶対に言って欲しく無かったからだ。自分はもう結論を出している。ソフィアの言う通り気付いているのだ。

なのに何故、自ら傷口を抉るような真似をするのか。そんなことをすれば彼女の心は軋んでしまうだろう。

現にそれを言った直後のソフィアは涙目で息が粗い。何れ程の覚悟が必要だったのか。

一誠にはとても想像がつかない代物だった。

「……私はヨーロッパの名家に生まれました。中世から続く由緒正しい貴族の家柄でした。両親は蝶よ花よ、と私を可愛がってくれました。そのまま成長して、結婚して。普通の人間として生涯を終える筈でした。——それが望みでした」

ソフィアは俯き、そして心の中に溜め込んでいた感情を爆発させる。

「ですが、十六歳の誕生日に悪魔が現れたんです!! アイツは両親も執事達も、全員を殺しました!! 私はその悪魔に捕まって! ソイツは奴隷商人で! 私は貴族悪魔に——」

せめて、そこから先の台詞だけは言わせたたく無かった。一誠はソフィアの頬に優しく手を当てた。怯えるように震えていた彼女はそれで落ち着きを取り戻したらしかった。

と、ソフィアはローブを脱いで見せた。ノースリーブから見える雪色の肩には、赤い紋章が刻まれていた。見たことの無い刻印であったが恐らくは奴隷の証か、もしくは貴族の家紋だろうと一誠は考えた。

そして、魔法使い派の全員に烙印があることも理解してしまった。

一誠は冥界の裏に潜む闇を見せられた。他種族を捕らえて売り払う奴隷商人が居た。それを平然と購入し、無理矢理眷属にしてしまう貴族が居た。だがそれは氷山の一角。

多額の賄賂を受け取った上層部が事実を揉み消していると知れば、

元々の恨みもあって直ちに冥界に宣戦布告したかもしれない。それを知らなかっただけ、一誠とソフィアはマシだった。

彼は手が止まっただけ、一誠とソフィアはマシだった。下を見てみるとオーフィスが頬を膨らませていた。それがあんまりに可愛いのでひよいと抱き上げてから一誠は告げた。

「……それを話したのは何故だ。言っておくが、復讐への協力依頼ならお断りだぞ?」

「それは解っています。復讐は自分の手で行うものですから。……ただ、頼みたいだけです。もしも貴方が上層部を殺す時が来れば、その時は私達を思い出して下さい。私達は今度の襲撃で無能な魔王と戦いますから」

そうしてソフィアは去っていった。二人きりになった後も彼は先程の話を思い返していた。彼女が話した内容は彼にとつて聞き逃す事が出来ない物だった。特に、去り際の表情は瞼に深く焼き付いていた。

あれは死を受け入れた顔である。

「アイツの顔には死相が見えたな」

「……死ぬ?」

「そうだ。免れない死の宣告だ。覆せるとすれば強者ドラゴンだけさ。……さてと、トレーニング室はまだ空いてないし、食堂にでも行くか?」

「……行く」

オーフィスは一誠の肩に飛び乗った。落ちないように注意を払いながら一誠は食堂へと歩いていった。

ただ、ソフィアと話しすぎたのでラーメンを食べる時も、オーフィスにご機嫌斜めであった。

駒王学園旧校舎、その一番奥に聳える扉が開かれた。室内は光源が存在せず薄暗いが、無数のぬいぐるみやコンピューター類の輪郭は辛うじて見える。

そんな暗い部屋の真ん中に、彼は座っていた。プルプルと震える様はか弱い小動物を思わせる。

扉を開けた張本人であるリアス・グレモリーは告げる。

「ごきげんよう。元氣そうで何よりだわ」

「ぼ、僕に何の用ですか？」

彼、ギヤスパーク・ヴラディは金髪を振り乱しながら冷たい棺桶に隠れた。

「封印解除が許可されたのよ。もう外に出られるわ。さあ、私達と一緒に外に出ましょう？」

「嫌ですううう!! どうせ僕は迷惑をかけちゃうんだああ!! 嫌!

お外怖い!!」

リアスの説得にもギヤスパークは応じようとしなかった。彼女の性格上、本来なら無理矢理にでも引きずり出す所だが、相手が相手なのでそれも出来ない。ギヤスパーク・ヴラディはそれ程までに厄介な眷属なのだ。

リアスは外に連れ出そうと懸命に話を続けるが、所詮無理な話だった。リアス以下オカ研メンバーは暫く時間を置く事を決定し、部室へと戻ってきた。

部室に戻るとまだギヤスパークとの面識が無いゼノヴィアが疑念を口にした。

リアスは説明がてら、ギヤスパークの過去を話し出した。

「ギヤスパークは名門吸血鬼、ヴラディ家の出身なのだけど母親が人間で妾だった為に純血では無かったの。吸血鬼は悪魔以上に純血と階級を重んじる種族。……混血児のギヤスパークには居場所が無かったらしいわ」

しかし、ギヤスパークが只の平々凡々なハーフ吸血鬼ならまだ良かった

た。ギヤスパアの不幸な点は神器を宿してしまった事に尽きる。

時間を停止させる能力を持ち、使い手次第で一国をも簡単に落とせるといふレア神器、『停止世界の邪眼』。それを宿してしまったからこそ、彼は異常に恐れられた。

類希な吸血鬼としての才能と神器を兼ね備えて生まれた彼は無意識の内に神器の能力も格段に上昇させてきた。

最初はスプーンやフォークといった軽い物だけを止められたが、テーブルや植木等徐々にエスカレートしていき、遂には大人の吸血鬼を止めるまでに至ってしまった。元々周囲から危険視されていた為、その一件で彼は家から追放された。

そして路頭に迷った所を教会戦士に殺され、丁度通り掛かったリアスに助けられたのだった。

その様な過去を持つギヤスパアは引きこもった。他人を怖がり、外の世界を嫌った。そして彼の存在を知った上層部もギヤスパアを怖れた為に、他者を停めてしまう可能性を指摘し封印を命じた。今回封印解除が許可されたのは、コカビエルの足止めが功績として認められたからだ。

実際は一方的に蹂躪されていたがプライド高い上層部は噂が立つ事を恐れ、結果として許可する方を選んだのである。

「……」

話の顛末を聞いたゼノヴィアは何も言わなかった。ギヤスパアが可哀想だと言えば成程、同情めいた言葉を掛ける事は出来る。だが追放も殺害も現実に沿っていた。

無意識に時間を止めるギヤスパアは恐怖の対象。何時、誰が止められるか解らないのだ。そんな存在を自陣に置いておけば、最悪の場合暴走するかもしれない。

そうなれば吸血鬼の種族は終わりだ。たかがハーフ吸血鬼一人とその他全員の命となれば、ギヤスパアを捨てるのも納得出来た。

だが彼女はそれを言わない。リアスも他の眷属達もギヤスパアを擁護している。現実を見ていない奴等ばかり。この状態で意見を述べても、寧ろ肩身が狭くなるばかりだ。

「私は主失格なのかしら……。ギヤスパーも、一誠も救ってあげられない」

ゼノヴィアは一誠が誰なのか、ある程度の知識は持っているがリアス達以上に熟知している訳では無い。なのでそれに対するフオローは出来なかつたし、別にするつもりも無かつた。

部室に掛けられているカレンダーを視界に入れた。グラビアアイドルが大きく描かれているそれは一誠が前に持ち込んだ物らしかつた。

大きく赤丸がされた日、即ち会談予定日はそこまで迫っていた。

——l i f e . 1 3 準備——

カオス・ブリゲード
“禍の団”の幹部達は連日、三大勢力会談襲撃について議論を重ねていた。襲撃のタイミング、護衛対策、会談参加者の情報等をモニターに映し出し、其々の意見を出しあっていた。

会議室内には、魔法使い派の暫定リーダーであるソフィア、旧魔王派トップであるカテレア、そしてヴァーリに一誠。襲撃参加予定のメンバーが集まっていた。

二天龍である一誠とヴァーリは勿論、ソフィアやカテレアも相当の実力を誇る。特にカテレアは先代レヴィアタンから受け継いだ才能と最近の特訓も相まって、魔王と呼ばれるに相応しいまでに成長していた。

ヴァーリが手元の書類を見ながら、参加メンバーを見渡す。全員が討死を覚悟した表情を浮かべている。彼は満足すると襲撃作戦を語りだした。

「先日話した様に、“停止世界の邪眼”を持つギヤスパー・ウラディを利用する。組織で新開発した術式で神器を無理矢理発動、参加者並びに護衛連中を停止させ一人ずつ殺していく。同時に魔法使いとカテレア、そして俺が襲撃を加える。一誠は俺達を迎えに来るんだったな」
「ああ。この機会だからな。連中に俺を再確認させる」

一誠は不敵な笑みを浮かべた。数カ月前の一誠とは違う、強者の風格があつた。ブウウウンと彼の左手が翡翠に光る。ドラゴンの紋章が浮かび上がった。

『遂にやるのか、相棒』

威厳ある太い声が響いた。一誠の相棒にして二天龍の称号を持つ最強クラスの龍、赤い龍^{ドライグ}が語りかけたのだ。

ドライグは、今の一誠を気に入っていた。前の煩惱一辺倒で真っ直ぐな彼も嫌いでは無かったが、やはり此方の、三大勢力に敵意を持つ一誠の方がドライグとしては好感を持てた。自分を封印した憎い三大勢力共を、代わりに滅ぼしてくれるのではないか。そう期待を載せた。

尤も、オフィスと懇意である事は彼の予想を越えていたが。

「そうだ、遂にやるんだよ。ドライグ」

『……俺は相棒に協力する。相棒には経験が足りないからな。参謀として助言させて貰おう』

「助かる」

確かに一誠は強いが如何せん経験が足りない。対してドライグは二天龍として三大勢力の大軍と渡り合った猛者である。その助言は金銀に劣らぬ価値を持つだろう。彼にとってありがたい事だった。

明日は、三大勢力会談だ。

「これより三大勢力首脳会談を行う。ここにいる者達は、最重要機密事項である”神の不在”を認知していることを前提として話を進める」

魔王サーゼクスの厳かな開催宣言により、三大勢力会談は幕を開けた。会場となった駒王学園には二重三重に人払いと防御を兼ねた術式が構築されており、其々の護衛も質・量共に半端では無い。

キリスト教勢力はそれなりに大きな勢力なだけあつて敵対者も多い。最悪の場合を想定してトップ陣、特に墮天使総督たるアザゼルは膨大な数を護衛に割いた。

そんな中、先の一件に関わつたとして出席を命じられたリアスは一人震えていた。彼女は会談途中で例の件を報告する役目がある。もしそこで粗相をしてしまえばグレモリーや悪魔全体の評価を落とす事になりかねない。とも考えれば緊張してしまうのは当然だった。

リアスはチラリと同じく出席しているソーナを見た。ソーナも内心では緊張しているが、それを外面に出さないという点でリアスよりも優秀だ。

「——では、リアス。例のエクスカリバー強奪事件について話して貰おうかな」

「……はい、魔王サーゼクス様」

彼女は立ち上がり、あの時自分が見聞きした事を包み隠さず語つた。事前に纏めた通り接触から戦闘、顛末を話した。

時折挟まれるソーナの補足説明もあつて何とか上手く話す事が出来、サーゼクスは満足しながら頷いた。そして着席を促すと今度は彼の前に座っているアザゼルに顔を向けた。

「さて、この件について墮天使側の意見を聞きたい」

アザゼルと呼ばれた、黒に一部金が混ざつた髪色の男は欠伸をしながら話した。

「エクスカリバー強奪事件はコカビエルの独断専行だ。処理は”白龍皇”がおこなつたよ。軍法会議で”地獄の最下層”での永久冷凍に処したから、アイツは二度とシャバに出てこれない。その説明は、先日提

出した報告書に全部書いてあっただろ？」

「貴方個人が我々と刃を交える可能性という話に関してはどうでしょうか。——ここ数十年、神器所有者をかき集めているアザゼル自身の意見が知りたいですね」

天界の代表である金髪的美青年、ミカエルが透かさず睨み付けるがアザゼルは豪快に笑い飛ばした。

「別にお前らが思ってる物じゃ無い。神器研究の為さ。なんなら研究資料も送ってやるよ。……少なくとも俺は戦争なんざ金輪際しない。今の世界に満足してるんでな」

「本当か、アザゼル。もしも戦争を起こすつもりなら……」

「——俺の信用は最低かよ。神や先代魔王共よりはマシかと思ってたんだが、お前らも面倒だな。こここそ研究するのも限界か……」

そして、アザゼルは提案する。

「——三大勢力で和平を結ぼうぜ。お前らも元々そのつもりなんだろう？」

リアスやソーナ、ライザー達は驚きを溢す。そんな次世代を他所に先駆者は次の段階を話していた。

提案を受けたミカエルが瞑目する。しかしながら既に答えを導いていたらしく、眼を瞑ったのはほんの数秒にも満たない。

「私も悪魔政府と”神の子を見張る者”に和平を持ちかける予定でした。これ以上、三大勢力の争いを続けていても世界の害でしかないのです。神の子を見守り先導していくのが残された天使の使命なのだと、私達セラフは結論付けました」

ミカエルの言葉を聞いていたサーゼクスとセラフォルも互いに頷くと其々の意見を口にする。

「私達も和平を提案するつもりでした。種を存続させる為に悪魔は次に進まねばなりません」

「戦争は我らも望まない。二回目の戦争が勃発すれば悪魔は滅びる」

「そうだ。次の戦争をすれば、三大勢力は今度こそ滅びちまう。他神話や人間界にも悪影響を及ぼしてしまうだろう。”神の不在”は間違いないのか。神が死ねば俺達も死ぬのか。……いや、違った」

ポツリと彼は呟いた。それはあまりに力不足でちっぽけな男の本音とも言えた。

「――神がいなくとも、世界は回るのさ」

アザゼルは心底面白そうな笑みを浮かべながら、窓の外を見た。護衛達が所狭しと整列しているが、その隙間から僅かに星が伺える。そして何となく手を伸ばした。

そして全ては停止した。

——l i f e . 1 4 三大勢力会談——

「……あら？」

リアスは目覚めた。見れば各首脳達とサーゼクスの護衛として背後に控えているグレイフィア、自身の眷属である木場祐斗とゼノヴィア。それ以外が停止していた。DVDの一時停止のようにピタリと停まり微動だにしない。

リアスは、ギヤスパーの能力である事を瞬時に悟った。しかし、彼はまだ対人恐怖症を全く克服していないので部屋に置いてきた筈なのだ。

思考を続けていると、窓際に立っていたアザゼルが彼女に気付いた。

「おう。起きたか、リアス嬢」

「これは一体何事ですか!？」

「テロだよ。魔法使い連中が襲撃して来たんだよ」

目視でざっと百は余裕で数えられる。死角や援軍を含めるとその数倍は予想範囲内だ。時間が停止して動けない護衛達を殺しながら魔法使い達は迫ってきていた。

放たれている魔法の威力から察するに一人一人が上級悪魔クラスの実力を持つだろう。迂闊に飛び出しても袋叩きになってしまうだけだ。

「二応、私とミカエル、アザゼルで強固な防壁結界を展開しているからこの校舎に被害は無いだろう。ただ、結界がある限り私達は此処から動けない。――それにしてもこの状況、恐らく魔法や神器等でギヤスパー君の“停止世界の邪眼”を強制的に“バランスブレイカー禁手”に至らせたのだから

う」

「二時的にとはいえ、視界に映した物の内部にいる者にまで効果を及ぼすとは。あのハーフヴァンパイアの潜在能力だろうな。ま、俺達を止めるには出力が足りなかったようだがな。……ヴァーリ、外に出て敵の目を引き付けろ。白龍皇であるお前が出れば敵のリーダーが出てくるかもしれない」

「了解だ。——」バランス・ブレイク「禁手化」

『Vanishing Dragon Balance Break
er!!!』

瞬時に純白の鎧を纏い、天空に駆けていくヴァーリ。その様子を見ながらアザゼルはリアスに銀色の腕輪を投げ渡した。

「おい、あのハーフヴァンパイアを助けに行くんだろう。なら、この腕輪をアイツに渡せ。神器の暴走を抑える物だ」

「解りました！ お兄様、”キャスリング”でギヤスパーを助けに行きます!!」

キャスリング。 ”王”キングと”戦車”ルークの位置を入れ替える、チエスの技術の一つにして、”悪魔の駒”に搭載されたシステムの一つである。

旧校舎の部室、丁度ギヤスパーが留守番をしていた部屋に未使用の”戦車”の駒がある。リアスにとっては絶好の機会だ。

「確かに、それならば虚をつける。……グレイファイア」

「簡易術式しか展開出来ませんが、お嬢様ともう一方ならば可能です」
「なら、自分が行きますー!」

最初に名乗り出たのは、木場だった。

「君なら任せられる。……頼んだよ、二人とも」

グレイファイアの助力により、リアスと木場は転移していった。その直後、床の中央が光り輝き、二つの転移魔法陣が描かれた。

未だ魔法陣の光が残る会議室。場を混乱が支配する中でサーゼクスは果敢にも現れた二人に問い掛けた。

「先代レヴィアタンの一族、カテレア・レヴィアタン。それに“A級はぐれ悪魔”であるソフィア・ヴァリエールまで……。テロの黒幕は君達か」

「サーゼクス……！ 魔王の地位を奪った若造が!!」

名を呼ばれた者の一人であるカテレアは、サーゼクスを睨み付けた。

長く続いた三大勢力戦争が一時休戦となった後、悪魔達は疲弊しきつていた。戦争を続行すれば種の存続すら危うい程に人口は激減し、莫大な金が戦費として徴収された為に餓死した者も少なくなかった。財産を所有している貴族悪魔も例外では無く、没落する家も多々あった。

他勢力もそうだが、悪魔はクリアしなければならぬ課題が多すぎた。次期魔王の選出もその一つだが、ここにも上層部の意見が影響したのだ。

上層部は若く扱いやすい悪魔を傀儡にしようと企んだ。完全に操る事は出来ずとも、せめて自分達に反抗しない者を魔王にする事により都合の良い世界を作ろうと望んだのである。

そうして先の戦争で手柄を立てた四人の若い悪魔達を魔王に仕立てたが、当然旧魔王の血族は激しく反発。悪魔側は内戦状態となった。

結果としては新魔王、つまりサーゼクス達の勝利に幕を閉じ旧魔王派は冥界の辺境に追いやられる事となる。

その旧魔王派のトップの一人であるカテレアは、積年の恨みを晴らさんと強力な殺意を放出していた。

「我々は、全員が”禍カオス・ブリゲードの団”に協力する事を決めました」

「”禍カオス・ブリゲードの団”……。シエムハザが察知した、三大勢力の危険分子が集まったテロリスト集団か。メンバーには”神滅具ロンギヌス”所有者も数人確認

している。そして、組織を率いるのは——“無限の龍神”、オーフィス
!!”

ウロボロス・ドラゴン

オーフィス。その名前が出された瞬間、動揺が広がる。神も恐れたという最強のドラゴンだ。驚くのも当然だが、普段の彼女を知っているカテレアとソフィアは特に気にする様子は無い。

「オーフィスはただの広告塔か。仲間を集める為だけの御飾りと見たが……」

「……確かに最初はそうだったわ。力の象徴として扱えばそれで良いと思っていたけど、最近はその事を考えていた自分が酷く馬鹿らしくなってね。だから、ここで否定するわ」

「ああ、そうかい。どちらにしても俺はお前を倒さなきゃならない。テロなんざ今時流行らないぜ?」

カテレアとアザゼル。両者が同時に力を解放した。その魔力質量は互角。二つがぶつかり刃りにプラズマが迸る。

黒、何処までもどす黒い水の魔力がカテレアを覆った。アザゼルも十二にも及ぶ巨大な翼を展開した。

そして二人同時にグラウンドに飛び出したのである。

水と光が衝突する。魔に相性が良い光は徐々に優勢になっていくが、カテレアは魔力の出力を上昇させ一種のウォーターカッターにする事で、アザゼルの光槍を一刀両断した。返しに水系魔力の応用である氷の弾を乱射するが、それは避けられる。

一見すると互角の戦闘を繰り広げているかのように見える。それは木場にゼノヴィア、ミカエルやサーゼクスでさえそう思った。

しかし、長く実戦から遠ざかり研究にばかり時間を費やしていたアザゼルに対して、カテレアは特訓に余念が無かった。

三大勢力戦争、悪魔を二分した旧魔王と新魔王の内戦。それらと比べると格段に質は落ちるが、戦闘に必要な勘は取り戻した。

ともなれば水という自由性が支える豊富な手数を有するカテレアが有利である。事実、最初こそ上手く立ち回っていたアザゼルは身体も鈍りもあって傷が目立ち始めた。このまま続ければアザゼルの敗北は濃厚。

「思ったより楽しめるじゃねえか!! 戦争時代に何度か交戦したが、あの時より強くなった!!」

「ハッ!! 私は偉大なるレヴィアタンの血を引く者!! 貴様らごとき偽善者に敗けはしない!」

カテレアは吼えた。背後に水で形成された龍を従え、見事な連携を見せた。彼女が攻撃すれば水龍も氷の咆哮を放ち、水龍がアザゼルの視界を水で隠しタイミングを崩し、術者であるカテレアが攻撃の対象になれば瞬時に盾となる。

意思を持つ一生物として独立する存在はアザゼルにとって脅威以外の何物でも無いだろう。

余裕を見せるカテレアとは逆に、アザゼルは苛ついていた。墮天使総督としてのプライドを持つ彼は無意識にカテレアを下に見ていた。其処らの魔法使いと同じ雑魚という認識であった筈が、気付けば遅れを取っている。

深呼吸しリズムを整えた彼は、防戦一方となる前に短期決戦に持ち込む事を決めた。

「そのオーラの質と量は普通じゃないな。オーフィスからドーピング剤でも貰ったのか」

「ええ、確かに彼女から力を借りましたけど……これから死ぬ貴方には関係無いでしょう?」

「——仕方ねえな」

アザゼルは話をしながらごく自然にポケットをまさぐった。ポケットには、自身が開発した人工神器である“墮天龍の閃光槍”を忍ばせているからだ。

神器研究の一環として作製した人工神器は不安定で実戦投入には早い代物ではある。しかし大きすぎる差を埋めるには“五大竜王”^{ファイブニル}が封じ込められたそれを起動させるしか方法が無い。苦渋の決断だ。

そして彼は覚悟を決めた。ポケットから勢いよく“墮天龍の閃光槍”を取り出し、名乗りを上げようとしたまさにその時だった。

——不可視の大顎により、彼の左腕は槍ごと消失した。まるで初めから無かったかのように、腕があった場所は血が噴き出すだけだっ

た。

「あ、あがアアアアアアアアア!!!」

先程まで墮天使総督の左腕として機能していた肉塊はカテレアの後ろに立っている二体目の水龍の口内に浮いていた。カテレアは「墮天龍の閃光槍」を受け取ると勝利を確信したように笑みを浮かべた。

「水の強みは不可視である事。貴方は水龍が移動する時に生じる歪みを見極めて戦っていたんでしょうけど、後ろにもう一体居たのですよ」

「なんだと……!?!」

「もう一体は全く動かなかったから貴方は気付けない。ましてや私達と戦っているのにそんな余裕は無い。——本来なら首を食い千切らせようと思っていたのだけど、貴方が神器を取り出したから作戦を変更したのよ。敵のパワーアップを見逃すほど私は耄碌していないつもりです」

齒軋りするアザゼル。出血は魔法で止めたが所詮は応急処置。長くは持たない。対してカテレアは体力もあるし、彼から人工神器を奪い取った事で戦意も上昇している。

万事休すかと思われたが、カテレアは不意に転移魔法陣を広げた。意外な行動にアザゼルは怒鳴る。

「待て、逃げるのか!!」

「貴方との戦闘を続行すれば戦利品を奪い返される恐れもありますし、二兎を追うよりも確実に持ち帰った方が良いと判断したのですよ。それではごきげんよう。墮天使総督、アザゼル……」

カテレアが虚無に呑み込まれていく光景を、アザゼルは見ている事しか出来なかった。そして彼女も水龍も「墮天龍の閃光槍」も自分の左腕も、全ては虚空に消え去ってしまった。

唯一残ったのは敗者のみである。



アザゼルに快勝したカテレアと打って変わって、ソフィアはグレイフィアに追い込まれていた。元々彼女はサーゼクスと対峙していたのだが、そうは行かないと付き人であるグレイフィアがソフィアの前

に立ちほだかり、そのまま戦闘を開始したのだ。

子供を産み多少衰えたとはいえ、かつてセラフォルと女性最強悪魔の座を争ったというグレイフィアの実力は健在だ。

高速で迫り来るグレイフィアに、ソフィアは咄嗟に何重もの魔法陣を拵げて見せる。

「これで、目眩まし程度には!!」

何千もの魔力弾が灰煙と共に標^{グレイフィア}的に向かっていく。だが最強の女王には足下にすら届かない。その全てを完璧に叩き潰され、その光景に唾然としている彼女は煙が揺れた事に気付くのが遅れた。

戦場に置いて、それは死を意味する。

うねりを持って、グレイフィアの鉄拳がソフィアを殴り飛ばした。隕石の落下に等しいエネルギーが直撃し、グラウンドの土に振じ込んだ。爆発的な衝撃はそれだけで収まらずグラウンドに大穴を空けた。その中心点に転がっているソフィアはさながらボロ雑巾のようであった。血と土にまみれ、それでも意地とばかりにグレイフィアに魔力を放つ。

「そのような物で私が止められるとでも?」

腕を払うだけで魔力弾は四散した。右腕には傷一つとしてついていない。そして彼女の姿が見えなくなり、次にはソフィアの目の前に立っていたのである。

笑うしか無かった。何故か無性に笑いたくなくなった。自分はこの一撃で死ぬ事を察したのだ。

「A級はぐれ悪魔」、ソフィア・ヴァリエール。最後に言い残す事は?」

寝転がっている故に相手の顔ははっきりと見えない。だが氷のような無表情であろう。どのような事情があるかと、彼等にとつては一介の“はぐれ悪魔”であることに変わりはないのだから。

それでもソフィアは、叫ぶ。

「私は——人間!・^{ソフィア}悪魔じゃ無い!!」

戦争で人口が激減したからという身勝手な理由で、他種族を無理矢理に連れてくる。そして目ぼしい者が入れば眷属にする。上級悪魔

というものは眷属の見た目で競い合う傾向がある。

好みにもよるが美しければ美しい程に所有者である悪魔の格と評価が上がるし、その為に専門の奴隷商人が店を構える始末であった。

何せポロイ商売だ。非力な種族、特に人間から上玉を拐って貴族に売れば高値で買い取ってくれる。

眷属は埋まってもメイドの名目で購入する者も数多い。故に業者が増える事はあっても減る事は無いのだ。

そして、“はぐれ悪魔”はこうした被害者達である事が圧倒的に多い。中には本当に力に取り付かれた者も居るだろうが、大抵は望まぬ取引を強要された他種族だ。

彼等は家畜以下の扱いに怒りと憎しみを覚え、主を殺害する事で自由を得たのだ。契約を不当に破った主が悪いのは一目瞭然であり本来であれば主側が罰されるべきである。

だが如何なる事情であれど、“はぐれ悪魔”が悪になる。大した調査もなされず追手が差し向けられ、殺される。例え追手が来なくても尊厳がある内に自殺する者が大半だ。

悪魔にされれば、もう二度と元の人生には戻れない。ソフィア・ヴァリエールもその一人だった。だから必死で戦ってきた。

しかしそれも、もうお仕舞いだ。

「そうですか。では、覚悟を」

魔法陣が描かれる。死刑宣告の陰がソフィアの首を捉えた。妖しい輝きを放つ魔法陣が眩しくて、思わず顔を背けた。瞼に映るのは愛しい両親。楽しかった日々。

そして自分自身。

『私は悪魔の奴隷になるの?』

「貴女は……小さいころの私?」

グニヤリと歪んだ。少女の顔だけが、忌々しい悪魔の顔に変貌を遂げる。下品な笑みを絶やささない、屑。

『お前は物だ、俺の所有物だ!! 解ったか!!』

『……はい。ご主人様』

何度も何度も変わる。連続する日捲りカレンダーの如く、次々と少

「ソフィア、生きてる？」

赤い鎧に乗っかっているオーフィスが彼女を癒した。その最中でも、ソフィアは赤い鎧を凝視したままである。

「本当は迎えに行くだけだったけどな。……仕方無いか。赤い龍^{ドラゴン}は自分勝手な種族だからな」

兵藤一誠が今、歴史の表舞台に再び姿を現した。

空は深い黒色に戻った。それは時間が再び正常に流れ出した事を意味するので、つまり根本であるギヤスパ―・ヴラディは救出されたのであろう。

しかし、助け出したのが誰にせよ、カオス・ブリゲード「禍の団」には関係の無い話である。

何故ならば護衛は既に全員始末したからだ。

そもそもギヤスパ―の神器を暴走させるという作戦は、大量かつベテラン揃いの護衛対策と、ギヤスパ―の有する神器のデータを得る為に過ぎない。彼の捕獲並びに暴走を担当した魔法使い達には、データが取れたのであれば直ぐに帰還するように命じてある。

故に時間停止が解かれようと現状には関係無いのだ。

一誠は空を少し見て、ギヤスパ―関連の作戦が成功した事を確信した。そして同時に今の状態も察した。直後に激しい憎悪に囚われた。

ソフィアは同じ組織に属し、同じ憎悪を抱える仲間と呼べる間柄であり、その彼女が息も絶え絶えの状態で自身の腕の中に居るのだ。グレイフィアがそうしたとなれば憎悪は何倍にも膨れ上がる。

必然的に対象はグレイフィア・ルキフグスへと向けられた。

反対に、グレイフィアは何が何だか解らないといった表情をしていた。今まで自分は“A級はぐれ悪魔”であるソフィアを正義の名の下に断罪しようとしていた筈。それが気が付けば、ほんの数メートル先に転移している。

それだけでも驚きに値するが本当の驚愕はソフィアをしかと抱き締めている者が見覚えの在りすぎる赤龍帝ドラゴンを着込み、そして無限たるオーフィスを肩車していたという点にあるのだ。

つい数カ月前までサーゼクス、そしてリアスの近くに居座っていた存在を見間違えるという事は有り得ないが、それでも彼女は確認の為に声を絞り出した。

「……貴方は、兵藤一誠なのですか？」

やっと出した声は普段とは全くもって違う、弱々しいものであつ

た。それだけでなく、視界全体が揺れているようにも感じた。時間停止は既に解除されているのにグレイフィアには長い時間が通り過ぎたように思えた。

そうして立ち眩みすら覚えたとき、一誠はオーフィスを降ろしながら、さりげない日常会話のように告げた。

「久しぶり、だな。グレイフィア・ルキフグス」

確かに曇ってはいるが一誠の肉声が響いた。そして、その口調も人格も以前とは違うものである事実も彼女の耳と頭に確かに吸い込まれていった。

何処までも冷たい彼の声音に一瞬冷や汗を流したが、流石に現魔王セラフオールと冥界最強の女性悪魔を張り合った事だけはある。

即座に認識を改めると慚然とした様子で語りかけた。

——否、語りかけようとした。

亜音速で駆ける一誠を、グレイフィアは見切れなかった。龍の一閃が彼女の顔面を強襲した。

鈍い、何かがへし折れる音を聞きながら彼女は一時的に身体を地面に預けた。地表と擦れるギリギリの所で翼を広げ、空に飛び上がった。

「見えなかった……今の攻撃、見切れなかったツ!!」

追撃せんと龍の赫翼を展開する一誠に魔力弾を放つ。それが牽制にすらなりはしないことは今の攻防で理解できた。であれば、ひたすら時間を稼ぐ。

魔王サーゼクスは未だ結界維持の為に参戦は不可能。リアスやソーナ達若者に任せるには荷が大きすぎる。こうなってしまうえば、少しでも体力を削るのが定石だろう。

二度の戦争を生き残った歴戦の戦士、かたや偶然にもウエルシュユードラゴン赤龍帝^{ウエルシュユードラゴン}を宿した少年。どちらに軍配が挙がるのか、様子を遠くから眺めるだけしかできないサーゼクス達は口惜しそうにグレイフィアの勝利を祈るしか無かった。

しかし現実は無情。いや、ツケが回ってきたと言うべきだろう。グレイフィアは確かに兵藤一誠に圧されていた。

「ぐ………ッ！ 攻撃が通らないッ!？」

「どうした、グレイファイア・ルキフグス!! 最強の“女王”がこの程度とは笑えてくるなッツ!!」

『BoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!』

格闘スタイルは何ら変わらない、剛を重視した徒手空拳だ。しかし数と重みが以前までの比では無い。受ける毎にスピードを上乗せされた重みが飛んでくる。

近付けば相手のフィールドに飛び込むようなものだし、かといって遠距離戦に持ち込もうにも魔力弾が弾き飛ばされる。その姿はまさに真正銘の二天龍そのものだ。

そうだ、これは戦争なのだ。かつての二天龍との戦争が数千もの年月を重ねて、より強大になって戻ってきたのだ。

三大勢力が一致団結しても神器への封印が精一杯だった化物に、グレイファイア一人で勝てるものか。

勝てる道理など、存在しない。

「あ、ああ! あアアアアアアアアアア!？」

純粹な恐怖で、目前に迫る一誠に残った全魔力をぶつけた。魔王にも匹敵すると謳われた絶大な魔力弾の群れは真っ直ぐに一誠に向かっていく。

そして一発残らず、百をも越える数の魔力弾は一誠に直撃したのである。

「よし、グレイファイアの勝ちだ!!」

「流石にあれを喰らえば……!!」

サーゼクス達が喜び勇んで騒ぎ、グレイファイアも倒したと思い込んで。やはり二天龍は三大勢力に勝てないのだと笑いながら、辺りに散らばっている無数の護衛達の死体を目に刻んだ。序盤にあれだけの数を割いていた魔法使い達は嘘のように全員が何処かに転移していった。

しかし何人かはリアス達が捕縛したようなので心配は無かった。

グレイファイアは安心しきっていた。普段なら絶対に油断しないが、恐怖から解放された事ですっかり慢心してしまった。

『Boost』

戦争時に刻み付けられた、赤い龍の声。魔力弾の影響で周囲に煙が吹き荒れる。

それが今、ぐわんと大きく揺れた。

二つの翡翠の眼光がその中で瞬いた。煙がゆつくり晴れる。見えなくなる赤には埃すら付着していない。ガシャンと一步踏み出す毎に金属音が鳴る。

それが一つ、二つと重なっていき、そして十三回目。すなわちグレイファイアの前に、兵藤一誠は立っていた。

「あ、ああ………!!」

一誠は右腕を挙げた。グレイファイアの眼前に翳された手は何かを充電しているかのように周期的な妖しきを見せた。

だが発射される事は無かった。横合いから乱入者が飛び込んできて一誠に蹴りを放ったのだ。残った左手で難なく受け止めて見せるものの、代償として充電していた魔力は消え去った。一誠は乱入者を睨んだ。

「魔王サーゼクス・ルシファー。俺を棄てた男か」

乱入した張本人、サーゼクスは息を整えながら何とか悲しそうな顔を造り出す。それが何の価値も無い事は充分理解しているが、それでも仏頂面よりかはマシだった。

サーゼクスを確認した彼はマスク部分の鎧を収納してみせた。久方ぶりに見る兵藤一誠の顔は確かに変わっていた。冷たいナイフのような男というのが第一印象であったし、そんな彼を見てリアス・グレモリーは泣き崩れた。

一誠はチラリとそちらを一瞥した後サーゼクスに向き直った。彼の顔は冷たく、暗い。

「イツセー君……先ず、僕は君に謝りたいんだ」

拳が飛んだ。それをサーゼクスは受け止めようともせずには喰らった。砂煙が舞う。彼は何も言わずに起き上がるが、それでも顔は変えなかった。

一誠は心底見下した目でサーゼクスを見据えた。一誠にとって

サーゼクスは復讐相手、それも一番に復讐するべき相手。それが少しばかり申し訳無さそうな顔で、あまつさえ飄々と謝罪を申し立てる。質の悪い冗談としか思えない。

「謝罪は必要ない。お前達が死ねば、それで良い」

「残念ながらそれは出来ない。私達の死は、世界のバランスの崩壊を意味する」

「そうなれば、さぞかし平和になるだろう」

対峙。

龍と魔王が、棄てられた者と棄てた者が、一度は義兄弟とまで認識していた二人が睨み合う。

ボルテージを上げていき魔力を高ぶらせていく。赤と紅のオーラが衝突し、周辺の空間を軋ませる。にも関わらず止まる気配など無い。

このまま永遠に続くかと思われた膠着状態は、突如として現れた三人目により終わった。

「ヴァーリか。何しに来た」

少々苛立ちを含んだ一誠の言葉に、純白の鎧を纏ったヴァーリは呆れながら返した。

「君は俺達を迎えに来たんだ。目的を忘れるなよ」

ヴァーリの視線の先には片腕を失ったアザゼルが居た。腕を失い、地面に倒れ伏したアザゼルをつまらなさそうに眺めながら、ヴァーリは転移魔法陣をグラウンドに展開した。

一誠、オーフィス、ソフィア。全員が円の範囲内に収まった事を確認した彼は術式を起動させる。ヴァーリに似て白い色をした魔法陣が、独特の音を立てながら皆を呑み込んでいく。

そして完全に呑み込まれる寸前に、叫んだ者が居た。

「イツセー!! 私は、私は……ッ!!」

返事など、存在する筈も無い。一誠はリアスに見向きすらしなかったのだから。

——l i f e 1 6 圧倒——

西暦二〇XX年七月。

天界代表 天使長ミカエル

墮天使組織“神の子を見張る者” 総督アザゼル

冥界代表 魔王サーゼクス・ルシファー

魔王セラフオルー・レヴィアタン

以上四名の名前を持って和平協定が調印された。

以降、三大勢力の争いは禁止事項とされ、協力体制へと移行した。

舞台になった学園から名を取って“駒王協定”と称されることとなったその和平条約は、後々に至るまで様々な負の歴史に関与する事となる。

Life. 17 会談後

三大勢力会談、そして“駒王協定”の調印から一夜が過ぎ去った。各勢力の首脳陣は主要な神話、そして一般市民達に向けて協定調印を正式に発表。その過程である記者会見において、魔王サーゼクスはこう述べた。

「カオス・ブリゲードの“団”と名乗るテロリスト集団が会談を襲撃してきました。奮闘の末に撤退させることには成功しましたがこちらも護衛を全滅させられ、更に不意を突かれた一名が重傷を負いました。彼等の目的は全神話の滅亡であり、犠牲者の為にも許してはならない、忘れてはならない会談となりました」

サーゼクスはいかにも被害者と言わんばかりの演技をテレビカメラの前で披露し、見事に民衆は乗ってしまった。結果的に“カオス・ブリゲード禍の団”は破壊の限りを尽くす集団だと思われてしまった。

しかも護衛達の遺族までテレビに出したのでより多くの同情と反感が集まり、今後暫くは熱が下がりそうに無い。

尤も、それはあくまで何も知らない民衆の話でありオーディンや帝釈天、ハーデス等の強大な神々は部下からの報告もあつて三大勢力が情報操作を施したと既に理解していたし、“禍の団”が三大勢力の被害者達が集まった組織である事も掴んでいた。

「しかし、サーゼクスめ。よくもああまでペラペラと嘘をつけるものだ」

「あいつの嘘つき症は異常だからな。叩けば大量の埃が出ると言うが」

「間違いない」

“禍の団”本部の北部エリアに位置する実験室。主に英雄派が管理しているその部屋には、多種多様な機材が設置されている。

その中央に鎮座する巨大な培養カプセルの群れの前で、ヴァーリは英雄派のリーダーである曹操と雑談をしていた。

三大勢力会談の件はあらゆる勢力に加速度的に広まっていき今で

は知らないものは居ない。そんな訳で本部内でも団員達の話の種となっていた。二人の会話もそれである。

話は何時しか三大勢力への悪態に移り変わり、更に時間が経過した頃、曹操は思い出したようにポケットから数枚に纏められたレポートを取り出した。受け取ったヴァーリは疑問符を浮かべながらも捲つていく。

「……これは、カテレアが持ち帰ったと言う“墮天龍の閃光槍”か」

曹操は力強く頷いた。そして部屋の一角を指差す。ガラス張りの向こうに、コードに繋がれた“墮天龍の閃光槍”が一定のリズムで光を発しているのが見えた。輝く度に接続された機械が数値を示していた。

「今は解析途中だ。まあ、ある程度は終わった。結論から言うと、あれは使い捨て“神器”だ。ブラックボックス術式が不明瞭だから断言は出来ないが、恐らく一回の使用で自律崩壊する。それ以上の使用は龍王の力に神器自体が持たないんだろう」

ピクリ、とヴァーリの眉が微かに動いた。怪訝なワードを拾い、曹操にぶつける。

「龍王、だど？」

“黄金龍君”と言えば解るか？」

「そういえば……前にアザゼルに聞いたことがある」

ファーブニル。

五大龍王が一角、“黄金龍君”と謳われた金色に輝く北欧の龍ドラゴンである。元々は人間の魔法使いであったが無限の黄金を生み出す指輪を神々から強奪。しかし指輪の呪いに取り付かれ黄金色のドラゴンに変貌を遂げてしまったという皮肉な伝説を持つ。

鋼にも勝る強靱な金鱗、何者にも等しく死と絶望を与える猛毒の吐息を駆使し北欧狭しと暴れ回ったらしい。

神話では魔帝剣グラムを携えた龍殺しの英雄ジークフリードとの決闘の末に殺されたとあるが実際は生き延びており、北欧の洞穴にて黄金を守る為にひっそりと今日まで暮らして来た。

しかし寝ている間にアザゼルの強襲を受け何も出来ずに封印され

てしまい、実験動物^{モルモット}として薬物漬けの生活を送ってきたのである。ヴァーリが事の顛末を聞かせると曹操は呆れ返っていた。

五大竜王を、しかも北欧神話由来のドラゴンを拉致するという愚行は、三大勢力と彼らの間の溝となりかねない。つまり自ら敵を作るに等しいのだから。

「俺は自室で寝る。何かあれば連絡を頼む」

「了解だ。ファープニルに動きがあれば伝える」

「すまないな」

そうしてヴァーリは部屋から出ていった。名残を惜しむように“墮天龍の閃光槍”が紫に瞬いた。

—— l i f e . 17 会談後 ——

その薄暗い会議室には四人が集まっていた。帝釈天、オーデイン、ハーデス、そして天照大神。何れも劣らぬ強者ばかり。そして三大勢力に不満を持つ者達でもある。

「全員、揃ったようじゃな」

狐耳の生えた美女、天照大神が立ち上がった。そして予め用意された書類を手にながら告げた。

「今回集まって貰ったのは他でも無い。今世界を騒がせている“禍の団”、そして三大勢力についてなのじゃ」

四つの勢力が動き出す日も近いだろう。急がなければ手遅れになるかもしれない。現段階では急げば急ぐ程結果は良好な物になると四人はおぼろ気に察していた。

神々の思惑が、一誠達を戦いに誘う。

Assault.
Life. 18 密約

とある場所にて四大神話の会談は開始された。各神話の代表であるメンバーが円卓を囲み、厳格な神の顔を築き上げ、纏められた書類に目を通していった。

集まった名目は先程行われた三大勢力会談によって締結された例の協定についての意見交換であるが、本当の目的はテロリスト集団「カオス・ブリゲード」の「禍の団」への対応の件だ。

書類を読む早さからも、全員がある程度の事態を認知していることが分かる。

ならば、と集まった四大神話の一角を担う「日本神話」の天照大神が席を立ち上がり、円卓の中央に魔法陣を築き上げた。最高神が描く日本文字が空を舞い、瞬く間に映像を映し出した。

映っているのは前述した「禍の団」襲撃の様子であり、時間停止が行われた後の一部始終がはつきりと捉えられていた。

中でも神々が目を見張った存在はやはり一誠であった。多方面にも名前を知られているグレイフィアを圧倒した時には度肝を抜かれてしまった。それも当然。グレイフィアは魔王クラスと謳われる女性悪魔だ。その魔力量は現魔王にも劣らない。

それが軽く捻られ、挙げ句にサーゼクスの攻撃を片手で受け止めて見せたのである。両者共に手加減をしているとはいえず、驚くなど言う方が無理だ。

事実、他の神々。帝釈天やハーデス、オーディン。上から数えた方が遙かに早い実力を持つている三人はごくりと喉を鳴らしながら、赤色の暴力を目に刻み付けていた。

「……今代の赤龍帝、兵藤一誠か。これ程の成長とは思わなんだ。あれで「SSS級はぐれ悪魔」とは、質の悪い冗談にしか聞こえぬわ」
「HHHHA……!! 俺も報告を受けた時には部下の精神を疑ったぜ。だが、これを見れば納得だな」

自身の持つ知識と照らし合わせながら呟くオーディンに続いて、帝釈天も珍しく驚いて見せた。その後で全員が、悪魔よりも先に彼を見つけれなかった不幸を嘆いた。ハーデスや天照大神も罰の悪そうな顔で、問題の少年を見ている。

特に悪魔の横槍が無ければ一誠を見つける確率が最も高かったであろう天照大神は、何時もの明るさが完全に消え去り酷く落ち込んでいた。

だが何時までも悲しむ訳にも行かず、顔を挙げて三人に意見を投げた。

「さて、諸君。〃禍の団〃は三大勢力の被害者で構成された集団だという事は既に知っていると思うのじゃ。その上で聞こう——潰すのか？」

辺りが静まり返った。それは四人全員が、兵藤一誠という存在を自陣に引き込もうと画策しているからであった。あれだけの力を示して見せた人材を放っておく道理など無い。何よりも彼は、あのオーフィスと仲良さそうに行動を共にしている。

つまり上手く立ち回れば、彼だけでなくオーフィスという最強の切り札もくつついてくるのだ。彼等四人にとっては何がなんでも、どんな代償を払おうと欲しい人材。

相手のそれを察し、暫くは睨み合いが続いた。そしてこのままでは進行しないと判断したハーデスが全員の意見を代弁した。

「……フアフアフア。どうやら全員の意見は一致しているな。どうだろうか。その〃禍の団〃とやらに、秘密裏に支援を行っては……」

その言葉に護衛として背後で待機していた死神や、他の護衛達は驚愕した。一神話の主神格がテロリストの支援を提案したのである。本来ならば止めるべき意見ではあるが、他の代表は真剣に悩んでいた。

支援を行い、そのまま〃禍の団〃が魔王や首脳陣を殺してくれればこれ程嬉しい事は無い。三大勢力には自分達の信者を根こそぎ奪われたという恨みがあるのだから。

よって一誠達が連中を殺せば、その恨みの一部は晴れる訳だ。

ハーデスの言葉に三大勢力の被害者である天照大神は力強く頷いた。信者を奪われ力が弱まっている時に勝手に侵入し、あまつさえ領土を主張した冥界にはどれ程煮え湯を飲まされただろうか。

気付いた時には遅く、勢力の弱まった日本神話は泣く泣く黙認するしか無かったのである。

その結果が人間の拉致、"はぐれ悪魔"の事件。今まで我慢してきたが、こうなつては流石に見て見ぬふりなど出来はしない。そう彼女は決意した。

彼女が同意すると帝釈天とオーディンも肯定を口にする。

「俺達も支援に同意するZE。あくまで極秘にだけどな」

「三大勢力が減びるのであれば協力は惜しまぬ。テロリストという肩書きが少々邪魔ではあるが、我々が手を打てば良いだろう」

日頃から三大勢力を良く思っていない残る二人が同意した事により、"禍の団"への援助は確定した。長い歴史の中でも異例の決定ではあるが、四人の決意は揺るがなかった。

神としての計算が重なった上での決定。兵藤一誠を巡つての決定だ。

勿論、彼以外も魅力的ではある。英雄の末裔にしてあの"黄昏の聖槍"の所有者、白龍皇の宿主であるルシファアの血縁者等、彼に並ぶ実力を持つ者も多い。

しかし成長速度をも考慮するのであれば、やはり兵藤一誠以外に居ないだろう。

"禍の団"への支援。

名だたる四神話の意見はかくして此処に統一された。陰謀と策略を含めて。

日課である特訓を終えた一誠は、大の字になってトレーニング室の床に寝転がっていた。舞台となった室内は破壊され尽くしており、特訓相手であるオーフィスがいなければ復旧は困難を極めただろう。

荒い呼吸を繰り返す一誠に対して、彼女は特に疲れた様子も無く、ぼんやりと隣に座っている。

一誠は以前に比べると実力が更に上がったらしく、今では三十分も戦えるレベルにまで成長していた。勿論、オーフィスは手を抜いていない。

そんな彼の左手に装着されている籠手を、オーフィスはずっと見つめている。悠久を続ける彼女にとって、それは何回も見た他愛ない玩具に過ぎない。

内部に封じられている赤い龍も、ずっと昔に思いがけず遭遇した事がある程度で、今までなら気にかける様な者でも無かった。

ならばやはり、己が心を乱している者は兵藤一誠という結果に至る。

「……我、気になる。赤龍帝の事」

ふと気付くと彼は寝息を立てていた。こうして見てみると普段の戦士然とした雰囲気は微塵も無く、寧ろ可愛らしさすら感じる。最強の座に最も近い自分からすれば蟲と等しい、少し力を込めれば潰れてしまうか弱い存在だ。それが特訓に付き合い、膝に乗り、本来必要としない食事を一緒に食べている。

今までの自分であれば絶対に有り得ない行動。何処から変わってしまったのだろうか。

「……我、思考する」

一誠が眠っている事を機会とばかりに、オーフィスは少しばかり考えてみた。

例の“蛇”製作作業に従事していた時、ヴァーリに気分転換を勧められたのが始まりであった。

彼女としても気分転換による作業能率の向上は知識として既に

持っていた為に、何の疑問も持たず夜の人間界に飛び出した。

喧騒が苦手な彼女は、噴水を中心に据えている比較的大きな公園を選んだ。鳥の声を聞きながら黙って瞑目する。

駅前にあるこの公園は、昼間は恐らく若いカップルや親子連れを癒すオアシスなのだろう。

だが今は丑三つ時。こんな時間帯にやって来る者はいない。たまに野良犬や野良猫の類がオーフィスの前を通ろうとするが、彼女を見た途端に叫びながら逃げ出していく。

歴然とした、推し量るのも馬鹿馬鹿しい力の差が恐怖という最も原始的な本能を揺さぶっただけである。オーフィスとしては見慣れた光景だ。

だが、寂しくもあつた。

オーフィスが座るベンチの前に青年が墜ちてきたのは、その直後だった。

激しい戦闘を繰り広げたことは、身体中の傷やそこから流れるおびただしい出血からすぐに分かる。

そこまでならオーフィスは関与しなかったし、そもそも見向きすらせずにその場を立ち去っただろう。彼女の目を引いたモノは青年の赤い両腕だった。

鱗で覆われた全体的に鋭いイメージを与える龍の腕。莫大な知識を有するオーフィスは、それがドラゴン系神器を宿す者に見られる、代償を支払った証だと即座に理解した。彼から微かに漂うオーラから、宿している神器は赤龍帝であるという事も察した。

これを見た時、オーフィスは何故か非常に興味を覚えた。理由は不明であるが、兎に角助けなければならぬと強く思った。だから応急処置を行い、“禍の団”本部へと連れ帰った訳である。

「……赤龍帝は蛇を拒絶して、努力に身を沈めた。我が把握している所有者の中で初めてだった。だから協力を決めた」

彼女の定位置は一誠の膝上。移動手段は肩車。

「……膝の上も肩車も、凄く落ち着く」

二人で食べるラーメンは熱かった。悪戯のつもりか、彼はよく頬を

プニプニとつつく。

「……初めて食べた。指、柔らかかった」

やがてウトウトとしながら、最後にオーフィスは呟く。

「……寂しく、なかった」

——life. 19 オーフィス②——

一誠が漸く起き上がったとき、オーフィスは眠っていた。こうして見てみると年頃の少女らしい、実に可愛い寝顔である。

彼から見て、オーフィスは絶対に届かない存在。無限に近くなる事は出来るかもしれないが、無限に並ぶ事は無い絶対的な強者だ。

それでも、例えば彼女が最強であっても、護りたい存在である事に偽りは無かった。

「……そう言えば、オーフィスと行動を共にしてから長いな」

始まりは例の襲撃事件。十人の上級悪魔を、憎悪と代償を以て殺害したあの事件だ。当時の一誠では赤龍帝の力を以てしても到底敵わず、やむを得ずドライグと契約を交わした。今はカモフラージュされているが、赤き龍の両腕がその紛れもない証拠である。

全員を文字通りバラバラにして、その際に部屋に駆け付けたリアスと鉢合わせした。己を見る眼が化物を見るそれであったことを、彼は見逃さなかった。

結局、その眼に耐えきれなくなってその場を立ち去った。

援軍を呼ばれる可能性も考慮して、出来るだけ遠くに逃げるべく空を飛んだ。

こうなってしまった以上、両親にはもう会えない。戻れば却って危険に晒される。だから逃げた。

最初こそ順調に飛んでいたものの、元々彼は飛行が得意では無い。その上、悪魔との戦いで既に満身創痍だった。そんな状態でまともに飛べる筈も無く、落下してしまったのだ。

その直後、一誠はオーフィスに拾われたのである。

「……俺と違って暖かいな、オーフィスは」

そうして思い出に浸っていると、曹操とゲオルクがトレーニング室に入ってきた。

「どうした？ 何か問題でもあったのか？」

そう訊ねる一誠に、「少しな」頬を掻きながら曹操は答える。

「先程、四神話——日本・ギリシャ・北欧・インドの連名で金銭援助の話があった。協議するからと誤魔化してその場は使者に帰ってもらったが、君はこれをどう見る？」

「三大勢力潰しの尖兵扱いだろうか」

「やはりそう思うか」

国際的に見て、“禍の団”の立場は単なるテロリスト集団に過ぎない。それを支援するということは、四神話にとつて余計なリスクを抱えるということに他ならない。しかし、そのリスクを考慮しても彼らは支援の道を与えた。

何故か？

三大勢力が憎いからだ。

連中は勢力拡大の際に形振り構わずに動き、他勢力の信仰・信者を強引に奪い取ってきた。

また近年は“悪魔の駒”を用いた、誘拐に等しい強制的な悪魔化が行っており、そうでなくとも“神器”所有者が墮天使達によって殺害されている。他ならぬ兵藤一誠もその一人だ。

信者も自国の民も奪われ殺され続ければ、他神話が苦々しく思うのも当然だろう。しかし、其々の国際的な立場から表立って争う訳にもいかず、非難するのが関の山。しかも三大勢力は非難を聞かないのだから手に負えない。

「そんなときに現れたのが“禍の団”だ。四神話にとつて俺達はさぞ期待の星だろうな。だからリスクを背負ってでも支援したいんだ。簡単に倒されると困るからな。それに俺達にとつても有難い話だろ？」
組織というものはその巨大さに比例して必ず、豊富な物資と資金が必要になってくる。

当初は旧魔王派が冥界を脱出する際に持ち込んだ宝石等を売却して、或いは冥界に潜伏している仲間からの送金で賄われていたがそれも限界だ。このままでは三大勢力を打倒する前に滅びてしまう。

多くの人材が集まる英雄派のリーダーと幹部を務める身であるが

故だろう、曹操とゲオルクは強く頷いた。

とはいえ、懸念は少なからず存在している。

「彼らとて人外の神話勢力だ。腹の中で何を企んでいるのか、分かったものじゃない。一応の警戒はすべきだろう。それに……」

ゲオルクに続けるように、曹操が告げる。

「断言できる。彼らの狙いは、間違いなく君だ」

「俺が？ おいおい、俺は赤龍帝を宿しただけのガキだぞ？ なんて神様に注目されるんだよ」

「分かってないな」

曹操は溜め息を吐いた。

「宿しただけのガキが最強の“女王”^{クイーン}を降せるものか。あの会談は俺達だけでなく他神話も把握していた筈なんだ。そして秘密裏に監視し……赤い龍の降臨を目撃したのさ」

——“無限の龍神”^{オーフィス}を連れ添った、兵藤一誠の姿を。

「長い歴史を紐解いても、彼女の隣に立った者は一人として存在しないんだ。それが君には懐き、常に行動を共にしている。これがどれ程の事態か、理解できない君じゃないだろう？」

「……ああ、知ってるよ。彼女はずっと孤独に生きてきた。だから俺は隣に立とうと決意したんだ」

「四神話の真の狙いはそれだよ。君を配下に加えれば最強の手札も手に入る。だからこそ彼らは恩を売りたいのさ」

そこまで話し終えてから、それでも本当に受け入れるのか、と曹操は改めて訊ねた。

対して一誠の返答は、

「受け入れるしかないな」

「意外だな。オーフィス可愛さに拒絶するかと踏んでいたが？」

わざとらしく驚いて見せる彼に、一誠は言う。

「組織の資金問題は解決しないとな。それに、断った場合は四神話が何してくるか分からん。この場は一旦受けておくのが得策だと判断しただけだ。目的を達成した後のことはそのときに考えるさ」

「……当事者である君が同意するのなら、俺達も構わないさ。四神話

には此方から了承の意を伝えておく」

「とはいえ、このまま尖兵をやらされるのも面白くないな。俺は自分の意志で復讐を志し、自分の意志でオーフィスと歩もうと決めただ。神様の為じゃない」

そして一誠は、面白そうに笑った。

「そうだな……悪魔側で式典とか、誰かのパーティーとかさ。重要なイベントは無いか？」

日本単位にして七月後半は、学生にとって至福の時間である夏休みに突入する。それは“駒王協定”を結んだことにより注目されている駒王学園も例外では無く、つい先程一学期の終業式が閉幕したばかりである。

夏休み期間の予定を自慢気に話す者が居れば、大量の宿題に嘆く者も居た。

形はどうあれ、興奮が未だ冷めない駒王学園。旧校舎に拠点を構えるオカルト研究部もまた同じであり、丁度リアス・グレモリーが熱のある声でそれを発表していた。

「——という訳で、夏休みは皆で冥界に行くわ。長期旅行の準備をしておいてね」

「私も、ですか？」

「そうよ。眷属が主に同伴するのは当然。あなたも一緒に冥界の実家に行くの。……そういえば、アーシアとゼノヴィアは初めてなのよね？」

リアスの問いに、アーシアはぼんやりと外の景色を見ながら答えた。

「……………嬉しいです」

アーシアと同じく、ゼノヴィアも特にどうでも良さそうにしていた。

彼女は悪魔になりたくてなった人間では無い。聖書の神の不在、教会からの追放。そしてリアスの巧みな口車に乗せられて、自暴自棄で悪魔に転生したのだ。

気絶していたが為に幸運にもコカビエルの言葉を聞くことが無かった相方は、現在も戦士として活動しているようだ。

彼女はそれも含めて現状が嫌だった。だから誰にも心を開かず、一人で鍛練に励み、無口で孤独な自分を貫いている。

「了解した」

それ故にぶっきらぼうな返事しか出来ない。主であるリアスは暫

くゼノヴィアを眺めていたが、やがて諦めたように朱乃達の方を向いた。少しだけゼノヴィアの胸が痛む。

「八月の二十日過ぎまで夏休みを冥界のグレモリー本邸で過ごすわ。修行や諸々のイベントは冥界で行うから」

リアスはそう申し付けた。今回の里帰りは彼女なりに計算された企画だ。夏休みの里帰り旅行自体は以前から度々行っている物であり、木場や朱乃、小猫は既に馴れている。

しかしながら今年には新メンバーが二人も眷属になり、その上ギヤスパは例の襲撃事件がトラウマになってしまい、引きこもりが悪化してしまったのだ。

残るアーシアは未だ精神不安定で、ゼノヴィアは心を開かない。

これではいざという時に動けなくなってしまう。それで先ずはアーシアやギヤスパの心を落ち着かせようというのが今回の旅行の目的である。

「おいおい、墮天使総督様を忘れるなよ?」

唐突に響いた声。驚いて入口に振り返ると、アザゼルが立っていた。ついこの間まで悪魔と敵対していた墮天使達のトップ、そして駒王学園の化学教師にしてオカルト研究部の顧問に半ば無理矢理就任した男だ。

「何時の間に入ってきたの?」

「普通に玄関からだ。気配を感じなかったのなら、それは単純に実力不足なだけだ。——と、俺が言えた義理じゃ無いか」

一瞬だけカテレアが脳裏に過るが頭を振り、懐から年季の入った手帳を取り出した。びっしりと書き込まれたそれを捲りながら、目当ての頁を見つめるべく目を細める。

「冥界でのスケジュールは……リアスの里帰り、グレモリー公爵、サーゼクスとの会合、若手悪魔達の集まり。そしてお前らの修行かよ。つたく、落ち着いて酒も飲めないぜ」

「ではアザゼル先生も同行するのね。列車の手配をしておいた方が良いかしら?」

「宜しく頼む。今回は悪魔のルートで行かなければならんのでな」

月日が少し過ぎて、旅立ちの日。最寄りの地下鉄の駅構内。

夏休みとあつて旅行者で賑わっているが、その更に地下深くに、一般には知られていない路線が存在していた。一般人達が知らないその駅にはグレモリー家専用の列車が停車しており、お抱えの車掌が路線や車両を管理している。

リアスや古参メンバー、精神を病んだアーシアはそうでもないが、ゼノヴィア、そして引き込もっていた為に今まで参加しなかったギヤスパーは緊張しているらしい。特に無理矢理連れてこられたギヤスパーは涙目で今にも持参した段ボール箱に隠れようとする始末だ。

と、出発前からこの調子であったが一度列車が発車すると落ち着いたのか、其々が趣味に興じていた。

アーシアは黙って窓の外を眺め、木場と小猫は互いの実力を確かめようと組手を行い。

ギヤスパーは段ボール箱の中でゲーム機を弄くり、ゼノヴィアは瞑目しながら珈琲を飲んでいた。

「成程な、そんな事があつたのか……」

そしてリアスと朱乃は、アザゼルに一誠の件を話していた。

アザゼルは、一誠が“SSS級はぐれ悪魔”となつた事に疑問を抱いていたらしく、当事者であるリアスに訊ねたのである。

リアスと朱乃も、彼女達から見た一部始終、そこから推測される事柄、全てを打ち明けた。完全な第三者の意見を聞く事で、自分達の今後を決めたかつたのだ。

アザゼルは話が終わると黙って瞑目していたが、自分なりの結論が出たのだろうか、目を見開いた。

「お前らの上層部は実に愚かだな。サーゼクスもだ。二天龍を両方放り出すとは、正気の沙汰と思えん。そんな仕打ちを受ければ裏切られても文句言えんだらう。これはサーゼクスを問い詰めるべきか……？」

「では、やはり一誠は陥れられたのかしら？」

「二人から聞いただけでは詳細は解らん。一度サーゼクスを問い詰め

るしかないだろうな。しかし……」

その時、車掌であるレイモンドの声が列車内に響いた。

『間もなく、次元の壁を通過致します』

それが合図となり、黒一色の空間が一変して冥界特有の紫色の空が辺りに広がる。下には木々や川に恵まれる大自然、そして六角型の街があちこちに建て並んでいた。その中でも一番大きな街の中央にある豪邸を、リアス・グレモリーは指差した。

「あれが私の実家、グレモリー城よ」

先にあるのは西洋の童話に出てきそうな巨大な城。外壁や屋根にグレモリーが司る紅蓮を用い、所々に貴族たる証である紫の薔薇の紋様が施されている。更に周囲にはリアス達を出迎える為なのか、音楽隊や馬車までも配置されていた。余りの豪華絢爛さにギヤスパは目眩を起こした。

「あれは家と言いませんよ……」

「ごく普通の家よ。それとアジア、ゼノヴィアは後で個人の領地をあげるから」

理解出来ていない二人に、アザゼルが解説を執り行う。

「お前達は次期当主の眷属悪魔だから、グレモリー眷属として領土に住むことが許されている。残りのメンバーも自分の領地を持つてる筈——」

その後を続けようとしたが、それは叶わなかった。何故なら大きな衝撃が列車を襲い、巨大な転移魔法陣が列車ごとリアス達を包み込み、そして何処へと転移させてしまったからだ。

その場に居る全員が目を覚ましたとき、辺りに広がる光景は殺風景な岩山であった。雑草すら生えていない僻地を前に、朱乃と木場は冷静に分析を開始する。

ふと、その途中で異変に気付いた。

「そう言えばリアスの姿が見えませんか」

「アザゼル先生もです。何処か別の場所に転移させられたのでしょうか」

不安になりながらもメンバーを見回す。幸いにも重傷を負った者は居ない様で、皆が周囲を警戒していた。

それにしても、と木場は思考していた。

一体、この強制転移は誰の仕業だろうか。ピンポイントで列車に魔法陣を展開したということは悪意を持って誰かが行ったという証拠だ。

考えられる最大の可能性は「禍カオス・ブリゲードの団」だろう。

彼が自分達を狙って出撃したのであれば。

三大勢力会談での襲撃。現れた彼を木場は遠目からしか見る事が出来なかった。近付いただけで龍のオーラに焼かれて死ぬとサーゼクスに制止されたからだ。

事実その通りだった。

凶悪な魔力を纏い、グレイファイアを圧倒する迄に成長を遂げた一誠に対して「禁手」に至ったばかりの自分。

断言出来るだろう。絶対に勝てないのだと。

結局、彼はオフィス、ソファイア、そしてヴァーリと共に退却してしまった。主君を守る筈の「騎士」は呆然と見ているだけ。

彼は暫く回想に沈んでいたが、違和感に気付き顔を上げた。

「——地鳴り！ 何か来る!?!」

岩をも崩すそれは巨大な存在の来訪を示していた。そして遂に影から姿を現したのである。

それは龍ドラゴン。紫色に白が合わさった体軀をした、木場達と比べる事す

ら馬鹿馬鹿しい程の巨体を誇る龍だ。傷だらけの角を鬚し、赤黒い眼が全員を捉えた。

解き放たれる業火を必死に回避し、反撃に転じる。

「どうやら味方で無い事は確かな様だね！」

「その様ですわね……!!」

即座に巫女装束を翻し、早々と上空に陣取る朱乃。

「部長が不在故に私が指揮を取ります。ゼノヴィアちゃんと小猫ちゃんとはドラゴンを引き付けて下さい！ 祐斗君はドラゴンを！ アーシアちゃんとギヤスパー君、私は支援に回ります!!」

一斉に全員が広がり、迎え撃つ体勢は整った。

再度繰り出される火炎は囹である二人に向かうが、騎士の速さ、猫系妖怪特有の身軽さを駆使して避けた。ドラゴンの炎の威力は岩を溶かして見せた事からも明白。もしもともに喰らえば致命傷は免れない。

隙を見て攻撃を加えるが、しかし攻撃がそもそも通らない。聖剣デュランダルすらも容易く弾き返す瞬間を、ゼノヴィアは見た。

「デュランダルが弾かれ——」

咄嗟に体勢を整えた直後に、焰の追撃。決して馬鹿に出来ないダメージを彼女達は負った。ゴウゴウと未だフィールドに残る温度をゼノヴィアは感じていた。

戦士時代に彼女は何度かドラゴンの討伐に成功した事がある。しかしそれは若いドラゴンだけ。

今現在、目前に迫るあれは自分が相対した龍とレベルが段違いであるという恐るべき事実。嘗ての猛者、コカビエル以上の威圧感を放つドラゴンを、彼女はただ睨むしか無かった。

今度は黄色の雷がドラゴンを襲う。朱乃の援護である眩い雷は一瞬ながら対象の視界を奪い去った。その間にアーシアが負傷した二人を回復させていく。考えられる戦闘パターンの中では一番マシな、各員の長所を活かした戦法だ。

そこにギヤスパーが加われれば、力及ばずとも抗うことは可能だろう。だが本人は怖がってしまい一步も動けなくなってしまった。逃

げないのは純粹に恐怖で動けなくなっているだけだ。

「時間を止めて下さい!!」

「頼む、ギヤスパ―君!」

司令塔の朱乃、攻撃役の木場までもがギヤスパ―に目を向ける。

向けてしまった。

その二人に、ドラゴンは狙いに定めた。

「オオオオオオオオオオオ!!!」

双翼を展開し、朱乃よりも更に上空から拳を繰り出す。ギヤスパ―にばかり意識を向けていた二人は咄嗟の事に反応出来ず、勢い良く絶壁に身体をめり込ませた。着地点から放射線状にヒビが入り、次には朱乃と木場は糸が切れた人形の如く、アジアの直ぐ前に転がり伏せた。

ズシリと重圧が増す。アタッカーであるゼノヴィア達は意識不明。自身は攻撃技を一切持たず、ギヤスパ―に至っては論外だ。

敗北は、確定した。

一步、また一步と破滅が歩く。音が重なるたびに死への階段が近くなる。そんな気がした。

そして遂にドラゴンの口が眼前に迫った。無数の牙を見た時。

「もう良いぞ、タンニーン」

不意にリアス、そしてアザゼルが崖上から姿を現したのだった。

—— l i f e . 2 1 魔龍聖 ——

「こいつは^{ブレイズ・ミステイア・ドラゴン}魔龍聖^のの異名を持つ元龍王にして最上級悪魔、

タンニーンだ。龍から悪魔に転生した物好きさ」

悪びれぬ顔で解説するアザゼルにタンニーンが釘を刺す。

「フン、俺が来たのはサーゼクスに頼まれたからだ。——それを忘れるな、墮天使総督殿よ」

「騙すような真似して、ごめんなさいね」

種明かしから暫くの時間が経過した。ドラゴンの襲撃が茶番劇であった事に胸を撫で下ろす一同だった。だがアザゼルの顔付きは陰しい。

「今回の事はサーゼクスの許可を得て俺とリアスが行った、言わば訓

練の一つなんだ。少なくともお前らの弱点や克服すべき点は見えたぜ。——その前に厄介なイベントが横たわってるがな」

タンニンとの訓練を終えた一同はアザゼル達に別れを告げて、グレモリー本邸へと舞い戻った。音楽隊や騎馬隊の歓迎、民衆の声援を受けながら本邸に辿り着くと一人の少年が駆け寄ってくる。

「お帰りなさい、リアスお姉様！ それに眷属の皆さんも!!」

「ミリキヤス！ ただいま、大きくなったわね」

リアスも少年を愛おしそうに抱き締めた。苦悩続きの時間を送る彼女にとって、愛する家族との再会は何物にも代えがたい安心をもたらした。未だグレモリーの家族関係をあまり把握していないゼノヴィア達に、リアスは紹介を兼ねて説明を行う。

「この子はミリキヤス・グレモリー。魔王サーゼクス様の実子なの。つまり私の甥よ」

その言葉にゼノヴィアはミリキヤスを観察した。成程、確かに細かい所はサーゼクスと似ている。尤も、彼女にとってはどうでも良いことだ。

なので挨拶をしてくるミリキヤスにも適当に返しつつ、タンニンとの訓練を思い返していた。

デュランダルが弾かれたという事実は重たい。今までにそんな事態に陥ったことは皆無だった。

例外はコカビエルのみだ。

教会戦士として活躍していた頃は、エクスカリバーとデュランダルという剣の違いは在れど、それを振り回すだけで敵は死んだ。相手は大抵が“はぐれ悪魔”でこちらは聖剣なのだから当然。しかしながら連戦連勝が自分を油断させ、結果として誤ったプライドを築かせたのだろう。

それ故にコカビエルやタンニンの様な強大過ぎる敵、圧倒的な差が在りすぎる者を前にすると何も出来ない。

このまま突き進めば限界を超えられない。

どうすればもつと強くなれる？

考え込むゼノヴィア。そのとき、ミリキヤスの後ろに待機していた

グレイファイアが挙手した。同時にメイドが何人が集合する。

「お嬢様。皆様をお部屋へご案内したいと思うのですが」

「お願いね？ 私もお父様とお母様に挨拶をしないとイケないし」

「旦那様と奥方様は外出しておられます。夕刻にはお戻りになることです。晚餐の席にて、皆様と顔合わせをしたいと申されておりました」

「分かったわ。なら、皆には其々の部屋で休んでもらおうかしら。荷物は届いてるわよね？」

リアスの言葉にグレイファイアは深く頷く。

「はい。お部屋は今すぐお使いになられても問題ございません。お荷物はベッドの上に纏めましたので」

グレイファイアが先を促し、メンバーは屋敷の中へと歩を進めた。

—— l i f e . 2 2 塔城小猫① ——

グレモリー家の現当主であるジオティクス、その妻であるヴェネラナとの晚餐から数時間が経過した。ベランダで一人、自然豊かな景色を眺める小猫は消えてしまった先輩の存在を思い出していた。

兵藤一誠。未だ彼が此方側に巻き込まれる以前から、一誠の噂は絶えなかった

女子更衣室を覗いたり、セクハラ発言を繰り返す最低なクズ野郎。それでいてハーレムを連呼する馬鹿。当時はそう思っていたし、同じ眷属になってから更に強く感じるようになった。女性の前で躊躇無く下ネタを叫ぶのだから当たり前ではあるが。

しかし兵藤一誠が他人の為に努力を重ね、いざとなれば頼もしい男であることも小猫は知った。

そんな彼が“SSS級はぐれ悪魔”に認定されたという情報は、彼女にとつて信じがたいことだった。

『アーシア先輩も救って、リアス部長も救おうとして……！ そんなイツセー先輩が“はぐれ悪魔”になる筈が無いです！ 何かの間違いです!!』

自分の言い分は聞き届けられなかった。魔王サーゼクスが言うには、『兵藤一誠は力に呑み込まれた』らしい。そんな馬鹿と思う。確

かに彼は馬鹿だったが、力に呑み込まれる馬鹿では無かった。

姉と同じ道を歩むようなこと、在る筈が無い。

小猫は信じていた。ならば疑うべきは誰なのか。

その情報を伝えたサーゼクスしかいなかった。

兵藤一誠が行方不明になってしまったのは、あの婚約パーティーの直後だ。彼が健闘空しく敗北してしまった後のことを自分は全く知らない。

ならば裏で何か行われていたと考えるべきだろう。

例えば、サーゼクスがフェニックス家に婚約解消を頼み込んだとすれば、一誠を恐れたライザーが彼に適当な罪を着せて殺そうと目論んだのなら、両家がそれに合意したとすれば、そして一誠がそれに気付いて咄嗟に逃げ出したのなら。

「スケープゴートとして”SSS級はぐれ悪魔”に認定されてしまったとすれば……」

仮説ながら辻褃は通っている様に見えるが、確かめる手段が無い。誰かに相談するという選択肢も存在しない。

先ずリアスと姫島朱乃は却下だ。

リアスはサーゼクスの実妹であり、事情を既に把握しているだろう。リアスの懐刀とも揶揄される彼女は真相を知っている可能性が高いし、相談すれば自分が嗅ぎ回っていることをリアス達に知られてしまう。木場も彼方側に回ってしまうかもしれない。

ギヤスパークやゼノヴィアに至っては論外だ。そもそも事情を知らないのだから。

「アーシア先輩はまだショックから立ち直れていないし……やっぱり私一人で探ってみるしか無い」

グレモリー眷属“戦車”、塔城小猫。

彼女は密かに決意した。

昨夜の晩餐から一夜明け、リアス達は早くから旧首都ルシファードへと向かっていた。

目的は一つ、中央に聳え立つ巨大な城にて開かれる若手悪魔のパティーだ。若手悪魔、旧七十二柱の当主やそれに連なる血族、そして上層部が一同に会するという貴族達にとって最も重要なイベントである。

何せ集まる者全員が隠然たる権力を所有し、“魔王派”・“貴族派”という二大勢力のどちらかに別れているのだ。ここで出来る限り胡麻を摺り、上層部や上位者の覚えを良くしておこうと考える悪魔が多いのも当然だ。

必然、自他の発言や一挙手一投足に意識を集中させなければならぬ。弱味を握る為に、威厳を示す為に。

そうした緊張が渦巻く会場に眷属と共に入場したリアスは、眷属達に小声で注意を促しながらも、自らも魔王サーゼクス・ルシファアの妹として必死に振る舞っていた。

昨夜行われた晩餐。その席での実母の言葉は、彼女にとって少なからず混乱と衝撃をもたらした。

『誰だって貴女は魔王の妹として見る。三大勢力が協定を結んだ今は、貴女の名前と地位も他勢力まで知られる事でしょう。それでも……身勝手な我儘を言うのかしら？』

リアス・グレモリーはこれから先の長い時間を少女リアスでは無く、魔王の妹のリアスとして見られる。

その扱いは彼女が一番嫌う事であり、それをヴェネラナははつきりと逃れられない運命であると告げた。先の婚約解消未遂もあつての発言だった。

事実、と言うべきだろう。彼女を見る貴族達の目は、どう考えても少女を見るそれでは無い。皆が利用価値と将来性を計算し、あわよくばと思っている。

そんな視線に蝕まれていた時に、救いの声は掛けられた。

「よう、リアス。久し振りだな」

会場の片隅に佇んでいた複数の人影、それを率いる男を見た瞬間にリアスも思わず微笑みが溢れた。

「懐かしいわね、サイラオーグ」

——life. 23 若手悪魔達——

武闘家を彷彿とさせる油断の無い立ち振舞い、正装を着込んでも解る屈強な肉体、そしてリアスと熱い握手を交わした男。この男こそ旧七十二柱の序列一位に君臨するバル家の次期当主、そして若手悪魔最強と噂されるサイラオーグ・バルだ。

野性的な笑みを浮かべるサイラオーグはリアスの後ろに控える眷属達を頷きながら見回した。

「俺はサイラオーグ・バル。バル家の次期当主にして、リアスの従兄弟でもある。宜しく頼む」

氣迫に圧されながらも頭を下げるメンバーを他所に、リアスは彼との会話を再開させた。

「それにしても貴方程の悪魔が、こんな片隅で飲んでいるなんてね。堂々と中央で飲んだら良いのに」

「最初はそうしていたが他の奴等が来たから移っただけだ」

その言葉を受けて、リアスは訊ねた。

「あら、他のメンバーは既に来ているの？」

「アガレスやアスタロト、シトリーも来ている。挙げ句にグラシヤラボラスだ。早々にアガレスと言ひ合いを始めたからな」

そう言った直後、会場の中央辺りから爆音と破片が飛び散った。リアスは咄嗟に防御術式を展開し、サイラオーグは破片を全て粉碎して己の眷属を守った。

見れば他の貴族達も術式を展開しているが、顔は笑っている。余興程度にしか捉えていないのだろう。彼等にとつては焦る程の事では無く、それ故に止めに入る者は誰もいない。寧ろ喧嘩を煽る始末であった。

サイラオーグは心底から溜め息を吐くと、中央にて睨み会う二つの集団へと歩を進めた。すると周囲に陣取る野次馬連中は彼のオーラ

に圧され、自然と道が完成する。

野次馬が遠退いた事に尚も気付かない二人の間にサイラオーグは割って入った。

顔に魔術的な刺繍を施した、見るからに邪悪そうな格好の男性。

或いは知的なイメージを抱かせる、氷の様な冷たさを放つ女性。

その両方が目の前に突如として現れた巨漢に思わず後退る。それでも、片方の一団の先頭に立っていたヤンキー風の男がサイラオーグを睨んだ。

「何だ、テメエ！　これは俺とアガレスの喧嘩だ！　部外者は引っ込んでいやがれッ!!」

やや震えながら言い返す男に、彼は拳を構えながら告げた。

「アガレス家の氷姫シーグヴァイラ、グラシヤラボラス家の問題児ゼファードル。これ以上戦うならば、俺が相手をしよう。これは最後通告だ。次の言動次第で俺は容赦無く——お前達を潰す」

全身から発せられる迫力。その鋭い眼光にシーグヴァイラと呼ばれた少女は素直に矛を下げるという道を選んだ。今、此処で仮に抵抗したとしても絶対に勝てない。そう思わせる程の存在感がサイラオーグという男にはあった。

ならばこの場はなるだけ穏便に済ませる方が得策だという答えをシーグヴァイラは即座に導き出した。

それとは対照的に青筋を立てたのがゼファードルだ。彼は自分に絶対の自信を持っていた。

魔力も高い、実力もある。負ける筈は無いのだと、少なくとも自分と眷属達だけはそう思っていた。その自信を胸に彼は魔力をたぎらせながら飛び掛かった。

「バアル家の無能野郎が——」

そして吐き出した言葉は中断せざるを得なかった。

何故なら台詞を言い終える前に、サイラオーグの一撃によって会場の壁に叩き付けられたのだから。

細かな破片が降り、そしてゼファードルは床に落ちた。後に残ったのは首をコキコキと鳴らしているサイラオーグと、呆氣に取られた

シーグヴァイラ達だけだ。

吹っ飛ばされたゼファードルの眷属達が主に駆け寄っていく様子を視界に入れながら、彼は何事も無かったかのように眷属達の元に戻った。

「言った筈だ。これは最後通告だとな」

若手悪魔最強と称される漢の実力、その一端を示しながら。

北欧神話の主神、オーデイン。片眼を代償にして“ミーミルの泉”の水を飲み、膨大な知識を会得したとされる神である。

基本的には傍観主義で陽気な爺だが、いざ戦闘となれば戦槍グングニルを勇ましく振るい、美しさすら感じさせる計略を用い勝利する軍神だ。長い年月を経て衰えたが、北欧という大勢力の頂点に君臨するその実力は健在。

そしてゼウスや帝釈天に並んで、他神話に広く顔が利く神でもあった。

そんな彼は、冥界で執り行われる若手悪魔のパーティーに護衛を連れて出席していた。サーゼクスに神話交友の一貫として招待されたのである。勿論、オーデインには三大勢力と友好を結ぶつもりは全く無かった。

先だつての四神話会談にて主神達が決定した“禍カオス・ブリゲードの団”への支援をより磐石な物とする為、三大勢力滅亡の可能性をより高める為に、三大勢力と友好の兆しを見せている神話、という仮面を被っているに過ぎない。

オーデインが考え付いた計画。それは今回のパーティーで若手悪魔の実力や主要な貴族達の情報を収集し、“禍の団”に横流しするといふものだった。

まさか一神話の代表、それも北欧の主神ともあろう者が大それた事をする筈が無いだろうという盲点を利用したのだ。

「お久し振りです、オーデイン様。ご出席していただきありがとうございます」

会場の上段に設けられたVIP席へ案内をしながら、サーゼクスは頭を下げた。相手は北欧神話の主神、それを差し引いても自分より遥かに年上なのだから会釈程度の社交辞令は行わなければならぬ。

オーデインも内心では憎く思っているものの表面には出さず、出来るだけの笑顔を取り繕った。

「久しいな、サーゼクス。それにアザゼル坊」

「爺さん、それに悪神ロキ。大丈夫かよ、そんな過激派の急先鋒みたいな奴を護衛につけて」

アザゼルに睨まれたロキ。だが特に気にした様子も無く平然と言い返す。その眼中にはアザゼルの姿は無く、代わりに若手悪魔達が映し出されていた。

「……少し黙っていて貰いたいな。見極めるべき者達が見えなくなる」

——l i f e . 2 4 強襲①——

「私はシーグヴァイラ・アガレス、アガレス家の次期当主です。皆様、宜しく願います」

先程の騒動から暫く経過した後、改めて若手メンバーが集まり互いに自己紹介を交わしていた。主人が席に着き、眷属は後方で待機している。

「私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主です」

「私はソーナ・シトリー。シトリー家の次期当主です。宜しく願います」

普段から面識のある二人が続けて挨拶した。それに合わせて優しげな少年も口を開いた。

「僕はディオドラ・アスタロト。アスタロト家の次期当主です。皆さん、宜しく」

そして医務室に運ばれていった為、この場に居ないゼファードルを除けば残っているのはただ一人だけ。当然ながら全員、其々の眷属達も含めた視線が彼に集中する。

しかしそんな状況であろうとも彼、サイラオーグは決して余裕を崩さない。

「俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ。同じ若手悪魔として、宜しく頼む」

こうして次の時代を担う五名が集った訳なのだが、やはり先程同じ若手であるゼファードルを圧倒して見せた男は格が違う。確かに他のメンバーも若手というカテゴリの中では充分優れているし、実力もある。

先だつてのゼファードルにしても決して彼が弱かったのでは無い。彼も見た目や言動で弱く思われているがそれなりに強くはある。

サイラオーグはその程度の実力では無かったという単純な話だ。果たして自分は勝てるのだろうか。

眷属の全力、そして自分自身の全力を総動員して。勝利を掴めるのか。

全員がそう考えていると不意に会場が暗くなり、前に設置された王座にスポットライトが当てられる。座していたサーゼクスは立ち上がると思ひながら演説を開始した。

「諸君、よく集まってくれた。これは次世代を担う悪魔を見定める為、我々の結束を深める為に一定周期毎に行う会合である。そこに集まってくれている若手悪魔達は家柄、実力共に申し分の無い次世代達だ。だからこそ、デビュー前に力を高めて貰おうと思っている」

彼の言葉に呼応するかの様に、彼の一段下に座っている若い男が威厳のある声で告げる。

「昨今、世間を騒がせている過激派テロリスト集団。『禍の団』。不安もあるかと思うが、君達は我々先人が全力で守って見せる。勿論不安もあるかもしれない。自分達も充分に戦える、と思っている者も居るかと思う」

そこで一旦話を止めて、サイラオーグを見た。確かに不満そうな表情ではあったが、表立って言うという選択も出来ず黙って堪えている。サーゼクスはそれを察したのだろう、男の続きを語った。

「しかし、あまりに無謀過ぎる。君達若者を失いたくは無いだ。どうか理解して欲しい」

「……解りました」

彼も一応の納得を示し、サーゼクスは安心したような息を吐いた。

その後は座っている上層部によって今後についての説明が行われた。やがてそれも終わり最後の締めくくりにとサーゼクスは問い掛けた。

曰く、将来の目標。

普通なら少し考え込む。夢を持っている者も言葉を紡ぐのに多少

の思考は行おうし、質問を聞いていた貴族達も思わず考える素振りを見せた。誰しも必ず躊躇する問題。

「――俺は魔王になるのが夢です」

それを迷い無く言い切ったサイラオーグに、サーゼクスや上層部も声を漏らした。彼の澄みきった眼は説得力がある。普段は嫌味しか言わない老人達もこの時ばかりは称賛したし、バル家と仲の悪い貴族達でさえ息を呑んだ。

そしてサイラオーグが更に続けようとしたその時、異変は現れた。

突如として空に描かれた黒い魔法陣。振り撒かれる闇の瘴気が全員に襲い掛かった。

「……まさか、”禍の団”ッ!？」

「襲撃か!」

咳き込みながら結界を展開する一同。やがてそれは二人の存在を吐き出した。

制服を着用した青年とゴスロリの幼女。

一転して戦慄に包み込まれた会場内。その中に塔城小猫の姿は無い。

「さて、どうするかな。俺としては此処で暴れば、今回の目的はある程度達成されるんだがな」

「……我、傍観する」

「おう、悪いがそうして欲しい。これは俺の戦いだからさ」

赤いオーラを放出しながら状況を確認する。視界に入る全員が構えたり、魔力を集めたりと戦闘の準備を行っている様子が見えた。また護衛達も即座に剣を抜き一誠とオーフィスに突き付けていた。

それが何の意味も為さないことは分かりきっているが、少なくとも何もせずに指を加えて見ているよりは心安定を凶れた。

鋼鉄越しに相手が小刻みに震えているのが伝わってくる。此処に待機している者達は全員が例の三大勢力会談への襲撃映像を見ていた。身体能力、魔力質量、戦闘経験。自分達と比べる事すら馬鹿らしい強さを誇るグレイファイア・ルキフグス。

その彼女を一方的に打ち負かした存在が目の前に立っていたら。恐怖を覚えても責められる云われは無いだろう。

「……君が何故、此処に来たのかな。"SSS級はぐれ悪魔"、兵藤一誠」

護衛の動揺を察したサーゼクスは彼等を手で制し、迫力をぶつけながら訊ねる。辺りをピリピリと緊張が駆け巡るが、二人は特に気にした様子を見せない。

それもその筈、一誠はこの場では彼が本気を出せないという事に既に知っているからだ。

当時は悪魔に転生して日が浅く裏の事情をあまり知らなかったが、魔王サーゼクスは滅びの魔力を使う、という情報は裏では有名な話らしく、当然ながらヴァーリ達は既に把握していた。

三大勢力会談襲撃に向けての会議にて一誠はそれを知り、今回の強襲劇への利用を頭の片隅に置いていた。

過去に元主君たるリアス・グレモリーの魔力運用を見ているから解

るが、確かに触れた物体を跡形も無く消滅させる性質を持っている。実際に“はぐれ悪魔”を消し去っているのだから。

ならば、魔王であるサーゼクススの魔力はリアスの物よりも強力だと予想出来る。そうで無ければ魔王等務まるまい。

「ただのパフォーマンスだよ、魔王殿」

「パフォーマンス？」

「三大勢力に恨みを持ってしている奴は大勢いるんだ。これはそんな彼らに向けての挨拶さ。——三大勢力は俺が潰す、ってな」

だからこうして余裕を持って接している。戦場ならいざ知らず、貴族達が集まっているパーティー会場で魔力を放てばどうなるのか。制御技術も磨いてあるのだからそれがそれでも第三者に当たってしまう可能性も充分考えられる。だからサーゼクススは絶対に消滅の魔力を出せない。

一誠は確信していた。尤も、肉弾戦という選択肢もあるので油断は出来ないが少なくとも即死だけは回避出来た。

対して、策に気付いたサーゼクススは苦虫を噛み潰した。魔力さえ満足に使えれば一誠程度は楽に倒せる。それが完全に封じられてしまったのだから。彼は酷く苛ついていた。

その時、一つの影が横切った。一誠の元同僚、木場祐斗だ。造り出した聖魔剣と共に乱入者へ突っ込んで行く。

オーフィスへ後退を指示した一誠は冷めた眼で見ながら左腕を伸ばした。左手に装着された“赤龍帝の籠手”ブリステッド・ギアに意識を集中させ、一気に解き放つ。翡翠の光が会場を包んだ。

「——“フランス・ブレイク禁手化”」

『Welsh Dragon Balance Breaker』
様子を見ていた貴族達が爆風に耐えきれず吹っ飛ばされる。!!!!!!!

何が起きたのか。

確認するために眼を開ければそこに立っていたのは少年では無く、赤い龍の帝王だった。その龍がこちらに向かって突撃してくる敵を確認し、軽く腕を振るう。

すると先端から小さな魔力弾が飛び出す。悪魔でも注視してやつ

と存在が解るサイズの小さな魔力。

頼り無く飛来するそれを、木場は気にもしていなかった。何か小細工があるのかと瞬時に探ってみたものの本当に単純な魔力の粒。例え身体に命中したところで霧散するのがオチだ。

そして数秒という時間が過ぎ去り、魔力弾が目前に迫った刹那。一誠の左手に据えられた宝玉が無情な現実を告げた。

『……Boost』

ピンポン玉サイズにまで跳ね上がる。この段階で漸く木場は理解した。だが既に斬り掛かる体勢に移行した身体は全く言う事を聞かない。最初に華奢な身体に衝突し、骨が音を立て、それでも尚止まる事をせずに一直線に壁へと向かっていく。全身を衝撃が襲った。

「あが………ッ!!」

傷だらけになりながら墜ちていく木場。完全に倒れ伏した後には主達が駆け寄る。アーシアが手を翳し治療を開始する中で、リアス・グレモリーは一誠を睨んだ。しかしそれだけで、他に何も出来はしない。

彼はじつとリアスを見ていた。自分に恐れを抱いた愚かな主君。視界に入る時間に比例して怒りが沸き上がってくる。バサリと鱗に塗れた翼を広げた。勢いで風が巻き起こる中で一誠はリアスを標的と定めた。

そして魔力を発射すべく掌を翳すが――。

「なんだ、これは……？」

一瞬の隙を突いて何重にも黒いラインが巻き付けられる。一定のリズムで妖しく鼓動を繰り返すライン。力が抜けていく感覚に襲われる。

ラインの先を見ると駒王学園の制服を着用した青年が憤怒の表情で立っていた。あの青年は何度か見た事があった。まだ駒王学園第二学年の所属であった頃、朝会にて生徒会として説明を行っていた男だ。

そう言えば会議の話題にも出てきていた。確か、匙元士郎という名前だった。

「捕縛する！ ラインよ!!」

匙の左手に備えられた龍型の神器が叫びに応じてラインの本数を増殖させる。宝玉が輝き、ドライグが忠告を発した。

『相棒、気を付ける。今くつついているラインは恐らくヴリトラ系統の神器だ。急激に力を吸われているぞ』

「……面倒だな。対処法は？」

『素早く宿主を倒した後に、本部で解呪して貰うのが最善だと思う。——ヴリトラ系統の能力は何れも凶悪で、一度喰らえば回復に時間が必要という代物だ。慎重になった方が良い』

的確な指示。一誠は短く頷き、眼だけを動かして匙を見た。恐怖に心を折られながらも進もうとする男の表情だった。あのライザーとのゲーム時に自分もこんな顔をしていたかと思うとほんの少し懐かしさを感じる。

遠くでは、匙の主君であるソーナ・シトリーが必死になって何か喚んでいるのが見えた。彼では絶対に勝てないと既に悟っているから止めているのだ。

それは正しい選択だ。匙と一誠では大きすぎる差があった。何回戦っても一誠の勝利は揺るがない。

それでも彼の眼から見て、匙は強かった。一誠は深い息を吐く。

「……匙元士郎だったか。お前、強いな」

「何だ、馬鹿にしてるのかよ!! お前の方が俺の何倍も強いだろうが!! ラインよ、あいつを縛れッツ！」

重なる二人の声。匙は激情してラインを更に展開した。一誠の右腕がラインに覆われ見えなくなるが、それに比例して匙の体力も減っていく。

彼が所有する“黒い龍脈”は膨大な集中力を要求される技術型の塊テクニックのような神器。ラインが増えるに従ってそれは何十倍にも拡大され使用者の体力を蝕むのだ。

ソーナの下で日夜訓練を行っているとはいえ、匙はまだ十分に神器を扱えていない。その為に今こうして疲弊し、血を吐くまでに消耗している。

一誠から体力を吸収しているが追い付かない。そして遂に神器が姿を消した。床に両手を突き、それでも一誠を睨む事は忘れない。

「匙!!」

ソーナが対峙する二人の間に割って入った。暴風に転がされズタボロにされながらもしつかりと床を踏み締め匙を庇った。

「ソーナ様……逃げて下さい。守られる筈の主が眷属を庇うなんて、本末転倒ですよ……」

「私は絶対に此処を離れません！ 眷属を守るのは主君たる私の努めです!!」

普段冷静なソーナが取り乱しながらも一眷属に過ぎない自分を庇う。主君と眷属の関係という点では誉められた行動では無い。

しかし、悪魔として見た場合は――。

「私達も貴方を守ります!」

「元ちゃんは私達を何度も助けてくれたからね!!」

「シトリー眷属、全員集合！ 匙君を助けるわよ!」

足音、次いで慌ただしい動きで幾人かの少女達がソーナの横に集結した。全員、覚悟を決めた顔だった。眷属達の思いもよらない行動にソーナは珍しく驚いた仕草を見せる。

「貴女達……」

動揺する彼女に、眷属の一人であり最も付き合いの長い椿姫が叫んだ。

「ソーナ様、御命令を！ 二天龍にたった一人で立ち向かった勇者を守れと!! そう言つて下さい!!」

良い眷属を持った、とソーナは深く椿姫達に感謝した。

彼女は冥界の闇をある程度、姉であり魔王でもあるセラフォルから聞かされていた。眷属を馬車馬のように扱う非情な貴族が存在する事を知っていた。

それを反面教師に、自身が将来持つであろう眷属達には誰よりも優しさを注ごうと決意した。何時か姉の後を継ぎ魔王となり冥界を変えろと言う壮大な目標を定めていた。

ソーナの描いた冥界。誰かが誰かを思いやる理想郷。その縮図が

目の前にあった。

絶望的な状況だと言うのに、何故だか優しい微笑みが込み上げてきた。勝てる気はしない。しかし無様に負けるとも思えない。気付けば彼女は頷いていた。

「——シトリー家次期当主、ソーナ・シトリーの命令です！ 私達全員で匙を守りますよ!! 誰一人として欠ける事無く!!」

ソーナ達の宣言。何と凛々しい事だろうか。だが余裕は崩れない。

一誠は連続して放たれるドライグの音声を聞きながら黒い笑みを浮かべる。先だつて完了を示す魔法陣が耳元に出現したからだ。

作戦が第二段階に突入した合図。倍加され膨れ上がった身体能力を確かめながら、一誠はじつとソーナを見据えた。

l i f e . 2 6 塔城小猫②

—— l i f e . 2 6 塔城小猫② ——

遡る事、四十分前。

首都リリスを一步出れば、広大な森林が横たわっている。ある程度の実力者で無ければ立ち入る事が許可されないその森は、巨大な魔獣が我が物顔で闊歩している危険地帯だ。

リリスとの境目には強固な結界術式が展開されている為に本来ならば問題無いのだが、今日に限って術式の一部に穴が開けられていた。

丁度、子供が一人通過出来る大きさだ。

闇夜という表現が相応しい森を、塔城小猫は必死に走っていた。その少し前を彼女と同じスピードで一匹の黒猫が駆けている。黒猫から微かに発せられる黒い魔力を探りながら、小猫はひたすらに足を動かしていた。

道中、何体かの魔獣とすれ違いはするが、しかし何かに怯えたように獣達は逃げていく。

やがて奥に進む程魔獣の姿が見えなくなる事を察した小猫は黒猫が向かっている先に実姉が居ると確信した。きつと魔獣達は姉の魔力に怯えているのだ。

駆け抜ける事、数分。森の中心に辿り着いた彼女を迎えたのは古い大樹だった。

その根元に姉は立っていた。

「黒歌、姉様……！」

「久し振りね、白音」

音も気配も無く歩いてくる姉、黒歌。不意に悪寒が背中を走り思わず後ずさる。彼女の着ている黒い着物が揺れ、次には小猫の背後で黒歌が微笑を浮かべていた。

「ねえ、昔話をしてあげようか」

驚く小猫を他所に彼女はポツポツと昔話を語り始めた。

「ある所に猫又の姉妹がいました。二人は何時も一緒でした。両親が

病死して、家も身寄りも失って。二人は天涯孤独でした」

二人はある日、貴族悪魔に拾われた。姉が眷属になった為、妹も屋敷に住める様になった。二人はこれで平穏な時間を送れると信じていた。

しかし、その生活も長くは続かなかつた。

「姉は仙術の才能が高く、魔力量も群を抜いていました。主君である悪魔は妹の方も才能があると思いました。そして契約を破ろうとしました」

愚かな主君は、まだ未熟な妹猫に仙術を覚えさせようとした。だが仙術はとても危険な術だ。もし妹猫が扱おうものならば最悪の場合命を落としてしまうだろう。姉猫は懸命に説得しようとしたが、悪魔は聞く耳を持たなかつた。

「そして姉猫は主君を殺した。——妹猫を守る為に」

小猫は昔話の先を続けた。俯く小猫の言葉に、黒歌は頷いた。

「……姉は“はぐれ悪魔”にされちゃって、妹ともすれ違つた。姉は妹猫を救えなかつたの。それだけがずっと心残りだった。——ごめんね、白音」

涙の音だけが背中に溶けた。風の声に混ざり、身体と一体になっていく。煌めくドレスも昔話の続きも先ずは関係無かつた。きつく抱き締められ苦しくなつたが、それ以上に嬉しく感じた。

二人の姉妹猫は黙って泣いていた。

パーティー会場で黒歌の魔力を宿した猫を目撃した時、畏かもしれないと恐怖した。被害を出さない為にと敢えて一人で乗り込んだ。主を殺す姉の姿は今でも鮮明に思い出せる。

それ程までに恐ろしい存在であった黒歌が、小猫の小さな背中で嗚咽を漏らしていた。今までのイメージが根本から洗い流されていく感覚だった。

それから暫くして黒歌は着物の裾で涙を拭き、しっかりと小猫を見据えた。赤く腫れたその眼は泣いていなかった。

「今日、私が冥界にやって来たのは白音を助ける為。白音に、私や赤龍帝のような道を歩んでほしくないの」

その言葉に小猫は眼を見開いた。何故、姉が赤龍帝である一誠の事を話題に出したのか。真剣な表情で黒歌の肩を掴む。

「一誠先輩がどうしたんですか!? 教えて下さい、姉様!!」

「そこから先は、本人に訊いて欲しいにや。こういうのは私の口から言えないからね」

「……それはつまり、”禍の団”に入れと?」

黒歌は、暗にグレモリー家を裏切れと言っているのだ。

上層部に殺されかけた自分を救ってくれたのはサーゼクス並びにグレモリー家の面々。裏切る真似はできないが、一誠の件で不信感があるのも事実だ。

迷いを見せる彼女に黒歌は更に言葉を紡ごうとするが、直前に上空から焰が吐かれる。

大質量の火焰は無防備な二人を襲うが、横から飛来した一本の長い棍によって防がれた。龍王クラスの火炎をまともに受け止めて尚傷一つ無い棍は回転しながら、樹の影から出てきた三国志の武将風の姿をした男の手元に戻った。

「空ぐらい警戒しとけよ。元龍王が入ってるぜい!」

「周辺には結界を展開していたのに。こうもあっさり術を破るなんて、流石は”魔龍聖”ね」

空中高くから風を切る音が聞こえた。見れば紫を基調とした体躯を誇る巨大な龍が翼を広げていた。口からは微かに火の粉が舞っている。

「ふん、パーティー会場から焦って出ていく小猫嬢を見かけて後をつけてみれば。——貴様らはもしや”カオス・ブリゲード禍の団”か。捕まえてサーゼクスに引き渡してやる!!」

「おうおうおう! やってみろ、タンニーン!! 俺たちは美猴! 宜しく頼むぜ、ドラゴンの大将さんよお!!」

「小僧が、図に乗るな!!」

叫ぶ美猴の足下に光輝く雲が出現し、タンニーンへと一直線に飛び出していく。自由自在に棍を操り巧みに攻撃を加えようとするも全く当たらない。

体勢を崩した直後に本気のブレスが叩き込まれる。

一瞬の輝きと共に森が焼失した。空が赤く染まり、地には大穴が抉じ開けられる。それがかつて龍王を名乗ったドラゴンの実力だ。

まるで隕石が衝突した跡の如く全てを更地にしたが、肝心の美猴自身は多少煙こそ出ているが目立った外傷は無い。

「あぶねえ！ やるじゃないの!!」

「フン！ 孫悟空の末裔が何を企んでいる!!」

「知りたきや俺っちに勝つ事だねい！」

「ほぎくな、猿がッ！」

繰り返される孫悟空と龍の戦闘。触れた物を燃やし尽くす焰から小猫を庇いつつ、黒歌は魔力を練り始める。

「姉様!!」

「大丈夫！ 私達は元龍王なんかに負けないから!! 白音は私の後ろに隠れてなさい！」

「——はいッ！」

炎の熱気を感じながら、小猫は姉の背中に身体を預けた。

「闘戦勝仏」と恐れられた孫悟空の末裔、美猴。

元龍王の肩書きを持つ最上級悪魔、タンニン。

兩名の神話を越えた戦いは木々を散らしながらより激しく加速していった。

「イイヤツハアアア!! 良いね良いねえ!!」

「猿がちよこまかと動きおつて!!」

「そう言うお前もデケエ身体して中々に速い! こっちの攻撃を紙一重で避けてやがるぜい!!」

美猴が如意棒を構えながら得意気に冥界の空を飛び回り、対するタンニンがそれを追跡する。風を斬る攻防が繰り広げられる空中を、黒歌は妖力を練りながら観察していた。

その背中には、実妹である小猫が不安げな表情でもたれ掛かっている。

先程の謝罪もあつて背中に触れてくる程度には関係が修復されたが、未だ動きにぎこちない部分も見えた。長年に渡るすれ違いは完全に溶けた訳では無いが、逆に言ってしまうえば昔のように笑い合える余地が残されているということだ。

だが仲直りに至るには先ず此処を抜けなければならない。

黒歌は固く手を握り締める。

「やってやるわよ……妹を守るお姉ちゃんは強いのにや!!」

頬を叩き、妖力を高める為に息を整えた。

音が停止し、風が消え去る。何百もの東洋文字を描いていく黒歌を中心に、巨大な渦がゆつくりと動き出した。何万年も生きてきたであろう生い茂る森林から、その樹から顔を出す小動物達から翡翠の生命力が吸いとられていった。

うねりを見せながら文字の集合体たる黒曜の魔法陣が彼女の足元に染み渡って行く。

その異変は全員が察知した。馬鹿げた質量の妖力。他ならぬ黒歌自身の、上級妖怪としての力だ。

耐性の無いタンニーンや今まで格闘に才能を費やし妖力から目を逸らしていた小猫は嫌悪感を覚えたが、自身も妖怪であり彼女以上の仙術の使い手でもある美猴は特に目立った反応は無い。それどころか、自分の近くを通っていく生命力を摘み食いする始末である。

「何だ、あの小娘……!?! 急に力が上昇している!」

タンニーンは絶大な魔力に気を取られた。戦場においてその隙は致命的で、瞬き一つの間にも美猴が詰め寄る。

「食ったら力が湧いてきた! 行くぜい、必殺の——」

拳に妖力を迸らせ、身長を越える大型の術式を造り上げた。

経験豊富なタンニーンは、虚を突こうと敢えて飛び込む準備を整える。術式は光を増して金色に輝き、それに呼応するかのように如意棒も色を朱から黄金へと塗り直した。

そしていざ飛ばうとしたタンニーンの顔に、

「ぐわあっ!」

——大量の砂が投げられた。

「眼が、俺の眼が!! 何も見えぬぞ!!」

苦しそうにもがく龍。その前には悪戯な笑みを浮かべた美猴が砂まみれの拳を広げていた。術式は消え、如意棒も元へ戻っている。ケラケラと笑い声が聞こえた。

「どうよ、俺の二千個の必殺技の一つ! 目潰しは!!」

「クソ猿めが!! 殺してやるぞ!!」

「およよ、怒ったねい。カルシウム足りてるのかよ」

砂が取れていない眼を擦りながら叫ぶタンニーン。その様子を楽しんでいた美猴だが不意に笑みを消した。純粹な殺意を帯びながら告げる。

「二つ訊きたい事がある。——何故、黒歌と一緒に白音ちゃんまでも攻撃した?」

「あれは威力を抑えた牽制だ! でなければ、あの時点で小娘共々火炎にまみれて死んでいる!」

「どうだかな。お前は龍王とまで称された元ドラゴンだ。転生したのも同胞を守る為。本心では悪魔の一人や二人どうなつても構わない

「……そう思ってたんじゃねえの？」

「……」

「ま、お前の本心なんか知らんけどな。では二つ目だ」
普段のふざけた笑みに表情を戻し、彼は告げる。

「——さつきから俺にばかり注意を向けているけど良いのか？」

光が収まった。それは嵐の前の静けさ。巨大な魔法陣ははち切れんばかりに膨れ上がっている。照準は空に浮かぶタンニーン。

操る黒歌は不自然なまでに無表情だった。

「姉様……」

「……何かにや、白音」

小猫は、震える姉の手に自分の真つ白い手を重ねた。小猫と比べると彼女の手は大きくとても頼りに、そして儂く見えた。

「今度こそ、離しませんから」

その意思を込めてしつかりと握った。もう震えは無くなっていった。言動の意味が解らず暫くキョトンとしていた黒歌だが、やがて気付いた様子で微笑む。

「いくよ、白音!!」

「はい、黒歌姉様!!」

——風が切り裂く。水が穿つ。雷が駆ける。焰が迸る。集え、八百万の森羅万象。見えざる力を持って我に道を示せ。

翠、蒼、黄、紅。四色の妖力が黒歌の周囲を飛び回り、天に跡を描いていく。雄大で美しいその姿は見る者を圧巻する舞踏のようだった。

小猫は何時しか涙を流していた。傷だらけの過去が癒されていく心地よさを感じたからだ。

四の色は混ざりあい銀となり、そして純白の滴が最後に染みる事により、銀は金色へと昇華されていく。金の光はとても暖かだった。

この光は、楽しかったあの頃を羨む光でも無く、真実を悟ったこの時を嘆く光でも無い。

姉と描くこれからの未来を夢見る暖かさだ。

「——我は導きし者なり!!」

二人の透き通る声。拡げられた東洋文字を順に詠う。そして全てが読まれ、絶望が覗いた。

「――大禍津日神!!」

黒と白が入り乱れた螺旋の閃光。銀雷を纏いながら直進する莫大なエネルギー凝縮体。

迫りくる閃光を目前に、タンニーンは翼を展開し避けようとするが、不意にズキリと視界が揺れた。

離れた所に避難した美猴が、砂がついた手を見せびらかしていた。

「残念だがお前が浴びた砂は、俺の妖術仙術ミックスで強化された特殊な代物でな。一瞬だけ強烈な頭痛を引き起こすんだ。でもその一瞬は致命的だろ? ——じゃあな、ドラゴンの大将さん」

「無念……」

全身を切り刻まれ、焼かれ、そして散らされる。後に墜ちてきたのは焼け焦げた肉片だった。

息を吐きながら膝を突く黒歌。咄嗟に小猫が抱え、木陰へと連れ走る。心配そうな顔の妹を見ながら彼女は訊ねた。

「……で、白音はどうする?」

“禍の団”に加入するのか、否か。

タンニーンに乱入されて聞きそびれたが今は邪魔者はいない。小猫は瞑目した後、口を開いた。

「私はイツセー先輩の一件の真相が知りたいです。しかし姉様の手を借りずとも私は一人で調べるつもりでした。……ただ、このまま続行すれば間違いなく私も殺されてしまうでしょう。それ程の何かが裏にあると思います」

「なら……」

白い頭がゆらりと揺れた。

「私は姉様の元に帰るだけです」

やっと言える。随分遠回りをしてしまった。けど、だからこそ。

こんなにも嬉しい。

「……お帰りなさい、白音」

「……ただいま、黒歌姉様」

木陰の中で姉妹は笑った。涙を流す黒歌の耳元で小さな魔法陣が
赤く点灯していた。

— l i f e . 2 7 塔城小猫③ —

良い眼をしている。

彼女達に対しての感想はそれだった。敵への恐怖をバネに普段以上の実力を引き出す。油断はしない。持てる全てをぶつける。それでも懸命に今向かい合っている彼女達はすがり付くだろう。

球状に練られた魔力、鋭い鋼鉄の薙刀、或いは徒手空拳。

彼女達の手が僅かに震えているのが見えた。しかし顔は不自然なまでに笑みを浮かべている。

より警戒を強めながら、一誠は訊ねる。

「……何故、笑っていられる」

「さあ、何故でしょうか。私にも解りません」

“王”であるソーナは後を続けなかった。にも関わらず彼は質問に対する答えを聞いた。

——眷属を信じているから。

何処からか、リアスの声が染みだ。どうやら未だ拭う事ができていないらしい。込み上げる物を感じながら首を横に振る。

「やはり、お前の方がずっと強いよ。匙」

「ええ、匙は強いです。彼は命懸けで二天龍を倒そうとした」

だから、とソーナは口調を強める。

「私は兵藤一誠を討ち取ります」

対峙する二人を見ていたセラフオルーは、咄嗟に翼を上げた。実妹たるソーナを守りたいが故の行動だったが、空中から降りてきたオーフィスが立ちはだかる。一誠の邪魔をさせたくなかったからだだった。

セラフオルー如きではオーフィスを降せない。つまり介入手段を完全に絶たれたのだ。歯軋りをしながら悔しさまぎれに怒鳴る。

「どうしてオーフィスがテロリストに協力するの!?! 理由は何!?!」

セラフオルーと対峙しながらも彼女は一誠に視線を向けていた。何処か神秘的な雰囲気だが、恐ろしさもあつた。

全てを凍り付かせる、引き込まれるような独特のオーラ。怒りもせず、笑いもせずに淡々と答える。

「赤龍帝の隣にいて、確かめたい。それだけ」

「確かめる……!? 一体、何を!」

「――始まる」

間延びした声でオーフィスが呟いた。

——l i f e . 2 8 強襲③——

倍加された身体能力を駆使して、一誠は高速でソーナに詰め寄る。指揮官さえ一撃で倒せば、後は戦わずとも墜ちると判断したからだ。

瞬時に魔力弾を撃つも、彼女の前に何重にも展開された防御術式に阻まれる。しかし完全には防ぎきれなかったようでヒビが生まれた。

罅が広がる速度が異常に速く、シトリー家の紋章が刻まれた術式は次々に砕け散る。そして、最後の一枚が消え去った。

瞬間、彼の視界を覆ったのは水蒸気だった。魔法陣が存在していた場所から大量の蒸気が噴き出し、一誠だけでなく会場全体を埋め尽くす。

ソーナの姿を見失い、しかし即座に次の策を練る一誠。

「……霧、か」

可能性としては、視界を塞いでいる間に大掛かりな術式の準備を行うか、眷属達が事前に取り決めた配置に着いて数で圧倒するかの二択だ。

少なくとも後者はソーナに限っては考えにくい。事前調査によると彼女は計略を得意とするらしい。シトリー家の特色である水を操り、魔力操作技術にも長けている。今更数に頼るという下策は取らない筈だ。

では、大掛かりな術式はどうだろうか。そもそもどのような魔法なのか。貴族が集まるこの会場で魔力弾やそれに準ずる魔法は撃てない。

他に考えられるとすれば転移魔法であるが、それだと水蒸気を展開した意味が無い。

どうしたものか、と長考する一誠。その時、ゆらりと蒸気が揺れ、人影が現れた。失望の眼で魔力弾を放つとそこにあつた影は消えた。パシヤリと水が跳ねる音がした事から先程の影は水人形のようなのだ。

辺りを見回すと、既に人影に完全包囲されていた。本体である彼女や眷属の姿は無い。

「消耗が狙いか？」

何か言い知れぬ違和感を覚えながら、人形の殲滅に力を注ぐ。発射音と破裂音が交互に響き瞬く間に数を減らしていくが、時間が経過する程に気持ち悪さが大きくなった。頭の中で鈴が警報を鳴らす。

見たところ彼等は何の能力も術式も仕掛けられていない単純な操り人形。戦力には程遠い粗悪な存在だ。不気味で静かな戦いだった。今も敵からのアクションは無い。人形が倒されている事は本人が一番知っている筈なのに行動を起こさない。

『敵も随分と水人形を造ったな』

宝玉からドライグの呆れる声が聞こえた。

「全くだ。お陰で滑りやすくなって——」

瞬間、違和感が確信に変わった。飛ぼうとするも遅く、床から出現した無数の槍に襲われる。絶え間なく繰り出される水の槍を避け、更に横合いからの一閃も首を捻って逸らした。

見れば眷属達が得物を構え集結していた。そして水の跳ねる音と共に、ソーナが一誠の前に姿を見せる。

「……水蒸気や人形はフェイク。本命はぶちまけられた水で作成した槍、そして眷属の襲撃か？」

「ええ。普通は人影に注意が向けられますし、周囲が霧に包まればより警戒を強めます。人形を倒す事で床に蒔かれる水こそが狙いだとは気付きません」

「槍に驚いた隙に眷属達が俺の首を取る、か。良い作戦だが、俺の前にこの顔を出すとは油断が過ぎたな」

首をポキポキと鳴らす一誠。しかし、尚もソーナは余裕を崩さなかつた。背後から現れる巨大な影。

「確かに私達の実力では兵藤一誠を討ち取れない。——それなら、倒せる者にバトンタッチすれば良いのです」

直後、膨大な闘気と息の詰まる敵意が一誠を襲った。そのオーラの持ち主には心当たりがあった。

彼はある意味で注目していた漢だ。何時か拳を交えるだろうとも考えていたがこんなに早く戦うとは。

いや、このパーティーに殴り込む時点で待ち望んでいたのかもしれない。

ドラゴンは戦いを呼ぶ。

以前に聞かされた言葉を噛み締めながら、男を見据えた。

「俺はサイラオーグ・バアル。お前を倒す男だ」

「……俺は説明しなくても良いだろうか？」

若手悪魔最強の男が、目の前に立っていた。

立ちほだかるサイラオーグ。彼は何度か軽く身体を縦に弾ませ、次に一誠の背後から蹴りを放った。

勢いよく踏み込んだ事で得た跳躍、その力の方向を強引にねじ曲げて撃つ。余程体術に秀でていないと出来ない芸当。幼少から鍛え上げてきた彼だからこそ可能となった力技だ。

「……背後かッ！」

意表を突いた攻撃。動揺こそしたが、的確に受け止める。ぶつかり合う衝撃が響いた。猛攻は終わらない。二度、三度。連続して繰り出される蹴りと打撃。

避けられても尚、今まで以上の力で殴り付ける。強固な龍の鱗を全身に再現した“赤龍帝の鎧”を素手で攻撃すればどうなるのか。当然肉は削がれ、骨は折れる。

痛々しい光景に様子を見計らっていた眷属達は思わず眼を逸らすも、ソーナだけは現実から逃げなかった。

会談の記録映像を何度も見直した。パーティー襲撃の可能性を危惧して作戦を立てた。全員でハードな特訓をこなし、時にはセラフオールの眷属達にも手伝って貰った。

だが、遠い。若手悪魔最強がまるで相手にならない。いや、そんなことは最初から分かりきっていた筈だ。グレイフィアでさえ圧倒されていたのに自分達で勝てる筈が無いのに。それでも戦わなければならなかった。

護衛の兵士は使い物にならず、グレイフィア達は魔王や賓客であるオーデインを護らなければならない。上層部や貴族達は恐怖で動くともしない。結局は自分達が独自に動くしか無かった。

「……届かない、ずっと遠い！」

焦燥は混乱を呼び起こし、混乱は敗北を招く。そして敗北は死へと誘う。だが諦める事だけはしたくなかった。

「俺は冥界の敵であるお前を倒す!!」

「……やってみろ」

互いの拳が、意地が、ぶつからなかった。

倍加を重ねた一撃はサイラオーグのそれを正面から叩き潰した。ミシミシと骨が歪み、それでも止められずに回転しながら床にと叩き付けられた。咄嗟に左へ転がる彼を、赫の魔力弾が襲撃した。

紙一重。

頬に線が入るがギリギリで回避する。水蒸気に砂煙が混じった中を一直線に突き進んでいく。

「シトリー、援護をッ！」

「解りました！——水よ!!」

ソーナの号令に応じて床に蒔かれた水が形を造った。球状の弾を何重にも造り上げ、その上をサイラオーグが飛翔する。そして渾身の力で叫んだ。

「俺はこの力で冥界の危機に立ち向かうと決めたッッ！ 来い、レグルスッ!!」

その瞬間、周囲全てに烈風が発生した。冷たい連鎖が巻き起こり、金色の双眼が瞬く。

駆けるのは六メートルを超える巨大な金獅子。力強い躍動を続けながら主君である彼に並ぶや否や、瞬時にサイラオーグの身体を獅子と同じ色の気迫が覆っていく。獅子は巨大な咆哮を放ち、光となって主に重なった。

誰よりも高らかに力強く、彼は叫んだ。

「我が獅子よッ！ ネメアの王よッ！ 獅子王と呼ばれた汝よ！ 我

が猛りに応じて!! 衣と化せエエエツッ!! ——バランス・ブレイク禁手化!!」

会場が震え、閃光が空間を支配する。光が終わった後に現れたのはアーメイ全身鎧を着込んだ黄金の獅子王だった。

胸部に獅子の顔が装着され、肩には獅子を思わせる紋章が刻まれている。兜には金毛が光を散らしており、さながらたてがみの様だ。

事態を見ていた一誠が感心する中で、宝玉が助言を告げた。

「相棒、あれはロンギヌス神滅具だ。初代ヘラクレスが討伐したネメアの獅子だと予測している」

「どうして神滅具ロンギヌスが独立して動いてるんだ？」

赤い龍の波動はまだ終わっていない。

「まさか墜とされるとはな」

—— l i f e . 2 9 強襲④ ——

全くダメージが通っていないのだろう、肩をグルグルと回している様子からも未だ余裕が残っている事が解る。傷の一つすら無い、開きすぎた差。

サイラオーグ、ソーナの両名は単純に戦慄するしか無かった。

「様子見の為に手加減こそしていたが、力を見誤っていたということか。これは反省だな」

「やはり本気を出していなかったのですね……」

欠伸する一誠にソーナは鋭い視線を送る。主戦力であるサイラオーグは重傷を負い、獅子は力が不安定。自分達では実力不足。

ならば、とソーナは敢えて前に進み出ると話を切り出した。

「……教えてくれませんか。貴方がリアスを裏切った理由。私達は単に暴走したとのみ聞かされているのです」

「時間稼ぎか？」

彼女の目的は見透かされていた。しかし、続けなければならない。

「その通りです。ですが、知りたいのは本当です」

暫くの沈黙が訪れた。何かを考えているような仕草。そしてフェイス部分のみ鎧を解除した。

ソーナは初めて一誠の顔を直接見た。自分達が知っている兵藤一誠とは程遠い、何処までも冷たい眼差しをしていた。

「……簡単に話そうか。ライザーとの戦いの後に、俺は襲撃を受けた。そいつらは冥界上層部、そしてサーゼクスから殺害命令を受けたと自慢気に語ったんだ」

「……ッッ!？」

衝撃だ。明かされていた情報とは全くの正反対である真実に彼女達は驚愕した。予想すらしていなかった。まさか上層部までも関わっているとは誰が考えるだろうか。

敗北したから、殺す。そんな理不尽があるのか。

もしや姉も関与しているのか。気持ちを落ち着けながら、しかし

様々な憶測が頭を過る。

「それが本当なら、私達は……」

「だから俺は復讐を目指す。対象はサーゼクスや上層部の政府首脳陣、ライザー及びフェニックス家。そして……」

一誠は、顔を歪めながら天井に視線を向けた。

「信じるかはお前次第だ。——帰ろう、オフィス」

何時の間にか、彼の肩にオフィスが座っていた。華奢な足を揺らしながら彼女は魔法陣を地に描き、尾を噛む蛇の紋章を浮かび上がらせる。二人が消え去った後には何も残らなかった。

しかし、ソーナやサイラオーグ達、次世代の悪魔には、確かに疑念が芽吹いたのである。

“SSS級はぐれ悪魔”の兵藤一誠によるパーティー襲撃から今日で三日目となる。悪魔陣営には幾つかの変化が訪れた。

その最たる例として、若手悪魔達の評価の変動が挙げられる。パーティーに出席していたサイラオーグ・バアル氏とソーナ・シトリー氏の両名は、会場に乱入した兵藤一誠を短時間とは言え足止めし、最終的に撤退まで粘った点を讃えられ、政府上層部からの評価が急上昇した。

特に命を削り必死の覚悟で“SSS級はぐれ悪魔”と戦った匙氏は、将来を支える人材として各方面から注目を浴びつつある。現在はシトリー家の屋敷にて治療を受けているが発表によると命に別状はない模様。

一方、同じく出席していたリアス・グレモリー氏の評価は散々である。

兵藤一誠が彼女の元眷属だったからであり、尚且つ襲撃当日には眷属である塔城小猫氏を連れ去られたからでもある。「兵藤一誠をはぐれにした事実、優秀な悪魔を連れ去られた警戒の無さ。与えた損失は無視出来ない」と政府はリアス氏を酷評した。

加えて、「三大勢力会談襲撃にも兵藤一誠は参加した。このままでは他神話勢力にも影響を与える」と発表し、兵藤一誠を始めとする、テロリスト組織“禍の団”への警戒を強める方針を明らかにした。

若手悪魔活躍の影に隠れがちだが、その他にも変化した部分はある。その例がタンニン氏の戦死だ。

絶滅寸前のドラゴンを援助していた同氏が不在となった事により、今まで彼の保護を受けていたドラゴン達はその立場を危うくしてしまったのだ。

一応はタンニン氏の主であったメフィスト氏が代理として世話をしているが多忙故にどうしても眼が届かない場合も多い。



「……ドラゴンの幼体は密猟者に狙われやすいので早急に対策を講じ

なければならぬ、か」

パーティー襲撃作戦から暫く経過した、ある日の朝の食堂。一誠は冥界で発行されている新聞を読みながら、自身の計画がもたらした影響を確認していた。

一面に大きく取り上げられているのはやはり若手悪魔パーティー襲撃事件であり、どのメディアもこぞって彼の顔写真を掲載していた。

「上層部め、グレモリーに上手く責任を押し付けたか。ま、それが狙いでもあるけどな」

今回の件で一誠は改めて世間に広く認知される、云わば三大勢力にとつての敵役となった。彼が目立つことは上層部にとつては好ましく無い。

一誠が報道されると彼を調べる者も現れてくる。興味本意か、きな臭さを感じてなのかは解らないが、そうなるとう真相を知られる可能性が大きくなってしまふ。もしも知られば相当面倒なことになるだろう。

息のかかったメディアには、力に飲み込まれた、と報道させたのかもしれないが、全てのメディアを抑えた訳では無い。どんなに小さい芽でも摘んでおくに越したことは無いだろう。

そんな思惑があつて、上層部は世間の疑惑を逸らす為にもリアスに責任を押し付けたが、当然彼女の評価は下がった。表向きの原因自体には非が無くても、元眷属が重要な公式行事に襲撃を仕掛けたのだから、非難の声はリアスに集中した。

つまり、上層部が事実を認めようが、リアスが矢面に立たされようが、どちらに転んでも結局は一誠の思惑通りになるのだ。

「君の知略には恐れ入る。こゝも容易く連中を陥れるとはね。しかも黒歌の願いまで叶えながら」

対面に座るヴァーリが感嘆の声を漏らした。それに対して一誠は首を横に振った。

「ドライブのお陰だ。俺は適当に暴れただけさ」

膝上で揺れるオーフィスの頬を撫でながら、ゆっくりとそのときの

やり取りを脳裏に浮かべた。

—— l i f e . 3 0 黒歌 ——

「悪魔側で式典とか、誰かのパーティーとかさ。重要なイベントは無いのか？」

質問された曹操とゲオルクはキョトンとしていたが、質問を理解するとそれに対する答えを口にしようとした。だがそれよりも少しだけ早く、更に来客がやって来た。

トレーニング室に訪れたのはヴァーリともう一人、着物を着崩した美女だった。

各派閥合同会議で何度か見た覚えがある、と思い出しながら一誠はヴァーリに訊ねる。

「そっちの女性は誰だ？」

「まだ紹介していなかったな。俺のチームメンバー、黒歌だ。今回は彼女の望みを手伝ってほしいと思って連れてきた」

「……黒歌、だったな。取り敢えず話してみてくれ。場合によるが、サーゼクス共の利益にならないのであれば手伝うのは構わない」

黒歌と呼ばれた女性は、冷たい眼差しから微妙に視線を逸らしながら口を開いた。

「実は私には妹がいるのだけれど、妹は現在冥界で暮らしているのにや。だから、妹を奪還する手助けをしてほしいにや……!!」

頭を下げる黒歌を見ながら一誠は考えた。

何故、それを自分に言うのか。そんなことを態々言いに来る余裕があるなら助ければ良い。

それこそ力不足ならヴァーリに頼めば良い。時間を割いてまで助けを求めに来た理由が分からなかった。

「……私と妹は早くに両親を亡くし、二人で生きてきた。そんなある日に貴族悪魔に声をかけられ、私は生活の安定を願って眷属に志願したにや。……でもあの悪魔は妹に無理矢理、術を覚えさせようとした！ 未熟な妹が使ったら死に至ってしまう!! だから……」

「殺したのか。主を」

「うん。それで私は“SS級はぐれ悪魔”に指名手配された。追手との

戦闘が激化する中で、妹は捕らえられた。今はある貴族悪魔の下で眷属になっている。——だから、救出したい」

彼女は涙を浮かべていた。一誠はやはり冷たい眼のままであった。大体の事情は把握した。

ただ、彼に手伝いを要求した点は未だ疑問のままであった。最後にそれだけを聞いておきたかった。

チラリとヴァーリの方を見た。ヴァーリは何も言わなかった。

「質問だ。何故、俺に協力を求める」

「……妹はある貴族の眷属になったと言ったけど、その貴族が問題なのによ。貴族の名前は——リアス・グレモリー」

その言葉に、彼は一気に漂う波動を変えた。静かだったオーラは激しく揺れ動き、殺気が溢れ出した。

幹部クラスであるゲオルクは勿論の事、実力者だと自負する曹操やヴァーリすらも汗を流す。濃厚すぎる殺意が形となって絡み付く感覚に陥った。

そして正面からオーラをぶつけられている黒歌は信じられない物を見た。一誠の背後に集まる赤い殺意。粒子となって飛び交うそれが風と共に集まり、トレーニング室を覆い尽くした。

巨大な翼を広げ、塵のように自分達を見下ろす姿は正しく、遥かな古の時代に三大勢力と激戦を繰り広げた、赤龍帝。

「その妹さんは、小猫か」

蜥蜴のように細長い瞳孔。龍の帝王が既に全身を砕かんとしている限界状態。黒歌は千切れる程の勢いで首を縦に振った。

「……そうか」

瞑目し、どうしたものかと思案する。一誠の復讐対象はあくまでも自分の殺害計画に関わった者だけで、眷属に過ぎない小猫は対象外だ。それに元同僚の間柄でもあるし、可能なら助けてやりたいのが本音である。

だが、そうなるかと計画を練り直す必要性がある。

元々の計画では、四神話へのパフォーマンスとして、冥界で行われる悪魔のパーティーに乗り込んで大暴れするだけだった。

そうすることにより自分の価値・有用性を釣り上げ、より多くの支援を引き出し、遠回しなオーフィス獲得を目論む神々を牽制、更には元主君であるリアスの評価の暴落にも繋がる。

しかし、小猫の奪還ともなると話は別だ。

「……どうしたものか」

『難しく考える必要はないぞ、相棒』

宝玉が瞬き、ドライグの声音が響いた。

『仮に悪魔の会合を相棒が襲撃したとしよう。相棒はこの俺を宿す、今代の赤龍帝だ。否が応でも注目は相棒に集まるだろうな。黒猫はその隙を突いて、拉致でも話し合いでも好きにすればいい』

「そうか、囮作戦か！」

『今の相棒の実力を見せてやれ。そして教えてやれ——赤い龍を敵に回す意味を』

「……分かった。派手に暴れてくるよ」

会話を追え、改めて黒歌に向き直る一誠。そのタイミングを見計らって、曹操が言う。

「数日後、旧首都ルシファードにて若手悪魔達を集めたパーティーが開かれるらしい。政府首脳陣のみならず、北欧のオーデインも招待されていると聞く。行くのか？」

「俺は三大勢力に仇なすドラゴンだからな。無論、出撃するさ。そして俺が囮をしている間に、黒歌が小猫ちゃんを救う。簡単な話だ」

「……本当に、手伝ってくれるんだね。有り難う、赤龍帝」

礼を言うのは未だ早い、と彼は釘を刺した。

「絶対に成功させるぞ」

「うんっ！」

かくして一誠は若手悪魔のパーティーを強襲。黒歌はその裏で小猫の保護に動き、そして成功したのだった。

回想を終え、膝上のオーフィスの頭を撫でる一誠。その様子をヴァーリはぼんやりと眺める。

“無限の龍神”オーフィス。

“赤龍帝”兵藤一誠。

二人を排除しようとする者と企む者は決して少なくないだろう。悪魔上層部は勿論の事ながら、彼等と同盟を結んでいる天界や“神の子を見張る者”も何らかの動きを見せてくる可能性が高い。また四神話とて腹の中で何を考えているのか未知数だ。

「……北欧はどうするんだろうな」

北欧神話。“禍の団”に物資を援助している四神話の一角でありながら、悪魔勢力とも通じている勢力だ。若手悪魔パーティーにも主神オーデイン直々に代表として来賓した事で、冥界もしくは三大勢力と同盟を結ぶのではと噂されている。

オーデインは果たして何を考えているのだろうか。予想はある程度つくがあの老獪な神の事だ。常に警戒をして、それでも足りないレベルと言えた。

考えてみれば、自分達は今ギリギリの綱を渡っている。幾ら名のある四神話がバックにあるにしても、どんな事情があれ“禍の団”は残忍なテロリスト集団だと世間に認知されている。

例え真実が違えど、大義名分は三大勢力にある訳だ。最終的には多くの勢力が彼等に賛同の声を示すかもしれない。

「——らしくないな。そんな顔は」

一誠の言葉に、ヴァーリは我に返る。何を弱気になっているのか。攻めてくれば圧倒的な力で潰せば良いだけの話だろう。それが^{ドラゴン}二天龍の戦いというものだ。

呼応するかのように背中が蒼白く発光し、龍を模した魔法陣が描かれた。冷静で落ち着きのある声^{パニシング・ドラゴン}が場に響く。

“白い龍の皇帝”、アルビオンだ。

『落ち着いたか、ヴァーリ』

「我ながら情けない。向かってくるのなら遠慮無く殺せば良いだけ。何を恐れる事がある」

『その殺意、その闘気。それでこそ我が相棒だ』

成長を見守る父親の様にアルビオンは満足気に語りかけた。

その時、一誠の左手が翠に輝きアルビオンと酷似した魔法陣が出現した。

『アルビオン。お前も随分丸くなったな』

積年のライバルの言葉に、特に感情を現さず淡々と答える。

『昔の俺ならば罵詈雑言の百や二百は並び立てただろう。だが今は互いにこんな状況だ』

『それに無限の龍神がこの様子だ。戦う気も起きんさ』

二体の龍は、未だ夢の中を泳いでいるオーフィスを眺めていた。身体は封印されてしまっているが、外の様子は魔法陣を介して自分の頭の中に映し出される。大画面に幼女の寝顔を映されれば興も削がれるというもの。

そして今代の所有者の行く末をもう暫く見ていたいという点も事実だった。

赤と白。

長い歴史の中で初めて力に呑まれなかった二人。運命に抗っている二人が何処まで耐え切れるのか、興味があった。

そう自分に言い訳した。素直では無かった。

『赤と白が共に戦っている。これもまた運命か』

『時代かもしれないな。……また会おう』

やがて会話は終了し、後には静けさが残った。オーフィスの髪を手に流していく音が僅かに聞こえる。

ヴァーリは眼を瞑った。もしかしたら弱気になっていたのでは無いかかもしれない。少し、この時間が気に入っているからではないか。心の中でそんな予想を立ててみた。

一誠がやって来てから、“禍の団”は変化した。ピリピリとして疑心暗鬼に陥っていた各派閥は少しずつ他と触れ合うようになった。

特訓を繰り返して得た赤い力に魅せられ、自分の力を思い知らされ

た。それでも強くなろうとあがく。

「良いな……こういう組織」

「組織がどうした？」

急に聞こえる、覚えのある声。入口方向を見てみれば曹操とゲオルク、ジークフリートが立っていた。

—— l i f e . 3 1 変化 ——

眩きを聞かれていた事に苛立ちつつも、三人が担当していた任務の内容と結果を訊ねる。派閥が根本的に違うヴァーリは会議の予定等は頭に叩き込んでいるが、英雄派の任務まで把握していない。成功したのか笑みを浮かべながら曹操は言葉を返した。

「今回も教会の実験施設を潰してやった。被験者の子供達は全員保護したよ」

得意気に胸を張る彼を見ながら、ヴァーリは心の中で付け足した。

一番変化した人物は間違いなく曹操だ。以前はがむしやらに英雄を目指していた男が、一誠に感化されてか神器を宿した子供達の保護活動を行うようになった。他のメンバーも一緒になってだ。

「変わったよな、曹操」

一誠の言葉にヴァーリ達は深く頷いた。そうして頷いていたがふと思いついたかのように、ゲオルクは魔法陣を床に展開した。彼が得意とする拘束術式だ。

紫の光と共に吐き出された人影は一誠とヴァーリ、両方とも面識のある男だった。

「帰還している途中に、コイツが倒れているのをジークフリートが見つけてな。昔の仲間だと言うから取り敢えず縛って連れてきたんだ……」

鎖で何重にも拘束されたその男は不敵に笑う。獲物を見つけたからだ。

「やあやあやあ！ これはこれは噂の赤龍帝ではありませんかあ！

おひさっすねえ！ 素晴らしい再会劇にい、私はドキがムネムネし

まくってますぜえ！」

冥界、シトリー領域。現当主の意向により有数の自然保護区が幾つも残されており、自然との調和をモットーとしている都市である。中央には蒼を貴重とした屋敷がそびえ、その周囲を緑が囲んでいた。本来なら暖かい雰囲気に包まれている筈だが、ここ最近は重い空気に沈んでいた。シトリー家次期当主であるソーナ。彼女の眷属である匙元士郎が重傷を負ったからだ。

例の若手悪魔。パーティーが「禍の団」に襲撃されたとき、彼は命を捨てて主の為に戦った。健闘したものの敗北し、今は屋敷で治療を受けている。ソーナと眷属達は片時も離れる事無く寝ずの看病を行っている。

歴史書や魔導書が並ぶ書齋にて、シトリー家現当主であるリクスアは一人心を痛めていた。

匙元士郎については彼も良く知っている。誠実で真つ直ぐな心を持つ好青年だ。リクスアも気にかけていたし、だからこそ一刻も早い回復を願っていた。

食事も満足に取らず、ひたすらに彼の回復を願い続ける娘達を止める事など出来なかった。執事長であり、自分の「騎士」を努める男が心配して告げた。彼もまた匙の為に尽力している者の一人である。

「リクスア様。今宵も遅うございます。もうお休みになられては……」

「いや、もう少し起きていよう。赤龍帝に抗った勇者の事を思えば、自分だけが寝るなどできないのだよ」

彼は親孝行な性格と聞く。夏休みを利用して泊まり掛けで勉強会を行う、という建前を信じて送り出してくれたご両親の為に絶対的に匙を完治させなければならぬ。

早く目覚めてくれ、とリクスアは景色を眺めながら呟いた。

「匙元士郎。君は私の息子になるかもしれない男なんだ……」

▼
慌ただしい外の様子を、匙は知らない。黒い空間にただ一人、立ち
尽くしていた。

敗北した、勝てなかった。結局は主君に庇って貰う事態となった。
これでは“兵士”失格だ。

神器を宿していても自分は何も出来ない。無力だった。涙を溢れ
させながら齒軋りした。もっと強くならなければならぬ。主を、皆
を護れる強さを得なければならなかった。

思い出せば出す程に、自分が不甲斐なく感じた。護るべき者が死ん
でからでは遅いのだ。

「俺は強くなる……もっと強く……ツツ！」

『そうだ。願え、我が半身よ。想いの力は神器を進化させるからな』
貪欲なまでの力への渴望を抱き、ひたすらに鍛える。突如として目
の前に現れた黒い霧を相手としての特訓だ。まずは基本的な身体能
力を強化すべく時間も忘れ駆け回った。

時には血を吐き出し筋肉が潰れかけた。呪炎に身を焦がされ苦し
みに意識を失いかけた事もある。それでも一日、二日と時間が経過す
るに比例して、彼は確実に実力を伸ばしていった。そして遂に当初の
目安である一週間が過ぎ去った。

龍を形作った霧の隣に、匙は立つ。一週間という短い時間だが确实
に力が底上げされているのを感じた。

意識を集中させ左手の神器を顕現させる。龍の頭を模した“
アソフション・ライン
黒い龍脈”。対象と自分をラインで接続し、対象の力を吸収する
神器だ。

その形は更に歪み、手の甲だけを覆っていたそれは左腕を呑み込ん
でいた。邪悪さがあるが同時に力強さも感じた。

頭の中に黒い霧がかかり、低い声が響く。

『次の段階に目覚めたか。その調子で強くなれ。だが、力に吞まれる
な。征服して見せろ！』

「……分かってる。俺はあの人を護りたいだけさ」

徐々に霞んでいき、そして匙の姿は空間から消えた。現実世界へと意識を浮上させたのだ。完全に消え去った後で黒い靄は龍へと姿を変化させた。

蛇の様に細長い身体を持ったその龍は、ブリズン・ドラゴン“黒邪の龍王”と称された元龍王のヴリトラである。

討伐後は魂を四つに分割されていたが、しかし、邪龍特有のしじぶとさから、もしくは吸収した“二天龍”のオーラに影響を受けたのか、不完全ながら意識を取り戻していたのだ。

そして宿主の願いに応じて、精神世界で彼を鍛えたのだった。

完全復活しきれなかったのだろう。再び薄れ行く視界の中で、ヴリトラは何時か匙が力に呑まれる事を懸念していた。

ドラゴンを宿した者は何時だつて争いに巻き込まれ、最愛の人を亡くし、最後はその命尽きるまで戦い続けた。

或いは強大な力を恐れた者達が所有者を裏切り、封印される。その中には自分が愛した者も含まれているだろう。

どちらにしても運命からは逃げられない。それを変えられるとすれば――。

浮かびかけた答えを、ヴリトラは自ら否定した。邪龍と恐れられた自分が、らしくない事を考えたものだ。かつて殺した人間達もそうだったのかもしれないのに。

馬鹿馬鹿しい、と笑いながらその意識は再び途絶えた。

—— l i f e . 3 2 匙元士郎① ——

シトリ一家の屋敷の一室で、彼は目覚めた。運び込まれてから一週間が経過していた。

彼の覚醒に最初に気付いたのはソーナだった。ベッドの隣に設けられた簡易的な椅子に腰かけていた彼女は驚きにタオルを落としたり。

お帰りなさい、と何度も何度も叫びながらソーナは涙を流していた。目覚めたばかりの身体は突然の事に悲鳴をあげていたが嬉しくもあつた。

「今度こそ護ります」

決意を新たに、匙はそつと呟く。

「――例えこの命が呑み込まれようとも」

—— l i f e . 3 3 フリード・セルゼン ——

「お久し振りつすねえ！ 身体は元気でやんすか？」

「まあ、な。匙のラインもオーフィスに解呪して貰ったし。それにしても、まさかお前と会うとは思わなかった」

「俺だつて予想してなかったんすわ。腐れアザゼルにリストラされて行く宛も無く死にかけてたら、昔の同僚に拾われるなんてさあ!!」

初めて出会った時と全く変わらない、ふぎけた口調でフリード・セルゼンは話した。簀巻きにされて少しは大人しくするかと思つたが平常運転を貫くらしい。

一誠は彼を拾ってきたジークに視線を向けた。フリードの話によれば昔の同僚という事だが、果たして彼らはどのような関係性なのだろう。

ジークは迷つた素振りを見せたが、やがてポツポツと話を始めた。

明かされたのは、天使陣営の闇の一端だった。

聖剣計画。かつて教会で行われた非人道的な実験の一つであり、身寄りの無い孤児達を集め、聖剣に適応した戦士を造り出す為の狂った計画だ。

子供達の身体能力を薬物で底上げし、人間が本能として持つ禁忌を消し去り、結果として死すらも恐れない戦士は誕生した。問題はその先、聖剣が扱えるかどうかだった。

実は集められた孤児達の中に聖剣を扱える者は誰一人存在しなかったのだ。

聖剣を扱うには、“因子”というものが必要になるらしい。それは人間ならば誰しも宿っている代物だが内包量には個人差があり、“因子”の数を表す値が高くなければ聖剣を扱えない。

ならば逆転の発想だ。

“因子”の値が低いのであれば、他から移植してしまえば良い。

それがエクスカリバー強奪事件の首謀者が一人、バルパー・ガリレイの企てた狂気の計画だった。

ある冬の日、バルパーは部隊に命じ作戦を決行した。施設に毒ガスを散布し、“因子”を抜き終えた子供達を口封じに抹殺しようとしたのだ。

換気扇を止められた施設は巨大な密閉空間であり、少年少女は逃げる事すら叶わない。防護服を着込んだ神父が闊歩する床には、苦しみ抜いた子供達が塵のように転がされていた。

運良く施設から逃げ出せた彼らは、施設ごと焼却される仲間達を眺める事しか出来なかった。

「その後で僕はデュリオに拾われ、フリードは墮天使に身を寄せた。昔の仲間を見捨てる事もできなくてね」

「なるほどな、そんな過去があつたのか。……古傷を抉る真似をしてしまった。すまない」

話を聞いただけの一誠でさえ、腸が煮え繰り返っているのだ。実際に関わった彼等の胸中は穏やかでは無いだろう。

今は二人きりにして思い出話だけでも、と彼らは部屋を後にした。面識があるからなのか、一誠はフリードには死んで欲しくなかった。あの男は当分死にそうにないが、仮にジークの元仲間である彼に何かあれば寝覚めが悪い。

最悪自分の部下として貰い受けるか。

一誠はそう考えながら食堂へ足を進めようとして、今度は黒歌と鉢合わせした。

「あ、赤龍帝。丁度良かったにや！」

「丁度……？」

彼女の言葉が気にかかる。自分に用事でもあるのだろうか。その時、黒歌の背中から白色の髪が見えた。その少女の顔を忘れる訳が無い。

小猫か、と一誠は呼んだ。ピクツと白髪が揺れたが、ゆつくりと少女は姉の隣に並んだ。

塔城小猫。リアス・グレモリーの“戦車”にして黒歌の妹。前回の若手悪魔。パーティー襲撃の目的の一つだ。

雑談の内に、表向きには拉致された事になっている少女は実は望ん

で“禍の団”に身を寄せたことを一誠は知った。どうやら彼女は、一誠が“はぐれ悪魔”に認定された事を疑問に思い独自に調査していたらしい。

だから予想していたより説得はスムーズに進んだ、と黒歌は得意気に胸を張る。

姉の巨乳を羨望の眼で睨みながらも、小猫は一誠を見た。

以前とは比べ物にならない強者。それが第一印象だ。顔も達観したような表情をしており、氷のような冷たさがある。

もう記憶の中にある兵藤一誠は死んだ。そう思うしか無かった。やや戸惑いながらも相手は一応の上司に当たる為、頭を下げる。

「今日からヴァーリチームに配属されました、白音です。宜しく願います」

白音。一度捨てた名前だが、新しい人生を始めるには良いだろう。リアスに貰った名前は使わないと決めた。世間的には誘拐された存在だが、黒歌によるとヴァーリチームに預けられた、謂わば食客のよくな扱いらしい。

それでも何時までも食客に甘んじるのも迷惑なだけなので、こうして姉と同じチームに所属した。裏方なのでバレる恐れは無いという事だ。

「そうか。まあ、派閥は違えど、協力して任務に出向くこともあるだろう。そのときは頼むぞ、白音」

「……はい!!」

彼女は華やかな笑みと共に、新たな一步を踏み出した。

魔王城の一角に設けられた応接室。VIPを迎えるだけあって豪華な調度品が並べられている。

墮天使総督であるアザゼルは、気品のあるソファに腰を落ち着けていた。テーブルを挟んで前に座るサーゼクスは申し訳なさそうな顔付きだった。

訊ねたい事がある、と告げて応接室に招かれてから一時間が経過しているが、目の前に座る彼は口を開こうとしない。出された紅茶を啜りながら再三繰り返した質問を改めて訊ねた。

「それで、何時になれば兵藤一誠について教えてくれるんだ？」

「……」

サーゼクスはあくまでも黙秘を決め込む様子だった。以前から妙だとは思っていたが、これでハッキリした。

魔王と上層部は、兵藤一誠についての情報を隠している。

それもある程度親交があった自分にさえ言えない秘密。恐らくはサーゼクス自身も一枚噛んでいるのだろう。そうで無ければ、老人の眼を掻い潜つてでも何らかの情報をもたらす筈なのだ。

紅茶は既に冷めきっていた。鏡のように映し出された自分の顔は酷く疲れている。それは間違いなく、何も話してくれない親友ともに疲れしているのだ。

悩んでいるのなら助けたいし、力になりたい。アザゼルにとってサーゼクスという男はそう思える存在だ。ずっと昔の三大勢力戦争で初めて出会ってからの仲。彼の方が随分と年下だが特に気にする事もせず、対等に接してきた。

だが今になっては何か急速に冷えていく。無論、仮に窮地に陥つたなら即座に助けるが、それは単に立場故の義務だからだ、とアザゼルスは思う。

「サーゼクス。俺はお前を親友だと思っている。一緒に酒飲んで、馬鹿やってな。これからも親友だと思いたいんだ」

「それは……」

「……だから、話してくれ」

思わず身を乗り出した。勢いよくテーブルを叩き、紅茶の入れられたカップが揺れる。暫く睨み合うもやはり彼は口を閉ざしたままだった。良く見ると唇自体はモゴモゴと動いている。

自分も言ってしまうんだ、とサーゼクスの眼は告げていた。しかし、同時に恐いのだろう。秘密を喋る事によって訪れるであろう損失が堪らなく恐ろしいのだ。付き合いが長いアザゼルは、哀れな彼の姿をこれ以上見ていられなかった。

失望からソファを立とうとして、そこで扉が開けられた。入ってきたのは若い男だ。一目でそれと分かる高級そうな紺のスーツを着こなしており、外見はやり手のサラリーマンに見える。

彼はゆつくりとアザゼルに歩み寄り、軽い会釈と共に名刺を差し出した。

「私はファンキヤット・アバドンと申します。以降、お見知りおきを。墮天使総督アザゼル殿」

「……悪魔上層部か」

確証は無いが、上層部が関与しているという予想は当たりかもしれない。

あまりにもタイミングが良すぎだ。まるで邪魔者を追い払うかのように、しかも応接室に来る等偶然にしては出来すぎている。

名刺を懐に仕舞い、アザゼルは早々に部屋を後にした。あのまま余計に勘繰らせるよりはマシだ。確実に警戒されてしまっただろう。

手応えを感じながらグレモリーの屋敷に戻る。数日後に行われるソーナとのレーティング・ゲームに向けて、リアス達にはアドバイスに沿った特訓を指示してある。

例の件も気になるが、先ずは監督として目先のイベント——若手悪魔同士のゲームを勝たせてやる方が重要だ。魔法陣からレポートを取り出しつつ、アザゼルは教え子達の様子を見に行った。

—— l i f e . 3 4 暗躍 ——

その夜、ファンキヤット・アバドンの屋敷には上層部の面々が集まっていた。何れも悪魔創世の時代から生きる有力貴族の当主達で

あり、強大な権力を有している為に魔王ですら手が出せない。秘密裏に地下に造られた会議室では今も、老人達による話し合いが行われている。

中央の映像術式に映し出されているのは、自分達が生み出してしまった”SSS級はぐれ悪魔”、兵藤一誠だ。一人が厳格な声を発した。

「兵藤一誠についてだが、彼をどう処理すれば良いと思う。皆の意見を聞きたい」

「傍らにあのオーフィスがおるのだ。厄介な者と結託しおって！ 大人しく殺されておれば良いものを！」

「左様。転生悪魔のくせに生意気だ！ ああいう輩こそ見せしめに処刑するべきなのだよ！」

呼応して次々に自分勝手な意見を述べていく。彼等は焦っていた。メディア、民衆、そして他神話が真実に辿り着いてしまう可能性を。

もし仮に知られてしまえば、一誠は冥界政府に見捨てられた哀れな被害者となってしまう。そして自分達は赤龍帝を切り捨てた悪役だ。下手をすれば政府に反感を持つ者達に一誠が担がれるかもしれない。彼が生きている限り怯えなければならぬのだ。

殺さなければと焦る老人達とは対照的に、議会の末席を務めるファンキヤットは冷静だった。

「落ち着いて下さい、皆様。私に考えがあります」

「おお、ファンキヤット！ 何か良い知恵でもあるのか!？」

「その通りでございます。私は綿密な計画を作り上げました。上手く行けば赤龍帝だけでなくオーフィスを支配下におけるかもしれない。そして、この作戦は彼の弱点を突いているのです」

不敵に笑う彼には確かな勝算があった。成功すれば自分の地位は急上昇する。英雄も夢では無い。

「——兵藤一誠の両親を拉致するのです」

出世を目論むファンキヤットは静かに計画を語っていった。それがどれ程に愚かな行為なのか、微塵も気付かないまま。

黒歌達と別れた兵藤一誠は、“赤龍帝の籠手”の中に潜り込んでいた。激化する戦いに備えての特訓の一つだ。

確かに彼は強くなつたが、実戦ではドライグに肩代わりしてもらっている場面も多い。

例えば、一誠は悪魔の翼を使つての飛行が苦手だ。元人間故に飛ぶ概念が存在しないのだから仕様がなと言えはそうなのだが、飛べないので戦えません、では話にならない。それにドライグへの負担もある。

戦闘時には神器を通じドライグのサポートを受けて漸く飛べているが、自力で飛行する特訓をしても損は無いだらう。悪魔の翼を拡げる一誠にドライグが助言する。

『力を入れ過ぎるな、相棒。少し楽になれ』

「……と言われてもな。何故か落ち着かないんだよ」

『悪魔との相性が悪いのか……?』

二人揃つてガジガジと頭を搔く。長年相手を見ている内にどうやら癖が移つた様だ。

一誠は溜め息を吐きながらその場に寝転がった。特訓開始から長い時間が経過したが、未だ何も掴めていないのは不味い。外で待つているオーフィスにどんな顔をして会えば良いのだろうか。

再び溜め息をつく彼の隣に、一人の若い女性が現れた。温和な笑みを浮かべる彼女の登場にドライグは珍しく驚く素振りを見せた。

『ほう、エルシャか。奥に引つ込んでいると思つていたが』

『確かにそうだったけど、新人君が潜つたのを感知してね。それで特訓の手伝いに来たのよ』

事態を把握出来ない一誠に彼は告げる。

『彼女はエルシャ。歴代赤龍帝の中でも一、二を争う実力者だ。今の相棒では勝てない程のな』

『はい、新人。私がエルシャです。誰かを守ろうとする君の為に一肌脱ぎまーす!』

俺は別に、と否定しかけたが面倒なので止めた。エルシャという女性、ノリは軽いが感じられる覇気は別物だ。ドライグが一目置く理由も解る。彼女に教えを乞えば自分は更に上のステージに到達出来るのかもしれない。

一誠は差し出された手を取った。それは、決して生半可では無い苦難の始まりだった。

——l i f e . 3 5 エルシャ——

兵藤一誠は尚も最強の女性赤龍帝、エルシャとの特訓を続けていた。ドライグから一目置かれるだけあつて彼女は凄まじく強い。オーフィスとの修行で多少強くなったが、エルシャは更に高みに居ただの。

試しに互いに神器抜きで戦ってみたところ、しなやかな身体を活かした体術に翻弄され、惨敗を喫した。

一誠だけが神器を使用して漸く互角なのだ。全盛期は何れだけの力を誇っていたのだろうか。彼は心底自分の弱さが恥ずかしくなった。

『うん、初日より動きが良くなったねー！ 無駄な動きはある程度無くなったかな。でも神器を完全に扱えて無いよ！』

『そうだな。相棒は神器の使い方が荒い。しかし、それは裏を返せば更に強くなれる証拠。エルシャの下で神器を用いての戦闘を学ぶと良い』

「簡単に言ってくれるな。やらなければ死ぬ、と考えれば努力は惜しまないが」

エルシャに教わった戦術は、一誠からしてみれば驚きの連続だった。

そもそも“赤龍帝の籠手”の所有者は、どうしても自身の能力を倍にする“倍加”を使つての戦法に頼りがちだ。言うなれば初代から延々と続いてきたある種の暗黙の了解でもあつたし、エルシャも当初はそうして戦っていた。

だが倍加させた力を他に受け渡す“譲渡”に目覚めてから、彼女の選択肢は一気に開けた。

『例えば剣に譲渡して刃の長さを瞬間的に倍にしたり。或いは敵の頭に触れて、脳の水分を一気に数十倍にして破裂させたりさ。"譲渡"も合わせて運用すれば力押しだけじゃなくて、もっと柔軟に戦えるようになるよ』

「成程、その発想は無かった。なら敵の魔力を倍にしてわざと暴発させたりも有効だな。参考にさせてもらう」

一定時間毎に倍にしていく。シンプルな能力で、だからこそ戦闘に向いている。特訓を繰り返せば何れはサーゼクスを越えられるだろう。そうならなければ意味が無い。

深い息を吐き、特訓を再び始めようとした直前、一誠とエルシャの間にオーフィスが降りてきた。その顔は何処と無く不機嫌だ。

「……赤龍帝、遅い」

『そんななにしたのね。気分転換に、一度戻ってみたらどうかかな?』

『訓練も良いが、実戦も積むべきだしな。戻ろうか、相棒』

直後、一誠は自室に立っていた。"神器"の中に長く居た為に気付かなかったが、彼は何日も飯を食べていない。意識がハッキリすると同時に空腹が襲った。

知らぬ間に一誠はオーフィスを肩車しており、細い足がぷらぷら揺れる。

と、徐々に足に力が込められていく。

「質問だ。どうして力を込めているんだ?」

「……遅かったから、お仕置き」

「待て、誰に吹き込まれた」

体温と甘い香りを頬に感じつつ一誠は訊ねた。彼女は良い笑顔でそれに応じ、力を更に強めていく。

「……フリード」

「やっぱり仲間にするのやめようかな」

口ではそう言いつつ、この状況を生み出してくれた彼等に、一誠は少しだけ感謝した。もう手遅れだった。

激動の日々だった八月も過ぎようとしている。夏休みを利用して
いる身であるソーナ達は人間界に戻らなければならぬ。屋敷の地
下に設けられた駅で、彼女達は現当主リクスアや使用人の見送りを受
けていた。

「それでは、元士郎くん。機会があれば是非とも来てくれたまえ。盛
大に歓迎しよう。勿論、他の皆も何時でも遊びに来てほしい」
「あ、ありがとうございます！」

匙は必死に頭を下げる。その様子を見ながら使用人の一人がそつ
と目頭を抑えた。シトリ一家に長年使えている執事長だ。心配した
ソーナが狼狽えると彼は心底嬉しそうに語った。

「私は嬉しいのでございます。ソーナお嬢様が婿殿を連れてこられた
のですから」

「うむ、シトリ一家の将来は明るいな！ 君ならソーナを任せられ
る！」

「お、お父様!？」

狼狽するソーナとジト目を浴びせる仲間達に挟まれ、彼は深い深い
溜め息をつく。

匙はリクスアが少々苦手だった。名前で呼ぶしやけにフランクだ
し、ダンディで渋い見た目からは考えられない程に茶目っ気がある。
自分を認めてくれたと言えれば聞こえは良いのだが。

列車に乗り込んで窓から最後の別れを告げる。大変な事件もあつ
たが、それ以上に有意義な時間だった。

手を振るリクスア達が徐々に遠のいていく。そして冥界の景色は
流れていった。

「で、この状況は一体……?」

缶コーヒを啜りながらぼんやりと外を眺めている匙は、半ば現実
逃避していた。自分の身体に胸や肩が乗っかり、少女特有の甘い香り
が漂う。

リクスアが見えなくなるや否や、女性陣はてきぱきと動き出した。

訳が解らずに硬直している間にも彼女達は自分の周囲に集まり、そして今は匙を中心におしくらまんじゅう状態となっていた。困惑する彼にソーナが答える。

「寒いのでおしくらまんじゅうをしようかと」

「さつき冷暖房のスイッチを弄くっていたのはそれですか」

「気にしない、気にしない！ 元ちゃんも本当は嬉しいんですよ？」

列車が目的地に着くまで未だ数時間はかかる。果たして自分の理性は耐えきれぬのか。そしてトイレに行きたいという願いは叶えられるのだろうか。

苦笑しながら匙は再び缶コーヒーを啜った。

「匙くん、照れる事は無いでしょう？ チームの仲間と親睦を深める機会ですよ」

「なんでガブリエルさんが!？」

—— l i f e . 3 6 結果 ——

同時刻、リアス達もまた列車に揺られていた。青春しているソーナ達とは正反対に、中の雰囲気は通夜に近い。

木場はベッドに寝かされ、朱乃は俯いてひたすら何かを呟いている。アジアとギヤスパは片隅で体育座りをしたまま微動だにせず、リアスに至っては焦点すら合っていない。唯一まともなのがゼノヴィアだけという有り様だ。

帰りも同行しているアザゼルは、仕方がないのでゼノヴィアと雑談をしていた。

「しかし、お前さんも大変だな。追放されるわ、転がり込んだ先がこの始末だわ。お前さんがフリーなら勧誘したいぜ」

「それは私も思っているが、拾われた身としては文句言えないだろう。そもそも私は修行中の身だ。勧誘されても断るさ。今回のゲームで改めて未熟さを思い知らされたよ」

ソーナとリアスのレーティング・ゲームは下馬評通り、ソーナの勝利で幕を閉じた。あまりにも悲惨なゲーム展開だった。

先ず、ギヤスパとアジアの二人は、精神的な問題から欠場。

若手悪魔パーティーでの怪我が癒えていないにも関わらず無理を

押し出て出場した木場は、ソーナの“戦車”である由良翼紗との交戦の末に敗北。更に傷が悪化した。

朱乃は雷を駆使して善戦するも、“女王”真羅椿姫の率いる部隊に包囲され、最後は雷を跳ね返されて敗北。自慢の雷を逆利用されたことが大きな精神的ダメージとなったようだ。

残ったリアスはゼノヴィアを引き連れてソーナの本陣に強襲を仕掛けようと試みるも、ゼノヴィアはその途中で匙と椿姫の連携に、そしてリアス自身もソーナとの一騎討ちに惨敗したのだった。

「しかし、気になるのは副部長の雷を跳ね返した謎の技術の方なんだ。記憶が確かなら、彼女達は“反転”と呼んでいた」

彼女の疑問に、アザゼルの表情が変わる。どうやら彼も気になってくるようだ。

「あれの正体は既に目星がついている。俺も信じたく無いがな」

「正体、とは？」

アザゼルはグラスになみなみと注がれたワインを一気に飲み干した。

「――俺が個人的に研究している“人工神器”だ」

「人工……!?!」

そうだ、と彼はワインを注ぎながら話を続ける。

「強力な武器である“セイクリッド・ギア神器”を、現代技術で再現したものだ。今まで神器を所有していなかった彼女達があんな真似をするにはそれしか方法が無い。だがそうになると、誰から受け取ったのかが問題となる。研究を知っているのは一部の幹部のみだからな」

「まさか……ッ!?!」

考えたくは無いが、そうなってしまう。彼女の推測は現段階で一番可能性が高い。

アザゼルは溜め息を吐いた。そして断言した。

「――裏切り者がいる」

夏休みが終わり、学校が始まる日。多くの学生は楽しかった日々を懐かしみながら、或いは手付かずの課題を嘆きながら学園へと向かう。その中には元変態人組の松田と元浜の姿もあった。

一誠が事故死した。

その報を聞いた二人は、あまりの衝撃に思考が停止したと言う。彼らにとつて一誠は小学校からの親友だったのだから当然だ。

別れすら言えず、突然消え去った事実には涙するしか無かった。

『俺達は三人揃って変態三人組だ。お前が死んじまったら名乗れないだろ……ッ!』

通夜の時、松田は叫んだ。参列したクラスメイト達も何も言えずに俯く。彼の下品な言動には困り果てていたし、迷惑していたがいざいなくなるまで無性に寂しい。

その日から松田と元浜は人が変わったかのように大人しくなり、騒動も無くなった。しかしそれが決して望んで得た平穏で無い事はクラスの誰もが知っていた。

閑静な住宅街を二人は歩く。以前なら一誠が学園のアイドルであるリアスやアーシアと共に登校してきた事に嫌みを言っていたし、ドロップキックもかましていた。

彼が通っていた通学路に、一誠はもう歩いていない。

「そう言えば、グレモリーさんも元氣無いよな」

元浜が呟く。

「イツセーはオカルト研究部に所属していたからな。部長のグレモリーさんも思うところがあるんだろ。それに理由は分からないけど、小猫ちゃんにアーシアちゃん。後は一年のヴラディくんだけ?」

三人も休学中だ」

「木場も大怪我したらしいぜ。ゼノヴィアさんも心無しやつれてるし、立て続けだよ」

「多分、尾を引いてるんだと俺は思う」

互いにそれ以上は何も言わない。程なくして学園に到着し、二人は

まとも無言のまま教室に向かった。

——life. 37 失望——

今日は最初の登校日の為、集会だけで授業が終わる。リアス達才力研メンバーは既に部室に集まっていた。部の顧問を務めるアザゼルが少し遅れて合流する。

「すまん、会議で遅くなった」

「構わないわ、アザゼル。それで連絡とは何かしら？」

「悪い連絡とかじゃない。一つはお前らも知っているだろう、新しい教師についてだ」

その言葉に、リアスは集会で行われた新任教師の挨拶を思い出す。

——今日から二年の数学を担当します、ガブリエルです。どうぞ宜しくお願いします！

「天使ともあろう者が胸元の開いたスーツで大丈夫なのかしら。クラス男子生徒なんか興奮の嵐よ？」

「それはアイツに聞いてくれ。何故か、めちやくちや張り切ってたんだから。職員室も興奮の嵐だったよ……」

恐らくは同盟の地である駒王学園に人材を派遣する事で、より結束を固めようという天界の思惑なのだろう。それはリアスでも理解出来るし、文句を言うつもりも無い。そのトップが直接来るとは予想外だが。

元同僚であるアザゼルも、彼女の突拍子もない行動には疲れていたようで態とらしく頭を抱えている。

因みにわざわざ出向いてきた理由を訊ねたところ、ガブリエル曰く、ある者を近くで観察したいからとの事らしい。

「……頭が痛くなってきたわ。それで、他の連絡は何なの？」

あー、と彼は口をつぐんだ。言いにくそうに頬を掻く。

「次のゲーム、対戦相手が決まったぜ」

「もう!？」

リアスは思わず叫んだ。ソーナとのゲームから一週間程が経過したばかりである。若手悪魔六名で行うと聞いていたが、連戦とは聞いていなかったのだ。彼女の反応にアザゼルは呆れを隠せなかった。

「お前とソーナが戦っている間に、他の奴等もゲームを行った。その結果、サイラオーグがゼファードルを。ディオドラがシーグヴァイラを其々仕留めた。サイラオーグは金星、ディオドラは大金星だ。——ソーナは勝って当然の結果という事で評価は伸びてない」

順位をつけるなら、上からサイラオーグ、ディオドラ、ソーナ。以下はシーグヴァイラ、ゼファードル。そしてリアスと続く。

最下位だ。ライザー戦の教訓も特訓の成果も活かせず、結局は今回も敗北してしまった。あの時から何が変わった。どう強くなった。これでは退化だ。

一誠を失い、アーシアとギヤスパが立ち上がれなくなり、そして小猫さえも失った。これを退化と言わずして何と言うのか。

「最下位、ね……」

「そう落ち込むな。この次に勝利すれば良い」

彼はケラケラと笑うも、リアスはそんな気にはならなかった。勝たなければならぬのは理解している。だが勝てないのだ。どう逆立ちしても若手最強のサイラオーグには敵わないし、シーグヴァイラやディオドラにも勝てはしない。

あのゼファードルと引き分けに持ち込めるかどうかのレベルだ。

リアスはこれ以上無いまでに自信を失っていた。

「そうは言うけど、勝てないのよ。誰にも……」

「そーかい。だったらお前は誰にも絶対勝てねえよ」

アザゼルは諦めたようにそう断言した。もう彼女には、才女と讃えられた頃の面影は見られない。

「ま、一応ゲームの相手だけは教えてやるよ。次の相手は——」

直後、床に魔法陣が光り輝く。それはアスタロトの紋章。

「久し振りです、リアスさん。挨拶に来ました」

妖艶な美少年、ディオドラ・アスタロトが立っていた。

ディオドラ・アスタロトはゆっくりとリアスに歩み寄る。儂げな笑みを浮かべる様は虫も殺せない美少年だが、アザゼルの第六感は警報を鳴らした。

戦場で幾度となく命を救った直感だ。彼は警戒しながらもディオドラに言う。

「ディオドラか。対戦相手に挨拶か？」

「ええ、そうです。アザゼル殿」

突如として部室に現れたディオドラ。彼こそがリアスの次の対戦相手なのだ。

「……貴方が私の相手？」

「アスタロト家の次期当主、ディオドラと申します。今回のゲーム、互いに正々堂々ベストを尽くしましょう」

尚も爽やかに告げる。ただ、リアスには盛大な皮肉にしか聞こえなかった。

自分を嘲笑する為にやって来た男。彼女はそう認識した。

「……負けないわ。絶対に」

彼女は弱々しく呟いた。それは上辺だけの決意だった。

どうせ負ける。

今回も負けるのだ。リアスの脳内には、敗北の二文字しか回っていない。俯くだけしか出来ずにいた。

その様子を見ていたディオドラは意外そうな顔をした。実際に彼が来た理由は、世間では愚か者と噂されるリアスの様子を自分の目で確認する為である。暗愚に見せかけておいて実は……という可能性も捨てきれなかったからだ。

しかし、敢えて挑発してみても食って掛かるどころか俯くのみだったので肩透かしを食らった気分だ。この有り様だと警戒せずとも次のゲームは楽勝だろう。

「……それでは僕は失礼させて頂きます。人間界を見物したいので」

「——ディオドラ」

床に魔法陣を描くディオドラ。だが直前にアザゼルが呼び止める。表情は険しい。

「嘗めてくれるなよ?」

その言葉には何も反応せず、彼は転移していった。完全に姿が消え去ったところで、怒りを帯びた視線が、リアスに移る。

「お前、馬鹿にされて悔しくないのか!? お前は笑われてんだぞ! 立ち上がれよ、親友にだって発破かけられたんだろ!!」

「でも、私は……」

その時、彼は見た。リアスが視線をずらしたのを。身体から力が抜けていく。

監督である自分が張り切っても意味は無い。戦うのは彼女だ。しかし本人に戦う意志が無い以上は、何れだけ特訓を重ねても無意味にして無価値である。

詰め寄っていたアザゼルは一気に冷静さを取り戻した。怒りで震えていた手が自然に落ち着いていく。

リアスの後ろに控える眷属達。

朱乃は未だ"反転"の一件を引き摺り、木場は完治こそしたもののブランドがある。唯一戦えるのはゼノヴィアのみ。

いや、一人いただけでもマシか。

そこまで考えて彼は苦笑する。

「良く聞け、リアス。俺はこれからガブリエルと今後についての会議をしなければならぬ。終了予定は二時間後。——それまでに考えておけ。"王"として、眷属のことを。お前の両肩に眷属の将来が乗っているんだ」

ボタンと扉を閉めてアザゼルは出ていった。

——l i f e . 3 8 王——

「それであんなに怒っていたのですか?」

「頭にきてな。無能だと周囲に言われているが、それを立証しているのは他ならぬ自分自身さ。皮肉だろうか?」

会議室にて彼はガブリエルと話し込む。彼女は紅茶を啜ると溜め息をついた。

「それでも見捨てることはしないで下さいね？」

「俺だってそうしたいよ。でもな、リアスはディオドラに何も言い返さないんだ。教育者としては敗北や悔しさをバネにして成長して欲しいもんだぜ。ところで、ガブリエルはどうだ。何か不満でもあるか？」

急に話を振られた彼女は少し考えて言った。

「特に不満はありません。皆、とても良い子ですから。ただ匙くんがちよつと……過剰に訓練をする癖がありますね。見ていて心配です」「匙元士郎か。VIP席でゲームを観戦していたオーデインや帝釈天も太鼓判を押すぐらいだ。俺から見ても下級にしては異様な強さだった。——そうか、心配か」

ふと妙な事に気が付いた。匙の名前が出た途端にガブリエルの表情が変わったのだ。天使としての慈愛に溢れた、或いは生徒を見守る教師の顔と言ってしまうえばそれまでだが、アザゼルには違うように感じられた。

最近似たような表情を何処かで見たような気もする。

必死に考える事、数分。やつと思いついた。そうだ、真羅椿姫。彼女がゲーム中に一瞬だけ見せた表情と同じなのだ。

まさか、ガブリエルは。

「お前、匙に惚れちゃったのか？」

「いいえ、あくまで一人の生徒として——」

「……問い詰めようと思ったけど、やめるわ」

彼女の頬が朱に染まったのを見て、彼は確信した。シエムハザ、バラキエルに続き今度はガブリエルである。あのときは大騒ぎしたが、三回目となれば流石に馴れた。

彼女は慌てて否定しまくるがもう遅く、アザゼルは既に悪戯を思い付いた小学生のような顔をしていた。

散々に弄くられる未来を回避するべく、ガブリエルは露骨に話題を変える。

「そろそろ議題に戻りましょう。先ずはディオドラの件についてです」

「あー、あの小僧か。対シーグヴアイラの映像見たけど違和感だらけだ。終盤でいきなり魔力が数倍に膨れ上がるなんざ、ディオドラの力量からして有り得ない」

「何らかのドーピングを使っている可能性が高いですね。一体、誰が何の目的で渡したのでしょうか」

「そいつは不明だが、このまま泳がせれば或いは尻尾を掴ませるかもしれない。ディオドラについてはこの程度で良いだろう。——さて、ここからが本題だ」

そう言いながら、アザゼルは魔法陣から一枚の書類を取り出した。「それは？」

「シエムハザが独自に掴んだ、冥界上層部が秘密裏に進めている計画だ。その名を“赤龍帝捕獲計画”——」

「暫く見ない間に人間界も変わった。人間とは実に素晴らしいエネルギーを持っていて。僕が言える立場では無いか」

リアスと別れた後、ディオドラは一人で街を散歩していた。普段の彼なら眷属と共に歩いている事だろう。しかし、今日に限って——実際にはそれ以前から、眷属と共に過ごしていなかった。

空を見ながらディオドラはあの日を思い出す。上層部に呼び出されたあの日、シーグヴァイラとのゲームを前日に控えた日を。

『ディオドラ・アスタロト。お召しにより参上致しました』

『まあ、先ずは座ってくれたまえ。話は長くなるのでね』

『失礼します』

礼儀としてしゃちほこばって起立していたが、ファンキヤットの言葉に軽く会釈をしてから席に座った。

やや大きめに設計された部屋の中央には、円卓が我が物顔で居座っていた。その周りには十人の老人が座り、そして一つだけ意図的に造られたであろう空白がある。

何故、自分は呼び出されたのか。焦燥を隠せないディオドラに、ファンキヤットは涼しげな笑顔で告げた。

『ディオドラ君は、何故呼ばれたのか焦っているね。焦燥する事は無い。我々上層部は君にある極秘の命令を与えようと思っている。冥界の未来を、君の双肩に託す訳だ』

馴れた手付きで円卓に現れた魔法陣を弄くる。ピツピツ、という電子的な音が数回して、次いで術式が壁に浮かび上がった。

映し出されたのは“赤龍帝の鎧”だった。例の若手悪魔のパイティー会場にて暴れる場面がコマ送りで流される。

あの時目にした彼の強さはディオドラも良く知っていた。

流石、その一言に尽きる。強さもさることながら敵陣の真ん中に飛び込むその度胸。魔王サーゼクスに見せた冷酷な眼は対峙した者全てに恐怖を刻んだ程だ。

『……兵藤、一誠』

『ああ、そうだ。冥界の民達は赤龍帝に怯えているのだ。愛する者を殺される、とね。ならば我々には危険人物を排除する責任と義務がある』

察しはついていた。こんな薄暗い部屋に呼び出し、しかもモニターで見せられれば答えは自ずと解る。兵藤一誠の殺害なのだ。だが、上層部の一人が首を横に降る。

『君は勘違いをしている。我々が望むのは抹殺でも、ましてや暗殺でも無い。捕獲だよ』

『……ッ!?!』

どうかしている、と叫びそうになったのを彼は寸前で堪えた。相手は赤龍帝だ、二天龍だ。古の大戦で聖書の神と前魔王四人を相手取ったあのドラゴンなのだ。勝てる筈が無い。しかも上層部は前線を退いて久しく、ブランクは計り知れないだろう。

にも関わらず、彼らは捕獲すると言い切った。まさか、そう断言出来るだけの切り札があると言うのか。ディオドラは思わず脳内で議論した。

混乱する彼の肩に手を置いて、ファンキヤットは尚も笑む。

『我々は“SSS級はぐれ悪魔”である兵藤一誠を捕獲し、冥界の心強い矛にするつもりだ』

『汚物とて実力は確かだ。ならばその力は冥界の今後の為に使ってもらわなければならない。鬱陶しい天使や墮天使、魔王派の連中も押し黙るだろう』

『し、しかし……兵藤一誠の実力は桁違いです！ 一体どのようなにして――』

気付けば、ディオドラは公園に着いていた。回想をしている間に表通りから此処まで流れてきたらしい。住宅街の中に設けられたそれは住民の憩いの場だろう。

子供が忘れていったのだろうか、古びたサッカーボールが寂しく転がっている。風に押され、不安定に動く様は正しく今の自分だった。

少し休もうとベンチに視線を移して、彼の思考は停止した。木陰の下で揺れる金髪に見覚えがあったからだ。

「アーシアさんッ!？」

「貴方は、あの時の……………?」

アーシアは焦点の合わない瞳で此方を見た。心無しやつれている気がした。慌てて隣に座る。

「ディオドラ・アスタロトです! かつて貴女に助けてもらった者です!!」

「そうなのですか、お久し振りです……………」

「アーシアさん、一体何があったのです! 何がアーシアさんをそこまで変えてしまったのですか!？」

取り繕った冷静さも、優しさも捨て去り彼は詰め寄った。けども彼女は抵抗もせず揺れるだけ。まるで糸の切れた人形のようなのだ。

と、複数のメイドが走ってきて、奪うようにアーシアを抱き寄せた。「すいません、この方はご病気で……………! 帰りましょう、アーシアさん!!」

流れ作業のように車イスに乗せられる彼女に、抵抗の意思は無かった。数分と掛からずに住宅街の静けさに消えていく。メイド達は相当に急いでいたらしく、彼がディオドラであることに気付いた様子は見当たらなかった。

病気。

その言葉が気にかかる。風の噂によればアーシアは兵藤一誠に救出されたと聞く。もしくは彼が”はぐれ悪魔”になったショックで精神を病んでしまったかもしれない。

「そうか、アーシアさんまで……………」

「元カノですか?」

「いや、ただの知り合いさ。それで、君達が来たのは”赤龍帝捕獲計画”かな?」

「そうです。貴方の補佐に来ました」

音もなく現れた姉妹を眺めながら項垂れる。本当は計画に参加しなくなかった。逃げたかった。

—— l i f e . 3 9 誘拐① ——

『奴の両親を拉致し、それを餌にして兵藤一誠を捕獲する』

『実行はディオドラ、君に任せる。補佐を二人、そして“王の駒”を与えるから、兵藤一誠の両親を誘拐したまえ。尤も、後者は明日のゲームでテスト運用して貰うがね』

『断るなら、君の眷属はどうなるかな?』

映像術式が映し出した一人の少女の姿に、今度こそディオドラは言葉を失った。

『ディオドラ様……!』

『マーガレット、無事なのか!? 他のメンバーは!』

『シユガー、コヨミ、ネア、パルケ! 私を含め全員無事です!!』

彼女達の叫びが遠退き、変わって太い男の声が響いた。

『彼女達には未だ手を出してない。だが貴様が少しでも反抗すれば、君の愛しい眷属ちゃんも俺様の慰みものとなる』

魔法陣は鮮血に染まり、弾けて消えた。背筋が冷たくなっていくのを彼は感じた。彼女達が何処の輩とも解らない男に蹂躪される。形容しがたいイメージが脳裏を走り、吐き気が込み上げた。

上層部の顔はもう笑っていない。

『解ってくれたかな? 冥界の未来に加えて、彼女達の将来も君は背負っているのだよ。つまり我々の言う通りにするしかない』

『無論、鞭ばかりでは無いよ。計画成功の暁には、ディオドラ君に上層部の席を与えよう。金と地位、そして約束された栄光。——幸運にも、君にはチャンスがあるんだ』

『頑張ってくれたまえ、ディオドラ・アスタロト。冥界の為に……』

震えながら彼は立ち上がる。やるしか道はないからだ。ディオドラの側に控える少女達も同じ。

『行きましょう、ディオドラ様。この時間帯は兵藤家には母親の他にメイド、そしてアーシア・アルジエントしかいません。誘拐するなら今です』

「……分かった、そちらは僕が担当する。父親の方は君達で行ってください」

その命令に瓜二つの顔をした姉妹、スノワートとモルプスが頷く。「私達は会社帰りを狙います」

「……やるしか、ないんだな」

「はい」

三人はゆっくりと公園を後にした。それは覆せない運命に対してのささやかな抵抗のつもりだった。

誰も居なくなつた公園で、別れを惜しむかのようにサッカーボールが揺れていた。

l i f e . 4 0 デイオドラ・アスタロト

デイオドラは人間界の散歩を趣味とする。停滞的な悪魔と違い、凄まじい早さで進歩を遂げる人間が彼は好きだった。

勿論、戦争や差別等といった負の面も知っている。だがそれは悪魔にしても同じ事。違うのは寿命と力のみだ、と貴族出身者にしては珍しく人間に好意的だった。

その日、デイオドラはヨーロッパに出掛けていた。彼にとっては何時もの日課に過ぎず、それ故に護衛をつけていなかった。

そして、そんな時に限って悪魔^{エクソジスト}祓いの集団と鉢合わせしたのである。

「油断した……！ まさか、生きているなんて……ッ!!」

結果から言うと、戦いはデイオドラの勝利で幕を閉じた。しかし全員を倒した直後、最後の悪足掻きである光弾を胸に喰らってしまったのだ。

悪魔にとつて光は猛毒。彼の身体は、内側から焼かれつつあった。出血が止まらず、眼は霞む。そうして遂に足から崩れ落ちた。

ああ、このまま鬱蒼と広がるヨーロッパの森で僕は死ぬのだろうか。

名門アスタロト家の跡取りともあろう男が誰にも知られず、寂しく朽ち果てる。

「すまない、マーガレット。僕はもう駄目だ……」

誰かの叫び声が聞こえた。どうせ幻覚だ。

影が動いた。こんな森の中に誰が来るんだ。

「!?!」

五月蠅い幻だ。或いは死ぬ前に見ると言う走馬燈か。それならもつとマシな想い出を見せてくれ。

僕の生まれた日。健やかな成長。誕生会。初めての眷属、マーガレットとの出会い……。

眠るように心地よく、デイオドラの視界は閉じていった。

—— l i f e . 4 0 デイオドラ・アスタロト ——

「あ、気が付きましたか？」

もう朝か、と気だるげに彼は起きた。先ず飛び込んできたのは蒼だ。透き通った空色。草の香りと共に声の主が見えた。

シスターの格好をした、金髪の少女だ。

「此処は……？」

「大丈夫ですか？ 胸に大怪我をされていましたけど……」

「そうだ、傷は!?」

デイオドラは慌ててペタペタと自身の胸に触れた。少しだけ盛り上がっている所はあるが、挟じ開けられた大穴は消えていた。痛みも無い。少女が微笑む。

「傷なら治療しました。もう動いても良いですよ」

「そ、そうなのか。ありがとう」

礼を言いつつ彼は驚いた。あれだけの傷を瞬時に治すシスターに覚えがあつたからだ。確か、名前をアーシア・アルジェントと言う。

ヨーロッパの教会に聖女が居るとは聞いていたがまさか此処で出会うとは。命を助けて貰つた身で失礼だが、彼は内心で舌打ちした。人を癒す能力を持つアーシアは、云わば教会の宣伝塔。プロパガンダ。

仮に悪魔と一緒に居る場面を見られれば、教会側との小競り合いになりかねない。最悪の場合は上位組織である天界との衝突も考えられる。デイオドラは何としてもこの危機を回避せねばならなかった。「傷を治して頂き、ありがとうございます。しかし自分は旅を急ぐ身。此処等で別れましょう」

「は、はい！ お元気で！」

態度を急変させた彼に首を傾げつつも、アーシアは精一杯の笑顔を向けた。彼女が見送りに移った事に安心し、デイオドラも踵を返す。後はアーシアの前から姿を消してから適当に転移すれば良い。

彼の気転を利かせた言動によって、二人はシスターと旅人のまま終わる筈だった。

「そこまでだ、下劣な悪魔！」

白の制服を纏った幾人もの男達が、二人を取り囲むまでは。

「悪魔祓い!? 未だ居たのか!」

「貴様には失望したぞ、"聖女"アーシアよ! まさか悪魔にまで施しをするとは!」

「……悪魔?」

「奴の名はディオドラ! アスタロト家の次期当主にして、先程見回りに当たっていた同胞を皆殺しにした張本人だ! そんな危険人物を治療するとは、貴様は悪しき魔女に違いない!!」

最悪のパターンだった。訳が解らず、立ち尽くすアーシアに彼等は次々と事実をぶちまけていく。

思わずディオドラは叫んだ。

「待て、アーシアさんは知らなかったんだ! 彼女は純粋な善意で僕を治したんだ!!」

「戯れ言を聞く必要も、悪魔を治療する聖女も必要は無い。二人揃って断罪してくれるッ!」

数はざっと二十人。全員が光の剣や銃を手に行っている。まともに戦えば幾ら上級悪魔でも苦戦は免れない。

しかし、今逃げれば残されたアーシアは確実に殺される。こうなれば特攻してでも巻き込んでしまった責任を取らねばなるまい。

全身から魔力を迸らせ、

「安心してくれ」

背後で震える少女に向けて囁いた。

「――君を傷付けさせないから」

挨拶代わりに魔力弾をばらまき、勇ましく駆け出した。魔王ベルゼブブの血筋、名門アスタロト家の次期当主。それがどうした。そんな肩書きは捨ててしまえ。

「俺は、悪魔だツ!!」

斬りかかってきた一人の顔面を鷲掴みし、首を思い切りへし折る。更に死体を投げ飛ばし、怯んだ所に最大火力で砲撃魔法を叩き込む。

およそ華やかな貴族らしくもない、泥に塗れたラフプレー。形振り構わぬ、獣のような暴力。

「遠巻きにして光弾で仕留めろ!!」

隊長らしき男の命令によって、一斉に放たれる光。それらは全てディオドラに突き刺さった。

「ディオドラさん!!」

「どうだ、忌々しい悪魔め。これだけ光を浴びれば——」

そこまで言つて、男の言葉は中断された。本来ならこれで悪魔は消滅する。光に強い耐性を持っている最上級悪魔でもまともに喰らえば致命傷は免れない。

ならば何故、煙と血飛沫が舞う中に眼光が輝いている、煌々として
いる。

「以前なら光に貫かれて死んだだろう。実際、死ぬ一步手前に追い詰められたからな。でも、今の俺に光は効かない」

「た、助け……ッ!?!」

情け容赦もなくディオドラは魔力弾を放った。パラパラと肉片が降り、森は元の静けさを取り戻した。

「すまなかつたね、アーシアさん。僕の不注意でこんな事になってしまった」

「いえ。それでは……」

「さようなら。もう会うことはないだろう」

こうして、今度こそシスターと旅人は別れた。魔法陣によって彼は消え去った。このまま二度と会う事は無いだろう。

術式は粒子となって散りゆき、翡翠の森を舞った。

二人は気付かなかつた。アーシアを探しに来た神父が、一部始終を目撃していた事に。

そして此処から彼女の苦難は始まるのだ。

「今のところは上手く進んでいるな……」

気絶したメイド達を廊下に寝かせながらディオドラは一息ついた。誘拐するには先ず兵藤家に潜入しなければならぬが、何故か防御結界も罫も見当たらずに無事進入できた。メイドも不意について気絶させた。

それにしても奇妙だ、とディオドラは辺りを見回す。

「結界どころか監視術式も展開していないとは、責任者は何を考えているんだ……?」

そう、兵藤家には監視術式すらも設けられていなかったのだ。結界が無いのは侵入者を誘い出す為だと考えていた。だからこそ変装したというのに罫も監視もない。

メイドが監視役だとしても、彼女達が倒される事を想定していなかったのか。それは余りに無謀だ。

「だが都合だ。こうなれば発見される前に誘拐するでしょう」

そう言いつつ、彼は家の中を探し始めた。目標である兵藤一誠の母は直ぐに見つかった。テレビの前でうたた寝している。どうやらワイドショーを見ながら眠ってしまったらしい。

起こさないよう、慎重に歩を進めようとするディオドラ。その時、背後から冷たい声が投げられた。

「——お母様は結界で護られています。貴方ではどうにも出来ませんよ。」

「見張りの悪魔か? いや、それにしても魔力が違う。君は何者だ?」

輝く白金の鎧に身を包み、剣を向ける銀髪の美女は問いに答えた。

「名はロスヴァイセ。北欧主神、オーディン様に仕える戦乙女ヴァルキリーです。降伏して下さい。そうすれば命まで取ろうとは言いません」

戦乙女ヴァルキリー。かのオーディンに仕える精銳の通称であり、北欧の地において戦死した英雄を天上に迎え入れるという一騎当千の半神である。聖なる武器を手に戦場を駆け巡るその姿は、古来より人々の憧れの的とされた。

彼女達は美しいだけにあらず、その武勇も並を超える。今、目の前に立つロスヴァイセも間違いない強者であった。

「アスタロト家の次期当主、ディオドラ・アスタロト。地位も財産もある貴方が何故こんな馬鹿な真似を——」

その言葉に、ディオドラは思わず叫ぶ。

「何も知らないくせに、偉そうに言うなッ!!」

予想外の激情にロスヴァイセは後退りした。情報ではディオドラたる人物は穏和で冷静、紳士的な人物と聞いていた。そんな彼が此処まで感情を露わにするとは。

「君が何を知っているんだ! マーガレット達と引き離されて、無理矢理に片棒を担がされて!! 言ってみろ、君が何を知っているというんだッ!! 何とか言ってみろよ、ロスヴァイセ!!」

何も言えずに立ち尽くすロスヴァイセに、みつともなく詰め寄った。涙と鼻水に顔を汚し力なく座り込む。そこに華やかな貴族の面影は消えていた。

ただ優しすぎる少年、ディオドラだった。

「……ふむ、どうやら訳ありの様じゃな」

何時の間にか一人の老人が覗き込んでいた。気配を感じさせず、まるで最初からそこに存在したかのように立っている。事態が掴めないディオドラの横でロスヴァイセは即座に膝を突いた。

「あ、貴方は?」

「儂か? 儂は北欧で隠居生活を送る、ただの田舎爺に過ぎんよ。周囲は儂をオーデインと呼ぶがの」

そう言つて老人は蓄えられた白い髭を撫でた。

—— l i f e . 4 1 誘拐② ——

数秒後、ディオドラも彼女の隣で膝を突いていた。知らなかったとは言えど、北欧勢力のトップに失礼な態度で接してしまったのだ。

悪戯が成功した少年のように笑うオーデインとは正反対に、彼は冷や汗しか流せなかった。

「気にせんで良いぞ、ディオドラ坊。公務なら兎も角、儂はプライベートで来たんじゃないからな。ロスヴァイセも顔を上げんか。……ところ

で、儂がこうして出向いたのには理由がある」

それまで笑っていたオーデインはスツと目を細める。

「じゃが、説明をするにはディオドラ坊にある程度の事情を把握して貰わなければならん。君には引き換えに何故、兵藤家に潜入したのか説明して欲しい。裏で糸を引く者から具体的な計画まで全て。——対価交換は悪魔の十八番じゃろう？」

「取引、ですか」

「ディオドラ坊は自分の未来を考えた方が良い。このまま悪魔と共に滅びるか、鞍替えするか」

だが答えは既に決まっていた。眷属を人質にするような連中の下で働く事は出来ない。未来は見え透いている。

ディオドラは深く頷いた。悪魔との決別の表れだった。

「解りました、全てお話しします。ですが条件を一つ追加させて頂きたく思います。——どうか眷属奪還に協力して貰えないでしょうか？」

「……ほう、このオーデインを前に媚びるところか、あくまで対等に話を進めるか」

ソーナ対リアスのレーティングゲームと同時進行で開催された二試合。即ちサイラオーグとゼファードル、シーグヴァイラとディオドラの若手悪魔同士のゲーム。それらもまたオーデインは録画であるが目を通した。

どちらも多少難はあれど、若手なりに頑張ったと評価している。

だが今の彼は最早若手では無い。一人の男。眷属の為に戦う、愚直なまでに真つ直ぐな男だ。

暫し考えた末に口を開いた。

「……その覚悟に免じ、条件を受け入れよう。北欧から精鋭を派遣する。お主のような者を死なせるには惜しい」

「あ、ありがとうございます!!」

勢いよく頭を下げるディオドラ。と、通信魔法陣が彼の耳元に展開される。相手はあの姉妹だった。

『もしもし、ディオドラ様。私達は無事に拐いました。そちらは首尾

よく進みましたか?』

「何だって! もう拐ってしまったのか!？」

『は、はい。既に!』

「——取り敢えず兵藤家に向かってくれ。重要な話がある」

通信を打ち切りデイオドラは、オーディンを見た。その顔は焦りに染められていた。真剣な表情で彼は頷く。

「どうやら猶予は無くなったようじゃな。その通信の相手が来たら話をしよう」

冥界の裏の一つとして奴隷市場がある。専門の商人が人間を拐い、オークション形式で貴族達が購入するのだ。人間を誘拐するだけで纏まった金が手に入り、貴族ともコネが出来るので店を構える者は後を絶たなかった。

ぼろ布を着せられた美しい姉妹。スノワート、モルプス。

彼女達もこうした闇のマーケットに連れてこられた奴隷達の内の二人だ。

『お姉ちゃん……！』

『大丈夫だから、私から離れないで……』

二人は鎖に繋がれ、色とりどりのライトが照らす華やかな舞台上にあらされた。仮面を着けた司会者が口上を述べていく。

『さあ、次は人間の少女達でござります！ 育てやすく初心者の方でも楽に世話が可能です。雑用にサンドバッグ、夜の営みと何でもござれ!! ——名をスノワート、モルプス！ 神器無所有の姉妹パック、先ずは特別価格から!!』

『中々に良さそうですね。我輩自慢のケルベロスの遊び相手に欲しい』

『磨けば観賞用になりそうだな。戦力としては期待できそうにないがね』

ざわつきながら次々とプレートを表示する貴族。暫くして木槌の音が響き、甲高い声で司会者が叫ぶ。

『これにて締め切りとさせていただきます！ 最高入札者は——六十番の方です!! おめでとうございます!』

その言葉と同時に椅子から立ち上がったのは、白いスーツに身を包んだ若い男だった。不敵の笑みを浮かべながら契約書にサインする。筆を置いたのを確認すると覆面を被った複数の大男が舞台脇から現れた。手にはシユウシユウと白煙を漏らす、焼き印があった。

姉妹の血の気が引いた。

これから自分達がどうなるのか、嫌でも理解してしまったのだ。

『……ヤダ、ヤダヤダアア!!』

『お願いです！　どうか妹だけはッ!!』

スーパーマン、正義の味方、白馬の王子。そんなものが都合良く登場する訳もなく男達はゆっくりと迫る。

モルプスが泣き叫び、スノワートが懇願する様を、周囲の悪魔はワインの肴とばかりに見物していた。

幻想を壊すべく白スーツの男、ファンキヤットは嬉々として告げた。

『――押せ』



兵藤家に転移した姉妹は、直後に驚愕した。北欧のトップ、オーデインが立っていたからだ。しかもその隣には銀髪の美女、そしてデオドラが並んでいる。

まさか失敗したのかと戦々恐々の思いでやって来たスノワート、モルプス姉妹は別の意味で恐怖していた。

「何故オーデイン様が……?」

「それについては儂が説明しよう。先ず前提としてデオドラ坊は悪魔からの離反を決意した」

「え!?!」

姉妹は驚愕した。若手悪魔のデオドラが冥界を裏切る等、誰が予想出来たか。質の悪い冗談と思いたかったがオーデインがそんな真似をする筈が無い。そもそも理由が見当たらない。

思考停止に陥る二人に、オーデインは更に言葉を重ねていく。

「君達も苦労したのじゃろう。田舎爺の眼は解るぞ。そうじゃ、二人も鞍替えせんか?　情報と引き換えに助けようではないか。何なら人質や仲間も救おうて」

「人質は居ません。仲間も、他の眷属は……」

彼女達以外の眷属は皆、ファンキヤットのおこぼれを狙う男達。そして何かと言いがかりをつけては身体を求めてくる層ばかり。救う理由は無い。

スノワートが答えを言う前に、モルプスが叫ぶように言った。

「お願いします、助けて下さい！——せめて、お姉ちゃんだけでも!!」

十に近い年齢の少女が、頭を擦り付けて頼み込む。自分ではなく最愛の姉を救うように。馬鹿な事を言わないで、とスノワートは後ろから強く抱き締める。

「私は貴女の姉よ！ 妹を売ってまで生きようとは思わないツ!!」
「でもー」

ディオドラは何も言わず眺めていた。多分、先程の自分もこんなに必死だった。誰かの為に懇願したのだろう。

悪魔も捨てたものじゃない。そう思わせるには充分であり、同時にあまりにも遅すぎた。

コホンと大袈裟にオーデインは咳をする。

「これこれ、落ち着かぬか。儂は二人と言うたぞ。……それに肝心の返事を未だ聞いておらん」

彼の呆れるような台詞に姉妹は互いを見詰め合い、息を揃えて答えた。

「鞍替えします!!」

オーデインはにこやかに頷き、ディオドラを近くに呼んだ。いよいよ話し合いが始まるのだ。

一時間後、情報交換は完了した。四神話の同盟、“禍の団”への援助。信じられない話の連続で三人の頭はパンク寸前に追い込まれた。

オーデインもまた、顔にこそ出していないが“赤龍帝捕獲計画”の存在、そして兵藤一誠が“はぐれ悪魔”に墮とされた本当の理由を知り愕然としていた。

「……つまり、兵藤一誠は上層部とフェニックスに嵌められたのか。成程、これで疑惑が確信に変わったのう」

「はい。以前夜伽をさせられた時に、自慢気に話していましたから」
項垂れる二人にディオドラはそっと毛布をかけた。彼にとっては困っている人を見捨てられない、優しさからの行動だった。

だが、フラッシュバックを起こし精神的に不安定になっている姉妹にとって、不幸な人生を送ってきた二人にとって、他者に親切にされ

る事がどれだけ心の支えになるだろう。姉妹はすがり付いて、涙を流した。

「お主は天然のジゴロじゃな。一種の才能と言っても良からう」

「ジゴロではありません。ただ困っている人を放っておけないからです」

「狙っているようにしか思えんぞ。——さてと、お主の眷属を救出せねばの」

オーデインは立ち上がり、腕を一振りした。たったそれだけの動作でロスヴァイセを除く四人の足下に魔法陣が描かれる。

「ロスヴァイセ、引き続き見張りを頼む。では、救出に行くぞ!!」

青白い光に包まれ、徐々に景色が消えていく。そして転移する直前、部屋の扉が開けられた。

驚いて振り向くデイオドラの眼に映ったのは、かつて命を助けて貰った少女。

「君は、全てを聞いてしまったのか……!?」

アーシアは何も言わなかった。しかし消え去る直前、デイオドラは確かに見た。

彼女の頬に僅かにある、涙の流れた痕を。

—— l i f e . 4 2 誘拐③ ——

「貴様、何処から入って……あべし!」

「たわば!!」

デイオドラの眷属が監禁されている薄暗い地下牢に転移した途端、あからさまに悪そうな男達に囲まれたオーデイン一行。勿論、そこらの雑魚が相手になる筈もなく、立ちはだかった彼らは断末魔と共に散ってゆく。

後に残されたのは肉片と、鎖に繋がれた美少女達。彼女達は自由になるや否や、デイオドラの下に駆け寄った。

「デイオドラ様!」

「すまない、皆。僕の不注意で……」

確かめるかのように、互いを強く抱き締める。その光景を眺めていたオーデインは転移魔法陣を描いた。

眷属を救出したからにはもうこんな悪趣味な場所に用は無い。

「応援が来ない内に急ぐぞ、ディオドラ坊」

「はいー」

スノワート、モルプス姉妹は床に転がる肉片をじっと見ていた。彼等は全員がファンキャットの眷属だった。

だが自分達とモヒカンの待遇には雲泥の差があり、その上ファンキャットに媚を売りおこぼれに与^{あずか}っていたのだ。

元同僚と言えど、同情する程の価値は感じられなかった。

そつとモルプスが呟く。

「……私達は先に進みます」

「さようなら、忌々しい過去」

最後に姉妹が術式に加わり、転移魔法陣は光を強めた。そして数秒後にはディオドラも眷属も、姉妹も主神も。全てが消え去っていた。

泣き疲れたアーシアをソファに寝かせ、ロスヴァイセはこれからの悪魔情勢を自分なりに予想していた。特に兵藤一誠の件は驚愕しかなかった。

なんて愚かなことをしたのだろうか、と彼女は第三者の視点から酷評する。

「馬鹿ですよ。有能な人材を自ら手放すなんて、正気の沙汰と思えません」

本人達はどう思っているのか知らないが、少なくとも外部から見れば愚行でしかない。メディアを用いて責任転嫁に必死らしいが、自分の行動が己の立場を削り取ると何故分らないのか。

「上司が無能とは、一誠さんも可哀想です」

「いや、そうでもないよ。彼はあれで結構幸せそうだ。ゲオルク曰く、この間もオーフィスとイチヤイチャしてたらしいからね」

「あの“無限の龍神”とですか?! 流石、三大勢力会談に単独で殴り込んだ男です!」

「身体をまさぐってたらしいけど」

麦茶を啜りながら雑談に興じる事、数分。ロスヴァイセの頭に疑問が生じる。一体、この銀髪の青年は誰なのか。

「失礼ですが貴方は……?」

「おっと、僕とした事が自己紹介を忘れていた。失礼」

コップを置き、青年は恭しく一例する。何処から取り出したのか、禍々しいオーラを放つ魔剣を肩に担ぎ、しかし剣とは正反対の爽やかな笑みで彼は名を明かした。

「かつて剣聖と謳われた英雄シグルドの末裔。名をジークフリート。ジークと呼んでくれ。“禍の団”を構成する派閥が一つ、英雄派の幹部だよ」

「“禍の団”?! 何時の間に!」

「曹操に見張りを頼まれてね。そうしたらデイオドラと、更にはオーディンまで来るじゃないか。気になって様子を窺いに来たのさ」

ロスヴァイセは最初こそ術式を顕現させようとしたが、やがてその手は止まった。

彼に敵意を感じなかったからだ。

そもそもジークフリートがその気なら麦茶も飲まず、雑談もせずに関答無用で斬りかかっている。ロスヴァイセは落ち着きを取り戻すべく話を再開させた。

「そもそも英雄派とは何ですか？」

「文字通り、英雄達の末裔が集まって作られた派閥さ。僕達の共通点は三つ。“神器”を所有する者であり、“神器”に人生を狂わされた者であり——そして三大勢力を憎悪する者だ」

そう力強く告げるジークフリートの目は、強い意志を持っていた。

「僕だって“神器”が発現してから、親に忌み嫌われ捨てられた。教会では聖剣計画に参加させられ、訳の分からない実験を繰り返された。尤も、だからこそ魔帝剣と契約出来たし、曹操に誘われたんだけど、納得なんて出来る訳無いよね……」

きつとその辛い過去は言葉だけじゃ終わらない。だから行動で示すのだろう。急に声を荒げたせいで息が乱れている彼を、ロスヴァイセはただ黙って見ていた。

「醜いね。こんな僕が英雄だなんて」

「それは……」

咄嗟に言葉を紡ごうとしたがジークフリートは手で制した。

「慰めも同情も要らないよ。僕は今一番、人生で輝いている。英雄派は、僕達と同じように“神器”のせいで路頭に迷っている子供の保護活動を行っている。子供達の笑顔が僕を強くする。……だから、僕は戦える」

「ジークさん、貴方は——」

その瞬間、床に巨大な文字が浮かび上がった。更に文字に沿うように幾つもの線が隅々まで広がっていく。

ジークフリートは察した。これは家を覆う大きさの魔法陣なのだと。

ロスヴァイセの表情が一変する。

「まさか、悪意を持った侵入者……」

「悪意だつて？」

「兵藤家には、予め家を覆うように巨大な結界術式を描いています。発動条件は——明確な悪意を持つての侵入!!」

気付けば、目の前に人型の獣が立っていた。目鼻は無く、全てがどす黒い影のような異形。強いて違いを挙げるなら、牙の生え揃った口がある点だ。

急いでアーシアと一誠の母親を轉移させようとするが、術式は現れない。

「な、なんで轉移出来ないの!？」

「原因は一つしかありませんよ」

そう言つて彼は魔帝剣の切っ先を獣に向けた。悪意の塊であるそれは、ありとあらゆる呪詛を吐く。

『グギユウウアアアアアアアッ!』

ロスヴァイセも獣を一瞥した後、剣を出現させた。もう形振り構つてはいられない。それはごく自然の提案だった。

「……どうでしょう、ジークフリートさん。この一戦、共闘しませんか？」

「ありがたい。貴女なら背中を任せられる」

二人は不敵に笑う。迎えるは悪意、正体不明の襲撃者。合図と同時に戦乙女ヴァルキリーと英雄は駆け出した。

誰かを守る為に。

——life. 43 誘拐④——

ジークフリートの背中が醜く盛り上がった。異様に膨れ上がった影は服を引き裂き、まるで産み落とされた赤ん坊のように這い出る。鱗がびっしりと生え揃うそれは龍の腕だ。

驚きで声も出ないロスヴァイセを他所に、彼は剣を構えた。

「最初は三刀流からだ。ノートウング、ダインスレイブ。そして魔帝剣グラム! 一太刀目で死んでくれるな!!」

その宣言が戦闘開始の合図だった。洗練された動きで、三つの剣を振るう。

『アギユウア?』

対する影獣は動かない。魔剣の一撃、元教会戦士の斬撃が目前に迫ろうと瞬きすらしなかった。バシン、と何かを叩き付ける音がした。本来なら簡単に切り裂いた筈だ。しかし、その光景を目にした瞬間、二人は凍り付いた。

見切る事すら難しい攻撃を全て片手で受け止めたからだ。咄嗟に剣を戻そうとしても離れない。尖った爪はしっかりと剣に食い込んでいた。

「これは厳しいね! このままではダインスレイブがへし折られるツ!!」

「ジークフリートさん、任せて下さい!」

一際強く床を蹴りロスヴァイセが跳んだ。その右手には光り輝く魔法陣が描かれている。美しい声で詠唱を紡ぎだした。

「Wir beten, Binden Sie den Feind.
——Langeweile.」
我等が祈りよ、敵を封じたた。戦乙女の鎖。

大量の濁流が獣に襲い掛かる。黒く染められた水はまるで一匹の龍の如く動き、激しい抵抗を意に介さず悪意の塊を包み込んだ。

最初こそもがいていた獣も酸素を奪われてはどうする事も出来ないのか、やがて手足は力を失い垂れ下がる。

馬鹿げた怪力からやっと解放されたジークフリートは剣を撫でながら、呆気ない幕切れに嘆息した。疲れたのか龍の腕を戻している。

「……殺したのかい?」

「ええ、恐らく。後はオーデイン様に連絡して、この獣を運んでもらえば一件落着です」

彼女もまた安堵の声を漏らした。

あるビルの屋上で二人の男が話していた。彼等の顔は商談が上手く進んでいるサラリーマンのように朗らかだ。自身が行っている悪意とは違って。

「へいへーい。そろそろ種を明かして欲しいにやー」

「戦乙女が描いた結界術式を書き換えました。元は侵入者を閉じ込め

る為のそれに手を加えまして、現在は私しか出入りが出来ないようになっっています」

銀髪を弄くりながら、彼は一先ず言葉を区切った。

「解除するにはあの獣を倒すしかありませんが、彼女と、そしてグラム
の所有者は中々に手強いですね。——これでは困るので少し弄くり
ましようか」

▼

獣を閉じ込めていた水龍が突然、崩れ落ちた。頭から順番にただの水に戻されていく。何が起きたのか解らないロスヴァイセは必死に維持しようとするが、無情にも水は床にぶちまけられた。

支えを失い落ちていく獣の意識が、覚醒していく。

「不味い、目覚めるぞツッ!!」

急いでグラムを突き刺そうとするも時僅かに遅く、悪意は勢いよく解き放たれた。豪腕で弾き飛ばされ壁に激突する。

『ギユウウルアアアアアアアッ!!』

「な——」

牙がロスヴァイセに向けられた。彼女の視界を大顎が覆った。だが寸前で彼女は横に突き飛ばされる。

バランスを崩し、不規則に転がっていく視界が映したのは、獣の口から放たれた光線に身体を貫かれたジークフリートだった。

「ジークフリートさん……?」

放心するロスヴァイセを落ち着かせようと口を抉じ開ける。だが吐き出されるのは言葉では無く、夥しい量の鮮血。ゴボリ、と腹に開けられた大穴から赤が流れる。

一体何が起きたのか。停止した彼女の思考は再び動き、次に絶叫した。

「あ、あああああああ!!」

興味を失ったのか、或いは殺したと思ったのだろうか。獣はロスヴァイセを見た。しかし今の彼女にはジークフリートしか映らない。

彼の名前を呼びながら駆け寄った。

「無事で良かった……女性に怪我は似合わないからね……」

「ジークフリートさん！ ジークフリートさんツ!!」

意識を朦朧とさせながら、尚も床に散らばる魔剣を掴もうとする。だがもうそんな体力は残されていない。それどころか今にも目の前が真っ暗になりそうだ。

そんな二人に容赦する筈もなく、影獣は腕を振り上げた。

鉄槌が降される寸前で防御術式を展開したロスヴァイセ。一度は拳を受け止めたが、徐々に罅が入り始めていた。

元々彼女は攻撃魔法が得意であり、防御魔法はあまり覚えていない。更に即興で描いたが故の脆さが悪影響を及ぼしたのだ。

二度、三度と立て続けに襲う衝撃に薄っぺらな壁が何時までも耐えられる訳がなく、限界は確実に近付いていた。

『グギユウウヴァアアアアアア!!』

そして業を煮やした獣の、巨大な咆哮と共に魔法陣は粉々に砕け散った。遂に二人を守る装甲は剥がされたのである。

「不味い……ッ!!」

蟻を踏み潰すかのように獣は全体重を乗せて、鉄拳を振りかぶった。

▼

「おや?」

「どうしたよ。気になる事でも?」

男の言葉に彼は笑みを強めた。

「興味深い事があります。魔帝剣グラムが——解放されました」

▼

獣の右腕は消失していた。肘から先が虚空に吸い込まれている。何が起きた、何故腕は無くなっている。不思議そうに眺める獣は見てしまった。

先程までの傷が綺麗に塞がっている彼を。ロスヴァイセを背に庇い立ち上がる青年を。

禍々しく変貌した剣を構える、ジークフリートを。

魔帝剣グラム。全ての剣を統べる“帝王の剣”が一振りにして、最強の魔剣である。伝承では主神オーデインから強健の英雄シグムンドに与えられ、彼に勝利をもたらしたとされる。

しかし、オーデインは次第にシグムンドが戦う事を望まなくなり、グングニルの一撃により剣はへし折られ、自身も戦死するという最期を遂げた。

その後、グラムは子のシグルドに受け継がれたが彼もまた義兄達に暗殺されている。そして、親子二代を死なせてしまったその剣は恐怖と羨望を込めて“魔帝剣”の称号を送られ、以降次々と使い手を殺していく事となる。

「祖先の呪いか、或いは祝福なのか。僕はグラムと巡り会った。ノートウング達にも認められた。今では“カオスエッジ魔剣”の異名だつてある。ならば——」

まるで龍の頭部を模した形状に変貌したグラム。ジークフリートは紅の刃を眺めた。血に塗れた刃は透き通る水面の如く自分の顔を映し出す。

戦いの最中にも関わず、刃の中の英雄は笑っていた。

「——斬ろう、グラム。僕の前に立ち塞がる敵。友を脅かす悪意。そして仲間に牙を剥く獣。僕は仲間を守る剣となる!!」

使い手の意思に、グラムもまた輝きを放ち呼応する。それは醜く薄汚れた光にあらず、仲間の未来を照らす優しさにして、悪なる者を滅ぼす憤怒の帝王だ。

目映い煌めきに圧されたのか、影獣は呻き声を溢しながら後退りする。だが今更退いたところでもう遅すぎた。英雄の怒りは神速を越えて届くのだから。

「魔帝剣グラム、解放……ッ!!」

初代シグルドが所有者であった頃、彼は龍王ファープニルに戦いを挑んだ。三日三晩の激戦の末に勝者は決まらなかったが、その際に使われたグラムはファープニルの血を浴び過ぎた。

その結果、魔帝剣グラムは龍殺しの呪いを有しながら、龍の魔力をも獲得してしまったのである。これ程皮肉な話は他に無い。

「歴代所有者の中でグラムを解放した者はいなかった。何故なら解放する前に死んでしまったからさ。だから君がこの姿を初めて見るんだ。尤も、見た時には死ぬけどね……」

『グギャ……!!』

魔帝龍剣グラム。解放されたその能力は“致死”。血の主であるファーブニルから受け継いだ猛毒が刃を形成しており、掠り傷ですら染み渡り敵を必ず抹殺する。

ただし使い手も例外ではなく、刃に触れれば即死してしまう点はまさに所有者に不運をもたらす魔剣だ。

解放した瞬間にどっと情報が脳内に雪崩れ込む。小難しい説明を彼は一蹴した。

「要するに触れなければ問題は無いさ。僕は今、グラムに試されている。この程度の奴に負けるなら“魔剣”の称号は名乗れないとー」

獣は戦慄した。彼はジークフリートよりも体躯があり、体格では負ける要素は何処にも無い筈だ。

だがどうしたことか。目の前には巨大なドラゴンが見える。部屋にやっと収まっている、自分の更に上をいくサイズのドラゴンが大口を開けた。虚空を直視してしまった哀れな獣は狂った。

『ギ、ギエエエエエエ!!』

精一杯威嚇し、無謀にも突っ込んでいく。グラムの刃が降り下ろされ頭頂部に食い込んだ。スローモーションのギロチンさながら綺麗に両断されながら獣は倒れた。

二つに分断されれば何も出来ない。手足を痙攣させていたがそれも直ぐに終わった。

今度こそ獣が死亡したのを確認してからジークフリートはグラムの解放を抑え込んだ。特に抵抗する様子もなく元の形状に戻っている。

「終わりましたよ、ロスヴァイセさん」

「ジークフリートさん、生きてて良かった……もし死んでいたら私は

……」

「ふふ、貴女を置いて死ぬ訳に……ッ!？」

グラムを解放した場合、所有者の体力は殆ど空になってしまいうという代償がある。最悪の場合は寿命すらも容赦なく吸い取っていく。

貧血に似た感覚が彼を襲い、ジークフリートは思わずその場に座り込んだ。

「魔帝剣グラム。やはり莫大な代償があるのか……」

激闘だったが、お陰で守るべき人は無事だった。そう思うと少しは気が安らぐ。アーシアも、一誠の母親も守り通したのだ。そう思いながらグラムを収納した時だった。

突如、仮面を着けたスーツ姿の男が現れた。

見た目は単なるサラリーマンに思えるがその中身は全く別物だと二人は察した。獣の襲来直後にやって来る等、怪しいにも程がある。

男は畏まって礼儀正しいお辞儀をした。

「まさか、あれを倒すとは思っていませんでした。今後は更なる研究が必要ですね。それに魔帝剣の解放。実に興味深いです」

「……お前は誰だ？ 目的は？」

「目的とは、可笑しな事を仰られますね。私の目的は既に手中に収まっていますか？」

男の言葉に一瞬首を傾げたが、ロスヴァイセが声を漏らした。彼は一誠の母親を小脇に抱えていたのだ。男の動作に細心の注意を払っていたというのに、誰も気付かなかった。

「では、またお会いしましょう。ロスヴァイセ様、ジークフリート様」
ジークフリートが追い掛けようとするが、その前に彼は消えた。兵藤一誠の母親と共に。

—— l i f e . 4 4 誘拐⑤ ——

「お疲れさん」

「この仮面は鬱陶しいですね。正体を隠す為には仕方無いですが」

仮面を外しながら、男は一誠の母親を地面に置く。地面には転移魔法陣が描かれていた。

「後はファンキヤットの下に転送すれば完了です」

「うひゃひゃひゃ！ それにしてもお前さんも大した悪党だぜ！」

「五月蠅いですよ、少しは黙っていて下さい。——リゼヴィム・リヴァン・ルシファー」

帰還したジークフリートの話を聞いた一誠達は驚愕していた。特に両親を誘拐された一誠は、能面のような表情でただ立ち尽くしている。

どうすれば二人を救出出来るのか。彼には解らなかった。そんな時、北欧勢力から一通の手紙が送られてきた。

「これは、オーティン直筆の手紙か……？」

「何と書いてある？」

曹操の問いを無視して手紙を読み進めていく。暫くして読み終えた一誠の顔には少なからぬ戸惑いがあった。

だが両親を救うには手紙に従うしか方法が無い。彼にとっては大博打だ。

瞑目し、それから眼を見開く。

「二人の居場所が分からない以上は従う他無いか」

一誠達も両親救出の為に動き始めた。こうして遂に、リアスとディオドラのレーティングゲームの開催日を迎えた。



設けられた控え室にはリアス、朱乃、木場、ゼノヴィア、そして長い不調から立ち直ったアーシアが居た。兵藤一誠の母親誘拐事件が起きた日から、彼女は元気を取り戻した。ただアザゼルやリアスが幾ら訊ねても理由は決して語らないが。

アザゼルは深い溜め息をつく。アーシアの件も気になるが、今はディオドラとのゲームが大事だ。

「……分かっているな、リアス。お前はもう後が無い。これで勝たなきゃ不味い」

「ええ、アザゼル。ディオドラが来たあの日から、私は“王”として必死に考えたわ。その結果はゲームで証明して見せる」

「やれやれ、ようやく吹っ切れたか」

リアスの顔が輝いて見える。勝たなければならない、と本気になった表情だ。勢揃いした眷属達を見渡すと各々が戦意に満ちた顔をし

ていた。

前回の雪辱を果たさんとしているのだ。主として彼女はますます気合いを入れた。

「いくわよ、私の可愛い下僕達！ この戦い、勝利で飾って見せましよう!!」

『はいッ!!』

フィールドに転移されるリアス達。その姿が完全に消え去ったのを確認してから、アザゼルは通信魔法陣を起動した。

四分割されたモニターにオーデイン、帝釈天、ハーデス、天照大神が同じく映されていた。全員が神らしい緊張感のある顔だ。

「リアス達が行ったぜ。それにしても、あの話は本当なんだよな？」

『無論じゃ。故にアザゼル坊にも話をした』

『フアフアフア、オーデインから聞かされた時には驚いた。まさかコウモリがそこまで愚かとは』

「良く言うぜ、内心笑ってる癖によ」

悪態をつきながら、アザゼルは苦虫を何匹も噛み潰したような表情となった。あの時、サーゼクスをもっと問い詰めていればと後悔しているのだ。

少なくともオーデイン達より早く事情を知っていれば、或いは別の手段もあつた筈だと。思わず俯く彼に帝釈天が告げた。

『H A H A H A！ どうしたよ、アザゼル。まさか今さら悔いてるとか、そんな馬鹿なことは無いよな？ 俺だつて別に勢力維持が悪いとは言わない。ただ、三大勢力はやり過ぎたんだ』

怒気を含んだ言葉に、天照大神も続ける。

『三大勢力、特に悪魔は土足で日本に踏み込み、誘拐のオンパレード。傘下である京の妖怪衆からも同胞が浚われていると訴えが来ておる。温厚な儂も流石に我慢の限界じゃ』

『馬鹿な奴らだったと諦めるんじゃない、アザゼル坊。同盟を解消するなら早めにせねばならんのか？ ……もしくは手遅れかもしれないが』

モニター越しにオーデインは笑う。彼の左目に収まる義眼は妖しい輝きを放っていた。

バトルフィールドに転移したリアス達は周囲を見渡した。そこは
タイル張りの広場だった。目の前には古代ローマを思わせる神殿が
悠然と構えている。

妙な事にアナウンスは何時まで経っても流れない。違和感を感じ
たゼノヴィアが首を傾げた。

「どうしてアナウンスが無いんだ？」

まさか運営側でトラブルがあったのか。リアスは眷属に待機を命
じて、先ずは神殿に近づく。此方から動いてみれば、或いは何らかの
アクションがあるかもしれない。そう思つての行動だ。

その直後、前方に二つの魔法陣が現れた。ゲームが始まらないこと
に慌てたディオドラが来たのかと予想した彼女の表情は、直後に驚愕
に染まる。

「これは、アスタロトの紋章じゃない!？」

翡翠色の術式に描かれている紋章は、アスタロトでは無かったの
だ。様子を見ていた眷属達も戦闘態勢に入る。魔法陣から姿を現し
たのは二人の少女だった。警戒を隠さないまま、リアスは二人に訊ね
た。

「二人はどうして此処に来たのかしら？」

『……』

少女達は口を閉じたまま、何も喋らない。苛ついた彼女が更に言葉
を紡ごうとした瞬間、陰謀は動き始めた。異変を示す声は眷属達より
更に後方から発せられた。何事かと後ろを振り向き、そこでリアスは
怒声を放った。

アーシアを捕らえるディオドラの姿があったからだ。

「やあ、リアス・グレモリー。アーシア嬢は頂くよ」

「アーシアを放しなさい! これはルール違反よ!!」

「……来なよ、神殿の奥に。一番奥で僕は待っているからさ」
そう呟くなり、ディオドラとアーシアは消えた。

赤き龍の降臨は、すぐ近くまで迫っていた。

life. 46 カウンtdown

「やあ、早いね。リアス・グレモリー」

「ディオドラ！ アーシアを何処……に……」

「あ、リアス部長」

駆け付けたリアスの怒号は急速にすぼんでいった。彼女達はアーシアが拘束されているものと思い込んでいたが、実際はどうだろうか。一目で高級と解る純白のテーブルに、装飾のなされた椅子。洒落た喫茶店の屋外に飾られていそうだ。

紅茶を啜りながら笑顔で談笑している二人に、リアスは訊ねる。

「えーと、二人は何をしているのかしら？」

「何と言われても。ちよつとしたお茶会さ。かつて助けて貰ったお礼をしたくてね」

そう言えばアーシアは悪魔を救ったせいで追放されたと聞く。まさかディオドラがその相手だったとは。驚きながらも彼女は続けた。「そうじゃなくて、そこは普通もつと別の理由を言わないかしら？

例えば、アーシアを手に入れる為だ、とか」

「お、僕の真似か。似ているねえ。それじゃあ次は——」

「部長のワンマンショーでは無いですから、冗談は程々にして下さい」
木場の進言に、お題を聞こうと身を乗り出しかけたリアスは慌てて身体を引つ込める。爽やかにディオドラは笑った。

「ははは、緊張は解けただろう？ ……でも、今から起きる事は冗談じゃ無いんだ。——全て、現実だよ」

合図と共に上からゆっくりと檻が降ろされてくる。中に入っている影を見て、リアス達は声をあげた。

「イツセーのお父様!? それにお母様も!!」

中に居たのは一誠の両親だった。気絶させられたのか、眠っている。

「どういう事だ!」

叫びながら、デユランダルを亜空間から取り出すゼノヴィア。その他の面々も滅びの魔力、雷、聖魔剣と武器を並べる。唯一戦意が見え

ないのはアーシアだけとなった。

手に引つ掛けたティークアップをテーブルに置いて、彼は部屋の入り口を見た。広がる闇にディオドラは言葉を投げる。

「いるんだろ？ 兵藤一誠」

カツン、と足音が響いた。リアスは後ろを振り向き、そして彼と目が合った。

「イツセー!?!」

一誠の登場にゼノヴィアとディオドラ以外のメンバーは涙腺を決壊させた。特に主として何も出来なかったリアスは小さな子供のようになんて泣いている。

そんな彼女達を無視して、一誠は黙って鎧を展開した。

「退け。今の俺に馴れ合う余裕は無い」

「イツセー……」

かき消えるような彼女の言葉にも、一誠は耳を貸さない。真っ直ぐディオドラの下に向かっていった。

彼もまた立ち上がる。その表情に今までの優しさは微塵も感じられなかった。まるで歴戦の戦士のような気迫だ。

「ディオドラさん……」

「アーシア、君は下がっているんだ。巻き込みたくない」

朱乃に手を引つ張られて、アーシアは部屋の隅に移動させられる。何重にも張られた防壁の中にリアス一行は避難した。これから起こる激戦を無意識に感じての行動だった。

彼女達の安全を確認してから二人は対峙する。

刹那、二人の拳は衝突した。



「直ぐにゲームを中止するんだ!」

「駄目です、何者かに術式が書き換えられています!!」

魔王としてゲームを観戦していたサーゼクスは大慌てで部下に中止を命じた。しかし返ってきたのは不可能の言葉。指示を重ねる彼を眺めながら、VIP席に招待されていた神々は嘲笑う。

「ゴウモリめ、真っ青になっておるわ」

「良い気味じゃ。儂らの土地を奪い取った罰なのじゃ」

「ま、面白い見世物だNA！」

和気藹々といった様子で不平不満をぶちまける三人。そんな彼等を置いて、オーデインはある神と酒を交わしていた。

「——という訳で、儂達は遺恨ある三大勢力を潰そうとしておる。貴殿にも協力して貰いたい」

「確かに悪魔には手を焼いてるってよ。イヴァイル・ピース悪魔の駒が死者まで生き返らせるから、管理者の俺たちとしては大迷惑なんだよ。だから……エジプト神話は喜んで協力するってよ」

ジャツカルの耳を生やした少年は心底嬉しそうに承諾した。彼こそエジプト神話における冥界神アヌビスである。

北欧、冥府、須弥山、日本、そしてエジプト。三大勢力に敵意を持つ神話は確実に集まっていた。

心強い仲間の誕生に笑みを深めるオーデイン。その視線の先には、ゲームフィールドを映すモニターがあった。

——life. 46 カウントダウン——

「これで、どうだ！」

ディオドラは魔力弾を乱射する。折り重なるアスタロトの紋章から打ち出された高密度の魔力を、一誠は軽々と避けた。

だが後ろに飛んでいった筈の弾は大きく弧を描いて尚も彼を追う。

一誠は目を見開いた。

「自動追尾か、厄介な」

「逃げてても無駄だ、兵藤一誠！ 確実に対象を追い詰めるのだからな！！」

「ならば、全部落とすまでだ」

立ち止まり、拳に力を込める一誠。そうして迫り来る魔力の一つに殴り掛かった。その瞬間、魔力弾が急激に膨張していく。

畏だ。頭がそう理解した時には遅く、零距离で爆発を喰らった。動きを完全に止められた後に次々とぶつかる弾。連続的な爆音と煙を一誠は浴び続けた。

「があ……ッ！」

堪らずに床に倒れ込む。そんな彼の前にディオドラは歩み寄った。その時、新たに転移魔法陣が出現した。紋章は「番外の悪魔」エキストラ・デーモンが一角、アバドンだ。軽やかに降り立った人物に頭を下げるディオドラ。

リアスは現れた影に見覚えがあった。若手悪魔パーティーの時、上層部の席に座っていたのを鮮明に覚えていたからだ。

「ファンキヤット・アバドン……」

「良くやった、ディオドラ。君の役目は終わりだ」

そう言い放ち、突如右手を彼に翳かざした。ボウ、と一際巨大な音が響く。ディオドラの腹には大穴が抉じ開けられ、背中まで貫通していた。

「ははははッ、これで私の作戦は成功だ！ 眠れ、哀れなディオドラ!! 貴様の美しい眷属は私が責任を持って管理してやる!! ははは——え？」

ディオドラは徐々に薄くなっていく。悪魔が消滅する時の光だとも思ったが。その光すら見えない。まさか、とファンキヤットは叫んだ。

「思念体か……!」

「ピンポーン」

何事も無かったかのように、一誠は立った。傷は見当たらない。

「お前が俺の両親を誘拐したのは知ってるけど、監禁場所が分からないくてさ。それで謀ったんだよ」

「おのれ、裏切ったなディオドラ！ 眷属がどうなっても良いと言うのか!!」

魔法陣を出現させ、部下と連絡を取ろうとするも出る気配は無い。ツーという音が流れるだけである。

「まさか、奪還されたのか!?!」

「部下はあの世に、眷属達は主の下に。因みにディオドラ本人も安全なところに避難済み。さて——死ぬ覚悟はできているか?」

怒りを放出しながら、ファンキヤットを睨む一誠。対する彼はすっかり戦意を喪失していた。小便を漏らしながら惨めに後退りしてしまっている。

しかしファンキヤットの首をへし折ろうと近付いた、その瞬間。メ
キヤリと何かが曲がる音がした。

グニヤリ、ボコボコツ。影は加速度的に膨れ上がっていく。

「……………おい、嘘だろ」

一誠は涙と共に、吼えた。

「どうしてだよ！ 父さん、母さん……………ツ!!」

『グギユアアアアアアアアアアアアア!!』

檻の中に居た筈の両親は何処にも見えず、代わりに二体の黒い獣が
閉じ込められていた。

「何で変異してんだよ……ッ!」

檻は怪力に耐えきれず無惨にもへし折られ、二匹の黒い獣が降り立つ。彼等の胸部には、顔らしきものが見えた。一誠の両親だ。

「まさか、ジークフリートが戦った奴なのか!」

「ひ、酷い……」

直視出来ない光景にリアスは吐き気を感じた。第三者でさえ、その状態なのだ。実の息子である一誠の心は潰れる寸前だった。

と、彼は鎧を解除し、ふらふらと歩きながら今にも倒れてしまいそうな足取りで名を呼ぶ。

「なあ、俺をからかかってるんだろう? 俺が親不孝者だから、家にも帰らないから。その仕返しなんだろ?」

周囲の制止も聞かず、彼は足を進めていく。

「解ったよ、せめて顔ぐらいは見せる。だから——」

「危ない、イツセー!!」

視界が横に逸れた。見れば、紅の髪が視界に映る。リアスだ。そう認識した直後に豪腕が頭を掠めた。黒い獣、——いや、一誠の母親が繰り出した一撃だった。

彼女に抱き抱えられたまま、二人共に床を転がっていく。やっと止まった時にはリアスと一誠は埃にまみれていた。

止まるや否や、彼女を押し退けて立ち上がる。やはり両親は獣だった。

「あ、ああ……。父さん、母さん……」

『グギユヴヴウウア!!』

一匹が床を強く蹴った。喚きながら、莫大なエネルギーの塊となって飛び出していく。巨大な弾丸が迫るのを彼は黙って眺めるだけ。

必死にリアスが手を伸ばすも届きはしない。だがぶつかると直前、間に飛び込んだ小さい影が獣を受け止めた。そのまま腕を掴み、もう一匹に向けて放り投げる。轟音と共に獣達は倒れ伏した。

影の正体、オーフィスは振り向く。何時もの冷静さを失った兵藤一

誠がそこにいた。

「……赤龍帝、攻撃しない？」

「オーフィス。そうだ、オーフィスなら元に戻せるだろう？ 頼む、二人を戻してくれ！ 俺の両親なんだ、あんな獣でも俺の大切な親なんだよ!!」

「……無理。獣の構造、把握してない」

「そんな——」

最後の希望だったオーフィスすらも獣を元に戻すことは叶わず、最早万策は尽きた。

狂った雄叫びが聞こえた。パワーのみならず回復力も高いのか、オーフィスの攻撃を受けて即座に立ち上がっている。あれでは本当に化け物だ。

『オオオオオオン!!』

降り下ろされた二つの右腕を、彼女はガードしようと身構えた。だがオーフィスの前にリアスが立つ。滅びの魔力を前方に展開した。バアルから受け継ぎし“滅び”は黒獣の指先から順番に、無へと返していく。

涙を流しながら必死に中止を訴える一誠を、リアスは敢えて見ようとしなかった。

「ごめんなさい、イツセー。私は“王”として眷属を守る義務があるの」「ふざけるな、リアス・グレモリー!! 今更になって何が“王”だ!! 退けよ、そこを退けッ!!」

「私はもう逃げない。だから、退かない」

苦しそうな声を漏らしながら獣は一旦、後方に跳躍した。両方とも右腕は綺麗に抉り取られている。魔力を消したリアスに一誠は詰め寄った。

「貴様、良くも——」

その先はパンツ、という何かを叩く音に遮られた。呆気に取られた顔で目の前を見る。

叩いたのは、オーフィスだった。

「……赤龍帝、いい加減にする」

ビシ、と指を突き立てるオーフィス。

「……我に親は存在しない。故に両親の事について我は解らない。でも今まで観察した結果、これだけは理解できた。このままなら、二人は永遠に苦しむ」

解っていた。心の何処かで自分がやるしかない。叶うなら元に戻って欲しいと願った。

だからリアスに掴み掛かったし、オーフィスにも戻してくれと懇願した。その結果がこれだ。

一誠の感情は爆発した。

「あ、うあ……うああああああ!!」

『Welsh Dragon Balance Breaker
!!!!』

具現化した紅蓮のオーラに身を包み、赤龍帝が宿りし鎧を宿す。魔力に反応したのか獣達が一誠に狙いを定めた。漆黒の魔力を口から吐き出すも、容易く阻まれる。

生じた隙を突いて、一誠は高速で二匹の眼前に駆けた。

「そんな魔力よりも、母さんの拳骨の方が痛いんだよ!!」

『BoostBoostBoostBoostBoost!!』

鳴り響く倍加の音声を乗せて、拳を思い切り顔に振り込んだ。堪らずに身体が浮いたところに連打を浴びせていく。振り向きざまに、もう一匹にも魔力弾を投げた。

『グガアアッ!』

苦悶の声をあげる獣。容赦はしなかった。

「どうした、父さんなら耐えられるだろ! 腕相撲だって結局一度も勝てなかった!! 息子に越えられるのが夢なら俺よりも長生きしろよ!! 母さんだって吠えてる暇があるなら、また料理作ってくれよ!

もう食えないとか嫌なんだ!! 釣り、プラモ、それから色々……また一緒にやると約束しただろうが!!」

殴る、ひたすら殴る。それが息子として最後に出来る事だ。

『ヴァアアアアア……ッ』

二匹は抵抗もせず、殴られた。時々か細い呻き声を呟くだけで倒れ

たまま動こうとしない。泣いているようにリアスは思った。

不意に獣達が口を大きく開き、魔力を集める。ビームを放とうとしている合図だ。

一誠はそれよりも先に魔力弾を射った。胸部に露出した人間の顔を貫いた。魔力は四散し、持ち上げかけた首は糸の切れたように崩れていく。直後、彼の脳裏が白に染まった。

▼ 『立派な男の子です』

病院の一室で、一人の女性が横になっている。その傍らに設けられた小さなベッドには、産まれたばかりの赤ん坊が寝息を立てていた。

『……俺の、子供——子供か』

『ええ、私と貴方の子供……。名前は決まっているの？』

『勿論だ。この日の為に何度も徹夜して考えた』

笑顔で男は告げた。

『一誠、だ。一番、誠実に生きてほしい。そんな願いを込めた』

『良い名前ね。産まれてきてくれて、ありがとう……。イツセー』

視界はまた白に濡れていく。

▼

何時の間にか、一誠は現実を引き戻されていた。目の前には獣が倒れているばかり。胸部にあった顔の元に彼は歩み寄った。

やはり父親と母親だった。ポツリポツリと二人は何かを呟いていた。身体が動かなくても、目だけは一誠を向いている。

「イツセー。君はイツセーだろう……。？」

「私達を置いて死ぬ筈が無い。そう信じていたわ……」

血に染まった顔で二人はただ微笑んだ。それは息子の無事が解った事による安堵。

「生きろ、イツセー……」

「そんな遺言みたいな事を言うなよ！ 立ち上がれよ、明日また仕事があるんだろ!？」

心配すら感じさせず、彼の隣にはオフィスが立っていた。影に氣付いた母が彼女に話す。

「君の名前は……？」

「……我、オーフィス」

「そう、オーフィスちゃん……イツセーを宜しくね、この子は寂しがりだから……」

最後の力を振り絞り、二人の獣はしつかりと手を握り合った。サラサラと徐々に砂となっていく。一誠は慌てて掴もうとしたがもう遅く、触れた箇所は維持できなくなり崩壊した。

思い出が、両親が、そして一握の砂が。風に吹かれ消えていく。

「さようなら、イツセー……」

「私達の子——」

そして全ては消えた。

「——死んだ。父さんが、母さんが。死んで……」

瞬間、一誠の意識は黒に喰われた。呪詛、怨念。そういった類のものが彼に雪崩れ込んでいく。亡者の囁きが、復讐を願う歴代赤龍帝の意思が一誠を埋め尽くした。

それすらも今の彼にとつてはいつでも良かった。だから唱えた。

禁忌の一つを。

「我、目覚めるは——」

——l i f e . 4 7 変異——

『オーフィス、今すぐにこの場から離れろ!』

それはドライグの悲痛な叫びから始まった。全員に聞こえるように発声したようだ。最初こそ首を傾げるオーフィスだったが、隣に立つ一誠をチラと見た瞬間、意味を理解した。

何が起きているのかと怪訝な表情を浮かべるリアス達にもドライグは告げる。

『リアス・グレモリー』

「赤龍帝……!?!」

『言いたい事は山程あるが、今は逃げろ。貴様と相棒には、きちんと決着をつけてもらいたいからな』

逃げろ、とドライグは言った。一体、何から逃げろと言うのだろう。リアスは問いたただそうとしたがそれよりも前に前兆は現れた。

無表情のまま立ち尽くしていた一誠が、突如笑い始めたのだから。

「——うひゃひゃひゃひゃ!!」

まるで壊れたスピーカーのように笑い続ける一誠。眼は焦点が合わず、口は三日月を描き、ただ嘲笑う。

闇、死、その他ありとあらゆる負の感情に覆われながら一誠はずつと笑った。

「……赤龍帝?」

あまりの変貌振りにリアスのみならず、オーフィスでさえ驚愕した。冷静さは微塵も感じられない。本当に同一人物かと疑いたくなる。それ程までに彼は呑み込まれていた。

『すまない、オーフィス。俺でさえ相棒は止められない。もう誰の言葉にも耳を貸さず、ただ暴れるだけの存在と成り果てるだろう。その先に待つのは、死だ』

呟くドライグに威厳は無く、我が子を案じる親のようである。

『だが、お前ならば或いは……ドラゴンを鎮めるのは何時だって——』
その先は、莫大な魔力に阻まれた。同時に一誠の口から禍々しい呪文が発せられる。それは老若男女、およそ千を遙かに上回る合唱。

その呪詛に交じり、一組の男女は謳う。

『我、目覚めるは——』

〈関係なかったんだ〉〈選ばれた人間だった〉

『覇の理を神より奪いし二天龍なり——』

〈静かに暮らせたはずだ〉〈どこの世界でも爪弾き者になるわ〉

『無限を喰い、夢幻を憂う——』

〈なら、俺が守る〉〈もう、死んでるのよ〉

『我、赤き龍の霸王となりて——』

〈また、守れなかった——〉〈そう、貴方は守れなかった——〉

《あの時も、そして今も……ッ!!》

言葉を紡ぐ度に鎧が変質していく。両手両足はより分厚く強靱になり、翼は身体の数倍に膨れ上がる。

全てを寄せ付けんとする鋭角なフォルムはまさに、古の赤い龍だ。

彼は裂けた口を抉じ開けて、絶叫する。

『汝を紅蓮の煉獄に沈めよう——』

『Juggernaut Drive!!!』

暴力的な咆哮は眼に見える物を灰塵^{!!!!}にしていった。床、天井、壁。支えを完全に失った神殿は轟音を鳴らしながら崩れていく。オーフィスは右手を少し動かして結界術式を展開した。無論、リアス達も一緒に包み込んでいる。

不思議そうな目で見る彼女に視線を合わさず、淡々と言った。

「……ドライグの頼み」

オーフィス達を覆った結界は宙に浮き、そのまま神殿の外へと避難した。外に出た瞬間、神殿は眩い血の光と共に消え去った。

閃光が収まった後に残ったのは瓦礫の影や形すら見えない、荒れ果てた無の世界だった。その瓦礫の上で彼等是对峙する。首謀者であるファンキヤットは龍の気迫に当てられ、冷や汗を流す。

『ぐぎゅあああああああああああああッ!!』

皮肉にも彼の叫びは、黒い獣に似ていた。

「これがあの^{ジャガーノート・ドライグ}覇龍[”]か。しかし、データ上は——」

パシユンツ。そんな、何かを斬る音がした。遠巻きに様子を見守つ

思わぬ人物の登場にリアスは驚く。ヴァーリは三大勢力会談時に墮天使を裏切り、“禍の団”に走った男だ。そして何よりも赤龍帝と対をなす白龍皇である。

身構えるリアス達を意に介さず、彼はオーフィスに歩み寄る。

「まさか彼が“覇龍”を使つてしまうとは……それにしても妙だな。波動が純粹な“覇龍”とは少し違う。まるで何かが混ざっているようだ。しかし、理由はどうであれ、このまま彼を失うのは惜しい。俺が止めようか？」

ヴァーリの言葉に、オーフィスは強く首を横に振った。

「……我が、止める」

そう呟き、彼女は一人飛び去った。

▼ 『俺は、守れなかった……』

真つ黒い空間の中で一誠は泣きじゃくる。また、守れなかったのだ。自分が不甲斐ないせいで二人は死んだ。

唐突に、声が聞こえる。

『貴方は守れなかったの』

『あ、ああ……』

黒い髪、その美しい声。忘れる訳が無い。彼女は一誠の初めての恋人なのだから。

『貴方、言つたわよね。今度こそ守つて見せると。その結果がこれ？』

面白いジョークね』

『レイナーレ、お前は死んだ……俺の目の前で消し飛ばされた筈だ……』

そう叫ぶと、レイナーレはそつと一誠の頬を撫でた。あの時から何も変わらない笑顔で語りかける。

『……イツセー君の中で私は死んだ扱いなんだ？ だったら、なぜ私の影を追いかけているのかしら？』

彼は否定したかった。だが出来ない。自分でも薄々気付いているからだ。見つめてくる彼女から目を逸らした。

『や、やめろ。俺は——』

『そんな事を言うけど、証拠だってあるじゃない。オフィスに近付いた本当の理由。それは——無意識に私の姿を重ねたからでしょう？』

『苦しんでいるの？ それは当然よ。私に未練があるのだから』

『……初めての恋人だからな』

墮天使レイナーレ。彼女はアーシアの神器を抜き去り殺害した張本人であり、そして一誠がかつて愛した女性だった。

レイナーレはリアスに消し飛ばされて死亡したが、それで終わる程に簡単な問題では無く、一誠は表面上は気にしない素振りを見せていたが、尚も決して消えない想いを抱えていた。

『見ていて初々しかったわ。女を知らない男はからかい甲斐があつて面白いわね』

『初デートも念入りにプランを考えた……』

夕暮れの公園で告白された時の事は今でも眼に焼き付いている。

何故、こんな美少女が俺に。

そんな疑問よりも嬉しさの方が大きかった。自室で一人はしゃいだのを覚えている。ネットで必死に情報を集め服装にも気を付けた。当日は何処に行こう、何を食べよう。自分なりに考えた。

そして、その全ては光の槍に貫かれた。

『とても王道なデート、ありがとうね。おかげでつまらなかったけど』

『レイナーレ……俺は……』

はあ、と彼女は溜め息を吐いた。その目は一誠の背後に向けられている。

『私ばかり見ているけど、後ろは良いの？ 貴方の大事な人、待っているわよ？』

慌てて後ろを振り向く。そこに二人は立っていた。死んだばかりの父親と母親だった。そればかりか、周囲には見慣れたりビングが広がっている。

失った家族がそこにあつた。新聞を読んでいた父親が一誠に気付く。それと同時にキッチンに立っていた母親も彼に視線を向けた。

『おう、イッサー。どうして突つ立っているんだ？』

『今日の晩御飯はイッサーの好きなハンバーグよ。ほら、席に着いて』

『父さん、母さん！生きて——』

無垢な子供のように彼は駆け寄ろうとした。だがその瞬間にメキヤリと何かが歪む音がした。新聞越しに父親が訊ねる。

『どうした、イツグヴヴェエギヤアアア!!』

『グウギヤアアアアア!!』

食卓、家族。自分を包んでいた暖かい思い出は、獣の咆哮に引き裂かれた。

一誠の隣にレイナーレが現れる。クスクスと笑いながら彼女は言った。

『二人はこう言ってるの——「よくも殺したな」』

『あ、ああああああ!!』

一誠は頭を抱え、泣き叫ぶ。親殺しという大罪を醜く悔いるその姿は悪魔でもドラゴンでもなく、限りなく人のそれだった。



『ヴオオオオオオオオオオオオオン……』

崩れ落ちた神殿の中心で悠然と佇む一誠はある種の神秘的な美しさがあつた。妖しい光沢を放ちながらも吼え続ける一誠。オーフィスは彼の前に立ちはだかつた。

「……赤龍帝」

眩きに一誠が反応した。濁った双眸が彼女を捉えた。するとオーフィスは構えを解く。“覇龍”を前に、己の全てを晒そうと言うのだ。華奢な身体を吹き飛ばそうと、一誠は腕を降り下ろした。

「……ふん」

打撃をまともに喰らった彼女は、容易くその場に踏み留まった。“無限の龍神”たるオーフィスさ生半可な攻撃では倒れやしない。

ましてや今の一誠は暴走しており、特訓で得た全てをかなぐり捨てた、力任せの攻撃しかできない。どうして倒れる理由がある。

自身の何倍もあろうかという巨大な鉄拳をオーフィスは掴んだ。動かそうとしてもそのままピクリと動かない。

「……赤龍帝、目を覚ます」

そう言うで一誠をあつかりと投げ飛ばした。巨体を宙に浮かせた

彼は翼を広げ、天に逃げる。一誠は吼えた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

▼ 『貴方は守れなかった。あの時も、そして今も』

レイナーレの言葉が胸に刺さる。

『嫌だ……! もう、失うのは嫌だ!!』

誰か、助けてくれ。一誠は願う。だが此処は闇だ。一体誰が現れると言うのか。彼は心身共に衰弱していた。

▼ 轟音。次いで砂煙。暴走した一誠の半身は地に埋められていた。隣にはオーフィスが座っており、暴れようとする度にチョップを入れる。

見た目だけなら可愛らしいが、最上級悪魔をも瞬時に消滅させる威力だ。いかに“覇龍”でも喰らい続ければ動く事は叶わない。

タイミングを見計らって、ヴァーリが降り立つ。

「それで、どうする?」

「……決まっている」

そう告げると彼女は、一誠の左手の甲に埋められている宝玉に触れた。ドラゴンからのアクセスに反応して宝玉は輝く。

「……潜る」

そしてオーフィスは光の中に消えた。

▼ 『……赤龍帝』

暗く冷たい闇の中に、不釣り合いな程に幼い声が聞こえる。その声にレイナーレ、獣、そして一誠が振り返った。姿を見た途端に彼は涙を溢れさせる。

『オーフィス……』

『……赤龍帝、大丈夫?』

ごく自然に彼に寄り添うオーフィス。予測しなかった乱入者にレイナーレは声を荒げた。

『あら、新しい彼女? 何時からロリコンになったのかしら』

嘲笑いながら二匹の獣を差し向ける。だが相手が悪過ぎた。彼女が少し手を振っただけで獣は砂となり崩壊した。何が起きたのか全く理解できない。それはレイナーレのみならず一誠もそうだった。やはり彼女の隣に立つ日は遠い。改めてそう実感した。

『……邪魔』

『ヒイツ!?!』

オーフィスが右手を向けるが、その腕に一誠が触れた。ゆっくりと下に降ろしていく。もう怯えは無かった。

『こいつは俺が倒す』

“赤龍帝の籠手”を翳し、音声と共に鎧を纏う。一步ずつ噛み締めながら彼は足を進めた。初恋に決着をつける為に。

もうレイナーレに余裕は見られなかった。後退りしながら必死に命乞いをする。

『イツセーくん! 私を助けて!』

一誠の足が止まった。

『私、貴方の事が大好きよ! 愛してる! だから——』

もう限界だった。高密度の魔力弾を手から放った。紅蓮の魔力は彼女を包み込んだ。

『——グッバイ、俺の恋』

あの時と同じ台詞を一誠は敢えて告げた。灰も残さずに消え去っていくレイナーレに果たして聞こえただろうか。そんな事を頭の片隅で考えながら、オーフィスに視線を移す。

『迷惑かけて、ごめんな。……そして、ありがとう』

消えていく。黒が、恐怖が溶かされていく。鎖から解放されるような感覚だった。

オーフィスは淡々と呟いた。

『……帰ろう、赤龍帝』

そう言うとき彼女は一誠の腕を引っ張った。天には光が見えていた。

『……兵藤、一誠』

逆光でオーフィスの顔は見えなかったが、笑っている気がした。そして視界は白に覆われた。

一誠の意識は目覚めた。最初に見えたのは心配そうに覗き込むオーフィスの顔だ。

首に当たる柔らかさと冷たさ。どうやら膝枕されていたらしい。

「オーフィス」

「……ん、目が覚めた？」

オーフィスだけでは無い。ヴァーリ、更にはリアス達も見える。自分は何をしていたのか。記憶が無い。

「此処はレーティングゲームのフィールドだ。お前は“覇龍”と化したんだ。だから荒れ果てている」

「そうか……心配させちまったな」

「構わないさ」

それからリアスを見た。申し訳無きそうに顔を俯かせる彼女に本当なら罵声を飛ばしているが、今回ばかりはそうもいかない。

だが、それでも、顔も視線も合わせる事は無かった。

「……行こう」

「そうだな、皆にも心配を——」

起き上がろうとした彼は地面に倒れ伏した。その左腕は禍々しい龍の腕と化していた。

デイトドラとその眷属達は北欧にいた。オーデインの誘いに乗り冥界から亡命したのだ。

彼にとつては家柄も地位もどうでも良かった。ただ愛する眷属さえいてくれれば構わなかった。アスタロト家は次期当主が不在となるが問題は無い。現当主たる父親はピンピンしているのだから。

「僕と父さんは折り合いが悪かったからね。元々継ぎたくは無かったんだ」

以前の屋敷には大ききこそ劣るが、自然に囲まれた美しい邸宅を与えられた。曰く、情報の対価の一部らしい。此処で新しい生活が始まるのだ。

と、部屋の隅に二人の少女が見える。

「あの、デイトドラ様。私達まで良かったのですか？」

「気にしないでくれ。帰る場所が無いんだろう？」

スノワート、モルプス。元ファンキヤットの眷属だ。主が死亡した事によりフリーとなった姉妹はデイトドラの誘いに応じた。自分達が邪魔にならないかと心配するスノワートだが彼は優しく迎えてくれた。

その微笑みに顔を赤らめる二人に、「女王」であるマーガレットはそつと呟く。

「ふふ、大丈夫よ。デイトドラ様は優しい人ですから。私も新しい家族が増えて嬉しいわ」

彼の元でなら幸せな日々を送れる。姉妹はそう確信した。彼女達が落ち着いたのを見計らってデイトドラは笑った。

「そうだね……もう一人、増えるかもしれないよ」



一誠は目覚めた。複数のざわめきが聞こえる。どうやら自分は倒れたらしい。此処は「禍の団」本部の医務室だ。オフィスに敗北し、何度も担ぎ込まれたから覚えている。

「……兵藤一誠」

「目が覚めたにや！」

「すまない、心配をかけた……」

曹操、ヴァーリ、黒歌、白音、ソフィア、フリード。あまり大人数で押し掛けるのも迷惑だと思ったのか、意外にも少なかった。いや、部屋の外にも多数の影が見える。

だが一番欲している彼女が居ない。どうして見えないのだろうか。キョロキョロと辺りを見回す一誠に、ヴァーリは呆れながら彼の隣を指す。ヴァーリだけではない。その場にいるほぼ全員が、彼と同じ表情をしていた。

「……オーフィス」

「すう……」

オーフィスは一誠の隣で眠っていた。決して離すまいと手を握る様子は見ていて愛らしい。今回も看病をしてもらったのか。心の何処かでそう樂觀視していたが、対称的に皆の顔は暗い。

「覚えてないか？ お前は中途半端に“覇龍”となった」

神妙な顔でヴァーリが口を開いた。

「覇龍”。それはドラゴンを封じた神器でその力を強引に解放する禁忌の一つだ。発動すれば神をも上回る力を得る」

『だがそれは一時的なもの。代償として寿命を縮め、最悪死に至る。それに暴走もしてしまう。——二天龍を宿した者達は例外無く覇を求めて死んだ』

彼の言葉にアルビオンが続ける。二天龍とは思えないおぼろ気な声だ。ずっと見てきたのだろう。歴代所有者の末路を。それらは何れも悲惨で目を背けたくなるようなものに違いない。

その時、一誠の左手に紋章が浮かんだ。ドライグだ。

『相棒は寿命の全てを削られてしまう筈だった。だが、実際にはこうして生きている。俺と話をしている。仲間心配されている。——その理由は、分かるな？』

「……赤龍帝、おはよう」

彼が何かを言う前に、場の空気に似合わない声が響いた。隣を見れば、オーフィスが目を擦りながら上半身を起こしている。

彼女が眠っていた理由は看病と――。

「オーフィス。もしかして……」

「……私は大丈夫」

自信満々に胸を張るが、途端によろめく。やはり無理をしていた。慌てて身体を支える。

「俺達が出ていようか、兵藤一誠」

「……頼む」

一言、そう告げると彼等はそつと部屋から出ていった。あれだけ人に埋まっていたのが嘘のように今は二人きりだ。

ヴァーリ達がいなくなった直後、一誠は彼女の胸に顔を埋めた。とても暖かい。

「……」

「……どうして、何も言わない？」

「泣きたいからさ」

何時かのようにオーフィスは頭を撫でた。あの時よりも彼は成長している事がよく解る。確実に強くなっているとと言えるだろう。ただ同時に、弱いとも彼女は思った。

「父さんと母さんを救えなかった。オーフィスに負担を強いちまった。俺の寿命は減ったんだろう？」

コクリとオーフィスは頷く。

「『覇龍』の代償、我が肩代わりした。でも完全には出来なかった。赤龍帝の寿命は半分削られた」

「半分か……」

永遠に近い時間を生きる悪魔の寿命。その上更にオーフィスの助力もあったからこそ一誠は死なずに済んだ。

どれか一つでも欠けていたら、彼はもうこの世には存在していない。考えると恐ろしい話だが、一誠はそんな事等気にはいなかった。静かにオーフィスに語った。

「二人でいられる時間、減ってしまったな……」

分かっている。これは闇に呑み込まれた自分のミスだ。悪魔が諸悪の根源であれ、最終的に判断を下したのは他ならぬ兵藤一誠なの

だ。

罪の意識に蝕まれながらも、彼は願う。

「ずっと、このまままでいてくれ。オーフィスだけは俺から離れないで……」

そう呟く彼の瞳は、既に濁りきっていた。



その頃、リアスとその眷属達、そしてアザゼルを含むオカルト研究部のメンバーは部室に集まっていた。無論、ディオドラとのゲームについてである。

「不可解なことだらけね。アザゼルは何か気付いたことはあるかしら？」

「まあ、な」

アザゼルが適当に誤魔化した直後、部室に魔法陣が展開される。その紋章はアスタロトだ。

「こんにちは、リアスさん」

「ディオドラ!? 貴方、どうして!?!」

「……理由は一つです」

そう言ってからディオドラはアーシアの方を見た。そして真剣な顔で告げた。

「迎えに来たよ、アーシア」

「アーシアを迎えに来たですって!?! どういう事なの!」

ディオドラの突然の宣言に、リアスが怒声を放つ。だがそれには目もくれず彼は言葉を続けた。

「すまない。僕がもっと早く君を見つけていれば、アーシアは死なずに済んだかもしれないのに。それは僕の責任だ」

「ですがまたこうして再会できました」

頭を下げるディオドラ。自分のせいで彼女は死んでしまった、と彼は後悔していた。

運良くリアス達に救出されたから良かったものの、そうでなければ確実にアーシアは死んでいた。シスターと悪魔は本来敵対しているのだから。

仲睦まじく話す二人の間に、リアスが割って入る。

「待つて頂戴、ディオドラ。私の質問に答えていないわ」

「そうでしたね……単刀直入に言いましょう」

一拍置いてからディオドラは告げる。

「アーシアさんのトレードをお願いしたいのです」

トレード。"王"同士で駒となる眷属を交換できる、レーティング・ゲームのシステムの一つだ。同じ駒で尚且つ同価値の場合のみ交換可能となる。拒否権を持つ者は"王"二人と、トレード対象となる眷属本人である。

彼らの意見が別れるだろうと察したアザゼルが一先ず場を収める。

「待て。この場は俺が第三者として公正に仕切らせて貰う。そうでないと後でトラブルとなってしまうからな。リアス、お前は反対か？」

「当然よ。アーシアは私の大事な眷属だもの」

「という訳で意見は別れた。——後はアーシア次第だ」

同時にリアス、アザゼル、ディオドラ。三人の視線がアーシアに向けられた。対する彼女には驚く程に迷いが無かった。以前なら迷っただろう。リアスもディオドラも大切な恩人なのだから。

だが、真実を知ってしまった今は違う。

人質を取りディオドラを苦しめ、彼を"はぐれ悪魔"に墮とした上層部を、現悪魔政府を信じることなど不可能だ。

「——私は、ディオドラさんの下に向かいます」

移籍。それが彼女の選択。アーシアの言葉にリアスは愕然となり、反対にディオドラは安堵する。決まりだな、とアザゼルが纏めた。

「これでアーシアはディオドラの眷属となった。彼女が自分で決めた事だ、文句は言えないぞ？」

「わ、分かっているわよ。……アーシア、私の何が気に入らないのかしら？」

「いえ。部長に文句や不満がある訳ではありません。寧ろ、私の命を救って下さったことに感謝をしているぐらいです」

しかし、それ以上に上層部が憎いのだ。

「今にきつと、分かりますよ……」

その時のアーシアは、とても寂しそうな顔をしていた。

——life. 50 余波——

冥界は混乱に包まれていた。リアスとディオドラのレーティングゲームが世間で大きく取り上げられたからだ。

上層部や魔王サーゼクスは情報流出を防ごうと奔走したが、それよりも一足早くゲーム映像がメディアに報道されてしまったのだ。

暴走した兵藤一誠がファンキヤットを跡形も無く消し飛ばす一部始終は冥界のみならず、各神話にも広く知れ渡っただろう。

「やられた！ 情報が完全に出回ってしまった！」

「これは問題だぞ。民衆が騒ぎ出すのは目に見えている」

上層部の老人達は今後の対策に頭を抱える。既に一部のジャーナリストが嗅ぎ付けているとの報告もある以上は、早急に次の一手を考えなければならぬ。今は「禍の団」の襲撃とされているが、疑問を感じ始めている者も居るかもしれない。

ざわつく彼らを見かねて、一人の男が声を発した。

「——静まれ」

凜と力強い声に、他の上層部は冷水を掛けられたかの如く押し黙る。それだけの力を男、ゼクラム・バアルは持っていた。

それもその筈、彼はバアル家の初代当主。悪魔創生の時代から生きる上層部のトップなのだから。

「しかし、ゼクラム卿。これは由々しき問題ですぞ」

「アバドンの若造が勝手に動くからそうなるのだ。同調した貴様らも分かり。各メディアの重役に連絡を取れ。我々の息の掛かった者達だ」

他神話に広まったものは仕方が無いだろう。会見を開いたところで疑いは避けられない。ならば情報操作に全力を注ぐべきだとゼクラムは考えた。ありとあらゆるコネクションを使い、一刻も早く情報を風化させる。

「了解しました。直ぐに……」

そう言うなり他のメンバーは次々と転移していき、会議室に残ったのは彼一人。考えるのも嫌になる未来に、ゼクラムは溜め息を吐い

た。

やがて訪れる最悪の未来が自分の予想を越えていることなど、ゼクラムが知る由は無かった。

Genocide.

life. 51 旧魔王派

レーティング・ゲームへの一誠乱入事件から一週間と少し。冥界政府は未だ混乱の渦に包まれている、と旧魔王派のトップであるカテレアは淡々と述べた。

上層部と魔王サーゼクスの根回しも意味を成さず、兵藤一誠の両親を人質にした、という不都合な情報は隠蔽しきれずに——民衆は兎も角として、他神話勢力への対応に苦勞しているとのことだ。

つまり、今こそが冥界を襲撃するに最高の機会だ。

そう彼女は何時にも増して真剣な眼差しで、同じく旧魔王派を率いるクルゼレイに訴えた。

確かにカテレアの意見にも一理ある。現在、冥界上層部は事態の沈静化に精一杯で、とても他に手を出せるような状態ではない。加えて連中も続けざまに襲われるとは予想していないだろう。

だが、直ぐに賛成すると思われたクルゼレイは意外にも返答を渋った。あまりにも政府を甘く見ているのではないかと考えたからだ。

旧魔王派の兵力はようやくと千に届く程度。対して相手は無傷の政府軍に、“皇帝”^{エンペラー}ベリアルを筆頭に魔王クラスが並ぶのだ。まともな戦っても勝ち目は無い。

故にこの隙に乗じて力を蓄えるべき。それが一つ目の理由。

「考え直さないか、カテレア。もう俺達は……」

今まで眼を背けてきた二つ目の理由を口にしようとするも途中で止めた。目の前に座る最愛の女性は、既に覚悟を決めていると悟ったのだ。

だからこそ、とより口調を強めて言うカテレア。二人きりの会議室にただ言葉のみが響く。

「蛇”を飲んだ私達には時間が無い。貴方も知っているでしょう?」

「……」
オーフェイスが産み出す魔力の結晶。姿に準えて“蛇”と名付けられ

たそれは、用いた者の力を飛躍的に上昇させるという能力を有しており、カテレアとクルゼレイもその恩恵で魔王クラスの実力を手にした身だ。何しろ、オーフィスを唆したのも元を辿れば「蛇」が目当てだったのだから。

だが、一つ考えて欲しい。魔力や身体能力が爆発的なパワーアップを遂げたとして、果たして器たる身体は無事で済むだろうか。

答えはNOだ。

「急激な変化に肉体が耐えられず、やがては塵となってしまう。悲惨な末路を何人も見てきたわね。遺言も、断末魔すらも残せない」

「俺も、カテレアも。先は長くないだろう。ならばこそ、戦力を整えてから最後の攻撃に——」

「その認識は甘いぜ、クルゼレイ」

続きは第三者の冷たい声が遮った。見れば部屋の扉に背を預けている人影がある。

駒王学園の制服を身に纏った、氷のように鋭い視線を向ける少年。今代における赤い龍ドレイグの宿主。そして赤龍帝派を率いる男。

兵藤一誠。何処と無く震えた声で名を呼んだ。

「何をしに来た？」

彼がこの場に訪れた理由がクルゼレイには分からなかった。何故なら両親を失って以降、一誠は自室に籠っていたのだ。

仲の良い曹操やヴァーリ、一番の部下を自称するフリードの言葉にも耳を貸さず、連れ添っていたオーフィスに寄り添い、半ば脱け殻と化していた筈だ。

だから余計に意外で、尚且つ不気味だった。彼の眼は深い憎悪に支配されるでもなく、悪魔への復讐を目論むギラギラした様子も見当たらない。

まるで決して失ってはならない歯車が抜け落ちたような、そんな濁りきった瞳をしていた。

「私が頼んだのです」

動揺から抜けきれない男に、カテレアは先程の質問の答えを投げた。

「確かに私達では戦力不足。なら、他から集めれば良いだけの話じゃない。魔王に抗えるだけの戦力をね」

そうして自分に都合良しと選んだのが兵藤一誠なのだろう。実力と知略を兼ね備え悪魔への復讐を目指している点を考慮すれば、確かに協力者にはうってつけの逸材だった。

避けられない旧魔王派の運命を垣間見て、やがてアスモデウスの末裔も力無く頷く。

細かい話し合いを終えて、意気揚々と去っていく赤龍帝と最愛の女性の背に、彼は問いかけた。

「だから甘く見ていると言うんだ、お前は——隣に立つ男の本性を、何も解っていないだろう？」

——life. 51 旧魔王派——

会議室から出た直後、一誠は廊下の壁にもたれているオフィースに気付いた。ゴスロリ服の彼女は一誠が出てくるなり駆け寄る。

彼は微笑んで、オフィースの頭を撫でた。透き通るような黒髪が舞い、或いは名残惜しそうに、武骨な指に絡まった。

「一緒に行こう、オフィース」

「……うん。我、ずっと赤龍帝と一緒に」

そのまま手を繋ぎ、二人は歩を進めた。暫く歩いてから、「オフィース」一誠は愛しそうに呼んだ。続いて、俺の隣に来てくれと呟いた。

——ずっと、ずっと。一緒にいよう。

自室に戻って来るや否や、一誠は簡易ベッドの上に倒れるように飛び込んだ。無機質で清潔な香りが鼻を擦る。自分と同じそれに深く溜め息を吐いてから、次いで呆然と入口に立ち尽くしたままのオーフィスを見た。

長い黒髪を腰まで伸ばして、同じく黒いゴスロリに包まれた彼女。出会った時と何も変わらない格好だ。

おいで、と横たわったまま顔だけ向けて言うと、オーフィスは勢いよく一誠に抱き付いた。胸板に顔を預ける少女に安心を覚えて、彼もまた赤く歪んだ両腕を彼女の背中にまで回した。

かつて払った代償の証。即ち、龍となつた鱗まみれの腕はゴツゴツしていて、思わず顔をしかめるオーフィス。少し悲しそうな眼でそれを見つめた。

「……赤龍帝。また、戻ってる」

その言葉にやつと気付いたのか腕に視線を移す。大量の赤い鱗と、隙間を縫うように散りばめられた翡翠の宝玉が、今も心臓のように鼓動を発していた。

ドクリ、ドクリ。生きる音を立てる毎に自分を蝕むような気がして。一誠は黙って両腕を差し出した。

「……じゃあ、頼むよ」

「……ん」

短く頷いてから彼の指を口に含んだ。そのまま舌で転がして、或いは口をすぼめて、赤く熱いオーラを吸い取っていく。こうして腕に溜まった余剰分の魔力をオーフィスが吸収する事で一誠の腕は人間へと戻るのだ。

龍のままでは不便だと言う彼の為に、時折こうやって魔力を散らししている。何とも焦れたい時間ではあるが、同時にオーフィスの密かな楽しみでもあった。

部屋の中に水の滴る音と、チロチロと舐める音だけが染み込む。音の数だけ赤い魔力が抜けていき腕は元の間らしい姿を取り戻して

いく。

その一部始終、正確には何処と無く艶かしいオフィスの表情を眺めながら。一誠は静かに口を開いた。

「……オフィス。俺達はずっと一緒だよな？ 俺から離れないよな？ 一人ぼっちにしないよな？」

突然羅列される質問の数々に、オフィスは首を傾げた。そして、ただ機械的に話していく一誠に恐ろしいものを感じた。上手く説明は出来ないものの、彼の言動の端々から冷たい何かを感じ取った。舐めるのを止めて、じつと彼の顔を見る。だが何れだけ眼を凝らしても、やはり普段と変わらなかった。

そんな中で不意に、一誠はオフィスの肩を掴む。突然のことに動揺する彼女を他所に顔を近付ける。互いの息が鼻にかかる程に二人の距離は近く、思わず後ろに仰け反った。

そこに一誠がのしりと覆い被さった事で、丁度彼が押し倒したような体勢になった。両手で彼女の華奢な腕を掴み、退路を封じる。

一誠の眼は力強く、そして血走っていて――。

「……赤龍帝？」

—— l i f e . 5 2 兵藤一誠② ——

兵藤一誠は脆い。彼と仲の良い者は口を揃えて語る。並みの上級悪魔を越える実力者で、赤龍帝の宿主でも。忘れてはならない。

彼はつい最近、裏の世界に足を踏み入れた元一般人なのだ。

英雄の末裔でもなく、魔王の血を受け継いだ訳でもなく、悪魔祓いの訓練も受けてない。本当にただの平凡な学生だった。故に、周囲は彼の精神が限界を迎えてしまうことを恐れていた。

「おーい、大将。頼まれてた悪魔のリスト、作ってきたぜー」

赤龍帝派に加入したフリードは、分厚い資料を片手に一誠の部屋の扉を叩いた。

先日、活動を再開した彼から頼まれたとある悪魔のリストアップが完了したので、こうして持ってきたのだ。

暫くすると半開きにした扉の先から、一誠が顔を出した。

「おう、フリード。手間取らせて悪いな」

「気にすんな。大将は俺ちゃんを顎で使えば良いんだよ。それにしても、少しやつれてないか？」

「……察しろ。オーフィスと一緒なんだぜ？」

ほつと胸を撫で下ろすフリード。一時は自室に引き籠っていたのでどうなるかと気を揉んでいたが、オーフィスが上手く慰めたのだから。話を切り替えるべく、資料の束に視線をやった。

旧魔王が積極的に動き始めたタイミングで、この命令。無関係では無いだろう。

「ああ、目的が気になるか？」

「そりゃ旧魔王のお二人さんが戦力再編してるんだ。話し合ってた大将の動向を覗むのも当たり前前だろ？」

「安心しろ、お前も顎で使うつもりだ。と、場所を変えよう。今はオーフィスが寝ている」

そして闇に溶けて去っていく二人を、オーフィスは扉越しに見つめていた。一誠との距離が離れた気がして、毛布にくるまったまま手を伸ばした。

されど、その手は虚空を掴むばかりだった。

駒王学園の片隅に位置する旧校舎。一見すると古びた木造建築物だが、実は幾重にも侵入者を阻害する結界術式が展開されている。

それは現魔王の妹であるリアス・グレモリーがオカルト研究部の部室として好んで用いているからだ。旧魔王派や大王派を筆頭に、四大魔王を良く思わない者は多い。そういった連中を考慮すれば当然の処置だった。

特に兵藤一誠がテロリストとなつて悪魔上層部に反旗を翻した点を考えれば、寧ろ足りないとも言える。

部室のソファに座り、アザゼルは思考の続きを巡らせる。

兵藤一誠は現魔王政権や上層部を深く憎悪しているだろう。だからこそ旧魔王やはぐれ魔法使いと組んで駒王会談を襲撃してきたし、また若手悪魔パーティーに介入してきたのだ。

両親を殺害された今となつては、更に過激な行動に出る恐れもある。

「……前途多難だな、俺達は」

「神の子を見張る者」の長としては、悪魔を切り捨てて高みの見物を決め込みたい。しかし、「駒王協定」を結んでいる現在では見捨てた瞬間にこれまでの努力が水の泡になってしまう。

つくづく厄介なことをしてくれた、とアザゼルはサーゼクスの顔を思い浮かべて溜め息を吐いた。次に部室に集まっている面々を一瞥した。

リアス、朱乃、木場、ゼノヴィア。それにギヤスパーを加えた計五名が現在のオカルト研究部のメンバーである。本来なら此処に小猫、アーシア、そして一誠もいたのだが……。

「小猫はテロリスト集団『禍の団』に拉致されるし、アーシアはディオドラに付いていくし、そして一誠は……。本当に前途多難だな、リアス」

「……言わないで、アザゼル。私が不甲斐ないから三人は離れていった。それだけのことよ」

そう洩らして俯くリアス。次いで残った眷属達を見つめた。朱乃達もまたそれなりに問題を抱えている。本来なら、「王」たる者は主君として助言や手助けを行うべきなのだ。

ただ、彼女は本人の成長を促そうと自ら動くことはしなかった。機会を見出だせなかったか、そもそもしようと思わなかったのかはリアス自身にしか分からないが。

不意にアザゼルは、次のレーティング・ゲームにてリアスの対戦相手となるサイラオーグを思い出した。

サイラオーグ・バアル。ソロモン七十二柱における序列一位、名門バアル家の次期当主。魔力を持たずに産まれ、周囲に蔑まれ、それら全てを努力のみで補い、遂には実力で若手悪魔最強の名声と次期当主の座を勝ち取った熱き獅子王である。

その生い立ちから上級悪魔としては珍しく階級の低い者にも分け隔てなく接している事でも知られており、彼の下には身分を越えて優秀な眷属が集まっていると聞く。

——今回のゲームについて、リアスの勝率は限りなく低い。

ゲームランキングのトップに君臨する「皇帝」ディハウザー・ベリアルの意見だ。双方の総合的な実力を加味しての極めて現実的な予想である。世論も評論家も揃ってサイラオーグの圧勝だと信じて疑わなかった。

「厳しいが、これが現実ってもんだ。猫も杓子もお前が負けると踏んでいる」

或いはそれが上層部の狙いだろうとは口にしなかった。あの赤龍帝に立ち向かった英雄を売り出す絶好の機会である。対するは眷属に離反されたリアスだ。下手をすれば、不当に介入してでも彼女を敗北させるかもしれない。

「……私はどうすれば良い？ どうすれば、この状況から抜け出せるの？」

アザゼルは咄嗟に答えられず、ただ特訓内容の強化を肅々と挙げるしかなかった。

レーティング・ゲーム開始まで、残り一週間。

“禍の団”の本部施設はブロック毎に東西南北の四つに区別されており、旧魔王派や英雄派などが主に管理を担当している。

その南部エリアの一室、即ち旧魔王派が有している会議室には五人の影が集まっていた。

旧魔王派の筆頭であるカテレアとクルゼレイ。赤龍帝派を率いる一誠とその腹心を自称するフリード。

目前に控えた作戦の為に四人は秘密裏に手を結んでおり、こうした会議も今に始まったことではない。

ただ残る一人の参加について誰が予想出来ただろうか。不敵な笑みの少年にある者は疑惑の視線を向けて、またある者は特に何も言わなかった。

「……珍しいわね、ヴァーリ。貴方から進んで協力を申し出るなんて」
心底驚いた様子のカテレアの言葉に悪戯っぽくヴァーリは笑う。

「単なる気紛れさ。ただし、旧魔王の末裔として……だけどな」

戦争開始まで、残り――。

レーティング・ゲームを翌日に控え、アザゼルとサーゼクスはゲーム会場の下見に訪れていた。アガレス領の端に建設された真新しいドームは、今回の為に急いで建てられた会場である。

そこに含まれた政治的意図——上層部の都合とやらを感じながらも、アザゼルは組み込まれた術式群を点検していく。

“禍の団”の襲撃に備える必要がある、というサーゼクスが訴えたことで、ようやくと上層部共から立ち入りの許可をもぎ取ったのだ。

この機会を逃すまいとアザゼルは侵入者探知から防衛機構の一つ一つを丁寧にチェックしていく。

それに、と彼は傍らに立つ親友に視線を移す。
今ならば彼と二人きりで話し合える。

やがて最後の術式を調べ終えたアザゼルは大袈裟に額の汗を拭って見せた。それから真剣な表情になって、サーゼクスを見据えた。

何時ものふぎけた様子を消して、墮天使総督の眼をしている彼に気圧されるサーゼクス。

「なあ、サーゼクス。俺の親友よ」

「……なんだい？」

辛うじて言葉を絞り出すも、彼は完全にアザゼルの放つオーラに呑み込まれていた。そうして喉を鳴らしながら、彼の一挙手一投足に精神を集中させた。眼を逸らした瞬間に殺されると直感したからだ。

両者にとつて永遠に等しい時間が経過した。サーゼクスは息苦しさで嫌な汗に喘いでいた。

本気なのだ、サーゼクスは悟った。仮にこの期に及んでまだ下手な言い訳を並べようものなら、アザゼルは自分を殺すつもりである。と。

仮に悪魔と墮天使の戦争が勃発しようが、絶対に逃すつもりはない。己を射抜く冷たい視線がそう叫んでいるように。

「アザゼル……」

「もう良いんだ。全て吐いて、楽になっちまえ」

こうして、サーゼクスは遂に全てを話した。これまで隠してきた真相、自分と上層部の所業、それらを包み隠さず打ち明けた。アザゼルは彼の告白に口を挟む事なく、ただ黙って聞いていた。

やがて語り終えると、溜め息を吐くアザゼル。予想通りだったと言え、本人から直接答え合わせをされれば、やはり心に重たい物がのし掛かってくる。

取り敢えず、と思い切り親友の顔面を殴った。サーゼクスも逃げるような素振りは見せず、正面から拳を顔に受けた。彼等なりのケジメだった。

行ってきたことの重大さを考えるならば、まだまだ足りないのだが、何にせよ気が済まなかったのだ。

「俺もお前を罵れる立場じゃないけどな……この馬鹿野郎が。その身勝手な行動で、どれだけの被害をもたらしたと思っっているんだ」

「……すまない」

「——そんな茶番で納得すると思うか？」

アザゼルは突然の声にも驚かなかった。今までの手口を省みれば、奴は前日に会場の下見に訪れると確信していたからだ。恐らくは監視術式や準備しているだろう悪魔達に敢えて姿を見せて攪乱させようと目論んだのだろう。

準備や最終確認を行う前日ならば、仕掛けられた術式に気を配る必要も無くなる。

ああ、やっぱり厄介なことをしてくれた。溜め息と共に、アザゼルは乱入者に向き直る。

「兵藤一誠にオーフィス。テロリスト集団の首魁と幹部様が、冥界で仲良くデートってか？」

「……堕天使総督のアザゼルか」

一誠にとつて予想外だったのだろう、僅かに顔を歪ませた。

本当なら適当な警備悪魔やスタッフの前にだけ姿を現して、目撃者を通じて悪魔政府に警戒を抱かせるのが目的だったのだ。とはいえ、アザゼル達がこのまま大人しく帰らせてくれるとも思えない。

瞬時に赤龍帝の鎧を纏う一誠。そんな彼を前に、サーゼクスは両手

を上げた。つまり戦う意志が無い事を示したのである。

「私が悪かった。イツセー君、今まで申し訳なかった」

頭を垂れて謝罪する。だが、あまりにも遅過ぎた。

例えば追手に襲撃される前の一誠ならば耳を貸してくれただろう。

全てを打ち明け、それでも謝罪したならば。魔王の名において、彼とその両親を保護すると名言していれば。疑心暗鬼にはなっても、まだ首を縦に振っただろう。

しかし、今の一誠には届かない。裏切られ続けた少年には絶対に。

「謝罪なんか必要ない。お前達が死ねばそれで良い」

「……そうか」

残念そうに呟くサーゼクス。これもまたケジメというものか。真つ直ぐに一誠を睨んで、その手に魔力を集め始める。

「僕は魔王ルシファアとして、世界の脅威であるイツセー君を排除しよう」

「お前ら悪魔のには言われたくないな」

龍と魔王が、棄てられた者と棄てた者が、再び対峙した。

——life. 54 前哨戦——

「こうして睨み合っていると、思い出すよ。あの忌々しい一騎討ちをな」

静まり返ったスタジオ内。目の前に立つサーゼクスから視線を外さないままで、一誠はかつてのライザーとの戦いを思い浮かべた。

あの時も自分は熱い意志を込めて、ライザーを睨んでいた。偶然にも赤龍帝を宿しただけの少年が、経験も能力も段違いの格上に勝てる筈もないのに。

「なあ、魔王サーゼクス。お前は最初から俺を利用するつもりだった。婚約を名目にして、赤龍帝が妹の眷属に降ったと大々的にアピールしたかったんだ。——間違ってるか？」

元々は成人後に予定されていたリアスとライザーの結婚を早めたのも、レーティング・ゲームでの決着を提案したのも、わざわざ一騎討ちの舞台をお膳立てしたのも。

「全ては、“赤龍帝”の存在を全勢力に見せ付ける為に、ってな。……俺

はそんな事も気付かずに」

「……すまない、イツセー君」

対するサーゼクスは首を縦に振った。彼の言葉はまさしく真実だったからだ。

新しい眷属は赤龍帝だったとリアスが報告してきた時点で、話を聞き付けた上層部が将来の広告塔に利用すべきだと訴えてきた。

自身も妹の婚約に頭を抱えていたこともあつて、渡りに船とばかりに計画に飛び付いてしまったのだ。

その後の顛末は語るまでもない。一誠が使い物にならないと踏んで上層部は神器を抜き取ろうと企み、そして失敗すると今度は“SS級はぐれ悪魔”として手配した。

本来なら学生として青春を謳歌する筈だった少年から、悪魔は何もかもを奪い取ってしまった。

「アザゼルはここで見ていてくれ。これは、私なりのケジメだ」

赤黒い魔力、即ち母から受け継いだ“滅び”を放出するサーゼクス。触れた物を跡形も無く消滅させる魔王としての代名詞。これ以上の苦しみを与えないように。彼が出来るせめてもの償いのつもりだった。

一方、鼻を鳴らして一誠は左手を握り締める。手の甲に埋め込まれた宝玉が翡翠に輝いた。内に宿りし龍、ドライグだ。

『遂にやるのか、相棒』

低い声が鎧を越えて響いた。何処か心配しているようにも思えた。こう見えてもドライグとは産まれた時からの長い付き合いだ。或いは情が移ったのかもしれない。

大丈夫だ、と笑う一誠。続けて右手でそつと宝玉を撫でる。

「そうだ、遂にやるんだよ。ドライグ」

『……そうか、それが相棒の答えなら、俺はもう何も言うまい』

そう短く返したきり、応答は無くなった。それで良いのだ。これは自分の戦いなものだから。

「——始めようか」

瞬間、龍は魔王の領域に踏み込んだ。倍加の音声を掻き鳴らして

サーゼクスの目の前まで身体を滑らせるや否や、勢いそのままに零距离で魔力砲を解き放つ。

空間をも歪ませる程の閃光が魔王を飲み込まんとして迫った。

「甘い!!」

だが、サーゼクスは滅びの魔力をぶつける事で相殺。お返しとばかりに攻撃魔法を雨と降らすも硬質な赤い鎧に弾かれる。舞い上がる砂利と埃の向こうから、再度殴りかかる一誠。

先程の牽制で離されてしまい、一誠とサーゼクスの間には凡そ数メートルの距離があった。だがそれもドライグ譲りの脚力がある今現在ならば皆無に等しく、加速を繰り返して再び一誠は襲い掛かった。

一定のタイミングで叫ばれる“倍加”。比例して膨れ上がっただろう彼の身体能力と魔力に舌打ちするサーゼクス。超高速戦闘を前に反撃の隙を見出だせず、防戦一方に追い込まれてしまっているのだ。滅びの魔力があるから相手も攻めあぐねているものの、仮に魔力を持つていなければ……背筋を冷たい汗が流れる。

腕が鈍った、と大袈裟に溜め息を吐いた。魔王ルシファーを継承してから執務室に籠ってばかりで、まともに身体を動かした記憶が浮かばない。

それに引き換え、一誠は努力を怠らず常に過酷な訓練を行ってきた。その上に倍加能力もあれば成る程、苦戦もするということものだ。

「これは厳しいかな」

思わず出てしまった眩きは本心だった。残している奥の手はアザゼルを巻き込んでしまう恐れもある。

さて、どうしたものか。必死に考えていると、今まで蚊帳の外だったオーフィスが不意に言葉を放った。

「……赤龍帝、悪魔の大群が此方に向かってる」

「それがどうした! 全員殺せば良い話だ!!」

すっかり頭に血が上っているのだろう、珍しく叫ぶ一誠。だがそれは愚策だ。サーゼクスとアザゼルに加えて援軍まで相手取るとなれば、例えオーフィスが動いたとしても肝心の彼自身が危ない。

その点を考慮していたのか、一誠の手を握って引き留めるオーフィス。

「……赤龍帝を守りきれぬ自信、我にない」

『引き際は見極めろ、相棒』

「良いところだったのに……分かったよ」

そう溜め息を吐きながら彼女を小脇に抱え、急いで転移術式を展開する。やがて術式が起動し光に包まれていく一誠とオーフィス。

だがその眼差しだけはしっかりとサーゼクスを捉えていた。完全にその姿を消し去るまで、決して逃す事はせず。

「始めようぜ、三大勢力。自分達が大好きな——戦争つてやつを」

新たな戦いの幕開けが迫っていることを二人に教えていた。

遂にこの日がやって来た。スタジアム内に設けられた選手控え室で、サイラオーグは深呼吸を何度も繰り返す。傍らに控える眷属達もまた緊張しているのが見えた。

今日は待ちに待ったリアスとのレーティング・ゲーム当日だ。これまでの特訓を思い返して、改めて彼等に激を入れる。

「お前達、決して油断するなよ！ 全力で戦え!!」

「了解ッ!!」

下馬評ではサイラオーグの圧倒的勝利と予想されている今回のゲーム。落ち着いて戦えば自分達の勝利は揺るがないと見て、眷属は皆が内心で油断していた。

それを見抜いての一喝だったが、実を言えば彼自身もまた試合前にも関わらず別の件。昨夜、墮天使総督から伝えられた案件について考えていたのだ。

兵藤一誠の宣戦布告。

話を聞くに、術式の最終点検中だったアザゼルとサーゼクスの前に姿を現し、開戦を宣言したらしい。それを裏付けるようにスタジアムに急行する政府軍も確認されている。公式発表ではテロリストに備えての演習とあるが、一誠が訪れた動かぬ証拠だ。

恐らくはレーティング・ゲームを狙うだろうと首脳陣は察した。開戦の第一歩として、これ程までに条件の整ったイベントは無い。

いや、一誠は必ず奇襲を仕掛けてくる。不敵に笑うサイラオーグの胸には確信があった。

「……以前の屈辱、返させて貰うぞ。赤い龍の帝王よ」



『さあ、いよいよ開幕となります！ リアス選手とサイラオーグ選手のレーティング・ゲーム!! 実況はこのリュディガー・ローゼンクロイツ、解説はデイハウザー・ベリアル氏でお送りします!!』

華やかなファンファーレと鳴り止まぬ大歓声に包まれるスタジアム。見渡す限り埋め尽くされた観客席を眺めながら、アザゼルとガブ

“倍加”を利用した長距離魔力攻撃には何の意味も成さない事を。

「狙うは厄介な護衛部隊。連中を壊滅させた後に電撃侵攻。その後は作戦通りに頼むぜ」

魔王、堕天使総督、熾天使。市民、兵士、貴族。或いは己の出番を待ち続けるテロリスト達。

その全員の視界に冥界の空を横切る閃光が映った。合計二十の“倍加”、即ちその威力を凡そ百四万と八千倍にまで膨れさせた魔力の塊だった。

巨大なプラズマと轟音を発生させながら真っ直ぐにスタジアムへと迫る光はさながら冥界を滅亡に誘う隕石のように落ちていき、警戒も逃走も与えないまま、スタジアムを警護していた兵士達に直撃した。

焼ける肉片、襲う焰、途切れる断末魔、混乱する観客の悲鳴。

拡げられた阿鼻叫喚の光景を持って、一誠は開戦の合図としたのだった。

「観客の避難を急げ!!」

「負傷者を直ぐに搬送するんだ!! 次の攻撃が来るかもしれん!!」

「駄目です! 逃げようとする観客でござった返して……!」

スタジアムは外も内も、兵士も観客も、総じて激しいパニック状態に陥っていた。

助けてくれと炎の中で叫ぶ夫婦。失った腕を探し続ける男。人の波に踏みつけられ、何も言わなくなった子供。

まさしく地獄だ、とVIP席から一部始終を眺めていたアザゼルは舌打ちする。今は生き残った兵士達が必死に避難誘導を行っているが、それもほんの一押しで決壊するだろう。

恐らくは長距離からの魔力攻撃、それも“倍加”させまくった馬鹿げた威力の代物だ。

実に合理的な作戦である。魔力を放つだけで、後は悪魔が勝手に侵攻しやすい舞台を造り上げてくれるのだ。兵士達は観客の鎮圧で精一杯、集まった首脳陣も釘付け状態となれば、これ程のカモは他に無い。

「……やってくれるぜ!!」

彼はようやっと思い出した。相手が非国家である事を。テロリスト大昔の三大勢力戦争のように、真つ正面から戦争ごっこをするつもりなど毛頭ない事を。

そして、どのような手段を用いても、必ず目的を達成するだろうと今更に思い返したのだ。

不意に脳裏にリアスの顔が浮かぶ。そうだ、これはまだ開幕の花火に過ぎない。目の前の光景に惑わされてはならない。

兵藤一誠の目的はたった一つ、復讐なのだから。

「ガブリエルはもう一つのスタジアムに向かってソーナ達を保護しろ! 俺はリアスの下に向かう!!」

叫ぶや否や、十二の黒翼を全て解放して、フィールドを駆け抜けていくアザゼル。そんな元同僚の背中を眺めながら、残されたガブリエ

ルはアザゼルの指示に従おうとして、ふとフィールドの監視術式に視線を落とした。

未だ暴動の渦にある観客達。だが、その端に見慣れた紅髪が紛れているのを彼女は見逃さなかった。

まさか選手控え室から出てしまったのか。いや、爆発音や怒号が聞こえれば、彼女でなくとも様子を確認するべく外に出るだろう。そして人波に巻き込まれたとすれば説明はつく。

一先ずは無事を確認出来た。ガブリエルがほつと息を吐いたのも束の間。次には喜びは消し飛んでしまった。

困惑するリアスと眷属達に近付く不審な影があるのだから。



「何が起こってるの!？」

「分かりませんが、此処は危険ですわ! 控え室に戻るべきかと!」

「クソッ! 人が多すぎる!!」

爆発音、次いで衝撃。扉の先から聞こえてくる悲鳴。非常事態だと察したリアスは眷属を伴って控え室から外に出た。

先ず視界に入り込んだのは、逃げようとする観客の塊。更に空をつついていく幾つもの煙だった。灰色の焦げ臭さが鼻を焼く中で呆然と立ち尽くす。

襲撃、反乱、暴動……。さつと頭に嫌な単語が乱立した。詳細は解らずとも、この光景を見せられれば嫌でも察しがついた。朱乃達も唾を呑んで頷く。

兵藤一誠の仕業だと全員が悟った。彼が自分達に、悪魔に復讐する為に仕掛けたのだと気付いた。

となれば、これで終わりの筈が無い。きつと第二の攻撃がやって来る。そうして散々に場を掻き回しておきながら、その隙に乗じて標的を殺害するのだろう。

「多分だけど、アザゼル先生も此方に向かっていると思うの。彼と合流さえ出来れば……」

少なくとも死ぬ可能性は低くなる。その為には選手控え室に立て籠った方が良い。冷静に判断して、来た道に戻ろうと踵を返すリア

ス。

その後ろ姿を見つめる視線には気付かないままで。

——life. 56 第二段階——

「見ろよ、オーフェイス。首都リリスが文字通りに地獄絵図だ」

「……悪魔の反応、次々に消えてる。残ったものも反応が弱くて小さい」

「そりや倍加しまくったからな。寧ろ足りないまであるぜ？」

冥界の空模様が変化するのは不明だが、晴れてくれて良かった。アガレス領辺境の小高い丘の頂上で、一誠はケラケラ笑いながら嬉しそうに呟いた。時折挟まれるオーフェイスのカウントに頷きながら改めて遠くに見えるスタジアムに視線を移す。

少しばかり離れた此処からでも、どす黒い煙や焰がしっかりと確認出来るのだ。となれば現場はどれだけ悲惨な状況になっているのやら。

きつとVIPや観客は我先に逃げようとする。他人を踏んづけて押し退けてでも助かろうとする。スタジアムの最大収容数である約六万の悪魔が、限られた出入口から逃れようと溢れてくる。

先程の魔力弾で混乱している警備係は何分抑えられるだろうか。

『やるじゃないか、相棒。全盛期の俺には及ばんがな』

左手に翡翠の宝玉が出現して重たい声音が流れる。一誠に宿った赤龍帝^{ドレイグ}だ。尤も、彼もまた嬉しそうに笑いを溢す。

それだけ視界に拡がる光景は面白いのだ。三大勢力を憎み、なにより恨む者にとっては。

「せめて及第点は寄越せよ。つってもメインイベントには程遠いけどさ」

『安心しろ。この戦争の末路はしっかりと見届けてやる』

そう言つて宝玉は消え去り、後には上機嫌で口笛を吹く一誠と、そんな彼の傍らに控えるオーフェイスだけが残った。肉の焼けるような焦げ臭さが辺りを包んでも二人は無言で冥界の景色を眺め続ける。

ああ、晴れてくれて本当に良かった。もしも雨に降られでもすればこの素敵な光景が拝めないばかりか、後の作戦にも多少の支障をきた

すところだ。

オーフィスをそつと抱き寄せつう、一誠は冥界の空を見上げる。相も変わらないの紫色にところどころ赤と黒のコントラストが混じっている。

紫を悪魔に例えるなら、それらを呑み込もうとしている炎と煙はさしずめドラゴンのようだった。

だが足りない。果てしなく拡がる冥界の空を埋め尽くすには足りやしない。このままでは、やがて消えて無くなってしまう。

ならば加えれば良い。ぶちまけてやれば良い。

「……ほら、来るぜ。更なる地獄への案内人」

黒を、闇を。悪を、魔を。

「これより戦争は第二段階に移る。さあ、これだけ準備を整えてやっただ。ハマすんじゃないぞ？」

首都リリスの上空に集まりつつある旧魔王派の軍勢を指差して、一誠は銃を撃つ真似をした。

life. 57 リアス・グレモリー③

リアス・グレモリーは無能だ、と民衆は言う。

眷属を集める才能はあっても眷属に従える才能に欠けている、と上層部は嗤う。

即ち、王たる器ではあらず、ということだ。

実際に過去の事例を挙げてみるならば。死にかけていたところを偶然にも拾った赤龍帝は“SSS級はぐれ悪魔”であるし、処刑寸前であるところを保護した猫又はテロリストに拉致され、悪魔を癒す元シスターはかつて救った悪魔と共に北欧神話に亡命してしまった。

時間を停止させるハーフ吸血鬼やデュランダル使いの元教会戦士も、心に壁を作ったままである。

「随分と悪意のある説明ではあるが、客観的に纏めると結局はこのようなのさ。兵藤一誠に同情するよ」

淡々と、どうでも良いように銀髪の青年は述べた。生来の戦闘狂を自覚する彼は、周囲の光景など全く視界に入っていないかのよう、普段の雰囲気のまま平然と欠伸をする。

例えば、焼け爛れた男が助けを乞うても無視するし、片足の無い女が腕に抱いた子供の応急措置を頼んでも手を払い除けている。

「貴方ねえ……！ 他人の命をなんだと思ってるの!？」

「おっと、お気に召さなかったかな？ 情愛に深いグレモリー家のお嬢様？」

ヴァーリ・ルシファアの瞳には己の興味ある者しか映らない。

それは例えばランキング上位に名を連ねる強者達だったり、一誠から探すように頼まれた人物だったり、或いは……彼を憤怒の形相で睨むリアス達だ。

——life. 57 リアス・グレモリー③——

突如として現れたヴァーリに、一斉に武器や魔力を構えるリアス達。しかし手は酷く震えていて額には大量の汗を流していた。

何せ相手との実力差が有りすぎるのだ。自分達が束になっても傷一つ付けられなかったコカビエルを、彼はまるで虫を潰すかのよう

一方的に叩き潰している。しかもその際の言動から見るに本気を出してすらいない。

アザゼル考案の修業をこなしたとはいえ、リアス達の実力は並の上級悪魔に毛が生えた程度に過ぎない。間違いなく数秒かからずに皆殺しにされるだろう。

自分達の末路を思い浮かべて顔を蒼白にする彼女達と対称的に、ヴァーリはただにこやかなスマイルを浮かべるだけだった。

血と肉と焔に囲まれても彼が余裕でいられるのも、確かな実力を持つ強者であるが故だ。

「俺が頼まれた任務は人探しだ。リアス・グレモリーと眷属は対象に含まれていない」

両手を挙げて降参のポーズを取るヴァーリ。暗に見逃すことを告げる言葉に、滅びの魔力を手に纏わせたままで警戒を続けるリアス。無能と陰口を叩かれる身だが、流石にテロリストの言葉を丸呑みにはしなかった。

背後に控える木場、朱乃、ゼノヴィアを手で制して自分は一步前に出る。

「……信じて、良いのね?」

「やるならとつくに殺してるさ。君達が今も生きて喋っている事実がその証明にならないか?」

「……解ったわ」

此処に至って漸く納得してリアス達は矛を収めた。だが視線だけはヴァーリから離さずに、彼の一挙手一投足に神経を集中させた。

そんな彼女達の無駄な努力に、ヴァーリは笑みを浮かべる。憐れむような生暖かい眼差しだった。

リアス・グレモリー。赤龍帝の元主君であり、情愛に厚い事で有名な名門グレモリー家の次期当主。

かつては「紅髪の滅殺姫」と讃えられた才女は、今や赤龍帝に反逆された愚かな無能であると、上層部や民衆から嫌われている。もう魔王を務める兄ですら周囲の不満は抑えきれない。

果たして彼女は気付いているだろうか。仮にこの場を乗り切った

として、最早自分の末路が確定してしまった事に。

冥界政府と民衆が今回の戦争の責任を誰に求めるのか、元主君であるリアスは考えているのだろうか。

今、自分が誰と話しているのかを理解出来ているだろうか。

「さようなら、リアス・グレモリー。俺は任務に戻るろう」

終始余裕の態度を崩さないまま、ヴァーリは電脳的な白翼をバサリと拵げた。目的を果たしたからだだったし、此方に向かってくる強い魔力を感知したからでもあった。恐らくは話に聞いたバアルの次期当主だ。どうやらリアスと合流するつもりらしい。

若手悪魔で最強という噂の彼としても是非手合わせしてみたいが、如何せんタイミングが悪い。ならば鉢合わせする前に姿を消すのみ。

「……俺のことより、“赤龍帝”を気にしたらどうだ？」

ただ去り際に一言だけ呟いた。それはかつてリアスに投げた台詞と全く同じだった。

リアスは悔しげに唇を噛むも言い返せずに、冥界の空に消えていくヴァーリを呆然と眺める事しかできなかつた。彼女がサイラオーグと合流したのはその直後だ。

かつて、戦争に拘った男を知っている。

ヴァーリは何処か遠い過去を見透かすような眼差しで口を開いた。今回の話を始めるに当たって、真つ先に名前を挙げたのはかつて墮天使幹部を務めた男だった。

聖書にも名を刻んだその男は勇猛果敢な武人であり、数多もの戦場を潜り抜けた猛者であったと言う。背には十枚の黒き翼を、両手には赤く塗れた光の槍を。

昨今流行りの“神器”には目もくれず、特別な能力など何も付与していない純粹な墮天使の力だけで、三大勢力戦争の最前線を駆け抜けたらしい。

「アザゼル曰く、彼は失わない為に戦った。戦友を、部下を、愛した女を。ただ守り抜く為に」

「……」

黙って話を聞く男。しかし内心ではヴァーリの話に疑いを持っていた。

名前こそ出していないが、彼の話している墮天使幹部とは、三つ巴の戦争を再び引き起こそうとしたコカビエルなのだろう。男も尊程度には知っていたし、だからこそ解せなかった。

コカビエルは聖剣エクスカリバーを強奪し、人間界という無関係な世界まで巻き込んだ大罪人だ。故にヴァーリが言う、守り抜く為に戦った話とどうにも噛み合わない。

そんな彼の疑念を感じ取っても、ヴァーリは構わずに話を続けた。淡々粛々とつまらない本を読み聞かせるように語る顔は、何処か悲しげであった。

「男は守れなかった。戦友、部下、愛した女。それら全てを目の前で失った。そして男は、勇猛果敢な武人から冷酷な復讐者となった」

彼はどうしても悪魔や天使を許すことができなかった。戦争だから仕方無いと言えばそれまでだし、本人も今まで通りに戦おうと決めた筈だった。

だが悪魔達と戦う度に怒りが沸き上がる。天使を捕らえる度に憎しみがこみ上げる。だから憑かれたように殺し続けた。最前線でひたすらに戦って、殺して、その毎日を繰り返した。

それだけに、停戦や和平を取り決めたアザゼル達に最後まで反発したのも当然の流れだった。死んでいった同胞の無念はどうするのかと喚き散らした。

不幸な点は当時の墮天使陣営は戦争で疲弊していて、誰も彼もこれ以上戦う気力が残っていなかった点だろう。

頑なに戦争続行を主張する男は過激思想の戦争狂と見なされ、やがて日陰の道を歩まされたのだ。

「そして、つもり積もった憎悪が暴走して、彼は再び戦争を起こそうとしたんだ。……それも失敗したけどね」

皮肉なことに、コカビエルの主張は今になって認められつつあるらしい。

仮に墮天使が悪魔と和平していなければ、少なくとも今回の冥界への襲撃も、或いは対岸の火事で済ませられたかもしれない。悪魔が多大な被害を被ったところで、警備やらを派遣する必要など無かったのだ。

尤も、一誠が三大勢力全体を敵視しているのでどうしようもないのだが、それも秘密裏に密約を交わすなりして解決可能だったのかもしれない。

「駒王協定」という馬鹿げた条約を結んでいなければ、の話だが。

今回のゲームで警備の派遣を約束したのも、更に言えばコカビエルの反対を無視して悪魔や天使と和平したのもアザゼル達上層部である。

果たして彼等はこの一連の襲撃事件が終わった後も、上層部のままであることを許されるだろうか。

「彼を、馬鹿な奴だと思うか？ 復讐心に狂った哀れな奴だと嗤うのか？ そんな事を言える者は世界の何処を探したって居やしない」

「……」

ヴァーリの眼にも炎が渦巻いていた。まるでかつてのコカビエル

や、今の兵藤一誠にも似て、恐ろしくどす黒い瞳をしていた。話を聞いていた男は顔を背けたが、何も彼が怖くなったのではない。

男自身の瞳にもまた、確かな復讐心が宿っているからだ。故に男はヴァーリの誘いに乗って、こんな冥界の辺境にまで訪れているのだ。本来ならば首都で起きている騒動を鎮圧しなければならぬ立場にも関わらず。

「覚えがあるんだろう？ 復讐を願った事があるだろうか？」

「……何が、仰りたいのです」

「——クレリア・ベリアル」

そつと耳打ちされた言葉に、男の心臓は止まった。何故、目の前の少年が彼女の名前を知っているのか。どうして自分に告げるのか。

驚愕で眼を見開く男にヴァーリは微笑む。それはとても美しく神秘的で、そして残酷な笑みでもあった。未だに驚いて動けない彼を惑わすように、話を続ける。

「彼女は実に優秀だった。君の汚名を晴らそうと情報を集め、やがて上層部とレーティング・ゲームの闇にただ一人で辿り着いた。……だから、殺されてしまった」

「……」

「奴等への復讐を、ずっと望んでいただろうか？」

ヴァーリの差し伸べた手、文字通り悪魔のような提案を受け入れる以外の選択肢など、その男——デイハウザー・ベリアルには無かった。

悪魔の軍勢が冥界の空を染めていた。彼らは同じ種族でありながら、違う目的と使命を持つが故に、今こうして互いに泥沼の殺し合いをしている。

現政権派と旧魔王派、停戦派と過激派、正規軍とテロリスト。それだけの理由で空から血の雨を降らせていた。

そんな武力衝突の中心で、合間見える三人の影があった。奇しくもかつての内戦とそっくり同じ構図である点に気付いた一人が笑いを溢した。

「……何がそんなに可笑しい。クルゼレイ」

「そうよ、クルゼレイ君！」

対峙する魔王サーゼクス、セラフォールが怪しむもクルゼレイは笑うのを止めなかった。

まさか自分の最後の舞台があああの戦いの続きとは、運命とは殊更に面白いものだ。

「ふん、偽物の魔王達は忘れたか。あの内戦を」

「ちゃんと覚えてるわよ！ 私達はその功績で魔王に選ばれたんだから！」

「……担がれた、の間違いだろうが。あの時、我々に大人しく政権を渡していれば、こんな大騒ぎにならなかったのだ」

「それはできない。もしも政権を渡していれば、君達は三大勢力戦争を再び勃発させていただろう。そうなれば我々は共倒れだった」

「赤龍帝を捨て、結果として冥界に被害をもたらした男がどの口で言う」

吐き捨てるとサーゼクスは口をつぐんだ。

話を聞かされていなかったのか、はたまた特撮で培った演技か。セラフォールは首を傾げたが、それも一瞬でクルゼレイに食ってかかる。

「ねえ、クルゼレイ君！ 今からでも降伏してよ!! そうすれば命だけは助けてあげるからさ！」

セラフオル・レヴィアタン。旧名をシトリーという彼女は昔からお調子者で良く言えばムードメーカー、悪く言えば空気の読めない馬鹿だった。

外交関係の最高責任者ではあるが、アニメのコスプレを正装と言いつける阿呆であり、冥界が貴族主義であることを象徴するような魔王だ。

そんな性格の彼女は、クルゼレイを説得しようと試みた。脳内が花畑まみれの魔王は、この期に及んでも現冥界の敵であるテロリストと話し合おうと考えた。

「――避ける、セラフオルー!!」

「え……?」

故に、致命的に反応が遅れた。四方八方から迫り来る魔力の波動に気付かないまま蜂の巣にされたのだ。

赤い血の霧雨が降り注ぐ城の上で、サーゼクスは傷だらけとなって落ちていくセラフオルーに手を延ばす。

だが右手は遂に彼女に届くような素振りを見せずに、魔王セラフオルーはそのまま真下へと落っこちた。

数瞬の沈黙の後で、ゴシャリ、と一際大きく鈍い音が彼の耳に聞こえた。眼下に小さく見えるのは、全身が醜く潰れてしまっている赤黒い一つの点であった。

もう虫けらになってしまったそれが、かつて魔王セラフオル・レヴィアタンであったことは誰の目にも明らかである。まして、その命の灯火が消え去ろうとしていることなど。

「……この高さだ、辛うじて生きていても虫の息だろう。今から応急処置をすれば、命だけは助かるかもしれんな」

この状況を作り出した張本人であるクルゼレイはうつすらと黒い笑みを浮かべる。対してサーゼクスは、近くに展開する部下にセラフオルーを治療施設へと搬送するように命じた。

部下達が慌てて彼女の元へ向かう間も、また回収を終えて施設へ転移していく間も、サーゼクスは俯いてずっと黙ったままだった。

やがてゆつくりと上げた顔は憤怒に歪んでいた。何故、と彼は次に

訊ねた。

「何故、セラフォルを狙った」

「……それは今、この場所が戦場だからに決まっている。お前はかつての内戦で、いちいち敵を区別して殺したのか？ 違うだろう？」

「戦場だ?! 卑怯な襲撃を仕掛けて、無関係の者まで巻き込み！」

挙げ句にセラフォルまで!!」

「いいや、戦場だ。周囲を見てみる」

天をも喰らう炎柱に包まれて、首都上空でぶつかり合った悪魔達は相手の腕を切り落とし、脚を挟り、倒れた仲間を見捨て、ただ敵を殺す為に戦っている。

方や少し遠くに見えるアリーナでは何の関係もない民衆が、悲鳴すらも残せずに肉片となって散りばめられている。

「ほら、これは戦争だよ。三大勢力^{俺達}が愛して止まない戦争なのだ」

抑揚の無い声で締め括るクルゼレイ。それでも理解も納得も出来やしないのだろう、彼は口でこそ何も返さなかったが、代わりに大量の魔力を纏った。

サーゼクスが魔王となった最大の理由、触れる物全てを消滅させる“滅び”だ。

此処に至ってテロリストとの争いを繰り広げていた政府軍の連中は、我先にと退却を始める。一方のクルゼレイも尚も戦おうとする部下達を諫めて、逃走を言い渡した。

“蛇”によって強化されているとはいえ、サーゼクスとは未だ埋めきれない実力差が存在する。クルゼレイが蛇の力を全開にして戦ったところで腕の一本が関の山だろう。

「三つ巴の大戦時代からお前達には迷惑をかけた。だが、負け戦にまで付き合わせるつもりは無い。お前達は早く逃げよ」

そう短く告げてから、彼は体内に宿した“蛇”の魔力を限界まで膨れ上がらせる。器たる身体が耐えられなくなり、全身に罅が入り始めるも知った事ではない。どうせ残り僅かの命なのだから。

一人、また一人。部下達が去っていく。そんな彼等にサーゼクスが魔力を放つべく狙うも、間に割って入った影に止められる。

「俺の可愛い部下だ。手出しは無用」

「……それなら、先ずは君から排除する」

「好きにしろ」

直後、短い発射音が響いて、同時にクルゼレイ・アスモデウスの頭を貫いた。

——life. 59 捕捉——

「……赤龍帝。クルゼレイの生体反応、消えた。我の“蛇”が教えてくれた」

「へえ。それで、他に変わった事は？」

「……我の蛇、膨れ上がったまま。この状態、凄く危ない」

オーフィスからの報告に、一誠は笑って頷きながら呑気に歩を進める。炎と煙の立ち込める周りには死体がそこかしこに転がっているが彼は特に気にした様子も見せず、隣を歩くオーフィスの手をしっかりと握り締めて、ズンズンと先を指して歩いていく。

一誠が上機嫌のまま鼻唄まで歌っているので彼女も嬉しくなっていて、ムギユウと一誠の手を掴んだ。

「因みにだけど、オーフィス。どうして危ないんだ？」

「……魔力が行き場を無くして暴走する。そして、最後には爆発する」

「ふーん」

「……何故、訊いた？」

小首を可愛らしく傾げるオーフィス。何でもないよ、と頭を撫でて一誠はふと空を見上げた。

何時見ても忌々しい紫色の空、地面を見れば彼方までも拡がる赤色、首都の方向から聞こえてくるのは謎の巨大な爆発音。

しかし今の一誠には全てがどうでも良く、痛い程に握ってくるゴスロリ服の少女と一緒に自らの目的を果たすことしか考えていなかった。

だからこそ標的の人物を見付けた際には、近頃は滅多に見せていなかった満面の笑みを浮かべたのである。

「久しいな、リアス・グレモリー」

「……イツセー」

少年の姿を視界に入れた瞬間、リアスはその名前を呟きながら手を延ばそうとした。彼もまたリアスをじつと睨んでいる。焰が逆巻くアリーナの中心で見つめ合う二人はさながらラブロマンスの主人公とヒロインにも見える。

実際にかつてはおぼろ気ながら、何時かはそんな関係になりたい、と願ってすらいた二人だった。

尤も、リアスは分からないが、少なくとも今の一誠にはそのような想いは欠片すら残っていない。彼らの間には深すぎる溝があった。

既に合流していたサイラオーグ、更にリアスを見付け出したアザゼルが庇うようにして前に進み出た時点で、一誠とリアスの関係性を端的に示している。

それは朱乃を筆頭とする眷属達が即座に各々の武器を展開した点からも伺える。

若手悪魔最強の獅子王、“神の如き強者”の名を冠する墮天使総督。並び立つ二人の実力者を目の前にしても、兵藤一誠は飄々として、余裕の態度を崩さなかった。

「目的は、リアスの殺害か」
「そうだ」

赤いシャツの上に擦りきれてしまった駒王学園のブレザーを羽織っている一誠。その姿はまさしく、リアスと初めて出会った時そのままの格好である。

彼女もまた学園の制服を着ているので場所こそ違えど、二人は偶然にもあの日の続きを演じているようにも思えた。

故にリアスはサイラオーグに静止されても、最後まで延ばした手を引つ込めようとはしなかった。最終的には手首を強く掴まれた事で諦めはしたものの、尚も憂いを帯びた視線を一誠に向けた。

しかし当の一誠は特に気にした様子も見せず、寧ろ当て付けのようにオーフィスの肩に手を回して、アザゼル達にもそれと分かるぐらい

に強く抱き締めている。

だが、それも束の間。名残惜しそうに彼女を離して、次には戦士然とした顔付きでサイラオーグとアザゼルを睨む。

渴ききつて何も映さない瞳に気圧され、不覚にも冷や汗を流す一同。まるで凍てついた氷水をかけられたかのように嫌な震えが全身を襲った。

「……待て」

一誠の放つプレッシャーに呑み込まれたりアス達。それでも、サイラオーグは鋼の意志を振り絞って、獅子を模した黄金の鎧を顕現させて一誠の前に立ちはだかった。

冥界を護りたいという正義感か、若手悪魔最強の意地と誇りか、はたまた絶対に譲れない覚悟がそうさせるのか。本人にも分かっている。ない。

兎に角、彼はこの葉でただ一人、"SSS級はぐれ悪魔"にして"赤龍帝"たる兵藤一誠に立ち向かった。そんな男の勇姿に感じるものがあつたのか、一誠も赤い全身鎧を出現させた。

彼の向ける視線に無言で頷いて、オーフィスは結界を作り出して二人の戦士をすっぽりと覆った。簡易的にはあるが、オーフィス自ら作った結界だ。例え魔王や神クラスであっても破壊不可能な代物である。

同時に、アザゼルはこの戦いに自分達が干渉出来なくなってしまうことに気付いて叫ぶ。

「無茶だ、サイラオーグ！ お前さんじゃ兵藤一誠に勝てん!!」

「……無駄。如何なる衝撃や音も、この結界は遮断する。中にいる二人に、声は聞こえていない」

そう言ったきり寂しげに結界を見つめるオーフィス。小さな手をグググツと握って、開いて。己の白い掌に残る暖かさを忘れないようにしながら。

彼女が少し機嫌を損ねているなど露知らず、黒い結界の中で一誠はサイラオーグと対峙していた。互いに鎧越しに睨んでいる為に相手の表情は見えない筈だが、二人の身体が滾る魔力の波動が彼等の抱く

冥界を強襲し、今こうしている間にも罪のない一般人が死んでいるというのに、その張本人は呑気にケラケラ嗤って、今も五体満足のまままで立っている。

あまりにも理不尽で残酷な光景は、サイラオーグの持つ正義感と怒りを刺激するに充分だった。

元よりオーフィスの結界に阻まれて、退却も味方との合流もままならない。生き残るには目の前の赤龍帝を倒すしか道はない。状況的に追い詰められていた点も若き獅子王から冷静さを奪い、彼を一つの決断に追いやった。

こうなれば倒すしか道はない。サイラオーグは一誠から視線を外さないまま拳を構えようとして、

「遅いな」

次の瞬間には、兵藤一誠が直ぐ目の前に立っていた。

「しま……っ!!」

反射的に飛び退こうとするも間に合わず、顔面を思い切り殴り飛ばされる。鈍い衝撃に襲われその場に倒れ伏すサイラオーグ。必死に立ち上がろうとするものの頭が大きく揺れる。

今の一撃で脳にダメージを負ったのか。体勢を整え、顔を拭くと、直ぐに液体特有の感触が掌に付いた。成る程、妙に視界が赤くなつた訳だ。

今の攻撃、もしも生身で受けていれば出血だけでは済まなかった。嫌な映像が彼の脳裏を過る。

それでも尚、サイラオーグの闘志は消えていなかった。己を鼓舞すべく、咆哮する。

「……まだ、終わってはいない!! レグルス!! お前の力を、俺に貸してくれ!!」

『はっ!!』

諦めようとしないう彼を、一誠は懐かしそうに眺めていた。だがそれも一瞬で、次にはサイラオーグに向かってゆっくりと歩き始める。そうして立ち上がれないままにいる彼の頭に左手を触れさせた。

翡翠の宝玉が発光した。能力を発動させる合図だ。

「……いや、終わりなんだよ」

『――Transf^譲er^渡!!!』

▼ 歴代赤龍帝の一人に、エルシャという女性がいる。発想力と機転に長けていた彼女は、これまでの主な能力だった“倍加”ではなく、高めた力を他者に与える“譲渡”にも着目した。そしてエルシャは一つの仮説に辿り着いた。

――敵の魔力を意図的に膨張・暴走させてしまえば、器である肉体はおのずと崩壊するだろう。

「初めてやってみただけど、凄く便利な技だよなあ。同レベルなら充分に通じるし、何より確実に殺せる」

『やるじゃないか、相棒。だが本家には未だ届かん^{エルシャ}な。彼女は“倍加”と“譲渡”を超遠距離の狙撃にまで昇華させたぞ』

「おいおい、勘弁してくれよ」

彼女の理論は正しかった。限界以上にまで膨れ上がった魔力はやがて肉体を攻撃し、堪えきれなくなった器は最終的に自壊してしまうようだった。

例を挙げるなら、先程のクルゼレイが正しくそれだ。高密度の魔力凝縮体であるオーフィスの“蛇”を自ら暴走させる事により肉体を自爆させた。強いて異なる点を挙げるなら、爆発の規模が桁違いであることだろう。

強力な技ではあるが、一誠は本来の標的に使おうとは思えなかった。もつと苦しませてから殺さなければならぬ。その為にならぬわざわざ上層部が食い付きそうな餌まで蒔いているのだから。

「そういう意味では、苦しまずに死ねて幸せなのかもしれない」

かつてサイラオーグだった肉の塊には目もくれないで、一誠は嗤った。

黒い結界の外側に取り残されたりアス達。誰もが固唾を吞んでサイラオーグの帰還を待つ中で、アザゼルだけは脳をフル回転させて、今回の襲撃について思考を巡らせていた。

遠距離からの魔力攻撃から始まり、旧魔王派による首都への電撃侵攻。そして、呼応するかのように姿を現した兵藤一誠とオーフィス。改めて考えると用意周到かつ大掛かりな計画だ。恐らくは随分と前から準備していたのだろう。

疑問は、幾つかある。一つ目に、襲撃に参加したテロリストの正確な人数が未だ不明である点だ。

決して前述のメンバーだけで襲撃事件を起こしたのではないだろう。ヴァーリのように裏方として動いている者や、別の作戦に備えて待機している部隊もいる筈である。

「そして、兵藤一誠の目的だ」

「私や冥界への復讐が彼の目的ではないと言うの？」

「いんや、確かに最終的にはリアス達への復讐になるだろう。両親を殺された今となっては、尚更にな」

それはあくまでも結論であり、アザゼルが話しているのは辿り着くまでの過程である。

単純に復讐を果たすだけならば、リアスを殺害するだけで終わる。それこそ首都リリスやグレモリー領に魔力攻撃を束と放り込めば、旧魔王派を動員したりと手間のかかる真似をしなくても済んだのだ。

つまり、一誠にとって必要だから実行したのであり、即ち同時に他の計画が進行している証拠に他ならない。

真っ先に考えられるとすれば、陽動作戦だ。

一誠とオーフィスは揃って若手悪魔のパーティーに姿を現して、裏では彼の仲間と思われる攻撃により元龍王タンニーンが殺害された。またリアスの眷属だった小猫も誘拐されている。

結局はテロリスト襲撃の報道で有耶無耶の内に終わったが、今になつて考えるとキナ臭くて仕方が無い。

「或いは、俺達をこうして釘付けにする為に奴は現れたのかもしれない。腹の中で何を考えてるのか、分かったもんじやないが……状況が悪化するのには確実だろうよ」

「まさか……」

顔を青ざめさせるリアス。オーフィスはそんな彼女を特に気にせず、ただ結界を見つめていた。

魔力も音も遮断して見せる代物ではあるが、作った本人であるオーフィスだけは唯一、内部の様子が手に取るように感知出来る。

そして、サイラオーグの生命反応が一瞬で消え去ったことも彼女は既に知っていた。故に手を一振りして黒い壁を消した。

結界の消滅に気付いたリアス達はサイラオーグの安否を確認すべく駆け寄ろうとして、直後に足を止めた。

立っていたのは血塗れの一誠だけだったからだ。他に誰の姿も見当たらない。

彼を探そうと視線を右往左往させて、やがて一誠の足下に転がる肉片に気付く。

「……兵藤一誠。サイラオーグは、どうした？」

「そこに散らばってるだろ？」

崩れ落ちるリアスを他所に、オーフィスを連れて歩き始める一誠。しかし、去り際に呼び止める声があった。アザゼルだ。

「お前さんの目的は何だ？」

「今更だな。復讐に決まってるだろ？」

「そうじゃねえ！ 今回の襲撃事件は巧妙に仕組まれた陽動作戦だ!! こうやって俺達や首脳陣を足止めしている時点で、お前らの本命は別に隠してる筈なんだ!! 答えろッ!!」

アリーナ襲撃は、自身に視線を引き付ける為のパフォーマンスに過ぎない。だから派手に攻撃した。

首都襲撃は本命と思わせる罠だ。でなければ、その段階で一誠は旧魔王派に合流している。魔王サーゼクスが出てくるのだから。

更に、リアスを襲撃したのもただの罠作戦である。彼女達を狙えば、面倒見のいいアザゼルは必ず救援に現れるだろう。そうして彼を

足止めする為にリアスを狙った。

では、本当の目的は？

「手の内を敵に晒す訳ないだろ。それに今回はただの開戦の合図に過ぎないんだぜ？」

「まだ、何かを企んでやがるのか！」

「一週間後を楽しみにな。おーし、用事も終わったし、帰ろうぜ、オーフィス」

「……ん」

今度こそ、手を取り合って消えていく一誠とオーフィス。彼の後ろ姿をリアスはずっと睨んだままだった。

「……よくも、サイラオーグを——絶対に許さない」

——life. 61 目的——

時間は、兵藤一誠がアリーナに魔力攻撃を仕掛ける直前にまで遡る。

場所は、浮遊都市アグレアス。その地下に建設されていた極秘工場だ。

「……保管されていた”悪魔の駒”は、カテレアさんが破壊してくれました」

「了解つす。後は、俺らの任務を全うするのみでやんすねー」

「……ですが、まるで彼女の死を利用するみたいで」

そう呟くソフィアの視線の先には、破壊され尽くした夥しい数の”悪魔の駒”と、その中央で佇むカテレアが映っていた。体内に宿した蛇の魔力を全開にした彼女は既に人の姿を失い、巨大な竜にも似た獣と化していた。

力を使い果たしたのか、ピキピキと罅だらけの身体で倒れ伏すカテレア。もう動く事の出来ない彼女に、フリードは光の刃を片手にゆっくりと近付く。

「こんなところで逃げるようじゃ、復讐なんて諦めな。この先はもつと悪魔が死んでいくんすから」

出撃前に——更に遡って作戦が立案されたときから、カテレアは何度も言っていた。

どうか介錯をして欲しい。誇りある魔王の末裔として死にたいのだ、と。

ならばこそ、フリードは彼女に約束した。何時もの悪趣味のように惨たらしくではなく、首を一直線に跳ねて殺すことを。

真つ直ぐに剣を構えるフリードの横顔はあまりにも冷たく、ソフィアは何も言えなかった。

確かにカテレアとクルゼレイの死亡は最初から織り込み済みであったし、付け加えるなら首都襲撃によって旧魔王派が壊滅することも、計画立案当初から予定されている。

だから先程の台詞は彼なりの慈悲であることも理解出来るが、それでも納得は出来なかった。

「ま、ソフィアさんはそこで見ときな。悪魔を祓うのは俺の専売特許なんでね」

「……分かりました」

フリードは悪魔祓いのコートを見せ付けるように翻し、カテレアの直ぐ側にしゃがみこんだ。動けずとも未だ意識はあるのか、爬虫類特有の菱形になった瞳が微かに動く。

早く殺してくれ、と訴えかける眼差しに頷いて、彼は光の刃を突き立てた。刃は豆腐のように沈んでいった。

光の刃は、カテレアの肺を突き刺していた。

「!?!」

生物は基本的に肺を刺されると呼吸が不可能になる。それは人間でも悪魔でも変わらない。抵抗も喋る事も叶わずにただ苦しむカテレア。されど刺した張本人は上手く自分の影に入るようにしている。ので、事態を見守るソフィアは何が起きてるのか知らないままだ。

激痛に襲われ痙攣を繰り返すカテレアの耳に、フリードの囁きが聞こえた。

「二誠の旦那は前から旧魔王派を嫌ってたんだよ。オーフィスを利用してた、ってな。だから俺に極秘の任務を与えた。"悪魔の駒"を破壊するお前の護衛。そんなもって、お前を——苦しませて殺せってな」

「そ、んな……」

「ごめんねー、俺ちゃん悪魔祓いですから。てな訳で……さっさと死ねや、クソ悪魔が」

己の死に様すら全て仕組まれていた事実を聞かされながら、絶望の中でカテレアは死んだ。

後にクルゼレイも自爆する為に、最大勢力を誇った旧魔王派は壊滅の道を歩む事となる。

だが、一誠達にとっては別に彼らがどうなろうと知った事ではない。指揮官が不在になろうが使えそうな残党は大量に残っているのだから。

「ほら、護衛任務も終わったし。さっさと帰ろうぜ」

「……はい」

はぐれ悪魔祓いとはぐれ魔法使い。無念の内に崩れていく旧魔王の亡骸など気にもしないで、はぐれた二人は闇に溶けていった。

「それでは、これより定例会議を行う」

一誠の厳かな宣言により、会議は幕を開けた。最初の議題となったのは冥界襲撃の成果及び旧魔王派を率いていたカテレアとクルゼレイの戦死だった。

今は冥界中に残党が潜んでいる、とついでのように報告する一誠だが、彼も含めて会議室に集まった面々は誰も悲しんでいる素振りなど見せていない。

唯一、魔法使い派代表として参加したソフィアだけは悲痛そうな表情だが、同じく派閥の長として出席しているヴァーリと曹操はただ退屈そうに欠伸をするだけ。他の小規模の集まりの者達も気にしてはいなかった。

「……それで、兵藤一誠の次なる目標は？」

茶化すように訊ねる曹操。英雄派は今回の襲撃事件に関与こそしていないが、その一部始終を監視していた一同は首都壊滅の報告に大層喜んだらしい。

三大勢力に憎悪を抱いているが故に、一誠の快進撃が嬉しかったのだろう。一誠が既に企てているだろう計画に興味を示すのも当然の流れだった。

そして、既に裏方として活動しているヴァーリもまた視線を移した。

先の一件ではデイハウザーの勧誘を頼まれた身として、果たして次はどのような頼みをしてくるのか。どうやって悪魔勢力を壊滅させるのか。少年染みた好奇心を乗せて、一誠を見つめた。

曹操、ヴァーリ。

大物達の視線を受けても一誠は余裕を崩さずに、膝に座るオフィスの頭を撫でていた。透き通る黒髪に指を絡ませて遊ばせて。下から甘えるような声がしても気にせず。

最近の彼はずっとオフィスに構っている、とは普段から付き合いのあるヴァーリ達のみならず、あまり関わらない弱小派閥の間でも話

題に上がる。

一誠が両親を喪った直後は部屋に閉じ籠って、オーフィスの言葉にすら反応しなかった。それが最近は何処へ行くにも二人で行動しているのだ。

しかも以前のような甘酸っぱい雰囲気ではなく、もつとドロドロした沼のような空気を纏わせて。

「……依存、だな。それも目を重ねる毎に悪化している」

「両親の死がトリガーになったのかもしれない」

ヴァーリの呟きに曹操も深く頷いて、それから一誠とオーフィスに視線を移す。オーフィスが一誠の膝上にちよこんと座っている姿は確かに微笑ましいものがあるし、それだけなら以前から見ていた光景だ。

ただ以前はあくまでもプラトニクな付き合いで、間違っても男女の口付けを交わす関係では無かった。端から見ても痛々しい程に抱き締める仲まで進んでいなかった筈だ。

きつと不安なのだろう。姿を見るだけでなく、自らの手でペタペタ触って確かめないと駄目なのだ。

ある日突然に消えてしまわないか、いなくなってしまうかないか。それだけがとても怖くて恐ろしいのだ。

「オーフィスを心配する者など、彼が最初で最後だろうさ」

「そして、今の兵藤一誠を支えているのもオーフィスなのだろう」

「おい、ヴァーリと曹操。何を話してるんだ？」

訝しげに問う一誠。しかし両手は相変わらず彼女を撫でている事に苦笑しつつ、彼等は会議を進めるように促した。

——l i f e . 6 2 答え合わせ——

「オッス、旦那。結果報告に来たぜ。タイミングが悪いなら後にしようか？」

「……いや、構わない。話してくれ」

会議終了後。人波に紛れて部屋を出ようとする一誠を呼び止める者がいた。カテレアの護衛殺害を命じられていたフリードだ。

「命令通り、カテレアを殺した。こいつが証拠の“蛇”だ」

そう言つて、黒い蛇の詰められた瓶を渡した。カテレアの身体から回収したものだつた。無論、魔法で封印措置がされている。

一誠は受け取ると大事そうに懐に仕舞つた。そして、「お疲れさん」とだけ労つて、再び歩き始めようとした。

「……なあ、一誠の旦那」

背中越しに問いかける声が、彼の歩みを止めた。

「旧魔王派は最初から死んで貰う予定の囷だつた。つまり連中が関与した作戦も重要度が低いつて事になる」

嫌つている連中を大切な計画に噛ませやしないだろう。首都リリスの襲撃も、“悪魔の駒”の破壊も、全てが周囲の目を惹き付ける為のデコイならば。

「では、本当の目的は何か？ 簡単だ。旦那が自ら手を下した案件があるだろ」

一つはアリーナへの長距離攻撃。勢いを作る上でも絶対に失敗出来ない、作戦の要。故に一誠自らが攻撃役を担つた。

「そして、サイラオーグ・バアルの殺害だ。彼は上層部と太いパイプがあつた。彼は貴族派筆頭のバアル家の次期当主。彼が消えれば、上層部と貴族派の分裂は避けられない」

「……」

「今頃は派閥間で責任の押し付け合いをしてるだろうよ。でもつて、連中の矛先はグレモリー家やリアスに向けられる筈だ。殺された民衆の遺族連中も一緒になつてな。どうだ、合つてるか？」

赤龍帝を“はぐれ悪魔”にし、結果として多大な損失をもたらした責任。テロリストとの内通疑惑。

それらは悪意と尾びれを付けて冥界を駆け巡る。

莫大な損害賠償を請求される羽目になったグレモリー家の財政は圧迫され、領土は返還と縮小の一路を辿る。見切りを付けた民衆は他領に移住していき、収入源を失つたグレモリー家は更に困窮していく。そのスパイラルから抜け出すのは容易ではないだろう。

自分の存在と立場を最大限に利用して、リアスのみならずグレモリー家そのものを奈落に突き落とす。

それこそが今回の作戦の真の目的だった。

「……正解だ。よく見抜いたな」

「そりゃ俺ちゃんは赤龍帝の腹心ですから☆ で、次の標的は？」

フリードの問いに、一誠は答える。

「次は腐った貴族共を襲って回ろうかな」

「……状況は最悪だね」

魔王ファルビウム・アスモデウスは、部下からの報告書に溜め息を吐く。今回の襲撃事件の被害を纏めたものだ。

アリーナ襲撃や首都での衝突による犠牲者と重軽傷者は合わせて数万人、被害額は日本円換算で数十億円にもなる。悪魔勢力にとつては大打撃であり、彼は報告を聞いた直後に卒倒しそうになった。

そして無視できないことが二つあって、一つは有望な若手にしてバアル家の次期当主だったサイラオーグの戦死、魔王二人も揃って重傷を負った点だ。

サーゼクスは至近距離で敵の自爆に巻き込まれたらしいが、直ぐに応急処置がなされたお陰で命に別状は無い。ただ当分の間は入院生活だろう。

ただ集中攻撃を受けた上に高所から落下したセラフォルーの場合はそうもいかない。"フェニックスの涙"で即死こそ免れたものの、頭を強打した影響で今も眼を覚ましていない。下手すれば、このまま永遠に植物状態かもしれない。

「今はアジュカを筆頭に復興作業をしてるけど、ハッキリ言うところ、なんだよね」

「もう、どうしようもないってのか？」

「……アザゼル」

ファルビウムは悪魔の未来を既に諦めていた。前述の事態に加えて、復興に人手を割いているこの状況で再び襲撃されれば、今度こそ冥界は滅ぼされるのだから。

かといってテロリストを優先すれば復興が後回しになってしまい、民衆の怒りは政府に向けられるだろう。そうなる最終的に待っているのは反乱、そして滅亡だ。

どれだけ考えても現状を打開出来ないので、流石の彼も諦めてし

まったのである。

故に、執務室を唐突に訪れてきたアザゼルにも大した反応を示さなかった。恐らくは主犯格の兵藤一誠について話し合おうとしたのだろう。手に大量の紙束を持って、何より怒りに歪めた表情を見れば一目瞭然だ。

恐らく“神の子を見張る者”で既に結論は出していて、その結果を元に悪魔側との話し合いに来たのだ。

「僕達は遅すぎたんだよ。旧魔王派も兵藤一誠も早々に粛清しておくべきだった。こんな騒ぎにもならず済んだ」

「そう言っても今更どうしようもねえだろ。今は俺達の今後についてだな……」

「――“悪魔の駒”の生産拠点が襲撃された。それでも尚、悪魔の今後について語るのかい？」

ファルビウムは、淡々と告げた。

悪魔という種族は寿命が長いのが特徴で、平気で数万年もの年月を生きる。だが代わりに出生率は驚く程に低く、統治している領域に反比例して総人口は少ない。

加えて、三大勢力戦争や派閥争いの内乱が勃発したせいで、終戦直後は種の絶滅の危機にまで瀕していた。

悪魔政府は何よりも頭数を欲した。子供を増やしていくよりも手っ取り早い方法を求めた。早急に、加速度的に、それも従順で扱いやすい連中を。

上層部の要請を受けたアジュカは研究を続け、犠牲を積み上げ、実験を重ね、そして遂に一つの回答に辿り着いた。

他種族を悪魔にしてしまえば良い。

「そして完成した“悪魔の駒”は実用化され、瞬く間に悪魔勢力を立て直した。後はアザゼルの知っている通りさ」

「拉致される他種族、貴族様主催のオークション、大した調査もなく処刑される“はぐれ悪魔”。本当にお前らは悪魔だよ」

「誰だつて自分が一番大事だろ？ ま、そんな思考回路だから滅ぼさねかけてるんだよね」

自業自得だよ、と言いたげに笑うファルビウム。それからぼんやりと窓の外に視線を移した。

あの襲撃事件から一週間と少しが経つ。

果たして兵藤一誠がその間を黙って大人しくしているだろうか。悪魔の駒”を破壊する為だけに魔力攻撃や首都リリス強襲を実行したテロリストが指を啜えて見ているだろうか。

部下が血相を変えて駆け込んできた時点で、答えを悟った。

「……で、今度は何があったのさ」

「まずはテレビ放送をご覧下さい！ 奴等、どの放送局にも——」

——l i f e . 6 3 襲撃予告——

小ぢんまりとした一室。簡易ベッドと机、椅子。最低限度の家具しか置かれておらず、生活している様子は感じさせない。

『やあ、悪魔の諸君。兵藤一誠だ』

一目で安物と解るベッドに少年は腰かけていて、満面の笑みを浮かべている。身長差の問題で映像には顔の上半分しか映っていないが、その隣にはオーフィスの存在も確認出来る。

『今回、放送をジャックしたのは他でもない。新たな襲撃作戦を予告する為だ』

赤く派手な題字が中央に大きく表示されると共に効果音が鳴り響く。

襲撃予告。

つまり一誠は大胆にも再び冥界を襲うと公言しているのだ。しかし今度は何処を襲うのか。悪魔達が固唾を呑んで見守る中で、一誠はわざとらしく隣の彼女に微笑みかける。

『オーフィス、復習といこう。前回の事件で最も多かった犠牲者は、だーれだ？』

『……民衆？』

『^{エサクタ}正解！ そーだね、犠牲者は約三千人なんだけど、その八割が無関係で無知な民衆だった』

さて、問題です。

一誠は少女を側に抱き寄せてから訊ねる。今度は視聴している者

に、見ているであろう悪魔達に。

『魔王は重傷で病院送り。民衆は言わずもがな。それじゃあ……被害を受けていないのは、だーれだ?』

『……貴族?』

『またまた正解!^{エサクタ} 正解したオーフィスには後でキスをしてあげよう!』

そうなのだ。王も平民も大なり小なりのダメージを負った中で、貴族階級だけは殆ど無傷のまま、犠牲を出していないのだ。

許される訳がない。皆がボロボロになって傷付いているのに、連中は知らぬ振りをしている。許せる筈が無いだろう。

やがて、視聴者の大多数を占める民衆達は願う。それが進まない復興作業への苛立ちであるとか、大切な人を失った怒りと悲しみであるとか、日頃から溜まっていたお偉い貴族様への羨望であるとか。

無知であるが故にそれら全てを引っ括めて、悪魔達は願うのである。

『これじゃ不公平だろ? 自分達だけって思うだろ? だからさ、これから一週間毎に貴族共をランダムで襲っていきまーす!!』

どうか奴らの大切な人も殺してくれ、と。

life. 64 リアス・グレモリー④

グレモリー家。現魔王サーゼクスを排出した公爵の家系にして、ソロモン七十二柱にも数えられる由緒正しい家柄だった。

何故、過去形で締め括ったのか。それはグレモリー家の栄華はあくまでも昔の話であって、今現在はかなり追い詰められた状況にあるからだ。

「……なんで、こうなるのよ。悪いのは全部アイツじゃない!!」

広いだけの自室で、頭を掻きむしりながら喚き散らす少女がいた。今や冥界中から、実の両親や義姉、甥からも揃って憎まれているリアスである。

上層部から謹慎を言い渡された彼女は学園を退学させられ、人間界から強制帰還となった。無論、フェニックス家との婚約も破棄だ。

豪華絢爛な調度品も大勢の使用人も消えた、付け加えるならば前よりも小さい屋敷に引っ越しとなったリアスは、狂ったように叫ぶ。

どうして、と。

没落の始まりは襲撃事件直後にまで遡る。放送局や出版社が一斉に報道した告発映像こそが全ての発端だった。匿名で送られたというその映像は、どうやら監視術式で隠し撮りされたものらしい。

『リアス……は対象に含まれていない』

『……良いのね?』

『……証明にならないか?』

ノイズ混じりの音声で会話こそ良く聞こえないが、言葉を交わす二人の男女の姿はハッキリと映されていた。

銀髪の男はヴァーリ・ルシファー。堕天使組織所属でありながらテロリストに寝返った裏切り者にして、現白龍皇である。これだけでも問題なのだが更に冥界を騒がせたのは彼と話す少女の方だった。

あろう事か、少女はグレモリー家次期当主のリアスなのだから。

——現魔王の妹、テロリストと内通か!?

——密会する二人! 史上最悪の襲撃事件はグレモリー家次期当主の陰謀なのか!?

三流ゴシップ誌のみならず大手メディアまでもが大々的に報道したことで政府上層部は大騒ぎとなった。ただでさえ魔王二人の不在で組織が揺らいでいるのに、よりによって魔王の実妹のスキヤンダルがすっぱ抜かれたのだ。

今から報道機関に手を回しても間に合わないし、回すような人手もない。あげくに映像が本物で、目撃者を名乗る連中まで現れるオマケ付きだ。しかも証言まで信憑性が高いのだから手に負えない。

『リアス・グレモリー。貴様の罪は非常に重く、魔王様の実妹だからと見逃せるようなものではない』

『待って下さい、私はッ!!』

『ええい、黙れッ！　そもそも貴様が下僕を管理していれば、こんな事態にはならなかった！　それに貴様は領地の運営すら出来てないだろう!!』

『貴様の管理不届きで冥界は赤龍帝を失ったばかりか、今回の被害を負った！　どう責任を取るつもりだ!!』

冥界上層部はリアスに全ての責任を押し付けた。

結果として彼女自身の首は辛うじて繋がった。上層部からは何らかの刑罰を与えるべきとの意見もあったが、自分達が赤龍帝を裏切った張本人という点もあり、流石に全責任を問うのは酷だと判断したのだ。

その代わりにグレモリー家——リアスの両親に、子の不始末は親が責任を取るべき、と今回の一件の損害賠償を命じたのである。

莫大な賠償金はグレモリー家の財政を大幅に圧迫。更に今回の報道でグレモリー家の将来を不安視した領民が挙って他領に移住。

そして懇意にしていた商人達や付き合い合いのあった他の貴族達からも見限られたので、収入源を失ったグレモリー家は一気に困窮する羽目になった。とても賠償金を支払えるような状態では無くなった。

豪華な調度品の数々を売却し、使用人には暇を出し、広大な領土の殆どを手放し、城と見違える程だった屋敷から小さい屋敷に移った。

そこまでして、賠償金が用意出来るかもしれない、という状況なのだから、その没落振りが伺えるというものだ。

『貴方がリアスを甘やかしたせいで我が儘に育つたのよ!! どうするのよー!』

『な、私に全てを押し付けるのか!! 教育を間違えたのにはヴェネラナだって責任があるだろう!?!』

『その結果がコレよ!! 領民にも商人にも見限られてしまった!! もうグレモリー家は立ち直れない!! それもこれも貴方の教育のせいじゃない!!』

グレモリー夫妻は顔を合わせる度に大喧嘩をするようになって、何時しか矛先はリアスに向けられるようになった。とは言え別に怒鳴り散らしたり暴力を振るう訳ではない。

リアスがまるでいないように振る舞う。最低限の挨拶こそしても会話はしない。徹底的に無視した。

『リアスお嬢様。私は暫く暇を貰います。サーゼクスの看病をしなればなりませんし、何より……貴女を許せそうにありません』
『……お父様を返してよ』

グレイフィアはミリキヤスを連れて屋敷を出ていった。病室に泊まり込んでサーゼクスの看病をするらしい。だがそれが建前であることは明らかだ。

このままでは、あのリアスの甥であると無関係のミリキヤスにも悪影響が生まれかねないし、何より二人ともサーゼクスが傷付く遠因を作った彼女を許せなかった。

『……部長。僕達に人間界での待機命令が降りました。ソーナ様の学園生活を補佐するように言われました』

『一応、籍だけはリアスの眷属のままですが、機会を見て他の有望な悪魔の下に移ってもらう、と』

『すまない、リアス部長。拾ってもらった身でありながら……』
『うう、ごめんなさい……』

眷属達は人間界に残り、一時的にソーナの管理下に置かれるらしい。その後は分からないが彼らの能力は有望な為に、恐らくは他の悪魔とトレードとなつてリアスの下を去るのだろう。

「……悪いのは、イツセーなのに。全部、アイツがやったのに」

リアスは床に三角座りして呆然とテレビ放送を眺めていた。画面の先では兵藤一誠が犯行予告をしていた。どうやら一週間毎に貴族の領土を襲撃するようだ。

願ってもないチャンスだと彼女は思った。一誠を討伐すれば評価は上がるし、信頼も取り戻せる。没落したグレモリー家だって再興出来るのだ。

大丈夫だと頷くリアス。何もかもを失ったが、まだ自分には最大の武器である“身体”が残されているのだから。

「……早く、来なさいよ」

相も変わらずケラケラ笑っている一誠を見て、リアスは悪魔のように微笑んだ。

ビィディゼ・アバドンにとって、それは全く突然に起こった事態だった。

「やあ、はじめまして。レーティング・ゲームのトッププランカー殿」

「な、貴様は兵藤一誠!? どうやって屋敷に侵入したッ!?」

「うーん、どうやってだろうね。ま、そんなことはどうでも良いだろ？」

取り敢えず——冥界と「さよなら」しようか?」

アバドンを皮切りに、グラシヤラボラス、アガレス、ベルフエゴール、ベリアル、アスタロト、バアル、ヴァサーゴ。

僅か二ヶ月の間に八つの貴族領が襲われた。その度に一誠はテレビ放送をジャックして、今回の成果と次回に襲撃する貴族を予告した。

『久し振り、民衆の皆さん。兵藤一誠だ。今回もお偉い貴族様を襲ってやったぜ。侵入にも気付かないザル警備ってのは楽だねえ』

無論、悪魔側もただ指を咥えて見ていたのではない。予告される度に軍を派遣して、何としても討伐しようとした。

だが叶わなかった。先の首都での攻防で負った被害が予想以上に大きく、十分な戦力を確保しきれなかったのだ。

加えて、アリーナ襲撃の件から赤龍帝を相手に戦意を喪失する者が続出。残った者として心を折られる寸前だ。戦果など挙げられる筈もない。

今や民衆にとって兵藤一誠は貴族を打ちのめすヒーローであったし、彼を捕らえられない政府は彼等の嘲笑の的であった。そうすることではか民衆は恐怖を払拭出来ずにいた。

『ま、成果報告はこの辺で。リスナーの皆様も次回予告を待ってるだろうしな?』

『……パチパチパチ』

『口で拍手をしても意味ないぜ。……可愛いなあ、ちくしよー』

今日も余裕の表情を浮かべる一誠を悔しげに睨む悪魔上層部。民衆からは無能と嗤われ、襲われた貴族にはネチネチと嫌味を言われ

る。だが何もできないので、こうして歯噛みする日々である。

そんな悪魔達の心情など知ったこっちゃない、と言いたげに一誠は次の予告を行おうとしていた。

『次に襲うのは——ソーナ・シトリーだ』

——life. 65 標的——

「お姉様……」

シトリー領の病院の一室で、ソーナは変わり果てたセラフォルを懸命に看病していた。彼女は全身の傷こそ治療されたものの、頭部に受けたダメージが原因で今も眼を覚まさない。

下手をすれば、ずっとこのまま。仮に意識が戻ったとしても家族の介護が必要だろう。医師の下した診断はあまりにも残酷だった。

「……兵藤、一誠!!」

姉がこうなった遠因の男を思い浮かべて拳を握り締める。

あの日、アリーナ襲撃があった際は自分は別のスタジアムに居て、同時開催される予定だったシーグヴァイラとのゲームに備えていた。

そして彼女は目撃した。隕石となって冥界に迫り来る、巨大な魔力の塊を。

『皆さん、直ぐに避難して下さい!!』

『ガブリエルさん! 何があったのですか!?!』

『テロリストが、兵藤一誠が攻撃を仕掛けてきたのです!!』

駆け付けてきたガブリエルの言葉で、あの隕石は遠距離からの攻撃であり、兵藤一誠からの宣戦布告なのだと悟った。

後に旧魔王派も首都リリスを襲撃したと聞いて、彼は本気で悪魔勢力を潰そうとしていると直感した。リアス、そして冥界への復讐を果たそうとしているのだ。

兵藤一誠について、ソーナは未だ彼が人間であった頃から知っている。覗きの常習犯で有名な男で生徒会長として一誠には悩まされたものだ。

それはリアスの眷属になってからも変わらずに、「伝説の赤龍帝を宿した人間が女子生徒の着替えを覗くのか」と呆れたものだった。

そんな一誠のイメージが変わったのは三大勢力会談と、若手悪魔の

パーティーの襲撃事件だ。

『だから俺は復讐を目指す。対象はサーゼクスや上層部の政府首脳陣、ライザー及びフェニックス家。そして……』

最強の“女王”であるグレイフィアを圧倒し、ソーナの知略戦略を見抜き、若手悪魔最強と称されたサイラオーグも容易く降す。

久し振りに顔を合わせた少年からはもうかつての真つ直ぐさは消え失せていた。

ただそれでも、一誠はこれまで無関係な者を巻き込もうとはしなかった。あくまでも恨みある魔王や上層部を標的にしていて、間違っても無関係な民間人を虐殺するような手段は取らなかったのである。それはきつと、心の何処かに優しさが残っていたからだろう。故に若手悪魔パーティーでも自分達を殺さなかったのだ。

「……両親の死が貴方を歪めた。外れてはいけない枷が、外そうとしなかった楔が。兵藤一誠から抜け落ちてしまった」

それが今回の襲撃ではアリーナに集まっていた大勢の観客を虐殺し、サイラオーグも交戦の末に殺害した。冥界のマスメディアを利用してリアスとグレモリー家を簡単に追い詰めた。明らかに手段が過激になっているのだ。

現に今も貴族の領土を一週間毎に襲撃して回っている。それに果たしてどのような目的があるのかは分からない。

「……ですが、無関係な者を復讐に巻き込んで良い筈がない。虐殺して良い訳がない。——実の姉を殺されかけて、黙っていられる程に私は大人じゃない!!」

セラフォルーの手を握って泣き叫ぶソーナ。その姿はあまりにも痛々しくて——、

『ソーナ・シトリーとは以前からの知り合いでね。なんと、あの無能姫とも親友だったのよ。いやー、彼女が親友を諫めてればな……どうしたの、オーフィス?』

『……他の女の子の話してる。プイッ』

『いやいや、頬膨らませてでも可愛いだけだからね?』

——悪意の標的にされない筈がないのである。

——シトリー家次期当主と大犯罪者に隠された関係!?

——本当に親友の愚行は止められなかったのか!! 無能姫との背後関係を徹底調査!!

——現魔王とも繋がりがあつた!? 関係者の独占取材を公開!

「見ろよ、オーフィス。この新聞記事を」

「……悪魔の新聞?」

「そ。マスコミも世論も猫も杓子も、ソーナ・シトリーを揃って責め立ててるのさ」

一面に大きく載せられた見出しは、どれもこれもソーナを責め立てる物ばかりだった。一誠の襲撃予告から一夜明けても冥界はこの話題で持ちきりで、「早急に調査する」と上層部も緊急コメントを発表する有り様だ。

どうやら非難の矢面というのは幾らあっても困らないらしい、とは各報道をチェックした一誠の感想である。

報道内容から察するに、上層部は彼女を切り捨てるようだった。ただでさえリアス関連で大騒ぎになったのに、これ以上の爆弾は抱えきれないのだろう。

実に賢明な判断で、シトリー家にとっては最悪の状態だ。こうなつてしまえば最後、事態の沈静化などできやしない。

「シトリー領の住民は避難を開始したとき。俺が名指しで予告したことで、今までより更に過激な襲撃になるんじゃないかと恐れてるらしい。ヒーロー扱いしたりテロリスト呼ばわりしたり、大変だねえ」

「……どうする? また魔力砲?」

「まさか。別に大虐殺が俺の本懐じゃない。本質的にはもつと別のベクトルで、根本的な目標だよ」

「……ふーん?」

オーフィスは昨日の放送後から頬を膨らませたままで、言葉だけ交わして頭はピイツとあらぬ方向を見ている。他の女の話をしたから不機嫌のようだった。

尤も、そう言いながら結局は一誠の膝の上に座っているのだが。別に本気で嫌いになったとかでは無いらしい。

「ほら、そんな顔をするな。本当に可愛いな、オーフィスは」

「……駄目。誤魔化されない」

「強情だなあ」

ふう、と溜め息を吐いてベッドに寝転がる一誠。当然その上に座っていたオーフィスも巻き込まれる形で同じように転がった。最近は一誠の襲撃や作戦の準備で忙しい日々が続いて眠れなかったのか、横になって直ぐに一誠はイビキをかき始める。

一方の彼女も流されるままに眼を瞑った。「無限」たるオーフィスには睡眠など必要なく、静寂を重要視する性格からも本来なら彼の腕を退けて立ち去っている筈だった。

そうしないのはオーフィス自身もまた一誠に依存しているからだろう。

『随分と、変わったな』

「……ドライブ」

『別に今の相棒だけに限った話じゃない。付け加えるなら、相棒を止める選択も俺には無い』

オーフィスは少し首を傾げた。確かに最近の一誠は変なのだが、前よりも更に構ってくれるようになったし別に良いのでは、と思う。キスだってハグだって彼の方からしてくれるし、その先だって何度も体験した。

だから彼女も以前に増して一誠にベツタリくっついていてるのだが、ドライブや周囲から見ればそれは異様な光景だった。

『静寂に拘っていた頃は気にも止めなかっただろうよ……問おう、オーフィス。今、お前の心臓は高鳴っているか？』

「……ん。ドキドキしてる」

胸に手を当てると、確かに心臓は普段より早く動いている。前から同じ現象は確認されていた。一誠の側に居る時だけ心臓がドキドキと音を立てるのだ。

『それは好意という感情だ』

「……感情？」

『そうだ。お前は感情を宿したんだよ、オーフィス』

—— l i f e . 6 6 不死鳥狩り① ——

「おいつす、一誠の旦那！ 今朝のニュース見たぜ……つと、ボスは寝てるんですかい」

「静かにしろよ、フリード。何の用だ？」

一誠が目を覚ました時、オーフィスは腕の中ですうすうと寝息を立てていた。無理に起こすような真似はしたくないし、かと言って置いていくこともできず、お姫様を抱えるようにして食堂までの道を歩いていたのだ。

途中でフリードと合流して、彼らは通路を進む。旧魔王派がいなくなった分、施設は何処か殺風景な雰囲気が漂う。

「いや、次の襲撃には是非とも俺ちゃんも参加させて欲しいなー、なんて！ あ、デートと洒落込むなら別に……」

「飯を食ったら支度だけ整えろ。だが俺とフリードは別行動だ。お前は指示があるまで待機しとけ」

「……へえ。それじゃあ、大将は何処に仕掛けるのさ」

「分かっている癖に」

一誠もニヤリと笑って返す。だが彼の今までの手口と冥界の現状を考えてみれば、自ずと選択肢は限られてくるのだ。

標的は合計四つ。

政府上層部はパニック状態に陥っているが時期尚早。タイミングと切り崩す方法は山程にある。よって除外。

魔王サーゼクスは重傷を負って入院中。病院内なら自慢の魔力も振るえないだろうし勝機はある。だが迂闊に攻めると深手を与えられかねないし、何より彼への復讐はまだまだ足りない。よって除外。

リアス・グレモリーは謹慎中の身で狙いやすが、今は報道関係に詰め寄られていて、邪魔者が多すぎる。そして殺すには早すぎる。よって除外。

残された標的はただ一つ。

「不死鳥狩りの時間だ。しくじるなよ、フリード」

「アイアイサー！」

一誠の予告から一週間後、つまり襲撃当日。シトリー領は朝から三大勢力の連合軍を主軸に厳重な警戒体制が敷かれていた。それも今までの軟弱な悪魔達ではなく、三大勢力から選り抜いた精鋭のみで構成されている。

トップランカーの“皇帝”デイハウザー・ベリアルを筆頭に、最強の女性悪魔の一人であるロイガン・ベルフェゴール、復帰したビィディゼ・アバドンといった最上級悪魔クラスの實力者を有する悪魔軍。

武闘派のバラキエルが率いる墮天使軍。

ガブリエル配下の天使軍。

何れも他に劣らぬ軍勢であり、生半可な弱小神話ならば一月で攻め落とせる程の量と質だ。

そんな血気盛んな軍を見つめる三人の男。

魔王フアルビウム、墮天使総督アザゼル、熾天使ミカエル。

三大勢力の首脳が現場で直接指揮を取るといふ。たかが“はぐれ悪魔”に前例の無い戦力投下である。それだけ彼らは兵藤一誠を危険視して、総力を挙げて討ち取ろうと考えているのだ。

「……庄巻だ」

「あの戦争を思い出す」

現在は仮設本部となっているシトリー家の屋敷に首脳陣は集まり、窓から見える無数の軍勢を見つめる。

相反する三つの軍が集まったのはこれで二度目だ、とアザゼルは冗談めかして笑う。前回は互いに殺し合う敵同士の関係だった。それが今は、たった一人の少年を討伐する為だけに集まっている。

「しかも相手は赤龍帝だ。皮肉なもんだぜ。二天龍と再び戦争する羽目になるとは」

「文句は悪魔に言って下さい。そもそもの責任は彼らにあるのですから」

「ああ、僕も申し訳なく思ってるよ。だから面倒なのを我慢して現場に出てきたんじゃないか」

ミカエルの嫌味をさらりとスルーして、再び窓の光景に視線を移す
ファルビウム。

三勢力合わせて総勢十萬。それが今回、赤龍帝を狩るのに導入した
人員の数である。

上層部や世論には、「過剰ではないか」との指摘もあったし、三大勢
力合同での討伐作戦には反対意見も根強い。されど現状と一誠の手
口を良く把握している首脳陣は是が非でも協力しなければならな
かった。

墮天使側はコカビエルを処分してからというものの過激派の反発が
強まっていた。特に最近では上層部の失策が目立ち、代わりにコカビエ
ルの意見が認められつつあるという点も加えて、墮天使組織内では大
きな派閥を形成している。

アザゼルは彼等の意見を抑え込む材料を求めていた。故にファル
ビウムからの協力要請に応じた。

天使側は他の二勢力と違って直接的な被害は受けていない。にも
関わらず軍を派遣したのは彼らと同盟を結んでいる立場上からであ
る。

そして根本的な話ではあるが、自分達に恨みを持つ敵は一誠だけと
は限らない。敵が未知数である以上は判明している戦力から潰すし
かないのだ。故にミカエルはファルビウムからの要請を受けた。

「……ま、これでも一回目に比べたら少ないんだよね。あの時は軽く
見積もっても倍はあったし、何より神も初代魔王も生きていた」

「……だな。それで、奴さんは何処から来ると思う?」

「分かっている癖に。というか選択肢なんて最初から一つだよ」

諦めた魔王。諦めていない墮天使。二人の男は互いに視線を合わ
せないままで告げる。

「——フェニックス」

——life. 67 不死鳥狩り②——

「……このコート、暑い」

「悪いが我慢してくれ。俺達は避難民ということになってるんだ。
フェニックス^場領でそれを脱いだら正体がバレるし、俺が乳首テープの

幼女を連れ回す変態になっちまう」

「……赤龍帝、ロリコン変態。違う？」

一誠の手口は単純明快にして変わらない。自身を、或いは目的の分かりやすい襲撃作戦を囷にすることで、本当の目的から眼を逸らさせる。

先のアリーナ攻撃や旧魔王派による首都リリス襲撃が正しくそれであり、二つが注目を集めているその裏で本命——グレモリー家の没落を成功させている。

「違うって。俺はオーフィスが好きなだけの、健全な青少年だよ」

『いや、旦那は真正正銘のロリコンっすわ。だって旦那らの部屋の前を通ったら喘ぎ声が半端無いつすもん』

「……通信術式越しに話を聞いてんじゃねーよ、フリード。脳の水分を倍に増やすぞ」

囷作戦自体はありふれたものであるし、手口を知られると対策も容易にされてしまう。

ただし彼の織り成す作戦が厄介と称される理由は、囷全てが本命を兼ねている点だろう。アリーナ襲撃作戦にしても勢いを作る意味の他に、ゲームを見学しようと首脳陣が集まっていたからこそ攻撃する必要があった。

魔力攻撃そのものは外に配置されていた警備を狙ったもので、恐らくは敷かれていた防衛体制を麻痺させる狙いもあった。

後に自分がアリーナに降り立つ点を考慮すれば邪魔者は少ない程に良い。囷としての目的なら妥当だろう。されど最初から『本命』として見るならば話は全く違う。

「……大丈夫。ロリコンな赤龍帝も、我は応援してる」

「おい、どっから電波を受信してきた」

『そう言えばさあ、こないだボス様にアニメを見せてみたんだけどさー。これが思ったより食い付いてさー』

「ぶっ殺すぞ、フリード」

一誠はパフォーマンスを重視する。それはまるでスズメバチの体に施された警戒色のように、より派手に、より分かりやすく、自分は

危険で有能な存在だとアピールしている。

危険な”SSS級はぐれ悪魔”だと三大勢力を恐れさせ、連中を壊滅寸前にまで追い詰める有能な手駒だと各神話体系に売り込み、哀れな復讐者だと全世界に同情を誘う。

そして、悪魔上層部には一誠の実力と恐怖を刷り込んだ。アリーナ襲撃時の大規模な魔力攻撃によって。

目論みは見事に達成され、結果的に彼らは一誠が恐くて堪らなくなってしまう。それこそグレモリー家やシトリー家を簡単に見捨てるまでに。

つまりは復讐対象への報復を同時にこなしているのだ。大勢の犠牲を払った上で。

「……赤龍帝は、今まで食った幼女を覚えているのか？」

「いや、オーフィスだけだから！ てか完全にアウトだから!!」

では、三大勢力は指を咥えて眺めているしか無いのだろうか。

そんなことは無い。極めて綿密で残酷な作戦ではあるが、所詮は十代後半の子供が考えた計画だ。本人が気付かなかつた穴もあれば、対策もそれなりに存在する。

例えば今の状況——ソーナの襲撃予告、という罠を設置されても、待ち受ける三大勢力側からすれば実はごく簡単な策だけで対処可能だ。

一誠の目的は復讐であり、当然ではあるが逆算すると本命・罠を含めて全ての作戦が復讐に行き着く。

そして首脳陣は、彼の復讐対象が誰なのかも把握している。ならば話は簡単だ。

本命であろう人物を生け贄にしまえば良い。

「ハア、そろそろ静かにしろ。もうすぐ奴の巡回ルートだ。デイハウザーの情報ではこの時間帯に奴は領地の見廻りをしている筈だからな」

「……分かった。お口、チャックする」

『でも旦那の下のチャックは!?!』

「ハツハツハ、死ね」

魔王であり超越者でもあるサーゼクスを失うのは痛手だが、種族を守る為に犠牲になってもらおう。

リアスを失っても別に問題は無いし、冥界の為に死んでももらおう。上層部は寧ろ消してくれた方が嬉しいし、喜んで人柱になってもらおう。

フェニックス家を失うのは痛手だが、そもそも元を辿ればライザーが全ての原因なのだ。つまり全ての責任は彼にあり、子の不始末は親が責任を取るべきなのでフェニックス夫妻に責任を押し付けてしまおう。

兵藤一誠の憎悪も民衆の怒りも、何もかもを押し付けてしまっ、ついでに退場してもらおう。フェニックスらしく冥界の傷を癒す為に身を捧げてもらおう。

「行こう、オーフィス。最初の終幕だ」

「……ん」

——不死鳥フェニックスには、死んでももらおう。

その日、ライザー・フェニックスは何時ものように眷属を連れて、領地の巡回をこなしていた。グレモリー、シトリー両家から雪崩れ込んできた大量の難民の安否を確認する為というのが表向きの理由である。

フェニックス領の端に寄せ集まって形成された避難地区は今やスラム街のように争いが絶えなくなっており、遂には連中を嫌う元々の住民達が他領に流れていくという本末転倒な有り様だ。

それで最近になって区域の安全を守るべく巡回を開始した、というのが一つ目の理由であった。

「チツ、どいつもこいつも騒ぎやがって。移住者の肩書きが好き勝手する免罪符にはならないんだぞ」

「抑えて下さいまし、お兄様。彼らは住む場所を失った身。恐怖に怯えるのは仕方ありませんし、そういった者を守るのは領主の務めですわ」

「分かってるよ。今のは忘れてくれ」

フェニックス夫妻は領主としての業務もあって忙しく、巡回は専ら三男坊たるライザーの任務である。本人も珍しくやる気があって、「避難民を無下に扱ったと噂される訳にもいかないだろう」と二つ返事で了承したという経緯がある。

それだけに見廻り自体は無難にこなしているが彼自身は早足に歩くだけで、寧ろ眷属の方が親身になって接している始末だった。

「……最近のお兄様はどうにも変ですわね」

「確かに、見廻りをしている際のライザー様は様子が可笑しいな」

「何だか脅えているようにも見えますの」

実妹であり「僧侶」を務めるレイヴエルの言葉に隣を歩くイザベラも頷く。今日はこの二人とライザーで班を組んでの巡回だ。

任務に馴れてきた現在なら少人数でも大丈夫だろうと判断を下したからだし、特に三日前程から急に慌ただしくなったフェニックス夫妻の仕事の手伝いに余った人員を割く為の配慮でもあった。

尤も、夫妻が忙しく動いている理由については眷属達はおろか、娘であるレイヴエルさえも知らされていない。

思い返してみれば、兄の態度の豹変と両親の仕事量の増加は同じタイミングで起こった、とレイヴエルは思考を巡らす。

果たしてこの二つを切り離して考えるべきなのだろうか。それとも良からぬ事態が迫っていて、それを防ごうと自分の知らないところで動いているのだと考えた方が良いのだろうか。

「或いは、既に最悪な展開に陥ってしまっていると読むべきでしょうか……って、お兄様が見当たりませんかわね？」

「ライザー様なら休憩すると言って木陰に向かわれたよ。かなりの心労を抱えておられるのだろう。兵藤一誠が次々と貴族領を襲撃しているからな。幸いにも犠牲者は出ていないが、不安にもなるさ」

「……兵藤一誠」

イザベラの言葉も半分には、即座に記憶と情報を纏めるレイヴエル。

“SSS級はぐれ悪魔”にして“赤龍帝”である兵藤一誠が本格的に動き始めてから、顔見せに過ぎなかつた三大勢力会談や若手悪魔パーティーへの乱入を除外して考えると早くも数ヶ月が経過する。

そう、僅か数ヶ月。たったそれだけの期間で彼はアリーナ攻撃、首都リリス襲撃、バアル家次期当主の殺害をやつてのけた。更に旧魔王派によるものだが魔王二人も重傷を負っている。とても元一般人の少年が企てたとは思えない手際の良さだ。

「とても力に呑まれたとは思えませんわね。政府の発表も役に立ちませんの」

「慎んで下さい、レイヴエル様！ 誰かに聞かれれば……！」

「ふふ、では貴女も忘れて下さいな。ですがこれだけは言わせて？ 近い内にフェニックス家は滅ぼされるだろう、と」

グレモリー。シトリー。今や断絶寸前にまで追い込まれた両家には、兵藤一誠と関わりがあった、という共通点がある。

グレモリーはリアスが一誠の元主君だった。そして一誠の予告映像で判明したことだが、シトリーも次期当主のソーナが彼と交遊があったらしい。

身内の者が一誠と戦っている点で彼と関わりを持つフェニックス家はどうなるのだろうか。

「下手をすれば、一家揃って皆殺しにされますわね」

「それは有り得ませんよ、レイヴェル様。彼が攻めると宣言したのはシトリー領。彼処は三大勢力合同の軍勢が待ち受けています。奴が現れても直ぐに捕縛されますよ」

「……お気楽で羨ましいですね。彼が好んで用いる方法を思い返してみなさい。あんな派手なパフォーマンスをしている時点で、本当の目的は隠していると白状しているようなもの」

「つまり、それは」

顔を蒼白にさせるイザベラに、レイヴェルは続ける。

「——今この瞬間に襲われる可能性だってある」

——life. 68 不死鳥狩り③——

ライザーは木陰に隠れたままで、彼女の的確な指摘を聞いていた。そして両親や政府から詳細を与えられていないにも関わらず、独自に真相の欠片を掴んでいたことに内心で恐怖を感じた。

彼女の指摘は全てフェニックス夫妻の読みと同じであり、更に付け加えるならば冥界政府からなされた通達とも当てはまっているのだ。

一週間前、魔王ファルビウムからフェニックス家に極秘での書類が届けられた。

その内容は、兵藤一誠がフェニックスを狙っている可能性が極めて高いことを判断した根拠と共に指摘したものであり、同封された手紙には上層部と結託して兵藤一誠を陥れた証拠が事細かに綴られているのである。

そして書面の最後には、彼はシトリー領を襲うと見せかけてフェニックス家を狙う筈だから秘密裏に兵を置かせて欲しい、と締め括られていた。

「だから俺は安堵した。必ずや捕縛してくれるだろうと安心した！これでやっと枕を高くして寝られると油断したんだ!!」

何度承諾しても返事がされない。焦っている間に政府はシトリー領に三大勢力の連合軍を派遣すると発表した。それで漸くフェニッ

クス夫妻がファルビウムの思惑に気付いたときには全てが遅すぎた。懇意にしている上層部に掛け合っても突っぱねられ、交流のあった貴族や商人は一気に離れていき、最早誰の助力も得られなくなってしまう。

恐らくはフェニックス家を見捨てる旨を既に伝えられていたのだろう。故に誰も彼もが距離を置いたのだ。好んで泥船に乗りたがる馬鹿はいないのだから。

顔を真つ青にしながら各所を駆け回るフェニックス夫妻。そんな彼等を他所に、ライザーは一つの決断を下した。

「……悪いな。俺は逃げさせて貰うよ」

レイヴェル達の姿が見えなくなったのを確認してから、反対方向に歩き始めるライザー。その手には大きめのボストンバッグを掴んでいて、肩にもリュックを背負っている。

つまり、彼は冥界から逃げようとしているのだ。何もかもを見捨てて。

「俺はまだまだ生きたいんでね。戦争ごっこはお袋達で勝手にやつてろ」

魔王ファルビウムから通達がなされた際、ライザーはどうにもキナ臭さを感じ取った。舞い上がっている両親は気付かないようだが、そのような極秘情報は当事者以外の誰にも知られないように通信魔術を、それも専用に構築のなされた術式を用いて連絡する。

特に現在は凶悪極まりないテロリストが暗躍している状況だ。敵に奪取される危険性を考慮しても普通は通信魔術で知らせる筈だし、魔王ならば尚更にそうするだろう。

そもそも送られてきた時期自体が可笑しい。急に判明したのなら兎も角、内容の細かさを見るにファルビウムは以前から把握していたようなのだ。

にも関わらず、送ったのは一週間前。まるでフェニックス家に時間を与えないと言わんばかりの絶妙な期間だった。

故にライザーは領地の巡回を引き受けたのである。逃走経路の確認、人の少ない時間帯と場所の確認。それら全てを短期間でこなす為

に。

「それにしても赤龍帝のガキめ。大人しく殺されりや良いものを、なんだってテロリストに身を落としてまで生きてやがる。つて元凶は俺だったなあ、ハツハツハ。ま、俺はもう関係無いんだ——」

此処でようやくと、ライザーは周囲の異変を察知した。自分は人通りのない道を進んでいた筈だが、何時の間にか周りには黒い障壁で包まれていた。

誰も居ない、何も見えない。強い闇の中で彼は狼狽えるばかりだ。

「な、何だ!? 敵襲か!? まさか、奴が……」

レイヴェルの指摘した可能性が頭に過って、慌てて打ち消す。しかし状況的に考えられる原因はそれしかない。

となればこの障壁は足止めであり、襲撃の下準備にしかならないのだろう。ならば必ずやって来る筈だ。

憎悪を抱えた少年が、ライザーを狩ろうと狙っているのだから。

「悲しいねえ。俺に会いたくないばかりに家族を見捨ててまで逃げようとするなんてなあ。俺は復讐対象ライザーに会いたくて仕方が無かつたぜ」

「なあ、ライザー。先ずはゲームをやらねえか？ なに、簡単な話だ。あの一騎討ちのリベンジマッチさ」

黒い繭によって仕立て上げられたフィールド。一切の音のしない静寂な世界の真ん中で、一誠とライザーは睨み合う。それはまさしく、かつての一騎討ちの再現だった。

ただし二人を巡る状況は大きく変わってしまったし、彼らが望んでいた女性はもう蚊帳の外である事を除けば、の話だが。

「……バランス・ブレイク禁手化」

龍を宿した少年は見捨てられ、裏切られ、その果てに復讐を誓った。“SSS級はぐれ悪魔”の烙印を押された大犯罪者となった。何もかもを失った彼は代わりに愛する女性と力を手に入れ、冥界に牙を剥いたのだ。

そして長い道程の末に、こうして己を陥れた元凶の一人——かつて敗北した相手に二度目の戦いを挑んでいる。

「……良いだろう。不死鳥の炎を再び見せてやろう」
不死鳥たる男は少年の可能性を何よりも恐れた。何時か報復に来るかもしれないと脅え、上層部や魔王を抱き込んでまで彼を排除した。当時はその選択こそが正しいと信じて疑わなかった。結果として男は冥界壊滅のトリガーを自ら引いてしまったことにも気付かずに。

そして、復讐を果たさんとする少年に——かつて陥れた相手に再び戦いを挑まれている。

「懐かしいな。式場に乱入してきたお前は、生意気にもリアスを要求して来やがった。あろうことか俺に一騎討ちを挑んできた」

「……」

「あの時、お前は俺に手も足も出なかった。サンドバッグみてえにポコポコにされたんだ。忘れた訳じゃないよなあ!! 俺の恐怖を、強さを!! 今でもトラウマだもんなあ!」

少年はかつて、絶対に負けられない勝負で敗れてしまった。愛して

いた女性を助けると誓ったにも関わらず、彼女の前で敗北した。忘れられる筈がない。

当時の自分はまだ弱く、ただ吠えるだけの雑魚にも等しい存在だった。

故に、仮に因縁の相手が怖くないのかと訊ねられれば、それは嘘になる。

「……前の俺からすれば、お前は遥かに強大な存在だったさ。純血の上級悪魔で何度倒しても立ち上がってくるフェニックス。どうやって勝つんだ、なんて泣き叫んだよ」

眼を閉じれば今でも鮮明に思い出す。

小猫、木場、アーシア、朱乃。皆が一人ずつ倒されて行って、残るは一誠とリアスだけ。本当に何もしない内にリアス陣営は壊滅させられたのだ。

そうしてライザーに特攻を仕掛けた一誠は呆気なくリタイアとなり、守る者のない剥き出しの“王”となったりリアスは投了。

伝説の赤龍帝を宿したと騒いで、領地に侵入した“はぐれ悪魔”や堕天使を討伐して調子に乗っていた少年少女は、強くなったつもりで弱いままだった。だから敗北したただけの話である。

「そんな雑魚が復讐なんて出来る筈ねーからさ、必死に鍛えた。トレーニング室に朝から晩まで閉じ籠ったし、オーフィスに手伝って貰って地獄染みた特訓もこなした。お陰で自信と体力だけはついたよ」

「……ッ!! それがどうした!! お前如きが鍛えたところで、俺が負ける理由にはならねえ!! 俺は不死身だ!!」

「いや、お前には死んで貰う。そうでないか……」

一誠は、真っ直ぐにライザーを見据えた。

「——俺の復讐が果たされないんだ」

直後、一誠の拳がライザーの顔に突き刺さる。

一瞬で最高速度にまで加速させた、ドラゴンの一撃。

速度に比例して威力を数十倍にまで膨れさせた拳は油断していたライザーの顔面を抉り取る。衝撃を真っ正面かつノーガードで喰

らった彼は、あっさりと言壁に身体を叩き付けられる。

何が起きたのか、今の数秒間で自分はどうなったのか。

再生の炎を撒き散らしながら立ち上がる。ライザーには先程の攻撃がまるで見えていなかった。

或いはそれも仕方無いのかもしれない。

二十回分の倍加によつて、百四万と凡そ八千倍にまで強化された身体能力を全て一点に集中させただけのストレートパンチ。それが肉眼で見えるとなれば神や魔王クラスに限られるだろう不可視の攻撃。彼程度の悪魔に受け止められる筈がないのだから。

「おい、さっさと立てよ。まだ眠る時間には早いだろ。なんとたって……お前は不死身なんだからさ」

「この、クソツタレがああああああ!!!」

反撃しようと即座に焰を拡げるライザーだが、一誠はその間にも距離を詰め寄つて怒濤のラッシュを展開していく。

それは“赤龍帝”の有する“倍加”能力を活かした超高速戦闘術であり、彼が得意とする肉弾戦に特化させた戦法であった。強化した脚力でフィールドを縦横無尽に駆け巡り、翻弄された相手をひたすらに殴り続ける。

腕、脚、背、腹。それらを骨からへし折り、切り裂く。再生の炎を纏う片っ端から潰していくのだ。

そして、それこそが純粹に戦いとしてのフェニックスの攻略法である。

神にも匹敵する一撃で一氣に大ダメージを与えてしまふか、精神を再起不能にしてしまふ。皮肉にも、リアスに教えられたことそのままだった。

「神器”頼りのクズが調子に乗りやがって!! 火の鳥、鳳凰! フェニックス 不死鳥と讃えられた我が一族の業火、その身に受けて燃え尽きろツ!!!」

格下な筈の相手に圧される焦燥から、とうとう爆炎を滾らせて、大技を繰り出そうとするライザー。一氣に勝負を着けようという算段だ。それが証拠に、再生した右手に纏う炎は今までの比では無い。

敵う筈が無いのだから。

「こんな筈が、この俺がああああああ!!」

「墜ちろおおおおおおお!!」

赤い龍の執念の一撃が不死鳥の腹の真ん中に深くめり込んで、それでも意識を飛ばすことを許さないと宣言するように、回転を加えながら自身共々に急降下していく。

先程の攻撃を全身に喰らった反動か、赤い鎧はとつくに解除されて、一誠は生身のままで戦っている。

血塗れになって拳を潰して、それでも復讐対象ライザの無防備な腹に全身全霊の攻撃——積年の憎悪を、叩き込んだのだ。



「……赤龍帝」

ただ一人、繭の外に居て戦闘を見守っていたオーフィスはふと溢した。

燃え移った炎に焼かれながらも抗う一誠の姿に、彼女は帝王と称されたドライグ——否、ドラゴンという種族の本質を垣間見た。

気高く、力強く、誇り高く。その気になれば戯れで世界を滅ぼすような種族。それこそがドラゴンであり、ドライグ「赤龍帝」だ。

そして悪魔はドラゴンの誇りを踏みにじった。逆鱗に触れてしまったのである。

故に彼らは滅ぼされる。それだけの話だ。

「……兵藤、一誠」

愛しそうに呟くオーフィスの瞳に不死鳥や悪魔は映っていない。決着を告げる激しい衝突音が聞こえても、オーフィスは特に反応を示さなかった。

彼女もまた紛れもない龍神ドラゴンであるが故に。

「……?」

そして、自分の身体の変化に気付くことも。

——life. 69 不死鳥狩り④——

ライザは焦っていた。不死鳥たる自分が負ける理由はないのだと本気で思っていたからで、赤龍帝を一度倒した経験が生まれ持った

傲慢さに拍車をかけた。

自信満々で大胆不敵な襲撃予告も、本当はハツタリに過ぎない。どうせ無限を待たせていなければ何もできやしない。

そう思い込むことでしか彼等は己を鼓舞することも、恐怖を拭うことも叶わなかった。どうせ一度は倒した相手なのだから、と。

それが蓋を開ければ、彼は一誠に圧倒されていた。腕と脚と翼は再生が間に合わない速度で集中攻撃を受け続けて使い物にならない。文字通り手も足も出ない状態に追い込まれた。

だからこそ最強の炎を持って一誠を倒そうとした。今までで最高火力だろう攻撃は容易く彼を呑み込んで、そのまま焼き尽くす筈だった。

「こんな筈が、この俺がああああ!!」

されど一誠は爆炎の境界線をも潜り抜けて、赤い拳を延ばしてきた。鎧を失いながらも尚、本物のドラゴンの両腕に馬鹿げた数の“倍加”を並べて。

炎の中から迫り来る一誠はもう人間でも悪魔でも無い。スロームーションと化した世界で、ぼんやりとそんな一文が脳裏に過るライザー。

墜ちて行く不死鳥の視線の先には一つの幻影があった。全身が赤い鱗で包まれた巨大なドラゴンの姿を、ライザーは最後に垣間見た。

ああ、と漸く彼は納得した。あんな化物に勝てる訳が無い。一誠の言葉の意味にも気付かないままで。

——悪魔は、選択を間違えた。

レイヴェルとイザベラが巡回を終えて戻ってきたとき、屋敷の中は異様な程に静まり返っていた。何度も呼び掛けたのに誰も現れなければ、そもそも人の気配すらも感じない。

あまりにも妙で何かしらの異変があったとしか考えられなかった。

彼女は兵藤一誠の存在を思い付いた。もしかすれば本当に彼が襲撃してきたのかもしれない。

「……レイヴェル様、如何なさいますか？」

「取り敢えずは二手に別れて屋敷を散策しますわ。連絡術式を常時開いて、何かあれば直ぐに報告して下さい。一時間後に玄関で合流しましょう」

「了解です」

そう言つて一階の奥に消えていったイザベラを他所に、自分も二階への階段を昇る。

二階は主に自分や兄達、そして夫妻の自室や執務室が連なるエリアなだけに眷属には任せなくなかった、というのが建前の理由だ。彼女もそれを弁えていたのか黙つて一階を見に行つたが本当の理由は違う。

兵藤一誠が本気で襲撃をするのなら念入りに下調べを行う筈だ。行動パターン、置かれている状況、本人の実力、その他もろもろ。細部に至るまで徹底的に分析してから計画を練るだろう。

つまり彼の凶行と仮定して、大量の業務を抱えていたフェニックス夫妻が、最近執務室に籠りきりであったことを知らない訳がない。その絶好の機会を見逃すような男ではないからだ。

「畏、待ち伏せ。色々と警戒しなければなりませんわね。それに家族の安否も……」

嫌な光景が脳裏に過る。詳細こそ知らされていないものの、一誠とフェニックス家の間に隠された裏をレイヴェルは薄々ながら見抜いていた。それで彼が貴族領の襲撃を繰り返すようになった頃から両親や兄は忙しく動いているのだ、と。

果たして一誠と出会ったときに自分達は許されるのだろうか。

そんなことは有り得ない。最悪は一家もろとも皆殺し、百歩譲つてもグレモリー家やシトリー家のように社会的に抹殺されるだろう。もしくはその両方か。

もう皆は殺されているのかもしれない。

「……不味いですわ。私としたことが状況に呑まれてしまっている。淑女^{レディ}たる者は冷静に、冷静に」

不敵に笑うレイヴェル。しかし足取りは重たく、嫌な汗が止まらない。どうか生きていて欲しいと少女は願わずにはいられなかった。

階段を上がって直ぐにライザーの部屋とレイヴェルの自室、少し離れて夫妻の寝室が位置する。一番奥には執務室があるが彼女はまだ立ち入りを許されておらず、詳しくは知らない。

「私の部屋も、お兄様の部屋も、お父様とお母様の部屋も問題なし。となれば……」

扉を少しだけ開けて中を確認してみたが変化は見られなかった。これで私室は全てチェックし終えて、残るは一番怪しい執務室のみ。

不死鳥を象った紋様が刻まれた扉は暗い通路の奥底で待ち構えていて、見慣れた光景の筈なのにレイヴェルは言い様のない不安を感じた。或いは扉を隔てた先に兵藤一誠が待ち構えているのかもしれないのだから。

深呼吸してから連絡術式に手を延ばす。このまま一人で突入するのは危険だと判断したからだ。小娘二人でどうにか出来る相手とも思わないが、せめて一階のイザベラと合流した方がまだマシだ。

「……？ 妙ですわね。応答がありませんわ」

合流を優先した彼女は自分を狙う視線にも、致命的な隙を晒してしまった事にも気付かない。

「見つけた♪」

—— l i f e . 7 0 不死鳥狩り⑤ ——

「……兵藤一誠！ やはり貴方の仕業でしたのね!」

「やつはろー、ゲーム以来だね。久し振り。お兄さんは元気かい?」

執務室の前に立ち塞がる一誠はヘラヘラ笑っていて、どうにも胡散

臭い第一印象を与える。しかし、それが様々な理由で造られた偽りの仮面である事は一目瞭然だ。

裏にどのような感情を隠しているかは上手く読み取れないが、録なものでは無いだろう。

真剣な表情で一誠の挙動に集中するレイヴェル。対して彼は欠伸をするか、隣に侍らせたオーフィスの髪を触るかで、攻撃を仕掛ける気配は見られない。

「わざとらしい……！ 貴方がこの場に立っている時点で、お兄様がどのような末路を辿ったかは想像が付きまますわ!! それに家族や眷属達も……ッ!!」

「健気だねえ。家族に捨てられた身で、よく家族の安否を心配するだけの情愛が残ってるね。俺なら復讐するよ」

「——は？」

反論する声が徐々に小さくなって最後には掻き消えた。目の前の男が発した言葉が理解できない。

家族に捨てられた、と確認するように辛うじて呟く。

「いや、マジだって。疑うなら本人に直接訊きなよ。逃走準備してた馬鹿共が転がってるからさあ？ 芋虫になってるけど」

ほれ早く、と促すように道を譲る。その先に見える扉は固く閉ざされたままで一見すると普段通りに思えた。だがレイヴェルの脳には先程の一誠の言葉がグルグルと廻っている。そもそも思い当たる節は幾らでもあった。

一誠とフェニックス家の確執。彼が別の貴族を襲撃すると予告したタイミングで忙しく動き始めた両親。同じく態度の急変した兄。そうして聡明な彼女の頭は目まぐるしく回転し、やがて最悪な結論を導きだした。

家族は密かに冥界から逃げる準備を整えていたのではないか。

自分は家族に見捨てられたのではないか。

まさか、と否定しようとするも溢れた疑惑は止められない。詳細を訊ねてもレイヴェルは教えてもらえなかった。あのときから既に両親に見捨てられていたとすれば。

ライザーは珍しく自分から巡回を引き受けた。あれも怪しまれないように逃走用のルートを確保・確認する為の建前だったのか。現に彼とは今も連絡が取れない。

「……う、嘘、ですわよね？ 私を見捨てるなんて、そんなこと」

「質問は俺じやなくて家族に訊きなって。水入らずで話させてやるよ。後は扉を開けるだけ♪」

「……」

背を押される形でゆっくりとドアノブに手をかけた。虚ろな瞳はもう兵藤一誠など微塵も映しておらず、隠された真相を確認することしか考えていなかった。

少し力を込めると重たい音が響いて、同時に扉が口を開く。

「あーらら、残念。知っちゃった♪」

執務室に入って最初に視界に飛び込んだのは、部屋の真ん中に転がされている三人の家族だった。何れも両手両足を引き千切られ、再生を防ぐ処置なのか傷口には何らかの魔法陣が浮かんでいる。

更に彼らの身体には暴行を受けたと思われる傷痕が幾つも散らばっていた。血と呻き声を垂れ流す醜い姿は本当に芋虫のようだ。

そして三人の直ぐ隣には、膨らんだポストンバッグやキャリーケースが幾つも積んであった。恐らく有るだけの衣服や生活用品、金が入っているだろうそれらは、

それは、まるで逃げる準備のようではないか。

「……あ、ああ……うああああああアツ!？」

レイヴェルは絶叫した。ごちゃ混ぜの感情を処理仕切れなくなつてただ泣き喚くしか出来なかった。自分は本当に実の家族から捨てられたのだ、と。

絶望する彼女の背後で少年は嗤う。

「ようこそ、此方側の世界へ。——君はもう、逃げられない」

life. 71 不死鳥狩り⑥

レイヴェルの顔を見た途端に、芋虫達は慌てて弁解を始める。見捨てたつもりは無いのだの、何れお前にも話すつもりだったのだの、実に分達にとって都合の良い話ばかりを並べた。手足を失った今は彼女だけが頼りで、故に必死ですらうとしているのだ。

顔を蒼白にさせて小娘を神のように崇める姿は虫けらのように醜く、栄華を誇ったフェニックス家のあまりにも無様な醜態に、レイヴェルは思わず吐き気すら覚えた。

一誠の言葉を鵜呑みにした訳では決して無いのだが、前々から怪しいと思う点はそれなりにあった。そして積み上げられた荷物の数々という確固たる物的証拠を見せ付けられた状況で、果たして誰が連中の言うことを信じるのだろうか。

「……分かっただろう？ あいつらは君のことなど微塵も考えちゃいない。自分の命さえ助かれば良いんだ」

「……」

「無論、君の戸惑う気持ちも理解出来る。家族に捨てられたと言われなくても受け止めきれないよなあ」

甘く優しく語られる一誠の言葉は、ゆつくりと確実にレイヴェルの冷静さを蝕んでいく。

才女たる彼女にも年相応の面は残されていたのか、あれだけ絶望して泣き叫んでも未だ信じきれていない様子だ。或いは無意識に逃避しているのかもしれない。

荒い息を繰り返しながら、前面の芋虫と背後に佇む一誠を交互に見つめた。今にも溺れてしまいたいそうになりながらも、助けて欲しい、と瞳はすがるように訴えていた。

そして何かを期待するような眼差しの奥底に、どす黒い炎が宿っていることに一誠は気付いていた。裏切られた者、見捨てられた者だけが宿す感情をレイヴェルもまた抱いてしまったのだ。

つまり彼女は揺れている。家族への憎悪と消しきれない情を天秤に掛けて迷っている状態にある。

「迷っているね。それも仕方無い。状況証拠を突き付けられても尚、家族の潔白を主張するのは当然だよ。でもねえ、連中の眼をよーく見てごらん。レイヴェル・フェニックス」

「……」

「君に怯えているだろうか？」

フェニックス夫妻も、ライザーも。

皆が恐怖に歪んだ眼をしている。レイヴェルを讃え、恐れ、怯えた視線を向けている。その瞳に彼女本人はもう映されていない。

「あ……」

ソロモン七十二柱のフェニックス家として名を馳せた名門の当主達が保身の為に家族を見捨て、失敗して何もできない芋虫にされてしまった挙げ句に、命欲しさに見捨てた筈の少女にすがり付く。

彼らが名を呼ぶ理由は別に情愛や絆を取り戻した訳では無い。徹頭徹尾、保身の為だ。

だからこそ連中は怯えている。満足な抵抗すら叶わない現状だからこそ、余計にレイヴェルの報復を恐れている。

そして連中の思惑に気付かないようなレイヴェルでは無かった。聡明な彼女は全てを悟ってしまった。

本当の意味で自分は捨てられたのだと。

「迷いは吹っ切れたかい？」

「ええ、お陰様で。ところで、この芋虫についてですが……」

ニコニコとレイヴェルは笑みを浮かべる。

右手には魔力を、左手には壁に飾ってあった剣を、その心に悪意を込めて。

「――解体しても構いませんよね？」

「勿論♪」

——life. 71 不死鳥狩り⑥——

両手両足を引き千切られ文字通りの芋虫となったライザーは、ただ心の底から救いを求めるしか無かった。直ぐ隣では父親と母親だったパーツがあちこちに転がっている。

骨、臓器、肉。二人はそれこそ加工された出荷用の生肉並みに細か

く分解されており、フェニックスの力を以てしても再生は不可能だろう。つまり死んでしまったという事だ。

「あら、根性が足りませんわね。もっとバラバラにしようと考えていましたのに」

「焼き鳥を寸断したって、鶏そぼろ丼の具材にしかならんだろ」

それもみんな、満面の笑みを浮かべ続ける実妹が行ったのだ。彼女は泣き叫ぶ両親を生きたまま捌いた。切断した箇所が再生した瞬間から即座に切り捨てて、スライスして、最後には解体してしまったのである。

それもたつぷりと悪意を絡ませ、わざわざ必要もないのに臓器を抉って再生させたり、耳をスライサーで裂いていたり……。

『ご、殺してくれえ!! ……もう楽にしてくれえ!!』

『んー、死にたい? でも我慢なさって下さい。なにせフェニックスなのですから』

『おーおー、自殺願望持ちの不死鳥とか笑い話にもならんぞ』

両親が殺されていく一部始終を、ライザーは見せ付けられた。そして凄惨な光景に戦慄すると共に、それらを心底から楽しそうに行っているレイヴェルに恐怖した。笑いながら実の両親を殺す彼女に得体の知れない感情が溢れて仕方がなかった。

あれはもう頭のネジがどうのとか、狂っているだとか、そんな生易しい話では断じて無い。

そして自分への拷問が始まる直前、ライザーは悔やんだ。

何と愚かなことをしてしまったのだろう。あのときに一誠を陥れてなければ殺されずに済んだのに。そもそもこんな騒ぎにもならなかったのに。

ポロポロ涙を流すも全ては後の祭り。自業自得。ライザーの軽率さが滅亡を招いてしまったのだ。

「ほら、お兄様の出番ですわよ」

「あの芋虫共は三十分ぐらいミキサーに頭を突っ込ませただけで発狂したからなー。お前は記録更新してくれよ?」

——悪魔は、選択を間違えた。

こうしてフェニックス家は僅か一日足らずで滅ぼされ、一誠の復讐は僅かに果たされた。されど彼の戦いは未だ終わつた訳ではない。

兵藤一誠は次なる戦場——シトリー領に赴く。

life・72 戦いの降臨

シトリー領に集められた三大勢力連合軍。屋敷前の広大な敷地を埋め尽くさんばかりの大軍は理路整然と整列し、たった一人の敵を今か今かと待ち構える。

選りすぐりの屈強な戦士達を率いるは、何れも劣らぬ曲者揃い。

積み上げた連続無敗記録から“皇帝”^{エンペラー}と称された、レーティング・ゲームの覇者。

“神の雷光”を名の由来に持ち、遙か古の戦争時代から戦い続けてきた墮天使幹部。

四大熾天使の一角にして、数々の戦場を潜り抜けてきた女天使。

そして全軍を指揮するのは三大勢力を率いる三人の男。

魔王、墮天使総督、熾天使。

各々もまた古き神話の時代を駆け抜けてきた猛者であり、未だ見せぬ全力は神々にも届くと言う。

「彼は果たして来るのでしょうか。この軍勢を察知すれば、普通ならば交戦を避けるでしょう?」

「いんや、奴さんは絶対に現れる筈だ。いや、寧ろ現れなければならねえ」

「パフォーマンスは続けることに意味があるんだよ。だから仮に完全包囲されたとしても、兵藤一誠は必ずやって来る」

その規模を見た者は、かつての戦争を思い浮かべ、また古の戦いを始めるのかと嘆いた。何故なら三大勢力戦争から数千数万の年月が流れた現在、これ程までの軍勢が用意されたのは今日が初めてなのだから。

故に他神話の神々は、戦争に干渉しない、との緊急声明を発表し、固唾を呑んで行方を見守っている。領民達は他領への避難指示に従い、あちらこちらに散らばった。

これから始まる戦いは全世界を巻き込んで、最早本人達の意味に係無く、戦争の領域にまで突入していた。或いは参戦する当人も自覚しているのかもしれない。

たかが元人間の“はぐれ悪魔”、それも一人の少年を相手取るにはあまりにも桁違いな戦力は、もう戦争と呼称する他はないのだと。

「……つたく、前代未聞だぜ。何が嬉しくて赤龍帝狩りをもう一度せにやならんのだ」

「嘆いても今更どうしようもないね。こうなったら総力を挙げて討ち取るしかないから」

「ですが、気掛かりな点が一つ。“無限の龍神”がどう動くかです。彼女に攻められれば数十万の大軍を集めたところで容易に潰されてしまう」

軍の士気は異様に高く、怒号は空を染め上げる狼煙の如く。まるで尚も衰えぬ威勢を世界中に見せ付けるように彼等は己を鼓舞した。それ程までに彼等は“赤龍帝”の恐ろしさを知っている。ドラゴンたる者の真髓を覚えている。

咆哮は山を砕き、尻尾は地を裂き、翼は一度の羽ばたきで遙か上空にも舞い上がる。戯れで世界をも滅ぼしてしまえるような怪物。

それこそがドラゴン。

それこそが“赤い龍の帝王”。

「オーフィスは出してこねーだろ。もし助力を乞うならとつくに頼んでる。そうしないのは訳有りか、もしくは奴さんにとつての誇りが^{プライド}そうさせるのか」

「……解せませんね。使えるかもしれない戦力を捨て置くなど」

「僕達にとっては理解できないし、そもそも理解されたくもないだろうね。さて、どうやら開戦の狼煙は上がったみたいだ。フェニックス家が壊滅したとの報告が来たよ」

この戦争はあらゆる意味で前代未聞だ、と後世の歴史家かぶれ達は語る。

赤龍帝との二度目の戦争であり、“駒王協定”を結んで平和となった筈の時代における戦争であり、皮肉にも三大勢力の結束が強まった戦争であり、世界と時代の行く末を決める戦争であり、

「ほう、随分と歓迎してくれるねえ。大人気で俺は嬉しいよ」

たった一人のドラゴンを相手にした戦争でもあるのだから。

「やつはろー、三大勢力の諸君。盛大な歓迎を感謝するよ」

「よくも一人で顔を出せたもんだ。お前さん、この状況が分かってんのか？ —— 三大勢力連合軍、合計二十万の兵に囲まれてんだぞ？」

「足りねえよ、ボケ」

悪魔、墮天使、天使。三大勢力の軍勢の真ん中に現れた一誠は赤い鎧を着込んでおり、酷く不気味だった。

これまでも大胆な策を幾つも成功させてきた彼だが今回は流石に無謀が過ぎる。連合軍二十万の群れに飛び込むなど正気の沙汰では無い。

事実として、軍には多少の同様が見られた。一誠には以前にも長距離魔力攻撃をやつてのけた前科がある。

果たして今回はどのような奇策を用意してきたのか。アリーナの光景を思い出して身構える。

そして、ファルビウムやアザゼルの額にも僅かながら冷や汗が流れる。彼らはいくまでもオーフィスは連れてくるだけで、実際の襲撃には参加させないと踏んでいた。それだけにたった一人で現れた一誠に驚愕を隠せなかった。

「……言ってくれるじゃねえか、小僧が」

「餓鬼だって成長するものだよ。アザゼル総督殿」

「あまり嘗めるなよ？」

軍の先頭に立つアザゼルと空に浮かんで軍を見下ろす一誠。二人の会話、読み合い、その一挙手一投足に全世界が注目する。テレビ中継を介して見守る悪魔達も、監視網を駆使して状況を見極めんとする諸神話も、決して見逃すまいと彼らの次の言葉を待った。

既に二人の脳内では幾百幾千もの舌先の攻防が始まっている筈だ。これは未だ前哨戦にもならない幕上げ前の余興に過ぎないのだが、だからと言って引き下がる訳にもいかない。

だからこそアザゼルと一誠は黙って睨み合い、神々は続くだろう言葉を必死に掴み取ろうとしているのだ。

「自慢の嫁さんはどうした？ 遂に愛想を尽かされたか？」

「まさか。軍勢の相手は俺一人で充分だつてことさ」

「よく言うぜ」

オーフィスの居場所を暗に問い質されるも、のらりくらりとはいぐらかす。

この場においては関係の無い質問であるし、別に居場所を明かす義理も意味も見当たらない。尤も、アザゼル自身も素直に答えてくれるとは考えておらず矛を下げる。

だが、此処に来て収穫があつた、と当人や観戦する神々は即座に理解した。どうやら彼女は何らかの理由で別行動をしているらしい。そうでなければ毎度のように侍らせているか、先程ハッキリと答えている。

オーフィスの不在。劣勢を覚悟していた三大勢力にとってはようやくと見えた一筋の光に等しかった。

今まではオーフィスが常に近くに居たせいで手出しができなかったのだ。それが今回に限っては別行動だと言う。もう誰が見ても確かな勝機である事は疑いようが無い。

「……質問だ。何故、オーフィスを置いてきた？ アレは君の生命線だろう？」

唐突なファルビウムの問いは、まさしく会話を聴いていた全員の代弁であつた。失踪してから最初に公に姿を見せた駒王会談襲撃から二人は行動を共にしており、以降の作戦でも必ず同伴させていた。それは完全無欠のボディガードであり、作戦実行にあたって必要不可欠な筈なのだ。

だからこそ、今日に限って彼女を置いてきた理由が分からないのだ。

戦場で敵の目的が不明なこと程に恐ろしい物はない。鉄火場を潜り抜けてきた魔王とあつて、その辺りの判断は早かつた。

対して一誠は露骨に顔を歪めている。さりとしてファルビウムの指摘に苛立ったとか核心を突かれたという理由ではなく、オーフィスを単なる盾役扱いにした彼にどうしようもない怒りを自覚したのだ。

「……答える必要は無い」

「だろうね。訊いてみただけだよ」

「やっぱり悪魔は嫌いだ。それも、殺したくなるレベルに」

「そりゃどーも。”SSS級はぐれ悪魔”の兵藤一誠くん？」

瞬間、魔力を全身から迸らせて対峙する二人。

龍帝と魔王。高質量の魔力は、本人達を包む大渦の柱となり紫天をも真つ二つに穿つ。それは空気中にプラズマを発生させるまでに放たれ、正面衝突の余波は不可視の衝撃と化してシトリー領全域を駆け巡った。

集結した連合の猛者は瞬時にガードしていくも、襲い来る衝撃波に加えて高密度の魔力までは堪えきれなかったようで何名かが意識を落とした。難なく持ち堪えて見せた大多数も額には汗が浮かんでいる。

今の一瞬の唾競り合い。一誠の放った魔力は最上級悪魔クラスを越えて魔王と同等、或いはそれ以上の規模だった。しかも涼しい顔でファルビウムの牽制を受け流した本人は、息切れしていなければ顔色すらも変えていない。つまり本気を見せていなかった。

これまで兵藤一誠を情報でしか知らなかった者、特に天使や墮天使の軍勢は目の前で繰り広げられた衝突に、改めて彼の危険度を感じ取った。

「やるねえ。軽く流されるとは思わなかったよ」

「吐くならマシな嘘を吐け。適当な様子見をぶつけた癖によ」

「バレてたか。うん、それじゃあ今度は……」

光の槍、魔力。合図によって一斉に各々の武器を整える軍勢。その全員が最上級悪魔も凌ぐ猛者というのに、一誠は落ち着いていた。ただ静かに倍加の音声を連続させていく。

「——全力といこうか」

「かかってこいよ、三大勢力連合」

冥界を襲撃する兵藤一誠。

迎え撃つは三大勢力連合軍、その数凡そ二十万。

戦争の火蓋が、切って落とされた。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!!!』

「死に晒せ、雑魚共がああああああ!!!!」

一誠は舞う。悪意が飛び交う戦場の真ん中で、“赤い龍”は戦い続ける。

襲い来る天使あればその者の胴体に大穴を穿つ勢いで殴り飛ばし、遠巻きにして仕留めんとする堕天使あれば魔力砲撃で撃ち落とし、悪魔は問答無用で消し炭にした。

彼は全世界に向けて叫んだ。俺の邪魔をするな、と有らん限りの声を振り絞って宣言した。敢えて古の二天龍の台詞をそのまま流用したのは彼らの絆か、共有する憎悪か。

ただの拳の一撃で地を崩し、百の天使が吞まれた。放たれた魔力が空を裂き、千の堕天使が墜とされた。

されど未だ足りないとはかりに暴れ狂う一誠は、まるで本物のドラゴンのようだ。

「……クソツタレ、なんてデタラメな野郎だ」

アザゼルは思わず舌打ちをする。彼は最終防衛ラインの指揮を行っており、一誠の戦っている前線には参加していない。しかし最前線と後衛は距離が離されているにも関わらず、激しい轟音のみならず極大の魔力弾までが時折降ってくるのだ。

恐らくは流れ弾に過ぎない、一誠からすれば牽制の攻撃は着弾と同時に爆発を起こし、結果として陣形を滅茶苦茶に壊されてしまった。いや、或いは全ての守備陣形を狙っているのかもしれない。あくまで本命は最前線だが、あわよくば後衛を崩してしまおうと考えているのだろう。本当なら成立しない不可能な作戦だが、“赤龍帝”の能力ならばそれも可能にしてしまえる。

心底厄介そうに顔を歪めるアザゼル。対して同じように戦場を眺めるファルビウムは余裕を崩さない。

「策がありそうだな」

「当たり前だよ。どうして奴が軍勢との交戦を決めたのか、考えてみなよ。結局は自分のパフォーマンズがより派手になるからだ」

一誠の手口は、他ならぬ悪魔が一番良く知っている。四作戦が彼の十八番であることも、この戦争が茶番であることも、彼らとはとくに気が付いていた。それでも一誠の茶番に乗るしか無かつたのはその状況になるまで追い詰められた首脳陣の不手際だろう。

しかし、今までは確かに誘導され、結果的に多大な被害を出してきたが、今回は違う。

「敵は兵藤一誠のみ。つまり主犯格の彼さえ捕らえてしまえば、後はどうとでもなる。そう思い込ませるところこそが彼の目的なんだろうね」

一誠が少し予告をしただけで、三大勢力は警戒する。貴族領を襲つて回れば信憑性は増していき、貴族や民衆からの圧力も強くなる。対応を迫られた上層部はシトリー領の襲撃予告に飛び付いた。

しかもご丁寧に襲撃時間だけは隠しておけば、それだけ集まった精銳も注目も釘付けにできるのだ。本当の目的を果たすに充分過ぎる程の時間が稼げてしまう。

「わざわざ幾つも襲撃したのは、シトリー領襲撃に説得力を持たせて僕達が集める戦力を上乘せする為だろうね。それとも一つの目的もあるかもしれない」

「そこまで分かってくれば対応も可能って訳か。それで、もう一つの目的ってのは？」

「うん、これはあくまでも僕が調べた結果なんだけど——内通者の存在を隠す為だよ」

フアルビウムは、以前よりフェニックス家が狙われている事を察知していた。そして破滅が近い彼らを徹底的に利用して一誠討伐作戦に繋げようと考えたのも、魔王ならば当然の流れである。

彼は以前から内通者の存在を疑っていた。でなければ一誠の練った策があんなにも上手く成功する筈がない。恐らくは、上層部に容易く近付ける立場の協力者を悪魔勢力に作り、そこから内部情報を得ていたのだろうと踏んだ。

ともなれば後は炙り出してやれば良い。

ライザーが領地の巡回をしているという情報を疑わしい者達にわざと流す。それも時間帯とコースは全員バラバラ。

後はライザーが一誠に襲撃されれば、その時間や地点から内通者が割り出せるカラクリだ。

「……通用すんのかねえ。相手はあの兵藤一誠だぜ？」

「何もしないよりはマシだろ」

「ま、それもそうか。で、お前さんが目星を付けたのは誰だ？」

アザゼルの問いに、ファルビウムは淡々と答える。

「——デイハウザー・ベリアル」

デイハウザー・ベリアル。レーティング・ゲーム四大会を統べる序列一位の絶対王者にして、魔王にも匹敵する実力者の最上級悪魔、冥界でその名前を知らぬ者はない程の大悪魔である。

その名声と勇猛さはアザゼルも知っており、だからこそファルビウムの言葉を簡単には信じられずにいた。

果たして悪魔嫌いの一誠がデイハウザーを勧誘するだろうか。確かに戦力になるし、何より上層部とも繋がりを持つ彼ならば内部情報も容易に掴むことができる。

内通者として換算するなら最高の人材だ。故に多少の嫌悪を押し留めても欲しがる理由は分かる。

「だが、あの“皇帝”が簡単に冥界を裏切るのか？ 一誠の襲撃による遺族や難民を援助していたし、率先して自領への受け入れも行っていたじゃねーか」

「そうだよねえ、お陰でデイハウザーの株は天井知らず。逆に有効な政策を出せなかった僕達は非難的だ。普通は考えにくいよねえ」

しかし、ファルビウムは把握していた。彼が密かに冥界上層部に憎悪を募らせていることを。レーティング・ゲームの闇を知ってしまったが故に謀殺された従姉妹の復讐を虎視眈々と狙っていることを。

ならばこそ、デイハウザーは一誠の誘いに応じるかもしれない。疑惑を持つに至った最大の根拠である。

そう考えると一誠が襲撃行為を繰り返したのも、デイハウザーの名

声を高め、彼の立場を引き上げさせる為のマッチポンプだったと納得出来るのだ。無能な政府という比較対象がある現在なら容易に達成可能だ。

全てが陽動にして本命。

つくづく計算され尽くした戦術だと舌を巻くファルビウム。自分達はシトリー領に軍勢を敷き詰めることで先手を取ったつもりでいたが、それすらも予想通りだったのだから。

「挙げ句、途中で気付かれても戦争中にデイハウザーを捕縛される可能性は低い……つたく、サーゼクスは本当に馬鹿な真似をしてくれたもんだよ」

「あの年齢にしてこれ程の策略を練るとは恐ろしいもんだ。それに本人の強さも折り紙つき。後十年もすりや、神クラスにもなれる器だろう」

——悪魔は、選択を間違えた。

まさしくその通りだ。彼らは致命的で決定的な過ちを犯していた。ファルビウムは選択を間違えてしまった。

何故なら、彼の読みが合っていたのは半分だけだったからだ。

魔王は、デイハウザー・ベリアルだけを内通者として疑った。その仮説を前提にして一誠の策を看過しようとしていた。だが、もしも前提条件からして誤りであったのなら。

例えば、内通者が一人だけでなかった場合、ファルビウムの作戦は根本から覆される。

——l i f e . 7 3 内通者①——

時は少しだけ遡る。最上級悪魔にしてトップランカーのロイガン・ベルフェゴールは最前線の指揮を任され、兵藤一誠と激戦を繰り広げていた。

修羅場を潜り抜けてきた猛者である彼女すらも一誠の猛攻に押され、飛び交う魔力弾を避けるだけで精一杯でとても攻撃など出来るような戦況では無かった。

戦争開始から一時間が経過した頃だろう。前衛を切り崩して進んでいく一誠の後ろ姿を、ロイガンは黙って眺めていた。彼女自身は消

耗していないのだが味方は壊滅状態に陥っていて、追撃を行うだけの体力も魔力も、気力すらも残されていない。

それも当然の話だ。無惨に散っていく同胞を何千と見せられて誰が立ち向かえるものか。地面は血と死体だらけで、辛うじて生き残った者も心をへし折られ、最早立ち上がることもしなかった。

悲惨な現実には深い溜め息を吐くロイガン。そんな彼女に唐突に話しかける者があった。

「随分と手酷くやられたらしいな？　ロイガンよ」

前衛の左翼を担っていたビイディゼである。数百の手勢を引き連れて現れた彼は全くの無傷だった。部下もまた同様である。

幾らなんでも妙な話だ。あれ程の激戦を傷一つ無く生き残れる訳がない。ましてや部下達も揃ってだ。

ロイガンの表情が一変した。対して、余裕の笑みを浮かべるビイディゼ。

「……お前は無傷で切り抜けたとでも？」

「当然だ。あの程度の攻撃で倒れるものか」

「不可能だ」

ビイディゼの能力は異空間へ通じる穴を自由自在に操り、敵の攻撃を吸い込んでしまうといったもの。

確かに一対一での戦闘ならば無類の強さを発揮するが、馬鹿げた火力線と持久力を持つ一誠の前では無力に等しい。

つまり無傷で耐えられる筈が無いのだ。

「……裏切ったのか」

「賢い選択をしたと言ってくれたまえ」

その直後、暴虐が過ぎ去った筈の戦場で。新たな戦いが始まった。

一誠からのある命令をこなした後で、フリードは小高い丘に立ってシトリー領の方角を眺めていた。三大勢力軍が蝗の群れになって空を覆っている。

果たして彼らは誰と戦っているのだろうか。

あまりにも現在地との距離が離れすぎていて見えないが、フリードも、そして世界中のあらゆる勢力も、相手の正体を知っていた。

「……始まったな。ああ、始めちまったぞ」

計画通りとはいえ、あまりに無謀な作戦だ。事実、内容を知らされた当初、フリードは腰を抜かしたものだ。どうすれば、三大勢力の軍勢に飛び込むという発想に至るのやら。上司の考える事は理解できない、と溜め息を吐く。

それから、もう一つの理解できない点に視線を送った。フェニックス家への復讐を終えて戻ってきた一誠から預けられた少女——レイヴェル・フェニックスだ。

「……私はどうすれば良いのです？ フリード様と合流しろ、としか言われなかったのですわ」

「なんでお嬢様がおるん？」

「再就職したクチですの。実家は潰れましたので」

大体の事情は察した。恐らくは訳有りか、手駒に使えるからと拾ったのだろう。そうでなければ、レイヴェルと名乗った少女はとっくに家族もろとも殺されている筈だ。

しかし、幾ら手駒になるとはいえ、悪魔嫌いの一誠が簡単に仲間に取り入れるだろうか。そもそもレイヴェルは復讐対象であるフェニックス家の一員だ。

それを命を助けたばかりか、部下の預かりにするなど裏があると思えない。

「そうかい。取り敢えずは拠点に退く。俺の仕事は終わったんでな」

「……ふうん？ まあ、何でも仰って下さいまし。新入りですもの、何だっぴこなして見せますわ」

自信満々に胸を叩くレイヴェル。立派なドリルとメロンが揺れるが、フリードは特に大した反応を見せない。確かに美少女ではあるのだが、悪魔祓いたる彼にとつては悪魔の時点でアウトだ。

寧ろ少しでも粗相をやらかした瞬間に殺そうと企んでいる辺りは上司に似ている気がする。

尤も、これまで雑務を一手に引き受けていたフリードからすれば有難い話でもあった。

一誠をリーダーとして活動する赤龍帝派は、作戦の規模に反比例して所属人員は少ない。リーダーの一誠、食客扱いのオーフィス、雑用係のフリードの三人だけである。

故に個々の実力は兎も角、派閥として見るならば力不足が目立ってしまい、作戦実行にはどうしても旧魔王派やヴァーリなど他の面々に頼らざるを得なかった。

「ま、黙って見てな。今から拠点を案内するから」

「お気遣い感謝致しますわ。ところで、オーフィス様はどうなさるおつもりですか？」

「あー、俺も大将から何も言われてねーんだよ」

そう言つてオーフィスに視線を移す二人。フェニックス家襲撃から戻ってきた一誠に預けられて以降、彼女はお腹をさすつては首を傾げるばかりを繰り返していた。

最初は食べ過ぎで腹の調子を悪くしたのかとも思ったのだが、"無限の龍神"がそんなことで体調を崩しはしないだろう。

突拍子の無い発想だが、思い当たる節は一つだけある。というよりもオーフィスの仕草と最近のイチヤイチャ事情からそれしかないのだ。

「火種にしかありませんわね」

「子種だよ、バーロー」

「座布団を差し上げますの」

なんだかんだと言いつつも息ピッタリな漫才を披露するフリードとレイヴェルであった。

「……我、身体が変？」

『最前線のロイガン氏より緊急連絡です！ ビイディゼ・アバドンが手勢を率いて反乱を起こしました!!』

『ただいま交戦中ですが兵力差に圧され敗北は必至との模様!! 至急、応援を!!』

頭が真っ白になるとはこの事だろう。部下からの報告に、ファルビウムは全ての動作を停止させた。

何故なら、彼にとってデイハウザーの裏切りは想定内であっても、ビーディゼの反乱は全く予想の範疇を越えていたからだ。無論、彼の背後に一誠が居る事は明らかである。

アザゼルは、ようやくと自分達の過ちに気付く。

兵藤一誠は確かに貴族領を襲撃して回った。ファルビウムはフェニックス家襲撃のカモフラージュと読んでいた。だからこそ罠を張り、結果としてデイハウザーへの疑惑が浮上したのだから。

「……奴は襲撃を繰り返した。一週間に一度、貴族領を襲った。——アバドン領から、奴は襲撃を開始した!!」

兵藤一誠の襲撃予告。周期的に行われた凶行は、内通者であるデイハウザーの立場をより強固な物にする茶番であり、或いは本当の狙いだったフェニックス家から注目を逸らさせる為でもあった。

上層部や魔王、そしてリアスを追い詰める周到な策にして、一部始終を眺めているだろう神話群に自身を売り込むアピールだった。

ファルビウムの読みは全て的中していた。一つ残らず的を得ていた。

兵藤一誠の作戦の本質も見抜いていた。流石は魔王を名乗るだけはある。安くない被害を出しながらも対策を編み出して見せた。しかし、足りなかった。

「デイハウザーは必ずビーディゼの反乱を鎮圧する。恐らくは事前に兵藤一誠と打ち合わせをしている筈だ。今回の一連の計画は内部からの反乱を誘発する為で、デイハウザーの活躍でそれは失敗した——そういう筋書きなんだろうね……」

彼らは気付かなかったのだ。三大勢力連合軍の前に颯爽と現れた兵藤一誠の表情に。その台詞は単なる挑発目的ではなく、まんまと踊らされた首脳陣への嘲笑を意味していたことに。

もしも、彼がフルビウムの眩きを聞いていたならば、きっと薄っぺらい笑みを貼り付けて同じ言葉を放ったのだ。

——足りねえよ、ボケ。

果たして何が足りなかったのだろうか？ 赤龍帝と一戦を交える覚悟か、成長の兆しを見せない学習能力か、必死にかき集めた軍勢か？ それとも……内通者の人数だろうか？

——l i f e・75 内通者②——

ビィディゼが最初に兵藤一誠と接触したのは、アバドン領襲撃事件だった。予告に備えて配置した眷属や大量の私兵はあつけなく倒され、一誠は悠々とビィディゼの私室まで侵入してきた。

集めた者達は全員が上級悪魔クラスの腕利きであり、その質や量もあつて彼はすっかり慢心していた。

『——冥界とさよならしようか？』

それだけに、一誠が満面の笑みで歩み寄って来た際には酷く狼狽したものだ。護衛は全滅し、目の前にはアリーナ攻撃と若手悪魔殺害を平然とやってのけた危険人物が立っているのだから。死を覚悟したのも懸命に命乞いしたのも仕方無いだろう。

しかしながら、予想に反して兵藤一誠は取引を持ち掛けてきただけだった。即ち、配下として勧誘されたのである。

「そればかりじゃない。奴は戦後の地位と名誉を保証すると約束した。テロリストを撃退した英雄にしてやると誘った。私は遂にディハウザーを越えられるのだツ!!」

ビィディゼは嗤う。まるで可笑しくて堪らないといった風に口元を吊り上げて笑い続けた。その眼はただ自分の栄華しか映しておらず、ロイガンは呆れたように溜め息を吐くしか無かった。

あくまで彼の説明であり、実際にどのようなやり取りを交わしたかは定かでない。しかし、一誠の性格と手口を知っているならば容易に想像がつく。

「……愚か者め。口車に乗せられたな、ビイディゼ。断言しておくが、貴様は絶対に殺されるぞ。兵藤一誠は貴様を囚としか見ていない」

「何とでも吠えろ、ロイガン!! そう言うお前はこの場で無様に死ぬんだ!! 幾らお前でも、我が百の精鋭を相手取れるものか!!」

ロイガン・ベルフェゴールには理解できなかった。

何故、その程度の兵力で笑えるのか本気で分からない。何故、既に自分の野望が破綻していると気付けない。

ロイガン・ベルフェゴールは理解している。

兵藤一誠がビイディゼの器量を見抜いた上で勧誘して、死んでも構わない適当な陽動役を見繕っただけであると。

更に付け加えると、ビイディゼの用意した精鋭が実は一誠から与えられた借り物の兵力である事も、彼に悟られぬように手勢達が攻撃魔術を手元に生み出している事も、連中の操る術式が揃って旧魔王派に属した者のそれである点も察している。

そして、彼女は悟っている。

テロリストに加担した最上級悪魔という極上の敵を用意した理由も、兵藤一誠が描いているシナリオも、激変するであろう冥界の未来も。

ついでに自身の予言が当たっていることも。

「デイハウザー!? 何故、貴様が!! 有り得ない、予定と違う!! 兵藤

一誠は指示に合わせて反乱を起こせば必ず成功すると——」

「礼を言わせてもらう。計画は確かに成功したからな。そして貴様の役目はもう終わりだ」

踵を返して、ロイガンは歩み始める。背後からは何十もの発射音と断末魔が聞こえてくるが、特に気にした素振りも見せないまま、ただ彼女は魔王ファルビウムに報告を飛ばした。

「デイハウザー氏の協力もあり、鎮圧に無事成功しました。首謀者のビイディゼは討伐したものの、一味の捕縛には失敗。確たる証拠を持って一旦、本陣に帰還します」

「見るが良い、兵藤一誠よ！ 冥界に仇なすテロリストよ！！ 古の赤い龍を宿す者よ！！」

デイハウザーが一誠の前に進み出たとき、彼は三大勢力連合が織り成す防衛陣の半ばまで進撃していた。天使、墮天使、悪魔の軀を山と築き上げ、その頂点に立ち尽くす姿は神秘的な輝きをも感じさせた。

無敗の王者の叫びに、三大勢力の軍勢は立ち止まって何事かとデイハウザーを見つめる。対して、一誠もまた片手に掴んでいた有象無象の首を放り投げると、デイハウザーを睨んだ。

一時停止したのは彼らだけではない。映像を通じて戦争の行く末を見守っていた民衆、そして密かに監視していた各神話群の神々もデイハウザーの唐突な行動に驚愕していた。

「……無敗の称号を失いたいのか？ ベリアルよ。ならば挑むが良い。そして悪魔に産まれたことを悔やみながら死ね」

同時に、魔力の波動がシトリー領全域を襲う。何処までも黒い波はさながら餓えた蛇にもなって軍勢を丸呑みにしてしまった。無論、一誠にとって単なる余興であることは明らかで、集められた精鋭も辛うじて持ち堪えるだけの余力はあった。

だがそれはあくまでも一部の話。多くの兵達は先の交戦で既に満身創痍であった。そこに“赤龍帝”のオーラを浴びれば抗える筈もなく、戦死した兵に加えて更に大量の脱落者が出た。

ここで一誠は目の前の“皇帝”に感心した素振りを見せる。至近距離で波動を受けたデイハウザーは、確かに軽傷こそ負ったものの然程消耗した様子は無かったのだ。

流石はトップランカーだと言いたげに笑う一誠。それでも余裕の笑みを浮かべているのは己の実力を知っているからか、幾重の策を巡らせているからか。

「何とでも言え！ 貴様の策は既に見切っている！！ 貴様と内通し、政府への反乱を起こしたビイディゼは私とロイガンで討ち取った！！」

「……ッ！！」

二十万の兵力を動員しシトリー領に敷き詰めた。フェニックス家という犠牲を捧げてまで討伐を成し遂げんとした。魔王は敵の計画を察知した上で対抗策を編み出した。

されど兵藤一誠が余裕の笑みを失ったのは、これが最初だった。内心でどう思っていたかは、定かで無い。

——life. 76 影響——

「……随分とまあ、面白いように遊ばれちゃって。やっぱ今の悪魔は揃いも揃ってクソザコだな。俺のテコ入れも無駄にしちゃってさあ？」

戦争から三日が経過した。冥界並びに三大勢力は激変の兆しを迎えている。

中でも傷痕が大きかったのは悪魔勢力だった。何せ連合軍の兵力で最も割合を占めていたのだ。それだけに死傷者数も無視出来ない人数となっている。

上層部、特に総指揮を務めていたファルビウム立場は非情に不味い。以前の襲撃の復興作業を後回しにして無謀な討伐を決行したとバッシングを受けているのだ。

回復の目処が立たないサーゼクスとセラフォル。追い詰められたファルビウム。勢いを完全に失ってしまった魔王派だが、逆に立場を強めた者達も居る。

「ディハウザー、それにロイガン。ビィディゼの反乱を鎮圧し、結果として兵藤一誠を撤退にまで追い込んだ英雄ってな。自身をトップに添えた派閥まで立ち上げて、その支持率は四大魔王を上回る程だ」

両名共に英雄として華々しく凱旋し、その功績を持って新たに皇帝派として政界進出。世論と貴族連中の絶大な支援を背景に着実に発言権を強めつつあった。

もしくは戦後取材の場で、「必ずテロリストを討ち取り、冥界を復興させる」と演説したのが効果を発揮したのかもしれない。

兎に角、二人は次期魔王筆頭候補にまで名を連ねる名声を獲得したのだ。ファルビウムにとってこれ程の屈辱は他に無いだろう。何せ彼は全てを知っていながらどうする事も出来なかったのだから。

そして演説と言うならば兵藤一誠が去り際に告げた言葉も該当する。

——虐げられし者よ、理不尽を被りし者よ、悪魔であれと押し付けられてきた全ての者達よ！ 俺の下に集え!! 二天龍に続け!!

——武器を取れ！ 誇りと自由を取り戻せ!! 生きる意味を己に問え!!

——決起せよ、反逆せよ!! 今こそ俺達と力を合わせ、憎き悪魔共を打倒せよ!!

——戦え！ 戦え!! 戦えツツ!!

彼は転移していく直前に、冥界全土に向けて叫んだ。何れ”はぐれ悪魔”となるであろう悪魔社会の被害者に向けて高らかに叫んだ。赤い龍の帝王”は最後に起爆剤をばら蒔いて見せたのだ。

今は未だ表立って民衆は動いていない。大規模な反乱は影も形も見えていないように思える。

「……だが貴族様は別だわな。下手すりや眷属に寝首を搔かれるんだから。食事に毒でも盛られたらどうしようもないよなあ」

だが、奴隷として扱ってきた連中やオークションを主催してきた輩の心情は想像に難しくない。

特に上層部はコレクションと称して他種族をまるでペットや家畜として見てきた。眷属の中にも無理矢理に悪魔にされたり、明らかに悪魔に有利な契約で眷属となったり、拉致誘拐同然に連れて来られた被害者もある筈だ。

被害者は永遠に覚えている。自分の受けた屈辱を。

だからこそ、デイハウザー達は貴族達の支持を延ばしているのかもしれない。彼らは、「被害者とも向き合っていき、反乱を未然に阻止すべく努力する。悪魔同士で殺し合うような事態にはさせない」と演説で約束している。加えて反乱を鎮圧した実績もある。

ともなれば上層部や貴族連中は本当に反乱が勃発した場合はデイハウザーとロイガンが出向くだろうし、彼らに責任を押し付ければ良いと考えているのかもしれない。

「こうなったら止められねえよ。天界も墮天使も上層部は辞職寸前。

総入れ替えまで秒読み段階なんだ。悪魔に構ってる余裕なんざ無いだろうし、最悪の場合は和平条約も無効化だ」

残る二勢力は未だ公式に声明を発表していないが、悲惨な内情は容易に思い浮かぶ。

平和を焦った首脳陣は責任を取るべく退陣。代わって新しいトップが就任したとして、その者達が再び手を取り合えるとは限らない。

尚且つ、墮天使陣営はコカビエルの思想を受け継いだ勢力——過激派が台頭しつつある。これで戦争屋が新総督になった暁にはそれこそ和平どころか三大勢力戦争に一直線だ。

どの勢力が勝利しても三竦みは今度こそ立ち直れなくなり、彼らに恨みを持つ連中には格好の餌食となってしまう。

「うひゃひゃひゃひゃ！　ったく、本当に面白い存在だよ、イツセーきゅんは！　おじさんは久し振りにドキがムネムネしちゃまうぜ♪だからさあ……ちよっかいを出したくなるのも当然だよなあ？」

一誠の計画には全て前提条件にして絶対条件が存在する。それは、第三勢力の介入を考慮していない、という点だ。

彼の計画は、敵が三大勢力のみであると事前に想定してから練り込まれている。元々の目標が復讐であることを考慮するならば確かに効率的かつ確実な立案方式で、細部まで作り込んでいたからこそ実際に三大勢力を翻弄したのだ。

だが、縦からの強大な力には強くとも、横からの不意打ちには弱いのではないか？

想定外の事態に陥った場合、全作戦は一気に崩壊してしまうのではないか？

「イツセーきゅんは不死鳥狩りをやってのけたんだって？　じゃあ、俺も挑んでみるとしましょうか。伝説のドラゴン様を相手にさ」

霧に包まれた城の玉座で、銀髪の男——リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは愉快そうに嗤う。

「——さあ、ドラゴン狩りの時間だ」

Lucifers.

Ilife. 77 幽世の聖杯

上手く進めてるじゃないか、とヴァーリは一人、愉快そうに呟いた。手元に浮かべた文字の羅列——映像術式は、冥界の様子をリアルタイムで映し続けている。画面の中央には“赤龍帝の鎧”を纏った一誠が立っており、三大勢力の軍勢を相手に激戦を繰り広げていた。

とはいえ、両者の戦いは果たしてそれと呼称すべきか疑わしく、まるで赤子と大人のような差とその結果が画面にあつた。

画面上の一誠が、今また新手の悪魔の群れへと突っ込んだ。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!』

内に宿りしドライブが”倍加”を宣言する。

瞬間、暴風が吹き荒れた。

一誠は自身の身の丈をも上回る赫翼を大きく拡げ、上空へ飛翔した。連続する加速とそれに伴い生み出されたトップスピードを目視出来た者は誰もおらず、悪魔達は地上に取り残されたままだ。連中を天高くから見下ろしながら、一誠は両腕に魔力を集中させる。

熱風混じりの赤い波動が、悪魔のみならず、周辺に展開して一誠を取り囲んでいた天使や墮天使までも一息に呑み込んだ。

「莫大な質量だ」

ヴァーリは、これが攻撃の前兆であることを忘れて驚嘆を漏らした。

燃え落ちていく黒炭と悲鳴が彼の視界を埋め尽くす。実力者を集めたと三大勢力の首脳陣は豪語していたが、どうやらドラゴンの前には等しく虫けらに過ぎないらしい。

固唾を呑んで次の攻撃を見守ろうとする彼を見かねて、苦言が投げられた。

『ヴァーリ、魅入られ過ぎだ。もう少し今の状況を把握しろ』

長年苦楽を共にしてきたアルビオンの忠告に、しかしヴァーリは気にした様子もなく、画面から眼を離さない。

「そう言うがな、アルビオン」

ここで初めて顔を上げて、グルリと周囲を見渡す。

ヴァーリは現在、黒いスーツを纏った集団に包囲されている真っ最中だ。にも関わらず余裕綽々といった顔で一誠の蹂躪劇を観戦しているのは、一目見た瞬間に連中の力量を悟ったからだ。

偶然に鉢合わせてしまった彼らからは、たかが下級悪魔クラスの魔力しか感じ取られず、捨て駒扱いの尖兵であることは容易に理解出来た。根っからの戦闘狂いであるヴァーリが彼らを敵とすら見なさないのも当然の話だ。

『放置するのも面倒だろうが』

アルビオンは呆れたように言い切った。言葉の端々に疲労が漂っているのは、相棒の戦闘狂の側面を知り尽くしている為だろう。

「良いところだったのに……さっさと片付けるか」

苛立ちを隠そうともせずヴァーリは舌打ちして、それから連中を睨んだ。

——l i f e . 7 7 幽世の聖杯——

鬱蒼と木々の繁った、霧の濃い森だ。ルーマニアの奥深くに位置するこの森は古来より、吸血鬼達の国と人間界の境界線のな役割を果たしてきた。昼でも一筋の陽射しの存在すら許されないこの場所には、日本の神隠しに似た都市伝説が幾つも語られている。

ヴァーリが、一誠が三大勢力連合と衝突したタイミングを見計らって森に足を踏み入れたのには訳があつて、”セライロト・グラール幽世の聖杯”を宿した吸血鬼が現れた、との情報を掴んだからだ。

”幽世の聖杯”とは、生命の理を超越し得る程の能力を持つと称されている”神滅具”の一つだ。もし仲間に引き入れることが叶えば、”禍の団”の戦力強化にも繋がる。

曹操が情報入手し、一誠が提案した今回の作戦に名乗りを挙げたのは、意外にもヴァーリだった。

とはいえ、戦力拡大を目論んでの行動ではなく、彼を突き動かしたのは一重に”聖杯”所有者である吸血鬼の生い立ちを知ったのが理由だ。

所有者は吸血鬼の父と人間の母の間に産まれたハーフであり、その出自故に疎まれ、長らく幽閉されていたという。

断じて同情ではないと言い張りつつも、「俺が救う」と言ったヴァーリの決意は強く、結果的に彼の熱意に周囲が圧される形で、任務担当となったのだ。

尤も、あくまでもヴァーリにとっての最優先事項は強者との戦闘である。それだけに吸血鬼の一团に囲まれようと平然としていたのだが、当然ながら相手からすれば誇りを傷つけられたに等しく、種族的な性質もあつてか全員が怒りに身を震わせていた。

そしてようやくと戦意を見せた彼に、今すぐ飛び掛からんばかりの表情で其々が武器を構えたのだ。

「禁手を使わなくても良さそうだ」

欠伸をしながら、ヴァーリもまた白銀の翼を展開する。

「兵藤一誠の真似事と洒落ようじゃないか」

全員の視界からヴァーリの姿が消失したのは、その直後だ。

大きく脚に力を込め前方に跳躍し、そのまま地を這うようにして滑空する。特筆すべき点もない単なる遊技なのだが、吸血鬼達からすれば消えたようにしか思えず、慌てて辺りを探すしかなかった。

『その段階で底が知れる』

アルビオンの溜め息をBGMに聴きつつ、ヴァーリはますます跳躍と加速を繰り返す。

「何も期待しちやいない」

ヴァーリは右手に魔力をかき集めつつ、吐き捨てた。同時に今一度強く地面を蹴り飛ばし、宙に身を放り投げる。そして動けないままの吸血鬼達に向けて、魔力弾を雨にして乱射する。

砂煙が晴れた時には、その場に立っている者は誰一人として残されていない。それを確認するとヴァーリはゆっくりと降下して、降り立つ。

『全員を始末してどうする……情報が聞き出せんדר』

「どうせこれから嫌でも出てくるさ」

光翼を消すと、ヴァーリは不敵に歩き始めた。

ルーマニア。東ヨーロッパに位置する共和国であるその国の”裏側”は、広大な吸血鬼自治領域の殆ど全てを霧と森林が覆ってしまっており、酷く殺風景な国柄だ。

まるで訪れる者を拒むような灰色の景色、そしてそれらを見下ろす童話風の巨城も、或いはこの地を支配する吸血鬼の本質を如実に表しているともいえる。

『いつ見ても陰気な連中だ』

宿主の光翼越しに、アルビオンは嫌そうな内心を隠さずに呟く。誇りと力を信条とするドラゴンにとっては、連中のこういった面が堪えられないのだろう。

『さっさと目標を達成して……ついでに連中を滅ぼしてしまおうか？』

「馬鹿を言うな」

ヴァーリは、聞く耳持たぬとばかりに突っぱねた。

強敵との戦闘こそが本懐だ、と宣言する彼ではあるが、意外にも任された任務や目的自体は忠実に遂行していて、相棒や同僚の物騒な意見に釘を刺す事も珍しくない。

ましてや、今回の任務はヴァーリ自らが請け負ったのだ。

「俺達は一勢力を相手取るんだ。遊んでいる暇はない」

『そう言いながら、兵藤一誠の襲撃映像に夢中になっていたのは誰だ？』

アルビオンは呆れた声音で切り返した。確かに吸血鬼連中に囲まれて尚も動こうとしなかったのは、今しがた説教して見せたヴァーリの方である。

吸血鬼領域に侵入した。それだけでも連中の上層部には察知・警戒されたかもしれないのに、あまつさえ敵陣で呑気に動画を眺め続けているのだ。

彼の悪癖が成した失敗だろう。

「すまない、俺も悪かった」

『……互いの不備、という訳で手打ちにした方が良さそうだな』
そうしよう、と両者が和解したところで、ヴァーリは周囲をグルリと見渡した。

吸血鬼と交戦した地点から離れてはみたものの、やはり生い茂った木々が前後左右を覆い尽くしてしまっている。侵入したポイントから計算して大まかな現在地は把握出来ているが、街への方角はどうやら解りそうにない。

ここにきて、ヴァーリは苦虫を何匹も噛み潰した。
罠に嵌められているのだ。

二人は言い争いながらもここまで何とか歩いてきたのだが、その距離は決して短くない筈である。上級悪魔の脚力と体力ともなれば尚更にだ。にも関わらず周囲の景色は何ら変化していない。

結界術式か、霧の幻覚作用か、はたまた森そのものが意思を持って阻んでいるのか。

「……やはり侵入者には容赦ないか」
ある筈がないだろうに。

アルビオンの喉元まで出かけた嘆息は、直前に感知した一つの魔力にかき消された。

『……ヴァーリ』
「ああ、分かっている。吸血鬼だ」

手には魔力を、背に光翼を従えて、ヴァーリは気配を消す。木々に隠れていてハッキリと見えないが、視線の先には確かに人影が一つ捉えられていた。大樹の根の部分に腰を落ち着かせている。幸いにも此方に背を向けているお陰で気付いた様子はみえない。

これで敢えて知らない素振りをしていたとか、吸血鬼達の罠だったら。

一瞬だけ脳裏に過ったが、ヴァーリの横顔から獰猛な笑みが消えることはない。

寧ろそれこそ、願ったり叶ったり、なのだから。

だが、気になる点が完全にはない訳でもなかった。

察知した魔力の波動と肉眼による観察で悟ったのだが、どうやらこ

の先に居るだろう人物は酷く衰弱しているらしかった。それが証拠に感じ取った魔力は微弱だ。

少なくともこのまま放っておいても勝手に死ぬであろうことは、彼らも直ぐに理解出来た。

珍しく狼狽えながら、アルビオンが言う。

『不味いぞ、ヴァーリ』

尤も、あくまで案内人になりえる吸血鬼に死なれるのが不味いのであって、哀れに思つての発言ではないのだが。

そして相棒に急かされてではあるものの、ヴァーリもまた細心の注意を払いながらその人物に少しずつ歩み寄つた。そうして近付くにつれて徐々に露になる美しい姿に、彼は思わず息を呑んだ。

吸血鬼は、女性だったのだ。

「そこに……誰かいらつしやるのですか？」

ここで漸くヴァーリの気配に気付いたのか、女性は振り向いて恐る恐る訊ねた。

金髪を腰まで延ばした、まだ若い少女だ。中でも特徴的な点が幾つかあつて、先ず目につくのは病的なまでに白い肌と身に纏う衣服だろう。彼が全滅させた連中よりも更に真っ白な肌は、少女が吸血鬼である紛れもない証拠である。

加えて純血・名門・王族といった風に高位の吸血鬼に名を連ねる程に彼等の肌は白色に近くなる、という種族的な特徴が吸血鬼には存在する。

その意味では、こうして目の前に座る少女は余程の上位クラスの吸血鬼である、ヴァーリは瞬時に理解した。

しかし生まれ持った筈の血筋に抗うかのように、衣服は酷くみずぼらしく、一枚の大きな布を無理矢理縫い付けて仕立てたようにも思える。

ここでアルビオンは、吸血鬼のもう一つの種族的な特徴を思い出した。

吸血鬼は絶対的な——悪魔よりも更に——純血主義思想の種族であり、またそれに倣つた王政・貴族社会を形成している。

例え実力や才能があろうとも純血以外の吸血鬼はまともな生活すら許されず、迫害されているのだと。そう考えてしまえば、彼女の衣服の理由のみならず、送ってきた半生までも手に取るように解つてしまふのだ。

「お前、眼は——」

そして否が応でも一番目についてしまふ、最も特徴的な部分についても。

「……旅の方ですか？ 心配して下さつてありがとうございます。ですが、仕方無いのです。私は出来損ないですから」

そう苦笑する少女、ヴァレリー・ツエペシユの顔、瞳があつただろう箇所には赤くおぞましい火傷跡が広がっていた。

ハーフであるが故に。

—— l i f e . 7 8 ヴアレリー・ツエペシユ ——

①

何故、俺達ハイルは否定されなければならない？

ヴァーリは物心ついてからずっと、そんなことばかりを考えて生きてきた。というよりも、ヴァーリ・ルシファーたる少年の記憶はまさしくそこから始まる。

ルシファー。冥界を統べる四大魔王の一角にして、一説には神に反旗を翻した墮天使でもある。

種族的にどちらが正しいのかは問題ではない。それを追及するならばリアルやベルゼブも墮天使説があるし、逆に墮天使勢力を率いるアザゼルも悪魔と同一視される場合がある。

最も肝心な部分——彼の最初にして最大の不運は、魔王の家柄に人間との混血児ハイブラッドが生まれ落ちてしまったことだろう。

実力主義とは名ばかりで、悪魔社会の根幹部分は血筋であり、由緒正しい純血種であるかどうかが重視される。無論、実力があるに越したことは無いのだが、結局は家柄や血筋といった、本人とは何ら関係の無い部分で見定めようとする風潮が悪魔は未だ根強い。

ヴァーリの父親や祖父がまさに典型的な貴族・純血思想の持ち主なのだから、彼の人生ハイラはお察しだろう。

それに加えて、ヴァーリは伝承にある白い龍まで宿していたのだから余計に大騒ぎとなった。忌み子として虐待され続ける程度には悲惨だ。

隙を見つけて脱走して、早十数年が経過した今現在。自身を筆頭としたテロリストチームを率いるようになった今でさえ、その過去は拭いきれていない。

「……本当に、どうして俺達がこんな目にあうんだろうな」

一頻り話し終えてから、ヴァーリは隣に座るヴァレリーに視線を移した。少し動かせば容易に触れられる距離だというのに、二人の視線は絶対に交差しない。

ヴァレリーの瞳は既に焼かれてしまっており、視覚を失っているからだ。その代わりに、顔には魔力でつけられたと思われる赤黒い火傷痕が広がっている。

それが果たして誰に、何の理由があってつけられたかは薄々ながら……ヴァーリには理解できる。

彼らは同じ存在だ。

「……もう慣れましたよ。痛いのは最初だけで、私はもう慣れてしまっただけです」

「俺は慣れるなんて嫌だった。だから俺は抗おうと力を求めた」

ゆつくりと彼は彼女の金髪をすくい上げる。その美しさに反して手入れがされた形跡は見当たらず、完全にすくい上げる前に指先から髪が零れ落ちていく。

心臓を鷲掴みにされる感覚に陥った。彼のズボンに金色の髪の毛が散らばったのだから。

『この娘……もう先は』

アルビオンが早口気味に捲し立てようとするのを、ヴァーリは制した。分かりきったことを今更言わずとも良いのだ。

「頼むから黙っていてくれ」

一際強い口調ではね除けてから、吸血鬼がするようにしてヴァレリーの首筋に顔を近付けると、今度は鼻先を肌に触れさせた。動揺する少女の声が漏れるもこれは無視だ。元より聞くような余裕なんてとうに失っている。

意外にも、ヴァレリーはそれらしい抵抗を見せなかった。彼を信用してくれているのか、はたまた長年の躰の賜物かは知り得ないが、最初こそ驚いたものの後は身動き一つせずされるがままで。

ゾクリと一瞬だけ身震いした。

加護欲がもたげたのと、その身体から微かに漂う死臭を感じ取ったからだ。

「流石に……恥ずかしいです。その、言いにくいですけど、もう何年も幽閉されていて、まともに身体を洗ったことが無いものですから。ええと……」

直後、ヴァレリーが手をもじもじさせながら言ってきた。

「匂いを気にしているのなら心配するな。俺は気にしていない」

「ですが、ヴァーリ様にはこんな気味悪い私は相応しくないかと……
何時も亡霊に囲まれているような混血女なんて」

「それは……違うな。俺と君だからこそ」

咄嗟に否定するも彼女は頷くことはしない。黙って彼の頬にそつと手を当てると、重なるうとしていた二人の距離を引き離す。顔に触れたままの手は傷だらけで痩せ細り、それがヴァレリーという少女の半生をそのまま伝えていく。

恐らくは迫害を受けて育ってきたのだろう。家族から周囲から、或いは国家そのものかもしれない。

故にヴァーリはある種の共感シンパシーを覚えているのだ。

「ヴァレリー」

名前を告げると、彼女は肩を震わせて手を引っ込めた。その一挙手一投足の背後には、幼い頃の自身の幻影が垣間見える。

ヴァーリはそつと肩を抱き寄せる。驚く声もやはり無視だ。残念ながら今の俺には余裕がない。

「俺と一緒に来ないか？ いいや、一緒に来てくれ」

驚く程にすんなりと出てきた言葉に、ヴァレリーは口をポカンと開けて、顔だけを彼に向ける。もし瞳があるなら同じく驚愕に見開かれていただろう。何せ二人は出会ったばかりで互いのことすら知らないのである。

ただし驚いているのはヴァーリも一緒に、言ってから口元を抑える。幾らなんでも舞い上がり過ぎではなからうか。

それが証拠に、アルビオンの呼び掛ける声音は酷く冷たいものだった。

『頭を冷やせ、ヴァーリ。吸血鬼の小娘に利用されるのが貴様の本懐か？』

「アルビオン……俺は黙るようには言っただろう。少なくともヴァレリーの件については口出しするな。俺には俺の策がある」

『傷の舐め合いに現を抜かし、任務を放棄するのが貴様の策略だと？』

聞いて呆れるな……かつての牙を捨てたのか!! 小娘に絆されて復讐心すら放棄したかツ!!」

「黙れ、アルビオン! 俺は捨てていない、あの男を忘れたことなど一度もない!! それに彼女は関係ないだろう!?!」

激昂し、思わず声を荒げるヴァーリ。長年連れ添った相棒だからといえ、言つて良いことと悪いことがある。しかし、追及は止まらない。『お前の過去は知っている。同情の言葉が欲しいならくれてやるし、小娘に惹かれるのも理解してやろう。だが……それに甘んじて復讐すらも捨てるのは認めん。ベクトルこそ違えど、俺達の目的は同じであることを忘れるな』

「やけに饒舌だな」

一方的な物言いについて溢してしまつたが、対するアルビオンは短く、『赤龍帝は目的を果たしつつある』と答えるのみで、後は喋ろうとしなかつた。

しかし、それだけで彼にはアルビオンの内心がなんとなく掴めた気がした。

赤龍帝——現在では”SSS級はぐれ悪魔”である兵藤一誠の代名詞。そして映像で見たように今この瞬間、たった一人で、三大勢力の率いる軍と戦争を行っている者を指す。シトリー領に集結した総勢二十万の連合軍の中に単騎で飛び込むなど、正気の沙汰ではない。

そう、彼は正気を失っている。両親という最後の枷をも奪われた兵藤一誠は既に頭のネジは吹き飛んでいて、ただ復讐の為だけに動く殺戮者である。^{ジェノサイダー}

それが証拠に、以前まで初心な面も多々あつたオーフィスとの仲も異常なスピードで深まり、今では四六時中、場所すら弁えずに彼女と愛を交わしているという。

実際に見たことのあるヴァーリから言わせれば、愛ではなく依存の類だろう。

人格崩壊を防ごうとする生存本能が無意識に、己のストッパーを求めた結果に違いない。だが、オーフィスは彼を止められない。だからこそ、兵藤一誠は復讐の道突き進んでいるのだ。

ん！ うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ♪」

「……まさかお前がこんなところに潜伏しているとは思わなかった。そして最初に訊ねておこう。殺される覚悟はあるんだろうな？」

空を埋め尽くす吸血鬼の軍勢、そして連中を率いるルシファアの血族の男。

圧倒的に不利な戦況でも彼は吠えるしかなかった。力のない頃と同じように。

「——リゼヴィム・リヴァン・ルシファアーツ!!」

「うひゃひゃひゃひゃ♪ たまには弱虫の孫とお遊戯してやるのも一興かなー！ 戦争の予行演習にさあ!!」

リゼヴィムの嘲笑が——絶望的な戦いの幕開けとなった。

——l i f e . 7 9 リゼヴィム・リヴァン・ルシファア①——

②

吸血鬼の軍勢はヴァーリにとって眼中になく、言ってしまうほどでもない存在だった。森の入口で襲撃してきた連中と同じく、所詮は捨て駒の集まりなのだろうと高を括ってさえた。

それが思い上がりであることは、戦闘開始から直ぐに判明する。

「うひゃひゃひゃひゃ♪ なーんだよ、ヴァーリちゃん。立派なのは威勢と家柄だけってかよ!! お祖父ちゃんってば、そんな弱虫に育てた覚えはありませんよー?」

「黙れ、黙れ黙れ黙れッ! リゼヴィムツツ!! この程度の雑魚など!!」

「その雑魚にタコ殴りにされてる分際でよく吠えるよ。それとも……あれか? そうやって泣いてたら一誠ちゃんが現れるって作戦かなー? 恐いお祖父ちゃんに虐められたのゝ助けてゝ、なんて泣きつくか!? うひゃひゃひゃ♪」

「ッ……! お前は、どこまで俺を馬鹿にすればアアアアアッ!!」

途端に激しい憤怒に襲われるも、今の彼には四方八方から襲いくる軍勢に抗うだけの力がないのもまた事実。先の連中は本当に尖兵以下の存在なのであって、こうして彼を遠巻きにして囲っている部隊は格が違った。

先ず、根本的な練度が高い。

吸血鬼勢力というのは、その性質から他勢力と一定の距離を置いており、謂わば鎖国にも近い状態が長く続いている。その為に国防や治安維持の軍隊を持っていたとして、連中には実戦経験が皆無で、容易く蹴散らせるだろうとヴァーリは踏んでいた。

しかし、実際は全くの逆である。

凡そ数百程の軍勢は隊長格と思われる男の指示一つで変幻自在に陣形を変え、ヴァーリの動きに逐一合わせて、リゼヴィムの前に行かせまいと阻むのである。

例えば、ヴァーリが飛行の意図を見せればドーム状に広がって遮断し、魔力を放てば即座に霧散しまた元のドームを形成する。そこに功を焦る馬鹿は一人もない。

彼は焦燥する。化物染みた耐久力や攻撃力もそうだが、人海戦術はヴァーリの弱点を的確に突いているからだ。

「触れた敵の力を半減して……だったよねー、その白トカゲの能力つてさ。確かに強力だけど、それって一騎討ち専用みたいなものだよねえ？ 触れられる前に大勢でボコっちゃえば済む話だよね！

俺つてば天才!! あ、間違えた”天災”!! なんつって、うひゃひゃひゃひゃ♪」

爆発したように嘲笑うリゼヴィム。

「殺してやるッ！ 絶対に、殺してやるーッ!!」

もう戦いどころの話ではないだろう。半狂乱になりながらも叫ぶ彼は、しかしこの場から動くことが出来ない。

何故なら、彼が少しでも動くような素振りを見せると、吸血鬼の軍勢は隠れているヴァレリーに攻撃を放とうとするからだ。仮に無理にでも突破しようものなら、その瞬間に彼女は殺害されてしまうだろう。

故に——抵抗など叶う筈もなく、ただ魔力弾の集中砲火を受け入れるしか道はない。

『貴様は何故、吸血鬼の小娘を守ろうとする!! リゼヴィムへの復讐を誓ったのだろう!? どうして貴様は……こんなことなら、あの赤龍帝の小僧に着くべきだったな!!』

「俺は……違う！ 俺はヴァーリだッ!! 白龍皇のヴァーリ・ルシファーなんだ!! 否定するな、俺を無視するな！ 兵藤一誠と比べるなアアアア!!」

「おいおい、発狂するのは良いけどよお！ お祖父ちゃんを無視するなつての!! 寂しいなあ!？」

リゼヴィムは軍勢を掻き分けてヴァーリに急接近すると、その顔面を驚掴みにする。

それは致命的な一撃だった。

途端に、全身から力が抜けていく感覚に陥るヴァーリ。そしてほぼ同時に奴が何をしたのか、目に見える形で現れた。

最初に崩れたのは電脳的に発光する白翼で、次いでヒビの波が波及していく形で纏っていた鎧が崩壊していく。

「——その鎧をぶち殺す！ ……つてか？」

言うが早いのか、視界がグルリと一回転すると、彼の身体は地面に叩き付けられた。土砂に咳き込みながら立ち上がるもやはり鎧は出現しない。

「これこそが”超越者”たるリゼヴィム・リヴァン・ルシファーの有する異能力——”神器無効化”である。
セイクリッド・ギア・キャンセラ

”神器”のあらゆる機能を無効とするその異能力は名の通り、”神器”所有者に対して無類の効果を発揮する。

つまり、ヴァーリとの相性は最悪だった。

愕然とする彼に歩み寄って、奴は溜め息を吐く。

「うわっ、俺の孫が弱すぎイ！ そんなんじやー誠きゆんの足下にも及ばないゾ？」

そう笑って、更に腹に一撃を入れる。鎧を展開できない生身のヴァーリはそれだけで倒れ伏した。再び、リゼヴィムはわざとらしく呆れて見せる。

「あのさー、もうちよつと成長しようぜ？ 実家からも墮天使組織からも逃げ回ってる癖に強くなれる訳ないじゃん。あれもこれも嫌、とか我が儘ばっかじゃ…世界にもお祖父ちゃんにも通用しないってばよ？ そんなクソ雑魚じや誰一人として守れないっちゃー」

「違う…俺は逃げてなんか…」

そう叫ぼうとするも、ヴァーリの視界が徐々に暗くなっていく。

「ま、心優しいお祖父ちゃんは最期のチャンスを手上げるよ。お姫様を助けたきやー吸血鬼の城に乗り込んで来いよ。何ならお仲間泣きついても構わんぜ？ うひやひやひやひや♪」

そう言うお奴の掌に魔力が形成されていき、そしてヴァーリの意識はそこで完全に閉ざされたのだった。

「お前達は前座だ！ ……違うな。俺はかーなり強い！ ……これもしつくり来ないなあ。うーん、どこかに格好良い決め台詞はないもんかねー」

王座。城の一番奥に誂えられた部屋に本来の主はおらず、戦闘から帰還したりゼヴィムが我が物顔で居座っていた。王座という割に飾り付けのない質素——陰気で薄暗いその部屋は今や彼が持ち込んだゲームや漫画の置き場とも化している。

リゼヴィムは落ち着かない様子で部屋を歩き回って、時折何事かを呟いては頭を振って否定する、そんなことを繰り返していた。

見た目は爺で中身は幼稚園児。

リゼヴィムは自身をそう分析する。それも子供らしく無邪気で残酷な性格をした、とびきりに危険な思想の持ち主なのだ。

「……地獄を楽しみな！ これも俺に合わねー。なあ、ユークリッドくんはどー思う？ 俺的には、近くにいたお前が悪い！ とか格好良いと思うんだけど」

「……先程から何を考えていらつしやるかと思えば。少しはお孫さんを気にしてみれば宜しいのでは？ あの少年が城に乗り込んできたと報告がありましたよ。それもチームのメンバーを連れて」

側近格の男が進言するも、大して気にした様子はない。強いて挙げるのなら瞳には失望の色が濃く宿った程度だ。

リゼヴィムは周囲に積まれたゲームを眺めると似たような眼で、ヴァーリが現れるだろう城の入口の方向を見つめる。やがて蓄えた銀の髭を撫でつつ、彼は告げる。

「あの吸血鬼の嬢ちゃんをここに連れて来い。それからマリウスに部隊を預けて部屋を包囲させろ。独断行動を絶対にするなど重ねて命じておけ」

彼には策があつた。ヴァーリが例の少女を救おうとしているのなら、その感情を利用してしまえば良い。つまりヴァレリーを囮にして包囲してしまおうというのだ。

復讐にしろ少女にしろ、或いは常に先を行くライバルにしろ、拘ると視野が狭まれ、結果として深みに嵌まるものである。

果たしてヴァーリは己の策略に気付くのだろうか。

「いや……無理だな」

リゼヴィムはほくそ笑みながら頷いた。何故なら、ヴァーリは既に泥沼から抜け出せないでいるのだ。

「どうやって煽ろうかなー。ヴァレリーちゃんを犯したら激昂するかなあ、でも吸血鬼共の使い古しを貰うのも癪だし……ユークリッドくん、従順な彼女とか欲しくない？」

「銀髪なら考えましたけどね。私とて愛しい人はいますし、自力で奪い取りますよ……それこそが悪魔の本懐でしょう？ でなければ、わざわざ仮面やスーツで姿を誤魔化してまで暗躍する甲斐がありません」

「おつ、名言だねー！ 流石、ルキフグスは言うことが違う!! ヘタレの孫にも見習って欲しいよ！ 折角、ルシファアの血を引いてるってのにさ!! うひゃひゃひゃひゃ♪」

手の中の聖杯を弄びながら、リゼヴィムは笑うのだった。

「——あ、気が付いたかにゃ?」

起きがけに耳に飛び込んできた声で、ヴァーリの意識は急速に浮上する。最初こそ混濁していたそれも一秒、二秒と時間が経過するに従って徐々に鮮明に、濃くハッキリと甦った。

幾つもの鉄火場を潜り抜けた経歴が脳に警告を、次いで上半身に覚醒を促すメツセージを叩き付ける。

「……ッ! そうだ、俺はッ! 奴は……リゼヴィムはどうした!」

「落ち着くにゃ。倒れてたのはヴァーリだけで、他には誰も居なかった。にしてもそのリゼヴィムってのは余程の強敵だったのかにゃー」

戦鬨の余波で穴だらけとなった周辺を見渡しながら、声の主である黒歌は言う。口調と語尾こそ普段のおちゃらけたものだが、顔には冷や汗が浮かんでいる。ヴァーリが倒れていたというのは、それ程までに考えられない事態だった。

仙術で治療こそしたが、彼の身体には無数の傷痕が見受けられて、つまり一方的な戦いになったのだろう。

「……どんな相手なの?」

尚も動揺を隠せない様子で黒歌は訊ねた。対してヴァーリは拳を握り締めて、悔しそうに呻く。

「“神器”を……無効化された」

「……ふむ、“神器”ですか」

真つ先に反応したのはアーサー・ペンドラゴンだ。英才教育を受けていた経緯からか、仲間内では最も“神器”や神話関連の知識に明るい。

「……リゼヴィム。生まれつき異能力を有する存在——”超越者”の一人に名を連ねる、聖書にも記された大悪魔です。彼の能力が“神器無効化”であると耳にしたことがあります」

「うへえ、そんな大物がなんだって吸血鬼と仲良くしてるんだってよ。ここはルーマニアだぜい?」

顔をしかめる美猴だが、もっともな疑問だ。他種族を見下す傾向の

強い吸血鬼勢力にとって、悪魔もまた忌むべき存在の筈だ。それがどうしてルーマニアに隠れていて、しかもヴァーリを襲撃するのだろうか。

考え込む黒歌や美猴を宥めたのは纏め役のアーサーである。パンツと敢えて手を叩いて注目を集めるや、何時の間に構えていたのか、剣の切っ先を城のある方角に向けて言う。

「そんなことは本人に問い質せば良いでしょう？ お二人が考えたところまで……どうせ頭がパンクするのがオチなのですから」

「おうおう、喧嘩なら喜んで買ってやんぞ！ リゼヴィムの前にお前から片付けてやらあ!!」

「私も乗らせて貰おうかにやー！ 久々にイラツときたし!!」

やいのやいのと騒ぎ始めるメンバー。そんな彼等を尻目に、トンガリ帽子を被った魔法使いの少女ルフェイ・ペンドラゴンが、ヴァーリにそつと耳打ちする。

「お兄様はああやって誤魔化してますけど……そのリゼヴィムって悪魔はヴァーリ様と関係が？ だって姓が一緒で」

やや天然気味な性格はルーマニアの地でも変わらないようだ。隣で白音が引き留めてるのも気にしない辺り、一度はアーサーに説教して貰おうかと彼は結論付けた。

とはいえ、その呑気な一面がチーム内の清涼剤として機能しているのも事実だ。それに相棒の声が途切れてしまっている今、周囲とのコミュニケーションに飢えている点もある。

「まあ、過去に色々とあつてな……お前ら、いつまで遊んでる。さつさと城に乗り込むぞ」

呟いて一人、城へと歩を進めるヴァーリの脳裏には、まだ先の苦々しい敗北が残っていた。

リゼヴィム彼の介入は全く予想だにしていなかった展開である。

無論、敵地に赴くのだから多少は警戒していたのだが、それもあくまで吸血鬼についてであって、悪魔の存在は範囲外だ。

そして浚われてしまったヴァレリーに関して、後悔を隠しきれない。

「大丈夫ですか？」

ふと声をかけてきたアーサーの表情は険しい。

「あなたのことです。リゼヴィム以外に何かしらの事情があるのでしよう。それに例の“幽世の聖杯”の所有者も……」

「お前まで急にどうした。心配されずとも俺はまだ戦えるし、任務も成功させて見せる」

「……だと良いのですがね」

アーサーは暫く考えていたが、彼が何も話さないと悟るや溜め息を吐いて、ズタボロに転がされている美猴の回収に赴いた。姉の無事を懇願する白音は兎も角、ヴァーリにまで妙に優しく接したくなるのは何故だろうか。

それは恐らく、ヴァーリの浮かべている表情に理由があるのだ。

彼のそれは、俗に“死相”と呼称される。

早まったことをしなければ良いのだが。悶々と思考を巡らしている間にも一行は霧のすつかり晴れた森から抜け出した。

そして、出口の先には、リゼヴィムのマイハウス直通、と記された立て看板と共に、見るからに怪しい魔法陣が宙に浮かんでいたのがあった。

「罨、でしようか？」

「それにしても露骨にやん」

「どうします？ この場は一時撤退して戦力を整えるという手もありますが」

ヴァーリはこれまでにない程に強い口調で、告げる。

「乗り込むぞ」

——— *l i f e . 8 1* 悪意① ———

「しかし、現れるのが異様に早いと思えば……また子供のような戯れを。まさか直通の転移術式を開くとは」

「別にショートカットしても良いじゃん。視聴者の皆さんだって求めているのはヘタレ孫の珍道中じゃなくて、手に汗を握るラスボス戦だしさー。どうせ馬鹿だから来るだろうし？」

こめかみに手を当てて嘆息するユークリッドだが、リゼヴィムの悪

ふぎけは別に今に始まった訳ではなく、そもそも注意して控えるような性格でもないので止めておく。

どうせこの段階まで進んだ時点で作戦の成功は確定しているようなものだ。それなら余計なことを進言してやる気をなくされるよりは、好きなようにして貰った方が互いの為にも良い。

しかしリゼヴィムといい、“神器”研究家を自称するマリウスといい、中々どうして濃い上司と部下に挟まれたものである。ユークリッドには不思議で仕方無いことだった。

兎に角。部下からの報告にあるようにヴァーリ達は魔法陣を潜つて、城に侵入したようだ。

やはり緊張感に欠ける気もするものの、どうせ他人の城だし知ったことではない。そう樂觀を決め込む彼も上司に毒されつつあった。

「リゼヴィム様。そろそろお孫さんとそのご友人がいらっしやいますよ。一先ずゲームを中断した方が宜しいかと。些か悪趣味ですし……お孫さんが見たら怒りますよ?」

「えー、だってヴァーリきゅんの嫁つてことは俺の家族も同然じゃない? マイファミリーじゃん? そりゃルシファアの家訓つてもんを叩き込んであげるのがお祖父ちゃんの役目でしょ! うひゃひゃひゃひゃ♪」

「確かに吸血鬼ですから多少なり頑丈ですけど、もし死なれでもしたらアウトですよ。ほら、魔獣の相手なんてさせるから悲惨な状態になってるじゃないですか。とんだ嫁イビりの家訓ですよ」

触れたくもない液体まみれとなったヴァレリーは、ただヒューヒューと掠れた呼吸を繰り返すのみで、その側に座り込む魔獣——無論、犬猫とか可愛い類ではなく、蛸や虫を縫い合わせた醜悪な姿をしている——は満足げに欠伸をしていた。

繁殖期の魔獣と吸血鬼の雌、其々を同じ檻に放り込めば……ゲームと称したりゼヴィムの遊びの結果だ。

“神器”は宿主の精神状態に左右されるらしい。果たして彼はヴァレリーが使い物にならなくなればどうするつもりだろう。

“幽世の聖杯”は一連の計画の要で、与えられる恩恵を考慮すれば失

いたくない代物の筈だ。実際に使用してみて効力を目の当たりにすれば余計に。

「誰が後片付けを行うと？」

部屋に漂う特有の臭いに鼻を抑えつつ、ユークリッドは頭を抱えた。こんな理由で消臭の魔法を使用するのも悪魔として長い人生の中で初めてだった。

「ごめんって、ユークリッドくん！ お詫びにヴァレリーちゃんまで遊んで構わないからさ！ あー、でも良く考えたら礫にでもした方がラスボスっぽいかもなあ。ほら、囚われのお姫様を救う勇者とかドキドキしねえ？ それで救った後にチョコメチョコメしちゃう!!」

「お孫さんが変な性癖を拗らせそうなので却下した方が宜しいかと思えますが。というか、いい加減にきちんとして下さい。彼が直ぐそこまで——」

その瞬間、廊下を駆け抜ける音と部屋の扉が開け放たれる音が同時に響いた。

そしてヴァーリの怒りの絶叫が響く。

「——リゼヴィムウウウツ!! お前、彼女に……ヴァレリーになにをしたアアアアツ!!」

「聞いてよヴァーリきゅん！ その怖い怪物が俺の義理の家族を食べちゃったの!! 助けて赤龍帝く！ なんちゃって、うひゃひゃひゃひゃ♪」

言い訳するリゼヴィムではあるが誰の目から見ても彼が行ったことは丸わかりで、ヴァーリの全身から殺意と魔力が溢れ出した。

「わざとらしい……まあ、役者も揃いましたし。いよいよ開始ですか？ リゼヴィム——否、相談役？」

「まだ役職で呼ぶなっちゅーに！ うひゃひゃひゃひゃ♪ それはそうと、役者も揃ったし早く始めようぜ？ ドラゴン狩りってやつをさあ!!」

その序章、或いは彼等の計画の第一段階。

それは国際テロ組織“禍の団”特殊部隊、通称“ヴァーリチーム”構成員の殺害である。ただし一人だけを除いて。

リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。またの名をリリン。

“超越者”の一人にして聖書にも名前を刻みし大悪魔であるが、肩書きに反して本人は実に分かりやすい性格をしている。

人間界のゲームや漫画に囲まれ、ゲーム感覚でヴァレリーに魔獣をけしかけ、そして今は遊び半分でヴァーリチームと一戦を交える直前にある。

つまり思考回路が幼稚園児のそれだった。

子供が虫を踏み潰すのと殆ど変わらない感覚で、彼はヴァーリ達の皆殺しを狙っていた。そこに崇高な思想なんてものは存在しない。

そんなリゼヴィムにとって、実の孫であるヴァーリはどのよう映っているのか。答えは簡単だ。

「俺の思うがままに踊ってくれたまえよ、ヒョッコの諸君。お前らが俺にどんな感情を向けようが、結局は世間を騒がす玩具テロリストなんだからよう！ うひやひやひやひや♪」

自分の愉悦を満たす為の駒に過ぎない。

—— l i f e . 8 2 悪意② ——

『V a n i s h i n g D o r g a n B a l a n c e B r e a k e r !!!』

全身に鎧が装着されていく感覚の中で、ヴァーリは静かに顔を上げる。辛うじて理性がブレーキをかけているのか、その視線の先にはまだヴァレリーが閉じ込められた檻があった。

倒れ伏す彼女は一切の衣服を纏っていない裸体で、その側に我が物顔で座っているのは、蛸や虫を縫い合わせたような魔獣キメラだ。これで何事もなく平穩無事で監禁されていたと考える方が可笑しい。

戦闘狂を自称するヴァーリにも性に関する知識はあるし、“神の子を見張る者”に所属していた際には彼の見目麗しい外見に惹かれた女達から誘われる形で幾度か経験したこともある。

だが、それらの性交渉は互いの合意があつて成立したのだ。あんな言語を喋れるかも怪しい化物に、女性に迫る知能があるものか。

考える程にヴァーリの怒りは膨らみ上がり、放出する魔力の余波もまた暴風染みたまものへと変貌していく。

ここでようやく余波に吹き飛ばされそうになっている仲間達に気が付いたが、口から放たれた言葉は短く、何より激情をぶつけまいと堪えていた。

「……ルフェイと白音は少女の救出。残る三人は彼らを足止めしろ」了解、と辛うじて返答したのは誰なのか。

通常チームを率いるリーダーには部下への細かな配慮も求められるのだが、仲間は誰一人として指摘しなかったし、またヴァーリにとつても別に誰でも良いことだった。

何故ならその瞬間、彼の身体はこの世界を置き去りにしていたのだから。

「……へっ？」

ニヤニヤと悪趣味な笑みばかり浮かべていたりゼヴィムからその余裕が消え失せる。

別に心底から油断していたのではなかった。おちよくる素振りを見せておきながら、視界からヴァーリを外してはいなかった。一挙手一投足に細心の注意を払い、次にどのような手を打つか脳内で予測と対抗手段を洗い出し、カウンターを決める算段でいた。

果たして誰が、ヴァーリの姿が消えると予想出来ただろう。

ほんの瞬き一つの間にも“白い龍の皇帝”は床にその足跡だけを刻んで、疾風そのものと化していた。

恐るべきは、直感的に防御術式での迎撃体勢を整えてみせたりゼヴィムだ。彼とて伊達に“超越者”に数えられている訳ではない。

経験則に基づいた驚異の反射神経が成せる技であるが、しかし。

「——リゼヴィイイイムツツ!!」

顔面に拳の突き刺さる方が、僅かに速い。

脚力と魔力を瞬時加速に変換しての一撃は最初にリゼヴィムの身体を浮かせ、刹那、それは押し込みながら壁に激突した。恐らく殴られた本人には何が起きたのかも分かっていない。

全く見えていなかったのだ。ヴァーリの全身全霊の攻撃も、胸に抱

えた憤怒も。

故に慌てて瓦礫から這い出ようとするリゼヴィムには、束になって飛来する魔力弾もまた見えていない。正確には察知する余裕がなかったのだが。

「消えてなくなれ、リゼヴィムツツ！ お前は、お前だけはあああツツ！！」

十や百では終わらない、暴力的なまでの量の集中砲火が、さながら星群のように薄暗い天井を照らす。まばゆい輝きを放つ球体の一つ一つが高密度の魔力凝縮体である。直撃すれば重傷を負ってしまうだろうことは明らかだ。

直後、光の豪雨がリゼヴィムの立っていた場所に降り注ぐ。既に上空に退避していたものの、十の翼を広げて飛行しては発生する爆風を避けられない。

何重もの防御魔法を駆使して受け止め、重傷こそ回避した。だが彼の子供並みのプライドはそうもいかない。

「……殺してやる」

首をゴキリと鳴らしながら見下ろし、怒りのままに絶叫する。

「この……クソガキがああああ!! 白トカゲを宿しただけの紛い物が調子にい！ 乗りやがってええええ!!」

そう叫ぶ彼の手元に描かれた魔法陣をヴァーリは警戒するが、直前になってユークリッドが制止したことによってそれは消失する。

「止めるな、シスコン軍曹！ こいつを殺して俺も死ぬ!!」

「確かに姉上を愛してますが……って、今は関係ないでしょう!? と
いうか冷静になって下さい！ 将の動揺は兵にも響きますよ!!」

「俺ちゃんは将になりたい訳じゃねーし!! ただトカゲと遊びたいだけだし!!」

急に粗雑なコントを繰り広げる二人だが、対する彼の内心は穏やかではない。敵が何らかの策を講じる前に火力で圧倒しようという作戦だった。

作戦通り、リゼヴィムはパニックに陥ったのだが、隣に立つ銀髪の男——ユークリッドのせいで冷静さを取り戻しつつある。

仕切り直しか、と冷静に後退を選んだところでふと違和感に気付く。

何故、ユークリッドがこの場に合流している？

「……まさか!？」

「勝手に殺さないで下さい。まだ生きてます」

慌てて背後を振り返ろうとするヴァーリの耳に、聞き覚えのある冷静沈着な仲間の声が響いた。

「無事……には見えないな」

その皮肉に、歩み寄ったアーサーは苦々しげに口元を歪める。

珍しい光景だった。確かに仲間達はどいつも戦闘を好む奴らが多く、食後の運動と称して身内でさえ平気でバトルを始めるような馬鹿ばかりだ。

比較的温厚な彼でさえ例外ではなく、美猴や黒歌に喧嘩を売られれば笑顔で買うような中毒者^{ジャンキー}である。

しかし、互いの全力を出し切ったバトルに歓喜や満足こそすれ……怒りを前面に出すような男ではない。あるとすれば、戦闘で手を抜かれたか、もしくは水を差されたときぐらいだろう。

それに、何より簡単に捌かれるような弱卒でもないのだ。この聖王剣コールブランドの担い手は。

ただの腰巾着ではない、とヴァーリは確信した。誰よりもメンバーの強さと性格を信頼していたからこそ、擦り傷だらけのアーサーを見た瞬間にユークリッドの危険性を把握した。

「で……床に転がされてる猿と猫はまだ戦えるんだろうな？」

「おいおい、俺たちがそんな簡単に倒されるもんかよ!! この通り、ピンピンしてんぜい？」

「私だつてかすり傷だしー？ ちょっと着物が破れただけだしー？ この万年発情猿と一緒にしないでくれるかにゃ？」

軽口を叩き合う面々だが普段の笑顔は消えて、ネジの外れた戦闘中毒者の表情——血に飢えた獣の顔だけが浮かぶ。

「混ざりたくないんですけど。私までイカれてる風に思われるじゃないですか」

ヴァレリーを抱えて戻ってきた白音がジト目で呟く。

原型を留めていない檻と魔獣を見るに、どうやら救出は成功したようだ。興奮した様子でルフエイがVサインする。

「救出してきましたよ！ 檻の外から魔獣に魔法フルバーストを叩き付けて、その間に白音ちゃんが柵をぶち壊したんです！ それにしても歯応えなかったですねえ。もつと色々な魔法を試したかったのにあつさり死んじやいましたあ……雑魚が」

「oh……ルフエイさんも同類ですか」

愕然とする白音であるが、実は彼女自身も特訓という名目でガチバトルに参戦していたりする。一対一サシから乱戦まで何でもありの環境に揉まれてきたせいか、最近はメキメキ実力を上げているのだが、どうやら成長過程でネジを欠落したらしい。

それはさておき、遂に勢揃いしたヴァーリチームは、未だ言い争いをしているリゼヴィムとユークリッドの前に並び立つ。

「ヴァレリーは返して貰ったぞ、リゼヴィム」

と、ここで彼らは冷静になったのか顔だけをヴァーリ達に向ける。メンバー達の背筋が震えた。

二人は満面の笑顔だったのだ。

「……んーんー。何か勘違いしちゃいないか、ヒヨッコの諸君。俺達はただお姫様を奪われたんじやあない。寧ろその逆だろう、諸君らは非戦闘員というお荷物を背負わされたのだ。その娘はもう目を覚まさん」

「なんだと……おい、ヴァレリー！ 目を覚ませ!!」

彼女を抱き抱えて懸命に声を投げ掛けるヴァーリだが、グツタリしたまま目覚めようとしない。まさか魔獣が毒を有していたのか。緊張の走る一同に、リゼヴィムは嘲笑いながら手元に魔法陣を作り出す。

召喚魔法。術式を見抜いた黒歌が注意を促すも出現したのは応援のモンスターなどではなく、それよりも遥かに小型だった。

「これ、なーんだ？」

手の中の物体を弄くりながら訊ねるリゼヴィム。正体に気付いた

アーサーの顔が真っ青に染まる。

「おっと、正解者がいらつしやるよーで。それなら早速の答え合わせといきますか！」

ゲフンゲフンとわざとらしく咳き込み、彼は謎の物体を大袈裟に掲げた。直後、ヴァーリが信じられないと言いたげな形相でその物体と腕の中の少女を交互に見る。

そもそも何となく予感はしていたのだ。亡霊に囲まれているという発言から、ヴァレリーこそが生命の理を司る“幽世の聖杯”の所有者だろうと当たりをつけていた。

尤も、勧誘したのはそれだけではないが、彼女が所有者だったことが理由にあるのも事実だ。

まだ悪意に利用される前に、好意を寄せる女性がもう二度と“神器”に翻弄されることのないように。

「お前達は……世界はどこまで俺達をツツ!!」

「うひゃひゃひゃひゃ♪ その身に流れる血筋からは絶対に逃げられねえつてばよ？ 世の中には利用する側される側が最初から決定されてるんだわ。何もかも半端なヴァーリきゅんに前者は務まらねえ!! だってお前は——人間との混血児なんだぜ?」

高くに掲げられたそれは聖杯の形をしていた。そして今、聖杯はリゼヴィムの悪意に反応する。

“幽世の聖杯”。回復や身体強化など、生命の理を容易く塗り替えるその力の範囲は非常に広く、そして強大だ。

だがこれだけなら聖杯が上位“神滅具”に名を連ねることはなかったかもしれない。同列には、かの“二天龍”や“神殺し”が存在するのだから。

聖杯の真骨頂は、再生にある。

それも傷や欠損箇所を再生するような単なる治療系ではなく、死者の魂を現世に甦らせる死者蘇生を可能とするのだ。

伝承にある怪物を復活させて駒にするもよし、死者の軍団を結成し他国に攻め寄せるもよし。その気になれば世界をも滅ぼせるというのだから成程、周囲からすれば素晴らしく魅力的な“神器”だろう。

能力の行使に比例して所有者の精神が磨耗するという副作用こそあれど、腕利きの魔法使い達が数十人単位で大量の供物と代償を捧げてようやくと成立する禁術を、指先一つで簡単にやってのけてしまうのだから。

そして、聖杯の一つ、即ち所有者であるヴァレリーの魂と密接にリンクしている神器がリゼヴィム的手中にある。これが何を意味するのか。

「手始めにそうだなー、伝説の邪龍でも復活させちまうか！ 戦力はどれだけあつても困らねえし!! うひゃひゃひゃひゃ!!」

「……撤退だ！ 急いで城から脱出する!!」

「おいおい、お姫様を拉致するなり尻尾巻いて逃げようってかよ臆病者だねえ……もつと踊れよ、小僧共^{ホベンスエロ}」

先ず一つ目。この戦場において、彼に敵う者は存在しない。

二つ目。ヴァレリーの命が危ない。

『グハハハハッ！ なんだよ、現世に召喚されたかと思えば随分と愉快なことになってるじゃねえか!! 俺も混ぜて構わねえだろ？ ならさっさと命じろよ、聖杯持ちのルシファーよお!!』

そして三つ目。迫り来る悪夢を止められない。

l i f e . 8 3 グレンデル①

その暴虐の色は深緑 その大罪の色は紅蓮

その龍は光を裂き 善を呑み 義を滅する

その龍は 現世のあらゆる罪を背負う

その龍こそが 現世の大罪の器である

大罪の名は グレンデル

祈りを知らぬ 大罪の暴龍

誇りを知らぬ 深緑の悪喰

忘れるなかれ

その罪渦の名を その傷痕の色を

そして 語り継げ

大罪の名は グレンデル

(ある伝承の一節より抜粋)

—— l i f e . 8 3 グレンデル① ——

聖杯の発光が収まると同時に、紫の術式が大量に展開される。深海の底の色をそのまま写し取ったようなそれらは瞬く間に周辺を覆い尽くして、壁や天井までも塗り潰そうとする。リゼヴィムとユークリッドが慌ててその場を飛び退く頃には、既に一帯の空間は魔法陣に押し潰されてしまった後だった。

「あつぶねー。聖杯に殺されるなんざ洒落になんねーってばよ」

嘲笑うも彼の口調は何処と無く浮わつており、その視線は緻密に組上がっていく巨大な一つの召喚術式に釘付けとなっていた。

ざっと十桁どころではないだろう。百単位の極小の術式が部屋中を忙しなく駆け巡り、意志を持つ生物のように独立して稼働する。幻想的ながら何となく気味の悪い光景に、白音はゲンナリした表情を隠せなかった。

ただしそうなったのはチーム内で最も経験の浅い彼女だけで、他の面々は警戒レベルを最大にまで引き上げ、魔法使いのルフエイは恍惚な顔で眺めている。

「……死者蘇生の術式ですね。昔に実家の倉で見た魔法書に記載され

ていたのを覚えています。しかし……何れも禁術だったと記憶して
います」

アーサーの推察に、食い付いたのはルフエイだ。

「そうなんですよ、お兄様！　これって一つ一つが数十人規模の代償
で成立する禁術ですよね!!　しかも床に形成しようとしているあの
術式は解析不能！　私の記憶にあるどの魔法書にも記載されてませ
ん!!　ヤバいです世紀の大発見ですよ!!」

「それ……俺っち達は世紀のヤバい事態に陥ってるってことだよな
!？」

「つーか邪龍が云々と言ってたけど、リゼヴィムのやつ、もしかして伝
承のドラゴンを復活させる作戦かにやー？」

美猴が現状を把握し、黒歌が敵の策を察知するも、彼等はそれに対
する最適案を捻り出すことができなかった。そもそも魔法関連のプ
ロフェッショナルであるルフエイですら初めて知る魔法だ。分野的
にお門違いの二人が分からなくても仕方ないだろう。

それはヴァーリやアーサーも同様で、生命の理を愚弄する術式群を
前にして、二割の好奇心と一割の違和感、残る七割の恐怖を抱いたま
ま呆然とするしかなかった。

普段の彼らならば戦闘狂の面を抑えきれずに嬉々として突撃した
だろう。その点を自覚しているからこそ動けぬ自分に違和感を覚え、
それが恐怖に連鎖したのだ。

情けないとは思わない。恐怖という感情は産まれたときから生物
に備わっている本能にして、生存を促す警報装置なのだから。

故に——反応が遅れた。撤退の合図を辛うじて絞り出せたのは術
式がすっかり巨大な文字の羅列の門を織り成し、そしてその中から一
体の巨大な漆黒のドラゴンが降り立った頃だった。

『グハハハハッ！　どこの馬鹿野郎に復活させられたかと思ったが
……成程、相手はアルビオンかよ!!　良いねえ、寝起きの運動には最
高の獲物だ!!』

「ひ……っ」

思わず声を溢す白音だったが、その視界が見慣れた黒い布地で隠さ

れる。彼女にこれ以上の影響を及ぼすまいと黒歌が袖で庇ったのだ。

「絶対に私から離れないで」

黒歌は、低い声音で捲し立てるように告げる。

「あのドラゴンと対峙したら飲み込まれるから」

白音は驚愕から思わず耳を疑った。化け物揃いのチームメンバーと渡り合う姉の口から出た言葉は、震えていたのだから。

だが、妖怪の本性を晒け出して尚も本能に抗えずにいる黒歌を責めることは不可能だ。寧ろこの状況下で妹を庇ったことは称賛に値するとも言える。姉としての意地である。

暴力的なまでの魔力量と威圧感。

一同が屈服せざるを得なかった理由を肌に浴び、蘇生した張本人であるリゼヴィムも冷や汗をかいた。

彼は直接的に叩き付けられた訳ではない。にも関わらず心底から安堵の息を吐いてしまったのは、召喚されたその暗黒の龍が現世の邪悪に身を染めた歪な龍——邪龍のカテゴリーに属するからだ。

「……」クライム・フォース・ドラゴン 大罪の暴龍”

誰かがふと口にした異名に黒の邪龍が反応する。

『俺を知ってるのか!! そうよ、俺様こそが大罪と暴虐を司るドラゴン!! その名もグレンデル様よ!! グハハハハツ!! 冥土の土産に覚えとけ!!』

邪龍グレンデル——デンマークの伝承にその姿を現すドラゴンを一言で示すのならば、戦闘狂である。ただし彼の場合はヴァーリの比ではなく、自分か敵のどちらかが死して力尽きるまで嬉々として戦い続けるという。

討伐に成功した英雄ベオウルフが残した記録では、特別な能力を持たないかわりに桁外れの身体能力と魔力を誇り、鱗は剣の一撃を弾き返す程に頑丈とされている。

尤も、こうして現世に降臨を果たした以上は記録など信用できる筈もない。何故なら聖杯によって復活したグレンデルは、聖杯によって何らかの強化を施されている可能性が高いからだ。

更に邪龍特有の性質には”異常な生命力”と”甦る毎に能力が底

上げられる”というものがある。

例えば、北歐のニーズヘツグなど一部の邪龍は自力で蘇生可能であるし、魂を分割された末に神器の核となったヴリトラも自我が甦りつつある。

その度によりパワーアップされるのは邪龍の特性にして、邪龍がその名を冠する所以だろう。

つまり連中を相手するに至って、過去の討伐記録は到底あてにならないのだ。

「撤退だ……」

そして今、ヴァーリ達の前にも邪龍の一角を滑るドラゴンが立っている。

自力での強化と聖杯のもたらしたそれにより、新たなる領域へと突き進んだグレンデルが――

「……撤退だ!! 今すぐ城から脱出しろ!!」

『邪龍が獲物を逃がすかよ!!』

――名に恥じぬ蹂躪を楽しむべく、遂に動いた。

刹那、ヴァーリの姿が跡形もなく消え去る。

隣に立っていたアーサーは咄嗟に彼がまた独断で仕掛けたのかと思っただが、それは希望的観測が過ぎた。直後には壁が瓦礫と化す重音が鳴り響いたのだから。

それも一度では終わらない。二度、三度と間隔を空けながら破碎音は急速に遠ざかっていく。

そして碎け散る音が不意に止まったとき、つい数秒前まで確かに隣にいた筈の少年はもう何処にも見えなかった。大きく穿たれた大穴とその向こうに見える吸血鬼圏の薄暗い空だけが、彼の行方を臍気に知らせるのみだ。

『んだよ、二天龍を宿してるから期待してみりや……おい、聖杯持ち!!』

グレンデルは失望の溜め息を吐き、それから啞然としたままだったリゼヴィム達に言う。

『遊んでやって構わねえんだろ?』

「うん、盛大にやっちゃって。ただし俺ちゃんも最期に別れの挨拶がしたいからさあ？ 瀕死で我慢してねー」

『……おいコラ、ルシファアの小倅。召喚された側だから文句は言えねーけどよ。邪龍に向かつて、瀕死で我慢しろ、だと？ ……あんま嘗めてるとお前から血祭りにすつぞ!! その気になりや聖杯の支配を強引にはね除ける程度の芸当はできんだぞ?!』

耐え難い怒気と圧力を振り撒いてから追跡に向かう。彼の与えた恐怖が完全に四散したのは数十秒が経過してからである。

最初に我に返ったのは、やはりアーサーだった。聖王剣を支えにして膝をつくや否や、他の面々も次々に床に崩れ落ちる。

とんでもない化物だ。さながら嵐の過ぎ去った後に似た室内を見渡して、アーサーは改めて邪龍の恐ろしさと強大さを思い知った。

ただ誤算なのは召喚したりゼヴィムとは馬が合っていないことだ。もし彼らが一致団結して挑んできたのなら成す術もなく皆殺しにされていた。

リゼヴィムとユークリッドもまた苦虫を噛み潰したような表情なので、恐らくは想定外の事態なのだろう。その点ではまだツキが残っていたのである。

「それでも最悪な状況が一手手前になっただけですけどね」

苦笑しつつ、倒れていた仲間を起き上がらせる。あくまでグレンデルが離脱しただけで対面には敵が残っているのだ。ヴァーリが行方不明となってしまうたのも無視できない。

「……どうするにゃん？ 指揮官を置いて逃走、なんて無理でしょ？」
「お兄様！ ヴァーリ様を拾って脱出しましょう!!」

極端な話ではあるが、一番手っ取り早いのはヴァーリを見捨てての撤退である。ルフエイが本部に繋がる転移術式を描き、時間稼ぎを残ったメンバーで行えば可能性は高い。やむを得ない場合は女性陣だけでも逃がす。

しかし、彼を回収してからとなると話も難易度も全く別物となり酷く困難を窮める。ヴァーリが飛ばされた方角には広大な樹海が横たわっているのである。

墜落位置を把握しにくく、有視界での搜索も樹海全体を包む濃霧によつて阻まれる。おまけにグレンデルまで徘徊しているのだから、仮に遭遇・戦闘になれば本末転倒な末路となつてしまう。

「……今から三秒後。全員でその大穴から森へと降下します。ヴァーリを回収し、発見される前に全員で脱出しましょう」

結果として、彼らは見捨てることができなかつた。

「うひゃひゃひゃひゃ♪ よく知らねーけど、逃げれるもんならやつてみる!! この吸血鬼の軍勢を相手にさあ!! やつと出番だぜマリウスきゅん! やつちまいなー!!」

「……ふふ、我が国を荒らすテロリスト共め!! 聖杯で強化された吸血鬼の精鋭の力を味わうが良い!!」

それが最悪な選択であることに、まだ気付かずにいる。

彼らは逃げ切れただろうか。

アーサーは肩で息をしながら、散り散りになってしまった仲間を心配せずにいられなかった。マリウス率いる軍勢の登場は予想外だった。グレンデルに意識を割きすぎたのも大きい。

多勢に無勢、ヴァーリチームが粒揃いの面々だったとして大軍で押されればどうしようもない。寧ろ狼狽えずに逃走を指示できただけ及第点である。

側にあつた大樹の根元に腰掛け、これから取るべき手段について思考を巡らす。

ヴァーリのみならず仲間とも合流する羽目になってしまったのは、やはり最悪の展開だ。

高速で接近してくる魔力反応を察知して、舌打ちする。

「……のんびり考える時間も与えてもらえないのですか」

ふらつく足を支えながら、アーサーは駆け出す。

魔力の数は二十。普通の吸血鬼ならどうにでもなるのだが、相手は聖杯により強化を施された化物だ。身体能力もさることながら、最も厄介なのは種族全体の弱点だった光や聖剣を克服している点にある。

どれだけ超人的な能力を持っていても、種族的には人間である彼が異種族と対峙した際に切れる手札は、そう多くない。

代名詞である聖王剣コールブランドと妹から教わった光属性の魔法、それに常人離れた身体能力。

そして相手は前者二つを無効化し、後者も根本的な種族の差と聖杯の加護によって大きく引き離されている。

「発見したぞ！ こっちに一匹だ!!」

「他と合流される前に殺せ!!」

「……やれやれ。まあ、妹の身代わりになれたと思えばマシですか」

ボロボロの身体に鞭打って剣を構えるアーサーと、彼を包囲する吸血鬼達。

不敵な笑みを浮かべる彼の脳裏にはどのような光景が過っていた

だろう。愛する妹か故郷に残した想い人か。
それとも来世の戦闘か。

—— l i f e . 8 4 グレンデル② ——
『最悪だな』

アルビオンは開口一番にそう放った。今まで機嫌を悪くして黙っていた癖に、今度は咎める口調で宿主の失態をつついてくる。ドラゴンという種族は揃って自分勝手なのかとヴァーリは溜め息を吐いた。ただし相棒の言葉は現状を的確に表している。ドラゴンが自分勝手である点も決して間違いではなく、寧ろ正解だ。

何度目になるか数えたくもない溜め息を吐いてから、自身を睨む巨大な漆黒を睨む。先の一撃で樹海に吹っ飛ばされてからそう時間は経っていない。

にも関わらずその邪龍が目の前に姿を見せているのは、伝承にあるように彼がネジの外れた戦闘狂であるからに他ならない。

グレンデル。遙か古の時代に討伐された筈のドラゴンが、今こうしてヴァーリと対峙している。普段ならば歓喜していただろう現状も、今回に限っては考えうる最悪の状態を構成する要素の一つでしかない。

自分を搜索するべく樹海に突入した仲間達と、追うように吸血鬼と思われる魔力反応が大量に出現し、それらに各個撃破される形で仲間のそれが消えていく。

『グハハハハッツ!! おいおい、そんな悲しそうな顔すんなよ!! お前だってドラゴンを宿してるんだろ!? それなりに足掻いて見せろよ、白トカゲちゃんよお!!』

そしてヴァーリも、仲間の後を追うことになるのは想像に難しくない。

完全に罠に嵌められた。

恐らくは予め別の部屋に部隊を伏せさせておいて、合図と同時に雪崩れ込んだのだ。例えアーサー達が強かろうと数の暴力には勝てないのだから。

仕組んだ張本人であろうリゼヴィムの顔を浮かべて拳を握り締め

るも後の祭りだ。

『Vanishing Dorgan Balance Breaker!!!』

劣勢は覆せない。鎧を纏って強がろうと、屈折した考えが脳裏にまわりついて離れなかった。グレンデルも自分達の有利を確信しているからか、終始ニヤニヤと笑うだけで積極的に仕掛けようとはしない。

「悔るなよ！俺は白龍皇だ!!」

陰鬱な雰囲気不散らすように、叫んだ。

「過去現在そして未来永劫において……最強の白龍皇なんだよおおお!!」

絶叫と同時に発射された魔力弾が戦闘の幕開けとなった。王座での一戦で駆使した乱射ではなく、さながら太陽を思わせる巨大な光の球体である。

無論、通用しないことは百も承知だ。魔力弾の陰に身を潜めて、グレンデルが防御した隙を突いて攻撃する。身体に触れさえすれば――白龍皇の能力である”半減”が行使でき、互角の戦いにも持ち込める筈だ。

勝機有りと笑むヴァーリ。だが、直後にはその余裕が崩れ去ることとなる。グレンデルの対処方法が常軌を逸していたのだ。

通常、正面から魔力弾を撃ち込まれた場合、魔法などでガードするか回避に専念するか、対策は自ずと絞られてくる。また隙も生まれやすい。

そう読んでの攻撃だったが、邪龍の前では意味がないようだ。

魔力を噴出させてロケットのように突っ込んでくるグレンデルを相手には、不足だった。

「自分から飛び込むなんて!？」

『敵の攻撃を避けましょうなんて誰が決めたんだ!? 打ち返すも良し、受け止めるも良し!! 最高のチャンスじゃねえか!! グハハハッ!!』

衝突するグレンデルの拳と魔力弾。二つは最初こそ互いを相殺し

ているようにも思ったが、しかしグレンデルが高笑いをあげた瞬間に魔力弾が大きく歪み、そのベクトルを真反対へと曲げられる。

ヴァーリが本能的に身体を捻った直後、打ち返された魔力弾が直ぐ横を通過し、やがて木々を巻き添えにして大爆発を起こした。

爆風に襲われながらも白い翼を羽ばたかせ、滑空の要領で着地する。辺りを覆う焦げ臭さが鼻につく。

感情任せではあるものの、今の魔力弾にはヴァーリは少しばかり自信があった。それがこうもあっさりに対応されてしまうとは。

彼はグレンデルに視線を移した。素手で迎撃したと思えない程に、腕を元氣そうに回し、負傷は見当たらない。

『グハハハハッ！ どうした、俺達ドラゴンの大好きな戦いだぜ!? ……笑えよ、白トカゲ』

『黙れ、グレンデル!! 貴様如きが俺を愚弄するか!! 身の程を知れッ!』

アルビオンが嘲笑に反応するも鼻で笑われるのみだ。

『封印されといて偉そうに言うなや、頭にくるからよー。テメエを宿した悪魔の小倅が弱いのが悪いんだろ? 白龍皇におんぶに抱っこされてよお!! 恨むなら不甲斐ないご主人様を恨めッ!』

言い切ると共に大地を踏み締め——跳躍。次の瞬間には一気にヴァーリの眼前へと肉薄する。肉弾戦に特化したグレンデルだからこそこの荒業だ。

さながら砲弾となって突撃する巨体を前に、ヴァーリは白翼をはためかせて優雅に空中へと逃げる。

そうすれば勢いを殺せず樹木にでも衝突、最低でも急停止した巨体は大きな隙が生じる筈だった。

だがしかし、二度目の跳躍が目論見をまたしても覆す。

両足で急ブレーキをかけ勢いを緩め、それと同時に尻尾を地面に叩き付けることで、上空で隙を伺っていたヴァーリ目指して飛び上がったのである。

そして土砂を——目眩ましも兼ねて——巻き上げつつ、彼が顔を覆った一瞬に、電脳的な翼を強引に掴んだ。

「しまった……!?!」

その段階でようやくとグレンデルの仕掛けようとしている技を悟るも既に遅く、二人の視界はフリーフォールよろしく加速をつけて落下する。

右腕でヴァーリを拘束し空き手は天に掲げて魔力を放出。先程の砲弾を遥かに越えるスピードが彼等を地面に導く。

仮に衝突寸前でヴァーリが放り投げられたならまだ手もあった。受け身だつて取れたかもしれない。

邪龍グレンデルの恐ろしい点は自分もろとも衝突するつもりであることだ。

高度は樹海を見渡せる程に空高く、そんな高所から落下すれば重傷は免れない。だから普通なら手を離して相手だけ激突させようと狙う。ネジ穴の埋め立てられた彼には一切の躊躇や恐怖が欠けているのである。

『こんなお遊戯はドラゴンなら余裕で耐える。俺様だつてこの程度じゃ傷一つ負わねえ。だがな……』

落ちていく特有の感覚と風を全身に浴びながら、寧猛な笑みを隠さない。

『半端者のお前は死んじまうかもしれないなあ！　グハハハハツ!!』

着弾。

次いで樹海全体が揺れる。

切り揉み回転を加えながら尚も抉じ開けられた大穴の中心を突き進む。その度に肉体が悲鳴をあげるもグレンデルは気にせず、逆に高笑いし魔力の噴出量を増大させた。

やがてドリルの真似事に飽きて穴から地上に跳んだのは、鬱蒼とした周辺の自然環境を支える樹々が根元から寸断された頃だった。

強固な大地とそれに張り巡らされた根の二つの支えを失い、戦闘の余波も相まって、樹海を構成する内の一割がへし折られた。侵入者を拒絶する壁としての責務は果たせそうにない。

これこそがドラゴン、ひいては邪龍の称号を冠するグレンデルの戦いである。

更に恐ろしいのはこの大災害の跡地が彼にとつてお遊びであることと、たった数分そこらの出来事であることだ。

這い出てきたヴァーリにもう戦意や体力は残されていないなかった。暴風に横断されたかという程に滅茶苦茶にされた樹々が、二人の実力差を語っている。

『……ふん、心が折れやがったか。所詮は白トカゲを宿しただけの半端者だな』

グレンデルは身振り手振りで大袈裟に嘆いてみせる。両手はもとい全身が血塗れになっているが気にはしない。邪龍随一を誇る頑強さと元々のイカれ具合は伊達ではないのだ。

対して、まともに攻撃を受けたヴァーリは鎧が強制解除され、四肢も絶対に曲がってはならない方向に捻れている。

魔力で辛うじて浮くことはできるが、戦闘続行が不可能であることは明らかだ。

期待して損だった。

グレンデルの内心で抱いた感想はそれに尽きる。二天龍の一角を宿していると喜び勇んでいたら想像を下回る弱さだ。速さも攻撃力も打たれ強さも足りやしない。

しかも何より許せないのは、ヴァーリが全力を出していない点である。血筋から考えるとまだまだ余力がある筈なのに。

『ちゅーか疑問に思ってたんだけどよ。なんでルシファアとしての能力を使わねえんだよ?』

「それは……」

『白トカゲの神器頼りで、体術や魔力運用は三流以下。だから白トカゲを封殺されたら手も足も出ねえ。なんだ、俺様を嘗めてるのか? それとも実力と“神器”を勘違いしたパターンか?』

その問いに答えたのは、本人ではなかった。

「おーおー、久し振りだね愛しい馬鹿孫よ。邪龍に挑んで返り討ちにされちゃって可哀想にー。ほんとヴァーリきゅんは幾つになっても”白龍皇”って中二病拗らせてるから負けるんだよ! プークスクス!」

何時から様子を伺っていたのか、彼を包囲する形でリゼヴィムとユークリッド、それにマリウスの率いる吸血鬼軍が姿を現す。グレンデルが不満げに言う。

『おい、ルシファアの倅！ お前の孫はなんだってあんなに弱いんだよ!! こちとら暴れ足りねえんだ!!』

「我慢してよ俺だつて孫の軟弱さは予想外なの！ 後で遊び相手にラードウンでも復活させてあげるからさー!! ……で、どうしてルシファアの能力を使わず白龍皇に拘るのか、だっけ？ んー、そうだなあ……」

——無意識に”赤龍帝”の幻影を追いかけてるからだろ？

「俺は、オーフィスの為だけに生きよう」

いつ頃から一誠にその心が根付いたかは今や定かではなく、また覚えてもいないが、ふと気付いた頃には目標は確かに二つになっていた。

復讐と、オーフィス愛。

どちらかを選ぶのか？

残念ながら答えはNOだ。そもそも前提条件が間違っている。二つの目標は天秤にかけるべきではない。

故に両方共に果たそうとした。

少なくとも、両親を失った時から腹は括った。

全力で、

代償を恐れずに、

過去の宿主達の立ち回りや末路も参考に、

「滅ぼしながら愛そうと決意した」

一誠の策を聞いたドライグやフリードには散々に反対されたが、無理矢理に押し切った。元より復讐も愛も無償で進む筈がない。安い取引だ。

—— l i f e . 8 5 兵藤一誠③ ——

「……赤龍帝？」

「どうした、オーフィス。っと、あまり無理すんなよ？」

「……この番組つまらない」

どこまでも殺風景な彼の部屋は、宛がわれてからずっとこの内装だ。簡易ベッドに机に簡単なトレーニング器具。それと冥界のテレビ番組が見れるテレビぐらいか。

オーフィスと同棲中の身としては些か味気ないが、二人共に派手なインテリアに興味がないものだから、壁なんかコンクリート剥き出しのままだ。

まるで隔離施設に閉じ込められた実験生物のような生活だが、彼はこの部屋で過ごす時間が特別に好きだ。ベッドに腰掛け、膝の上に

オーフィスを乗せて、ぼんやりとテレビを眺めながら情報収集に勤む時間を何よりも大切にしている。

尤も、ここ最近はずの上に乗せていない。断じて嫌ったのではない。

彼女の子宮の中に新たな命が宿っていると知らされた今となっては、危なくてとても乗せられないのだ。

万が一に備えて、空いていた隣室には拾ってきたレイヴェルを放り込み、何かあれば直ぐに駆けつけるように言い含めた。

フェニックス家令嬢としてやはり相応の英才教育を受けてきたらしく、妊娠や出産に関する類の知識も叩き込まれたらしい。

将来的には決して無関係ではないのだから当然か。後々の件も含めて、それだけはフェニックスに感謝しても良いと思う。

「……誰もいない悪魔の街を眺めてるだけ。ちっとも面白くない」
オーフィスは頬を膨らませて主張した。

「そりや首都圏——特に上層部の住居区はそうだろ。反対に辺境地域は賑わってるだろ?」

「……ん。正規軍と……反乱軍? 彼等の中で武力衝突が頻発しているらしい。それを次期魔王筆頭候補ディハウザーやロイガンが次々と鎮圧していつてる。でも、次から次に反乱が起きる。どうして?」
「彼等は強固なネットワークで繋がってるからさ」

反乱軍が決起したタイミングや地域、その動員規模も、果ては掲げる指導者に至るまで異なる。だが、一見すると無謀で無計画な決起は裏で全て繋がっていて、軍の指導者はあくまでお飾りに過ぎない。

指導者と称される連中は全員が旧魔王派の生き残りであり、カテレア達の死後に一誠が秘密裏に接収した連中なのだから。

故に、一誠はカテレア達を死に追いやる必要があった。

ある程度の数と力があり、思想が単純明快で読みやすく、尚且つオツムだけが足りない手駒が欲しかったからだ。二人の敵討ちを煽ると彼らはあっさり頷いた。

故に、一誠は貴族領を順番に襲撃し、最後にソーナ・シトリーを名指しした。

甚大な被害が出ると悟った領民は他貴族の領に避難した。一誠への迎撃に人員を割いてくれたお陰で避難民の身元確認がおざなりになった。避難民に紛れて潜り込んだ旧魔王派の連中に気付かない程度に。

ゆえに、一誠は襲撃の最後に下級悪魔や元眷属悪魔の不満を煽り、反乱を誘発させ、それらをデイハウザーに鎮圧させた。

こうすることで彼やロイガンが魔王に就任しやすくさせると同時に政府上層部の信頼も得やすい状況を作れる。

現に上層部の間ではサーゼクス達を解任し、デイハウザーとロイガンの二人を魔王の座に据える案が出ているらしい。

「安心してくれ、オフィス。ここまでは全て俺の計画通りに動いている。順調だ」

とはいえ、懸念事項は幾つか残っている。その最たるが、ソーナ・シトリー及びその眷属の足取りが掴めていない点である。

どうやら政府によって一家とは別の場所に匿われていたようだが、頭脳明晰な彼女のことだ、交渉材料に使われる可能性を危惧して逃走したのだろう。

無論、顔を知られている冥界には潜伏していないだろう。人間界、それも駒王町と離れた地域に隠れた可能性が高い。

悪魔とはいえ別に彼女から危害を受けた訳でもないし、細々と暮らすなら見逃すか、と一瞬考えたものの、彼は即座に却下する。

「いや、駄目だな。やるんなら徹底的にだ」

彼女達はきつと第二の兵藤一誠になる。長い年月を経て必ず彼の目の前に立ち塞がる。

その目的は復讐で、対象は彼の子供だ。ならば絶対に見つけ出して始末しなければならぬ。

そして、もう一つ妙な点がある。

避難民とした送り込んだ旧魔王派の残党部隊の中で、未だに連絡が取れない者達がいる。それも一人や二人ではない、デイハウザーが潰した分を差し引いても明らかに多過ぎるのだ。まるで集団で忽然と消えてしまったかのように。

決起する前に、避難民の段階で政府軍にバレて捕縛されたのか。それなら公式発表で言及する筈だ。旧魔王派が裏で反乱の糸を引いていたと言え、責任を押し付けられる。

——俺の把握していない第三者が動いているのか？

このときは仮説に過ぎなかったが、後に正しかったことを証明されることとなる。

「どうした、フリード。そんな血相を変えて」

「マジでやべえんすよ!! ルフェイたんがっ、ルフェイたんが血塗れで帰ってきた!!」

それも最悪の形で。

私は、森の中を必死で逃げていた。

鬱蒼と木々の生い茂る一帯は、陽の光は葉に遮られてしまい常に薄暗い。捻じ曲がった気味の悪い樹木が、灰の塊を大気に溶かした色をした霧が、私の方向感覚と視界を狂わせる。

どうやらこの森は何処までも侵入者に容赦がないようで、枝も葉も草に至るまで鋭い棘が生え揃っており、服と皮膚を裂いて肉を抉ってくる。

荒い息を吐きながら後ろを振り返る。奴等の姿はまだ見えない。けれども、「ああ良かった」と安堵することは許されない。そもそも休息を取る場所すらない。

森の中での休息といえば大木の根に腰を降ろしたり、大きめの岩に背中を預けるものだ。どうしてもこの棘と霧の迷宮で背を預けることができるだろう。きつと少しでも預けてしまえば今度は肉もろとも背骨を持っていかれてしまう。

杖は、森に突入してから二度目の交戦で使い物にならなくなった。疼くような痛みが原因で術式構築に集中できなくなり、やむを得ず逃走した。何故か、連中は追ってこなかった。

「……ヴァーリ様は、お兄様は、皆様は……」

仲間の顔が脳裏に浮かんでは泡と化して消えていく。森のあちこちから悲鳴が、聞き慣れた声色で響いてくる。連中は私達を各個撃破しているんだ、と片隅で考えた。

正直なところ、当初の私は少し楽観視していた。私だけでなくチームメンバーの殆どがそうだったと思う。例外はヴァーリ様と、お兄様ぐらい。でも、根本的にジャンキーな二人は普段通りの獰猛な笑顔を垣間見せていた。

負ける気はしなかった。このチームならどんな相手でも乗り越えられると信じていた。

そんな根拠なき自信はあっさりとへし折られた。

リゼヴィムの蘇生させた邪龍グレンデルによりヴァーリ様は吹き

飛ばされ、残された私達も強化された吸血鬼の軍勢に包囲された。何とか森に逃走したけれど、散り散りにはぐれてしまい、今やこうして一人ずつ力尽きている。

弱点である光を克服した今、彼等は狩ろうと思えば容易く私達を狩り尽くせるだろう。それだけ吸血鬼の軍勢は個々の実力も練度も高い。

しかし決して強引に攻め込む姿勢は見せず、囲みを狭めながら着実に倒していく。或いはこの森自体が意思を持つ天然の包囲網かもしれない。だって、最初に訪れた際はこんなに棘だらけではなかった。ズル、と根に躓いて転倒。その衝撃で近くの棘や地に生える刃の草が腹に突き刺さった。

「ああ……っ……ひい……」

また肉が巻き取られ削がれた。靴はとうに底の部分が削り取られてしまい……一歩を進む度に無防備な足裏に激痛が走る。それでも私は逃げなければならぬ。立ち止まる選択肢などない。

捕まれば私はどんな目に合わされるだろう。自慢ではないし、今となっては見る影もないだろうけれど、顔立ちもスタイルも整っている方だと自負している。黒歌様のように妖艶でも、白音様のように愛らしくはないものの、決して劣ってはないと思いたい。

だからこそ捕まった後の末路が鮮明に過るのだ。

連中の夜伽の相手をさせられるのか、それともヴァレリー様にキメラ染みた魔物と興じさせられるか。どちらにしてもそこに人権など存在しない。所属的には国際テロリストだから、という理由もあるが。

私は、更なる嫌悪感に背を押される形で前へと進む。こんな形で処女や尊厳を奪われたくないから。

これまで自由気ままに生きてきたツケが回ってきたのだ、と言われてしまうかもしれない。でも、それはそれとして、家畜以下の扱いを受け入れられる程に私は大人じゃない。

「……あ、光……っ？」

やはり転倒した際に切っつてしまい血塗れになった、舌足らずな口で思わず呟く。

罨だ、と直感した。急に森が開けるなど考えられないし、連中が今更になって私の追跡を諦めるとも思えないからだ。故にこれは罨なのだ。身も心もズタズタに引き裂かれた私を引き寄せる為の巧妙な罨である。

それでも私の足は止まらない。

もしかすれば、もしかすれば逃げ出せる……。うわ言のように繰り返しながら、私は遂に森から這い出て、

「あんれえ、これはこれは魔法使いのお嬢さんじゃありませんかあ!! もしかしてえ、おじさん達とお、遊びたいのかなあん? うひゃひゃひゃひゃひゃ」

背後に軍勢とキメラと邪龍を従える——悪意と出会ってしまった。そこから先の記憶は……。どうか忘れさせて欲しい。

生きていることに感謝したくない日が訪れることなど私は知りたくなかった。

——l i f e . 8 6 ルフエイ・ペンドラゴン——

キメラも最後にはすっかり満足したのだろう、上機嫌そうに私を地面に放り捨てる。その衝撃で、遂に左腕さえ折れた。不思議と痛みは感じなかった。

「気に入ったから逃がしてやろう」リゼヴィムが笑いながら転移の術式を展開した。一瞬で宙に魔力の文字が浮かび上がり、一人が通り抜けるには十分なサイズの魔法陣を形成していく。「特別サービスで回復だけしてやろう。腹に刻んだ伝言は別だけど」

「あ、でもでも彼氏きゅんには隠したい年頃かなあ? うひゃひゃひゃひゃひゃ」

胃酸と記憶が逆流して、口の中に特有の生臭さが一気に込み上げる。もう何度目かになるか分からない嘔吐、それでも消えてくれない腹の中の渦がまた嘔吐を促す。

気持ち悪い気持ち悪い……。気持ち悪い……。

一刻も早くこの場を離れたくて、転がり込むように転移術式へと走

る私。

でも、その腕をリゼヴィムが掴んだ。「おっと、帰る前にもう一回だけゲームに付き合っつて貰おうかなあ？」私は必死に振り払おうとした。元々の力の差に加えて、衰弱しきっていた私ではどうしても抗えない。

仕方がなく、抵抗を諦めた。ここで彼の機嫌を損ねてしまったら……私は死ぬことすら許されない。そんな末路をリゼヴィムの笑顔の裏に見たからだ。それならまだ大人しくしていた方がマシだろう。「打算的な女は嫌いじゃあないぜ？」

リゼヴィムは私の首筋に触れながら言った。次にパチン、と指を鳴らす。

今度は誰の相手をさせられるのか。自暴自棄に似た覚悟を決める私だったが、吸血鬼達に連れてこられた人影は全く想定外で、しかし心のどこかで納得してしまう三人だった。

私の仲間である猫姉妹と、救出予定だった神器所有者だ。全員が猿轡をされていて、残念ながら会話はできそうにない。

ああ、彼女達も私と同じように捕まってしまったんだ。

衣服が乱れていない点から私のように乱暴はされていないらしい。良かったと安堵する私と、どうして自分だけと唇を噛む私があった。

リゼヴィムは司会者のように恭しく一礼すると、拘束された三人の少女を指差した。

「さーて今回のチャレンジャーはルフエイちゃん!! 果たして彼女はどのような選択を降すのか、非常にひじょーにい楽しみでヤンす!! うひやひやひやひや♪ じゃあ早速、運命を決める大切な質問しちやおーかなあ? デデン、問題っ!!」

——自分の代わりに仲間を永遠の奴隷に落とすか、仲間の代わりに自分を永遠の奴隷に落とすか。さあ、どっちだ!?

そこから先の記憶は……きつと永遠に忘れられない。

仲間に憎悪を燃やしてしまう自分がいることを私は知りたくなかった。

「ルフエイの容態は？」

「オーフィス様のお陰で細かな外傷は治療済みですわ。しかし、精神までは流石に……」

「そうか」

レイヴェルからの報告を受け、一誠の表情はより険しさを増した。事態は深刻だ。

“幽世の聖杯”所有者を勧誘すべくルーマニアへと向かったヴァーリ達は、ルフエイを除いて未だ誰一人として帰還していない。

あの国が吸血鬼達の勢力圏であり、種族の性質的に一筋縄ではいかないだろうことは一誠も予想済みだった。しかし、まさか壊滅状態に陥るとは想定外だ。

つまり、ヴァーリ達は想定を越える何者かと交戦したに違いない。そしてその者こそが、一誠の推測にあつた、影で暗躍する第三勢力なのだろう。

その推測を裏付ける証拠は、レイヴェルからの報告にもある。

「腹に刻まれた伝言、ね。随分と悪趣味な挨拶をしてくれる」

辛うじて“禍の団”本部に帰還したルフエイ。彼女の腹部には、火の魔法によるものと思われる焼き印が生々しく刻まされていた。

——Come on!!

醜く焼け爛れていたというその一文は、一誠への挑発行為に他ならない。

肝心なのは、その相手と目的が一切不明である点だ。

仮にルフエイが会話可能な状態であれば一部始終を聞き出せただろう。だが、今や彼女は精神が不安定となつてしまい、自室に引きこもってしまっている。

「ルフエイ様は、私やオーフィス様が近付こうとするだけで酷く怯えています。それに、うつすらと残されていた暴行の跡や引き裂かれていた衣服から察するに……」

そこでレイヴェルは敢えて言葉を濁したが、彼女が辿った末路など

嫌でも理解できてしまう。

「……ふざけた奴だ」

一誠は、苦虫を何匹も噛み潰した。

——life. 87 予兆——

一誠、オーフィス、レイヴェル、フリード。

赤龍帝派に属する面々は、一誠の部屋に集まり会議を行っていた。

「お望み通りに俺が出向こうか？」

『やめろ、相棒。それはあまりにも危険過ぎる』

最初に一誠が提案したが、それはドライブに即座に反対された。

彼の反応も当然だ。第三勢力の正体や目的こそ不明だが、ヴァーリ達を襲撃する為だけにわざわざ吸血鬼の国であるルーマニアを選ぶ筈がない。下手をすれば吸血鬼と交戦するリスクまで抱えなければならぬのだから。

逆説的に、連中は既に第三勢力の影響下——最低でも協力関係を結んでいると考えるべきだろう。そんな場所に乗り込むのは自殺行為だ。

「だが、相手はヴァーリ達を壊滅に追い込んだ程の手練れだ。旧魔王派の残党部隊を束にして送ったところで結果は目に見えてる」

英雄派や魔法使い派に協力を要請する手もあるが、仮に彼らまでもが潰されてしまえば目も当てられない。特に前者は、“禍の団”の存続に直結する。

首領のオーフィスが赤龍帝派の実質的な食客となり、また最大派閥だった旧魔王派が消滅した今、“禍の団”の運営は曹操達が取り仕切っているに等しく、彼らを失うことは組織の空中分解を意味する。赤龍帝派が少数精鋭であることのデメリットが、ここに来て一誠に牙を剥いた。

「そもそも旧魔王派の奴らを信用して良いんすかね？」

側に控えていたフリードが、懸念点について述べた。

「このタイミングで幾つかの部隊と連絡が取れなくなる……どう考えても怪しいでやんす」

「消されたか、もしくは既にあちら側に寝返ったと？」

『仮に相棒が第三勢力の所属だったら、と考えれば分かりやすい。旧魔王派のカス共を丸め込むだけの交渉材料を持つているとして、相棒なら彼らをどう扱う?』

「そうだな、俺ならこっつさり自陣に引き込んだ上でそのまま“禍の団”でスパイ活動を——成る程、実に面倒だな」

確たる証拠がある訳ではないが、内通疑惑が持ち上がった以上、これまでのように旧魔王派の残党部隊を使うことができない。つまり、手駒を全て奪われたと同義だ。

状況は、悪化の一路を辿っている。

当初の計画では、デイハウザーとロイガンに旧魔王派の率いる反乱を鎮圧させ続けることで、ビイディゼ討伐の功績や貴族・民衆の圧倒的支持を盾に、悪魔政府の中枢——魔王にまで成り上がらせる算段だった。

遠回りではあるものの、一度彼らを中枢に噛ませさえすれば、機密情報も人事も一誠の思うがままに操れる。没落し、影響力を失ったグレモリー家や尚も入院を続けている魔王、そしてリアス・グレモリーの今後も、それこそ風前の灯に等しい。

だが、それらは全て旧魔王派の存在が不可欠である。

計画の瓦解に頭を痛めながらも、一誠の不敵な笑みは崩れない。

「……死に損ないの悪魔なんざ何時でも殺せる。また別の手を考えるさ。それよりも先ず対処すべきは」

「謎の第三勢力、ですわね」

レイヴェルの言葉に、一誠は頷いた。

「そもそもタイミングが良すぎだ。“幽世の聖杯”の所有者を勧誘しに行ったヴァーリはチームもろとも消息不明。そして、あいつは俺と協力関係にあった」

「既に内部情報が漏れているかもしれねえ。旦那はそう言いたい訳だ」

「それが旧魔王派の仕業か、はたまた別に裏切り者がいるのかは分からんが……手足をもぎ取った末に挑発文まで送り付けてくるんだ。相手の狙いは間違いなく俺だろう」

そこで言葉を締め括ったものの、彼の脳裏には一つの不安があった。

仮に一誠が第三勢力の所属であれば、これは単なる挨拶に過ぎない。そうやって旧魔王派に注目を集めておき、その隙に本当の目的を達成する。三大勢力を相手に散々行った手口だ。

つまり、連中にとつては、兵藤一誠という存在すらも囷の一つに過ぎない筈なのだ。

では、相手の真の目的は？

「……赤龍帝？」

「大丈夫だ、オフィス。絶対に手は出させないから」

隣に座る彼女の頭を撫でながら、一誠は誓った。

「次の一手は如何なさいますか？ リゼヴィム様」

ユーグリットの問いに、リゼヴィムは手の中の聖杯を弄びながら笑う。

「そうだなー、ヴァーリちゃんとそのお友達はずち殺したし、これで赤龍帝がぶちギレて乗り込んでくれりや楽なんだけどなー☆」

「彼は中々の策士と聞きます。彼らにとつて我々の正体が不明である以上、情報収集に留めるのでは？」

「そりゃー赤龍帝はクソザコの孫と違って賢いし、早々に仕掛けては来ないっしょ」

リゼヴィムの中で、兵藤一誠の評価はすこぶる高く、決して侮つてはならない強敵と認識していた。単純な戦闘能力だけではない、知力と武力と統率力を兼ね備えた、“王”の道を進む男である、と。

“女王”グレイフィアを圧倒する実力は勿論のこと、三大勢力連合との戦争の裏でデイハウザー達の政界進出を推し進める知謀、そして代表を失い瓦解寸前だった旧魔王派を戦力として吸収する統率力。

ドライグや仲間の助言もあるだろうが、それを差し引いても三大勢力を翻弄して見せた手腕は、素晴らしいの一言に尽きる。

だからこそ、リゼヴィム達も入念な準備を整えた上で彼に挑もうとしているのだ。

「ま、今回はヴァーリちゃん達の死体を手に入れたってんで満足するさ！ うひゃひゃひゃひゃ♪」

挑発文を送り付ける為に敢えて見逃したルフェイを除き、捕縛したその他のメンバーは全員始末した。言うまでもなく彼らは“禍の団”の構成員であり、兵藤一誠とも協力関係を結んでいる。

「そして俺らの手中には死者蘇生を可能とする“幽世の聖杯”があるつてばよ。つまりヴァーリちゃん達がこれから何をやっても、どの勢力に喧嘩を売っても、世間は兵藤一誠の命令だと見なす……冤罪押し付けるの気持ち良すぎだろお!! あ、ユーグリット君やグレンデル君が猫姉妹をサンドバッグにして遊びたいって言うなら喜んで貸し出す

けど?」

「必要ありませんね。私は姉さんが手に入れば満足なので」

『オレ様もいらねえよ!! ちゅーかよお、何時になつたら今代の赤龍帝と戦えるんだよ? 赤龍帝と戦争できるって言うからオレ様はお前と手を組んでるんだ!! その契約を忘れるなよ!』

リゼヴィムのおふぎけを一蹴すると、今度はグレンデルが彼に詰め寄った。

“幽世の聖杯”によって現世に蘇生した邪龍グレンデルは、ヴァーリを叩き潰したただけでは消化不良であり、このままでは他神話に乗り込まんとする程に苛立ちを募らせていた。しかし、独断行動をされてはリゼヴィム側としても大いに困る。

かくして思案の末に、リゼヴィムは蘇生させた本来の目的である兵藤一誠の存在について話し、そして興味を持った彼は一誠との戦闘を条件に協力を約束したのだった。

そのような経緯で協力関係を結んだが故に、リゼヴィムもまた胸中に不安を抱えていた。

一誠を倒すまでひたすらこの邪龍の機嫌を取らなければならぬ点もだが、最大の要因は目的を達成した後である。

そのまま現世で好き勝手に暴れ回るならまだしも、最悪の場合は牙を剥く可能性も否定できない。そして、“神器無効化”以外に突出した能力を持たないリゼヴィムでは、グレンデルを到底抑えられないのだ。

とはいえ、彼にとっては一抹の不安ではあるものの、さして脅威には感じなかった。

寧ろ、その日を楽しみにすら思っている点に、リゼヴィムという男の狂気が垣間見えていた。

「まあまあ、落ち着いてよ。赤龍帝との戦争はド派手にいかなきゃつまらないだろ? 二人の戦いには最高の舞台と演出を用意しよう!! それまではラードウン達と遊んでてよ!!」

『……赤トカゲは楽しめるんだよな? お前のクソ孫みてえに期待外れだったら契約違反でお前からぶち殺すぞ』

「単騎で三大勢力連合の軍勢を壊滅させたって言えば納得するかね？」

『ほー、少しはやるじゃねえか!! 仕方ねえ、今は大人しく我慢してやらあー!』

「うひゃひゃひゃひゃ♪ 話が早くて助かるぜ!」

彼の怒りのオーラが霧散したことを確認してから、リゼヴィムは続ける。

「その代わりに余興がてら、幾つかのバイトも回すからさ! 準備運動も兼ねて楽しんできてよ!!」

—— l i f e . 8 8 悪意③ ——

襲撃部隊を連れて上機嫌で部屋を出ていくグレンデル。そんな彼の背を眺めつつ、ユーグリットは胸を撫で下ろす。

「どうやら上手く懐柔できましたね」

「あつぶねー、今から怪獣大決戦するところだったぜ! まあ、それならそれで楽しそうだけだな! うひゃひゃひゃひゃ♪」

「駄目だコイツ……ところで、グレンデルだけでも過剰戦力なのに彼らまでも預けるとは。やはり連中には三大勢力を襲わせるつもりですか?」

「んー? いや、なーんも指示してねえ。ルーマニアの後は適当に暴れて来いってだけ☆」

魔獣とヴァレリーのイチャコラをポップコーン片手に眺めながら、リゼヴィムは淡々と答えた。

「さつきも言ったけど、大事なのは別に襲う相手じゃねーんだわ。誰が襲うか、つてのがミソなだけで、それさえクリアすれば相手が吸血鬼だろうが北欧だろうが地獄の盟主共だろーが興味ねーよ。そんなことより、監視術式の準備は万端か?」

「ええ、ご命令通りに」

「オーケー! エルメンヒルデに連絡して、吸血鬼勢力として国際的に緊急メッセージを発表するように指示しろ!!」

悪意は、続く。

「——“禍の団”の襲撃を受けた、つてさあ!! うひゃひゃひゃひゃ♪」

Alter native.
life. 89 探り合い

吸血鬼勢力の本拠地であるルーマニアが「禍の団」の強襲を受け、都市の幾つかが壊滅。犠牲者は何千人にもなる。

身に覚えのない襲撃が、大規模な破壊活動の証拠とされる映像付きで全世界に出回った。

そして、その映像にはルフエイ以外のチームメンバーと謎の漆黒のドラゴンを率いるヴァーリの姿がハッキリと捉えられていた。

フリードからの報告を受けた一誠の表情は、これまでになく驚愕と焦燥に包まれていた。そして直ぐにテレビで流れている吸血鬼勢力の緊急速報を自ら確認し、その顔が更に苦しそうに歪む。

「……これは不味いっすよ、旦那」
「最悪だ」

思わずテレビを破壊したくなる程に、一誠は激昂した。
打たれた先手は、あまりにも痛い。

ヴァーリが「禍の団」所属であることは三大勢力のみならず各神話も既に把握済みだ。その彼が、三大勢力とは何ら関わりのない吸血鬼の勢力圏を襲撃した——これが果たして何を意味するのか。

これまで事態を静観していた他勢力も、秘密裏に「禍の団」を支援していた日本・ギリシャ・北欧・須弥山の四神話も、様々な思惑はあれどその根底にはある種の楽観があった。一誠の標的は恨みのある三大勢力のみ——そう考えていたからこそ、彼らの戦争には介入してこなかったのだ。

だが、ヴァーリ達がルーマニアを壊滅させたことで、各神話勢力の間には少なからず不安が過った筈である。

——次は、自分達が襲撃されるのではないか？

「これで支援も打ち切り、それどころか下手すりゃ今度は神話連合と戦争に突入……第三勢力もまた厭らしい手を使ってくるでやんすねえ」

「ふざけている場合ではありませんわよ?」

軽口を叩くフリードに、レイヴェルが釘を刺した。

「オーデイン、ゼウス、帝釈天、天照……世界でも指折りの強者たる主神が各神話の猛者を率いて、しかも徒党を組んで攻め寄せてくるかもしれないのです。その戦力は先の三大勢力連合とは比べ物になりませんわ。オーフィス様は兎も角として、私達では」

「十秒も生き残りやノーベル賞つすわ」

「後で四神話には連絡するが……弁明を信じてくれるか怪しいな。戦争か、そうでなくとも」

「禍の団」による三大勢力外の襲撃、という事実が存在する以上、仮に弁明を聞き届けてこれまで通りの支援を約束されたとして、それを口実に何かしらの対価を要求されるかもしれない。

そして、それは間違いなく一誠——厳密にはオーフィスの身柄だ。保護の名目で、彼らは終戦後に配下に降るように要求されるだろう。拒否すれば、今度こそ神々との戦争だ。

三大勢力と神話勢力——同時に戦局を抱える人的余裕など、一誠は既に奪われた後だ。

「どこの誰だかは知らないが……随分と大層な挨拶をしてくれるじゃないか、クソツタレめ」

——life. 89 探り合い——

「一先ずは現状を整理致しましょう」

そう言いつつ、レイヴェルは用意したホワイトボードに要点を書き込んでいく。

「ヴァーリ様率いるチームが吸血鬼勢力圏のルーマニアを壊滅させた。それにより“禍の団”——より厳密には一誠様が掲げていた、三大勢力への報復という大義名分も意味を成さなくなりましたわ」

「で、襲撃される可能性を恐れる神々が戦争を仕掛けてくるかもしれない、そうなったら“禍の団”はボスを除いて死屍累々、と。わーお、見事に詰みでやんすねえ」

「打つ手は、ある」

数秒の瞑目の後に、一誠は強く言い切った。

「その前に幾つか調べたいことがある……ドライグ、ヴァーリと行動を共にしていた黒いドラゴンは誰だ？」

『奴の名は“大罪の暴龍”グレンデル。かつて英雄ベオウルフに討伐された邪龍にして、自分か相手が死ぬまで嬉々として戦い続ける生粋の戦鬪狂だ』

「……討伐済み、ね。自力で蘇生できるのか？」

『いや、ニーズヘッグなら兎も角、奴は特別な能力を有していない。その代わりに純粋な身体能力と耐久力は邪龍の中でも群を抜いている。肉弾戦に特化したドラゴンだ』

つまり、グレンデルは何者かの力で蘇生されたということである。その者の正体は別にして、力については既に心当たりがあった。

「“幽世の聖杯”、だろうか」

『ヴァーリ達も殺害された後に蘇生させられ、支配下に置かれたんだろうよ。さて、この盤面をどう引っくり返すつもりだ？』

「聖杯を潰す」

所有者も協力しているのか、はたまた元々の所有者から強奪したのかは不明だが、聖杯が第三勢力の手中にある限り、殺害と蘇生を繰り返すだけで相手の戦力はねずみ算式に増えていく。そうでなくとも、グレンデルのように強大な戦力を復活させてしまえば、それだけでも一誠達にとって不利だ。

故に、所有者を殺害してこれ以上の戦力拡大を防ぐことが最優先の目標となる。

「第二はどうなさいますの？」

「次はヴァーリ達だ。“禍の団”の旗を掲げたまま無作為に暴れられても困る……楽にしてやるさ」

「でもよお、旦那。あいつらが次にどの勢力を襲うか、俺ちゃんらは知る術がないじゃん？ どーやって対処するん？」

「考え方が逆だ、フリード。俺達の仕業に見せかける都合上、あいつらは必ず襲撃を続けなければならないんだ。だったら、ヴァーリが姿を現した場所に俺達も出撃するだけだ」

締め括る一誠だが、あくまで即興で考えた策の為に穴は幾らでもあ

る。特に第二の策は、ヴァーリに加えて一誠までも出てくれば、三大勢力外への襲撃の可能性に説得力を持たせてしまう。

第一の策も、所有者の居場所をどうやって割り出すか、まるで目処が立っていない。

『珍しく後手に回らされているな』

ドライグの言葉は紛れもない本心だ。

“SSS級はぐれ悪魔”に落ちてからというものの、一誠は三大勢力を相手に幾度も襲撃を仕掛け、常に秘めた計画を成功させてきた。それが今回は窮地に陥っている。

三大勢力が不甲斐なかった、と言ってしまうえばそれまでの話だが、こうまで先手を取られる姿は初めてだ。

「それでもないぞ？ 敵も隙を見せているからな。どうやら完全な一枚岩でもなさそうだ」

『……ほう？』

「最大の失敗は、この段階でグレンデルを出撃させ、挙げ句に映像に乗せて発表した点だな。後者は単に編集ミスとしても前者は……奴を抑えきれなかったんだ」

本場に“禍の団”の仕業に見せかけるなら、ヴァーリ達だけで充分過ぎる程に効果がある。にも関わらず、既に討伐された筈のグレンデルも映像の中で暴れ回っていた。

もしかすれば、兵藤一誠が“幽世の聖杯”をも手に入れたと神話勢力に思わせ、危険度を吊り上げる為の作戦かもしれない。

「ですが、この緊急発表を一誠様もチェックすることは容易に想像できます」

レイヴェルは、その可能性を否定する。

「グレンデルの件は、逆に一誠様へのヒントになりかねません。わざわざそのような下策を取る意味がない」

『そもそもグレンデル討伐は記録にも残されているし、神々も知っている。今になって復活したところで寧ろ違和感しか与えんさ』

「相手にとってはデメリットしかねえって訳だ。真つ当な奴ならそんなことは指示しねーから……戦闘狂の我が儘に付き合わされたって

ところかね？」

「完全な支配も素直に恭順させることすらもできなかつたんだろうよ。そして根っからの戦闘狂のドラゴンだと言うのなら」

一誠は、笑みを浮かべる。

「満足するまで叩き潰してから情報を吐かせるさ」

それはまるで古の“赤龍帝”に似て、獰猛なものだった。

「よし、赤龍帝へのサプライズも成功したしい？ 次はいよいよ三大勢力を襲っちゃおうか!! その役目はグレンデル君に任せるよ!! うひゃひゃひゃひゃ♪」

『グハハハハッ!! オレ様に任せとけ! 赤龍帝と戦う前の準備運動がてら軽く更地にしてやるからよお!!』

「ルーマニアのように、ですか?」

深い深い霧に包まれた古城の最奥に、複数の心底楽しそうな声が響く。

リゼヴィム、グレンデル、ユーグリット。世界の裏で暗躍を重ねる通称“第三勢力”の主要メンバー達だ。その誰もが古の大戦を生き残った、もしくは伝承に名を刻んだ猛者であり、そこらの弱小勢力ならこの三人だけで滅ぼせるだろう。

その内の一人であるユーグリットが、わざとらしく溜め息をつきながら窓の外を見下ろす。

窓の外の光景は、更地である。

かつて鬱蒼と生い茂っていただろう家々の森も、そこで細々と暮らしていただろう吸血鬼達の死体すらもなく、彼の眼下には焼け野原だけが広がっていた。

『あん? 別にぶっ殺しても構わねえカス連中だったんだろ? なあ、リゼヴィムよお』

グレンデルの問いに、リゼヴィムはワインを煽りながら上機嫌で答える。

「そりゃー勿論だとも! スラム街に暮らしていたのは混血や最下級ばかりの、使い捨ての戦力にもならねえゴミ吸血鬼ばかりでさあ? 強化するのも面倒だから消毒してもらったぜく!! 吸血鬼のお偉いさんも喜んでたから無問題っしょ? うひゃひゃひゃひゃ♪」

「ふふ、酷い方だ。ゴミは指定区域に集めた方が管理しやすい、と提案したのはリゼヴィム様でしように」

「出荷用に幾らか残してやっただけ温情だっちゅーの。さーて、雑談

はこのぐらいにして……」

リゼヴィムは、宙に浮かべた映像術式を片手で器用に切り替えていく。そして操作を終えた直後、三分割された画面に三人の男の顔が映し出された。

熾天使ミカエル、墮天使総督アザゼル、魔王ファルビウム。

「――遠慮も捕虜も必要ない。存分に暴れろ」

——l i f e . 9 0 悪意④——

「ファルビウム様、緊急通信が届いております」

そう言つて息を切らして駆け込んできた部下の姿を一瞥するや、ファルビウムは書類作業を即座に打ち切り、真剣な表情で訊ねる。

「誰からだい?」

「神の子を見張る者”総督のアザゼル様です」

「……また厄介事でも起きたか」

溜め息を吐く彼の脳裏には、兵藤一誠の顔が鮮明に浮かんだ。

兵藤一誠と三大勢力連合軍が激突した、通称”連合戦争”から一週間あまりが経過した。冥界には戦争の傷が今も痛々しく残されており、復興作業も遅々として進まない毎日だ。特に戦場となったシトリ―領の美しい自然は見る影もなく、まるで大災害が通り過ぎたかのような荒れ地と化している。

仮に一誠絡みの事件なら、今度こそ三大勢力は滅ぼされる。

戦々恐々としながらも通信術式を開いたファルビウムの耳に飛び込んできたのは、怒号と悲鳴が混じり合った叫びだった。

『――ファルビウム、無事だったか!』

「アザゼル……?」

やや遅れる形で聞こえる総督の声音が、墮天使勢力の状況を鮮明に語っていた。故に、まどろっこしい質問はなしに、単刀直入に訊ねる。

「……兵藤一誠か?」

『分からねえ! 分かりたくもねえ!!』

「……なに? どういうことだ?」

半ば確信を得ていたが為に、ファルビウムは思わず驚愕を漏らした。

その間も術式の向こう側から響く叫び声の数々が、「神の子を見張る者」本部に襲撃があつただろうことを伝えている。ならば、兵藤一誠が仕掛けてきたと推測するのも当然だが、意外なことにアザゼルは肯定も否定もしなかつたのだ。

「なら、相手は誰なんだ？」

『漆黒の鱗を持った巨大なドラゴンだ。俺の記憶が正しけりや、あれは「大罪の暴龍」グレンデルに間違いねえ。この間の吸血鬼共の発表にもあつただろ？』

「あの胡散臭い動画かい？」

『俺も自国の反乱分子の粛清を隠す為のフェイクニュースだと思つた。奴の復讐対象はあくまでも三大勢力だ。縁も所縁もないルーマニアなんざ襲撃する筈がねえ、つてな。それで連中の茶番を大笑いしてたらこの有り様だ』

「神の子を見張る者」は壊滅状態だ、とアザゼルは続ける。

『つい先程、グレンデル達のせいで本部施設が瓦礫の山、部下達は大半がミンチにされちまつた。幹部も……迎撃したアルマロスとバラキエルが、死んだ。俺とシエムハザの二人がかりでようやくと撤退まで追い込んだが、今回はあまりにも被害が大きい。組織の再建にどれだけの年月が必要なんだろうな……』

「待ってくれ。あの映像が正しかつたのなら、もしや襲撃犯は」

『……ヴァーリは、もう俺の息子じゃねえ』

暫くの沈黙の後に術式から溢れた眩きは、憎悪に満ち溢れていた。

『——戦友^{バラキエル}を殺しやがった仇だ』

「……そうか」

それ以上の言葉を紡げずに、ファルビウムは押し黙つた。しかし、その間も高速で思考を巡らせているのは、彼がまだ辛うじて悪魔を率いる魔王の座にあるが故だ。

今回の一件は奇妙な点が多すぎる。

先ず、「神の子を見張る者」襲撃をグレンデル達に指示したのが兵藤一誠だと仮定した場合、その前にわざわざル^吸血^鬼勢^力マニアまでも強襲した理由が分からない。

吸血鬼達を襲う何かしらの目的があつたとしても、敢えてグレンデルを復活させた理由も不明である。戦力補充を狙つたにしろ、一誠自身も相当な実力を持つことは今更疑いようもないし、そもそもオーフィスだけで過剰戦力だ。

そして、恨みのある悪魔ではなく墮天使を標的に選んだ理由も見えてこない。折角、手間隙かけてグレンデルを甦らせたのだ。冥界に差し向ければ半日足らずで壊滅するというのに、実際に壊滅したのは墮天使だった。

—— 妙だ。奴にとって、あまりにもメリットが無すぎる。

瞑目し、これまでにも掴んだ点と点を線で繋いでいくファルビウム。このような場合、物事を逆から考えると真実への糸口が見付けやすいことを、彼は充分に理解していた。

—— 兵藤一誠は、必ず自分の目的が達成されるように策略を練ってきた。逆説的にそれは、目的と無関係な作戦は行わない、とも言える。当然だね。

—— 次に今回の件を整理すると……吸血鬼も墮天使も邪龍も、別に彼らに拘らずとも復讐はできる。寧ろ、今回の一件は明らかな悪手だ。

—— ありとあらゆる部分が復讐に繋がらない。そして、兵藤一誠は目的と無関係な作戦は行わない。

—— 兵藤一誠は、無関係？

『—— おい、ファルビウム!? 返事しろ!!』

「……アザゼル、少しばかり僕の仮説を聞いてくれないか？」

『なんだよ、驚かせんな。ずっと黙りこくってたからお前も襲われたのかと思つたぜ。で、その仮説ってのは?』

「これは僕の予想なんだけど、今回の一件の首謀者は恐らく——」

その先を、ファルビウムは続けることができなかった。

何故か？

『オレ様のことは知ってるよな、クソツタレの悪魔共! ルーマニアの映像は全世界に流れたもんなあ!! だったら、オレ様がこの場に現れた理由も悪魔の運命も分かるよなあ!! グハハハハッ!!』

『……我が名はヴァーリ・ルシファー。赤龍帝の名の下に、お前達に裁
きを与えよう』

冥界の空に、悪意が姿を現したからだ。

首都リリスの上空に、五人の影が佇んでいた。

「大罪の暴龍”グレンデル、それに白龍皇ヴァーリ……何を求めてここに来た、と訊ねるのは愚問なんだろうね」

二人の侵入者を睨みながら、ファルビウムは迎撃体勢を整える。しかし、長く前線を離れていたことによるブランクがあまりにも重たく、彼らに容易く殺害されてしまうだろう未来は容易に想像できた。

共に出撃した政府軍を考慮に入れても結末は変わらない。先の連合戦争で経験豊富な将兵の多くを喪った軍は、その実態は軍とは名ばかりの烏合の衆に成り果てた。下手をすればファルビウムよりも先に全滅してしまうだろう。

「貴様らの目的は知らんが、私の前で好き勝手などさせんぞ」

「私達を嘗めないことだ」

では、報を聞いて駆け付けてきた”皇帝”デイハウザーと、彼に並ぶ”女帝”として知られるロイガンはどうか？

確かに戦力としては申し分ないが、少なくとも前者は兵藤一誠の内通者であり、腹の中で何を考えているのか分かったものではない。それこそ最悪の場合は背後から撃たれる可能性もある。

それに、ロイガンとて完全な白とは限らない。デイハウザー同様に内通しているかもしれない。

「……これは、詰んだかな」

前門に邪龍、後門に次期魔王を抱え、顔をしかめるファルビウム。そんな彼に、グレンデルが笑いながら言う。

『グハハハハッ!! どうしたどうしたあ、悪魔の王様ともあろう奴が辛気臭い顔すんなよ!! お前らは戦いが大好きな種族だって聞いてるぜえ!?! だから昔も今も戦争ばかりしてきたんだろ!』

「やれやれ、耳が痛いな」

『ま、細けえことは気にすんなよ! これからお前らの大好きな祭りが始まるんだぜ? だからさあ……』

そこで、グレンデルは敢えて言葉を区切る。

『——本気で来いよ?』

ドラゴンの笑みを狼煙に、蹂躪劇の幕が開けた。

——life. 91 グレンデル③——

『グハハハハッ!! “皇帝”の称号はお飾り、つてかあ? そんな生温い魔力弾なんざ痛くも痒くもねえなあ! もつと全力で挑まなきゃ死んじゃうぜえ? 無敗のデイハウザーなんたらさんよお!!』

グレンデルの高笑いに呼応して、魔力弾の一斉掃射がデイハウザーに襲い掛かった。以前に一誠が放った隕石に比べると流石に小粒だが、それでも其々の質量と速度は異常の一言に尽きる。彼の周囲から消えたと思えば、次の瞬間には視界全てを覆っているのだ。

しかし、デイハウザーは魔力弾を上回る速度で空中を自在に飛翔し、雨霰と飛来するそれらを全て紙一重で回避していく。防御ではなく回避に専念したのは少しでもダメージを抑える為だ。

「無敗の“皇帝”を甘く見るなよ……ッ! 貴様のような戦闘狂には負けん!!」

『お前だって同類じゃねえか! “レーティング・ゲーム戦闘ごっこ”で成り上がった分際で一丁前にはぎいてんじゃねえ!!』

「どうでもいいけど、僕もいるってことを忘れられては困るね」

デイハウザーに意識が向いたほんの一瞬の間隙を突き、お返しとばかりに今度はファルビウムが魔力の弾幕を発射した。

ブランクが長いとはいえ、仮にも戦争を生き残り続けた猛者である。流石に全盛期から実力を落としているものの、その威力と精度は未だ健在だった。

だが、相手があまりにも悪すぎた。

なんと視覚外からの一撃だったにも関わらず、グレンデルは咄嗟に反応したのである。それどころか顔に掠めそうになった弾の一つを片手で受け止め、そして悠々と握り潰して見せたのだ。

グレンデルは何ら特殊な能力を持たない代わりに、身体能力と耐久力は邪龍の中でも群を抜いており、単純な近接戦闘だけなら邪龍の筆頭格たるクロウ・クルワツハにも匹敵するという。

そして、これはファルビウム達は知る由もないことだが、彼は蘇生

時に“幽世の聖杯”によって全能力が大幅に強化されている。現に魔王の全力の魔力弾を手で受け止めたというのに、痛がる様子を欠片も見せない。

これが何を意味するのか。

『不意打ちたあ、嘗めた真似してくれんじゃねえかよ』

「お褒めに預かりありがとうと言っておくよ。何せ僕らは戦争ばかりしてきた悪魔なものでね」

『……言うじゃねえか。ようやくと本気で挑むつもりになった、つてことだよな？　じゃあオレ様もちいとばかり本気を出すとするか
なあッ!!』

グレンデルは、未だ実力の底を見せてはいない。

瞬間、彼を中心に莫大な深緑色のオーラが放射され、その余波が凄まじい速さで首都上空を呑み込んでいく。

「不味い……っ!!」

「クソッ!!」

撒き散らされる悪意の波動に、思わず二人の表情が歪んだ。とはいえ、それは暴力的なまでの波に屈した訳ではない。防御の魔力を持って産まれたファルビウムや、“皇帝”の名の下に無敗記録を積み上げてきたデイハウザーにとって、この程度の挨拶はどうにでもなる。

ただし、避難の完了していない民衆達は別だ。

襲撃を感知した時点で避難誘導を命じてはいるが、時間的な余裕が足りなかった。特に避難に時間のかかる病院施設には、まだ避難中の悪魔達が残っている筈なのだ。

と、彼らの焦燥の理由を悟ったのか、グレンデルは口角を吊り上げる。

『なんだよ、逃げ遅れたカス共を心配して本気が出せねえのかよ!?
グハハハハッ!!　おいおい、それならそうと早く言いやがれ!!　それ
つらを今すぐぶっ殺して後腐れなく戦えるようにしてやつからよお
!!』

そう言って嘲笑うも、ふと二人の様子が変わったことに気付いた。

「……魔王ファルビウム。とある提案がございますが、お聞きになら

れますか？」

「どんな提案なのか、大体の予想がつくけど……裏のご主人様に確認しないで構わないのかな？」

「さて、何のことやら。しかし、仮に“皇帝”に仰ぐべき主君がいたとすれば、デイハウザー・ベリアルはお叱りを受ける覚悟で決意を貫くでしょうな」

亡きクレリアの復讐を目指すデイハウザーだが、彼自身としてはその為に多くの民を巻き添えにするつもりなど無かった。正すべき悪魔上層部の腐敗と守るべき民衆は別なのだ。

そして、仮に今回の独断行動を兵藤一誠に咎められるとしても、彼は目の前の邪龍を食い止める覚悟だった。

尤も、一誠とグレンデル——その裏にいる黒幕、両者の関係性を考えるに咎めを受ける可能性は低いのだが。

「なんだ、気付いていたのかい」

「当然でしょう。赤龍帝があのような杜撰な計画を立てる筈もない。それよりも提案に対する返答を聞いておりませんな。どうなさるおつもりで？」

「……決まってるよ。冷静に考えて、そうしないと撤退に追い込めないからね。ああ、本当に面倒事ばかり襲ってくるなあ」

デイハウザーの問いに対して、ファルビウムは改めて彼の隣に並び立った。

それが、答えである。

『グハハハハッ！ まさか、お前らが共闘するたあ思わなかったぜ！ オーケーオーケー、二人揃ってオレ様が地獄に放り込んでやらあ！！』

「来るぞ、デイハウザー！！」

「分かってる！」

激戦は、尚も続く——。

グレンデルの纏うオーラが、一段とその強さを増した。比例して、ブウウウン、と深緑のプラズマが迸る。

生まれながらに有する、他の邪龍の追隨を許さない驚異的な身体スベック。それが“幽世の聖杯”の能力により底上げされた今、グレンデルはかつて討伐された際とは比較にならない力を獲得していた。

『……フフ、ハハハツ、グハハハハツ!!』

手を軽く握り締め、開き、それを何度か繰り返す。次に漏れたのは狂喜だ。

英雄ベオウルフとの死闘の末に敗北し、無念の内に討伐こそされたものの魂は——抑えられない戦闘への渴望だけは消え去ることはなかった。仮に数百数千年の月日を経ようと、邪龍特有のしぶとさで蘇生してみせるつもりだった。

それが、聖杯によって新たな肉体と力、何よりも欲して止まない戦場を与えられた。

故に、今のグレンデルにあるものは、未だ見ぬ強者、未だ見ぬ戦場を見付けたことへのどうしようもない歓喜だった。

そしてそれが、邪龍グレンデルの生きる意味の全てである。

『フフ……やっぱ、オレ様は戦闘狂だ!! 戦闘が好きで好きで堪らねえ、己の衝動に準じて生きる最強最悪の邪龍だ!! さーて、頑張ってオレ様を楽しませろよ、悪魔共! なんとたってお前らが挑むのは——“大罪の暴龍”グレンデルだからよお!!』

飽くなき戦闘欲求が更なる暴風に姿を変え、対峙していたデイハウザーとファルビウムを一息に呑み込まんと襲う。

しかし、勢い任せの戯れが魔王クラスの実力者である彼らに届く筈もない。風の隕石は容易く避けられ、そのまま大通りの一部に着弾——数瞬遅れて、衝撃と余波、巻き上げられた大量の土砂が三人を覆った。着弾箇所を一瞥し、デイハウザーは内心で冷や汗を流す。

道路に、巨大なクレーターが抉じ開けられていたからだ。

直撃すれば重傷は免れなかっただろう邪龍特有の挨拶に改めて種

族間のデタラメな力量差を思い知らされると同時に、気を引き締め直す。

「なんとという破壊力だ……まったく、これだからドラゴンの相手は嫌なんだ。勝てる気がまるでしない」

体勢を整えながら、ファルビウムは困ったように愚痴る。若かりし頃に戦った全盛期の二天龍といい、兵藤一誠と激突した連合戦争といい、彼はどうにもドラゴンと戦う運命にあるようだ。

尤も、それら全てを生き残ってきたのも揺るぎない事実である。

現に対峙している間も回避する瞬間も、ファルビウムの脳内は、果たしてこのイカれた邪龍をどうやって撤退させようか、その策を練ろうと躍起になって足掻いていた。

そして、ただ一つの、賭けに等しい作戦を思い付く。

「……デイハウザー、提案がある」

「ほう、もう作戦を練られたのですか。流石は知将ファルビウム殿ですな」

「ものつすごい棒読みで言われても説得力に欠けてるよ。どうせ君も、兵藤一誠に手玉に取られてよくも知将やら魔王やら名乗れるな、と陰口を叩いてるクチだろう?」

「おやおや、それはそれは……魔王様に向かってそのような無礼を働く愚か者が世の中にはいるものですなあ。是非とも顔を拝んでやりたいですな」

デイハウザーの嫌味に、ファルビウムはわざとらしく肩を竦めた。

「連中なら今頃は屋敷に引き込もっているだろうさ。これだから口だけの上層部共は始末が悪い」

襲撃の報せは政府上層部にもとつくに届いている筈である。それにも関わらず一人の応援すら寄越さないのは、つまり二人に何もかもを丸投げするつもりだろう。そして彼らが殺されれば、嬉々として責任を擦り付けるに違いない。

とはいえ、応援を寄越されたところでどうせ邪魔にしかならないのもまた事実である。

「それよりも提案の中身を聞いておりませんな。どうなさるおつもり

で？」

この事態が片付いたら今度は悪魔政府の大掃除だ、と意気込むファルビウムにデイハウザーが訊ねた。

——否、訊ねようとした。

『おいおい、このオレ様を差し置いてナイシヨ話たあ悲しいじゃねえかよッ!!』

咆哮。

次いで、デイハウザーの視界を豪腕と風圧が遮った。

回避は間に合わない。防御術式を描く暇もない。咄嗟に両腕を交差し、更にありつただけの魔力を注ぎ込み腕を覆う。だが、それも所詮は気休めに過ぎない。その程度でグレンデルの一撃を受け止めきれぬ訳がない。

刹那、魔力の鎧が陥没し、衝撃に弾き飛ばされるようにして宙へと放り出される。

「チツ……!!」

本能的に翼を展開、更に吹き飛ばされた先に何重もの障壁術式を発動することで即席のクッションとし——尚も勢いを殺せず次々と術式をぶち破り、地面に叩きつけられるデイハウザー。

着弾、遅れて轟音。

周囲一帯が大きく揺れる。

大穴を穿ち、勢いが尚も止まらずに地中深くまで沈んでいく。

「デイハウザー!!」

思わず叫ぶファルビウム。意識と視線を大穴へと向けてしまったのは、完全な悪手だ。

『今、よそ見しただろ』

その無防備な土手つ腹に風穴を空けようと、グレンデルの腕が迫る。

「——嘗めるなッ！」

即座に防御魔力を形振り構わず最大噴出し、全身を強固な要塞で包み込む。

バチンツ、と弾き合う音が響いた。

それが防御魔力がグレンデルの攻撃を跳ね返したのだと脳が認識する前に、ファルビウムは条件反射的に両掌に魔力の塊を生成する。

防御魔力で敵の攻撃をやり過ぎしてからのカウンター戦術は、現役時代からの十八番だ。魔王となつてからは久しく使うこともなかったが、脳と身体に染み付いた経験は錆び付いていない。

「受け止めれるなら受け止めてみる!!」

発射。極上サイズにまで圧縮された超高密度の魔力砲が巨大な爆発音を連れて、グレンデルの腹を目掛けて突き進む。

高速回転するドリルのように風を切り裂きながら直進するそれは、まともに受ければ相手の皮膚も肉も瞬く間にズタズタに裂いてしまえるだろう。

『ふん、そんな豆鉄砲がオレ様に効くかよッ！ 叩き潰してやらあ!!』
恐るべきは、それでも自ら嬉々として向かっていくグレンデルの狂気に他ならない。挑発に乗せられたのではない。この程度の攻撃は余裕で耐えられる、と本気で思っていたからこそ正面から飛び込んだのだ。

右手で魔力砲を握り締め、掌が裂けることなど知ったことかと言わんばかりに、そのまま消し潰そうと躍起になる。

「まさか片手で受け止めちゃうとはねえ。凄いや、伝説の邪龍ってのは」

でもね、と魔王ファルビウムは眼下のクレーターを一瞥する。

「ちよつと悪魔^{僕ら}を侮り過ぎじゃない？」

『あ?』

彼の言葉に呼応するように、地面に穿たれた大穴から高速で飛び出す一筋の影があった。

デイハウザー・ベリアルだ。

無我夢中で魔力砲を抑え込もうとしていたグレンデルを指して一直線に飛翔すると、両手に携えた魔力弾を放り投げる。

生きてやがったか、と心底楽しそうに笑いながら、残った左手であつさり掴み取るグレンデル。魔王クラスの実力者二人の攻撃を同時に凌いで見せる辺り、流星はデンマークの伝承に名を刻んだ大罪

の暴龍”ではある。

しかし、ファルビウムの言うように彼は悪魔を侮り過ぎた。

「さっさと眠りなよ」

「言った筈だ。私の前で好き勝手はさせん」

魔王ファルビウムと”皇帝”デイハウザー。

連合戦争では敵対していた二人が並び立つ。彼らの間に浮かんでいるのは、互いの最後の魔力を合わせた巨大な魔力球だ。

両手を封じられたグレンデルに、受け止める術はもう残っていない。

「まさかと思うけど逃げないよね？ だって君は——最強で最悪の邪龍だもんね？」

『……フフ、フハハ……グハハハハッ!! やるじゃねえかッ！ 認め
てやるよ、クソカス悪魔!! そんでもって、よく見とけやああ!!
ぜってー耐えて、お前らをぶち殺してやるからよおッ!!』

そして、グレンデルは魔力球に呑み込まれた。

——life. 92 グレンデル④——

「あー、しんど……」

「凄まじい強敵だったな……」

魔力球の爆発に巻き込まれて落ちていくグレンデルを眺めながら、二人はようやくと安堵の息を吐いた。

かつて討伐されたとはいえ、伝承に名を刻んだだけのことはある。
凄まじい激戦だった。

休息もそこそこに、二人は立ち上がる。ヴァーリを相手取っている
ロイガンと政府軍の安否が心配だ。

「彼女も相応の猛者だ。易々と倒されるとは思わないが、相手は白龍
皇だからな……直ぐに応援に向かわなければ」

「だったら、後処理は僕に任せなよ。グレンデルの死体を回収して、二
度と利用されないように封印措置をしておこう」

デイハウザーは応援へ。ファルビウムは事後処理へ。

二手に別れての行動を開始しようとした二人だが、

『……いつてえなあ!! やっぱ受け止めるのには限界があったか！

グハハハハッ!! お前ら、誇っていいぜ? このオレ様の鱗に傷をつけたんだからよお!!』

「な、あれを耐えるだと……」

『グハハハハッ!! オレ様の耐久力は邪龍随一だからな! それを聖杯で強化してんだから、魔王の全力の攻撃だろうと耐えるに決まってるんだろ! とところで……今度はオレ様の番ってことでいいよなあ?』

絶望は、終わらない——。

『……グレンデルめ、随分と派手に遊んでるな』

「よそ見をするとは余裕だな!!」

激戦を繰り広げる魔王達と邪龍を横目で眺めつつ、飛んできた弾幕を軽々と防ぐヴァーリ。彼方と同様に、この戦場にもまた明確な力量差が間に横たわっている。

何せ、代名詞たる“白い龍の鎧”を彼は纏っていない。純粋な上級悪魔としての力だけでロイガン率いる部隊を手玉に取っているのだ。

交戦の中で既に部隊は壊滅、ロイガン自身も重傷こそ回避しているものの目に見えて傷が多く、息も荒い。明らかに疲弊が積み重なっている証拠だ。

「チッ」

忌々しげに舌打ちするロイガン。彼女の視線の先では、無傷のヴァーリが余裕そうな笑みを浮かべている。

予想外の展開だ。

冥界を襲撃してきた彼らの実力を比較して、“白龍皇”を有しているとはいえ、彼がグレンデルよりも格段に劣るのは確実である。故に手早く片付けた後に苦戦は免れないであろうデイハウザー達の応援に向かう算段だった。

尚且つ、“白龍皇”が苦手とするだろう対多数の戦闘を強いる為に政府軍の部隊までも動員したのだ。優劣は明らかかな筈だった。

それが蓋を開けてみれば、魔力の束をぶつけられたことで部隊は早々に壊滅し、やむ無く一騎討ちを選んだロイガンも苦戦を強いられている。

自分の予測が甘かったことに、彼女は内心で幾つも苦虫を噛み潰す。

『この程度か、“女帝”ロイガン・ベルフェゴール。案外にも期待外れだったな』

「調子に乗るなよー」

両手に魔力を纏わせての突撃、つまり早期決着を試みるロイガン。

その胸には、自分の失態で部隊が壊滅してしまったことへの責任感と、テロリスト相手に負ける訳にはいかないというプライドがあった。

或いは、無自覚にヴァーリを見下していたのかもしれない。偶然にも“白い龍”を宿しただけの少年に、“レーティング・ゲーム”トツプランカーにして最上級悪魔たる自分が負ける筈がないのだ、と。

『……ムカつくんだよ、その眼』

対して、目と鼻の先にロイガンが迫っているにも関わらず、ヴァーリは眉一つ動かさない。静かに苛立ちを溢し、黙って背から黒い翼を拡げる。

十二の翼は最上級悪魔の証拠。

両手に携えた黄金に煌めく魔力と翼から放たれる白銀の波動は、神学において墮天使の側面も有する“光をもたらす者”だけに許された唯一無二の力。

即ち、ルシファーとしての力を開放したヴァーリが、神のようにただ悠然と佇んでいた。

「……綺麗」

降臨した彼の姿を一目見た瞬間に、ロイガンは動きと思考の全てを急停止させる。否、彼女だけではない。遠巻きに隙を伺っていた部隊の生き残り達も、ヴァーリの放つ輝きを見るや否や、即座に臨戦態勢を打ち切ったのだ。

これこそがルシファーの名を冠する悪魔——その中でも特に才覚に溢れし者だけが発現する固有能力、“悪魔支配”である。

ルシファーの姿を視界に入れた、或いはルシファーが視界に入れた悪魔は途端にあらゆる敵対行動を放棄し、あらゆる命令を嬉々として、それが例え自害であったとしても実行する駒に成り下がってしまう。

ただし、悪魔以外の相手には効果を發揮しないし、元の種族が悪魔以外の転生悪魔や混血悪魔にも効果が薄い。

総じて、純血悪魔との戦いに特化した凶悪な異能力である。

そして、ロイガンは名門ベルフェゴール家に名を連ねる純血の最上

級悪魔だ。

『——頭が高いぞ。俺を誰と心得ている?』

故に、ヴァーリの支配からはどう足掻いても逃れられない。

——Life・93 ヴァーリ・ルシファー①——

跪くロイガンや政府軍の連中を尻目に、どうしたものか、とヴァーリは今後について思案する。自分を送り込んだリゼヴィムからは特に指示を得ていない。グレンデルを連れて適当に暴れてこい、と言われただけだ。

果たして彼の本当の狙いは何だろうか?

お膝元であるルーマニアを焼かせ、"神の子を見張る者"本部を強襲させ、冥界の奇襲を命じたところで、一見するとリゼヴィムに利があるとは思えない。一誠に挑むと豪語するのなら、グレンデルを筆頭に聖杯で甦らせた戦力をそのまま送れば済む話である。

だが、今のところヴァーリに与えられた命令は各勢力への襲撃と、旧魔王派の残党をはじめとした手駒の確保のみに留まっている。

『いや、彼のことだ。どうせ暇潰しや遊びに過ぎないんだろうな』

あれこれと考えてみたものの、やがてヴァーリは思考を諦めた。精年齢が幼稚園児のリゼヴィムの考えを見抜こうとしたところで無駄骨だろうし、そもそも今のヴァーリは聖杯を介して彼に支配されている兵隊に過ぎない。

このルシファーとしての能力——彼自身は"魔王化"と称している——とて、"幽世の聖杯"による強化の影響で覚醒したもので、結局は付け焼き刃だ。未だ能力に慣れておらず、行使可能な時間にも限界がある。

『挙げ句に、リリスはそのルーツを辿れば人間の女性……つまり奴には効果が薄い。ああ、憂鬱だ』

「如何なさいましたか? ヴァーリ様」

『気にしないでくれ、ロイガン』

そう言っつて、ヴァーリは側近のように振る舞うロイガンを見た。つい先程まで戦っていたというのに、今のロイガンは犬のように従順だ。

新たな部下として持ち帰ろうか、と彼は思った。

敵の扱いについては特に言われていないし、彼女の实力は折り紙付きだ。政府軍の部隊も練度こそ低いが手駒には丁度良いだろう。というよりも寧ろ、ロイガンの場合は置き去りにしようものなら恨まれかねない雰囲気である。

尤も、本人が内に抱える性癖も多いに含まれているかもしれないが。

彼女の扱いは兎も角として、グレンデルが満足した頃合いを見計らってヴァーリは撤退の合図を送るつもりでいた。

「よお、この俺を差し置いて勝手に祭りを始めてんじゃねえよ」

だが、“赤い龍”が戦場に降り立ったことにより、事態は混迷を極めることとなる。

「――俺も混ぜろよ、裏切り者共」

冥界の空に降り立った兵藤一誠は、"赤龍帝の鎧"越しに軽く周囲を見渡す。その中でも先ず真つ先に視界に映ったのは、やはり襲撃者であるグレンデルとヴァーリだ。そして、即座に臨戦態勢を取る彼らの足下もしくは背後には、対峙していただろう悪魔達の姿が見える。

前者と交戦していたファルビウムとデイハウザーは一矢報いてみせたものの、グレンデルの圧倒的な耐久力を前に敗北し、今や二人揃ってボロ雑巾と変わらない有り様で地面に転がされている。実力差を考慮すれば妥当な結末だ。

それに比べて意味の分からないのがロイガンである。神の真似事をしているヴァーリの傍らに控え、あまつさえ一誠に敵対的な視線を向けているではないか。

一瞬、内通を隠す為の芝居か、と納得しかけたものの、彼女の立ち居振舞いは演技とは思えない。

そこまで考えを巡らせてから、一誠はその原因であろうヴァーリに訊ねる。

「見ない間に随分とイメチェンしたんだな」

『まあ、な』

ごく自然に会話する一誠の言動を見てヴァーリは、予想通りか、と内心で舌打ちする。やはり、転生前の種族が人間の彼には"悪魔支配"の能力も通用しないようだった。

或いは内に宿るドライグが歯止めをかけているのかもしれないが、本題はそこではない。

何故、兵藤一誠はこのタイミングで出撃したのか。

グレンデルとヴァーリが各勢力の襲撃を繰り返している以上、真偽はともあれ疑惑の眼は必ず"禍の団"——その中で最も名が知られている一誠に向けられるのは想像に難しくない。

リゼヴィムの目的は恐らく冤罪を擦り付けることなのだろう、とヴァーリはようやくと一連の襲撃の真意を悟った。

彼がルーマニアの事実上の支配者に納まり、"禍の団"所属のヴァー

り達を手駒に迎えた今、お膝元や他勢力で発生した襲撃事件の全てに
関して、「それは「禍の団」の仕業だ」と吸血鬼勢力として公式声明を出
すことができる。

そうして一誠の危険度を高めることで各神話勢力の不安を煽り、先
の連合戦争のように各勢力合同での討伐作戦を勃発させることが、リ
ゼヴィムの狙いだったのだ。

——どうしてこの場に現れた？

だからこそ解せない。彼の計画など一誠はとうに見抜いている筈
なのだ。世界中から疑惑を向けられている状況で襲撃現場に姿を現
せば、偽りは真実に塗り替えられてしまう。

なのにどうして、彼はトレードマークの赤い鎧を纏った上で、オー
フィスを置いてたつた一人で冥界の空に降り立つのか。

——それではまるで、自ら冤罪を受け入れるようなもの……!?

『兵藤一誠、まさか君はツ!』

「おい、さつきから裏切り者の分際でごちやごちやとうるせえぞ。今
更どう言い訳したところで、お前とグレンデルが俺の命令を無視して
独断行動かましたって事実は変わらねえんだよ」

ガチャリ、ガチャリ、と鋼の擦る音が微かに、しかし確かに連続し
て響く。そして十も数えない間にも、一誠はヴァーリの目の前に立つ
ていた。

対峙。

“赤い龍”を宿す者と“白い龍”を宿した者が、歴代が繰り返してきた
決闘を今再び再現する。それが意味するところは誇りを賭けた殺し
合いに他ならない。

だが、忘れてはならない。この戦場には三体のドラゴンがいる。

“赤龍 帝”ウエルシュ・ドラゴン “ドライブ”バニシング・ドラゴン “白龍 皇”アルビオン、そして——。

『グハハハハッ!! やつとこさ来やがったか!! お前の登場をずっと
待ちわびてたんだぜえ? さあ、オレ様とお前どっちが強いかな勝負と
いこうじゃねえか!!』

“大罪の暴龍”クライム・フォース・ドラゴン “グレンデル”だ。

——l i f e . 9 4 三人目の襲撃者——

歓喜とオーラをばら蒔きながら、グレンデルが意気揚々と二人の間に割って入り、そのまま真つ正面から一誠の顔面目掛けて右の鉄拳を振り抜く。

技術の欠片もない、有り余る腕力に任せた全身全霊のストレートパUNCHは、それでも並の相手なら余裕で消し炭にできる威力だ。現に先程も魔王クラスの猛者達を圧倒している。馬鹿げた威力を持つそれを今回は超至近距離、しかも不意打ちで放ったのだ。

“赤龍帝の鎧”に守られているとはいえ、重傷は免れないだろう。

攻撃を仕掛けたグレンデル本人も、それを見守るしかなかったヴァーリもデイハウザーもファルビウムもロイガンも、果ては密かにこの事態を監視していたリゼヴィムすらもそう直感した。

故に、一誠が容易く豪腕を掴んで見せた瞬間、全員が驚愕に眼を見開く。

『……は？』

有り得ない、と言いたげに呟くグレンデル。瞬く間に最高速度に加速しての、全力の一撃だ。聖杯の恩恵で全能力が強化されている。

今なら仮に相手が全盛期の二天龍だろうと相手取れる自信があったというのに、何故こうも簡単に受け止められたのか、彼は理解が追いつかなかった。

対して、一誠は余裕の態度を崩さない。掴んだ手を振りほどこうとグレンデルが躍起になっても、体勢を崩すどころか逆にますます手に力を込めていく。

そして、相棒を象った赤いフルフェイスの兜の下で、彼は宣告する。

「——肅清を開始する」

告げたと同時に、グレンデルの全身が衝撃に襲われる。今の一瞬に何をされたのか、彼には分からなかった。ただ、乱高下する視界の中心に佇む一誠が手に何かを持っていることだけは辛うじて理解できた。

右腕に走る激痛と妙な軽さから、手に持つそれが自分から引き千切られた腕なのだと思ひながら、受け身が間に合わずに地面と衝突する。

即座に、脚力を駆使して強引に大穴から脱出し、紫の上空を睨み付ける。

『お返しだ』

聖杯から与えられた再生能力で右腕を生やすと、そのまま肩から切断して全力で投擲する。鉄壁の耐久力を誇る鱗をびっしりと揃えた、撃墜を許さない即席ミサイルの完成だ。

次の攻撃を魔力弾だと予想しているだろう一誠は必ず動揺し、少なからず隙が生じる。そして、その隙を突く算段だった。

しかし、それでも一誠の余裕が崩れることはない。落ち着き払った様子で、超高速で飛来するミサイルを一瞥する。

別に特別な対応を行う必要性などなかった。

左手を翳したその直後、翡翠の宝玉が凄まじい早さで連続して瞬き、“倍加”完了の合図を掻き鳴らしたのだから。

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost』

膨れ上がる身体強度と赤黒い魔力を武器に、敢えてその場から一步も動くことなく、身構えることすらもせずに正面衝突——粉碎されたミサイルの肉片と血がパラパラと地に降り注ぐ。

「……くだらん技だ」

呆れたように言うが、邪龍の中でも身体能力に突出したグレンデルの投擲をノーガードで受け止めるなど普通は不可能である。

にも関わらず、肉片と血を浴びながら悠然と空に佇む一誠の姿はまさしく古の“赤龍帝”そのものだ。

そう、これは戦争ですらない余興だ。格を知らない愚か者に力の差を教えてやっているに過ぎない。

だからこそ、一誠は告げるのだ。恐らく今も一部始終を眺めているであろう黒幕に向けて。

「神如きが、魔王如きが、邪龍如きが——俺の戦いの邪魔をするな」

『おい、ルシファアの小倅。お前は手え出すなよ？ 赤龍帝はオレ様がぶつ殺す!!』

「強化を受けなきや何にもできない負け犬の分際でピーピー吠えてんじゃねえよ。やれるもんならやってみろ」

クイクイと手で招く仕草は、戦闘続行の合図だ。ヴァーリが諫めるよりも早く、挑発に乗るようにしてグレンデルが弾丸となって突っ込んでいく。

グレンデルの短所が後先考えないイカれ具合であるなら、やはり長所は邪龍随一と称される身体能力と耐久力だろう。そこに「幽世の聖杯」から与えられた高速再生能力を付け足せば、この世界に敵など存在しない筈だった。

ただし、今回は相手が悪すぎた。「倍加」によりほぼ無限に自己強化を続け、常に相手の全ステータスを上回ることを可能とする怪物一誠に正面から挑むなど自殺行為に等しい。

「邪龍如きが……お前とは格が違うんだ。礼儀を学んでから出直しな」

刹那、赤黒いプラズマを纏ったオーラの波動がグレンデルを襲う。蛇の形をした黒い暴風は、まるで独立した意思を持つ生物のように丸呑みにせんと迫った。それが彼にとって戦いでも余興でもなく、鬱陶しい蠅を叩き落とすのと同じ感覚であるのは言うまでもない。

だが、向けられたグレンデルにとっては堪ったものではない。全盛期の二天龍のブレスに匹敵する威力のそれを、まともに浴びてしまったのだ。自慢の耐久力や再生能力をフル稼働させ、それでも尚も耐えきれずに上空から墜落する。

間髪入れずに、二発目の波動の蛇が放たれたのはその直後だ。

視界を覆う純黒の輝きを前に、ああ死んだな、とグレンデルは己の死を直感した。

先の一撃で重傷を負い、墜落時の衝撃で半身が地面にめり込み、受け身さえも満足に取れないこの状態であれの直撃を許せば、再生も間

に合わずに消滅するだろう。有り体にいつて詰みに等しい。

それでも歓喜に口角を吊り上げるのは、彼が伝承にその名を刻んだ
“大罪の暴龍”であるが故だ。

『グハハハハッ!! 良いぜえ、ぜってーに受け止めてやらあ!! そんな
でもってお前をぶち殺してやるから覚悟しとけやあ!!』

「遺言はそれでいいか?」

そうして、グレンデルは全身を波動の波に呑み込まれ——否、呑み
込まれかけたのだった。

——life. 95 Alternative——

「兵藤一誠、どういふつもりだ?」

本部に帰還した一誠を出迎えたのは鼻先に突き付けられた聖槍の
切っ先と、瞳に怒気を孕んだ曹操達“英雄派”の面々とソフィアだっ
た。

「随分と手荒だな。 ”禍の団”を裏切った連中を粛清しに出向いた働き
者だぜ、俺は? にっこり笑って戦いの疲れを労って欲しいな。ま、
最後に乱入してきたラードウンのせいで失敗しちまったけどよ」

「はぐらかすな。俺はその件について訊ねているんだ」

尚も切っ先を向けたまま、曹操はソフィアが手元に作り出した映像
術式を指す。

画面には冥界のニュース番組が流れており、キャスターらしきスー
ツ姿の男が、ゲストや視聴者にも理解できるように今回の襲撃事件の
解説を行っている途中だ。

彼曰く、

——兵藤一誠は、”禍の団”所属の諸派閥を傘下に収めたと宣言し
た。

——事実上、組織の現首魁は兵藤一誠である。

——今回の一連の襲撃事件は、それに反発したヴァーリ、グレンデ
ル両者に対する粛清である。

「随分と奇妙な話だと思わないか? いつから俺達が君の傘下に降っ
たんだ? いや、”英雄派”だけじゃない」

「魔法使い派”のリーダーとして、私は一誠さんの今回の声明を認め

る訳にはいきません。それに他の派閥からも困惑や反発の声が相次いでいます。釈明はありますか？」

「禍の団」を構成する各派閥は其々の目的を掲げて活動しており、決して一枚岩ではない。それは曹操率いる「英雄派」やソフィアの「魔法使い派」と同じことだ。

にも関わらず、組織を掌握した、と一誠は撤退時に喧伝してみせた。これでは彼らの目的や願いを切り捨てたに等しく、故に二人は珍しく怒りを露にしているのだ。

何よりも心配なのは、一誠の今後についてである。内部事情はさておき、「禍の団」の掌握を対外的に喧伝したのは紛れもない事実だ。三大勢力や各神話勢力からの警戒が跳ね上がることは想像に難しくない。

あのような演説を去り際に行つたのだから、尚更に。

——俺は、「禍の団」に属する全派閥を配下に収めた。そして、新たに「幽世の聖杯」所有者も協力者となつた。これが何を意味しているか、分かるだろう？

——つまり間接的に、俺は古の時代に討伐された邪神や邪龍を世界に差し向けることが可能になつた、ということだ。

——「赤い龍」の名において、俺はもう止まらない。お前達に復讐するまで。

横槍を入れたラードウンによってグレンデルとヴァーリが回収され、戦いが終わった筈の首都リリスの上空で、一誠は高らかに復讐を宣言した。

三大勢力だけでなく、監視しているだろう黒幕、更には一部始終を眺めていた世界そのものに向かって告げたのだ。

今はまだ、世界に動きは見られない。変革の予兆は影も形も見当たらない。

「世界、お前達——各勢力がこの言葉をどう捉えるか。君は既に気付いている筈だ」

各神話勢力、特に秘密裏に「禍の団」の支援を行っていた四神話の内
心は穏やかではない。

これまで彼らが不干渉を貫いていたのは、被害者が恨み連なる三大勢力であり、加害者が復讐を誓う兵藤一誠だったからだ。対岸の火事と楽観視していたからこそ、世界はアクションの欠片すら見せなかった。

だが、今回の演説で、一誠は言外に各勢力についても言及した。

具体的に名指しした訳ではないものの、各勢力のトップは肝を潰したことだろう。そして疑心暗鬼の末に恐らくは皆が同じ結論に辿り着く筈である。

兵藤一誠は力に吞まれ、暴走を始めている――。

「こうなったが最後、回り出した疑惑の歯車は止められない。首魁の俺を討伐しようとする世界中が躍起になるだろうさ。ま、グレンデル達が“禍の団”を騙って襲撃事件を起こした以上、どう言い訳したって俺の指示ってことにされるだろうけどな」

尤も、だからこそ都合なのだ。

世界中の視線が一誠のみに注がれているこの現状こそ、彼が願っていた世界なのだから。

「お前ら、組織を離脱するなら今の内だぞ？」 “英雄派”はまだ表立って活動していないから無関係を押し通せるし、“魔法使い派”も……：会谈襲撃の共犯として顔の割れているソフィアは兎も角、他は人間界の片隅でひっそり余生を過ごすことぐらいはできるかもしれない」

「……まさか、君は」

曹操の言葉に、一誠は何も言葉を返さなかった。ただ黙って自室の方向を寂しげに見つめた。

「もうテロ組織の首魁じゃない。もう世界に追われることもない。だから――きつとあの親子は静かに暮らしていけるだろう」

それが、彼の考えた計画の終着点だ。

「そんな……ッ!？」

「待て、考え直せ!! お前がいなくなったら、彼女は絶対に悲しむぞ!!」

悲痛そうに口許を抑えるソフィアを他所に、説得を試みる曹操。しかし、一誠は彼女の手元に今も映し出されたままの映像術式を指し

て、笑う。

「もう手遅れみたいだぜ？」

映像には、速報の字幕と共に、炎上し煙が上がる冥界の各都市が映されていた。

『臨時ニュースをお伝えします。つい先程、冥界各地で原因不明の大規模な爆発が発生し——』

「うひゃひゃひゃひゃ♪? そうかそうか、どうやってこの冤罪を晴らすかって期待してたが、その手でくるのか!! まさか冤罪も引つ括めて全ての罪を背負うなんざ思わなかった!! 本当に最高だぜ、イツセーキゅんはよお!!」

ルーマニアの心臓部、即ち首都中心の古めかしい城の最奥に、心底愉快そうな笑い声が響く。銀髪銀髭が特徴的な、貴族らしい豪華な装飾のなされた衣装に身を包む初老の男——リゼヴィム・リヴァン・ルシファード。

言わずもがな、初代ルシファードの息子たる最上級悪魔でありながら吸血鬼勢力の事実上のトップに上り詰めた男である。その冠を頭上に頂くまでに裏側でどのような工作を行ったのかは、やはり言うに及ばないだろう。

そんなリゼヴィムは瞳を幼子のように爛々と煌めかせて、デイスプレイに映し出されたある映像に一喜一憂していた。

自身の財力やコネに物を言わせて導入したであろう、最新式と思しき壁一面の大型液晶ディスプレイ。それら全ての画面を占拠するのは、“赤い龍の帝王”兵藤一誠だ。

一目でそれと分かる高級なソファにふんぞり返る主人を尻目に、傍らに控えたユীগリットが改めて一誠の来歴や桁外れの戦闘能力について解説を行う。

「兵藤一誠。年齢は十八歳、職業は元学生、両親や先祖の中で裏世界に関わった者はいません。それらから分かるように、四月にリアス・グレモリーに拾われるまではただの一般人でした。端的に言うと同然にも“神器”を宿しただけのイレギュラーですね」

『グハハハハッ!! ただの元一般人が世界に喧嘩売るかよ!! 赤トカゲを抜きにしても、あの野郎はオツムのネジが外れてるぜ!!』

ユীগリットの解説に、グレンデルが頷きながらも付け加える。最終的に敗北寸前にまで追い詰められたとはいえ、強者との戦いに満足したからか、はたまた現代の強者と出会えたからか、その横顔は嬉し

そうだ。

『グレンデルの言う通り、質の悪い冗談です』

そんな彼に、一体のドラゴンが話しかけた。樹木がドラゴンの形を成したような、或いは四肢を除いたドラゴンの全身が樹木に埋もれたような、そんな不思議な外見をしたドラゴンだ。

彼の名は、インソムニアック・ドラゴン“宝樹の護封龍”ラードウン。

黄金の果実を守っていた元守護者にして、強大な結界と障壁の魔術を操る邪龍である。かつて初代ヘラクレスとの激戦の末に毒殺されたが、“幽世の聖杯”によつて蘇生したのだ。

『ただの元一般人に邪龍が敗れるなど……同族として情けない限りですわね』

そして邪龍の一角らしく、穏やかな口調とは裏腹にその性格や趣味嗜好は陰険である。

『ああ!? 表に出ろ、ラードウン!! 久しぶりにキレちまったぞ!!』

『私が回収しなければ無様に殺されていた恥晒しの分際で……良いでしょう、目覚めの運動も兼ねて再び冥土に送つて差し上げます』

『上等だ、この腐れトカゲ!!』

「あーはいはい、君らが喧嘩すると俺ちゃんの城まで瓦礫になるからやめてね? ユーグリットきゅんも、ボケツとしてないで解説の続きをプリーズ?」

一触即発の雰囲気となる二体を適当にあしらいながら、リゼヴィムは解説を続けるように求めた。

本来なら邪龍同士の殺し合いを前にもつと慌てるなり必死に宥めてもいい筈なのだが、その間も彼の視線はディスプレイに釘付けのままだ。

実際、例えるなら花畑を駆け回る少年のように、彼の脳内は歓喜で満ち溢れている。

それ程までに、永劫に近い時間の退屈を味わってきたリゼヴィムにとって、兵藤一誠は待ちわびた存在だった。

「畏まりました。それでは、次に“SSS級はぐれ悪魔”として手配された経緯についてです。先ず手配を受けた時期は、リアス・グレモ

リーとライザー・フェニックスの間で行われた「レーティング・ゲーム」の直後ですね」

『ああ、あのくだらねえ殺し合いごっこか。大会に参加でもしたのかよ。雑魚の中の最強を決める大会を開いてるって聞いたぜ？』

「いえ、前者は年齢的に大会参加資格を有していません。リアス・グレモリーが政略結婚を拒否したことが争った理由のようです。試合の結果で結婚或いは婚約破棄を決める約束だった、と」

内戦以降、悪魔勢力は対外的に実力主義を喧伝し、例えば他種族からの転生悪魔であっても功績を残せば上級悪魔に昇格させるとの謳い文句を掲げてきた。実際、リュディガー・ローゼンクロイツや今は亡き「魔龍聖」タンニーンも、新制度の下で実績を積み上げて昇格を果たした者達である。

とはいえ、そういった事例は珍しく、悪魔勢力には今も捻じ曲がった貴族主義・純血主義思想が根強く蔓延ったままだ。その極致の一つが、家同士の思惑に基づいた政略結婚である。

無論、政略結婚が一概に悪とは言えない。

例えば中世ヨーロッパの時代に限っても、同盟締結による戦争回避や経済的支援の獲得など、経済的に傾いた家を救う為、引いては国民を救う為のケースは確かに存在していた。また現在も企業・家柄の存続目的で政略結婚を行う場合も少なくない。

何れにせよ、個人の意思が尊重される世の中に逆らう形とはなるが、決してデメリットばかりではないのだ。

「尤も、それは人間界での話に限ります」

歴史を紐解いてまで長々と説明しておいて、ユーグリットは冥界で行われる勢力結婚をバツサリと切り捨てた。その表情と口調は、腐れ切った現悪魔政府への侮蔑の色で満ちている。

「知つての通り、三大勢力——特に悪魔は立て続けの戦争で同胞を失い過ぎました。“悪魔の駒”無しでは勢力の維持すらまもなくする程に。ならば残すべきは家柄よりも種族そのものであることなど明白でした」

ただでさえ悪魔という種族は出生率が低い上に、戦争で多くの純血

悪魔を失ってしまった。

その状況下で優先すべきは種族の存続であり、政府はそういった政策——例えば各種税率引き下げや補助金付与などの婚姻・出産推奨策を推進すべきだったのだ。家を守るより先に種族が滅んでは本末転倒なのだから。

「そうでなくとも、アジュカ・ベルゼブブが“悪魔の駒”の開発に成功したのです。ならば、政府はそれを活かすべく他種族が転生しやすくなるような土台を築くべきでした。そうすれば勢力の再建は他よりもスムーズに進んだことでしょう」

「でもでもお、上層部の連中はアホ揃いだからさあ？ 猫も杓子も利権争いと極めて短期的な建て直し政策で迷走しまくってさ☆ 巨大な捻れを内部に孕んでしまったって訳よ！ つまんねー奴らだろ？ うひゃひゃひゃひゃ♪」

『で、その結果が元一般人の“SSS級はぐれ悪魔”ですか。愚かしいにも程がありますね』

ラードウンが肩らしき部位を大袈裟に竦めると、「話が脱線しましたが」とユーグリットは咳払いした。だが、話が逸れたようで本質は変わらない。

何故なら、一誠が“はぐれ悪魔”に堕ちた原因は、その愚かしい政府上層部にあるのだから。

「どうせ“赤龍帝”の力を危険視した誰かが追放を企んだのでしよう。腐敗した上層部と結託してね」

——l i f e . 9 6 スイッチ姫——

婚姻を賭けたりアス・グレモリーとライザー・フェニックスの“レインディング・ゲーム”には、記録には残されなかった続きがある。

それが、二人の婚姻発表パーティーに乗り込んだ兵藤一誠と、それを阻もうと立ち塞がったライザーの非公式の戦いだ。

「接戦の末に兵藤一誠は敗北し、両者の婚姻は確定しました。ですが、この非公式の戦場には、パーティー参加者という大勢の見物人がいました。無論、政府の役人連中も首を揃えていたことと思われまます。“赤龍帝”の再臨を目撃した彼らは恐くて仕方なかったでしょうね」

そして、上層部はライザーやサーゼクスと手を結び、一誠討伐作戦を秘密裏に承諾・決行したのである。

その後の顛末は、これも言うに及ばない筈だ。

「で、辛くも逃走に成功したイツセーきゅんは“禍の団”と合流、そればかりか“無限の龍神”に婿入りしたってさ！　こんな奇跡のラブロマンスって本当にあるんだなあ！　冥界で映画化したらさぞかし大人気になるだろうぜ？　うひゃひゃひゃひゃ♪」

「……オーフィスは誰にも与しないとばかり思っていたがな。そうか、噂は真実だったのか」

遂に抱腹絶倒するリゼヴィムの言葉に反応したのは、これまで部屋の隅で沈黙を貫いていた黒いコートの男だった。金と黒の混ざり合った髪色、右目が金で左目が黒という特徴的な瞳の色をしたその男には、近寄りがたい威圧感と風格が漂っている。

何せ、ラードウンは勿論のこと、粗暴を塊にして煮詰めたような性格のグレンデルでさえ、男が口を開いた途端に大人しくなったのだ。狂える邪龍達すらも恐れさせる実力者であることが窺える。

そんな彼の問いに、流石のリゼヴィムも姿勢の乱れを正してから、改めて真剣な声音で言う。

「知つての通り、オーフィスは永遠に等しい時間の中で誰にも興味を示さず、“次元の狭間”で静かに暮らすことだけを目的にしてきた。それが兵藤一誠だけは常に行動を共にし、彼の言葉だけは素直に受け入れている」

「オーフィスにとって、自分の目的を捨てる程に兵藤一誠が特別な存在になった、という訳か。だが、連合戦争以降の二人は別行動をしているな。何故だ？」

「手駒に迎えた“旧魔王派”構成員の証言では、彼らは既に一線を越えている。部屋に黒色の結界が展開されている間は近寄らない、つてのが組織内での暗黙の了解だったらしい」

『つまり……どういふことだつてばよ？』

即ち、と彼は敢えて区切り、強い口調で続けた。

「——オーフィスは兵藤一誠の子供を妊娠しているのではないか、と

俺達は推測している」

それは”無限の龍神”と”赤龍帝”を支配下に置くことを可能とする、全世界が喉から手が出る程に追い求めるであろう”制御装置”^{ス イ ッ チ}の誕生を意味しており、

「さて、この場で邪龍の諸君に一つお訊ねしよう。全力の”赤龍帝”と戦える最高最大の機会——手に入れたくないか？」

悪意の標的とされるのもまた必然なのである。

以前、悪魔上層部は一つの愚かしい計画を立案・実行したことがあった。

上層部の末席を預かるファンキヤット・アバドン主導の下で進められたその計画は、兵藤一誠を捕獲し、人質とすることでオーフィスを制御下に置くというものだった。

その名を、“赤龍帝捕獲計画”と言う。

結論から言うと、実行役の悪魔達の離反もあつて捕獲計画は失敗した。首謀者のファンキヤットは、両親の死を引き金に“覇龍”と化した一誠によつて跡形もなく消し飛ばされ、計画は永久凍結処置を受けることとなつた。

「しかし、結果的には失敗したとはいえ、一から百まで全てが失敗なのか？ いいや、違う。兵藤一誠の両親を誘拐し、それをダシにして彼を捕獲する……計画のコンセプト自体は決して悪くない」

誘拐の実行役に選んだディオドラ・アスタロトや自分の眷属達の離反さえ招いていなければ、或いは上層部が“無限の龍神”を飼ひ慣らしていたかもしれない。故にファンキヤットの発想自体は悪いものはなかつた。

何せ、他ならぬリゼヴィム自身も計画に一枚噛んでいたのだから。

ユーグリット経由で兵藤一誠の存在について教えられたリゼヴィムは久しく枯れ果てていた好奇心を大いに刺激された。そこでかつてのコネを駆使して上層部に秘密裏に接近し、“赤龍帝捕獲計画”の共犯者を買つて出たのである。

一誠とリゼヴィム、両者の浅からぬ関係はさておき、嬉々として裏方で動き回っていただけあり、彼は捕獲計画の詳細から顛末までその隅々を熟知している。

故に、計画を自分なりに模倣するなど造作もないことである。

「その話をわざわざ俺達にしたということとは、再び実行するのか。今度はオーフィスを標的に変えて」

「そうだ」

コートの男の問いに、リゼヴィムは強く頷いた。

『正気ですか？ 相手は世界最強の座に最も近い“無限の龍神”ですよ？ とても戦力が足りない』

「その龍神様は妊娠中だ。大きく膨らんだ腹じやまともに戦えないだろうし、腹が破れても良いのか、って脅せば片付く」

『グハハハハッ!! こいつあ傑作だ! まさかオーフィスの野郎がこんな形で完封されるとは思わなかったぜ!! 何なら俺が水風船みたいに破裂させてやろうか!?!』

「やめろ、グレンデル。赤ん坊は生かすことにこそ意味があるんだ」

先の“赤龍帝捕獲計画”が失敗した理由の一つに、そもそも肝心要の人質をむぎむぎ死なせてしまった点が挙げられる。一誠の暴走を招いた上に脅迫材料を失ってしまったファンキヤットはどうすることもできずに殺害された。人質を失った誘拐計画など無意味に等しい。

——そっかあ、仮に死ねば全力の二人を見られるのかあ。もういつそのことガキを率先してぶっ殺してやろうかなあ。でも世界を破滅に導くスイッチだしなあ……悩むぜ☆

ただし、快樂主義者のリゼヴィムにとっては計画が成功しようが失敗しようがどちらでも構わないのだが。

——l i f e . 9 7 捕獲計画——

『グハハハハッ!! すこぶる面白そうじゃねえか、その話に乗ったぜ!!』

『戦えるのなら私も喜んで参加しましょう。で、具体的なプランは？』

私はどう動けば良い?』

真つ先に参戦を表明したグレンデルとラードウン。対して、その言葉を待ってましたとばかりにリゼヴィムが壁のディスプレイを指す。

途端に映像に映されたのは、兵藤一誠を取り巻く人間関係を矢印で表した簡単な図だ。

例えば、一誠とオーフィスの間に引かれた“々”の上にはハートマークが、一誠とデイハウザーを結ぶ矢印の上には内通者の文字が踊っている。

そして図を見た際に先ず特筆すべきは、同じく矢印が引かれていた

“旧魔王派”や“英雄派”、更に四神話の名前の上にも大きく”×”が刻まれている点だろう。

「えー、これより順を追って説明していく。“オフィス捕獲計画(仮)”は大きく幾つかの段階に分かれる」

その第一段階が、二人の距離を引き離すことだ。

その為にわざわざ一誠から戦力となる手駒を奪い、連続襲撃事件や冥界での無差別自爆テロ事件の冤罪を被せ、組織に属する諸派閥の離反・離脱を誘発させ、たった一人で孤独に戦うように仕向けたのだから。

無論、“赤龍帝派”と呼ばれる直属の部下——フリード・セルゼンやレイヴェル・フェニックスは組織に残るかもしれない。しかし、彼らの実力など知れている。それに現状を省みれば、二人は身重のオフィスの世話や護衛を任せられるだろう。

一誠は常に単独出撃を強いられ、そうなればオフィスと共にいる時間もますます削られていく。

即ち、彼女を狙う隙が幾らでも生じるということだ。

或いは、一誠が復讐を諦めて世界の片隅でオフィスと静かに暮らす、という逃げの一手を打たれる可能性もある。

「だが、お前はそれを選ばない。哀れなピエロのままパフォーマンスを続けなければならない。パフォーマンスは続けることにこそ意味があるのだから」

リゼヴィムは、強く断言した。

「何故だ？ 兵藤一誠も自分の現状は理解しているだろう？ いつそ復讐を捨てて家庭を持った方が幸せなのではないか？」

「家庭を持った後はどうする？ どうやって金を稼ぐ？ どうやって家族を食わしていく？ 逃げたところで世界はいつまでも追い続けるぞ？ 家族揃って逃亡生活を続けるのか？ 暴力しか能のないテロリストが、どうやって妻子を幸せにできる？」

『色々稼ぐ方法はあるだろ？ あの実力だし、傭兵として十分に食っていけるぜ』

「転職先候補の各神話勢力とは敵対していますけどね」

ユーグリットの言葉に、邪龍達は思わず押し黙った。

そう、“オーフェイス捕獲計画”の第一段階が成功し、一誠が世界との孤立を深めた時点で——突き詰めれば、世界に向けて復讐を宣言してしまっただけにより、もう彼は妻子と共に暮らしていくことは不可能になったのだ。国際テロリスト組織“禍の団”の現首魁を名乗る男の实子など、常に世界中から身柄を狙われるに決まっているのだから。勿論、両親の實力を考慮すれば子供の安全は保証されたも同然だ。しかし、物事に絶対はない。追手の襲撃時に常に二人が揃っている保証がない。

仮に一誠の留守中を狙って各神話勢力の連合軍が物量戦を挑めば、流石のオーフェイスも我が子を守りながらの戦闘は苦しい筈だ。絶対に隙が生じてくる。

それを防ぐには、そもそも追われる理由を消すしか方法がない。

悪魔への復讐を果たし、愛する家族を狙う悪意を滅ぼし、そして最後に“禍の団”首魁として世界からの憎悪を一身に受けた上で、

「兵藤一誠は死ぬつもりだ」

そう言い切るリゼヴィム・リヴァン・ルシファアの横顔は、歓喜に歪んでいる。

自分こそが彼を殺したい。

この退屈な世界に彩りを与えてくれた恩返しにその最期を看取つてやろう、と言いたげに。

“オーフェイス捕獲計画”の次なる段階に想いを馳せながら、リゼヴィムは恍惚の笑みを浮かべた。

「禍の団」という国際テロ組織が存在していた。オーフィスの名の下に多種多様な勢力のはみ出し者達が集まったその組織は、やはり十人十色の目的と願いを掲げ、そしてその為に戦いを続けてきた。「禍の団」を構成する諸派閥には大小様々な思惑が蠢き犇めいていた訳だが、その中でも特にパワーバランス的に突出した四大派閥があった。

「先代魔王の末裔達が率いる『旧魔王派』」。

「超常への挑戦を掲げる英雄達の『英雄派』」

「未知なる強者と冒険を求める『ヴァーリチーム』」。

「復讐にその身を焦がす『赤龍帝派』」。

曲者揃いの自分勝手な連中が集った烏合の衆でありながら組織として成立していた理由は、この四派閥の実力と規模にこそある。即ち、彼らが内部で睨みを効かせていたからこそ有象無象の雑兵に等しい連中も大人しくしていたのだ。

しかし、時の流れと共に状況は変化した。

四大派閥に名を連ねていた勢力の内、「旧魔王派」は指導者であった先代魔王の血族を喪い、新たな後継者を立てることすら叶わずに瓦解。求心力を失った残党達は別勢力に吸収された。

「ヴァーリチーム」はルーマニアでの任務に出撃し、リーダー以下、メンバーの殆どが消息不明。唯一の生存者として保護されたルフェイ・ペンドラゴンは精神的に不安定な状態が続き、戦力として使い物にならなくされた。挙げ句にリーダーのヴァーリが敵組織に寝返る始末だ。

そして空中分解寸前に追い込まれた「禍の団」に第一のトドメを差したのが、「英雄派」全員の離脱である。

派閥を率いていた曹操を始め、幹部級から下っ端まで、更に再起不能のルフェイを連れて全構成員が「禍の団」から脱退した。曹操曰く、「孤児院を優先したい」為であるらしいが真偽は定かではない。この一斉離脱により、残る巨大勢力は「赤龍帝派」のみとなつてしまった。

だが、四大派閥の一角にこそ数えられているものの、彼らの権威は

リーダーの兵藤一誠や食客扱いのオーフィスあつてのものであり、派閥の規模そのものはあまりにも小さい。

象徴となり得るオーフィスは妊娠中で満足に動けず、そもそも一誠がそんなことを許さない。されど、一誠は世界に向けて身勝手な喧伝を行った直後で諸派閥の反発を買っている。彼らを纏めることは不可能だ。

つまり、“禍の団”という組織は既に完全に崩壊し、各派閥は独立した別組織への枝分かれの兆しを見せていた。

そうして諸派閥が独自の方向性と活動路線を定め、各々が元“禍の団”系グループとして新たに別行動を開始したことで、遂に“禍の団”は実質的に一誠達のみ少数精鋭部隊と化したのだった。

——l i f e . 9 8 はぐれ一誠——

「随分と広くなりましたわね」

「そりゃ今や本部基地には俺らしかいねーもんなあ。ま、クヨクヨしたって仕方ねえし切り替えていこうや。寝る場所に困らねえってメリットもあるだろ？ てな訳で元会議室で枕投げ大会しようぜ！」

「アホですよ？」

何処までも無人の廊下の中央を敢えて騒がしく進んでいく二人組、レイヴェルとフリード。“禍の団”が空中分解していく中で二人にも一誠と袂を別つ機会があつた筈だ。

しかし、彼らは最期まで一誠に付き従う道を選んだ。

果たしてどのような心境で彼らがそれを選択したのかは分からない。それは本人達だけが理解し、納得していればいいのだ。

「そんな能天気によく一誠様の側近を名乗れますわね。少しはそのイカれたオツムを作戦会議に活かしたら如何ですか？」

「そりゃ無理な話つすわ。俺つてば悪魔を滅多斬りにするしか能ねーもん。だから教会をリストラされちまったんすわ！ 転職先の上司ガチャもズリネタにしかならねえ墮天使^{ハズレ}だったけどさ!!」

思えば、一誠とはその頃からの付き合いだ。或いは腐れ縁とも言う。

「でもさー？ なんだかんだ言つてさ、二度目の上司ガチャは大当た

りじゃん？　ロリコンなのが玉に瑕だけど実力も策謀もえげつないし、何よりもこんな滅多斬りしか取り柄のない俺を拾ってくれた神上司じゃん？」

だからさあ、とフリードは立ち止まった。

「最後まで上司の面倒を見るのも部下の役目ってやつだろ？　なーんちやって☆」

「……ちよつとキュンとして損した気分ですわ。ほら、そんなこと言ってる間に部屋に到着しましたわよ？　さつきとお入りなさいな」
「ボテ腹プレイの真つ最中だったらどーすんだよ」

「あら、ロリコン上司の面倒を見たいのでしょうか？　側近の鑑ですわね」

安心すべきことか、或いは惜しむべきか。ゆつくりと開けた扉の隙間の先では、二人は特に黒色の結界を展開しなければならぬことを致しておらず、ベッドの上で静かに寄り添い合っているだけだった。

オーフィスの腹は一目で妊婦と分かる程度に膨らんできている。大きさから周期換算するなら約五ヶ月目辺りだろうか。赤ん坊の成長が著しいのは、やはり母親が「無限の龍神」であることに起因するのだろう。

このままのペースで成長を続けると仮定した場合、あと数週間も経たない内に臨月——そして出産を迎える。

永劫に近い時間を生きてきた中で初めての妊娠・出産とあってか、腹が膨らむに比例して、流石のオーフィスにも動揺や焦燥が行動の節々に見られるようになった。

元から必要のない睡眠や食事に関する事例は兎も角、一誠との距離感がチグハグになりつつあった。今日はどうやらずつと一緒にいたい気分らしい。

「……入ってくれて構わない。今は、寝てる。あとフリードは後で半殺しだな。で、何の用だ？」

「そりゃあ、「赤龍帝派」の今後の活動内容についてっすわ」

「今の俺は見ていて不安か？」

その問いを、フリードは敢えて首を縦に振って返した。別に今更に

なつて一誠の実力を疑問視しているのではない。寧ろ、彼ならどのよ
うな敵が相手でも容易く叩き潰して帰ってくるだろう安心感すら覺
えている。

ただし、彼個人の實力と彼を取り巻く状況は別に分けて考えるべき
である。

第三勢力の暗躍によって被せられた冤罪を呑み込むことで全世界
のヘイトを集め、オーフィスの代わりに国際テロ組織“禍の団”首魁と
して討伐されて死ぬ――。

多少の路線変更こそあれど、これが一誠の考えた計画だ。そして世
界は彼の掌の上で、彼の計画通りに踊らされ続けている。

「冥界の各都市で大規模な自爆テロが発生した、つてニュースを聞い
たよな？」

「犯人は元“旧魔王派”構成員で、それらは全て俺の命令……らしいな」
「四神話は俺らへの支援を打ち切った。今頃はその事実を揉み消す為
に着々と戦争の準備をしてるだろうぜ？」

「テロ組織との繋がりがバレたら立場的に不味いからな。首脳として
当然の判断だ。そもそも支援を約束した組織自体が無くなったけど
な」

「旦那亡き後、残された妻子はどうなる？」

「静かに暮らしていけるし、その為の手配も終えた。その瞬間までは
死ぬつもりはない」

フリードの質問に、改めて想定済みなのだろう、次々と矢継ぎ早に
答えていく一誠。

そんな彼を真つ直ぐ見つめて、

「ええ、見えていて不安ですわ」

今度はレイヴェルが口を開く。

「――悪魔への復讐は、どうしますの？」

それは、一誠がこれまで戦い続けてきた理由にして存在意義だ。強
い憎悪を宿したからこそ彼はオーフィスとの修行を耐え抜き、今現在
の領域にまで上り詰めたのだ。

もし仮にオーフィスを言い訳にして諦めるのなら、自分自身を否定

するに等しく、同時にこれまで共に歩んでくれた彼女への最大の侮辱である。

故に、兵藤一誠という存在の集大成として、死ぬ前にこれだけは成し遂げなければいけない。だが、妊娠中の彼女に付き添うなら、復讐までの道のりは明らかに遠退いてしまう。

それ故の、レイヴェルの質問だ。

手札を全て失い、これまでの順調だった過程が嘘のように窮地へと転がり続け、それでも尚も復讐を果たせるのか、という決意の確認である。

これで少しでも躊躇した様子を見せたなら、彼女はその瞬間に一誠を見限るつもりだ。自分を復讐に引き摺り込んでおいて張本人だけ逃げるなど、こんな馬鹿馬鹿しい話もないのだから。

安心すべきことか、或いは哀れむべきか。レイヴェルの視線の先に座っている男の眼差しは、復讐に狂う獣の光を強く残していた。瞳には一切の妥協も慈悲もなく、まるで憎悪のままに悪魔を虐殺し続けるウエルシュ・ドラゴン“赤い龍の帝王”そのものだ。

「復讐をしてやる。俺を捨てた奴ら全員に、腐りきった冥界の悪魔共に――」

故に、これは世界への宣言。

「――絶対に復讐してやる」

孤独に戦い続ける“はぐれ一誠”の呟きは、しっかりと彼らに聞こえた。無限は何も言わず、不死鳥と悪魔祓いは黙って頷いた。

果たして彼はどのような道を歩むのか。誰もが分かっている、されど誰にも止められないのである。

「それでは、これよりデイハウザー・ベリアル氏とロイガン・ベルフェゴール氏の魔王就任式を執り行います——」

檀上左右の椅子には主役であるデイハウザーとロイガンの他に出席した上層部達や前魔王ファルビウム、同じく前魔王アジュカが座り、冥界の新時代の幕開けを待ちわびている。また観覧席には歴史的な瞬間を一目見ようと地元住民が詰めかけている他、大型通信機器を担いだ報道陣の姿もあちらこちらに見える。

今日は、魔王就任式が執り行われる日である。

被害を受けた首都リリスではなく自爆テロを免れた旧首都ルシファードの広場を借りて開催されるその式は、前四大魔王就任時のそれとは比べるまでもなく簡素且つ質素なものだ。

それには、遅々として進まない復興作業やテロ被害に苛立つ民衆への配慮であつたり、そもそも式自体が予定を遙かに前倒しして急遽行われるからであつたりと、そんな様々な政治的思惑が絡んでいるのだが、門出を迎える冥界にとっては些細なことだ。

「ファルビウム前魔王、アジュカ前魔王、ラフルル国防大臣、マナ口最高裁長官、マグナム上院議長、チユリス院内総務、ゼクラム初代バエル家当主、ご列席の方々、国民の皆さん——今日は記念すべき日です」冥界中が固唾を飲んで見守る中で、デイハウザーが厳かに就任演説を始める。

「ご存じのように、テロリストの兵藤一誠によつて冥界は脅威に晒されてきました。こうして式を行っている間も、苦しみを耐え抜いている方々がいます。私は一刻も早く彼らの苦痛を取り除きたい」

超長距離魔力砲撃事件、貴族連続襲撃事件、連合戦争、グレンデル襲撃事件、そしてつい先日が発生した元旧魔王派構成員の自爆テロ——。

この数ヶ月間、冥界は常に戦火に襲われ続けた。その復興作業も未

だ進んでいない。民衆の不安と不満は頂点に達していることだろう。だからこそ、今日この場で就任式を執り行うことに意味がある。

一つは新体制への移行を早急にアピールすることで国民の不満を政府から逸らすことだ。

一連の襲撃事件で政府は何ら有効な政策や方針を打ち出せず、常に後手に回らされてきた。当然のように支持率低下は止まらず、民衆の不満は募る一方である。そういった不信感を払拭する為に、現四大魔王の早期退陣とデイハウザー達の魔王就任が、上層部の意向もあつて決定したのだ。

愚かな魔王達に全責任を押し付けて。

「私は討伐を誓います。新魔王として、そして一人の悪魔として、皆さんと力を合わせて未曾有の困難を乗り越えます。私達は共に困難に挑戦し、結束の力で兵藤一誠を討ち果たし、本来あるべき冥界を取り戻します。出席していただいた前任者の方々、上層部役員の方々とも引き続き手を取り合い、この挑戦を成し遂げます」

大した役者だ、とファルビウムは内心で悪態をつく。新二大魔王と一誠の内通を確信している彼から見れば、こんな就任演説はただの茶番劇である。

とはいえ、彼らは頻発する反乱鎮圧や襲撃事件への対応など功績を幾つも積み上げてきた。満足に手を打てなかつたファルビウムが告発したところで、負け犬の遠吠え扱いされて真に受けてもらえないだろうことは明白だ。まして二人は新たな魔王なのだから。

そう、一誠に従う二人がトップである魔王の座に着いたということ、は、実質的に一誠が冥界を手中に収めたに等しい。

——警察から裁判所まで全てが彼の思うがままに操れる。そして、今回の就任式の出席者は……困ったな、今日はさっさと帰りたいかったんだけど。

推測するファルビウムの視線の先には、今まさに動き出そうとしている警備兵達の姿が映る。これから何が起きて、誰が捕らえられるかなど考えるまでもない。

檀上で座っている出席者の殆どが一誠の復讐対象に入っているの

だから。

展開していた兵士達が檀上に雪崩れ込んできたのは、その直後だ。

▼ 『ニュースを見たぜ。流石の手際だな、魔王デイハウザー』

「冥界存亡の危機にも椅子を温めていた連中など、敵ではありませんよ。して、捕縛した者達の処遇はどうしますか?」

『嚴重に幽閉して絶対に逃がすな。明日にや俺がぶち殺しに行くから』

「承知しました」

一礼してから通信を切り、デイハウザーは首から下げたロケットをギョツと握り締める。ロケットの中で笑顔を浮かべている少女は、実の妹のように可愛がっていた従姉妹のクレーリアだ。

才女として将来を期待されていた彼女は、上層部がひた隠しにしていたスキャンダル——存在しない筈の“王の駒”の存在を知ってしまったが為に口封じとして眷属もろとも殺害されてしまった。

「見てくれているか、クレーリア。君を貶めた連中は明日になれば死ぬ。社会的地位も財産も何もかもを奪われて、冥界転覆を狙った犯罪者として惨めに殺されるんだ」

新たに拠点となった魔王城の執務室、その壁に飾られたモニターは昨日行われた就任式の続報を映し続けている。

もう何度も繰り返し見た映像だが、視聴率が高いのだろう、予定されていた番組を中止にする勢いで報道各社は揃って続報を流し続けた。

——政府上層部、テロリストと内通容疑か!?

——兵藤一誠との取引で身の安全を保証された卑劣な上層部!!

その代価は国民の命だ!!

——国民の命を売り渡す売国奴を許すな!!

冥界は、今も熱狂に包まれている。

——life・99 熱狂の檻——

雪崩れ込んできた兵士達によって上層部は次々に拘束された。中には抵抗しようとした者もいたが、ぬくぬくと暮らしてきた連中が屈

強な兵士達に抗える筈もなく、上層部全員が御用となった。

まさかの事態に民衆が驚く中で、今度はロイガンがそれらを制するように演説を続けた。

「私はこの冥界の結束力を知っている。同時に、私はその鉄の結束を揺るがす不協和音の存在も知っている。悲しいことに、その不協和音は……テロリストと内通している」

会場全体——否、冥界全土が静まり返った。だがそれも束の間、次の瞬間には天地がひっくり返ったような喧騒に包まれる。まさか冥界を守るべき政府の上層部が内通しているなど誰も思わない。

「言いがかりだ！ どこに証拠がある!?!」

床に押さえつけられながら、男の一人が必死に叫ぶ。戦いとは無縁であることが一目瞭然の、美食と酒の油に緩みきった醜い顔つきと腹をした男だ。

実力主義社会を名乗る冥界でどうして生き残っているのかは不思議だが、或いはこれでも地位相応に保身術には長けているのだろうか。

そんな彼の顔色は、つい数秒前とは違い蒼白だ。男だけでなく「貴族派」筆頭のゼクラムまでもが怒号に近い自己弁護を訴えている。

さもありません。冥界がこのような悲惨な有り様を辿っているというのに、その原因と内通疑惑をでっち上げられれば破滅は必至だ。

故に、床に齧りついてでも潔白を訴えているのだが、ロイガンは涼しい顔で切り捨てる。

「世迷い言をほごくな。一連の襲撃事件において、私やデイハウザーは国難を防ごうと命を捨てる覚悟で戦ってきた。貴様らは戦場に赴くことすらせずに屋敷に引きこもっていたではないか。後ろめたいことがなければ私達と轡を並べていた筈だ」

「後方で君らの支援に徹して——」

「ほう？ 尻で椅子を温めるのが貴様の後方支援か……魔王を嘗めるなよ?！」

ロイガンはツカツカと男の側に歩み寄ると、その弛んだ腹目掛けて蹴りを放った。

本気ではない。彼女が本気の蹴りを見舞えば男の腹に大穴を開けるなど造作もないことだし、上層部のこれまでの所業を思えば蹴り殺してやりたかった。

しかし、就任式を視聴している民衆達に汚ないスプラッター映像を見せるのは忍びない。それ故の手加減だ。

尤も、それはあくまでも数多の激戦を生き残った猛者の視点に過ぎない。加減されているとはいえ、贅を貪ってきただけの男が無防備な腹を蹴り飛ばされて無事で済む筈もなく、蛙の鳴き声と共に盛大に吐瀉物を撒き散らした。

見せしめの醜態もあって、途端に静まり返る上層部達。連中が大人しくなったタイミングを見計らって、再びロイガンが演説を紡ぐ。

「新政権は、確固たる意志と結束を以て先に進む。この未曾有の危機を前に、我々には乗り越えるべき壁があまりにも多いが、一つ一つ確実に打ち破ると皆さんに誓おう。その最初の一步が——冥界が孕みし膿の大掃除だ」

「前政府の上層部は、テロリスト兵藤一誠と秘密裏に内通し、自分達だけ身の安全を保証してもらっていました。皆さんのことを見捨てて、自分達だけが」

デイハウザーの合図と同時に、檀上に浮かび上がる巨大映像術式が、連合戦争において進撃を続ける一誠を映し出す。会場全体に悲鳴が上がった。民衆にとって、兵藤一誠は何よりも恐怖の対象なのだ。

そして恐怖の次に沸き上がった感情は、上層部への怒りだ。

守るべき民衆を捨てて彼らだけが平和に暮らしていたという事実に会場のあちこちから怒号が飛び交う。

「私達は、目的と決意を果たすべく、打破すべき課題の解決に全力で取り組めます。必ずや、あの忌々しい兵藤一誠を倒すことを誓います」
歓声が巻き起こった。民衆達は新たな魔王の誕生を心から受け入れた。反対する者など誰一人としていない。

何故なら、彼らには積み上げてきた実績があった。そして今も、前政権に巢食っていた内通者の罪を白日の下に晒した。

何故なら、悪魔は愚かだからだ。具体的な内通の証拠が示されてい

ないにも関わらず、二人の演説と演出に誤魔化され、最早そのことなど頭の片隅にも残っていない。

かくしてデイハウザーとロイガンは熱狂の内に新魔王として受け入れられた。

それ即ち、冥界は兵藤一誠の支配下に置かれたに等しいのだが、目の前の輝きに魅入る悪魔達はその思惑に気付かなかった。

冥界全土を包んだ熱狂。それは辺境に位置する監獄も例外ではなく、久しく浴びていなかった日の光の下、正門の前で歓喜する集団があった。

彼らは旧上層部の被害者だ。

連中の機嫌を損ねた者や都合の悪い情報を知ってしまった者など、上層部の意向で政治犯の汚名と冤罪を着せられていた者達である。先日の旧上層部の逮捕に伴い調査が進められ、こうして遂に長き戦いが報われる日がきたのだ。

「……本当にすまない。連中の汚職を許したのは、魔王たる私達に責任がある」

「どう謝罪しても許されることはない。できる限りの賠償は行う。名誉の回復も、社会復帰への支援も、全力で取り組む。魔王の名に誓って約束しよう」

続く記者会見で、檀上に立つ被害者達の前で頭を下げ謝罪するデイハウザーとロイガンだが、彼らを責める者は誰一人としていない。そもそも二人は魔王に就任したばかりであり、上層部の腐敗を黙認していた張本人ではない。寧ろ、冥界の改革を推し進める立役者だ。

そして当然だが、被害者達や世間からの反感を集めたのは冤罪を押し付けた旧上層部の連中と、沈黙を貫いた前四大魔王である。

特に後者は連中の専横を止めるべき立場にも関わらず何ら手を打たなかったとして激しいバッシングに晒されている。

——魔王の座を退いたからといって隠居暮らしが許されると思っているのか？ ツケの清算を見逃すつもりはない。

長期入院中のサーゼクスとセラフォルはさておき、根本的に研究者気質のアジユカ、怠惰な性格のファルビウムはこれ幸いと雲隠れし、これから悠々自適に暮らしていくつもりだろう。或いは前者二人も家族の手引きで逃亡するかもしれない。

それを許す程、デイハウザーは甘くない。

旧上層部の横暴を見逃していたのなら同罪であり、その怠慢を問われるべきだ。既に直属且つ手練れの部下達で構成される部隊も極秘に動員しており、後は捕縛報告を待つのみである。

逆に言えば、直接的に専横政治を働いた訳ではない前魔王達でさえこのような苛烈な処置を受けるのだ。

その張本人である旧上層部一派がどのような末路を辿るかなど、今更考える必要もない。

——life. 100 復讐者Xの標的——

「お待ちしておりました」

「で、奴らは？」

「特別房に監禁しています。魔力を封じる枷を着けていますので、逃げも隠れもできません」

「そうか」

デイハウザーの案内で、一誠は監獄の地下フロアの廊下を進む。この階層には表沙汰にできないような事件を起こした凶悪犯ばかりが収容されているらしく、廊下を挟んで左右に並ぶ独房のあちらこちらから鋭い視線が二人に飛んでくる。仮に一誠が放り込まれるとすれば間違いなくこの地下フロアである。

そんな思想も実力も地上フロアとは比べ物にならない連中ばかりが集められているのだから、警備・監視も常に厳戒態勢が敷かれているのだが、こと今日のこの時間に限って、監視術式の一部は意図的に息を潜めている。無論、上層部を収監している区画の術式であり、魔王の指示によるものだ。

「着きました。この中に上層部がいます」

「分かった。一応聞くが、建前は考えているよな？」

「逃亡を図った為にあやむを得ず射殺——会見ではそう説明します。また既に捕縛している連中の家族や一族郎党も秘密裏に後を追ってもらうつもりです」

「抜かるなよ？」

「無論です」

本人のみならず一族を巻き込んだの、過剰に思えるまでの処刑劇。

しかし、その背景には“旧魔王派”の二の舞を演じるまいとする確固たる決意がある。

冥界を二分した先の内戦後、勝者である改革派は先代魔王の親族縁者を処刑せず、僻地への追放のみという甘い処置に留めた。その結果、テロ組織“禍の団”への合流を許し、今日に至るまでの禍根の種を残してしまった。

下手に温情をかければ、新たな復讐を生むだけである――。

復讐者である彼らはこの点を充分に理解していた。それ故の処断なのだ。新時代をアピールしていく以上、後々の憂いは確実に取り除かなければならない。

「じゃあ俺はちよっくら遊んでくるが……殺したきや別に殺してくれて構わないぞ?」

「よろしいのですか? 自分の手で殺したいものとはかり思っていましたか?」

「実際に動いたのはデイハウザーだからな。お前を差し置いて独占するのも気が引けるっただけだ。あ、言うまでもないと思うが……」

「ご安心を。取り逃がすような真似はしませんよ」

かくして嬉々として檻の中に入り込んでいった二人は、やがてさこぶる上機嫌な表情で再び廊下を集まった。互いの顔や衣服が返り血に染まっていても、彼らはそれを気にしなかった。

何せ、ようやつと復讐^{念願}を叶えたのだから。

一誠の登場に、上層部の連中は顔を蒼白に変えて命乞いした。ただでさえ比べるのも馬鹿らしい実力差が横たわっているというのに、魔力までも封じられては抵抗も逃走も許されない。

そうして靴を舐める勢いで謝罪や言い訳やらを重ねて彼らは、一人残らず虐殺されたのだった。報いを受けたのだ。

「……見ていてくれたか、クレーリア。私は、長年の夢を果たしたぞ」「遂にやったな、デイハウザー」

「ええ、これも一誠殿の助力のお陰です」

「それじゃあ俺はこれで失礼しよう。目的も達成したし、あまり長く部屋を空けているとオーフィスが不機嫌になるからな」

「仲睦まじいようで羨ましいですな……ああ、そういえばお伝えすべきことが幾つか」

転移術式を展開しかけていた一誠を呼び止めて、デイハウザーは言った。

「これはロイガンから聞いた話ですが、ヴァーリと戦った際に思考を塗り替えられる感覚がした、と」

「思考を？」

「催眠や洗脳系の能力かと思われます」

ルーマニアから続いた一連の襲撃事件は、そのインパクトから実行犯の名を取って俗に“グレンデル襲撃事件”と語られているが、実行犯は二人いる。

グレンデルと、ヴァーリだ。

そして首都リスへの強襲を受けた際にロイガンはヴァーリと対峙していたが、後に現場に現れた一誠に敵対心を見せるなど明らかに様子がおかしかった。そういった類の攻撃を受けたのであれば領ける。

「現在進行形で影響を受けている可能性は？」

「念の為に精密検査を行い、異常無しとの結果報告が上がっています
が……警戒するに越したことはないでしょう」

二大魔王が揃って一誠と内通しているにも関わらず、彼との連絡を全てデイハウザーだけが行っているのにはこういった事情もあった。万が一にも情報を抜かれては洒落にならないからだ。

問題は、その催眠能力の正体に心当たりがない点だ。

まさか“白龍皇”の新たな能力か、と二人は考えたが共にそのような話を聞いたことがなく、またデイハウザーは一誠に話す前に“神器”やドラゴンについて記した文献を漁ってみたのだが、それらしい情報は手に入らなかった。

『アルビオンとは何度も戦ったが、催眠術など奴は有していない。もしヴァーリが催眠術を使ったと言うのなら、それはアルビオンとは無関係の、また別の理由に起因する能力だろう』

一誠がそれについて最も詳しいだろう相棒に訊ねてみたところ、ド

ライグはその説を否定した。

「そうか。ありがとうな、ドライグ」

『気を付けろよ。相棒が仮に術を受けても、それは内に宿る俺が障壁となつて防げる。オーフィスもそんな小手先の技で懐柔される筈がない。それは安心しろ』

しかし他の奴らは別だ、と翡翠の宝玉は忠告する。

『例えば相棒の側近を名乗るフリード・セルゼン、出産を控えるオーフィスの小間使い用に拾ってきたレイヴエル・フェニックス。実力的に、狙われれば彼らは一溜りもない』

「それは否定できないけどな」

『慎重になれ、相棒。歴代最強の宿主がこんなところで躓くなど笑えんぞ』

「分かつてるよ。油断はしないさ。相棒もオーフィスもまだ悲しませる訳にはいかないからな」

ドライグとの交信を切つて、一誠達は簡単に今後の動向の打ち合わせを行った。とはいえ、グレンデル達が従う第三勢力やロイガンへの警戒が主な内容だ。

そして、第三勢力が話題に出た頃合いを見て、再びデイハウザーが口を開く。

「女王クイーシャ・アバドン以下、サイラオーグ・バアルの元眷属達が消息不明になった、と。」

「目的は俺だろうな。だが、今更出てきたところで俺が負ける筈がない。それはあいつらも理解してるだろ」

「サイラオーグの眷属は逸材揃いですし、特にアバドン家固有の魔力である“穴”^{ホール}は強力です。それを見込んでクイーシャ達を勧誘してもおかしくはない」

これはデイハウザーなりの警告だ。クイーシャ達だけでなく、一誠が行った復讐という名の大量虐殺で家族や近い相手を失った者達が多い。

ならば、彼と敵対する第三勢力は必ず被害者達の憎悪に訴えて勧誘を進めているだろう。事実、クイーシャだけでなくソーナ・シトリー

ヤルヴァル・フェニックスなど消息不明の報告が幾つか寄せられている。

「身辺にお気を付けください。誰に誰が狙われても不思議ではありませんから」

「お互いにな」

それは、復讐者が受け入れるべき因果である。

「——おっと、伝え忘れるところだった。近い内にサーゼクスを殺すから、他の入院患者を避難させるなら早めにな？」

「承知しました。しかし、やけに慌ただしいですね」

「まあな」

だが、受け入れるにはまだ早い。

念願の一つを果たしたまではいいものの、一誠は衣服の惨状を省みて顔をしかめた。準備する間もなく半ば強制的に“はぐれ悪魔”に堕ちた為に、彼の私物はスーツケース一つあればすっぱり収まってしまいう程に少なく、衣装も逃走時に着ていた駒王学園の制服含む数着だけだ。

無論、ヴァーリに頼んで下着類は定期的に調達してきたし、「制服では目立つから」と曹操から加入当初に衣服を渡されたこともある。それはそれとして、駒王学園の制服には特別な愛着を感じていた。

「こんなとき、ソフィアがいれば魔法で一瞬なんだけどなあ」

本部に帰還こそしたものの、血濡れのままで自室に戻るのは流石に躊躇う。されど魔法使いソフィアとも袂を分かち、残ったメンバーに魔法で服を洗濯するなどという芸当ができない以上、一誠には手の打ちようがなかった。

「やむを得ん」

暫しの思案の末に、彼は人間界のコインランドリーを思い出した。駒王町の片隅に寂れた無人ランドリーがポツンと立っているらしいことを噂で聞いたことがある。主に怪談の舞台としてだが。

旧式の洗濯機で返り血が綺麗に取れるのかは甚だ疑わしいが、このまま放置するよりかはマシだろう。

「おい、フリード。少し留守番しててくれ」

シャワーを浴びて私服に着替え、脱いだ服を適当なビニール袋に詰め込んでから、一誠はフリードを呼び止めて言った。

「もしかして次の襲撃ですかい？」

「夜の人間界を散歩だ。制服を洗濯しに行く。金なら残ってるしな」
「あー、それね」

濃紺色のズボンと白の半袖Yシャツ、ズボンと同色のブレザーに、パーソナルカラーの赤いTシャツ。

悪い意味で冥界の認知度が極めて高い袋の中身を一瞥して、フリードは興味無さそうにヒラヒラと手を振り、彼の背中を見送る。

Yシャツの返り血なんざ絶対に落ちないだろ、と言いかけたのは秘密だ。誰にだって愛着というものがあるし、フリードとて悪魔祓いの制服を未だに着込んでいるのだから。

「……しっかし、駒王学園か。紅髪のお姫様や愉快なお仲間達は今頃どーしてんのかねえ」

ふと見慣れた制服と同じものを着ていた連中のことを思い出し、フリードは顎に手をやった。

以前に読んだ冥界のゴシップ記事が正しければ、リアスの立場は極めて不味いものになっている。

リアス・グレモリー。兵藤一誠の元主君であり、彼の復讐対象の一人である。

そして今の冥界で彼女の名前を知らない者はいない。勿論、悪い意味合いだが。

かつて才女として将来を渴望されていたリアスの転落劇。その発端は、一誠が逃走の末に“SSS級はぐれ悪魔”として活動を開始したことにあつた。襲撃を掲げて襲撃が繰り返される度に、“王”として責任を追及された。

リアス自身は、彼が“はぐれ悪魔”に堕ちた直接的な原因ではない。さりとして原因の張本人である上層部がリアスに責任を押し付け、メディアを通じて大々的にそう喧伝したが為に、世間の非難の矛先は彼女に向けられた。

四六時中、猫杓子野次馬からの誹謗中傷の波に晒され続けるのだ。精神的な苦痛は筆舌にし難いものだっただろう。勿論、そう仕組んだのは一誠だ。

そうして追い詰められたリアスにトドメを差したのが、一誠が実行した超長距離砲撃事件及びそれに伴う内通疑惑である。

それは彼女の進退だけでなく、グレモリー家そのものの崩壊を招く最悪の一手だった。

▼
一誠の不在時、オフィスの護衛はフリードとレイヴエルが交代で引き受ける手筈となっている。そして今回はレイヴエルが世話役を

担っている為、彼は自由時間を満喫していた。

「つと、あつたあつた。これだ、これ」

自室の床に無造作に転がっていた冥界の週刊誌を手に取り、ペラペラと捲る。三流に近い出版社ではあるが、貴重な情報源だから、と暇潰しも兼ねてフリードはこの雑誌を愛読している。

手に取った先週号の表紙には大きく「赤龍帝」の見出しが踊っており、またこれまでの彼の襲撃事件や経緯を纏めた特集が十数ページにも渡って掲載されていた。

「えーと、今回の襲撃を受けて、グレモリー家には多額の損害賠償の支払いが命じられ……うええ、マジで恐ろしい金額だなあ」

アリーナの補修費用、被害者や遺族への見舞金、行われていた「レーティング・ゲーム」の試合中止に対する違約金、その他諸々――。

様々な要因が積み重なった結果、小国の国家予算に匹敵する額の損害賠償を請求されたグレモリー家の財政は一気に火の車となり、広大な領土を切り売りし、使用人達に暇を出し、豪勢な調度品の数々や城と見間違ふような規模の屋敷を手放したらしい。そこまでしてようやくと賠償の目処が立つのだから、その被害額が窺えるというものだ。

かくして困窮に陥ったグレモリー家は現在進行形で没落への道を辿っている訳だが、当然ながらリアス自身にも厳しい処罰が与えられたようだ。具体的には、

――冥界への強制帰還。

――姫島朱乃、木場祐斗、ギヤスパ―・ウラデイ、ゼノヴィア。

以上、四名の眷属の他悪魔への移籍。

――それに伴う「レーティング・ゲーム」への参加資格の無期限剥奪。

特に後者は実績を重んじる悪魔社会では致命的だ。実績を積んで汚名返上を狙おうとしても、そもそも実力をアピールする機会が与えられないのだから。かといって処刑される訳でもなく、生かさず殺さずの飼い殺し状態に近い。

「上層部も旦那もやることがえげつねえ……マジで旦那は敵に回した

くねえな。まあ、出会って五秒で殺し合いした仲だけど」

フリードは思わず身震いした。もしボタンを一つでも掛け間違っていたら、今頃は想像したくもない方法で殺されていたかもしれない。形はどうあれ、駒王町で予め面識を作っておけたのは幸運だ。

——「そういや、あの町の現領主って誰なんだ？」

リアスが強制帰還となり、もう一人の領主であるソーナが連合戦争以降に眷属もろとも消息を絶っている今、駒王町を治める者は不在である。だが、三大勢力による駒王同盟を締結した地をむぎむぎ空白にする筈もない。

どうせ後任が送られているだろう、とページを捲っていく中で、駒王町に派遣されたという悪魔の名前と顔写真を見付けた。

眼鏡をかけた理知的な少女の名は、シーグヴァイラ・アガレスという。

そして、リアスの元眷属達の移籍先でもある。

「……マジかよ」

上司の散歩先を思い出して、フリードの額を冷たい汗が流れた。



「洗濯完了まで一時間か。いいや、わざわざ本部に戻るのも面倒だ」

部下が滝汗を流していることなど露知らず、コインランドリーの店内で一誠は寛いでいた。

ランドリーは確かに外装こそボロっちいが料金設定は割安で、エアコンも稼働していれば店の前に自販機も設置されている。そして置いてある椅子と雑誌を目にして、たまにはのんびりしようと彼は即決した。

しかし、世界を騒がせる「赤龍帝」の行くところに平穏などある筈がない。

「これで見回りは最後だよ、ゼノヴィアさん」

「最近ではぐれ悪魔も増加傾向だからな。油断せずに気を引き締めて……おや、珍しいな。先客が——」

「あつ」

「あつ」

ものの見事に、一誠は元同僚と再会したのだった。
——l i f e. 1 0 1 限りなく災害に近い再会——

あまりにも驚愕の度が過ぎると、人は誰しも時の流れに置いていかれたように思考と言動を停止させるといふ。突然現れた偶然の出会いに、彼らもまたその瞬間だけ世界から置き去りにされていた。

だが、それも束の間。

敵対している間柄であることを思い出すや否や、瞬時に手元に剣を呼び出す木場とゼノヴィア。相手が世間を賑わせているテロリストなのだから当然の反応だ。ましてや恩人に等しい主君が没落した原因が目の前に座っているとあれば、木場が普段の冷静さを捨てるのもまた当然である。

対して、衝撃から立ち直った一誠は特にそれ以上の反応を示すことなく、「なんだ、お前らか」と昔馴染みに再会したかのように言った。それがまた木場の神経を逆撫でしているのだが、さりとて互いの実力差を客観的に分析するだけの理性は残っていたのだろう、安易に仕掛ける真似はしなかった。

事実、彼の判断は正しい。仮に二人がかりで挑んだところで一誠の纏った鎧の表面を削れば大した成果だ。実際は彼らが斬りかかるよりも遥かに早い時間で殺されることを考えれば、様子見は賢明な判断である。

とはいえ、一誠と視線を合わせた瞬間に及び腰となってしまう点から察するに、実際は彼の存在がトラウマになってしまっているかもしれないが。

かつて若手悪魔のパーティーにおいて容易く返り討ちにされた光景を思い出して、冷や汗を流す木場。そんな彼を見かねてか、庇うようにしてゼノヴィアが前に進み出た。

「これはこれは。こんな場末のコインランドリーにテロリスト殿がいらっしゃるとはな」

浮かべた不敵な笑みは、無意識に掻き立てられる恐怖心の裏返しに過ぎない。

「おいおい、そんな警戒しなくても何もしねえよ。単に制服を洗濯し

に訪れたただけだ」

「制服を？」

「ほれ」

一誠が指した先には旧式の洗濯機が、ゴウンゴウン、と古めかしい稼働音と共に赤い汚れを落としている真つ最中だった。デジタル式のタイマーはようやく残り時間が五十分に差し掛かることを教えている。

——演技ではなさそうだ。本当に洗濯に来たのか。

洗濯機を眺めながら、ゼノヴィアは内心で安堵の息を吐く。テロリストが今度は何を企んでいるのか、と様々な憶測を脳裏で展開していただけに拍子抜けだ。とはいうものの、この場で戦闘に発展しようものなら間違いなく秒殺されてしまうだろうことも彼女は悟っていた。

あの“赤龍帝”に暴れられるぐらいなら洗濯だけして大人しく帰ってもらおうか。

なるべく刺激しないように、しかし後でシーグヴァイラに報告を行うことも視野に入れて、ゼノヴィアは細心の注意を払いながら言葉を選ぶ。

「……聞きたいことが、あるんだ」

「なんだよ、藪から棒に独占インタビューか？ どうせ俺のことは冥界のニュース番組で嫌でも知ってるだろう？」

「それは、そうだが」

駒王会談に姿を現してからというものの、兵藤一誠や“禍の団”の名前が報道から消えた日はない。今や幼稚園に通う子供達でも名前を知っているし、泣いている子供にその名前を聞かせただけで泣き止んだ、といった噂すら広まっている程だ。

子供ですら知っているその存在をゼノヴィアが知らない筈がなかった。元リアス・グレモリー眷属なのだから尚更である。

——救援が駆け付けけるまでの時間稼ぎか、それとも探りを入れてるつもりか。

戦争・戦闘における情報の価値は非常に重く、故に軽々しく敵に与えて良いものでは決してない。寧ろ敵から守り通すのが鉄則だが、何

事にも例外はある。

偽の情報をおざと掴ませる場合だ。

敢えてダミー情報を渡してやることで相手を間違った方向に誘導させる、情報戦の基本の一つである。

数秒の思案の末に、一誠は頷いた。

「……いいぜ、洗濯が終わるまでの暇潰しに付き合っただけ。何が聞きたい？ 今なら大抵のことは喋ってやる」

ただし、冥界^敵のトップと繋がっている以上、そんな回りくどい作戦を行う必要がない。

つまり一誠からすれば本当にただの暇潰しに過ぎないのだが、「本当か!？」と嬉しそうに眼を見開くゼノヴィアがそれに気付く由はなかった。無知とは可愛いものである。

「では早速の質問なんだが……君は本当に“禍の団”を支配下に置いたのか？」

訂正、可愛くなかった。

——Life. 102 デビルと鴨のコインランドリー——

「ああ、全派閥は俺の下に降った。その辺りは既に各メディアでも報道されている筈だが？」

予想外の質問に一瞬だけ面食らったものの流石は、三大勢力を長く相手取ってきた一誠である。驚愕をおくびにも出さず即座に切り返した。

しかし、ゼノヴィアの表情は揺らがない。

まるで既に確信を抱いているかのように、次々に質問を飛ばす。

「それならば、どうして先のグレンデル襲撃事件に一人で対応した？」

兵藤一誠が言うには、あれは派閥統合への反発で彼らは裏切り者なんだらう？ 君以外にも裏切りを肅清しようとする者があっても良いと思うが？」

「相手の実力的に、俺以外の奴らが出ていっても邪魔だと判断しただけだ。大人しく裏方に回ってもらったさ」

「……ふむ、それは協力者になったという“幽世の聖杯”の所有者もか？」

「ああ、そうだ」

「他の伝説の邪龍は復活できなかったのか？ グレンデルのように、そうすれば戦力になるだろう」

中々どうして痛いところを突くな、と一誠は彼女の推理力に思わず舌を巻いた。

実際には組織は支配下どころか解散しており、グレンデルも“幽世の聖杯”所有者も離反どころか仲間になったことすらない。最初から暗躍を重ねる第三勢力に所属している。

その第三勢力が被せてきた冤罪に便乗する形で放ったハツタリではあったが、やはり取り繕うには無理があったようだ。咄嗟に言葉に詰まってしまう程度にはボロが出てくるのだから。

——とんだ暇潰しだ。俺がカモにされただけになっちまった。事前の情報ではデュランダル頼りの脳筋と聞いていたが……評価を修正する必要があるか。

「ゼノヴィアさん、それってつまり……!!」

と、これまで蚊帳の外だった木場が驚いた様子でゼノヴィアに視線を向けた。どうやら素で気付いていなかったらしい。こちらも評価を修正する必要があるようだ。

「そういうことだ、木場祐斗。彼は“禍の団”の諸派閥を支配下に置いていないし、“幽世の聖杯”所有者とも手を結んでいない。全ては兵藤一誠のハツタリという訳だ」

「ご名答。流石は元教会戦士だけあって抜群の洞察力だな。俺のチームにスカウトしたいところだ」

「ロリコンの下で働くなど御免蒙る」

「俺はロリコンじゃないさ。仮にロリコンだとしても、ロリコンという名の愛妻家だよ」

実際、オーフィス^嫁以外の異性には目もくれないのだから愛妻家ではあるし、彼女に捧ぐ愛情は紛れもなく本物だ。それはそれとして、外見年齢およそ一桁の幼女を妊娠させる一誠は間違いなくロリコンである。

知りたくなかった元同僚の意外な性癖に改めてドン引きしている

木場を尻目に、「そうか、ハツタリか」とゼノヴィアは脳細胞をフル活動させて、今度は一誠がわざわざハツタリをかました意味について推測を重ねていく。

ゼノヴィアは、自分があまり賢くないことを知っている。学業の意味ではなく、単にこういつた権謀術数に向いてないという意味だ。考えれば考える程に事態を難しく捉えてしまうのだ。

ならば物事をシンプルに紐解いてみれば案外分かりやすくなることも彼女は既に知っていた。新上司たるシーグヴァイラの教育の賜物である。

——兵藤一誠は嘘をついた。各派閥や“幽世の聖杯”が配下にならないにも関わらず、実際にはあたかも自分の下で足並みを揃えているようにでっちあげた。

——これまでの彼の行動から考えて、その嘘にも何かしら意味があったのだろう。つまり、嘘をつかなければならない状況にあった。

——シーグヴァイラ・アガレス曰く、嘘とは相手が知られたくない真実の反対だ。それは逆説的に、各派閥は纏められておらず後者も……待てよ？ “幽世の聖杯”所有者が兵藤一誠の配下でないのなら、グレンデルはどうやって甦った？ 誰が甦らせた？

——仮にグレンデルを甦らせたのが“幽世の聖杯”なら、その所有者は誰に協力している？

▼
「おーい、ゼノヴィアさんよお」

思考の海に沈んでいた彼女を呼び戻したのは、困り顔を浮かべた一誠だった。「もう帰って良いか？」と訊ねる彼の右手には衣服を詰め込んだビニール袋がぶら下がっている。どうやら推測に夢中になっている間にすっかり洗濯が終わってしまったようだ。

「嫁を待たせてるんでな。インタビューが思い付かないなら俺は帰るぞ」

「待ってくれ、テロリスト兵藤一誠。もう一つだけ聞きたいことがある」

「今すっげー悪意を感じた気がする。分かったよ、あと一個だけな」

「感謝する。では、最後の質問だが……」

一誠の顔を真っ直ぐ見据えて、ゼノヴィアは訊ねる。

「——もしかして、君は誰かと戦っているのか？」

「もうすぐ分かると思うぜ、世界中がな」

対して、一誠はランドリーの店内をぐるりと見渡しながら答えた。まるで大勢の観客の前でパフォーマンスを行うマジシャンのような仕草には今の言葉が、店の周囲に潜んでいて今も突入の機会を窺っている複数の気配へ向けたものだという意味合いも含まれていた。

気配の正体は彼の出現を察知したシーグヴァイラ達だろう。下手に突入せずにあくまで様子見に徹する辺り、上司もまた優秀だ。

「気を付けるように言っておけよ、デユランダルのゼノヴィア」

「……何に對してだ？ また襲撃作戦でも行うのか？」

そのインタビュには答えなのまま、彼は本部への転移術式を開き、やがて輝きの中で消えていった。

草木に隠れていた気配の中の一つ——覚えのあるハーフヴァンパイアのそれに、新たな動乱の波を感じ取りながら。

「報告は以上だ……です、シーグヴァイラ様」

「ふむ、下がってよろしい」

兵藤一誠の出現を受けて、シーグヴァイラ率いる新生徒会では直ちに緊急対策会議が行われた。その第一の議題は当然ながら人間界に姿を見せた“赤龍帝”についてである。

直に会話を交わしたゼノヴィア達からの報告を下地に、シーグヴァイラは顎の下で手を組ながら黙々と脳を稼働させ、幾つかの要点をピックアップする作業と、その真偽を掴み取る作業を繰り返す。テロリストの言葉をそのまま鵜呑みにする訳にはいかないからだ。

とはいえ、それはある種の徒労に終わった。

「正直者というか、それとも馬鹿なのか……まさか一から百まで本当のことを話してるなんて思わないじゃない」

「実際に会ったことがありません故、私には判断しかねますな。しかし、奴が冥界だけでなく三大勢力を脅かす切れ者である点をお忘れなきよう」

「分かっているわ。油断するつもりはない。忠告ありがとうね、アリエヴィアン」

眼鏡を外し、軽く目頭を抑えるシーグヴァイラ。その顔には少ない疲労の色が見えていた。推察を重ねた果てに、一誠に騙す意図はなく本当に洗濯中の暇潰し目的だったと悟れば、骨折り損に愚痴の一つも言いたくなる。

緊急事態だから、と今夜の仕事をキャンセルせざるを得なくなった顧客にどう説明したものだろう。そうでなくとも上役に今回の一件を報告するという面倒事が増えたというのに。

彼女は思わず深い溜め息を吐いたが、今回の邂逅は決して無意味ではなく、寧ろ貴重な情報のオンパレードであることもまた事実だ。

即ち、一誠はあたかも“禍の団”を手中に収めたような発言をしておきながら実際には自身の派閥のみで活動しており、グレンデルや“幽世の聖杯”所有者の属する派閥とは敵対関係にある――。

「これが判明しただけでも冥界にとって大きな前進よ。今回は大手柄ね、ゼノヴィア」

「恐縮です。しかし、気になるのは……」

「彼の抗争相手、ね」

単なる内部抗争か、それとも別組織との諍いか。

降って湧いてきた別の厄介事の気配に軽い頭痛を覚えながらも、的確な指摘と判断を見せる新たな“戦車”の姿に、シーグヴァイラは満足そうに頷いた。

元教会戦士にして現役の聖剣使い、何よりもリアス・グレモリーの元眷属という異色にして黒歴史に等しい経歴を持つゼノヴィアの移籍打診について当初、シーグヴァイラ及び眷属達は難色を示した。冥界中からバツシングを受けている主君に仕えていたのだから、眷属も同類ではないかと考えても当然である。それは彼女だけでなく他の三名も同様だった。

実際、“神の子を見張る者”壊滅——バラキエル戦死の報を聞いてから姫島朱乃は部屋に引きこもるようになってしまったし、ギヤスパール・ヴラディは引きこもりこそ叩き直したものの、まだまだ他者とのコミュニケーション能力に難がある。

半分がこの有り様なのだから残る半分も、と警戒しても不思議ではない。

それが蓋を開ければ、ゼノヴィアは今や新生シーグヴァイラ・アガレス眷属の要になるまでに著しい成長を遂げている。

「もしかすれば、先日の宣言で奴は各派閥からの反感を買ったのではないのでしょうか？ 元々、“禍の団”は有象無象が集まった組織です。それを切っ掛けに内部分裂に至ってもおかしくはありません」

「……ふむ、一理あるわね」

「そこから内部抗争が勃発したのか、生じた隙を敵対組織に突かれたのかは分かりませんが、可能性としてはあり得るか」と

無論、成長の裏にはシーグヴァイラの涙ぐましいまでの教育が欠かせなかった。何せ移籍直後の彼女は戦場でデュランダルを振り回すだけを取り柄の脳筋おバカでしかなかったのだから。

パワーだけの馬鹿など危なっかしいだけであるし、そもそも人間界に派遣された悪魔の仕事とは何も”はぐれ悪魔”討伐などの戦闘に限ったことではない。例えば街の住人達を相手に契約を交わし、代償をせしめてくるのも自身の評価に繋がる重要な仕事だ。

ところが、ゼノヴィアはその基本的なルールすらも知らなかった。単純に侵入者を撃退するのが仕事だと勘違いしていたのだ。

尤も、この点に関しては一概に彼女ばかりを責められない。眷属の教育は”王”の務めであり、ゼノヴィアの無知は元”王”であるリアスの怠慢に原因と責任がある。

かくして、脳筋少女の矯正を決意したシーグヴァイラは古代ギリシャのスパルタも裸足で逃げ出すような再教育を彼女に施し、本人の努力もあってゼノヴィアは見事に一同の新たな戦力に上り詰めたのであった。

尚、もう一人の常識人枠である木場と同僚のバフィール・フルカスの”騎士”コンビは、今夜も仲良く二人で街の警備に出かけていく程度にはラブコメな雰囲気にあるらしい。

”女王”アリヴィアンとの雑談の中で眷属に先を越されたことを知ったシーグヴァイラは、リア充爆発しろ、と持っていたペンを握り潰したとか潰していないとか。

——life. 103 亡者のイージス——

駒王学園への転入という彼氏作りの絶好の機会を脳筋の再教育漬けでオシャカにされ、それが終わった頃にはすっかり高嶺の花のイメージができあがり、異性が近づくどころか話し掛けられることすらもなくなつた金髪眼鏡少女の悲しい話はさておき。

「ま、兵藤一誠が勝手に自滅してくれるなら放っておくに越したことはないけど……この一件、上役にどう報告するべきかしらね」

「どう、とは？」

「本当に上役を——新たな魔王様達を信用して良いのか、という話よ」
青春殺しの張本人からの質問に対して、シーグヴァイラは内心で抱いていた疑惑を口にした。

疑惑の発端は、先日発表された前”上層部”の射殺事件及び一族郎党

の処刑である。

内通容疑で逮捕された彼らは逃走を図ったとしてやむを得ず全員が射殺され、後者は後々の禍根を経つ為に幼子に至るまで死刑判決を受け、形だけの裁判の終了から僅か一時間後には一人残らず刑が執行された。

一族郎党の処刑にはまだ納得できる。

僻地への追放処分のみに残った初代魔王の血族が後々に「旧魔王派」としてテロリスト組織に合流した前例を考慮すれば、苛烈ではあるものの妥当な判断と言える。

では、「赤龍帝」との内通容疑で逮捕されていた前者までも皆殺しにした理由は？

「まさか一つの檻に纏めて放り込んでいた訳ではないでしょう。寧ろ、そういった事態を防ぐ為に連中を別々の牢獄に収監していた筈よ。ならば、示し合わせたかのように全員が同じタイミングで逃走を図ることの方が難しいわ」

「つまり、早急に口封じを行わなければならない理由が新政権に……デイハウザー様達には存在した、と？」

「恐る恐るといった様子でゼノヴィアが訊ねると、「嘘とは知られたくない真実の反対よ」とシーグヴァイラは頷いた。

それは逆説的に、

「魔王様達こそが兵藤一誠の真なる内通者——私はそう考えているわ」

自分達のトップが既にテロリストと手を結んでいるかもしれない、という指摘に絶句するゼノヴィア。

だが、改めて考えてみれば辻褃は合う。

真つ先に思い当たるのは、旧「上層部」に内通の冤罪を押し付けられるだけの権力者は自ずと限られてくる点である。

曲がりなりにも魑魅魍魎が巢食う政府内部の権力争いを生き残ってきた連中だ。相応に保身能力にも長けているだろうし、捕縛されたとしてその権勢や地位をフル活用すればそれなりに抗うことは可能だった筈なのだ。

そうでなくとも、そもそも“上層部”が本当に一誠と内通していたとすれば、何らかの司法取引を持ちかければ喜んで飛び付いてペラペラと情報を喋っただろう。奴らは己の立場には敏感な生き物なのだから。

そして二つ目は、各派閥と袂を分かったであろう一誠達の資金源が謎に包まれている点だ。

今までは実働担当と裏方担当で派閥毎に役割を分担することで活動資金をあつめていたのかもしれないが、内部分裂した今となってはそれらを全て一誠達のチームだけで行う必要が生じる。これまで実働を専門に担ってきた彼らにそのようなノウハウがあるとは思えない。

オフィスは兎も角、一誠は神仏の領域に至っただけの一個の生物に過ぎない。食事が不可欠であり、日用品や消耗品などの日々の細かな支出も発生するだろう。

彼がこれまで通りに活動していくには、新たな資金源の確保が絶対条件だ。

「けれど、その疑問もデイハウザー様やロイガン様、もしくは新政権全体で秘密裏に援助していると考えれば納得できる。お二方が討伐を宣言したのも、内通を悟らせない為のフェイクでしょうね」

「そんな……」

「だから悩んでいるのよ。仮に馬鹿正直に報告しようものなら、私達は明日には殺されてるかもね。クレéria・ベリアル例もあるし」

「誰ですか、その方は？」

「リアス・グレモリーの前に街を管理していた悪魔よ。噂では“上層部”のスキヤンダルを知ってしまった為に眷属もろとも暗殺されてしまったとか」

——ああ、だからデイハウザー様は連中を始末したのね。復讐も兼ねて。

知りたくなかった新魔王の裏側を悟ってしまい、改めて深い溜め息を吐き出すシーグヴァイラ。これでは本当にクレériaの後を追うことになってしまいそうだ。

今後の進退について頭を悩ませていると、通信術式の対応にしばらく席を外していたアリヴィアンが血相を変えて部屋に飛び込んだ。

「シーグヴァイラ様、一大事です！ 巡回中のバファイルより緊急連絡！」

停止していた悪意が、

「――街への侵入者です!!」

再び動き始める。

——そうか、人間界に姿を見せたか。

シーグヴァイラからの報告を受けたデイハウザーはワークチエアに座ったまま瞑目し、まずは彼女達を取り巻く状況の整理に取り掛かった。無論、駒王町に現れたという侵入者についてだ。

先ず、応援が駆け付けるまでの足止めを狙った木場とバフィールの“騎士”コンビは到着までの間に敗北し、仲良くアガレス領の医療機関に放り込まれた。次いで交戦を開始した“女王”アリヴィアンも接戦の末に競り負け、入院には至らなかったものの暫くの通院を余儀なくされた。

結果だけ見れば、交戦したメンバーの中で軽傷で済んだのは“王”シーグヴァイラと“戦車”ゼノヴィアの二人だけ。挙げ句に侵入者の逃走を許すという有り様だが、勝敗は平家の常である。寧ろそれ程の手練れを相手に死者が出なかったのは幸いだろう。

とはいえ、侵入者の実力が判明したところで、その目的と逃走先が不明のままでは意味がない。

——“禍の団”を名乗ったらしいが、恐らく本当の所属先は第三勢力だろう。攪乱目的か、それとも単なる捨て駒か……。

どちらにせよ早急に捕縛せねばなるまい、とデイハウザーは通信術式を執務机の上に展開した。

『……今回の一件、面目次第もございません』

やがて淡く浮かび上がったベリアル家の紋章が点滅し、それに呼応して少女の申し訳なさそうな声が聞こえた。シーグヴァイラだ。

「構わん、相手が一枚上手だったまでのこと。どうしても気に病むと云うのなら、侵入者捕縛に貢献して今日の汚名をそそげ」

『はっ!!』

「では早速だが任務を与えよう。その前に住民の避難は進んでいるか？」

『既に“兵士”ギヤスパ・ウラデイ及び配下の使い魔達に命じ、およそ三割の住民は地下シエルターに避難完了しています。また駒王町一

帯を覆うように非常線も展開しております』

侵入者との戦いはアガレス眷属の完敗だが、シーグヴァイラとて将来を囑望されている逸材だ。

逃走した男を無理に深追いすることなく、即座に住民達の避難と非常線展開を独断で手配・指示して被害拡大を抑えた手腕は成程、新領主として若年ながら異例の抜擢をされるのも頷ける。

そして、そんな才女だからこそ新二大魔王が抱える不都合な真実――兵藤一誠との結託、という旧“上層部”のそれをも越えるスキャンダルに辿り着いてしまっている点も、デイハウザーは既に把握していた。

彼女達が人間界での拠点としている駒王学園、その生徒会室に秘密裏に仕掛けた盗聴器によって。

「了解した。此方も部隊を編成している途中だが、どうしても到着まで時間が必要だ。君には引き続き住民の避難と、それから侵入者の搜索を合わせて行ってもらいたい」

――今は侵入者の捕縛が最優先だ。シーグヴァイラの進退はその後で考えるか。

そう領いて、デイハウザーは続け様に指示を与える。

「断じて無理に追う必要はない。発見したり気付いたことがあれば私に連絡するだけで構わない」

『承知しました!! 任務完遂を魔王様に誓います!』

「その意気だ。君には期待しているよ」

『はっ!!』

通信が完全に切れたことを確認してから、今度は別の人物に連絡を取る。「どうした?」と術式越しに聞こえた一誠の声は心なしか疲れしているように思えた。

「お疲れのところ申し訳ない、一誠殿。大事が起こったので直ぐに伝えるべきと思いましたが……都合が悪ければ時間を改めますが」

『いや、大丈夫だ』

ちなみに一誠の声が疲弊していた理由は、彼の帰りが遅かったことに対してお冠な嫁の機嫌を取っていたからである。

床に這いつくばって外見年齢一桁の幼女の足にキスするというプレイ染みた機嫌取りに励んでいたからか、その声音に反して嬉しそうな笑みすら浮かべていることをデイハウザーは知らないし、また訊ねようとも思わない。

世の中には知らなくていいこともあるのだから。

——life. 104 罪と罫——

「……ということで現在は住民の避難を進め、また同時に駒王町全体に厳戒態勢を敷いています」

『そうか、分かった。しかし、この短時間にそこまで手配するとは相変わらずの手並みだな』

「いえ、これはシーグヴァイラ・アガレスの功績です。彼女の判断がなければ後手に回ったでしょう」

デイハウザーの言葉に、そういえば、と一誠は先週読んだ冥界の週刊紙を思い出した。人事異動の一覧の片隅に掲載されていた、幸薄そうな金髪眼鏡少女の写真。記憶が正しければ彼女の名がシーグヴァイラだった筈だ。

『リアス・グレモリーに代わる領主として派遣された女悪魔か。少しは使えるのか?』

紅髪の前任者と比較してからかう一誠だが、少なくとも侵入者の存在を把握し、迅速に行動を開始した点でシーグヴァイラの方が優秀である。そうでなければ魔王直々に抜擢した甲斐がない。

「彼女は若手ながら非常に優秀ですよ。優秀過ぎて私と一誠殿の繋がり

りに気付いてしまう程度にはね」

『……そうか、知ったのか』

自分で派遣した配シーグヴァイラ下に自分達の内通を気付かれたとなればこれ程に本末転倒な話もないのだが、彼としては前任者と同程度の才覚の持ち主を送りたいのが本音だった。裏で暗躍するのに都合が良いからだ。

しかし、あの町は「駒王同盟」締結と、何より兵藤一誠の出生の地として既に政治・歴史の二点において重要地点と化してしまっている。

折角の門出をアピールする為にも、相応に優秀な悪魔を任命する必

要がある――。

そう配慮しての今回の抜擢は、どうやら裏目に出てしまったようだ。

『その女の末路はデイハウザーに任せる。煮るなり焼くなり好きにしてくれ。ただし、殺すなら確実に殺せ』

「承知しました」

『それと侵入者は可及的速やかに始末しろ。必要とあれば俺が動いても構わない』

始末してよろしいのですか、という鳩が豆鉄砲を食ったような声音は、デイハウザーが思わず溢してしまった驚愕だ。捕縛して情報を得るとばかり思っていただけに、彼が即時抹殺を決めたことは意外だった。

しかし、一誠とて無意味無策で決断したのではない。

“第三勢力”における侵入者の立場や権限は不明瞭だが十中八九、ただの尖兵扱いだろう。持っている情報など知れており、捕まえたところでメリットが薄い。そればかりか冥界で発生したテロのように捕縛した瞬間に自爆しかねない。

手元に爆弾を抱えるリスクを選ぶぐらいなら、確実性を重視して始末してしまった方が安全である。

『現状、俺達は侵入者の目的や人数も掴めていない。そいつは適当に見繕った陽動役で、本命が別に隠れている可能性もある』

陽動を用いた数々の作戦を立案・実行してきた彼だからこそ、その指摘には説得力があった。

『だったら陽動なんざ早期に始末して……その後の本命に……対応……』

「どうされましたか？」

『少し待て。落ち着いてくれ、オーフィス……これは浮気じゃないんだ、大事な……んむっ!』

水が厭らしく滴る音が耳に入った瞬間、「お邪魔虫は退散しましょう」と通信を切った。世の中には知らなくていいことも知りたくないこともあるのだ。

「シーグヴァイラに告ぐ。侵入者の捕縛は考えなくていい。抹殺を最優先に行動しろ。また討伐部隊との合流後は補佐に徹し、我々とも連携しながら――」

テキパキと配下に指示を出す魔王の目は、心なしか疲れている気がした。

とはいえ、まさか一誠が嫁に授乳プレイを強いられている真つ最中だったとは、デイハウザーの目をもってしても見抜けなかった。

通信が途絶えたことを確認して、一誠は顎に手をやって次なる一手を模索する。

駒王町に侵入した男は中々の実力を誇り、新たに赴任していた領主シーグヴァイラと眷属達を退けたらしい。即座に非常線が張られた今、恐らくは今も駒王町のどこかに潜伏している筈だ。

とはいえ、汚名返上に燃えるシーグヴァイラ達による執念の搜索活動と、編成・派遣される討伐部隊の追跡からいつまでも逃れ続けるのは至難だろう。

そう遠くない内に吉報が届く。
脳内でそう結論付ける一誠だが、彼らにとってそれは凶報でもある。

——侵入者の搜索続行と、そればかりに注目せざるを得ない状況に置かれてしまっているという点は同義だ。囃の仕事は既に果たされた。

囃作戦を駆使して三大勢力を翻弄してきた“赤龍帝”だからこそ、これが単なる侵入者ではなく、後に真の目的を携えた本命が現れる可能性を予想——否、確信していた。

自分なら必ずこの状況で出撃するからだ。

必要ならば動く、とデイハウザーに約束したのも本命の存在を見越してのことだ。真の目的の為に活動するような立場ならば相応に情報を持っているだろう。是が非でも逃がしたくないが故にわざわざ出撃を匂わせたのである。

——大丈夫、ここまででは順調だ。最悪の場合は俺が出撃すれば片付く。何も問題はない、が……。

彼の最大の誤算を挙げるとすれば、恐らく出撃できそうにない点だ。

「……赤龍帝、私の母乳、美味しい？」

「……うん」

どこことなく上機嫌なオーフィス^嫁、視界を独り占めするのは乳腺の発

達に比例して増量傾向にある嫁のおっぱい、そして口元に押し付けられるのは×印シールが捲られた薄桃色の乳頭だ。

床との高低差を利用し、ベッドの上に膝立ちするオーフィスは正面に立つ一誠の顔を胸に埋めさせ、気分は数ヶ月早いママである。しかも逃れられないように彼の頭を両腕でしっかりとホルドしているのだから質が悪い。

尤も、ドアの隙間越しに覗くフリードとレイヴェルから見た場合、逆に幼女にしがみついて授乳プレイを強要する鬼畜がいるようにしか見えないのだが。

「で、自称側近はどうしますの？ 面倒を見ると豪語していましたわね？」

「ごめんシンプルに無理だわ」

ドン引きする部下二人にも気付かず、開き直ってチューチューと吸い付いている辺り、彼は疲れているのかもしれない。

事実、彼の心身は限界を迎えようとしていた。

——life. 105 癒すオーフィス——

先ず身体に蓄積した疲労についてだが、これは単純に今までの戦いの連続で背負ってきたダメージの数々が、ここに来て遂に表面化しただけだ。

特に「禍の団」が分裂し、実質的な一誠達だけのチームと化した今、彼は人手不足という弱点を補うべく無理な出撃を繰り返してきた。

休養も満足に取らないまま動き回ったのでは疲労など癒える筈もない。その点は、自己強化の代償に肉体の大半がドラゴンのそれに置き換わった今も変わらないままである。

では次に、精神面の負担はどうだろうか？

三大勢力を相手に積み上げてきたパフォーマンスとその実績は知らず知らずの内に、次も必ず成功させなければいけない、という重圧となつて双肩にのし掛かる。

そして今後の計画をより完璧に近付けようと試行錯誤を重ねる中で重圧は日に日に増していき、計画が成功すればそれがまた新たな重圧として襲い掛かるのだ。

例え一誠が魔王クラスの実力を獲得しても、精神まではそうはいかない。プレツシャーの連続に晒され、彼の精神面は不安定になる一方だった。

そして、そんな彼の揺らぐ精神に大きく罅を入れたのが両親の死亡と、グレンデルが引き起こした襲撃事件である。

「オーフィス、俺は……」

「……ん。いっぱい吐き出して、良い」

愛する嫁の胸に頬を埋めながら、一誠はポツリポツリと言葉を紡ぐ。

「俺は守れなかった……また誰も守れなかった……」

「……うん」

「俺のせいで父さんと母さんが死んで……それでも俺は前に進むしかなくて……」

両親の死はアーシアのそれに続く根強いトラウマとなって、一誠の心に深く刻まれている。出産を控える嫁を過剰なまでに守ろうと動くのも夫としての義務を果たす以上に、大切な誰かを二度と失いたくない、という恐怖心がそうさせるのだ。

その結果、一誠は自分の身体を省みることもなくなってしまうた。

それが妻子を失うまいとする決意の表れなのか、はたまた無意識の贖罪なのかは定かではない。

だが、そうして自身の体調の悪化から眼を逸らし、無謀を貫いた結果が後者であるのなら、運命とは皮肉なものである。

「あの時、俺は……結果的に出撃を選んだ……俺は奴を倒して……グレンデルとヴァーリは撤退していった……」

「……うん」

「その選択が間違つてるとは思わない……けど、結果だけ見ればさ……俺のお陰で大勢の悪魔が救われたんだ……」

「……うん」

仮に一誠の乱入が無ければ、グレンデルは迎撃したデイハウザーやファルビウムを簡単に叩き潰し、冥界全土を火の海にして回った筈

だ。当然、その範囲内にはグレモリー領——復讐対象のサーゼクスやリアスも含まれている。

もし彼らが殺されれば、果たして何の為に血の滲むような努力に身を沈め、そうと知りながら無差別大量虐殺同然の超長距離砲撃を実行し、世界中の敵になる道を選んだのか分からなくなってしまう。

それを焦つての戦闘介入は、しかし忌み嫌う悪魔達を助けてしまう結果となつてしまった。悪魔への復讐を掲げる“赤龍帝”が悪魔を救わされるなど、これ程に皮肉な話は他にない。

その事実気付いたとき、遂に一誠の心はミシリと音を立てて軋んだ。

オーフェイスが唐突に授乳プレイを強要したのも夫の精神状態が危ういことを察し、彼女なりに励まそうとした結果である。

こういう場合、とオーフェイスは彼の頬に白く小さな手を添えながら、口を開く。

「……我、どういう言葉を送るのか、知ってる。赤龍帝へのエール、ちやんと考えた」

世界最強の座に最も近い“無限の龍神”^{オーフェイス}から見て、当初の一誠の實力は地面を伝う蟻の列と同義、つまり有象無象の一人でしかなかった。

にも関わらず“蛇”を拒絶した彼はオーフェイスとの特訓の果てに、今や世界にその名を知られる強者にまで上り詰めた。もし全勢力の實力者ランキングを作成するとすれば——“倍加”前提とはいえ——トップ10入りは確実な程に。

自力で神仏の領域に片足を踏み入れたのは間違いなく本人の努力の賜物だ。

「……お疲れ様、よく頑張ったね」

それを誰よりも傍らで見てきた彼女だからこそ、

「……兵藤、一誠」

その言葉はどんな美しい歌にも勝る、最高の癒しとなるのだ。

「え……」

「……どうだった？ 一誠、元気出た？」

エヘン、と発展途上の胸を張るオーフェイス。そんな彼女が何よりも

誰よりも愛しくて、「オーフィスっ！」と叫びながら一誠は嫁のおっぱいにすがり付いた。そして彼女の名前を呼び続けながら、一誠は泣いた。

「……あつ、くすぐりたい」

「オーフィス、オーフィスオーフィス……」

「……一誠、可愛い。大きな子供ができたみたい」

オーフィスは薄く微笑んだ。それから、自分が揺り籠になったような気分で、一誠の頭を撫でた。

駒王町は実に奇妙な町だ、とは裏側に通じる者達の共通認識である。

歴史を振り返っても特に神仏や魑魅魍魎と深い関わりがあった訳でもなく、勢力間抗争における重要地点を担う訳でもない。

駅前再開発に従って著しい発展を遂げた地方都市群の一つに過ぎず、強いて挙げるなら悪魔勢力が若手悪魔を領主として派遣し、将来の領地経営の研修や或いは逃走した”はぐれ悪魔”討伐の拠点に用いる場ではなかった。事実、政府や貴族達はそういった研修用や個人的な別荘地として人間界に幾つもの土地を保有している。

つまり彼らからすれば人間界の地方都市は数ある縄張りの一つに過ぎないのだが、あの町だけは別だった。

どういう訳か、やたら多くの騒動——それも歴史を語る上で欠かせない出来事や災害にも等しい非常事態に巻き込まれるのだ。

「初代領主と旧”上層部”のドタバタは詳しく知らねーけどさあ？ それを抜きにしても最近マジで物騒なことが起きまくってんすわ」

あの町呪われてんだろ、とわざとらしい苦い表情でフリード・セルゼンは語り始める。駒王町で巻き起こった一連の事件を証言するに当たって、これ以上の適役は少ないだろう。因みに彼以上に証言台に相応しい少年上司は泣き疲れたのか、嫁のおっぱいに包まれてすやすやと眠っている。

何も言わずに抜け出してきたのは過労で今にも倒れそうだった口リコン上司を心配してのフリードなりの優しさで、決して授乳プレイを強いる上司に愛想を尽かした訳ではない。もしもし、ポリスメン？ 青少年保護育成条例に真っ向から喧嘩を売った上司の未来はさておき、”駒王町を舞台にした物語”をゼロから辿るにフリードもまた相応しい人物である点は、今更記す必要もない筈だ。

何故なら、その発端とも言うべきレイナーレ侵入事件に彼はガッツリと絡んでるのだから。

それは、ロリコン上司との出会いでもある。

「当時の俺ちゃんつてば”神の子を見張る者”所属の、世界を股に掛けて活躍する完璧で究極の”はぐれ悪魔祓い”でさあ？ 社会に縛られずに生きてやる、なんて宣って世界を相手にドツタンバツタン大暴れしてたんすわ！ 七つのボールを集めたり人理修復の旅に出たり……手に汗を握る冒険活劇の連続の日々を生き抜いてきたつてばね！！」

自慢気に武勇伝を並べるフリードだが勿論信じてはいけない。彼のそれは約八割が嘘だ。実際は社畜にありがちな悲しい台所事情を補うべく、こつそり強盗紛いの活動を繰り返してきただけである。

事前調査した家の住人が墮天使と敵対関係にある悪魔と契約していると知るや敵戦力の排除にかこつけて押し入り、金目の物と住人の命を嬉々として奪う姿は真正銘の悪党で、その所業には不法侵入常習犯のRPGの勇者も「そこまで俺はやってない」と顔を真っ赤にして白旗と聖剣を振るうだろう。

そんな下水を煮詰めたような性格をしたフリードなのだからレイナーレから参加を要請された任務も真面目に遂行するつもりは一ミリたりともなく、レイナーレが拠点とする駒王町の住人達と彼女自身の貯金をたんまりと拝借することしか頭になかった。

一誠と出会ったのは、護衛対象アーシヤを連れて適当な民家に押し入るといふ博打に打って出たある日の夜のことだった。

「……あなたつて、本当に最低の屑ね」

「信じて送り出した彼氏いない歴〓年齢領主が侵入してきた不審者にボロ負けしてアへ顔。ピース敗北報告を送ってくるなんて……」

「殺すぞ」

「ごめんちやい♡」



第一印象も後味も悪過ぎるファーストコンタクトは痛み分けに終わり、二度目の戦いも戦況の不利を悟って決着がつかないまま撤退を選んだ。

要するにレイナーレを見捨てて与えられた活動資金と金庫の中身だけ失敬して逃げ出したのだが、そういえば彼女は今も元気でやって

るかな、と時折思い出す程度には無責任な行動に対して後悔の念を抱いている。尚、レイナーレの末路は把握済みだ。

こうしてカモを失ったフリードは何故かボテ腹と化した財布を駆使して自由気ままに潜伏生活を送っていたのだが、そんな彼に次なる任務が飛び込んできた。

聖剣エクスカリバーを用いた戦争の口実作り――。

“神の子を見張る者”幹部のコカビエル直々の打診を、その溢れる好奇心から彼は即座に了承した。

エクスカリバーといえばアーサー王伝説に登場する伝説の聖剣で、剣士を名乗る者なら誰もが一度は握ってみたいと思う名剣だ。

かつての三竦みの戦争で破壊され、その欠片が固有能力を持つ七本に分裂・増殖している時点で胡散臭い代物だが、それはそれとして伝説に触れるまたとない機会であるのも事実である。決して提示された高額の謝礼金に屈服したのではない。

「ま、その話はロリコン上司と関係ないから置いとくつすわ。コカビーが苦勞して集めたのになんかぽつと出の聖魔剣に粉碎された話も空気の読める俺ちゃんは次元の彼方に置いとくつすわ」

「ちよつと、そこまで語っておいて省略するなんて手抜きじゃない?」「急に下ネタを使うなよ。彼氏いない歴〓年齢に見え……ごめんちゃい♡」

「よろしい。でもこうして改めて振り返ってみると、本当に様々な事件が発生しているのね」

「その原因って殆どが三大勢力だけだな」

「ごめんなさい」

「よろしい」

フリードはニヤニヤしながら頷き、引き続き駒王町で起こった出来事について語る。

とはいえ、エクスカリバー事件の後に起こった出来事といえば駒王学園で開催された和平会談と、その結果として締結された“駒王同盟”程度しかない。

長く争ってきた三大勢力の和平・同盟が結ばれた、という歴史的な

観点から見れば快挙なのだが、この同盟も各勢力が代替わりしつつある現在は白紙寸前に等しい。

勢力再建に奮闘する悪魔達は兎も角、グレンデルの襲来により機能不全に陥った墮天使や不自然な沈黙を貫く天使に同盟をそのまま維持するつもりがあるかどうかは怪しい。それどころか天界は支持率低下や和平に不満を募らせる下部組織への対策に戦争再開を選びかねない。

第二次大戦の勃発――。

今度は聖書の中だけでは終わらない、文字通り世界を揺るがしかねない悪夢は、されどギリギリの綱渡りの上で辛うじて回避を続けている。何故か？

「――あいつらには共通の敵が存在するからだ」

名前こそ出さなかったものの、フリードの言葉を聞いていた者達はその正体が誰なのか、直ぐに分かった。

「確かに本人は悪魔を標的にしてるけどな、ありとあらゆる冤罪を抱えてる今じゃ誰も信じちゃくれねえよ。ちゅーか本人が全勢力に宣戦布告したからな」

冤罪の真実を知らない神話勢力からすれば、本当に力に飲み込まれた末に暴走を開始したようにしか思えない。名だたる神仏でさえ戦々恐々と過ごしているのだから、“連合戦争”で多くの将兵を喪失した三大勢力の不安は他神話の比ではないだろう。

仮にこの状況下で同盟を破棄しようものなら、必ず“赤龍帝”はその隙を突いてくる――。

戦場で彼の実力と知謀を見せ付けられた彼らだからこそ、三竦みの戦争を再び起こした後に自分達が破滅するであろうことも理解していた。続いているように思える平和は、それを恐れての仮初めに過ぎない。

「逆に言えば、彼が死んだ途端に世界は戦争を選択する筈だ。あんたにも戦場行きの赤い切符が届くだろうぜ？」

「……」

「あんたは彼に泣いて感謝すべきだ。こうやってぬくぬくと領主ごっつ

こをやつてられんのも彼が、兵藤一誠が全世界の敵としてアンチ・ヘイトを集めているからだ」

「……そう、かもしれないわね」

仮にこれが兵藤一誠に定められた宿命なら、なんと残酷で皮肉な筋書きなのだろう。復讐の為に進み続け、悪魔のみならず世界中の敵として君臨した結果、却って世界は平穏を取り戻したのだから。

或いは、これ以上の騒動を嫌った駒王町が産み落とし、悪魔が育んだ一種の神秘なのかもしれない。

それが証拠に、“駒”を用いた表現の一つに“捨て駒”がある。

相手に取らせる目的で駒を進める手筋を指す将棋用語の一つであり、そこから転じて目的を達成する為の人的犠牲を表す例えに用いられるようになった。

「捨て駒の王が生まれた町——だから駒王町。世にも奇蹟な物語だろうか？ 信じるか信じないかはあんた次第ってな」

最後こそフリードは冗談めかして締め括ったものの、この町が奇妙であることは強ち間違っていないのかもしれない。そのもう一つの証拠が、駒王町の歴代領主を襲った悲劇的な末路だ。

——クレーリア・ベリアル。初代領主を務めた彼女は偶然にも“王の駒”の存在を知ってしまい、スキヤンダルの発覚を恐れた旧“上層部”の手によつて眷属や恋人もろとも暗殺された。

——リアス・グレモリー。前領主だった彼女は元眷属の兵藤一誠が離反した責任を押し付けられ、没落寸前のグレモリー家と共に今や冥界中から後ろ指を指される日々を過ごしている。

駒王町の領主を務めた悪魔は悲惨な末路を辿る、とは冥界の貴族達の間でまことしやかに囁かれるジンクスだが、ところで今代の領主は名前を何と言っただろう？

「……」

彼の隣で顔を蒼白にしている金髪少女は、名をシーグヴァイラ・アガレスという。悲しいことに駒王町の新領主と同姓同名同一人物だ。

「……お得意の冗談よね？ ね？ 早く嘘だと言いなさいよフリード」

「あー、初代に比べて無能姫は死んでないだけマシになってるし、三代目はもつとマシになるんじゃないかね？ 知らんけど」

励ましにも癒しにもならないエールに、「死ぬ前に彼氏欲しかったなあ」とシーグヴァイラは遂にポロポロと涙を浮かべた。

「さーて、長々と付き合わせて悪かったつすね」

そんな彼氏いない歴〃年齢を他所に、フリードは真剣な表情で目の前の男に視線を移す。

黒い長髪と“悪魔祓い”の制服が特徴的なその男——八重垣正臣は特に気にした様子を見せず、逆に生気の抜けた目を細めた。かつての恋人の名を覚えていてる者と出会えたことが嬉しかったのだ。

「質問、良いかな？」

周囲を見渡しながら、八重垣は訊ねた。

「どうして潜伏場所が分かった？」

彼が不思議に思うのも無理はない。何故なら、彼らが立っているこの場所は町外れに佇む廃教会、その地下室なのだから。

金を持っているのならホテルを転々とすればいいし、持っていないのなら強盗するなり住人を追い出して借家にしてしまえば片付く。

後者はフリードの持論だが、それにしてもわざわざカビ臭い廃墟の地下に隠れる必要もなければ、そもそも普通は地下室の存在にも確信がなければ気付かないし思い当たらない筈なのだ。

そう、確信がなければ。

「そこら辺を歩いてた三代目領主を拉致って脅し……頼んで町中のホテルに確認してもらったが、それらしい宿泊客はいなかった。行方不明者の情報もない。後は消去法だ」

「だとしても、この部屋の存在は事前に知っていなければ思い付かない——そうか、君も」

「ピンポーン。この教会は俺の元上司が拠点に使っていた場所だな。ちゅーか俺も潜伏用に使ってた時期もあるし？ だから割と綺麗だったろ？ ちゃんと掃除してから出ていったんだぜ？」

「成る程、合点がいったよ」

八重垣は肩を竦めた。潜伏場所が彼らにバレている現状、必然的に

討伐部隊も駆け付けろだろう。相応の剣の腕前や“幽世の聖杯”で身体能力を強化されているとはいえ、大勢の悪魔達を相手に抗えるつもりはない。

ましてや、フリードの今の所属先を考えれば、必ずや兵藤一誠も姿を現す筈である。悪魔嫌いの“赤龍帝”が討伐部隊と鉢合わせする、というような幸運を期待したところで、その次に殺されるのは八重垣だ。

だが、彼の予想に反してフリードは首を横に振った。

「彼は来ねえよ。この場所を知ってるのは俺と彼氏いない領主だけだ」

「そうか、君と彼氏いない領主だけか。僕も侮られたものだね」

「側近の俺で充分って意味ぐらい気付けよ、先輩」

「……地下室を汚したくない。上の礼拝堂に行こう。そこで決着をつけようか、後輩くん」

また一つ、駒王町の孕んだ宿命が動き出す。

——l i f e. 106 駒王町の奇蹟——

life. 107 むかし愛が死んだ町

「しかし、この懐かしい教会で、しかもあのフリード・セルゼンと剣を交わす日が来ようとはね」

「俺のこと知ってるのかい。俺も有名になったもんでござんすねえ」
「かつての神童を知らない訳がないよ」

今にも朽ち果てようとしている廃教会の礼拝堂で、“悪魔祓い”のコートを纏う二人が対峙する。本来、神への礼拝の為に作られた神聖な場所で殺し合いをしようとは、これ程の侮辱も他にないだろう。それこそ教会関係者の人間や天使達がこの光景を見たなら卒倒するかもしれない。

だが、フリードと八重垣——とうの昔に教会より墮ちた異端者達にとってはどうでもいいことだ。

言わずもがな、前者は強盗殺人の常習犯であり、犠牲者の数を数えれば他人の両手両足の指を借りても足りやしない。一誠配下の今では自重しているものの、殺人現場が日常風景だった男が今更そんなことを気にする筈もなかった。

親の顔を見てみたいね、とは本人の弁であるが孤児のフリードにとっての親とは即ち、教会の戦士要請機関である。

かつての神童がどうして殺人鬼にまで落ちぶれてしまったのか、本人は頑なに語らない。

そんな文字通りの異端者なのだから悪い意味で有名なのは当然なのだが、実はかくいう八重垣にも同じことが当て嵌まる。

何せこの男も裏側に属する事情通の間では有名なのだから。

「俺も先輩のこと知ってるぜ？ 悪魔と恋仲になったっていう異端の教会戦士だろ？」

フリードの言葉に、八重垣は口許を歪めた。その彩りの欠けた眼差しには果てしない憎悪が宿っている。

「後輩達にどう映っているのかは知らないけど、契約なんかじゃない、僕らは本当に愛し合っていたんだ。けれど連中は僕らを認めなかった」

「だったら先輩が恋人さんの眷属になるなり、愛してるなら相応の方法があつたんじゃねえの？」

「その予定だったさ。僕の死を偽装し、痕跡を消した上で僕はクレリアの生涯の“騎士”になる……そういう約束を交わしていたんだ。けど、あの日——」

今でも、瞳を閉じると脳裏にくつきりと思ひ浮かぶたった一つの後悔。

クレリアは、彼の目の前で颯り殺しにされた。

悪魔の討伐部隊の手によって。



事の発端は十年前、ある“はぐれ悪魔”の討伐任務に当たっていた八重垣が、クレリア・ベリアルを治める駒王町に侵入してしまった日にまで遡る。

当時の三大勢力は一時的な停戦協定こそ結んでいたものの各地で小競り合いが頻発し、和平には程遠い状態だった。そんな状況で“悪魔被い”が悪魔の領地に不法侵入してしまつたとなれば、事情を知つた上役はこれ幸いと難癖をつけて動き始めるだろう。

それを悟つた彼は“はぐれ悪魔”を秘密裏に討伐し、直ぐにでも帰還しようと考えていた。

問題があつたとするなら、討伐対象の“はぐれ悪魔”が予想以上の実力を備えていた点である。

「事前調査の段階では単なるB級下位の扱ひだった。特筆すべき能力もない。だから手の空いていた僕が単独で出向いたんだけど……恥ずかしい話、コテンパンにされちゃってね」

「おいおい、先輩も昔は天才少年だなんて持って囃されてたらしいじゃん。そんな先輩を返り討ちにするって普通にヤバくない？」

「神器”を隠していたんだよ。そいつは元人間だった。元、だけどね」
不利な条件もしくは強制的に悪魔に転生させられる人間は後を絶たず、どうやらその“はぐれ悪魔”もそういった被害者の一人だったらしい。尤も、八重垣と対峙した際には人の形も心も失っていたが。

それは兎も角、“はぐれ悪魔”は再び駒王町の暗闇に姿を消し、後に

は瀕死の重傷を負った八重垣だけが残された。

——こんなところで死にたくない。

——せめて、奴だけは殺さなければ民間人に被害が出てしまう。

——生きたい。

そうして息も絶え絶えに生を掴もうと足掻く八重垣の手を掴んだのが、魔力反応を察知して駆け付けたクレーリア・ベリアルだった。「敵対関係にある悪魔が目の前に現れたんだ。死にかけの僕を始末するんだ、と僕は覚悟した。だから僕はクレーリアに願ったよ。せめて“はぐれ悪魔”を殺させてくれ、とね」

彼にとって幸運だったのは、クレーリアが聡明な悪魔であった点だ。

直前の魔力反応と戦闘の痕跡、そして八重垣が発した“はぐれ悪魔”というワードから彼女は事態を察し、事情を知っているだろう彼の回復を急いだ。“はぐれ悪魔”討伐を優先したのだ。

全ては、領民の安全を守る為に。

そして眷属と使い魔に搜索活動を行わせると同時に目覚めた八重垣から事情を聞き出し、彼女は一つの結論に至る。

敵対関係にある“悪魔祓い”との協力——。

呉越同舟。自分達と相手の戦力差を分析し、迅速且つ確実な討伐を思案した結果だ。無論、眷属や八重垣本人からも反対されたが、領民の安全優先を盾に黙らせた。

ちなみに余談ではあるが、この判断は彼女の唯一にして最大の過ちだった。

自分達の身に余ると判断したなら上役に応援を要請するなりデイハウザーを頼れば事足り、敵対関係にある教会関係者との協力を強引に押し通す必要はなかったのだ。

とはいえ、若さ故の視野の狭さや判断ミスは付き物であるし、領主就任直後だけに自分の力だけで解決しようと意気込むのも仕方ないことではある。

それはそれとして、紆余曲折の末に手を結んだ彼らは無事に“はぐれ悪魔”討伐を果たし、戦場の吊り橋効果もあつて距離を縮めた八重

垣とクレーリアは愛を育み――、

「あー、もういいっすわ。先輩の話は」

周囲に猛反対された挙げ句にこれ幸いと冥界の旧“上層部”に追手を差し向けられ殺害されてしまうのだが、知ったことじゃねえよ、とフリードは話を断ち切った。

「ちったあ面白くなんのかと思って聞いてたが、ペラペラと地の文の無駄遣いするだけでちっとも面白くねえ。この小説、一話単位の文字数が4000ぐらいしかないんだから急がなきゃ」

「いや、普通そこで打ち切る!?! せめて最後まで聞かない!?! あとメタがしつこい!」

「永遠の彼氏ゼロは黙ってろって。要するに二人揃って異種族婚の難しさを理解してなかったってだけの話だろ。それを棚に上げてピーク喚いてるだけだ。だからバカップルなんだよ」

人間の国際結婚を例に挙げて、互いの価値観や文化の違いに困惑する場合がある。同種族間でさえそうなのだから、種族が丸ごと違えば結婚へのハードルが更に引き上げられることは想像に難しくない筈だ。

ましてや八重垣の属する教会とクレーリアの出身である悪魔は長年の敵対関係にある。眷属から反対されるのも当然で、その困難を乗り越えるのであれば、身分含む全てを捨てて誰も知らない地で細々と暮らしていくしか方法はない。しかも両陣営からの追手から逃れながら、だ。

話を聞いただけのフリードでさえ思い付くような手段を取らずに、教会を辞めて眷属にすれば解決、と考えた時点で二人の覚悟は……中途半端だ。

「御託はいいからとつと来いよ、先輩。どうせ反論できなくなった後は暴力しかねえんだからさ。その方が分かりやすいだろ?」
「……その話を吞もう。どうやら遠慮なく君を殺せそうだからね」

——life. 107 むかし愛が死んだ町——

幾度かの罅迫り合いの末に剣もろとも弾き飛ばされたのは、迎え撃ったフリードの方だ。大型トラックに跳ねられたかのように弧を

描きながら壁に吸い込まれていき、激突の直前でクルリと身を翻し、衝撃を殺しながら大きく距離を取る。

十年の年月を経ても衰えていない剣技に感心しつつ、後方で待機していたシーグヴァイラに向けて合図を送った。直後、両手に生み出したバレーボールサイズの魔力球を放つシーグヴァイラ。

魔力球が猛スピードで八重垣に襲い掛かるも、手にした剣の一閃により中心から真っ二つに切り裂かれ――さながら魔力球をすり抜けるようにしながら、今度は八重垣が斬りかかった。

悪魔と戦う教会戦士に与えられる、悪魔を確実に抹殺する為の光の剣。目映い輝きで形作られた刀身が、一瞬にしてシーグヴァイラの視界を覆う。

「――させねえよ、ボケが」

首を狙った一撃は、同じ光の刀身によって受け止められた。

「なんだい、僕らのことを散々貶した割には自分もバカツプルじゃないか！」

「寝てる間にオツムも眼球も腐っちまったか！　こんなのと付き合うとか失礼だろうが、俺にツ!!」

「フリード、あなた死にたいの?」

「お前も脳ミソ腐ってんのか!?　いいか、"赤龍帝"の側近がこんなところだよ……」

だが、剣は同じでも使い手の力量には大きな差が横たわっている。最近はろくに鍛錬もしておらず天性の戦闘センスだけで戦うフリードだが、それでも一誠から与えられた任務をこなすなど実戦までは怠けていない。

対して八重垣は死亡してから十年もの月日が流れており、蘇生されるまで彼の魂は現世を漂い続けるだけだった。肉体を取り戻しても感覚まではそうはいかない。

抱えたままの十年分のブランクがゆっくりと、しかし確実に美しい剣技を汚していく。

そして遂に生じた、一瞬の隙。

「――死ぬ訳ねえだろお!!」

今度はフリードの方が刃を押し返し、勢いそのままに八重垣の腹に蹴りを入れる。似つかわしくもない鈍い音が礼拝堂に響くと同時に床を転がされる八重垣。

しかし、追撃には移らない。

彼が転げ回った理由が、先の自分と同じく衝撃を殺す為であり、何らダメージを受けていないと気付いているからだ。不用意に追撃に移った瞬間、瞬時に起き上がってカウンターを仕掛ける算段だろう。

事実、彼の読みは正しい。

暫くの沈黙の後、見抜かれたか、と八重垣は余裕そうに立ち上がる。剣を握っていない空き手にはいつの間に取り出したのか光の弾丸を打ち出す黒い銃が握られており、フリードの隙を虎視眈々と狙っていたことは明らかである。

「流石は元神童だな。僕の手を悉く看破するとは」

「野郎に褒められたって嬉しくねーや。てな感じでシーグヴァイラたん誉めて誉めて〜」

「キモツ」

「ア・リ・ガ・ト・ウ・ゴ・ザ・イ・ます！ よーし、バカップルパワーでヤル気満々だぜー！」

「……それ、僕への煽りのつもりかい？」

八重垣は青筋を立て、それを見たフリードは更に変顔混じりで反省を促すポーズを繰り出す。こうして彼らの戦いは激化の一路を辿るのだった。

普段の言動こそ奇妙奇天烈極まりないが、フリード・セルゼンという少年は腐っても元神童で、強者と同時に大量の死亡者をも排出する養成機関を生き残った経歴は偽りではない。

彼を支えるのは、地獄に等しい訓練で培われた強靱な肉体と豊富な実戦経験、そして誰よりも突出した生来の戦闘センスだ。

故に、時間経過に従い戦況がフリード達の優勢に傾くことを彼は誰よりも早く悟っていた。

——やっぱ、思った通りだ。先輩の動きが徐々に乱れてきてる。

八重垣が振るう剣を紙一重で避けながら後退しつつ、その隙はシーグヴァイラの牽制射撃で埋める。

だが教会戦士に支給される光の剣は悪魔にとって猛毒の塊である。それは上級悪魔であるシーグヴァイラとて同様だ。

「あんま前に入るなよ！ 彼氏作る前に傷物にされても責任取らねえからな!!」

「今更ね！ あんたの言葉で私の心はとうの昔に傷だらけなんですけ——どっ！」

戦況を膠着状態に持ち込むべく、フリードは徹底して一騎討ちを回避し、前後衛を彼女と分担することに決めた。

機動力と手数に長けたフリードがアタッカーを務め、魔力操作に優れるシーグヴァイラがサポートを担う。果たして人的有利を活かした作戦は見事に嵌まり、八重垣は絶え間なく続く二人の攻撃に攻めあぐねている。

とはいえ、人的不利と十年間のブランク——無視できないハンデを背負わされても尚もゴリ押しを可能としてしまえるのが、蘇生した対象の身体能力を底上げする“幽世の聖杯”の真骨頂の一つである。

甘かったか、とフリードは内心で舌打ちする。

剣を一度振るう度に、衰えた筈の八重垣の剣筋がまたも勢いと鋭さを増したように感じる。それも、養成機関で叩き込まれる剣術ではなく、遮二無二振り回しているだけの力任せの剛剣。仮にかつての教官

が見たなら怒鳴り散らしているであろう、剣術とも言えない暴力或いは癩癩だ。

本来であればカウンターを仕掛ける絶好の機会であるにも関わらず彼が表情を歪めるのは、振り下ろされた切っ先が床に亀裂を生じさせたからだ。

「クソみてえなチート使いやがって！」

「何とでも吠えろ！ 竦めっ！ そして吠え面をかいたまま死んでいけバカツプル共がア！ ハハハツハハア!!!」

高笑いしながら光の剣を片手に飛び掛かる八重垣。その嘲笑からは生前の冷静さは微塵も感じられず、何よりも跳躍した後の床に刻まれた足跡——それを中心に放射状に罅が走ったコンクリートが、彼が真正正銘の異端者にまで堕ちてしまったことを教えている。

さながら弾丸のように正面から突撃してくる彼の凶刃を、フリードは敢えて受け止めた。八重垣が厄介なシーグヴァイラから先に殺そうとしていることに、気付いていたのだ。

加えて、尋常ならざる超怪力から放たれる剣と一瞬でも鬨ぎ合えばどうなるのかも、彼は気付いていた。天才的な戦闘センスを持つ元神童であるが故に。

「——!!」

真つ先に右腕がへし折られる音を聞いた。次いで莫大な負荷に耐えられずに右太腿が折れた。必然的に崩れた体勢がぐらりと彼の身体を揺らし、最後に肋骨と視界全体を衝撃が襲った。

錐揉み回転しながら壁に激突し、それでも衝撃を殺すには至らずに大穴を穿ち、粉碎する。

「フリー……ッ」

「そんなに彼氏が心配かい？」

形振り構わず反射的に展開した障壁術式は果物の皮を捲るかの如く切り裂かれ、掠めた左頬から血と黒い靄が微かに溢れる。「ああっ!?!」と挙がった悲鳴は、シーグヴァイラの体内に侵入した光が烈火のように彼女を攻め立てているためだ。

だが、歯を食い縛りながら堪える。

応急処置もしないまま、お返しとばかりに両手に魔力を集中させ、凄まじい速度で結界術式を描いていく。やがて完成した水色の術式の中央に大きく記されているのは、アガレス家の紋章——アガレスの悪魔達に脈々と受け継がれる秘術を発動させたのだ。

極限にまで高められた集中力と魔力で描かれた二つの術式の内、一つは今にも襲い掛かろうとしていた八重垣に向けて放つ。直後、彼の動きが急速に勢いを失っていき、先程までの怪物染みていた動きが嘘のようなスローモーションと化していく。

これこそがソロモン七十二柱序列二位、“大公”アガレス家の固有能力“時間操作”である。

一族に伝わる特殊な結界術式を媒介として発動させ、結界に対象が触れると瞬く間に捕縛し、その時間の流れを遅らせる、アガレス家中でも特に才能に溢れる者のみが発動できる能力だ。

そして、シーグヴァイラ・アガレスは現アガレスが誇る“氷姫”にして駒王町の三代目領主に抜擢された才女である。土壇場の覚醒ではあったものの、目覚めるだけの素質は既に示されていたのだ。

——発動した!? どうして!? 今までどれだけ練習しても習得できなかつたのに……!? いや、そんなことよりも今はっ!!

肩で息を切らしながら驚愕するシーグヴァイラ。現当主に才を見込まれ秘術を伝授されてからというものの特訓は欠かさなかつたが、これまでついぞ習得は叶わなかつた一族固有の能力。それが何故、このタイミングで発動できたのか、彼女には分からなかつた。

否、今はまだ分からないだけかもしれない。

兎も角、シーグヴァイラは思考を切り替えると瓦礫に埋もれたままのフリードに駆けていき、手が傷付くのも構わずに瓦礫を取り除いていく。

「ちよつとフリード! あなた生きてるの死んでるの!? 死んでたら死んでると返事しなさい!!」

返事は、ない。

「……ふざっけん、なバカヤローツ!! あれだけ私のこと馬鹿にしといて自分だけ先にくたばる奴がある!? 絶対に私の負った傷の分だ

けぶん殴ってやるから……!!」

その声は、聞こえない。

「何とか言いなさいよ……」

——live. 108 静止した時の中で——

二度と足を踏み入れたくなかった場所、即ち戦士養成機関本部内のある部屋の前にフリードは立っていた。「夢か」と吐き捨てる横顔はこれ以上ない程に憎悪に満ち、夢である筈なのに握り締めた拳が痛む。

剣を携え、苛立ちを晴らすように彼は扉を蹴破った。

広々とした空間に反比例して部屋の中は大きなベッドが一つ、中央に鎮座するだけで、他にテーブルなどの家具はおろか窓すらも見当たらない。強いて挙げるなら悪趣味な中身をした小さな棚が片隅に置かれていただけだ。

そんな殺風景な部屋なのだから、彼の視線は自ずとそこに立っていた人物に釘付けとなった。

「お久し振りっすねー、お兄ちゃん。私のことは今でも覚えてますかねえ？」

投与された薬物の影響で白と黒の入り交じる髪をアップにし、教会戦士の制服ではなく娼婦が着るような身体を隠すつもりのない派手な衣装に身を包んだ、フリードと似た顔立ちの少女が、儂げな笑顔で彼を出迎えた。

「……り、ント」

驚愕に目を見開きながら紡がれたか細い声に、リントと呼ばれた少女は嬉しそうに頷く。

「正解♡ ご褒美にイイコトしたげよーか？」

「……ちんちくりんの癖に生意気言ってるじゃねーよ、馬鹿たれ。そもそも、お前も仮にも教会戦士だろうが」

「ひっどーい！ 教官達にも評判良いのにー!!」

ギャーギャーと喚くりんと彼女を適当に宥めるフリードの姿は年の離れた兄妹或いは親友のような雰囲気である。

事実、二人は実験で生まれた試験官ベビーであり、同一遺伝子を元

に製造されているが為に、彼らは兄妹のような関係だ。顔立ちが似ているのも遺伝子パターンが同じだからだ。本人達は知らないし知るところもないが。

それはさておき、同一遺伝子を使用していながら兄妹の能力には雲泥の差があった。

生産施設から養成機関に移された後、兄は戦闘センスをメキメキと開花させ、やがて機関始まって以来の天才と謳われるまでに成長を遂げた。

反対に、妹は落ちこぼれだった。

「私は……お兄ちゃんのような才能は与えられなかったんすよね。ドジだらけで失敗ばかりで」

笑みを浮かべるリントだが、世間一般で言えば彼女もまた間違いなく天才に分類される。

否、彼女だけでなく機関では落ちこぼれと蔑まれる少年少女達とて、環境が違えばその溢れんばかりの才能を活かして世界に羽ばたけた筈である。ただ一重に、フリードや上位層に及ばなかっただけなのだ。

尤も、捨てる神あれば拾う神あり、という言葉があるように思いがけず助けてくれる人間もないことはなかった。

唯一の問題は、その救済方法が、人間にあるまじき外道の所業である点だ。

「でもでもおー？ 教官曰く、私って娼婦の才能はあるらしいっすよ

♡ マジでウケるっしょ!? ハハハハハハハアハアハアハ」

リントは、人間の醜さに殺された――。

——泣いて感謝しろ、不良品の癖にこうやって使ってもらえるんだからなあ。

——抵抗するんならさあ、お前の友達や兄貴が少し酷い目に合うかもしれないねえ？

——そうそう、そうやって大人しく尻を振っておけば良いんだよ。そうすれば可愛がつてあげるからね。

——にしても反応なくてつまんねえな。仕方ねえ、強めの薬でも打つか。なーに、気持ちよくなるだけで死にはしねえさ。

ある日の夜、教官からの呼び出しを受けたリントは少女から女性にされた。試みた抵抗は人数差と体格差もあつて簡単に抑え込まれ、更に同室の親友や敬愛する兄について言及されたことで沈黙を貫かざるを得なくなつた。

「明日もあるからな」と連中がすっかり満足して部屋を出ていく頃にはリントの身体はボロ雑巾も同然で、赤い染みの付いたベッドの上で誰にも知られないまま啜り泣いた。

こんなこと、誰にも言えない——。

集団暴行と薬物の影響でぐわんぐわんと回る視界の中で、彼女はひたすらに堪えることを選択した。機関を卒業して正規部隊に配属されるまでの辛抱だから、と。

かくしてリントは玩具に堕ちた。

あるときは首輪を嵌められ犬の真似事もしたし、またある夜は余興として本物の犬の相手をさせられこともある。されど大概は、芳しくない成績への懲罰という建前で、男達の前で淫らに踊り続ける日々を過ごした。

「……ねえ、大丈夫なの？」

「どうしたつすか、マーガレット」

「だって最近は遅くまで帰つてこないし、それに顔がやつれているわ」

「あー、あれつす。特別に教官達に稽古をつけてもらつてるだけなんすよ」

「でも……」

心配する親友から逃げるように部屋を去り、明け方には腹を薬物と精液で満たして帰り、そして一睡もできないまま朝の訓練に参加する。その繰り返しなのだから成績は下落する一方で、それがまた連中に彼女を呼び出す建前を与えてしまうのだ。

「リント、なんか俺に隠してねえか？」

「やだなー、お兄ちゃんに隠し事なんてする筈ないじゃん？ 考えすぎなんすよ、お兄ちゃんもマーガレットもさあ？」

「けど、最近のお前は」

「おーつとお!? 教官に呼ばれちゃったわあ！ ちゅーことでバイチャ☆」

「おい、まだ話は……逃げやがった」

「……あつぶねえ、あいつ勘だけは良いからなー。こんなもん股に入れて日常生活してるなんて知られたくもねえや」

桃色の器具を着けて座学を受けることを強制され、それすらも抜け出して彼女は踊る。今や学校で誰かと交わらなかつた場所はないし、比例して連中が彼女の身体で知らない箇所もなくなつていった。

リントが自暴自棄同然に自ら進んで尻を振るようになったこともあり、何時しか彼女の中では当たり前前のサイクルと化した。

強固な刷り込みと記憶処置を施されている候補生達に教官を疑うという選択肢は存在せず、彼らの所業は誰にもバレなかつた。またバレないという自信もあつた。

だから、油断した。

——おい、こいつ動かねえぞ。

——意識が飛んだだけじゃないのか？

——薬の打ちすぎだろ。あーあー、こりや手遅れだ。放つておいても直に死ぬな。

——マジか。おい、この使えねえ生ゴミどう処理するよ。これまで通り裏山にでも埋めとくか？

「……なにやつてんだ、お前ら」



「ほんと、よくあの部屋を発見したつすよね。分かりにくい場所にあるのに」

「あのカス共の暮らしてる寮が怪しいとは踏んでたからな。毎日張り込んで、団体様がぞろぞろ出て来る部屋を見付けたって訳だ」

フリードが部屋に踏み込んだとき、室内は酒池肉林の極みとも言える様相をしており、教会関連施設にあるまじき地獄染みた光景に彼は思わず吐き気すら覚えた。

何せ脂ぎった男共がベッドの上に年端もいかない少女を寝かせて、寄つてたかつてその身体を弄くり回しているのだ。寧ろ吐き気が込み上げない方がおかしいだろう。

そして、その少女が自分の妹分だと気付いた瞬間から数秒の間、彼の記憶は途切れている。

我に返つたときには室内は暴風が通過した後のように荒れ果て、そこかしこにかつて人間の一部だったと思しきパーツが散らばっていた。それが、妹を弄ばれたこととそれについて気付かなかった無力な自分自身への怒りが爆発した結果であることを、そのときの彼は分からなかった。

兎も角として、蹂躪を終えた彼はベッドに横たわるリントの近くへと歩み寄つた。

薬物の過剰投与の影響か、リントの息はいつ途絶えても可笑しくなく、全身に残された痛々しい暴行の痕が彼女の身に起きた日々をダイレクトに伝えている。

——……お兄ちゃん？

——悪い、遅刻しちまったわ。

自らを優しく抱き上げるフリードの頬に、彼女はそつと手を伸ばす。顔に付着している返り血が掌を汚すのも気にせず、兄の名残を惜しむように。

——ううん、迎えに来てくれたから良いんすよ。でも、ごめんねえ？ 私ってこんなに汚れちゃってさあ。

——俺も血で汚れてるから一緒だろ。

——そつかあ、一緒かあ……。

そうして嬉しそうに微笑みながら、リントは死んだ。享年十二歳。あまりにも短い幕引きではあるものの、フリードの腕の中で眠る彼女は満足そうな死に顔だった。

それは、神童が殺人鬼に堕ちた瞬間でもあった。

「その後は大変だったみたいっすね。直ぐに追討部隊が出てきたんでしょ？」

「そりゃ養成機関の実態が奴隷牧場だったなんて事実を天界に知られる訳にやいかねーからな。事態を揉み消そうと上役も必死なんだろうぜ。表向きはバルパー・ガレイの独断って筋書きだけだな」

「あー、あの聖剣野郎Gチームっすか」

パン工場のおじさんを彷彿とさせる顔の変態を思い出して、不快感を露にするリント。

機関関係者の中でバルパーはそういった事件に関わっていない稀有な人間の一人だが、それは単に彼が聖剣エクスカリバーにしか興味のない人種だからであり、彼自身も別ベクトルで変態だ。仮に少しでもまともな人間であったなら養成機関の腐敗を告発した筈なのだから。

尤も、そんな変人であるが故に事態の鎮火に必要なスケープゴートとして使われてしまったのだが、これは本人の自業自得である。

それはそれとして、追討部隊までもが動いたこの事件は聖剣計画の首謀者バルパーが違法実験の証拠隠滅を図った独断行為として処理され、同胞の脱出を助けるべく殿を務めたフリードも逃走後に異端認定されたことで、その裏側を白日の下に晒すことなく燃え落ちる養成機関と共に歴史の片隅に埋もれたのだった。

その際、必然的にリントの遺体も灰となって消失しているのだから、蘇生でもされない限り、こうして再び笑顔を向けてくる筈がない。

故に、これはフリードの抱えた未練が見せる悪夢であり、死に際に見せられる走馬灯だ。

「……いやー、死ぬには早くないっすか？」

そんな兄の出した結論に、妹は手でハートマークを象りながら意義を唱えた。「また遅刻するつもりなら話は別っすけど♡」そう言っ

彼女が左手を掲げるや否や、その掌に映像術式が浮かび上がる。

『死なせないっ！ あなたを絶対に死なせるものですかっ！！ 絶対に

……見付けるっ！！』

「シーグヴァイラっ！！」

臍気に浮かぶのは、必死の形相で瓦礫を取り除くシーグヴァイラの姿。彼女はフリードの救出に夢中になるあまり、“時間操作”がほどこ、今にも剣を振りかぶろうとしている八重垣に気付いていない。

このままでは彼女は確実に殺されてしまうだろう。

応援もまだ到着していない現状、その未来を変えることができない存在は、たった一人だけだ。

「……悪い、ちよつと用事を思い出したっすわ」

「あ、お兄ちゃん忘れ物っすよ」

剣を握り締め、焦燥に駆られながらも踵を返すフリード。リントはそんな彼を呼び止めて、赤黒い輝きを放つ握り拳程の大きさの宝玉を手渡す。

雰囲気こそ先にシーグヴァイラが放った魔力球を彷彿とさせるが、最大の違いは纏っているオーラだ。前者が悪魔のそれであるのに対して、このエネルギー体はドラゴンの気配を強く感じさせる。

それも、彼もよく知っている“赤い龍の帝王”の力だ。

怪訝な表情でフリードが宝玉を受け取ると、それは意思を持つように彼の周囲を漂い、やがてすっぽりと彼の胸に飛び込んだ。

——瞬間、フリードの全身から絶大な力の奔流がプラズマを帯びて溢れ出す。

「これまでお兄ちゃんの身体に蓄積していた、“赤龍帝”の魔力を集めたんすよ」

リントは、掌の上の映像をシーグヴァイラから兵藤一誠に切り替えた。恐らくはフリードの視点をそのまま切り取ったのだろう、オーフィスに抱き付いて授乳プレイに興じる上司の顔が映る。自分の預かり知らぬところで痴態を拡散される一誠は泣いて良い。

「おやおやあ、こんなところに丁度ピッタリの画像があるではあーりませんかあ☆」

「選び方にすっげー悪意を感じる」

「さあ、何のことやら♡ それはさておき、お兄ちゃんって何時も兵藤一誠と行動を共にしてたつすよね。だから彼が漂わせている魔力が無意識に身体に溜まってたんすよ珠だけに！」

即ち、赤黒い宝玉の正体とは体内に蓄積した兵藤一誠の力の結晶であり、一時的にだがフリードは彼が有する能力——“倍加”や“譲渡”を扱えるようになったのだ。

擬似的とはいえ、その身にかの“二天龍”を降ろした姿はまるでチートなのだが、八重垣も“幽世の聖杯”を使っているのでお互い様である。

無論、その代償は大きい。

あくまで人間であるフリードの肉体限界を考慮して使用可能時間は三十分にも満たず、それ以上の発動は身体はおろか魂にすら悪影響をもたらし、最悪の場合は死に至る。

そうでなくとも絶大な能力の負荷に肉体が堪えられず、発動後は全身が地獄に等しい激痛に襲われてしまう。一週間は日常生活すらままならないだろう。

「——ありがとよ、遠慮なく使わせてもらうぜ」

その説明をされた上で、フリードは微塵も躊躇しなかった。

「……そっか。じゃあ存分に戦ってくるつすよ、天才のお兄ちゃん。今度は間に合うといいっすね？」

「間に合うさ、今度こそ」

深い海の底から浮上する感覚の中で、ニヤリと笑って赤い龍の翼の幻影を拡げるフリード。

「——自分の罪から逃れられると思うなよ？」

リントではない、数多の犠牲者の怨念が込められた声を背に受けながら。

——l i f e . 1 0 9 軌跡の価値は——

愛は寛容であり、情が深い。愛は妬むことをしない。愛は傲慢にならないし、誇らない。

(新約聖書より抜粋)

——life. 110 施と侵入——

振り降ろされた凶刃を受け止めたのはシーグヴァイラではなく、瓦礫の山から飛び出した影——フリードだった。赤黒いオーラを纏った彼の復活劇に驚愕したのか、軽い鏢迫り合いだけで飛び退く八重垣。

驚いたのはシーグヴァイラも一緒に、「フリード!?!」と思わず叫んだ。重傷を負った上に生き埋めにされた人間がさも何事もなかったかのように自分を庇ったのもそうだが、何よりも彼女の視線を釘付けにしたのはフリードの全身から迸るドラゴン特有のオーラである。

忘れる筈もない。あれは“赤龍帝”の力だ。

「フリード、あなた……」

「んだよ、ブサイクな泣き顔を晒しやがって。まさか俺ちゃんが死んだかもって心配してくれたんでちゆか？ 残念無念、俺は死にませえーん!!」

「心配なんかしてないわよっ!」

謎のパワーアップを果たしても結局は平常運転な彼のテンションに巻き込まれ、涙を拭いながらツツコミに回るシーグヴァイラ。直前までとは打って変わって、とびきりの笑顔を見せる理由は本人も分からない。

「ほれ、再会を喜ぶのは後回しだ」

じゃれ合いも程々に、フリードは剣を構える。再会劇を邪魔する無粋な輩がまだ一人、この場には残っているのだから。

「貴様らぁ……!!」

「なんだよ、先輩。男の嫉妬ってのは見苦しいんだぜ？ 羨ましいなら適当に冥界でナンパしてくれば良いじゃないっすか」

「黙れ黙れ黙れ……っ!! どうして君らは許されて僕らは許されない

んだっ!? どうして彼女を……クレーリアを殺したアアアアアッ
!!」

「おーおー、愉快に素敵にモデルチェンジしやがってよお」

怨嗟を込めた咆哮が礼拝堂全体を揺らしたと同時に、八重垣の頬がひび割れていく。グラスを叩き付けたような放射状のひびは瞬く間に顔全体を覆っていき、それに比例して肉体も肥大化の一路を辿る。

羽化するように“悪魔祓い”の制服を引き裂いて降り立ったのは、全身が黒い体毛に包まれた巨大な獣だった。

その巨軀は手を伸ばせば軽々と天井に触れることができるであろうサイズを誇り、筋肉で膨れ上がった四肢は丸太を彷彿とさせ、軽く撫でただけでも人間の頭部を撥ね飛ばせるだろう。

パツと見の風貌は伝承に現れる人狼や巨人に近いが、側頭部から禍々しく生える捻れた双角と山羊そのものの脚が、彼らではないことを教えている。

「……悪魔
バフォメット

ちなみにバフォメットの起源は未だ判明していないが、当初その者の指す意味合いは聖書勢力から見た“異教徒の神”であり、かのテンプル騎士団が様々な疑惑の果てに異端審問に掛けられた際に崇拜対象として大きく取り上げられた経緯を持つ。特に有名なのは19世紀に魔術師エリファス・レヴィが描いたとされる“メンドエスのバフォメット”だろう。

同じく19世紀のテンプル騎士団についての再論争時に改めて注目されて以降、バフォメットはオカルティズムやサタニズムとの結び付きを強め、結果として近年の人間界における悪魔のイメージを作り上げた。」

シーグヴァイラが、変わり果てた八重垣を見上げながら呟いた。

その者は教会戦士が至ってはならない姿であり、礼拝堂に招かれるべき存在では断じてない。その性質は清廉潔癖を貫かんとする教会の真逆の道を蠢くのだから。尤も、クレーリアと同じ種族悪魔になったという点だけを見るなら、これ程にお似合いの姿は他にない。

随分と悪趣味な細工をされたもんだ、と八重垣を蘇生させたである

う“幽世の聖杯”の所有者の嫌がらせにドン引きしながらも、フリードは口角を三日月に吊り上げる。

八重垣が悪魔にまで堕ちたのなら、フリード・セルゼンもまたもう一人の悪魔だ。このような事態を面白がって骨の髄まで煽り散らすのだから。

「主が曰く、愛は傲慢にならないし……なんだっけか？ 誇らないんだっけか？ あーあー、クレーリアといいシーグヴァイラたんとい、男を見る目がないってのは可哀想だねー」

『なんだと……！』

「今の先輩ってさー、すっげー傲慢で誇るどころか驕り昂ってるぜ。それって要するに——」

ロリコン上司が脳裏に過る。合法とはいえ幼女を妊娠させたり授乳プレイに興じたりで、その性癖自体には流石のフリードもお手上げだが、さりとして一誠は嫁に対しては真摯に向き合い、決して傲慢に接したりはしなかった。

ましてやオーフィスが子を宿した今となつてはこれまで以上に気にかけており、身重の彼女に負担を掛けるまいと身の回りの世話やメンテナンスを手伝い、任務でどうしても部屋を空ける場合はレイヴェル達に世話役を任せている。そうして一誠の疲労が蓄積すると、今度はオーフィスが旦那を日一杯に労るのだ。

問題があるとすれば児童ポルノでしかない絵面だろう。

絵面はさておき、種族も年齢も何もかも異なる彼らを結ぶのは互いへの尊重という赤い糸だ。

そして、その別名こそが愛である。

「——あなたのそれは偽りの愛だったってことだろ？」

そんな二人を見てきた側近だからこそ、どうしても八重垣の叫ぶ愛は単なる言い訳にしか聞こえないのだ。そうでなければ想い人が守ろうとしたこの町で、想い人との出会いの発端となった“はぐれ悪魔”のような真似をする筈がないのだから。

『……ッ!!』

八重垣が右の拳を振り下ろす。巨軀が生み出す超怪力から放たれ

る鉄槌をまともに受ければ命はない。だが巨大故に隙もまた大きく、フリード達は難なく回避した。

拳を叩き付けられた床が嫌な音を立て、崩落する。

元々いつ崩れてもおかしくない廃墟だったのだ。逆によくこれまでの戦闘の余波で崩壊しなかったものである。

足場を失ったことにより、凄まじい轟音の中で瓦礫と砂煙に沈んでいく八重垣。とはいえ、これで戦闘が終わった訳ではない。彼が沈んでいった向こう側には広い地下室が横たわっているのだ。

「待つてろ。直ぐに殺してくる」

「私も行くわよ、この町の領主だもの」

言い争う時間も惜しんで、フリードが折れる形で二人は大穴に飛び降りた。先ず彼が一足先に着地して周辺を手早く警戒し、それからシーグヴァイラを受け止める。

崩落の影響で八重垣が潜伏時に用いていたランプは押し潰され、頭上から微かに注ぐ月明かりが二人の周囲を照らすのみだ。

瞬間、八重垣が襲い掛かる。『グギユアアアアアアアッ!!』進路を阻む瓦礫を粉碎しながら突き進む力任せの攻撃に、もう理性も人間性も見当たらない。

だが、如何に威力があろうと所詮は知性亡き獣の暴力だ。ましてや“赤龍帝”の力を一時的に宿したフリードにとっては文字通り子供の癩癩でしかなく、オーラを纏った左腕で難なくガードする。

「おい、領主。今度から町の警備を強化することをオススメするぜ。ザル警備だからこんな馬鹿が闊歩してんだ」

八重垣の腕をそのまま掴み上げ、逃すまいとするフリード。

「アドバイスに感謝するわ！ お礼に強化したら真っ先にあんたを捕まえてあげる！」

「そんなに睨むなよ美人が台無しだったの。睨む元気があるなら……さっさと倒しちまえ！」

「任されたっ!!」

シーグヴァイラは合図に呼応して魔力を集中し、気の緩みで掌から消失した“時間操作”術式を再展開する。一度は成功したからか、習得

に向けた特訓漬けの日々が嘘のように再展開はスムーズだ。

アガレス家の紋章を宿した術式が、弾丸の速度で放たれた。

——だが、降臨した偽りの悪魔を止めるにはまだ足りないらしい。

『グギユアアアアアアアッ!!』

与えられた強化形態——バフオメット“魔人態”が成せる恩恵だろう、術式の飛来を察知するや瞬時に魔力を滾らせ、フリードと同じように即席の鎧を創り上げた。

ヘドロに似て醜悪極まりない濃密な魔力は、相手に触れることを許さない。

異変に気付いて咄嗟に飛び退いたフリードの視線の先では、魔力の鎧に触れたシーグヴァイラの術式が効力を発揮することもなくそのまま溶かされている。数秒でも判断が遅ければ、“赤龍帝の鎧”の幻影を纏っているとはいえ無事で済んだかは分からない。

しかし術式を強引に掻き消す程の純度と毒性を持つのなら、それは操る本人にとっても危険な、謂わば諸刃の剣である証拠だ。

八重垣の動きが明らかに鈍くなった瞬間を、対峙する彼らは見逃さなかった。

「シーグヴァイラ、今から俺は突撃してくるからさ、俺もろとも撃ち殺す覚悟で援護ヨロシク」

「……了解よ。ぶち殺してあげるから覚悟なさい」

「なんだ、妙に素直じゃねえの。普段からそうやってればモテるつてのに勿体ねーな」

「殺すぞ」

「ゴメンチャイ☆」

——まったく、どこまでもふざけた男ね。そんな奴に惹かれる方も……どうかしてるわ。

敢えて大袈裟にかぶりを振り、意識と魔力を目の前に集中させる。魔力出力は安定、感覚と思考も普段以上に研ぎ澄まされている。されど周囲の雑音は自身の心拍音すら一切が遮断されていて、自分だけが世界から切り取られたような、これまで体験したことのない不思議な感覚だ。

シーグヴァイラは、「ゾーン」と呼ばれる超集中状態に至ったのだ。
その理由を、彼女は既に知っている。

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost
BoostBoostBoost——』

「……行ってくるぜ」

連続する“倍加”の音声を響かせながら思い人が駆けていき、戦いの
最終節が幕を開けた。

l i f e . l i l W E A V I N G A H I S T
O R Y

戦闘におけるフリードの持ち味は、手数之多さである。我流の剣と教会戦士時代の洗練された剣筋を巧みに切り替えて翻弄し、更に閃光手榴弾などの多彩な小道具をミックスすることで、予測不可能な連続攻撃を可能としている。

そういった変幻自在の立ち回りと、敵への容赦のなさが長所であるなら、短所には火力不足が挙げられる。即ち、養成機関時代から愛用している光の剣と銃の出力を技量だけで補うのにはどうしても限界があるのだ。

それは裏を返せば、出力不足を感じさせない程に彼の技量がずば抜けている証拠でもある。

ならば、仮にその人間離れた技量に“赤龍帝”という文字通り人外の力が合わさったなら、それは悪魔をも越える理^{ドラゴン}不尽の顕現の瞬間に他ならない。

——なんだこりや、力が溢れてきやがる。

両手をぐつと握り締め、開く。

その動作を軽く繰り返しただけで、フリードは自分がその身に天を降ろしたことを把握した。負った筈の重傷は最初から無かったかのように消え去り、代わりに絶え間なく沸き上がる赤黒いオーラの激流は一秒、二秒と経過する毎により勢いを増していく。

だが、“魔人態”が放つ魔力がそうであるように、或いは正規の宿主ではない弊害なのか、超高密度の“赤龍帝”のオーラは容赦なくフリードにも牙を剥く。全身を焼き尽くされるかのような熱気と激痛が身体を蝕むのだ。

恐らくは数十分も保たないだろう。

今にも途絶えそうな意識を奮い立たせながら、“魔人態”に成り果てた哀れな男を睨む。獣のような咆哮には、もう愛も自我も消え失せており、あるのは周囲への果てしない憎悪だけだ。

挑発ついでにああ言ったが、とチエンソー状に形成したオーラを手に纏わせながら、彼は苦い表情を浮かべる。誰だって大切な者は存在するだろうし、その者を殺されれば悲しみ憎むのも当然だ。

事実、一誠も両親を殺害された際に“覇龍”と呼ばれる暴走状態に陥っているし、フリード自身とて妹分リントを殺されたと気付いた瞬間にその場にいた犯人全員を皆殺しにしている。

それ程に大切な相手を失う悲しみは深く大きいのだ。

ましてや八重垣は目の前で恋人を鬪り殺しにされたのだから、胸に宿した絶望は計り知れない。

「でもなあ、今の先輩はマジで見てるらんねえよ。悪趣味な改造されちまってさあ。ただ黒幕に踊らされてるだけじゃねえかよ情けねえ」

『グギユアアアアアアア!!』

「会話すらもできねえか、仕方ねえ。引導を渡してやつから……もう黙れよ、八重垣先輩」

迫り来る丸太に等しき剛腕を容易く受け止め、切断しながら彼は駆ける。如何に“魔人態”が超常の怪力を誇ろうとも動きが直線的過ぎるのでは攻撃が当たる訳がない。それに回避された直後もキョロキョロと相手を探し、宙を舞うように頭上を跳躍するフリードに気付かない有り様だ。

その隙に今度は左腕を斬られ、激痛から“魔人態”が本能的に肩口を抑えた瞬間にもフリードはその背後に着地し、振り向き様に左太腿から先を斬った。

支えを失い、雄叫びを挙げながら倒れ伏す“魔人態”。その眼前には何処までも冷たい瞳で此方を見下ろすフリードが立っていて、そこでようやく“魔人態”は彼の姿を視認したようだった。

チエンソーを突き付けながら、フリードは告げる。

「抵抗も降伏も無駄だ、楽にしてや——」

『グギユアアアアアアア!!』

「まだ起きんのかよクソツタレが！」

偽りの悪魔の双眸が赤く煌めき、絶叫すると同時に捻れた双角の間の空間が目映いプラズマを放つ。それが残存魔力をかき集めた魔力

砲にして“魔人態”の最後の悪足掻きなのだど悟った瞬間、フリードは顔色を変えて後方に大きく飛び退こうとした。

だが、間に合わない。

『グギユアアアアアアア!!』

そしてフリードの視界を閃光が埋め尽くした。

否、埋め尽くそうとした。

「——あんたって本当に世話が焼けるわね」

「すまない、遅れた……ましたっ！」

呆れたような声音と共に、フリードに向けて発射されようとしていた魔力砲もろとも“魔人態”が一刀両断される。

控えていたシーグヴァイラが“時間停止”の術式で動きを止め、落下するようにして真上から飛び込んできた人影——ゼノヴィアが聖剣デュランダルを振り下ろしたのだ。

如何に“幽世の聖杯”で改造された元人間とはいえ、“魔人態”と化した八重垣は種族的には悪魔にカテゴリされる。そして聖剣は悪魔の天敵であり、斬られれば最悪の場合は死体も残さずに消滅してしまう。

「アイエエエ!? 先輩がア、八重垣先輩が死んでる!! ここに来てまさかの超展開なあぜなあぜ!」

「展開を急ごうと言ったのはあなた自身じゃない」

「申し訳ありません、討伐部隊との合流が遅れまして……うわっ、フリード・セルゼン!? どうしてこの町に! お前も洗濯に来たのか!」

「やつはろー、おひさだねえ! 誰かと思えば美味しいところだけ奪ってくれたクソ悪魔のクソビッチではありませんか!! 丁度良いや、俺とシーグヴァイラさんの結婚式編の実況解説をお前に任せろ!!」

「殺す」

直前までのシリアスな空気は何処へやら、どったんばったん大騒ぎする三人を他所に、かつて八重垣と呼ばれた偽りの悪魔の死体は徐々に淡い光の粒子となって消えていった。

捨て駒としての役割を充分に果たして。

—— l i f e . l i l W E A V I N G A S T O R Y ——

「ご苦労様です、シーグヴァイラ様。到着が遅れたこと謹んでお詫び申し上げます。しかし単騎で賊を討伐してしまうとは流石、かのアガレス家の才女ですなあ」

「いえいえ、それ程でも。わざわざ出動して頂きありがとうございます」

「なんの、これが我々の仕事ですから。これからも頼りにして頂けると幸いです……できれば平和でありたいものですなあ。おっと、長々と失礼。それではこの辺で」

そう言って転移していく討伐部隊を見送るシーグヴァイラとゼノヴィア。やがて彼らの姿が完全に消えたことを確認してから、それにしても、と部隊の到着があまりにも遅かった点に疑惑を抱く。八重垣を倒してからこのこと到着されたのでは今後、同様の事態が発生した際に到底間に合わない。

——まさか、魔王は敢えて部隊到着を遅らせた？ 侵入者が私達を殺害すると踏んで？

魔王デイハウザーが彼女達の殺害を目論む理由は恐らく、シーグヴァイラが彼に纏わるスキヤンダル——兵藤一誠との内通に気付いたことを察知したのだ。

侵入者がシーグヴァイラを殺してくればそれでよし、死なずとも戦いの中で重傷を負えば入院先に配下を送り込んで片付けて、生き残ったならその時はまた別の機会を伺うだけだ。

重要なのはごく自然な形で彼女を排除する、その一点である。

スキヤンダル隠蔽の為に新たなスキヤンダルを抱えたのでは本末転倒、もし四代目の駒王町領主に嗅ぎ付けられでもすれば笑い話にもならない。

「やはり、魔王様は私達の排除を？」

「間違いなくね。念の為に眷属をアガレス家お抱えの医療機関に入院させておいて正解だったわ」

溜め息をつくシーグヴァイラ。仮に木場達を首都の緊急病院に搬

送っていたなら彼らはとうに始末されていただろう。誂え向きの道具なら揃っているのだから。

「これから如何なさいますか？ 冥界にいる限りは魔王様、いや政府は幾らでも私達の命を狙ってくるものと思われれます。このまま留まるのは危険です」

「そうね……いつそ両親も説得して他神話に亡命しようかしら。眷属を連れて北欧に亡命した同期デイオドラもいることだし」

二人が将来の進退について頭を悩ませていると、長椅子の裏側からフリードがひよつこりと顔を出した。立場的には国際テロ組織の一員である為、シーグヴァイラとの繋がりを隠すべく討伐部隊が帰るまで隠れていたのだ。ちなみに顔がボコボコに腫れ上がっている原因は不明である。

「……あのー、そろそろ出ていいいつすか？」

「あら、あれだけ踏んだのにまだ生きてたの？ あなたって本当にしぶといわね」

「我々の業界ではご褒美ですから」

踏まれた際にシーグヴァイラのスカートの中身が見えたのもご褒美だ。尚、まさかお堅い雰囲気に対してセクシーな黒色の紐パンを履いているとはフリードの目をもつてしても見抜けなかった。

とはいえ、笑って見せたのはあくまでも痩せ我慢に過ぎない。実際は一時的にでも“赤龍帝”のオーラを纏った反動で彼の身体はボドボドであり、今や立ち上がるだけで全身に激痛が走る。リントも忠告していたように、この状態では日常生活もままならないだろう。

「で、フリードはこれからどうするの？ 言っておくけど私とのデートとかは却下で。ま、どうしても言うなら付き合っただけでいい？」

「ツンデレご馳走さまでーす！ でもでもでも喜んでお供したのは山々なんすけど今日は帰るっすわ。あまり長くアジトを離れるとボスに怒られちゃうんでね」

「そう……」

「おやおやあ？ 捕まえなくてええのんかあ？ 自分で言うのもなん

「ただ俺ちゃんも中々の賞金首なんでござんすよ。ああ、もしかして
だけど俺に惚れちゃってんじゃないの〜?」

「ニヤニヤ笑うフリードに、「勘違いしないでよね」とシーグヴァイラ
は慌てて言い返した。」

「共闘してもらった恩もあるし今回は見逃すつてだけ！ 次に駒王町
に現れたら容赦なくぶつ倒してやるんだからね！」

「ほー、面白え。じゃあ俺とシーグヴァイラたんどっちが強いか今か
ら白黒ハッキリさせようぜホテルに行つてな！」

「殺す」

「おおっとお、脚を横にいあら危ないっ！ 頭を下げればセクシーパ
ンツ♡ じゃあ残念無念また来年つてことでバイバイチャット!!」

「あつ、さては覗いたな!? こら、逃げるな卑怯者めっ！」

顔を真っ赤にして追い掛けようとするも既に彼の姿は何処にも見
当たらず、疲れた顔で椅子に座るシーグヴァイラ。しかし一方で嬉し
そうな笑みを隠せていないのだから彼女がどう思っているかはお察
しの通りである。

「……もしかして惚れました?」

「違ーう！ あいつつてば私がいないとどうしようもないから仕方な
く面倒見てるだけよ!! あ、その目は信じてないわね!!」

「……あのー、もしや男を見る目がなくて言われたことありません
?」

「どうして分かったの!?!」

ゼノヴィアも異性にはとんと縁がないものの、それにしても主君の
壊滅的な恋愛運は異常である。しかも無自覚にダメンスにハマつて
しまうタイプなのだから手に負えない。

「……そ、そうよ！ 惚れちゃったのよ!! 悪い!? だってあんなに
男の人に優しくされたの初めてだもん！ もしかしなくとも惚れる
わよ!!」

「せめて相手は選びましようよ。あんたアガレス家ベルゼブでしょ。いつから
暴食になつたんですか」

「うるさいうるさいうるさい！ 見てなさいよ、次にあいつが現れ

たら記入済みの婚姻届を押し付けてやるんだからね！」

「そんな特級呪物さつさと捨ててください」

かくしてゼノヴィアと言い争うシーグヴァイラだが、しかし彼女は知らない。

もう二度とフリードと会えないことを。

初代領主のように報われない恋で終わってしまうことも、これが今生の別れであることも、シーグヴァイラはまだ知らないのだ。

今にも激痛に引き裂かれそうな身体を引き摺りながら、繁華街裏の道とも言えぬ寂れた闇の中を進むフリード。彼の通った後には血痕が点々と続いているがそんなこともお構いなしに彼はただ進む。

ホームレスや酔っ払い、不良グループに悪質な客引きといった裏通りの住人達は絡むこともなくフリードの背を見つめるだけだ。珍しい白髪に神父服の取り合わせともなれば特に後者の格好の標的になりそうなものだが、フリードの鬼気迫る表情に気圧されたのだ。

それは、手負いの獣に似て獰猛な眼光だ。

触らぬ神に祟りなし、ともいう。明らかに何かしらの事件に巻き込まれているのだろう少年が一步進む毎に連中は遠巻きになり、さながら海を割ったモーゼのようにフリードは逃避行を続けるのだった。

されど、如何に人間離れた強靱な肉体と戦闘技術を併せ持つフリードとて、激痛を押し殺しての強行軍には限界がある。ましてや、追跡者の不意打ちで腹に大穴を抉じ開けられたとなっては尚更だ。

滴る血痕を道標にして後方から迫る微かな足音に、彼は気付いていた。

——チツ、もう追って来やがったか。

フリードは舌打ちし、ポツカリと口を開けて待ち構える雑居ビルと雑居ビルの隙間の迷宮に身体を滑り込ませると、痛む右足に鞭を打って駆け出す。せめて一般人のいない場所を目指して追跡者を誘導しているのだ。

自分の末路を悟ったが故に。

レイヴェルや一誠への応援を要請しないのもこれが理由で、仮にこの状況で連絡しようものなら追跡者はこれ幸いと一誠達を襲撃するだろう。そうでなくとも転移術式からアジトを特定されてしまえば詰みである。

考えられる最悪の事態を防ぐべく、フリードは敢えて誰にも連絡していない。

己の運命と過去の清算を受け入れてこの町の片隅に骨を埋めるつ

もりでいるのだ。

「……………なら誰もいねえ。出てこいよ」

やがて流れ着いた、路地裏の森の中心部——ビル一つ分の面積の空白地帯。そこで彼は初めて振り返ると、闇の中に佇んでいるであろう追跡者に言葉を投げた。フリードの言葉に応じて暗がりから人影が姿を現す。

影に隠れて顔こそ窺い知れないものの、追跡者の纏う特徴的な元教会戦士の制服がフリードにその正体と辿った末路を鮮明に教えていた。

「……………んだよ、結局は殺されたのか」

脱走以前は機関の最高傑作として将来を有望視されていた少年が、代名詞たる魔剣グラムを携えて元同胞の始末に差し向けられる——。

悪趣味極まりない演出を考えた黒幕に内心で舌打ちしながら、物言わぬ死体に成り果てた白髪の少年を見つめる。

派閥の幹部だった彼がこうして立っているということとは即ち、組織から離脱した“英雄派”もまた全滅したか或いは壊滅状態に陥つたに違いない。ソフィア率いる“魔法使い派”なども辿った道は似たようなものだろう。

これはつまり、相手は兵藤一誠の持つコネクションを潰しに掛かっていることを意味している。

イザコザの末に袂を別つたとはいえ、曹操もソフィアもいざとなれば一誠の頼みを聞き届けただろうし、彼もオフィスの緊急避難先に考えていたかもしれない。

それらを片っ端から始末することにより、第三勢力は自陣の戦力の拡充と一誠側の戦力の排除を同時に行っているのだ。

——ま、良いか。どうせ俺ア死ぬんだ……………。

崩れていく視界の中でそこまで思考を重ねてから、ふとその無意味さに思わず苦笑する。全身の力と感覚が抜け落ちて、遂には痛みすらも感じなくなった。

殺せ、とフリードは大の字に寝転んで笑う。

抵抗も逃走もままならないとなってはかの悪名高きフリードとて

打つ手がない。敢えて無防備を晒したのは、この顛末が因果応報であるならば最期は潔く散ろうと決意してのことだった。

「殺れよ、ジーク」

「……」

呼応するようにフリードの肺を目掛けてグラムの刃が沈み、ゆつくりと刺し貫いた。生命活動に必須な呼吸を奪うという最も残酷な手法は奇しくもかつて彼自身がカテレア・レヴィアタンを始末した際に取ったそれと全く同じで、因果応報も同然の末路にフリードは最後の笑みを溢した。

——悪いな、ボス。あんたとのドタバタコメディは楽しかったぜ。



「やつと来た！　また遅刻つすよ、お兄ちゃん!!　しかも遅刻も遅刻、大遅刻じゃないっすか!!」

「……あ？　お前、リント？」

眠るように瞳を閉じれば、次に視界に描かれたのは満面の笑顔を浮かべるリントだった。亡くなった当時から背丈も口調も変わらない彼女はフリードを見付けるや否や彼の元に駆け寄ると、突撃染みたハグ攻撃を行う。

それを片手で平然と受け止めてそのまま置き代わりにアイアンクローしながら、フリードは冷静に周囲を見渡した。

紫色の空の下に赤く荒れ果てた不毛の大地が延々と続く。遠くに並ぶ鋼色の群れは雲の先までも聳える山々で、骨と青白い炎のみで動く翼竜が山に降り立ち、何かを啄んだり両足の鉤爪で連れ去ったりしている。

嘴に啜えられて叫ぶ小さな影は、人間だ。

それだけでなく血の色をした川に突き落とされているのも巨大な鬼に食られている影も全て人間の形をしている。

「——そうか、やっぱ地獄行きっすか」

「ま、あんだだけ無差別殺人してれば残当っしょ」

地獄とは生前に悪行を成した者の靈魂が死後に送られる場所であり、その悪行に応じて数々の責め苦を受けるとされる。

強盗や殺人の常習犯だったフリードが放り込まれるのも当然なのだが、どうしても彼が分からないのはリントがこうして地獄に立っている理由だ。

施設内での淫行を咎められたのであれば仕方ないとして、そもそもは教育者の癖に教え子を脅迫・集団暴行した教官連中に原因があるのだし、情状酌量の余地は充分に考えられる筈だ。

フリードの指摘に対して、「確かに最初は天国行きの予定だったんすよね」彼女は笑って肯定した。

「じゃあ何故、この場にいるんだ。どうして地獄なんかに来たんだ。しかも、そんな……薄っぺらなスーツを一枚だけ羽織ってよお」

「あー、ほら私って死んだ時に素っ裸だったじゃないっすか。遺体の損壊具合が激しい場合なんかを除いて基本的に地獄の亡者って死亡時の姿が反映されるみたいで……何なら捲って確認してみるっすか？」

「だったら——どうしてそれを知ってて地獄行きを選んだ!! 答えろ!!」

彼の絶叫が荒野に響く。大人しく天国に行っていれば粗末なシートだけで過ごすという惨めな思いをせずに済んだ。

それだけではない。生前には袖を通すことも叶わなかった可愛らしいお洒落な服も選び放題だっただろうし、味気ないスूपや固いだけのパンではなく暖かいご馳走も腹一杯に味わえただろう。両手を夥しい量の血に染めてきた愚かな兄とは違い、妹にはその権利が与えられていた。

兄がどんなに願ってもついで与えてやれなかった幸せが遂に与えられようとしていたのに、妹は自ら望んでそれらを放棄したのだ。

故にフリードは歪んだ顔に爪を突き立て、全てを吐き出すように絶叫した。生まれてから二度目の絶望だった。かつて妹の亡骸を抱き上げて以来の、魂からの咆哮だった。

「……ごめんね、地獄行きを望むような馬鹿な妹でごめんね」

そんな彼の絶望を掬い上げるように、そっとフリードを抱き締めるリント。

「でも、私はとても幸せつすよ。お兄ちゃんと一緒なら地獄だって天国つすから」

「……」

「あつれれー？　もしかしてお兄ちゃんは嬉しくないんすかー？　うわく超シヨックなんですけど〜」

「クソツ、俺も大好きな妹と一緒にいて幸せだよコンチクショー！」

「ごめんシンプルにキモいっす」

「扱いヒデエな!？」

久し振りの兄妹のやり取りもそこそこに、二人は前方を睨む。人間の三倍の体軀はあろうかという巨大な怪物が、そこにいた。

その怪物は筋骨隆々の巨体に浅黒い肌をしており、額からは一對の細長い角を伸ばしている。耳元まで裂けた口からは無数の牙が生え揃い、フリード達を見下ろす双眸は血のように赤く瞬いている。

亡者に罰を与える獄卒——鬼である。

鬼は右手に掴んでいた亡者の男を頭から貪りながら、目の前の新たな餌に嬉々として巨大な空き手を伸ばす。その超常の握力は容易く二人を驚掴みにする筈だった。

しかし触れようとした瞬間、その左手が細切れにされる。

「——何やってんだ、お前」

ドスの効いた声音で、フリードは言った。「俺の妹に触んじやねえ」血に濡れた光の剣が持ち主の憤怒に呼応して純白の輝きを放つ。

『ゴアアアアアアッ!!』

鬼は分厚い唇を震わせて咆哮した。異空間から召喚したのか、残った右手に鋼の棍棒を滑らせ怒りのままに殴り付ける。直撃すれば蚊を潰すのと同じように人間を容易く潰り潰せてしまっただろう一撃だ。フリードとリントは目配せすると同時に瞬時にその場を飛び退き、回避する。

一瞬遅れて響いた轟音に引き摺られて、鬼はたたらを踏んだ。だが即座に赤い眼光が瞬き、宙に跳躍していた二人を捕捉する。

視線の延長線上では、鬼の脳天を目掛けて向けられた銃口にありつたけの白い煌めきが収束・解放されようとしていた。

「悪いが今度は一緒だって約束してるんでな」

「ごめんね、先約があるもんで残念だけどナンパはお断りっすわ♡」
そう告げて、フリードは引き金に押し当てた指に力を込める。重ねられたリントの手の温もりを感じながら。

「——てな訳でバイバイチャッてな☆」

そして放たれた一筋の弾丸が、鬼の額を的確に貫いたのだった。



地面に崩れ落ちた鬼が完全に動かなくなったことを確認してから、
「これからどうするっすか？」 リントが訊ねた。

「つーか獄卒を倒すとかまた悪行を重ねてるじゃないっすか。どう言い訳するんすか、この死体」

「……ごめん、マジで何も考えてなかったというか。またお前が害されるかもって思ったら無我夢中で——頭をナデナデすんじゃねえよ」
「素直じゃないなくもつと甘えてもいいっすよ？ なんなら再会記念にそこの岩陰で一発イテエツ！ ちよつ、その拳骨で馬鹿になったらどーすんすか!？」

「愛の鞭だ」

ピーピーと喚く妹を尻目に、確かに今後の目標は欲しいな、とフリードは瞑目する。此処が地獄で自分達が亡者であるのならこれからも際限なく獄卒達が現れるのだろう。もしかすれば先の鬼とは比べ物にならない強大な相手が出てくるかもしれない。

その時、果たしてリントを守り抜けるだろうか。

如何に人間離れの技量を誇ると多勢に無勢はどうしようもない。獄卒の集団に囲まれた際にたった一人だけで彼女を守れるとは考えにくい。

仮にまたも目の前で妹を失うようなことがあれば今度こそフリードの精神は限界を迎えるだろう。

或いはそれこそが彼の重ねた罪に対する罰なのかもしれない。つまり愛する者を失う絶望と苦痛をもう一度……いや、罪の清算が成されるまで何百回も何千回も味合わせるのだ。

——つたく、悪趣味を極めるのが昨今のトレンドなのかねえ。

フリードは溜め息を吐いたが、目まぐるしく思考を重ねる脳内では既に一つの目的が導き出されている。

地獄の主である閻魔大王に訴えてリントの地獄行きを取り消してもらおうのだ。代わりにより深い地獄に兄が送られることで。

「……行くぞ、リント」

「アイアイサー！ マイラブリーお兄ちゃん！」

地平線の遥か先を目指して、ようやっと一緒になれた兄妹は手を繋いで歩き始める。

長い長い苦難の旅路はまだ始まったばかりだ。

——l i f e . 1 1 2 兄と妹——

l i f e . 1 1 3 リゼヴィム・リヴァン・ルシ
フアー③

フリードとの連絡が途絶えてから半日が経過した。それはつまりフリードが何者かによつて殺害されたことを意味しており、一誠は険しい表情でその背景について思考を巡らせる。交戦の末に敗れたか、不意打ちを受けたか、過程は一旦置いておく。

重要であるのは、彼を殺害した相手の正体だ。

真つ先に考えられるのは、やはり第三勢力だろう。というより現状で考えられるのはそれしかない。そして一誠達の手足を削ぐ目的でフリードを落とすのだとすれば、相手は相当のやり手である。

「情報が割れてるな」

オーフィスを傍らに座らせて、一誠は不愉快さを隠さずに言った。長く苦楽を共にした仲間を失ったことによる精神的ダメージもそうだが、メンバーを知られているということは潜伏先も特定されている可能性が高い。

「……やはり駄目でしたわ」

部屋に戻ってきたレイヴェルが、沈痛そうな顔で頭を振った。

「そうか、先に潰されていたか」

「どうしましょう。これではオーフィス様が……」

二人の視線の先には、腹を大きく膨らませたオーフィスがうたた寝をしている。無論、食べ過ぎでそうなったのではない。

オーフィスは、いよいよ出産を控えている。

身重となった彼女の護衛役を任されていたフリードとレイヴェルだったが、上述のように前者は殺され、実戦経験に乏しい後者だけでは不安が残る。また人手と施設に乏しいこのアジトは安全な出産場所とは言えない。

それ故に一誠は手を打っていたのだが、レイヴェルの反応からしてそれすらも潰されてしまったようだ。

レイヴェルが連絡していたのは、曹操ら元“英雄派”やソファイア達“

魔法使い派”が運営する、北欧のとある片田舎に隠された孤児院だ。

曹操達とは彼らが”禍の団”を脱退する形で既に袂を別つているものの、オーフィスの出産に協力してもらえるように一誠は事前に頼み込んでおり、曹操側も赤ん坊の命を守る為にこれを承諾していた。

そして時期が来ればオーフィスとレイヴェルを孤児院に避難させ、一誠は陽動も兼ねて単独で戦争に挑み、その果てに戦死する算段だったのだ。

”禍の団”を乗っ取った事実上のテロの首謀者として。

新たな家族を守る為に。

ところが、最後の抛り所を一気に失ったことで、計画は頓挫してしまった。

「落ち着いてくださいまし。こうなれば善後策を練るしかありませんわ」

「……そう、だな。俺としたことが動揺しちゃった。我ながら情けないぜ」

「いえ、気持ちは分かりますわ」

二人の声はどことなく震えていて、顔色は暗い。ヴァーリ達を失い、今また曹操達もとなれば、ショックを受けるのも当然だ。

尤も、テロリストの主犯として多くの事件を引き起こし、数えきれない程の命を奪ってきた一誠に、誰かの死を悲しむ資格はないのかもしれないが。

長い沈黙の後に、一誠は迷いながらも口を開く。

「……現魔王を頼ろうと思う」

一誠が口にした「現魔王」とは、デイハウザー・ベリアルのことを指す。

デイハウザーは今の悪魔勢力を率いる二大魔王の一角にして、冥界のトップでありながらテロリストに情報を流す内通者でもある。より厳密には、一誠の力添えで魔王に成り上がり、遂に旧上層部に復讐を果たした同志だ。

魔王自身が一誠の協力者なのだから、現在の冥界は”禍の団”の支配下に置かれているに等しく、オーフィス達を匿うこと自体は難しくな

い。

問題は、もう一人の魔王ロイガン・ベルフェゴールにある。かつてヴァーリと交戦した際に、彼女は洗脳能力を受けているのだ。

「幸いにも術は解かれ、検査でも後遺症はなかったと聞いている。だが、果たしてそれは本当なのか。もしかすれば未だに洗脳下にあるのではないか。可能性を否定できない以上、迂闊に冥界に預けることもできん」

「難しいですわね。もし判断を見誤れば人質にされかねませんし……」

「ドライグ、産婦人科の知り合いはいるか？」

『無茶を言うな』

宿主の無茶振りに、翡翠の宝玉から溜め息が漏れた。中に宿るドライグだ。しかし彼にもオーフィス達を預かってくれる者に心当たりがない訳ではなかった。

“天魔の業龍”カオス・カルマ・ドラゴンティアマットだ。

五大龍王の中でも最強と謳われる実力者で、封印される前のドライグはティアマットとも面識があり、彼女からコレクションの宝具を借りるなど親しく付き合う仲であった。

因みに、封印された際に宝具を失くしてしまい、催促を恐れたドライグは宿主に干渉して逃走中の身である。

だが自身が歴代最高と評する相棒の妻のピンチとなれば隠しておく訳にもいかず、これまで隠していた宝具の件も含めて一誠ティアマットの詳細を語った。

『……という訳だ。彼女なら、同族のよしみで引き受けてくれるかもしれない』

「居場所は知ってるのか？」

『最後に会ったのは、“使い魔の森”と悪魔共が呼んでいる場所だ。その最奥にある泉がティアマットのお気に入りらしくてな。傍らの洞窟を別荘にしていると自慢していたのをよく覚えている』

覚えていた理由は、耳にタコができる程に自慢話をされたからだ。

「そうか、あのときザトウジさんもそんなことを言ってたっけな……」

一誠は、寂しげに笑った。まるで遠い昔のように思えるが、オカルト研究部での活動の記憶は脳の片隅にこびりついたままだ。

『辛いことを思い出させてすまない。俺の配慮が足りなかった』

「構わんさ。それより早速、ティアマトの本拠地に乗り込むぞ。レイヴェルはオーフィスの護衛を頼む。分かっているとは思うが」

「ご安心を、とレイヴェルは一礼した。」

「オーフィス様と共に部屋に立て籠って、一誠様が戻られるまで全力で守り通すことを誓いますわ」

「悪い。すぐにティアマトを連れて戻ってくるから、それまで任せる」

かくして一誠は転移術式の光の中に消えていった。

使い魔の森でドラゴン達の激戦が繰り広げられていたことを、彼はまだ知らない。



平和だった筈の森で、今また爆発音が鳴り響き、同時に木々の薙ぎ倒される音が幾つも重なる。特に森の最奥は爆撃に晒されたかのようには焼け野原と化しており、美しかった自然は見る影もない。

その爆心地付近で、一体の青く美しいドラゴンが重傷を負って倒れていた。全身から血を流し、息も絶え絶えで、このままでは命すら危ういことは想像に難しくない。

そんなドラゴンを大勢で取り囲むのは、邪龍と吸血鬼で構成された異形の軍勢だ。

軍勢の中で一際巨大な体躯をした、巨人型の邪龍が嘲笑った。

『おいおい、どうしたどうしたあ!? 五大龍王の筆頭ともあろうお前が地面に這いつくばって情けねえなあ! 今更ビビってんのかよ!』

それとも命乞いして油断させようって作戦かあ!』

「……黙れっ! 黙れ黙れっ!」

青いドラゴンは懸命に半身を起こしながら、軍勢を睨む。吸血鬼の兵士達が剣を突きつけた先には、スライムやオークなど森の魔物達が

目隠しと猿轡をされた状態で一列に並べられている。

即ち、人質だ。

魔物達を満足そうに眺めながら、リーダー格と思しき銀髪の壮年の男が言う。

「張り切るのは構わんけど殺したら駄目だぞー♪？ ティアマットは捕らえて実験台にするんだからさあ！ それにしても大勢でいきなり押し掛けてゴメンねえ？ 計画の為にちよつと丈夫な母胎が欲しくつて。えーと、一応聞くけど妊娠中とかじゃないよね？」

「ふざけるな……そんなくだらん計画に生命の神秘を利用するなど……許されるものかっ！」

「だって俺は悪魔だもん。命だつてアメンボだつて何でも利用するつての！ うひやひやひや♪？ あー、なんか面倒になつてきたな」

下品な笑い声から一転、途端にテンションを落とした銀髪の男は、「人質殺すか」と気だるげに呟いた。

「……ま、待つてくれ」

途端に、ティアマットと呼ばれた青いドラゴンは目を見開くと、頭を垂れて弱々しい声で言う。

「……私は煮るなり焼くなり好きにしろ……どうか私の友だけは……」

「そうこなくつちやな！ 従順な母胎は長生きするぜ！ んー、でも誰かさんに反抗的な態度を取られたしなあー。ちよつと誠意を見せてもらわんと信用できないよねえ？」

「……誠意、だど？」

「YES!! そうだねえ、うちのヴァレリーちゃんみたいに兵隊共に貸し与える訳にもいかないし」

謝罪会見かな、と銀髪の男は言った。

「悪いことしたら謝罪会見を開くべきだろ。俺達で動画サイトに投稿してやるからさ、歯向かつてすいませんでした、つて土下座して詫びたら許してやんよー！」

「そんな……っ！」

ドラゴンは誇りを重んじる種族であり、力の強い個体は特にその傾

向が強い。例えるなら日本の武士に似て、生き恥を晒すなら名誉ある死を望む、といった価値観だ。ティアマトも例に漏れず誇りを重視しており、だからこそ男からの要求に思わず絶句した。

何せ、自分の痴態を世間に公開されてしまうのだ。

誇り高い彼女にとっては事実上の死刑宣告にも等しく、とても呑み込めない要求である。

だが断れば、その瞬間に人質は殺される。

「……分かった。要求を呑む」

究極の選択の末に、ティアマトは友の命を選んだ。

『ギャハハハ！ これは傑作だ！ あの五大龍王様が土下座とはなあ！ ちよつと見ねえ間に随分と腑抜けちまったようだな！』

「後で首輪も嵌めろよ？ これからお前はうちの大事な家畜として余生を過ごすんだからさ。それから謝罪会見ってことで」

「リゼヴィム様も相変わらず悪趣味なことだ。しかし、それだと捕らえた魔法使い連中と同じ扱いになってしまいますよ。城を牧場にするおつもりですか？」

「あー、シンプルに忘れてたわ。そんなのまで覚えてるとは、ユーグリッドくんは真面目だねえ」

銀髪の男が、傍らに控える青年と何やら楽しそうに会話をしているが、ティアマトにはもう抗う気力すら残されていなかった。誇りの証である翼と角と、挙げ句に心までも折られて、どうして抗えるだろう。

悔しさのあまり、ティアマトは涙を浮かべた。さりとて自害すらも許されず、実験漬けの未来を悲観することしかできなかった。生まれて初めての経験だった。

——誰か、助けてくれ。

ティアマトは、祈った。これもまた彼女にとって初めてのことで。

——誰でもいい。助けてくれ。

祈り続ける彼女の首に、リゼヴィムと呼ばれた男が鉄の枷を宛がった。内部に逃走防止の術式が搭載されており、これを嵌めた者が魔力

を行使しようとした瞬間、それを感知して爆発する代物だ。

「ほーれ、大人しくしろよ？ こいつあ家畜の証明書みたいなもんだ！ これを嵌めたらお前は家畜になるんだよ嬉しいだろ？ うひゃひゃひゃ♪？」

——誰か……。

果たして、願いは届いた。

「——胸糞悪いスカウトの手口だな。悪魔らしくて安心したぜ」

戦場に舞い降りた赤い煌めきは、今まさに枷を嵌められようとしていたティアマツトを庇うようにして、リゼヴィムと対峙する。

「……おいおいおい、今日はクリスマスか、それとも正月か!? このタイミングでお前が現れるのかよ——兵藤一誠!!」

「誰だ、お前?」

「お初にお目にかかる。我が名はリゼヴィム・リヴァン・ルシファー。"禍の団"を討伐する為に正義の組織"クリフォト"を結成した単なる悪魔だ……なんちゃって!」

「……質問いいか?」

『倍加』の合図を響かせながら、一誠は訊ねる。

「お前がオーフィスを狙ってる黒幕か?」

「そうだ、と言ったら?」

それに対する返答は言うまでもない。

「——殺すに決まってるだろ」

「やってみろよ、バーカ!」

直後、赤と銀の魔力が衝突した。

相反する二つの魔力は、衝突した瞬間に激しい衝撃と業火を孕んで弾け飛び、一帯に爆風を撒き散らした。その光景はミサイルの着弾にも似ており、更に数秒遅れて熱風が駆け巡る。

焦熱地獄に揺れる煙を割って、半透明の障壁に包まれたリゼヴィムが現れた。

巨大な障壁の中にいたりゼヴィムに、目立った傷はない。衝突の直前に何十もの防御魔法術式を展開したからであり、リゼヴィムだけでなく軍勢を丸ごと庇うように展開されたその防御術式は、衝突時に発生したエネルギーから彼らを守り抜いてみせた。

だが衝突から顔を見せたのは、リゼヴィム達だけではない。

薄れていく煙を切り裂くように煌めいた赤い光の正体は、誰あるう、一誠だ。

赤い龍の鎧を身に付け、痛々しい程の波動を漲らせながら戦場へと降り立つその姿はまさに赤龍帝ドライブそのもので、彼の一睨みだけで雑兵の大半が戦意を摘まれ、その場に力なく座り込んだ。

「噂とは違って、随分な甘ちゃんだな」

リゼヴィムは口角を吊り上げた。彼の視線の先には、赤龍帝の魔力の繭に守られるティアマツトの姿があった。

「ああ、もしや嫁が妊娠したってんで愛人に持って帰るつもりか？

若いねえ！でも残念ながらティアアちゃんは俺のもんでさあ、代わりに魔法使い共をくれてやるから諦めてくれねえかなあ！」

「遺言はそれでいいか？」

一誠は、苛立ちを隠さずに言った。「ぶち殺してやるから、そこを動くな」ことオーフィスが絡むと途端に沸点の低くなる愛妻家が、激怒しない筈がなかった。

度し難いのは、そうと知りながら自ら地雷を踏み抜きにいったリゼヴィムの、嘲笑うような言動だ。

勿論、自殺志願者の類ではない。挑発によって相手の攻撃を誘う戦い方は、彼が生来得意とする十八番の戦法である。

そうして怒りに駆られて突撃してきた相手の対処は、容易い。

『グハハハハッ!! オレ様を無視すんなや、お礼参りしてやつからよお! リゼヴィムは手を出すなよ!』

「はいはい。しばらく遊んどいてよ。俺ちゃんは少し準備もあるし」

視界と理性の外を縫うように、グレンデルが嬉々として飛び込み、右の豪腕を振りかざす。

一誠は即座に歩みを止めると、頭上から迫る拳を難なく受け止めた。そして初めて、奇襲を仕掛けてきたグレンデルに視線を移し、ドライグを模した赤い兜越しに睨んだ。

翡翠の相貌が強く瞬き、“倍加”の音声が響く。

既にドラゴンそのものと化した紅蓮の右腕で、一誠は容赦なく引き千切る。

右肩から先を失ったグレンデルは、それでも即座に腕を再生することで次の猛攻へと移ろうとした。崩しかけた体勢を強引に整え、一誠目掛けて勇ましく跳躍する。

巨人型のドラゴンであるグレンデルは並外れた巨体を誇っているが、巨大というのはそれだけで一つの武器である。ましてや硬質な鱗に覆われているのだ。仮に押し潰されれば並の相手は一溜りもないだろう。

並の相手であるなら、だ。

飛び掛かったその顔面に、重たい衝撃とせめぎ合う音が走る。

グレンデルは吹っ飛ばされながら、一誠が先程引き千切られた自分の腕を握ったままであることに気付いた。自慢の硬質の鱗に覆われたそれを即席の打撃武器にしたのだ。

以前にも見せた戦法だが、リーチの差を埋めるには有効な手段である。今度は一誠の方から踏み込み、掴んでいた浅黒い鱗の右腕を、持ち主に向かって放り投げた。

超高速で、質量の塊が飛ぶ。

グレンデルは冷静に着地すると、ミサイルと化したそれを睨む。回避か、それとも迎撃か。

当然、後者だ。

クロスした両腕に魔力を滾らせ、集中させた魔力は鱗と合わさって鉄壁の強度を誇る盾となる。

金属の擦り合う鈍い音が響いた直後、軌道を逸らすように両腕を振り下ろし、抑え込んだ。

ミサイルは凄まじい速度でグレンデルの足元の地面を掘り進んでいき、辺りに土砂を撒き散らす。グレンデルは油断なく自分が飛ばされてきた方向を睨み、続け様に飛来してくるであろう追撃を警戒する。

『――Transfer!!!』

背後から響いた聞き覚えのある音声に、グレンデルは咄嗟に反応できなかつた。

断言しておくが、グレンデルは邪龍随一と称される肉体強度と身体能力の持ち主であり、“幽世の聖杯”で前世から更なる強化を果たしている、紛れもない怪物だ。

事実、冥界襲撃時には元魔王ファルビウムや現魔王デイハウザーをも、二対一の数的不利をもものともせず圧倒している。

今回は相手が悪かつた。

「邪龍ごときが俺の邪魔をするな」

突如、グレンデルの身体が内部から破裂し、大小様々なサイズの肉片と雨を降り注がせながら、頭部だけが原型を留めたまま地に落ちた。

“譲渡”によって体内の魔力を数十倍にまで膨張させられた結果、肉体の限界を超えて自壊したのだと気付いて、グレンデルは『やるじやねえか』と自分を見下ろす一誠に嬉しそうな声で言った。

『覚えとけ。今度はリベンジしてやるよ』

「腰が入ってねえんだよ。走り込みからやり直せ」

グレンデルは、塵となって消えた。

その塵すらも踏み越えて、一誠は再びリゼヴィムへと肉薄すべく爪先に力を込める。

『待て、相棒』

跳躍しかけた一誠に、左手の甲に埋め込まれた翡翠の宝玉が点滅し、語りかけた。内に宿るドライブグが口を開いたのだ。

オーフィスには及ばずとも、彼とて宿主よりも遥かに長い年月を生き抜いてきた猛者である。リゼヴィムの持つ固有能力について、ドライブグは把握していた。

そして一誠とは致命的に愛称が悪いことも。

『リゼヴィムは^{セイクリッド・ギア・キャンセラ}神器無効化¹』という異能力を有している。『神器』由来の特性などをすべて無効にする、ふざけた代物だ』

「おい、マジかよ。すると、どれだけ『倍加』を重ねようとも無意味ってことか」

「ピンポイント？ だって俺ちゃんはおちっぽけな悪魔に過ぎないしさあ。メチャメチャ強い邪龍だってぶち殺す勇氣とパワーなんて恐ろしいだろ？ だったら無効化するに決まってるじゃん！」

小声での会話だったが、リゼヴィムには筒抜けだったらしい。というより、一誠の焦燥から内容を察した、というべきか。

ドライブグが説明したように、『神器無効化』は『神器』が持つ特性や能力は勿論ながら、それによつて高められた力もリゼヴィムが触れた瞬間に問答無用で機能停止に追い込むという、『神器』を用いる相手には無類の強さを発揮する異能力である。

何故、初代ルシファアの息子であるリゼヴィムに発現したのかは分からない。

赤龍帝の兵藤一誠は、抗う術を持たない。

分かることは、それだけだ。

「――撤退だ」

それを聞いた一誠の決断は、迅速だ。

今回の目的はあくまでもティアマツトを連れ帰ることであり、『クリフト』を自称する軍勢との正面衝突ではない。優先順位を間違えるような真似をすれば、愛する妻の出産に間に合わなくなってしまう。

彼の決断は正しい。

「もう帰るのかよ。そんなに嫁が心配か？」

転移術式の淡い光に包まれる一誠とティアマツトを眺めながら、リゼヴィムは嘲笑った。残虐に、蝶の羽と足をもぐ幼子のように。

「新たに愛人を囲うなんざ愛想を尽かした嫁に出て行かれても知らねーぜ？ ああ、自力じゃ無理か」

「……は？」

リゼヴィムは笑みをより一層深めながら、髪色と同じ色をした髭を撫でる。「グレンデルがただの囷ってことに気付かないか？ その間に俺は何をしてたと思う？」

一誠の決断は迅速且つ的確で理にも叶っているが、それはある一点を除いた場合である。

「身重の腹を守りながら戦うのは不可能だよな」

即ち、既に手遅れである場合だ。

▼ l i f e . l l 4 R e d & . ▼

一誠の部屋の扉が唐突に蹴破られ、その破片が室内に散らばった。音に気付いたオーフィスが目を覚まして入口のある方向に視線を向け、傍らに控えていたレイヴェルが素早く炎の翼を生やして臨戦態勢に移る。

突入してきた兵士達の群れを割って、黒いコートを羽織った男が一人、悠然と姿を現した。

金と黒の入り交じった髪と、やはり黒と金の双眸が特徴的なその男は、今にも飛び出そうとする兵達を制してから、オーフィスに向けて口を開く。

「久しいな」

「……クロウ・クルワツハ？」

オーフィスは、かつて思いがけず交戦した漆黒の邪龍を思い出して言った。彼が邪龍の筆頭格であることは後で知ったことだが、それを抜きにしても、クロウ・クルワツハの実力は覚えていた。一誠と出会うよりもずっと昔、静寂以外に興味を示さなかった頃の出来事を覚えているのだから、それだけ深く印象に残っている証拠だろう。

故に、彼女が疑問に感じたのは、その邪龍筆頭格のドラゴンが兵士達を率いて押しかけてきた理由である。

背後の連中の正体は、感じ取れる魔力こそ歪にねじ曲がっているが、恐らくは吸血鬼だ。

吸血鬼は全体的に閉鎖的で、そのプライドの高さ故に他勢力と手を結びたがらない種族であることは有名な話だ。よしんば組んだとしても、それは彼らからすれば同盟ではなく隷属関係に等しい。

よって、クロウ・クルワツハが筆頭格として名を知られていようと、吸血鬼と轡を並べられる筈がないのだ。

「そこを退け、不死鳥の小娘」

「いいえ、一歩たりとも退くつもりはありません」

クロウ・クルワツハの言葉に、レイヴェルは声と身体を震えさせながらも、オーフィスを庇うようにして立ち塞がった。自身に向けて放

たれたドラゴンの威圧感に、心臓を鷲掴みにされるような感覚に陥っても、冷や汗を流しながら対峙した。

「……もう一度、言う。大人しく退け。そうすれば命だけは見逃してやる」

その声には、先程よりも強い気迫が混じっていた。実際、彼からすればレイヴェルは片手間で始末できるような相手であり、路肩の石ころと変わらない。寧ろ、目的を果たすだけならさっさと殺害した方が早い筈だ。

律儀に警告を重ねたのは、わざわざ弱者を相手にすまいというクロウ・クルワツハの矜持故であり、また自分の前に立ちはだかったレイヴェルの心の強さに敬意を表してのことである。

とはいえ、彼女があくまで信念を貫こうとするのなら、乗り越えるだけだ。

「女子供に手荒な真似をするのは好かんが……ここに至っては仕方あるまい」

クロウ・クルワツハが双眸を瞬かせた瞬間に、レイヴェルはその場に倒れ伏し、縫い付けられた。

殺したわけではないし、レイヴェルには息も意識も残されている。一度に多量の威圧感をぶつけられたことにより、肉体が極度の緊張状態に陥っただけだ。擬死状態或いは金縛りに近いかもしれない。

彼なりの、相手に戦う価値があるかどうかを見定める洗礼だ。

「一緒に来てもらうぞ、オーフィス」

クロウ・クルワツハの言葉に、オーフィスは「無理」と即答した。

「……我、既に一誠と家庭を形成している。故に我はお前のナンパには応じない」

「そういう意味じゃない。今からお前を我々の拠点に拉致するんだ」

「……それこそ、無理。我には勝てない」

守役のレイヴェルが倒れ、室内を吸血鬼の兵士達に制圧されてしまったこの状況でも余裕でいられるのは、オーフィスが世界最強に最も近い“無限の龍神”だからだ。夢幻を司るグレートレッドなら兎も角、妊娠したからといって有象無象の集団に敗北する道理はない。

ましてや吸血鬼崩れの寄せ集めなど、億の単位を用意したところで掠り傷一つすら負わせられないだろう。

尤も、クロウ・クルワツハとて埋め難い戦力差は承知の上で乗り込んだのだが。

「逆らえば、不死鳥の小娘を殺す」

直後、兵達がレイヴェルの首筋に剣を突きつけた。

フェニックス家の最大特徴は肉体欠損をも補う強大な再生能力だが、弱点はある。

例えば、悪魔種が苦手とする聖水や聖剣などで負ったダメージからは、フェニックス家といえども逃れるのは容易ではなく、再生にも相応の時間を必要とする。

そしてもつと単純に、許容範囲の限界を超える程の重傷を一度に負った場合も再生能力が追い付かず死に至るし、何らかの要因で精神をへし折られても能力が上手く発動できなくなってしまう。

フェニックス家の再生能力が無敵でないことは、他ならぬ兵藤一誠が既に証明しているのだ。

一誠の用いた方法は、ミキサーの中に延々と顔を突っ込ませることで精神を崩壊させるというものだが、前述したようにクロウ・クルワツハなら魔力の塊を放つだけで片付く。

それこそ生かしたままルーマニアの拠点に連れ帰れば、リゼヴィムが嬉々として玩具にするだろう。

そこに一切の人権や尊厳は含まれない。逆に、五体満足で死ねればマシンな方である。

つまりレイヴェルの末路はこの時点で半ば確定しているのだが、純真無垢なオーフィスには駆け引きの類が分からなかった。

オーフィスにとってレイヴェルは、身重で動けない自分の世話を引き受けてくれた心優しい少女であり、大切な友人だった。そんな彼女を見捨てたとなれば、戦いから帰ってきた一誠は酷く悲しむだろう。彼のそんな顔を思い浮かべるだけで、胸が張り裂けるように痛い。

そして、遂に胸の痛みに堪えきれず、オーフィスはゆっくりと頷いた。

白い頬には、一滴の雫が伝う。

それは「無限の龍神」が初めて見せる、涙だった。

「……我、お前についていく。その代わりに、レイヴェルには手を出さな」

オーフィスは、前に一誠と共に眺めた刑事ドラマを真似て、小さな両手を差し出した。とはいえ、その意味まではあまり理解していない。ただ、何処かに連れていかれる際にその行為を行うのだろうと解釈したのだ。

意外にも、クロウ・クルワツハは大きく腹の膨らんだ彼女をそつと自ら抱き抱えて、兵士達には触れさせなかった。同族として思うところがあるのかもしれないが、彼は口を閉じたまま何も言わなかった。床に、黒色の転移術式が紡がれる。

クロウ・クルワツハは側にいた兵士に目配せをしてから、転移術式を潜った。続いて、指示を察した兵士達がまだ動けないでいるレイヴェルを拘束して、彼の後を追って消えていく。

彼らにとつて幸運だったのは、一誠達がアジトを移動させていなかった点だ。

既に組織に取り込んだ旧魔王派の残党から詳細を聞き、場所の特定には成功したものの、それを悟った一誠がアジトを移す恐れがあった。特にオーフィスの出産には細心の注意を払うだろう。

それ故に、リゼヴィム主導の下、各地に点在する元「禍の団」系組織の強襲・殺害を繰り返し、より一誠が孤立を深めるように仕組んだ。

リゼヴィムからの連絡が、策の成功を意味する。

オーフィスの出産に立ち会ってくれる者を探し求めたのか、一誠はティアマツトが暮らす森を訪れたという。リゼヴィム達との交戦は予想外だったが、彼が出撃したのならオーフィスの周辺には世話役のレイヴェルしかいない。

そのレイヴェルは、人質に最適だ。

即ち、最初から最後まで、一誠はリゼヴィムの掌の上で足掻き続けていたのだ。

それから数分後、愛する少女を求め、赤い龍の悲しげな咆哮が室内に響いた。

その双眸は、憎悪の光に満ちている。

Re:D.

life. 116 最初の一步

オーフィスを拐われた一誠は、しかし怒りのままに攻めることを選ばず、勢力を立て直す道を選んだ。

苦肉の策である。

本来であれば今すぐにでもリゼヴィムの本拠地に乗り込みたい。オーフィスとその腹の中の子供を救いたい。だが現状の戦力でそれは不可能だった。

切り込み隊長のフリードを失い、北欧に潜伏していた英雄派や魔法使い派とも連絡が取れない。

従って、現状の赤龍帝派にはトップである一誠と、保護されたテイアマットの二人しか戦力がいないのだ。

更に不味いことに、このアジトの場所が既に割れている点も問題だ。

場所を移動するしかない、と一誠は言った。いつ奇襲を仕掛けられるかも分からないところに、いつまでも潜伏している訳にはいかない。当然の提案であり、寧ろ速やかに実行すべきだろう。

ただし、次の拠点の候補に心当たりがないことを除けば、だ。

現魔王デイハウザー・ベリアルに匿ってもらう手も無くはないものの、洗脳が解けきっていない疑惑のあるロイガンの存在が足枷となってくる。下手をすれば、その背後に潜んでいるであろうリゼヴィムに筒抜けとなりかねない。

「いつそ人間界に潜むというのはどうだ？ 奴らもそこまではアンテナを張り巡らせていないと思うが」

青い髪の美女が、案を口にした。テイアマットだ。身体のあちこちに巻かれた包帯が実に痛々しいが、リゼヴィムとの交戦で重傷を負ったばかりだというのにもう回復しつつあるのは流石、五大龍王の一角を担うドラゴンである。

そんな彼女もまた、一誠同様に激しい怒りに燃えている。

時としていた森を荒らされただけでなく、親友としていた魔物達を害されたのだから、激怒して当然だ。

世間一般には凶悪な“SSS級はぐれ悪魔”として知られる一誠と手を組んだのも、それが理由である。

「潜伏するなら駒王町だな。ガキの頃から暮らしていた街だ。あそこの地理も、潜むのに打ってつけの廃墟もよく知ってる」

「ほう、そんな場所があるのか」

「廃教会だ。少しばかり思い出がある」

そう笑う一誠の脳裏には、レイナーレの顔が過っていた。墮天使総督アザゼルの寵愛を受けるべく部下達と共に独断で駒王町に侵入し、当時の領主であったリアス率いるオカルト研究部と激突した女墮天使にして、一誠の初恋の相手だ。

結果として戦いに敗れたレイナーレ達は死亡し、彼女が狙っていた“聖母の微笑”の持ち主——アーシアはオカルト研究部に身を寄せることとなった。

かつては苦々しい記憶だったそれも、今となっては青春を象徴する思い出の一つである。

何より、今度は一誠達が侵入するのだから、レイナーレのことを笑えない。いや、笑おうとは思わない。

彼女が寵愛を強く欲した理由は分からないし、その手段も誉められたものではなかったが、如何なるリスクを背負ってでも目的を遂げよう、という決意と覚悟は伝わってきた。

その姿はまるで鏡像のように、今の一誠に似ているではないか。

「……行くぞ、駒王町に」

一誠は転移術式を展開しながら、かつての故郷に想いを馳せる。そういうえば親友達は どうしているだろうか。

リアスの後任として送り込まれたシーグヴァイラ・アガレスは、優秀な領主として聞いている。少なくともデイハウザーと一誠の結託に気付いてしまう程度には。

ならば、親友達はきつと安心して過ごせているに違いない。先代領主とは違って真面目に日々の仕事をこなしているだろうし、シーグ

ヴァイラの眷属にはかつての同僚達やデュランダル使いも在籍しているのだから。

そんなことを考えている間にも宙に描かれた術式は淡い光を放ち、駒王町への道が開いたことを教えた。

先ずは一誠が警戒しながら術式を潜り抜け、続いてティアマツトがそれに倣う。

転移術式の向こう側に一步を踏み出すと、夜の暗がりど、目と鼻の先の距離に鎮座している白い噴水が二人を歓迎した。

レイナーレに告白され、リアスの眷属となり、そしてオーフィスと初めて出会った、あの公園である。

「……最初の一步、ってことか。粹な真似をしてくれるじゃねえかよ」苦笑しつつも、一誠は周囲を警戒した。空を黒と星が占めている点から察するに、シーグヴァイラ達が街の巡回を始めていてもおかしくない時刻である。鉢合わせるのは得策ではない。

「さっさと進もう。教会はこっちだ。木場やゼノヴィアに絡まれると面倒だからな」

「すまんが、森で暮らしていたので俗世の情報にはあまり詳しくなくな。その二人は誰なんだ？」

「木場は前の職場の同僚、ゼノヴィアは元教会戦士のデュランダル使いだ」

教会への道中、一誠は自己紹介も兼ねて、自分がテロリストに身をやつすに至った理由を話した。

「まさか、そのような事情があつたとは……」

事情を知ったティアマツトの声音は驚愕に震えていると同時に、三大勢力の都合に人生を振り回された彼に同情しているようだった。

一誠は肩を竦めて、「確かに復讐漬けになっちゃったけどさ」と言った。

「でも俺は平気だ。お陰で、最愛の妻に出会えたんだからな」

超長距離魔力砲撃を実行し、単騎で三大勢力の軍勢に挑み、そしてその度に殺戮を繰り返した。特に前者は、民間人に多大な被害をもたらしたことを考慮すれば、まさしくテロリストの所業でしかない。

そんな外道に堕ちた一誠でも、オーフィスは隣に寄り添ってくれた。

両親を失った今、彼女だけが一誠にとつての家族なのだ。

故に、絶体にオーフィスを取り戻すという決意が、彼にはある。どんな手段を用いても。

「見えたぞ、あの教会だ……って、しばらく見ない間に余計にボロっちくなってるな。はぐれ悪魔の討伐でもしたのか？」

一誠は、辛うじて原型を留めている廃教会を指した。

「……おい、前に誰かいるぞ。アガレスの眷属とやらが巡回しているのか？」

「夜中にも仕事とはご苦労なこった。通り過ぎるのを待つしかないな」

話し声が聞こえたのだろう、廃教会の前に佇んでいた人影が振り返った。

銀髪に眼鏡が特徴的なその少女は、名をシーグヴァイラと言う。この街の領主だ。

「……まさか、兵藤一誠!？」

「最初の一步がこれか」

一誠は溜め息をつくど、何とか事を荒立てずに済ませられないか考えようとした。

しかし、それは杞憂だった。

何故なら、彼女は特に気にすることなく、そのまま廃教会の中に入っただけからだ。

その右手に、花束を携えて。

▼l i f e . 1 1 6 最初の一步▼